HP ALM

ソフトウェアバージョン: 12.00

管理者ガイド

ドキュメントリリース日: 2014 年 3 月 ソフトウェアリリース日: 2014 年 3 月

ご注意

保証

HP製品、またはサービスの保証は、当該製品、およびサービスに付随する明示的な保証文によってのみ規定されるものとします。ここでの記載は、追加保証を提供 するものではありません。ここに含まれる技術的、編集上の誤り、または欠如について、HPはいかなる責任も負いません。

ここに記載する情報は、予告なしに変更されることがあります。

権利の制限

機密性のあるコンピューターソフトウェアです。これらを所有、使用、または複製するには、HPからの有効な使用許諾が必要です。商用コンピューターソフトウェア、コン ピューターソフトウェアに関する文書類、および商用アイテムの技術データは、FAR12.211および12.212の規定に従い、ベンダーの標準商用ライセンスに基づいて米国政 府に使用許諾が付与されます。

著作権について

© Copyright 2002 - 2014 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

商標について

Adobe® は, Adobe Systems Incorporated(アドビシステムズ社)の登録商標です。 Intel® は米国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。 Java は、Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。 Microsoft®, Windows® は, Microsoft Corporationの米国登録商標です。 Oracle® は、Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。 Unix® は、The Open Group の登録商標です。

ドキュメントの更新情報

このマニュアルの表紙には、以下の識別情報が記載されています。

- ソフトウェアバージョンの番号は、ソフトウェアのバージョンを示します。
- ドキュメントリリース日は、ドキュメントが更新されるたびに変更されます。
- ソフトウェアリリース日は、このバージョンのソフトウェアのリリース期日を表します。

更新状況、およびご使用のドキュメントが最新版かどうかは、次のサイトで確認できます。http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals

このサイトを利用するには、HP Passportへの登録とサインインが必要です。HP Passport IDの登録は、次のWebサイトから行なうことができます。 http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html (**英語サイト**)

または、HP Passport のログインページの [New users - please register] リンクをクリックします。

適切な製品サポートサービスをお申し込みいただいたお客様は、更新版または最新版をご入手いただけます。詳細は、HPの営業担当にお問い合わせください。

サポート

HPソフトウェアサポートオンラインWebサイトを参照してください。http://support.openview.hp.com

このサイトでは、HPのお客様窓口のほか、HPソフトウェアが提供する製品、サービス、およびサポートに関する詳細情報をご覧いただけます。

HPソフトウェアオンラインではセルフソルブ機能を提供しています。お客様のビジネスを管理するのに必要な対話型の技術サポートツールに、素早く効率的にアクセスできます。HPソフトウェアサポートのWebサイトでは、次のようなことができます。

- 関心のあるナレッジドキュメントの検索
- サポートケースの登録とエンハンスメント要求のトラッキング
- ソフトウェアパッチのダウンロード
- サポート契約の管理
- HPサポート窓口の検索
 利用可能なサービスに関する情報の閲覧
- 利用可能な 5 C C C () 受 る f 報 0 阅 見
 他のソフトウェアカスタマーとの意見交換
- ソフトウェアトレーニングの検索と登録

ー部のサポートを除き、サポートのご利用には、HP Passportユーザーとしてご登録の上、サインインしていただく必要があります。また、多くのサポートのご利用には、サ ポート契約が必要です。HP Passport IDを登録するには、次のWebサイトにアクセスしてください。

http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html (英語サイト)

アクセスレベルの詳細については、次のWebサイトをご覧ください。

http://support.openview.hp.com/access_level.jsp

HP Software Solutions Nowは、HPSWのソリューションと統合に関するポータルWebサイトです。このサイトでは、お客様のビジネスニーズを満たすHP製品ソリューション を検索したり、HP製品間の統合に関する詳細なリストやITILプロセスのリストを閲覧することができます。このサイトのURLは http://h20230.www2.hp.com/sc/solutions/index.jspです。

目次

目次	3
はじめに	15
本書の構成	15
ALM ヘルプ	
ALM ヘルプのガイド	
その他 のオンライン・リソース	
ALM の拡 張 機 能 のガイド	
第1部: サイト管理	21
第1章: サイト管理の概略	
サイト管理の起動	
「サイト管理」の概要	
サイト管理者の定義	
第2章: プロジェクトの作成	
プロジェクトの作成について	
プロジェクトの構成について	
ドメインの作成	
プロジェクトの作成	
プロジェクトのコピー	42
プロジェクトのインポート	
テンプレート・プロジェクトの作成	55
テンプレート・プロジェクトの作成	55
既存テンプレートからのテンプレートの作成	61
既存プロジェクトからのテンプレートの作成	
テンプレート・プロジェクトのインポート	71
プロジェクトへのテンプレートのリンク	
プロジェクトの詳細の更新	76
プロジェクトへのユーザの割り当て	
プロジェクト管理者の割り当て	
プロジェクトに対する拡張機能の有効化	

第3章:最適化されたプロジェクト・リポジトリの管理	87
プロジェクト・リポジトリのクリーンアップ	88
プロジェクト・リポジトリの参照	88
リポジトリの再調整	90
第4章: プロジェクトの管理	
プロジェクトの管理について	96
プロジェクトのテーブルへの問い合わせ	
プロジェクトのエクスポート	
プロジェクトの非 アクティブ化 とアクティブ化	
プロジェクトのバージョン管理の有効化と無効化	
プロジェクトに対する Ping	100
プロジェクト名の変更	
Unicode へのプロジェクトの変 換	
プロジェクトの除去	
プロジェクトの削除	
ドメインの削除	
接続文字列の編集	105
プロジェクトへのアクセスの復元	106
プロジェクトの不具合モジュールの名前の変更	
グリッドで表示するレコード数の制限	
第5章:プロジェクトの新規バージョンへのアップグレード	113
プロジェクトのアップグレードについて	114
バージョンとパッチのナンバリング・スキーマ	114
メジャー・バージョンとマイナー・バージョンでのプロジェクトのアップグレード	
ドメインとプロジェクトの検証	119
プロジェクトの検証	120
ドメインの検証	121
ドメインとプロジェクトの修復	122
プロジェクトの修復	123
ドメインの修復	124
ドメインとプロジェクトのアップグレード	126

プロジェクトのアップグレード	. 127
ドメインのアップグレード	. 128
例外ファイルの定義	. 130
プロジェクトのバックアップ	. 132
プロジェクトの復元	. 133
Microsoft SQL データベース・サーバからのプロジェクトの復元	133
Oracle データベース・サーバからのプロジェクトの復元	134
ファイル・システムからのリポジトリの復元	135
LAB_PROJECT の復元	. 135
リポジトリの移行	. 136
[リポジトリの移行の状態]ウィンドウ	137
移行の優先度の設定	140
LAB_PROJECT のアップグレード後の手順	141
マイナー・マイナー・バージョンでのプロジェクトのアップグレード	. 141
マイナー・マイナー・バージョンのアップグレードに適用するプロジェクトの優先度の設	
定	. 143
第6章: ALM ユーザの管理	145
ユーザの管理について	146
新しいユーザの追加	146
LDAP からのユーザのインポート	148
LDAP over SSL の有効化	150
ユーザをインポートするための LDAP 設定の定義	152
競合するユーザ名の処理	155
ユーザの詳細の更新	. 157
ユーザの非アクティブ化とアクティブ化	. 158
パスワードの作成と変更	158
ユーザの認証の有効化	. 159
ユーザへのプロジェクトの割り当て	162
ユーザ・データのエクスポート	. 164
ユーザの削除	164
第7章:ユーザ接続とライセンスの管理	165
ユーザ接続とライセンスの管理について	166

ユーザ接続の監視	
接続されているユーザへのメッセージの送信	
ライセンスの管理	168
ライセンスの変更	169
ドメインおよびプロジェクトへのライセンスの割り当て	171
ユーザへのライセンスの割り当て	172
PPU ライセンス履歴	174
第8章:サーバとパラメータの設定	177
サーバとパラメータの設定について	
サーバ情報の設定	178
新しいデータベース・サーバの定義	
データベース・サーバのプロパティの変更	
テキスト検索の設定	
データベース・ユーザ・スキーマのテキスト検索の有効化	
ALM でのテキスト検索の有効化	
プロジェクトのテキスト検索言語の選択	
検索可能フィールドの定義	
ALM 設定パラメータの指定	
標準設定値のALM パラメータ	
オプションの ALM パラメータ	
ALM パラメータの設 定	225
ALM メール・プロトコルの設定	226
ALM メール制 限 の設 定	226
第9章: サイト使用状況の分析	
サイト使用状況の分析について	
サイト使用状況の監視	
サイト使用状況のフィルタ処理	231
ファイルへのサイト分析 データのエクスポート	233
サイト分析の線グラフのカスタマイズ	
第 10章 : プロジェクトの計画と追跡 (PPT)計算のスケジュール設定	235
PPT 計算のスケジュール設定について	

サイトに対する計算のスケジュール設定	
プロジェクトの自動計算の有効化と無効化	
プロジェクトの計算の手動での開始	237
[プロジェクトの計画と追跡]タブ	
第 11章 : ALM 評価	241
ALM 評価について	242
ALM データの収 集 と評 価	
第 12章: QC Sense	249
QC Sense について	250
QC Sense の設 定	
QC Sense のモニタ	251
QC Sense の設定	
[QC Sense Server Configuration] ウィンド ウ	253
[Connection String Builder]ダイアログ・ボックス	
QC Sense レポートの生成と表示	
QC Sense スキーマ	
PERF_CLIENT_OPERATIONS	
PERF_CLIENT_METHODS_CALLS	
PERF_CLIENT_REQUESTS	
PERF_SERVER_THREADS	
PERF_SERVER_SQLS	
PERF_SERVER_GENERAL_MEASURES	
PERF_SERVER_THREAD_TYPES	
第 13章: HP ALM ツールとアド インのインスト ール	271
第2部:プロジェクトのカスタマイズ	
第 14章 : プロジェクトのカスタマイズの概略	
プロジェクトのカスタマイズ	
[プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウについて	
カスタマイズの変更内容の保存	
第 15章 : プロジェクトのユーザ管 理	
プロジェクトのユーザ管理について	

プロジェクトへのユーザの追加	
ユーザ・グループへのユーザの割り当て	
プロジェクトからのユーザの削除	
第 16章 : ユーザ・グループとアクセス許 可 の管 理	
ユーザ・グループとアクセス許可の管理について	
ユーザ・グループの追加	
グループへのユーザの割り当て	
ユーザ・グループのアクセス許可の設定	
遷移ルールの設定	
ALM オブジェクトの所 有 者	
ユーザ・グループに対するデータ非表示	
ユーザ・グループ名の変更	
ユーザ・グループの削除	
アクセス許可の設定について	
ユーザ・グループのモジュール・アクセス権のカスタマイズ	
第 17章 : ALM プロジェクトのカスタマイズ	
ALM プロジェクトのカスタマイズについて	
プロジェクトのエンティティのカスタマイズ	
ユーザ定 義 フィールド の追加	311
システム・フィールド とユーザ定 義 フィールドの変 更	311
ユーザ定義 フィールドの削除	312
入力マスクの定義	
プロジェクトの要件タイプのカスタマイズ	
要件タイプの作成	
要件タイプのカスタマイズ	
要件タイプ名の変更	
要件タイプの削除	
プロジェクト・リストのカスタマイズ	
リストの作成	321
リスト名,項目名,またはサブ項目名の変更	
リスト,項目,またはサブ項目の削除	

第18章:自動メールの設定	
自動メールの設定について	
自動メールのフィールドと条件の指定	
不具合メールの件名のカスタマイズ	
第 19章: リスクベース品 質 管 理 のカスタマイズ	
リスクベース品 質 管 理 のカスタマイズについて	
リスクベース品 質 管 理 の条 件 のカスタマイズ	
条件 と値 のカスタマイズ	
加重境界のカスタマイズ	
リスク計 算 のカスタマイズ	
リスクベース品 質 管 理 定 数 のカスタマイズ	
第20章:警告ルールの有効化	
警告ルールの有効化について	
警告 ルールの設定	
第21章: クロス・プロジェクト・カスタマイズ	345
クロス・プロジェクト・カスタマイズについて	
クロス・プロジェクト・カスタマイズ概要	
リンクされたプロジェクトの更新	
リンクされたプロジェクトの詳細の更新	
クロス・プロジェクト・カスタマイズの検証	
リンクされたプロジェクトへのテンプレートのカスタマイズの適用	
クロス・プロジェクトのカスタマイズ・レポート	
リンクされたテンプレートの詳細の更新	
第 22章 : プロジェクト計画 と追跡の KPI のカスタマイズ	357
PPT KPI のカスタマイズについて	
[プロジェクト計画と追跡]ページ	
[プロジェクト計画と追跡]-[一般]タブ	
[遷移の設定]ダイアログ・ボックス	
[プロジェクト計画と追跡] - [KPI アナリシス]タブ	
第23章:プロジェクト・レポート・テンプレート	
プロジェクト・レポート・テンプレートについて	

プロジェクト・レポート・テンプレートの管理	
新規レポート・テンプレートの作成	
レポート・テンプレートの編 集	
レポート・テンプレートの複 製	
レポート・テンプレートの削除	
レポート・テンプレートのデザイン	
レポート・テンプレートのデザインについて	370
ドキュメント・テンプレートのデザイン	
スタイル・テンプレートのデザイン	
履歴テンプレートのデザイン	372
セクション・テンプレートのデザイン	
フルページ・テンプレートとテーブル・テンプレートの作成のためのガイドライン	
フルページ・テンプレート	
テーブル・テンプレート	
[テンプレート クリエータ]タブ	
第24章 : ビジネス・ビュー	
ビジネス・ビューの概要	
ビジネス・ビューの作成と管理	
DQLの使用	
ビジネス・ビューのユーザ・インタフェース	400
[ビジネスビュー]ページ	401
[リンクのプロパティ]ダイアログ・ボックス	407
[関連エンティティの追加]ダイアログ・ボックス	408
第25章 : Business Process Testing の設定	409
Business Process Testing の設 定 について	410
[ビジネスプロセステスト]ページ	410
第26章 : Sprinter の設 定	411
Sprinter の設定について	412
Sprinter ページ	412
第27章∶ワークフロー・スクリプトの生成	417
ワークフロー・スクリプトの生成について	418

不具合モジュールのフィールド・リストのカスタマイズ	419
不具合モジュールのダイアログ・ボックスのカスタマイズ	
第28章:アナリシス・メニューの管理	
第3部:ワークフローのカスタマイズ	
第29章:ワークフローのカスタマイズの概要	
第 30章 : ワークフロー・スクリプト・エディタの操作	431
ワークフロー・スクリプト・エディタの操作について	432
スクリプト・エディタ	
スクリプト・エディタのコマンドについて	434
ワークフロー・スクリプトの作成	436
ツールバーへのボタンの追加	438
スクリプト・エディタのプロパティの設定	441
第31章: ワークフロー・イベント・リファレンス	445
ALM イベントについて	446
ALM イベント・プロシージャの命 名 規 則	446
エンティティ	
イベント	
ALM イベントのリファレンス	448
ActionCanExecute	
AddComponentToTest	451
AfterPost	451
Attachment_CanDelete	454
Attachment_CanOpen	
Attachment_CanPost	454
Attachment_New	455
CanAddComponentsToTest	455
CanAddFlowsToTest	455
CanAddTests	
CanCustomize	456
CanDelete	456
CanDeleteGroupsFromTest	

	CanLogin	
	CanLogout	460
	CanPost	460
	CanReImportModels	
	CanRemoveComponentsFromTest	462
	CanRemoveFlowsFromTest	
	CanRemoveTests	463
	DefaultRes	463
	DialogBox	
	EnterModule	464
	ExitModule	
	FieldCanChange	464
	FieldChange	466
	GetDetailsPageName	468
	GetNewBugPageName	468
	GetNewReqPageName	469
	GetReqDetailsPageName	470
	MoveTo	470
	MoveToComponentFolder	
	MoveToFolder	472
	MoveToSubject	473
	New	473
	RemoveComponentFromTest	475
	RunTests	475
	RunTests_Sprinter	
	RunTestSet	
	RunTestsManually	
第 32章	章: ワークフロー・オブジェクトとプロパティの参照	477
AL	Mオブジェクトとプロパティについて	478
Ac	tions オブジェクト	
Ac	tion オブジェクト	479

Fields オブジェクト	481
Field オブジェクト	
Lists オブジェクト	
TDConnection オブジェクト	
User オブジェクト	
ALM プロパティ	485
ActiveModule プロパティ	
ActiveDialogName プロパティ	
第33章: ワークフローの例とベスト・プラクティス	
ワークフローの例について	490
ワークフロー・スクリプトの記述に関するベスト・プラクティス	491
使用前の型チェック	491
ベスト・プラクティス	
論理式の全体評価の予測	
ベスト・プラクティス	
Select Case ステートメントとIf-Then-Else ステートメントでの標準設定の義	の動作の定
ベスト・プラクティス	
関数の戻り値の設定	
ベスト・プラクティス	
エンティティにフォーカスが移る前にエンティティのプロパティを設定	495
ベスト・プラクティス	
ダイアログ・ボックスが開いているかどうかの確認	
ベスト・プラクティス	
重複するサブルーチンを定義しない方法	
ベスト・プラクティス	
例 : 不具合モジュールのダイアログ・ボックスのカスタマイズ	
SetFieldApp	
FieldCust_AddDefect	
例 : タブ名 の変 更	
例 : メモ・フィールド へのテンプレートの追加	
例:別のフィールドを基にしたフィールドの変更	

例:ユーザ・グループを基にしたフィールドの変更	503
例:オブジェクトの検証	
例:フィールドの検証	504
例 : 動的 フィールド・リスト の表 現	505
例:フィールド変更時のフィールドのプロパティの変更	
例 : ユーザ・アクセス許 可 の制 御	
例 : ボタン機 能 の追 加	
例 : エラ―処 理	
例 : セッション・プロパティの取得	508
例:メールの送信	
不具合送信時のメール送信	509
テスト計画モジュール・フィールド値の変更時のメール送信	510
例:最後に入力された値の格納	510
例:別のオブジェクトへのフィールド値のコピー	
お客様からのご意見、ご感想をお待ちしています。	515

はじめに

HP Application Lifecycle Management(ALM) にようこそ。ALM は、要件定義からデプロイメントまで、コア・アプリケーションのライフサイクル全体を管理する強力なツールです。ALM を使用することにより、最新のアプリケーションを予測可能、繰り返し可能、柔軟な適応が可能な形で提供するのに不可欠な可視性とコラボレーション環境を実現できます。

ALM プロジェクトは、アプリケーションのライフサイクル管理プロセスの全体を通じて、開発者、テスト 担当者、ビジネス・アナリスト、品質保証マネージャなどのさまざまなユーザからアクセスされます。ユー ザは、プロジェクト内の情報を保護し、維持し、管理するために、異なるアクセス権限を持つグループ に割り当てられます。ALM プロジェクト内で完全な権限を持つのは、(TD 管理者ユーザ・グループに 所属する)ALM プロジェクト管理者のみです。

ALM サイト管理者は、「サイト管理」機能を使用して、ドメインとプロジェクトを作成し管理します。また、ユーザ、接続、ライセンスの管理、データベース・サーバの定義、設定の変更も行います。

ALM プロジェクト管理者は、「プロジェクトのカスタマイズ」機能を使用して、プロジェクトのエンティティと リストのカスタマイズ、ユーザ・グループとアクセス許可の設定、メールの設定、警告ルールの設 定、ALM モジュール内のワークフローの設定を行います。クロス・プロジェクト・カスタマイズは、組織内 の全体のプロジェクトでカスタマイズ内容を標準化するために使用します。

ALM の出荷時には、パスワードが定義されていません。 データを不正なアクセスから保護するため、 ALM プロセスの早い段階でパスワードを設定してください。

本書の構成

本書の構成は次のとおりです。

部	説明
「サイト管理」(21 ページ)	サイト管理者が「サイト管理」を使用して ALM プロジェクトを管理する方法を 説明しています。その作業には、プロジェクト、ユーザ、接続、ライセンス、サー バ、設定パラメータ、サイト分析のメンテナンスが含まれます。
「プロジェクトのカ スタマイズ」(273 ページ)	プロジェクト管理者が[プロジェクトカスタマイズ]ウィンドウを使用して、プロ ジェクトへのアクセスを制御する方法(プロジェクトのユーザとユーザの権限を定 義する方法)について説明しています。また、プロジェクト・ユーザの固有のニー ズを満たすようにプロジェクトをカスタマイズする方法についても説明していま す。
「ワークフローのカ スタマイズ」(427 ページ)	ワークフロー・スクリプトを作成して, ALM ユーザ・インタフェースをカスタマイズ し, ユーザが実行可能なアクションを制御する方法について説明しています。

ALM ヘルプ

ALM ヘルプは, ALM の使用方法を説明するオンライン・ヘルプ・システムです。ALMには, 次のいずれかの方法でアクセスできます。

- ALM のメイン・ウィンドウで[ヘルプ]> [ALM ヘルプ]を選択すると、ALM ヘルプのホームページが 開きます。このホーム・ページには、主なヘルプ・トピックへのクイック・リンクが含まれます。
- ALM マストヘッドで ? をクリックすると、ALM ヘルプで現在のページを説明するトピックが開きます。

ALM ヘルプのガイド

ALM ヘルプは、次のガイドとリファレンスで構成されており、オンライン、PDF 形式、またはその両方で 提供されています。PDF の表示や印刷には、Adobe Reader を使用します。Adobe Reader は、Adobe 社の Web サイト(<u>http://www.adobe.com/jp</u>)からダウンロードできます。

リファレンス	説明
ALM ヘルプの使用方法	ヘルプの使用方法および編成方法について説明します。
新機能	最新 バージョンの ALM で新しく提供される機能について説 明します。 アクセスするには, [ヘルプ]>[新機能]を選択します。
ムービー	主な製品機能を説明する短いムービーです。 [ヘルプ]>[ムービー]でアクセスできます。
Readme	ALM に関する最新のお知らせと情報が含まれます。

HP Application Lifecycle Management(ALM) ガイド	説明
HP ALM ユ ーザー ズ・ ガイド	ALMを使用してアプリケーションのライフサイクル管理プロセスのあらゆる 段階を整理し,実行する方法について説明しています。リリースの指 定,要件定義,テスト計画,テスト実行,および不具合追跡を行う方 法について説明しています。
HP ALM 管理者ガイ ド	サイト管理機能を使用してプロジェクトを作成し保守する方法や,プロ ジェクト・カスタマイズ機能を使用してプロジェクトのカスタマイズを行う方 法について説明します。

HP Application Lifecycle Management(ALM) ガイド	説明
HP ALM ラボ管理ガ イド	リモート・ホストでの機能テストとパフォーマンス・テストに使用するラボ・リ ソースを, ラボ管理を使用して管理する方法を説明しています。
HP ALM チュートリア ル	ALM を使ってアプリケーション・ライフ・サイクル管理プロセスを管理する方法について, 自分のペースで学べるガイドです。
HP ALM インストール およびアップグレード・ ガイド	ALM サーバをセットアップするためのインストールおよび設定のプロセス, ま たプロジェクトのアップグレード・プロセスについて説明します。
HP ALM ラボ管理トラ ブルシューティング・ガイ ド	HP ALM ラボ管理の使用中に発生する問題のトラブルシューティングについて説明します。
HP ALM External Authentication Configuration Guide	外部認証を使用して ALM にアクセスするために必要な設定について説 明します。
HP ALM Business Views Microsoft Excel Add-in User Guide	ビジネス・ビューの Excel レポートを作成および設定する機能を備えた Business Views Microsoft Excel アドインをインストールおよび使用する 方法について説明します。
Business Process Testing ユーザーズ・ ガイド	Business Process Testing を使用してビジネス・プロセス・テストを作成す る方法を説明しています。

HP ALM Performance Center ガイド	説明
HP ALM Performance Center クイック・ス タート	Performance Center ユーザが, 自分のペースでパフォーマンス・テストの作成 と実行の概要を学べるガイドです。
HP ALM Performance Center ガイド	Performance Center のユーザを対象に、パフォーマンス・テストの作成方法、スケジュール設定方法、実行方法、監視方法を説明します。Performance Center の管理者を対象に、Performance Center プロジェクトの設定方法、管理方法を説明しています。

HP ALM Performance Center ガイド	説明
HP ALM Performance Center インストー ル・ガイド	Performance Center Server, Performance Center Host, その他の Performance Center コンポーネントをセットアップするためのインストール・プロ セスについて説明します。
HP ALM Performance Center トラブル シュ ーテ ィング・ガイ ド	HP ALM Performance Center で発生した問題のトラブルシューティングについて説明します。

HP ALM ベスト・プラクティス・ガイド	説明
HP ALM Agile Testing Best Practices	アジャイルなテスト方針を実装する際のベストプラク
Guide	ティスを提供します。
HP ALM Business Process Models	Business Models モジュールを使用する際のベストプ
Best Practices Guide	ラクティスを紹介します。
HP ALM データベース・ベスト・プラクティス・	ALM をデータベース・サーバにデプロイする際のベス
ガイド	ト・プラクティスを提供します。
HP ALM Entities Sharing Best Practices Guide	エンティティ共有のベスト・プラクティスを提供します。
HP ALM Project Planning and	リリースの管理と追跡についてのベスト・プラクティスを
Tracking Best Practices Guide	提供します。
HP ALM Project Topology Best	プロジェクトを構築する際のベスト・プラクティスを提
Practices Guide	供します。
HP ALM アップグレード のベスト・プラクティ	ALM のアップグレードを準備し計画する方法を提供
ス・ガイド	します。
HP ALM Versioning and Baselining	バージョン管理の実装とベースラインの作成のための
Best Practices Guide	ベスト・プラクティスを提供します。
HP ALM Workflow Best Practices	ワークフローを実装する際のベスト・プラクティスを提
Guide	供します。

HP ALM Performance Center ベスト・プラクティス・ガイド	説明
HP Performance Center のべ スト・プラクティス	Performance Center of Excellence を効果的に構築および運用するためのベスト・プラクティスを紹介します。
HP パフォーマンス監視ベスト・ プラクティス	テスト中 のアプリケーションのパフォーマンス監視に関するベスト・ プラクティスを紹介します。

HP ALM API References	説明
HP ALM Project Database Reference	プロジェクト・データベースのすべてのテーブルとフィールド のオンライン・リファレ ンスです。
HP ALM Open Test Architecture API Reference	ALM の COM ベース API 全体のオンライン・リファレンスです。 ALM のオープ ン・テスト・アーキテクチャを使用して、ユーザ独自の設定管理ツール、 不 具合追跡ツール、 自社開発のテスト・ツールを ALM プロジェクトに統合で きます。
HP ALM Site Administration API Reference	サイト管理 COM ベース API 全体のオンライン・リファレンスです。 サイト管理 API を使用して, アプリケーションを編成, 管理し, ALM のユーザ, プロ ジェクト, ドメイン, 接続およびサイトの設定パラメータを保守できます。
HP ALM REST API Reference	ALM の REST ベース API のオンライン・リファレンスです。 REST API を使 用すると, ALM データへのアクセスと操作が可能になります。
HP ALM COM Custom Test Type Developer Guide	独自のテスト・ツールを作成し, そのツールをネイティブ COM 開発ツールを 使用して ALM 環境に統合するための完全なオンライン・ガイドです。
HP ALM .NET Custom Test Type Developer Guide	DCOM クラスと.NET クラスの組み合わせを使用して, 独自のテスト・ツー ルを作成し, そのツールを ALM 環境に統合するための完全なオンライン・ ガイドです。

HP ALM Performance Center API References	説明
HP ALM Performance	ALM Performance CenterのREST ベースAPIのオンライン・リファレン
Center REST API	スです。REST APIを使用することにより、自動化をサポートし継続
Reference	的な統合を可能にするアクションを実行できます。

その他のオンライン・リソース

[ヘルプ]メニューから、次のオンライン・リソースも利用できます。

リソース	説明
トラブルシューティ ングとナレッジ・ ベース	HP ソフトウェア・サポート Web サイトのトラブルシューティングのページにアクセス します。このページでは,セルフ・ソルブ技術情報を検索できます。[ヘルプ]> [トラブルシューティングとナレッジ ベース]を選択します。この Web サイトの URL は, http://support.openview.hp.com/troubleshooting.jsp です。

リソース	説明
HP ソフトウェア・ サポート	HP ソフトウェア・サポート Web サイトを開きます。このサイトで、セルフ・ソルブ 技術情報を参照できます。また、英語版のサイトでは、ナレッジ・ベースの参 照、独自の項目の追加、ユーザ・ディスカッション・フォーラムへの書き込みや検 索、パッチや更新されたドキュメントのダウンロードなどを行うこともできます。 [ヘルプ]> [ソフトウェア サポート オンライン]を選択します。Web サイトの URL は http://support.openview.hp.com/です。
	 一部のサポートを除き、サポートのご利用には、HP Passport ユーザとしてご登録の上、サインインしていただく必要があります。また、多くのサポートのご利用には、サポート契約が必要です。
	 アクセス・レベルに関する詳細は、次のWebサイトにアクセスしてください。 http://support.openview.hp.com/access_level.jsp
	 HP Passport ID を登録するには、以下のWeb サイトにアクセスしてください。http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html (英語サイト)
HP Software Quality Center Web サイト	HP ソフトウェア Web サイトにアクセスします。このサイトでは、HP ソフトウェア 製品に関する最新の情報をご覧になれます。新しいソフトウェアのリリース、セ ミナー、展示会、カスタマー・サポートなどの情報も含まれています。[ヘルプ] > [HP Software Quality Center Web サイト]を選択します。この Web サイ トの URL は、http://support.openview.hp.com/です。
HP Application Lifecycle Management Web サイト	HP ALM Web サイトにアクセスします。このサイトでは、HP ALM に関する最新 の情報をご覧になれます。新しいソフトウェアのリリース、セミナー、展示会、カ スタマー・サポートなどの情報も含まれています。[ヘルプ]>[HP Application Lifecycle Management Web サイト]を選択します。この Web サイトの URL は、http://www8.hp.com/us/en/software- solutions/software.html?compURI=1172141#tab=TAB1 です。
アドイン	[アドイン]ページからは、HP およびサードパーティー・ツールとの統合と同期に 関するソリューションを入手できます。
ALM ツール	[ALM Tools]ページが開きます。 このページからは、 ALM とともに ALM サーバ 上 にインストールされる HP およびサード パーティが提供 するツールとの統合と 同期に関するソリューションを入手 できます。

ALM の拡張機能のガイド

拡張機能は、HP ALM に追加機能を提供します。ALM の拡張機能のライセンスをお持ちの場合は、プロジェクト単位で拡張機能を有効にすることで、追加された機能を利用することができます。 拡張機能の有効化の詳細については、「プロジェクトに対する拡張機能の有効化」(83ページ)を参照してください。

ALM 12.00 で利用可能な拡張機能の一覧表示や、ALM の拡張機能に関するドキュメントのダウン ロードは、HP ALM [アドイン]ページ([**ヘルプ**]> [**アドイン**]を選択)を参照してください。



管理者ガイド 第1部:サイト管理

第1章:サイト管理の概略

HP Application Lifecycle Management(ALM)の「サイト管理」を使用して、プロジェクト、ユーザ、 サーバ、サイト接続、ライセンス使用、パラメータを作成し保守します。また、サイト管理者を定義 し、サイト管理者のパスワードを変更することもできます。

本章の内容

サイト管理の起動	24
「サイト管理」の概要	
サイト管理者の定義	29

サイト管理の起動

「サイト管理」機能を使用して, ALM プロジェクトを作成し保守します。

「サイト管理」を起動するには、次の手順を実行します。

1. 次のいずれかを選択します。

- Web ブラウザを開き、次のように入力します。
 http://<ALM サーバ名>[<:ポート番号>]/qcbin。HP Application Lifecycle
 Management のオプション・ウィンドウが開きます。[サイト管理]リンクをクリックします。
- もしくは、Web ブラウザを開き、サイト管理のURLを入力します:http://<ALM サーバ名 > [<:ポート番号 >]/qcbin/SiteAdmin.jsp。

「サイト管理」を初めて起動すると、クライアント・マシンにファイルがダウンロードされます。次に、クライアント・マシンにインストールされたクライアント・ファイルのバージョンがチェックされます。サーバに新しいバージョンがあると、更新されたファイルがクライアント・マシンにダウンロードされます。

注: Citrix やVMware などの仮想環境からALMを実行する場合,新しいバージョンをインストールできるのはシステム管理者だけです。

ローカライズされた ALM サーバのサイト管理で,名前にロケール固有の記号があるドメイン またはプロジェクトを作成してある場合,ローカライズされていないクライアント・マシンからは サイト管理にアクセスできない可能性があります。このような場合は、クライアント・マシンのロ ケールを、ALM サーバのロケールに一致するように変更してください。

ALM のバージョンが確認され,必要に応じて更新されると,HP Application Lifecycle Management サイト管理のログイン・ウィンドウが表示されます。

注: 外部認証を使用している場合,このウィンドウはバイパスされ,外部認証の資格情報 を使用してサイト管理に自動的にログインします。



- 2. [ユーザ名]ボックスに、サイト管理者として定義されているユーザの名前を入力します。「サイト 管理」に初めてログインするときは、ALM のインストール時に指定したサイト管理者名を使用す る必要があります。「サイト管理」にログインしたら、別のサイト管理者を定義できます。詳細につ いては、「サイト管理者の定義」(29ページ)を参照してください。
- 3. [パスワード]ボックスにサイト管理者のパスワードを入力します。「サイト管理」に初めてログイン するときは、ALM のインストール時に指定したサイト管理者のパスワードを使用する必要があり ます。

サイト管理者パスワードを定義または変更するには、「パスワードの作成と変更」(158ページ)を参照してください。

4. [ログイン]をクリックします。「サイト管理」が開きます。

「サイト管理」の概要

ALM のサイト管理者は、「サイト管理」機能を使用して、プロジェクト、ユーザ、サーバを作成し保守します。

ALM のエディション:いくつかのエディションでは、「サイト管理」機能の一部が利用できません。その内容は、次のとおりです。

- ALM テンプレート・プロジェクトは, Quality Center Enterprise Edition では利用できません。
- プロジェクトの計画と追跡に関連する機能は、ALM Edition でのみ利用できます。

ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユー ザーズ・ガイド』を参照してください。

ストヘッド 🎻 Application Lifecycle Management	 Site Administration 		サイト管理者: almadmin	ወያዎዕኑ
サイトのブロジェクト ラボ管理 サイトのニ	2ーザ サイトの接続	ライセンス サーバ DB サー	バ サイト設定 サイト分	析 •
※ドメインの作成 品、ドメインの削除 多・	🍯 ブロジェクトの作成	29 テンプレートの作成 × 削除	📼 名前の変更 🥒 編集 🖗	Pine コマンド 糞
ALMTEST	DEFAULT			
	ディレクトリ			
		物理ディレクトリ:	D¥ProgramData¥HP¥ALM¥repo	ository¥qc¥Defa
	その他			
		<u>連絡先名:</u>		
		連絡先電子メール:	in a FD	
		<u>ユーリ 朝候:</u> 標準設定 DB サーバ:	127.0.0.01 (MS-SQL)	*

本項の内容

- 「マストヘッド」(26ページ)
- 「[ツール]メニュー」(27ページ)
- 「[サイト管理]のタブ」(28ページ)

マストヘッド

マストヘッドでは、サイト管理全体で使用できるオプションが表示されます。

オプション	説明
ツール	サイト管理内のどの場所からでも実行できるコマンドが含まれます。詳細につ いては,「[ツール]メニュー」(27ページ)を参照してください。
ヘルプ	HP Application Lifecycle Management ヘルプなどのオンライン・リソースを表示 します。 ALM の各 クライアント・コンポーネントのバージョン情報を表示するには、[ヘル プ]を選択します。表示されるウィンドウの右側に詳細が表示されます。 ヒント: [ヘルプ]メニューのカスタマイズ方法については、『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグレード・ガイド』を参照し てください。
サイト管理者:< ユーザ>	現在のサイト管理者ユーザです。
ወグアウト	ログアウト:サイト管理からログアウトします。 注:外部認証モードで ALM にアクセスした場合, このボタンではログアウトできません。ログアウトするには, クライアント・ブラウザを閉じる必要があります。

[ツール]メニュー

[ツール]メニューはマストヘッド上にあり、次のオプションが含まれています。

オプション	説明
情報の収集	ALM_CollectedInfo_<番号>.html ファイルを作成します。このファイルに は、ALM システムに関する診断情報が含まれます。これは、ALM サポートに 連絡する際に役立ちます。ALM_CollectedInfo_<番号>.html ファイル は、ALM サーバ・マシン上の一時ファイルに格納されます。フォルダの場所を特 定するには、サイト管理ログ・ファイルを開いて、java.io.tmpdir フィールドを探 します。
リポジトリの移行 の状態	最適化されたプロジェクト・リポジトリへのプロジェクトの移行の状態を表示しま す。詳細については、「リポジトリの移行」(136ページ)を参照してください。
プロジェクトのアッ プグレードの優先 度の設定	新しいマイナー・マイナー・バージョンにプロジェクトをアップグレードする前に,優先度を設定できます。詳細については、「マイナー・マイナー・バージョンでのプロジェクトのアップグレード」(141ページ)を参照してください。
テスト・タイプの更 新	アクティブなプロジェクトのカスタム・テスト・タイプ定義を更新します。この操作 は、カスタム・テスト・タイプをALMに登録した後で必要です。アクティブなプロ ジェクトがサイト内に多くある場合は、ある程度時間がかかることがあります。 詳細については、『HP ALM Custom Test Types Guide』を参照してください。 注: カスタム・テスト・タイプの定義は、プロジェクトをアクティブにすると自動 的に更新されます。
ALM 評価	環境情報を収集することによって,現在のALM デプロイメントを評価し,使 用率を向上させる方法を提案します。詳細については,「ALM評価」(241 ページ)を参照してください。
QC センス	QC Sense(内蔵のALM 監視ツール)の操作オプションを選択できます。 • レポート:収集したデータに基づいてレポートを生成できます。 • 設定:収集するデータの範囲を定義するために, QC Sense モニタを設定 できます。 詳細については,「QC Sense」(249ページ)を参照してください。

[サイト管理]のタブ

「サイト管理」には、次のタブがあります。

タブ	説明
サイトのプロジェク ト	ALM プロジェクトとテンプレートを管理します。たとえば、新しいドメインとプロジェクトの追加、プロジェクトの拡張機能の有効化、プロジェクト・データの問い 合わせ、プロジェクトのアクティブ化/非アクティブ化などを実行できます。詳細については、「プロジェクトの管理」(95ページ)を参照してください。
	以前のQuality Center バージョンから現在のALM バージョンにプロジェクトを アップグレード することもできます。詳細については、「プロジェクトの新規バー ジョンへのアップグレード」(113ページ)を参照してください。
ラボ管理	LAB_PROJECTの詳細情報を管理し、ラボ管理の管理者を定義します。
	詳細については、 『HP ALM ラボ管理ガイド』を参照してください。
<u> </u>	新規ユーザの追加や, ユーザ・プロパティの定義(パスワードの変更など)を行います。詳細については,「ALM ユーザの管理」(145ページ)を参照してください。
	サイト管理者を定義することもできます。詳細については、「サイト管理者の 定義」(29ページ)を参照してください。
サイトの接続	ALM サーバに現在接続されているユーザを監視します。詳細については, 「ユーザ接続とライセンスの管理」(165ページ)を参照してください。
ライセンス	使用中のALM ライセンスの合計数の監視と、ライセンス・キーの変更を行います。詳細については、「ユーザ接続とライセンスの管理」(165ページ)を参照してください。
サーバ	ALM サーバ情報(ログ・ファイルなど)を変更します。詳細については、「サーバ とパラメータの設定」(177ページ)を参照してください。
DB サーバ	データベース・サーバを管理します。新規データベース・サーバの追加, データ ベースの接続文字列の編集, データベースの標準設定管理者のユーザ名と パスワードの変更などを実行できます。詳細については, 「サーバとパラメータ の設定」(177ページ)を参照してください。
サイト設定	ALM 設定 パラメータ(メール・プロトコルなど)を変更します。詳細については, 「サーバとパラメータの設定」(177ページ)を参照してください。
サイト分析	ある期間内の特定の時点において、 ライセンスを使ってプロジェクトに接続している ALM ユーザの数を監視します。詳細については、「サイト使用状況の分析」(229ページ)を参照してください。
プロジェクトの計 画 と追跡	ALM サイトで実行するプロジェクトの計画と追跡(PPT)計算のスケジュールを 設定します。詳細については、「プロジェクトの計画と追跡(PPT)計算のスケ ジュール設定」(235ページ)を参照してください。

サイト管理者の定義

ALMユーザをサイト管理者として定義できます。

「サイト管理」内の情報のセキュリティを確保するために、サイト管理者として追加するユーザごとにパスワードが定義されていることを確認してください。詳細については、「パスワードの作成と変更」(158 ページ)を参照してください。

サイト管理者を定義するには、次の手順を実行します。

- 1.「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブをクリックします。
- 2. [**サイト管理者**]ボタン をクリックします。[サイト管理者]ダイアログ・ボックスが開いて, サイト 管理者のリストが表示されます。

サイト管理者のリストのソート順を昇順から降順に変更するには、 [ユーザ名]または [名前]カラムの見出しをクリックします。表示の並び順を逆にするには、 同じカラムの見出しをもう一度クリックします。

3. サイト管理者の[追加]ボタンをクリックします。右の表示枠にユーザのリストが表示されます。

ŧ	41管理	者										X
	🎽 追加	🔥 削除	5	検索) Ah		\$	検索		éh.	×
ļ	ユーザ名			名前			ļ	ユーザ名		名前		
10	alm_admin			David E	lanks		1	alm_admin	3 2	Pamela Knight Rov Fields		
								test	-	1.00 1.10100		
L												
					閉	103	ヘルプ					

- サイト管理者として割り当てるユーザを選択します。ユーザのリストの上にある[検索]ボックスに 検索文字列を入力し、[検索]ボタン かをクリックすると、ユーザを検索できます。
- 5. [選択されているユーザの追加]ボタン をクリックします。あるいは、ユーザをダブルクリックします。 選択したユーザが、 左の表示枠のサイト管理者のリストに移動します。

- 6. サイト管理者のリストからサイト管理者を削除するには、そのユーザを選択し、[**選択されている** サイト管理者を削除]ボタンをクリックします。[OK]をクリックして確定します。ユーザがサイト管 理者のリストから削除されます。
- サイト管理者のリストまたはユーザのリストを更新するには、それぞれのリストの上にある[更新] ボタン あたりリックします。

第2章:プロジェクトの作成

HP Application Lifecycle Management(ALM)のドメインとプロジェクトを「サイト管理」で作成し設定できます。

既存のプロジェクトの管理については、「プロジェクトの管理」(95ページ)を参照してください。管理作業には、プロジェクト・データの問い合わせ、プロジェクトの復元、プロジェクト名の変更、プロジェクトの エクスポート、プロジェクトのアクティブ化/非アクティブ化などがあります。

以前のバージョンの Quality Center/ALM からプロジェクトをアップグレードする処理については、「プロ ジェクトの新規バージョンへのアップグレード」(113ページ)を参照してください。

本章の内容

プロジェクトの作成について	32
プロジェクトの構成について	32
ドメインの作成	33
プロジェクトの作成	35
プロジェクトのコピー	42
プロジェクトのインポート	49
テンプレート・プロジェクトの作成	55
プロジェクト へのテンプレート のリンク	75
プロジェクトの詳 細 の更 新	76
プロジェクトへのユーザの割り当て	80
プロジェクトに対 する拡張機能の有効化	83

プロジェクトの作成について

ALM で作業を開始するには、 プロジェクトを作成する必要があります。 プロジェクトには、 アプリケーションの管理プロセスに関連するデータが収集され格納されます。 次の操作を選択できます。

- 空のプロジェクトを作成する
- テンプレート・プロジェクトをベースとしてプロジェクトを作成する
- 既存プロジェクトの内容を新しいプロジェクトにコピーする
- エクスポートされたプロジェクト・ファイルからデータをインポートする

テンプレート・プロジェクトも作成できます。テンプレート・プロジェクトは,他のプロジェクトにリンクして,クロス・プロジェクト・カスタマイズを有効にできます。詳細については、「クロス・プロジェクト・カスタマ イズ」(345ページ)を参照してください。

プロジェクトを作成したら、そのプロジェクトにユーザの追加と削除を実行できます。

注: [**ラボ管理**]にすでにログインしているユーザが[サイト管理]で行った変更を確認するには、 再度アプリケーションを開始する必要があります。

プロジェクトは、**ドメイン**でグループ分けされます。ドメインには関連する一連のプロジェクトが含まれ、 ドメインを使って多数のプロジェクトを整理し管理することができます。 各ドメインには、プロジェクト・ フォルダと、テンプレート・プロジェクト・フォルダがあり、そのフォルダでプロジェクトとテンプレート・プロ ジェクトを整理できます。

ALM のエディション:「サイト管理」の一部の機能は、エディションごとに制限があります。たとえば、ALM テンプレート・プロジェクトは、Quality Center Enterprise Edition では利用できません。 ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユー ザーズ・ガイド』を参照してください。

プロジェクトの構成について

ALM をインストールすると、インストール・プログラムによってプロジェクト・リポジトリがアプリケーション・ サーバのファイル・システム上に作成されます。標準設定では、プロジェクト・リポジトリはアプリケーショ ンのデプロイメント・ディレクトリに保存されます。Windows マシンの場合は C:\ProgramData\HP\ALM\repository、UNIX マシンの場合は /var/opt/HP/ALM/repository で す。

プロジェクト・リポジトリ内には、サブフォルダの sa とqc があります。 sa ディレクトリには、プロジェクト・リ ポジトリ内のすべてのプロジェクトで使用するグローバルな XML ファイル、スタイル・シート、テンプレート、レポートが格納されます。

qc ディレクトリは, 複数のユーザが共有する一連のドメイン用の作業領域です。各ドメインには, プロ ジェクトが格納されます。新しいプロジェクトを作成する際は, 標準設定・ドメインまたはユーザ定義ド メインにプロジェクトを追加できます。

次の図に、リポジトリの構成を示します。



qc ディレクトリの下 のプロジェクト・ディレクトリには, それぞれ次 のサブディレクトリがあります。

- ProjRep: すべてのプロジェクト・ファイル(テスト・スクリプト,レポート,添付ファイルなど)のリポジトリ を含むサブディレクトリ。プロジェクト・リポジトリの詳細については、「最適化されたプロジェクト・リポ ジトリの管理」(87ページ)を参照してください。
- dbid.xml: プロジェクトへの接続を復元するために必要なプロジェクト情報を格納する初期化ファイル。プロジェクトへの接続の復元の詳細については、「プロジェクトへのアクセスの復元」(106ページ)を参照してください。

sa ディレクトリの下には Domsinfo サブディレクトリがあり,次の情報が含まれています。

- StyleSheets: グローバルなスタイル・シートを格納 するサブディレクトリ。
- Templates:新規プロジェクトの作成に使用するデータベース・テンプレートを格納するサブディレクトリ。

ドメインの作成

新しいドメインを「サイト管理」に追加できます。 プロジェクトは, ドメインごとにプロジェクトのリストに整理します。

ドメインを作成するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. [ドメインの作成]ボタンをクリックします。[ドメインの作成]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 3. [ドメイン名]を入力し, [OK]をクリックします。

ドメイン名は最大 30 文字で指定し、英文字で始まる必要があり、文字、数字、下線のみを 指定できます。

注:英語以外の文字のサポートは、サーバに適用されているデータベース設定によって異なります。ドメイン名には英語以外の文字を使用しないことをお勧めします。

新しいドメインがプロジェクトのリストに追加されます。 右の表示枠の[ディレクトリ]でドメインの場所を確認できます。

サイトのブロジェクト サイトのユーザ サイ	「トの接続 ライセンス サーバ DB サーバ サイト設定 サイト分析 🔳
🏭 ドメインの作成 💑 ドメインの削除 🛛 🔗 🔻	🍯 ブロジェクトの作成 🆄 テンプレートの作成 🗙 削除 🔤 名前の変更 🥒 編集 式
● この ● この	NEW_DOMAIN
	物理ディレクトリ: [O¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥HP¥
	その他
	<u>ユーザ創発:</u> 無制限 標準設定 DB サーバ: (なし) v

- 4. ドメインやドメインのプロジェクトについて質問や問題がある場合の連絡先として担当者の名前 を追加するには、 [連絡先名]リンクをクリックします。 [連絡先名の設定]ダイアログ・ボックスに 連絡先の担当者名を入力し、 [OK]をクリックします。
- 5. ドメインに対する連絡先担当者の電子メール・アドレスを追加するには、 [連絡先電子メール] リンクをクリックします。 [連絡先電子メールの設定]ダイアログ・ボックスに電子メール・アドレスを 入力し、 [OK]をクリックします。
- 6. ドメインに同時にアクセス可能なユーザ数を変更するには、[ユーザ制限]リンクをクリックします。 [ドメインのユーザ制限]ダイアログ・ボックスが開きます。

[最大]を選択し,許容する同時接続数の最大値を入力します。[OK]をクリックします。

注:ドメインに同時接続できるユーザ数の他に、次の値を変更できます。

 プロジェクトに同時接続できるユーザ数。詳細については、「プロジェクトの詳細の更新」 (76ページ)を参照してください。

- 1 つのプロジェクトに対して、ALM が同時に開くことができるデータベース・サーバ接続の数。詳細については、「サーバ情報の設定」(178ページ)を参照してください。
- ドメイン内にプロジェクトを作成するときの標準設定のデータベース・サーバを選択するには、 [標準設定 DB サーバ]リストからそのデータベース・サーバを選択します。

プロジェクトの作成

ALM プロジェクトを Oracle または Microsoft SQL に作成できます。 プロジェクトは、次の任意の方法で作成できます。

- 空のプロジェクトを作成する。
- テンプレートからプロジェクトを作成する。このオプションでは、既存のテンプレート・プロジェクトのカス タマイズ内容がコピーされます。テンプレート・プロジェクトからプロジェクト・データがコピーされること はありません。

ALM のエディション:このオプションは, Quality Center Enterprise Edition では利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

- 既存のプロジェクトの内容をコピーする。詳細については、「プロジェクトのコピー」(42ページ)を参照してください。
- エクスポートされたプロジェクト・ファイルからデータをインポートする。詳細については、「プロジェクトのインポート」(49ページ)を参照してください。

テンプレート・プロジェクトの作成の詳細については、「テンプレート・プロジェクトの作成」(55ページ)を参照してください。

注:

- ALM に必要な Oracle または Microsoft SQL のアクセス許可については、『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグレード・ガイド』を参照してください。
- データベース・サーバが WAN 経由で ALM に接続されている場合は、プロジェクトの作成処理に非常に時間がかかることがあります。

プロジェクトを作成するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトを作成するドメインを選択します。
- 3. [プロジェクトの作成]ボタンをクリックします。[プロジェクトの作成]ダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの作成	×
新規プロジェクトを作成します―――――	-
⊙ 空のブロジェクトを作成する	
○ テンブレートからプロジェクトを作成する	
○ 既存ブロジェクトからデータをコピーしてプロジェクトを作成する	
○ エクスポートされたプロジェクト ファイルからデータをインボートしてプロジェクト を作成する	
◆ 戻る ◆ 次へ キャンセル ヘルブ	

- 4. 次のいずれかのオプションを選択します。
 - **空のプロジェクトを作成する**:新規プロジェクトを作成します。
 - **テンプレートからプロジェクトを作成する**:既存のテンプレート・プロジェクトのカスタマイズ内容を コピーして,新規プロジェクトを作成します。ただし、プロジェクト・データはコピーされません。

ALM のエディション:このオプションは, Quality Center Enterprise Edition では利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

- 既存プロジェクトからデータをコピーしてプロジェクトを作成する:詳細については、「プロジェクトのコピー」(42ページ)を参照してください。
- エクスポートされたプロジェクト・ファイルからデータをインポートしてプロジェクトを作成する:詳細
 については、「プロジェクトのインポート」(49ページ)を参照してください。
- 5. [**次へ**]をクリックします。

[テンプレートからプロジェクトを作成する]を選択した場合は、[テンプレートのカスタマイズを使用]ダイアログ・ボックスが開きます。

ALM のエディション:このダイアログ・ボックスはQuality Center Enterprise Editionでは利用 できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

[テンプレートからプロジェクトを作成する]を選択しなかった場合は、手順7に進みます。
ታበジェクトの作成
テンブレートのカスタマイズを使用―――
次のテンプレートからカスタマイズをコピー:
ドメイン:
テンプレート:
☑ ブロジェクトを選択したテンプレートにリンク
◆ 戻る ◆ 次へ キャンセル ヘルブ

プロジェクトの作成に使用するドメインとテンプレートを選択します。

6. [プロジェクトを選択したテンプレートにリンク]を選択して、テンプレートに新しいプロジェクトをリンクします。

ALM のエディション:このオプションは, Quality Center Enterprise Edition では利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

注: テンプレートにリンクしたプロジェクトには、テンプレート管理者がテンプレート・カスタマイズ を適用する必要があります。これにより、テンプレートのカスタマイズ内容が、リンク済みのプロ ジェクトに適用されます。また、適用されたカスタマイズ内容は、プロジェクト内で読み取り専 用になります。詳細については、「リンクされたプロジェクトへのテンプレートのカスタマイズの適 用」(351ページ)を参照してください。

[次へ]をクリックします。

7. 次のダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの作成		хI
プロジェクト名: 所在ドメイン:	DEFAULT	
◆ 戻?	る 🔷 次へ キャンセル ヘルプ	

8. [プロジェクト名]ボックスに、プロジェクトの名前を入力します。プロジェクト名は最大 30文字で 指定し、文字、数字、下線のみを指定できます。

注:英語以外の文字のサポートは、サーバに適用されているデータベース設定によって異なります。プロジェクト名には英語以外の文字を使用しないことをお勧めします。

- 9. [所在ドメイン]ボックスでドメインを選択します。
- 10. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの作成	X
データベースの種類―――	
○ Oracle	
⊙ MS-SQL	
DB サーバ	
サーバ名:	127.0.0.01
DB 笹理者 コーゼ・	
	3α
DB 管理者バスワード :	****
□Unicode として作成	
◆ 戻る → 次へ	キャンセル ヘルプ

- 11. [**データベースの種類**]で, [Oracle]または[MS-SQL]を選択します。
- 12. 標準設定では、ドメインに対して定義された標準設定値が[サーバ名], [DB 管理者ユー ザ], [DB 管理者パスワード]に表示されます。追加のデータベース・サーバが定義されている場

合は、[サーバ名]リストから別の名前を選択できます。

13. [Unicode として作成]をクリックすると、プロジェクトがUnicode として作成されます。

注: [Unicode として作成] チェックボックスが表示されるのは、MS-SQL Server で空のプロジェクトから新しいプロジェクトを作成する場合のみです。Unicode は、多言語サポートに対応する MS-SQL の機能です。Oracle では、サーバのインストール時に多言語サポートが定義されます。

14. [次へ]をクリックします。

選択したデータベース・サーバでテキスト検索機能が有効になっていない場合は、メッセージ・ ボックスが開きます。このメッセージには、その処理の終了後にテキスト検索機能を有効にできる ことが示されます。テキスト検索を有効にする方法の詳細については、「テキスト検索の設定」 (184ページ)を参照してください。

15. Microsoft SQL プロジェクトを作成している場合は,手順 **16** に進みます。Oracle プロジェクトの 場合は,次のダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの	作成		×
	表領域に作成:	USERS (31.2Mb Free)	
	一時表領域:	TEMP	
4	戻る 🔶 次	へ キャンセル ヘルプ	

[表領域に作成]ボックスで、新規プロジェクトを格納できるだけの領域が十分にあるストレージ 場所を選択します。ストレージ場所として UNDO は使用しないでください。

[一時表領域]ボックスで,新規プロジェクトを格納できるだけの領域が十分にある一時ストレージ場所を選択します。

[次へ]をクリックします。

16. [プロジェクト管理者の追加]ダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの作成	X
プロジェクト管理者の追加	
選択済みプロジェクト管理者	_利用可能なユーザ
almadmin	白 ∽ 検索
	コーニー シェ ホキェオ
ッチ・フロシェンド音楽音なフロシェンドの/FDX1数に割り3	= (@U(C#))
🔶 戻る 🔶 次へ キャンセル	ルーヘルプ

[選択済みプロジェクト管理者]には、プロジェクト管理者に割り当てられるユーザが表示されます。[利用可能なユーザ]リストには、プロジェクトに対して利用可能なユーザが表示されます。 プロジェクト管理者を割り当てると、そのユーザが[利用可能なユーザ]リストから[選択済みプロ ジェクト管理者]リストに移動します。プロジェクト管理者ユーザは、他のユーザをプロジェクトに 追加し管理できます。

- 更新:[更新]ボタン 2000をクリックすると、利用可能なユーザのリストが更新されます。
- 検索:ユーザの名前を[検索]ボックスに入力し, [検索]ボタン をクリックすると, [利用可能なユーザ]リストを検索できます。
- 選択されているユーザの追加:プロジェクト管理者に割り当てるユーザを選択し、[選択されているユーザの追加]ボタンをクリックします。あるいは、ユーザ名をダブルクリックします。選択したユーザが[選択済みプロジェクト管理者]リストに移動します。
- 削除: [選択済みプロジェクト管理者]リストからユーザを削除するには、そのユーザ名を右ク リックし、[削除]をクリックします。

プロジェクト管理者の割り当ては、プロジェクトの作成後にも行えます。詳細については、「プロ ジェクト管理者の割り当て」(82ページ)を参照してください。

17. [次へ]をクリックします。サイトのALM エディションで提供されている拡張機能を有効化できます。

从5长1版能泊	サイトにインストールされ	てい有効にする
C Core Sample Extension	1.0	
ມC Internal Sample Extension	1.0	
ロミットの作品後に前週報告を	白がしてナステレモのチェナが	

有効にする拡張機能の[有効にする]チェック・ボックスを選択します。

注:

- プロジェクトに対して有効にした拡張機能を、後で無効にすることはできません。したがって、必要な拡張機能のみを有効にすることをお勧めします。不要な拡張機能を有効にすると、パフォーマンスが低下する原因になり、ディスク容量の無駄になります。
- 拡張機能間を移動すると、 [**ライセンス ステータス**] にそれぞれのライセンス・ステータス情報が表示されます。

サーバ上にライセンスがない拡張機能は、灰色で表示されます。拡張機能は、ライセンスがない状態でも有効化できますが、その追加機能については、ライセンスの取得後に利用可能になります。

- ラボ管理 または Performance Center を使用する場合は、ALM ラボ拡張を有効化します。詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
- プロジェクトの拡張機能は、プロジェクトの作成後にも有効にできます。詳細については、「プロジェクトに対する拡張機能の有効化」(83ページ)を参照してください。

18. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの作成	×
新規 MS-SQL プロジェクト を作成します。	
プロジェクト 名:test2 次のドメインを使用:DEFAULT	
次のサーバを使用: 12700.01	
□ フロジェクトの起動 ロバージョン管理を有効にする	
◆ 戻る ✓ 作成 キャンセル ヘルプ	

プロジェクトの詳細を確認します。詳細情報のいずれかを変更するには、 [**戻る**]をクリックします。

- [プロジェクトの起動]を選択すると、新規プロジェクトがアクティブになります。ユーザがプロジェクト にログインするときに、HP Application Lifecycle Management ログイン・ウィンド ウで利用できるの は、アクティブなプロジェクトのみです。詳細については、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ 化」(98ページ)を参照してください。
- 20. [バージョン管理を有効にする]を選択すると、プロジェクトのバージョン管理が有効になります。 バージョン管理は、プロジェクトの作成後にも有効にできます。詳細については、「プロジェクトの バージョン管理の有効化と無効化」(99ページ)を参照してください。
- 21. [作成]をクリックします。新しいプロジェクトがプロジェクトのリストに追加されます。

プロジェクトのコピー

既存のプロジェクトの内容をコピーして、新しいプロジェクトを作成できます。

バージョン管理:バージョン管理が有効なプロジェクトをコピーすると、作成される新しいプロジェクトで もバージョン管理が有効になります。バージョン履歴もコピーされます。ソース・プロジェクトでチェックアウ トされているエンティティは、新しいプロジェクトでもチェックアウトされます。このようなチェックアウトは、 新しいプロジェクトの管理者が取り消せます。詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

注:

• コピー処理の途中で ALM サーバが利用できなくなった場合は、後でコピー・プロセスを再開 できます。コピーを再開するには、「サイト管理」を再度開き、プロジェクトのリストからプロ ジェクトを選択します。右の表示枠の[ここをクリックしてください]リンクをクリックしてください。

- 新しいプロジェクトは、コピーしたプロジェクトの Unicode または ASCII 定義を継承します。
- コピーされたプロジェクトでは、テスト実行の詳細情報は使用状況レポートに表示されません。
- タイムスロット 情報 とプロジェクトの設定はコピーされません。
- 元のプロジェクトに関連付けられている結果ファイルはコピーされません。

プロジェクトをコピーするには、次の手順を実行します。

- 1. コピーするプロジェクトを非アクティブにします。詳細については、「プロジェクトの非アクティブ化と アクティブ化」(98ページ)を参照してください。
- 2. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 3. プロジェクトを作成するドメインを選択します。
- 4. [プロジェクトの作成]ボタンをクリックします。[プロジェクトの作成]ダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの作成	X
新規プロジェクトを作成します――――	
⊙ 空のブロジェクトを作成する	
○ テンプレートからプロジェクトを作成する	
○ 既存ブロジェクトからデータをコピーしてブロジェクトを作成する	
○ エクスポートされたプロジェクト ファイルからデータをインボートしてプロジェクト を作成する	
◆ 戻る ▶ 次へ キャンセル ヘルプ	

5. [既存プロジェクトからデータをコピーしてプロジェクトを作成する]オプションを選択して, [次へ] をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの作成	×
コピーするプロジェクトの選択	
🖫-💑 DEFAULT	
🗄 - 🛃 NEW_DOMAIN	
🔶 戻る 🔶 次へ キャンセル ヘル	/プ

6. [コピーするプロジェクトの選択]で、コピー元のドメインとプロジェクトを選択し、[次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの作成		X
対象プロジェクト:	ALM_Demo	
所在ドメイン:	DEFAULT	
Customization		•
Releases		
Requirements		
🗌 Risk-Based Quality Manage	ement	
Tests		-
Test Sets		
🗆 Runs		
Defects		
Include History	•	-
注:既存のプロジェクトに有効化された法	広張機能は、新規プロジェクトに自動的にコピーされます。	_
<u>すべてクリア</u> <u>すべて選択</u>		
🔶 戻る 🔶	次へ キャンセル ヘルブ	

7. [Customization]を選択して、プロジェクトのリスト、ホスト・データ、システム・フィールドとユーザ 定義フィールド、モジュール・アクセス、ワークフロー、遷移ルールを新しいプロジェクトにコピーしま す。このオプションを選択すると、次の項目もコピーするように選択できます。

オプション	説明
Releases	プロジェクトのリリース・データをコピーします。
Requirements	プロジェクトの要件 データをコピーします。

オプション	説明
Risk-Based Quality Management	リスク・ベース品質管理のカスタマイズ設定をプロジェクトからコピーします。 詳細については、「リスクベース品質管理のカスタマイズ」(331ページ)を 参照してください。
Tests	プロジェクトのテスト・データとテスト・リソースをコピーします。このオプションを 選択した場合は、次のオプションも選択できます。
Defects	プロジェクトの不具合データをコピーします。
Include History	選択したオプションの履歴データをコピーします。
Public Favorite Views	プロジェクトの公開お気に入りビューをコピーします。詳細については、 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してく ださい。
Dashboard Public Entities	プロジェクトの公開アナリシス項目とダッシュボード・ページをコピーします。 詳細については、 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガ イド』を参照してください。
Users and Groups	 ユーザおよびグループの情報とアクセス許可の設定をコピーします。このオ プションを選択した場合は、次のオプションもコピーするように選択できま す。 Dashboard Private Entities: プロジェクトの非公開アナリシス項目と ダッシュボード・ページをコピーします。詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してくだ さい。 Private Favorite Views: 非公開お気に入りビューのデータとExcel レ ポートの定義をプロジェクトからコピーします。詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してくだ さい。 Mail Conditions: メール設定データをコピーします。詳細については、 「自動メールの設定」(325ページ)を参照してください。 Alerts and Follow Up Flags: 警告およびフォローアップ・フラグをコ ピーします。詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

オプション	説明
Sprinter	Sprinter データをコピーします。これは、選択解除できません。
Analysis Extension	Analysis データをコピーします。これは,選択解除できません。
Quality Center	Quality Center データをコピーします。これは、選択解除できません。

注:

- コピー元のプロジェクトで拡張機能が有効な場合は、拡張機能とそれに関連するデータ も新しいプロジェクトにコピーされます。
- コピー元のプロジェクトにライブラリが含まれていても、ライブラリは新しいプロジェクトにコ ピーされません。ライブラリのインポートの詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

オプションをすべてクリアするには、 [すべてクリア]をクリックします。

オプションをすべて選択するには、 [すべて選択]をクリックします。

- 8. [**次へ**]をクリックします。
- [プロジェクト名]ボックスに、プロジェクトの名前を入力します。プロジェクト名は30文字以内にする必要があります。また、次の文字はいずれも使用できません。=~`!@#\$%^&*()+|
 {}[]:';"<>?,./)-
- 10. [所在ドメイン]ボックスでドメインを選択します。
- 11. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの作成		×
データベースの種類――		_
⊖ Oracle		
⊙ MS-SQL		
DB サーバ		
サーバ名:	DEPROXP13	
DB 管理者 ユーザ :	Sa	
DB 管理者バスワード :	****	
🔶 戻る 🚽	▶ 次へ キャンセル ヘルブ	

- 12. [データベースの種類]で, [Oracle]または[MS-SQL]を選択します。
- 13. 標準設定では、ドメインに対して定義された標準設定値が[サーバ名], [DB 管理者ユー ザ], [DB 管理者パスワード]に表示されます。追加のデータベース・サーバが定義されている場 合は、 [サーバ名]リストから別の名前を選択できます。
- 14. [次へ]をクリックします。

選択したデータベース・サーバでテキスト検索機能が有効になっていない場合は、メッセージ・ ボックスが開きます。このメッセージには、その処理の終了後にテキスト検索機能を有効にできる ことが示されます。テキスト検索を有効にする方法の詳細については、「テキスト検索の設定」 (184ページ)を参照してください。

15. Microsoft SQL プロジェクトを作成している場合は,手順 **16** に進みます。Oracle プロジェクトの 場合は,次のダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの作成		×
表領域に作成:	USERS (31.2Mb Free)	
一時表領域:	TEMP	
● 戻る ● 次		

[表領域に作成]ボックスで、新規プロジェクトを格納できるだけの領域が十分にあるストレージ 場所を選択します。ストレージ場所として UNDO は使用しないでください。

[一時表領域]ボックスで,新規プロジェクトを格納できるだけの領域が十分にある一時ストレージ場所を選択します。

[次へ]をクリックします。

16. [プロジェクト管理者の追加]ダイアログ・ボックスが開きます。

×
_ 利用可能なユーザ
◆ ∽ 検索 単
depro 株式会社デブロ
test Lilico
コピーニーンもできます。
ルーヘルプ

[選択済みプロジェクト管理者]には、プロジェクト管理者に割り当てられるユーザが表示されま す。[利用可能なユーザ]リストには、プロジェクトに対して利用可能なユーザが表示されます。 プロジェクト管理者を割り当てると、そのユーザが[利用可能なユーザ]リストから[選択済みプロ ジェクト管理者]リストに移動します。プロジェクト管理者ユーザは、他のユーザをプロジェクトに 追加し管理できます。

- 更新:[更新]ボタン をクリックすると、利用可能なユーザのリストが更新されます。
- 検索:ユーザの名前を[検索]ボックスに入力し、[検索]ボタン をクリックすると、[利用可能なユーザ]リストを検索できます。
- 選択されているユーザの追加:プロジェクト管理者に割り当てるユーザを選択し、[選択されているユーザの追加]ボタンをクリックします。あるいは、ユーザ名をダブルクリックします。選択したユーザが[選択済みプロジェクト管理者]リストに移動します。
- 削除: [選択済みプロジェクト管理者]リストからユーザを削除するには、そのユーザ名を右ク リックし、[削除]をクリックします。

プロジェクト管理者の割り当ては、プロジェクトの作成後にも行えます。詳細については、「プロ ジェクト管理者の割り当て」(82ページ)を参照してください。 17. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの作成	×
新規 MS-SQL プロジェクト を作成します。	
ブロジェクト 名:NewProject 次のドメインを使用:DEFAULT	
次のサーバを使用:DEPROXP13	
□ ブロジェクトの起動	
□ バージョン管理を有効にする	
◆ 戻る ✓ 作成 キャンセル ヘルプ	

プロジェクトの詳細を確認します。詳細情報のいずれかを変更するには、 [**戻る**]をクリックします。

- 18. [プロジェクトの起動]を選択すると、新規プロジェクトがアクティブになります。ユーザがプロジェクト にログインするときに、HP Application Lifecycle Management ログイン・ウィンド ウで利用できるの は、アクティブなプロジェクトのみです。詳細については、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ 化」(98ページ)を参照してください。
- 19. [作成]をクリックします。新しいプロジェクトがプロジェクトのリストに追加されます。

プロジェクトのインポート

エクスポートされた ALM プロジェクト・ファイルのデータは、それが同じ ALM バージョンで作成されている 場合にインポートできます。また、コンテンツ・プロバイダによって作成されたカスタマイズ済みプロジェク トのデータもインポートできます。たとえば、HP コンテンツ・プロバイダによって作成された SAP テス ト、Siebel テスト、SOX コンプライアンス・テスト用の、カスタマイズされたテスト、要件、テスト・セットを インポートできます。

インポートするプロジェクトが同じサーバからエクスポートされたものだった場合, ALM は, 同じプロジェクトがサーバ上にすでに存在することをプロジェクト ID に基づいて認識します。その場合は, 既存のプロジェクトを置き換えるか, インポート処理を取り消すことを選択できます。

注:新しいプロジェクトは、インポートしたプロジェクトの Unicode または ASCII 定義を継承します。

2 GB を超えるプロジェクトはインポートできません。このようなプロジェクトは, セクションでインポートする必要があります。

バージョン管理:バージョン管理が有効なエクスポート済みプロジェクトをインポートすると、インポートされたプロジェクトでもバージョン管理が有効になります。バージョン履歴もコピーされます。

また, データはテンプレート・プロジェクトからもインポートできます。詳細については, 「テンプレート・プロ ジェクトのインポート」(71ページ)を参照してください。

プロジェクトのエクスポートの詳細については、「プロジェクトのエクスポート」(97ページ)を参照してください。

ALMプロジェクトをインポートするには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. 次のいずれかを実行できます。
 - プロジェクトのインポート先のドメインを選択し、[プロジェクト ファイルからプロジェクトをインポート]ボタン かった たり しょう あるいは、ドメインを右クリックし、[プロジェクトのインポート]を 選択します。
 - [プロジェクトの作成]ボタンをクリックします。[プロジェクトの作成]ダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの作成 X
新規プロジェクトを作成します
⊙ 空のプロジェクトを作成する
○ テンプレートからプロジェクトを作成する
○ 既存プロジェクトからデータをコピーしてプロジェクトを作成する
○ エクスポートされたプロジェクト ファイルからデータをインポートしてプロジェクト を作成する
🔶 戻る խ 次へ キャンセル ヘルプ

3. [エクスポートされたプロジェクト ファイルからデータをインポートしてプロジェクトを作成]オプションを 選択して, [次へ]をクリックします。[インポート対象ファイルの選択]ダイアログ・ボックスが開きま す。

プロジェクトの	作成	×
インボート	対象ファイルの選択――――	—
	プロジェクトのインポート元:	
	🔶 戻る 🗼 次へ キャンセル ヘルブ	

- 4. [プロジェクトのインポート元]ボックスの右にある参照ボタンをクリックし,インポートするプロジェクト を指定します。ファイルを[開く]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 5. ディレクトリを探し、インポートする ALM プロジェクトのエクスポート・ファイルを選択します。[**開く**] をクリックします。選択したファイルが[**プロジェクトのインポート元**]ボックスに表示されます。

注: 選択したファイルがALM テンプレート・プロジェクト・ファイルの場合は,新しいテンプレート・プロジェクトが作成されます。テンプレート・プロジェクトは,[**テンプレート プロジェクト**]のプロジェクトのリストに追加されます。

ALM のエディション: テンプレート・プロジェクトは, Quality Center Enterprise Edition では利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

[次へ]をクリックします。

- [プロジェクト名]ボックスに、プロジェクトの名前を入力します。プロジェクト名は 30 文字 以内にする必要があります。また、次の文字はいずれも使用できません。=~`!@#\$%^&*()+|
 {}[]:';"<>?,./\-
- 7. [所在ドメイン]ボックスでドメインを選択します。

ヒント: 作成したプロジェクトは, ドラッグアンドドロップ操作を使用して, プロジェクトのリストの別のドメインに移動できます。

8. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの作成	×
データベースの種類―――	
⊖ Oracle	
⊙ MS-SQL	
DB サーバ	
サーバ名:	DEPROXP13
UB 管理者 ユーサ:	Sa
DB 管理者バスワード:	*****
◆ 戻る ◆	次へ キャンセル ヘルブ

9. [データベースの種類]で, [Oracle] または [MS-SQL] を選択します。

標準設定では、ドメインに対して定義された標準設定値が[サーバ名], [DB 管理者ユー ザ], [DB 管理者パスワード]に表示されます。追加のデータベース・サーバが定義されている場 合は、 [サーバ名]リストから別の名前を選択できます。

注: データベース・サーバの定義の詳細については、「新しいデータベース・サーバの定義」 (180ページ)を参照してください。

10. [**次へ**]をクリックします。

選択したデータベース・サーバでテキスト検索機能が有効になっていない場合は、メッセージ・ ボックスが開きます。このメッセージには、その処理の終了後にテキスト検索機能を有効にできる ことが示されます。テキスト検索を有効にする方法の詳細については、「テキスト検索の設定」 (184ページ)を参照してください。 11. Microsoft SQL プロジェクトを作成している場合は、手順 **12** に進みます。Oracle プロジェクトの 場合は、次のダイアログ・ボックスが開きます。

プロジェクトの作成	×
表領域に作成:	USERS (31.2Mb Free)
一時表領域:	ТЕМР
◆ 戻る ◆ 次	

[表領域に作成]ボックスで、新規プロジェクトを格納できるだけの領域が十分にあるストレージ 場所を選択します。ストレージ場所として UNDO は使用しないでください。

[一時表領域]ボックスで、新規プロジェクトを格納できるだけの領域が十分にある一時ストレージ場所を選択します。

[次へ]をクリックします。

12. [プロジェクト管理者の追加]ダイアログ・ボックスでプロジェクト管理者を選択します。

プロジェクトの作成	×
プロジェクト管理者の追加―――	
選択済みプロジェクト管理者	_ 利用可能なユーザ
almadmin	🗇 🌀 検索 📃 🛗 📩
	test Lilico
注: プロジェクト管理者はプロジェクトの作成後に割り	当てることもできます。
🔶 戻る 🏓 次へ キャンセル	ルーヘルプ

[選択済みプロジェクト管理者]には、プロジェクト管理者に割り当てられるユーザが表示されます。[利用可能なユーザ]リストには、プロジェクトに対して利用可能なユーザが表示されます。 プロジェクト管理者を割り当てると、そのユーザが[利用可能なユーザ]リストから[選択済みプロ ジェクト管理者]リストに移動します。プロジェクト管理者ユーザは、他のユーザをプロジェクトに 追加し管理できます。

- 更新:[更新]ボタン 2000をクリックすると、利用可能なユーザのリストが更新されます。
- 検索:ユーザの名前を[検索]ボックスに入力し、[検索]ボタン をクリックすると、[利用可能なユーザ]リストを検索できます。
- 選択されているユーザの追加:プロジェクト管理者に割り当てるユーザを選択し、[選択されているユーザの追加]ボタンをクリックします。あるいは、ユーザ名をダブルクリックします。選択したユーザが[選択済みプロジェクト管理者]リストに移動します。
- 削除: [選択済みプロジェクト管理者]リストからユーザを削除するには、そのユーザ名を右ク リックし、[削除]をクリックします。

プロジェクト管理者の割り当ては、プロジェクトの作成後にも行えます。詳細については、「プロジェクト管理者の割り当て」(82ページ)を参照してください。

13. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

5	ታበ ジェクトの作成	×
	新規 MS-SQL プロジェクト を作成します。	
	ブロジェクト 名 : sample 次のドメインを使用 : DEFAULT	
	次のサーバを使用: 127.0.0.01	
	インボート元: D¥sample.gcp	
	▲ 良ろ ↓ 作成 キャンセル へルゴ	

プロジェクトの詳細を確認します。詳細情報のいずれかを変更するには、 [**戻る**]をクリックします。

14. [プロジェクトの起動]を選択すると、新規プロジェクトがアクティブになります。ユーザがプロジェクト にログインするときに、HP Application Lifecycle Management ログイン・ウィンド ウで利用できるの は、アクティブなプロジェクトのみです。詳細については、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ 化」(98ページ)を参照してください。 15. [作成]をクリックします。新しいプロジェクトがプロジェクトのリストに追加されます。

テンプレート・プロジェクトの作成

テンプレート・プロジェクトを使用すると, 複数のプロジェクトに共通する一連のプロジェクト・カスタマイズを定義し保守できます。作成したテンプレートは, プロジェクトにリンクできます。そうすることで, テンプレート管理者がテンプレート・カスタマイズの変更内容をリンク済みプロジェクトに適用できます。

新しいテンプレート・プロジェクトの作成は, 空のテンプレートを作成するか, 既存のテンプレートまたは プロジェクトをコピーするか, テンプレートをインポートして行います。

ALM のエディション: テンプレート・プロジェクトは, Quality Center Enterprise Edition では利用 できません。ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

本項の内容

テンプレート・プロジェクトの作成	
既存テンプレートからのテンプレートの作成	61
既存 プロジェクト からのテンプレートの作成	66
テンプレート・プロジェクトのインポート	71

テンプレート・プロジェクトの作成

新しいテンプレート・プロジェクトを Oracle または Microsoft SQL に作成できます。

テンプレートを作成するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. テンプレートを作成するドメインを選択します。
- 3. [**テンプレートの作成**]ボタンをクリックします。[テンプレートの作成]ダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成	×
新規テンプレートを作成します―――――	-
⊙ 空のテンプレートを作成する	
○ 既存のテンプレートからカスタマイズをコピーしてテンプレートを作成する	
○ 既存のブロジェクトからカスタマイズをコピーしてテンプレートを作成する	
○ エクスポートされたテンブレート ファイルからデータをインポートしてテンブレート を作成する	
◆ 戻る ◆ 次へ キャンセル ヘルプ	

4. [**空のテンプレートを作成する**]を選択し, [**次へ**]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成	X
テンプレート名:	
所在ドメイン:	DEFAULT
🔶 戻	る 🕪 次へ キャンセル ヘルプ

- 5. [**テンプレート名**]ボックスに, テンプレートの名前を入力します。テンプレート名は 30 文字以内に する必要があります。また, 次の文字はいずれも使用できません。=~`!@#\$%^&*()+| {}[]:';"<>?,./\-
- 6. [所在ドメイン]ボックスでドメインを選択します。

ヒント: 作成したテンプレートは、ドラッグアンドドロップ操作を使用して、プロジェクトのリストの別のドメインに移動できます。

7. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成		×
データベースの種類		-
⊖ Oracle		
⊙ MS-SQL		
DB サーバ		
サーバ名:	127.0.0.01	
DB 管理者 ユーザ :	Sa	
DB 管理者バスワード :	****	
□Unicode として作成		
◆ 戻る ◆ 次へ	キャンセル ヘルブ	

8. [**データベースの種類**]で, [Oracle]または[MS-SQL]を選択します。

ドメインに対して定義された標準設定値が[サーバ名], [DB 管理者ユーザ], [DB 管理者パ スワード]に表示されます。追加のデータベース・サーバが定義されている場合は, [サーバ名]リ ストから別の名前を選択できます。

9. [Unicode として作成]をクリックすると、テンプレートがUnicode として作成されます。

注: [Unicode として作成] チェックボックスが表示されるのは, MS-SQL Server で空のテンプレートから新しいテンプレートを作成する場合のみです。Unicode は, 多言語サポートに対応する MS-SQL の機能です。Oracle では, サーバのインストール時に多言語サポートが定義されます。

10. [**次へ**]をクリックします。

選択したデータベース・サーバでテキスト検索機能が有効になっていない場合は、メッセージ・ ボックスが開きます。このメッセージには、その処理の終了後にテキスト検索機能を有効にできる ことが示されます。テキスト検索を有効にする方法の詳細については、「テキスト検索の設定」 (184ページ)を参照してください。 11. Microsoft SQL テンプレートを作成している場合は、手順 **12** に進みます。Oracle テンプレートの 場合は、次のダイアログ・ボックスが開きます。

5	テンプレートの)作成								X
		表領却	劇こ作成	:		USERS	(22.3 Mb	Free)	•	
		一時	表領域	:		TEMP			-	
		+	戻る	>	次へ	キャン	ยม	ヘルプ		

[表領域に作成]ボックスで、新規テンプレートを格納できるだけの領域が十分にあるストレージ 場所を選択します。ストレージ場所として UNDO は使用しないでください。

[一時表領域]ボックスで、新規テンプレートを格納できるだけの領域が十分にある一時ストレージ場所を選択します。

[**次へ**]をクリックします。

12. [テンプレート管理者を追加]ダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成		×
テンプレート管理者を追加		
選択したテンプレート管理者	利用可能なユー	т
	🗢 ኇ 検索	
	ユーザ名	名前
	almadmin	
	depro	株式会社デブロ
	test	Lilico
メモ: テンブレートの作成後に、テンブレート管理者を調	割り当てることも	できます。
🔶 戻る 🄶 次へ キャンセル	レーヘルプ	

[テンプレート管理者を選択]には、テンプレート管理者に割り当てられるユーザが表示されます。[利用可能なユーザ]リストには、テンプレートに対して利用可能なユーザが表示されます。 テンプレート管理者を割り当てると、そのユーザが[利用可能なユーザ]リストから[テンプレート管 理者を選択]リストに移動します。テンプレート管理者ユーザは、テンプレート・プロジェクトをカス タマイズし, テンプレート・カスタマイズをリンク済みプロジェクトに適用できます。詳細については, 「クロス・プロジェクト・カスタマイズ」(345ページ)を参照してください。

- 更新:[更新]ボタン をクリックすると、利用可能なユーザのリストが更新されます。
- 検索:ユーザの名前を[検索]ボックスに入力し, [検索]ボタン をクリックすると, [利用可能なユーザ]リストを検索できます。
- 選択されているユーザの追加:テンプレート管理者に割り当てるユーザを選択し、[選択されているユーザの追加]ボタンをクリックします。あるいは、ユーザ名をダブルクリックします。選択したユーザが[テンプレート管理者を選択]リストに移動します。
- 削除: [テンプレート管理者を選択]リストからユーザを削除するには、そのユーザ名を右ク リックし、[削除]をクリックします。

テンプレート管理者の割り当ては、テンプレートの作成後に行うこともできます。詳細について は、「プロジェクト管理者の割り当て」(82ページ)を参照してください。

13. [次へ]をクリックします。サイトのALM エディションで提供されている拡張機能を有効化できます。

シプレートの作成		×
プロジェクトでアクティブにする拡張機能を選択: You can also enable extensions after creating a template, but yo extensions after a template is created.	u cannot disable	
拡張機能名	有効にする	٦
ALM Lab Extension for functional and performance testing		
Application Lifecycle Intelligence 2.6		
Service Test Management Extension		
ライセンス ステータス		
説明		
	7	
◆ 戻る		

有効にする拡張機能の[有効にする]チェック・ボックスを選択します。

注:

- プロジェクトに対して有効にした拡張機能を、後で無効にすることはできません。したがって、必要な拡張機能のみを有効にすることをお勧めします。不要な拡張機能を有効にすると、パフォーマンスが低下する原因になり、ディスク容量の無駄になります。
- 拡張機能間を移動すると、[ライセンス ステータス]にそれぞれのライセンス・ステータス情

報が表示されます。

サーバ上にライセンスがない拡張機能は、灰色で表示されます。拡張機能は、ライセンスがない状態でも有効化できますが、その追加機能については、ライセンスの取得後に利用可能になります。

- ラボ管理 または Performance Center を使用する場合は、ALM ラボ拡張を有効化します。詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
- プロジェクトの拡張機能は、プロジェクトの作成後にも有効にできます。詳細については、「プロジェクトに対する拡張機能の有効化」(83ページ)を参照してください。
- 14. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

5	テンプレートの作成 🛛 🕹 🔀
	新規 MS-SQL テンプレート を作成します。
	テンプレート 名:NewTemplate 次のドメインを使用:DEFAULT
	次のサーバを使用:DEPROXP13
	レージョングレートの起動
	◆ 戻る ✓ 作成 キャンセル ヘルブ

テンプレートの詳細を確認します。詳細情報のいずれかを変更するには、 [**戻る**]をクリックします。

- 「テンプレートの起動]を選択すると、テンプレートがアクティブになります。HP Application Lifecycle Management ログイン・ウィンド ウで指定 できるのは、アクティブにされたテンプレートのみ です。詳細については、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ化」(98ページ)を参照してください。
- 16. [バージョン管理を有効にする]を選択すると、テンプレートのバージョン管理が有効になります。 バージョン管理は、テンプレートの作成後に有効にすることもできます。詳細については、「プロ ジェクトのバージョン管理の有効化と無効化」(99ページ)を参照してください。
- 17. [作成]をクリックします。新しいテンプレートが、[テンプレートプロジェクト]のプロジェクトのリストに 追加されます。

既存テンプレートからのテンプレートの作成

既存のテンプレートをコピーして, テンプレート・プロジェクトを作成できます。このオプションでは, ソース・テンプレートのカスタマイズ内容とプロジェクト・データの両方がコピーされます。

注:新しいテンプレートは、コピーしたテンプレートのUnicodeまたはASCII定義を継承します。

バージョン管理:バージョン管理が有効なテンプレートをコピーすると,作成される新しいテンプレートで もバージョン管理が有効になります。

既存のテンプレートからテンプレートを作成するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[サイトのプロジェクト]タブをクリックします。
- 2. テンプレートを作成するドメインを選択します。
- 3. [**テンプレートの作成**]ボタンをクリックします。[テンプレートの作成]ダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成	x
新規テンプレートを作成します――――	-
⊙ 空のテンプレートを作成する	
○ 既存のテンプレートからカスタマイズをコピーしてテンプレートを作成する	
○ 既存のプロジェクトからカスタマイズをコピーしてテンプレートを作成する	
○ エクスボートされたテンプレート ファイルからデータをインボートしてテンプレート を作成する	
◆ 戻る ◆ 次へ キャンセル ヘルブ	

4. [既存のテンプレートからカスタマイズをコピーしてテンプレートを作成する]オプションを選択し, [次へ]をクリックします。[テンプレートのコピー]ダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成		<
テンプレートのコピー-		·
次のテンプレートからコ	וצ':	
ドメイン:	•	
テンプレート:	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
← 戻る	5 - 次へ キャンセル ヘルプ	

- 5. [ドメイン]ボックスで, コピーするテンプレートがあるドメインを選択します。
- 6. [**テンプレート**]ボックスで、コピーするテンプレートを選択します。
- 7. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成		×
テンプレート名:		
所在ドメイン:	DEFAULT	
🔶 戻	る 🔷 次へ キャンセル ヘルプ	

- [テンプレート名]ボックスに、テンプレートの名前を入力します。テンプレート名は30文字以内にする必要があります。また、次の文字はいずれも使用できません。=~`!@#\$%^&*()+|
 {}[]:';"<>?,./\-
- 9. [所在ドメイン]ボックスでドメインを選択します。

ヒント: 作成したテンプレートは、ドラッグアンドドロップ操作を使用して、プロジェクトのリストの別のドメインに移動できます。

10. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成		×
データベースの種類―――		-
⊖ Oracle		
⊙ MS-SQL		
-		
DB サーバ		
サーバタ:	DEPROXP13	
DB 管理者 ユーザ :	sa	
DB 管理者バスワード :	****	
<u>- ⊬</u> 3 <mark>-</mark>		

11. [データベースの種類]で, [Oracle]または[MS-SQL]を選択します。

ドメインに対して定義された標準設定値が[サーバ名], [DB 管理者ユーザ], [DB 管理者パ スワード]に表示されます。追加のデータベース・サーバが定義されている場合は, [サーバ名]リ ストから別の名前を選択できます。

12. [**次へ**]をクリックします。

注: 選択したデータベース・サーバでテキスト検索機能が有効になっていない場合は、メッ セージ・ボックスが開きます。このメッセージには、その処理の終了後にテキスト検索機能を 有効にできることが示されます。テキスト検索を有効にする方法の詳細については、「テキス ト検索の設定」(184ページ)を参照してください。 Microsoft SQL テンプレートを作成している場合は、手順 **13** に進みます。Oracle テンプレートの 場合は、次のダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの	0作成		×
	表領域に作成:	USERS (22.3 Mb Free)	
	一時表領域:	TEMP	
	🔶 戻る 🔶 次へ	キャンセル ヘルプ	

[表領域に作成]ボックスで,新規テンプレートを格納できるだけの領域が十分にあるストレージ 場所を選択します。

ストレージ場所として UNDO は使用しないでください。

[一時表領域]ボックスで,新規テンプレートを格納できるだけの領域が十分にある一時ストレージ場所を選択します。

[**次へ**]をクリックします。

13. [テンプレート管理者を追加]ダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成		×
テンプレート管理者を追加		
選択したテンプレート管理者	利用可能なユー	ť l
	🗢 ኇ 検索	M
	ユーザ名	名前
	almadmin	
	depro	株式会社デブロ
	test	Lilico
メモ: テンプレートの作成後に、テンプレート管理者を割	1り当てることも	できます。
🔶 戻る 🔶 次へ キャンセル	/ ヘルプ	

[テンプレート管理者を選択]には、テンプレート管理者に割り当てられるユーザが表示されます。[利用可能なユーザ]リストには、テンプレートに対して利用可能なユーザが表示されます。

テンプレート管理者を割り当てると、そのユーザが[利用可能なユーザ]リストから[テンプレート管理者を選択]リストに移動します。テンプレート管理者ユーザは、テンプレート・プロジェクトをカスタマイズし、テンプレート・カスタマイズをリンク済みプロジェクトに適用できます。詳細については、 「クロス・プロジェクト・カスタマイズ」(345ページ)を参照してください。

- 検索:ユーザの名前を[検索]ボックスに入力し, [検索]ボタン をクリックすると, [利用可能なユーザ]リストを検索できます。
- 選択されているユーザの追加:テンプレート管理者に割り当てるユーザを選択し、[選択されているユーザの追加]ボタンをクリックします。あるいは、ユーザ名をダブルクリックします。選択したユーザが[テンプレート管理者を選択]リストに移動します。
- 削除: [テンプレート管理者を選択]リストからユーザを削除するには、そのユーザ名を右ク リックし、[削除]をクリックします。

テンプレート管理者の割り当ては, テンプレートの作成後に行うこともできます。詳細については, 「プロジェクト管理者の割り当て」(82ページ)を参照してください。

14. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

5	テンプレートの作成 🛛 🛛 🗡	1			
	新規 MS-SQL テンプレート を作成します。				
	テンプレート 名:sample 次のドメインを使用:DEFAULT				
	次のサーバを使用 : 12700.01				
	テンプレート DEFAULT¥template001 からカスタマイズをコピーします。				
	☑ テンプレートの起動				
	□ バージョン管理を有効にする				
	<table-cell-rows> 戻る ✔ 作成 キャンセル ヘルプ</table-cell-rows>				

テンプレートの詳細を確認します。詳細情報を変更するには、[戻る]をクリックします。

- 15. [テンプレートの起動]を選択すると、テンプレートがアクティブになります。HP Application Lifecycle Management ログイン・ウィンド ウで指定 できるのは、アクティブにされたテンプレートのみ です。詳細については、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ化」(98ページ)を参照してくださ い。
- 16. [作成]をクリックします。新しいテンプレートが、 [テンプレート プロジェクト]のプロジェクトのリストに 追加されます。

既存プロジェクトからのテンプレートの作成

既存のプロジェクトのカスタマイズ内容をコピーして,テンプレート・プロジェクトを作成できます。このオ プションでは,プロジェクトのカスタマイズ内容はコピーされますが,プロジェクト・データはコピーされません。

新しく作成したテンプレートは、コピー元のプロジェクトにリンクするように選択できます。そうすることで、 テンプレート管理者がテンプレート・カスタマイズの変更内容をリンク済みプロジェクトに適用できます。

注:

- テンプレートの作成元のプロジェクトにワークフロー・スクリプトが含まれている場合は、そのスクリプトをテンプレートの作成後に変換する必要があります。そうすることで、テンプレート・ワークフローのカスタマイズ内容をテンプレート管理者がリンク済みプロジェクトに適用できます。詳細については、HP ソフトウェアのセルフ・ソルブ技術情報の記事 KM494331 (http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM494331)を参照してください。
- バージョン管理:バージョン管理が有効なプロジェクトをコピーすると,作成される新しいテンプ レートでもバージョン管理が有効になります。

既存のプロジェクトからテンプレートを作成するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. テンプレートを作成するドメインを選択します。
- 3. [**テンプレートの作成**]ボタンをクリックします。[テンプレートの作成]ダイアログ・ボックスが開きます。



4. [既存のプロジェクトからカスタマイズをコピーしてテンプレートを作成する]オプションを選択し, [次へ]をクリックします。[プロジェクトのカスタマイズからコピー]ダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成				
プロジェクトのカスタマイズからコピー				
次のブロジェクトからカスタマイズをコピー:				
ドメイン:				
プロジェクト:				
□ 選択したプロジェクトをこのテンプレートにリンク				
🗲 戻る 🔶 次へ キャンセル ヘルブ				

- 5. [ドメイン]ボックスで, コピーするプロジェクトがあるドメインを選択します。
- 6. [**プロジェクト**]ボックスで、コピーするプロジェクトを選択します。
- 7. [選択したプロジェクトをこのテンプレートにリンク]を選択して、新しく作成するテンプレートにプロ ジェクトをリンクします。そうすることで、テンプレート管理者がテンプレート・カスタマイズの変更内 容をリンク済みプロジェクトに適用できます。

注: テンプレートにリンクしたプロジェクトには、テンプレート管理者がテンプレート・カスタマイズ を適用する必要があります。これにより、テンプレートのカスタマイズ内容が、リンク済みのプロ ジェクトに適用されます。また、適用されたカスタマイズ内容は、プロジェクト内で読み取り専 用になります。詳細については、「リンクされたプロジェクトへのテンプレートのカスタマイズの適 用」(351ページ)を参照してください。

8. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成		×
テンブレート名:		
所在ドメイン:	DEFAULT	
◆ 戻	える → 次へ キャンセル ヘルプ	

- [テンプレート名]ボックスにテンプレートの名前を入力します。テンプレート名は30文字以内にする必要があります。また、次の文字はいずれも使用できません。=~`!@#\$%^&*()+|{}
 []:';"<>?,./\-
- 10. [所在ドメイン]ボックスでドメインを選択します。

ヒント: 作成したテンプレートは、ドラッグアンドドロップ操作を使用して、プロジェクトのリストの別のドメインに移動できます。

11. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成	×
データベースの種類―――	
⊖ Oracle	
⊛ MS-SQL	
DB サーバ	
サーバ名:	DEPROXP13
DB 管理者 ユーザ:	Sa
DB 管理者バスワード:	*****
◆ 戻る ◆	次へ キャンセル ヘルブ

12. [データベースの種類]で, [Oracle]または[MS-SQL]を選択します。

ドメインに対して定義された標準設定値が[サーバ名], [DB 管理者ユーザ], [DB 管理者パ スワード]に表示されます。追加のデータベース・サーバが定義されている場合は, [サーバ名]リ ストから別の名前を選択できます。

13. [次へ]をクリックします。

選択したデータベース・サーバでテキスト検索機能が有効になっていない場合は、メッセージ・ ボックスが開きます。このメッセージには、その処理の終了後にテキスト検索機能を有効にできる ことが示されます。テキスト検索を有効にする方法の詳細については、「テキスト検索の設定」 (184ページ)を参照してください。

14. Microsoft SQL テンプレートを作成している場合は、手順 **15** に進みます。Oracle テンプレートの 場合は、次のダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの	D作成	X
	表領域に作成:	USERS (22.3 Mb Free)
	一時表領域:	TEMP
	🔶 戻る 🔶 次へ	キャンセル ヘルプ

[表領域に作成]ボックスで、新規テンプレートを格納できるだけの領域が十分にあるストレージ場所を選択します。ストレージ場所として UNDO は使用しないでください。

[一時表領域]ボックスで,新規テンプレートを格納できるだけの領域が十分にある一時ストレージ場所を選択します。

[次へ]をクリックします。

15. [テンプレート管理者を追加]ダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成		×
テンプレート管理者を追加――――――――――――――――――――――――――――――――――――	利田可能なつられ	
	☆ 彡 検索	
	ユーザ名 almadmin	名前
	depro	株式会社デプロ Lilico
メモ: テンプレートの作成後に、テンプレート管理者を書	削り当てることも1	できます。
🔶 戻る 🔶 次へ キャンセル	レーヘルブ	

[テンプレート管理者を選択]には、テンプレート管理者に割り当てられるユーザが表示されま す。[利用可能なユーザ]リストには、テンプレートに対して利用可能なユーザが表示されます。 テンプレート管理者を割り当てると、そのユーザが[利用可能なユーザ]リストから[テンプレート管 理者を選択]リストに移動します。テンプレート管理者ユーザは、テンプレート・プロジェクトをカス タマイズし、テンプレート・カスタマイズをリンク済みプロジェクトに適用できます。詳細については、 [クロス・プロジェクト・カスタマイズ](345ページ)を参照してください。

- 検索:ユーザの名前を[検索]ボックスに入力し, [検索]ボタン をクリックすると, [利用可能なユーザ]リストを検索できます。
- 選択されているユーザの追加:テンプレート管理者に割り当てるユーザを選択し、[選択されているユーザの追加]ボタンをクリックします。あるいは、ユーザ名をダブルクリックします。選択したユーザが[テンプレート管理者を選択]リストに移動します。
- 削除: [テンプレート管理者を選択] リストからユーザを削除するには、そのユーザ名を右ク リックし、 [削除]をクリックします。

テンプレート管理者の割り当ては、テンプレートの作成後に行うこともできます。詳細については、「プロジェクト管理者の割り当て」(82ページ)を参照してください。

16. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

5	テンプレートの作成	×
	新規 MS-SQL テンプレート を作成します。	
	テンプレート 名:sample 次のドメインを使用:DEFAULT	
	次のサーバを使用:12700.01	
	DEFAULT¥test からカスタマイズをコピーします。	
	☑ テンブレートの起動	
	□ バージョン管理を有効にする	

テンプレートの詳細を確認します。詳細情報のいずれかを変更するには、 [**戻る**]をクリックします。

- 17. [テンプレートの起動]を選択すると、テンプレートがアクティブになります。HP Application Lifecycle Management ログイン・ウィンド ウで指定 できるのは、アクティブにされたテンプレートのみ です。詳細については、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ化」(98ページ)を参照してくださ い。
- 18. [作成]をクリックします。新しいテンプレートが、[テンプレートプロジェクト]のプロジェクトのリストに 追加されます。

テンプレート・プロジェクト のインポート

現在のバージョンで作成されたテンプレート・プロジェクトのエクスポート済みファイルからデータをイン ポートして,テンプレート・プロジェクトを作成できます。 プロジェクトのエクスポートの詳細については, 「プロジェクトのエクスポート」(97ページ)を参照してください。

インポートするテンプレートが同じサーバからエクスポートされたものだった場合, ALM は, 同じテンプ レートがサーバ上にすでに存在することをテンプレート ID に基づいて認識します。その場合は, 既存 のテンプレートを置き換えるか, インポート処理を取り消すことを選択できます。プロンプトの表示に対 して既存テンプレートの置き換えを選択すると, テンプレートが上書きされます。ただし, リンクされたプ ロジェクトへの接続は上書きされません。新しいテンプレートは, 同じプロジェクトにリンクされたままに なります。

注:新しいテンプレートは、インポートしたテンプレートのUnicode または ASCII 定義を継承します。

テンプレート・プロジェクトをインポートするには、次の手順を実行します。

1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。

- 2. テンプレートを作成するドメインを選択します。
- 3. [**テンプレートの作成**]ボタンをクリックします。[テンプレートの作成]ダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成	×
新規テンプレートを作成します―――	-
⊙ 空のテンブレートを作成する	
○ 既存のテンプレートからカスタマイズをコピーしてテンプレートを作成する	
○ 既存のブロジェクトからカスタマイズをコピーしてテンプレートを作成する	
○ エクスポートされたテンプレート ファイルからデータをインポートしてテンプレート を作成する	
🛶 戻る 🔶 次へ キャンセル ヘルプ	

4. [エクスポートされたテンプレート ファイルからデータをインポートしてテンプレートを作成する]を選択します。[テンプレートの作成:インポート対象ファイルの選択]ダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの インポートヌ	作成 対象ファイルの	選択———			<u>x</u>
	テンプレート	のインポート元	:		
	🔶 戻る	→ 次へ	キャンセル] ヘルブ]

- 5. [**テンプレートのインポート元**]ボックスの右にある参照ボタンをクリックし,インポートするテンプレート・プロジェクトを指定します。ファイルを[開く]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 6. ディレクトリを探し、インポートする ALM プロジェクトのエクスポート・ファイルを選択します。[**開く**] をクリックします。選択したファイルが[**テンプレートのインポート元**]ボックスに表示されます。
7. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成		×
データベースの種類―――		-
⊖ Oracle		
⊙ MS-SQL		
DB サーバ		
サーバ名:	DEPROXP13	
DB 管理者 ユーザ :	Sa	
DB 管理者バスワード :	****	
🔶 戻る 🔶	次へ キャンセル ヘルブ	

8. [データベースの種類]で, [Oracle]または[MS-SQL]を選択します。

ドメインに対して定義された標準設定値が[サーバ名], [DB 管理者ユーザ], [DB 管理者パ スワード]に表示されます。追加のデータベース・サーバが定義されている場合は, [サーバ名]リ ストから別の名前を選択できます。

9. [**次へ**]をクリックします。

選択したデータベース・サーバでテキスト検索機能が有効になっていない場合は、メッセージ・ ボックスが開きます。このメッセージには、その処理の終了後にテキスト検索機能を有効にできる ことが示されます。テキスト検索を有効にする方法の詳細については、「テキスト検索の設定」 (184ページ)を参照してください。

10. Microsoft SQL テンプレートを作成している場合は、手順 **11** に進みます。Oracle テンプレートの 場合は、次のダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成	X
表領域に作成:	USERS (22.3 Mb Free)
一時表領域:	TEMP
🔶 戻る 🔶 次へ	キャンセル ヘルプ

[表領域に作成]ボックスで、新規テンプレートを格納できるだけの領域が十分にあるストレージ場所を選択します。ストレージ場所として UNDO は使用しないでください。

[一時表領域]ボックスで、新規テンプレートを格納できるだけの領域が十分にある一時ストレージ場所を選択します。

[**次へ**]をクリックします。

11. [テンプレート管理者を追加]ダイアログ・ボックスが開きます。

テンプレートの作成		×
テンプレート管理者を追加―――		
選択したテンプレート管理者	利用可能なユー	т
	🗢 🕟 検索	
	ユーザ名	名前
	almadmin	
	depro	株式会社デプロ
	test	Lilico
メモ: テンブレートの作成後に、テンブレート管理者を書	削り当てることも	できます。
🔶 戻る 🄶 次へ キャンセル	レーヘルプ	

[テンプレート管理者を選択]には、テンプレート管理者に割り当てられるユーザが表示されま す。[利用可能なユーザ]リストには、テンプレートに対して利用可能なユーザが表示されます。 テンプレート管理者を割り当てると、そのユーザが[利用可能なユーザ]リストから[テンプレート管 理者を選択]リストに移動します。テンプレート管理者ユーザは、テンプレート・プロジェクトをカス タマイズし、テンプレート・カスタマイズをリンク済みプロジェクトに適用できます。詳細については、 [クロス・プロジェクト・カスタマイズ](345ページ)を参照してください。

- 更新:[更新]ボタン 2000をクリックすると、利用可能なユーザのリストが更新されます。
- 検索:ユーザの名前を[検索]ボックスに入力し, [検索]ボタン をクリックすると, [利用可能なユーザ]リストを検索できます。
- 選択されているユーザの追加:テンプレート管理者に割り当てるユーザを選択し、[選択されているユーザの追加]ボタンをクリックします。あるいは、ユーザ名をダブルクリックします。選択したユーザが[テンプレート管理者を選択]リストに移動します。
- 削除: [テンプレート管理者を選択]リストからユーザを削除するには、そのユーザ名を右ク リックし、[削除]をクリックします。

テンプレート管理者の割り当ては、テンプレートの作成後に行うこともできます。詳細については、「プロジェクト管理者の割り当て」(82ページ)を参照してください。

12. [次へ]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

5	シブレートの作成 🛛 🔀
	新規 MS-SQL テンプレート を作成します。
	テンプレート 名 : test23 汰のドメインを使用 : DEFAULT
	次のサーバを使用: 127.0.0.01
	インボート元: D:¥sample.gcp
	□ テンプレートの起動
	□ バージョン管理を有効にする
	◆ 戻る ✓ 作成 キャンセル ヘルプ

テンプレートの詳細を確認します。詳細情報のいずれかを変更するには、[**戻る**]をクリックします。

- 「テンプレートの起動]を選択すると、テンプレートがアクティブになります。HP Application Lifecycle Management ログイン・ウィンド ウで指定できるのは、アクティブにされたテンプレートのみ です。詳細については、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ化」(98ページ)を参照してください。
- 14. [バージョン管理を有効にする]を選択すると、テンプレートのバージョン管理が有効になります。 バージョン管理は、テンプレートの作成後に有効にすることもできます。詳細については、「プロ ジェクトのバージョン管理の有効化と無効化」(99ページ)を参照してください。
- 15. [作成]をクリックします。新しいテンプレートが、[テンプレートプロジェクト]のプロジェクトのリストに 追加されます。

プロジェクト へのテンプレート のリンク

テンプレートを, クロス・プロジェクト・カスタマイズの一環としてプロジェクトにリンクします。テンプレート管理者は, クロス・プロジェクト・カスタマイズを使用して, リンク済みのプロジェクトにテンプレートのカスタマイズ内容を適用できます。テンプレートは複数のプロジェクトにリンクできますが, プロジェクトは1つのテンプレートにのみリンクできます。詳細については, 「クロス・プロジェクト・カスタマイズ」(345ページ)を参照してください。

注: プロジェクトにリンクしたテンプレートには、テンプレート管理者がテンプレート・カスタマイズを適用する必要があります。これにより、テンプレートのカスタマイズ内容が、リンク済みのプロジェクトに適用されます。また、適用されたカスタマイズ内容は、プロジェクト内で読み取り専用になります。詳細については、「リンクされたプロジェクトへのテンプレートのカスタマイズの適用」(351ページ)を参照してください。

テンプレートは、プロジェクトの作成時にプロジェクトにリンクすることもできます。詳細については、「プロジェクトの作成」(35ページ)を参照してください。既存のプロジェクトからテンプレートを作成するときに、テンプレートをプロジェクトにリンクする方法については、「既存プロジェクトからのテンプレートの作成」(66ページ)を参照してください。

テンプレートをプロジェクトにリンクするには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- プロジェクトのリストから、テンプレート・プロジェクトを選択します。右の表示枠の[リンクされている プロジェクト]タブをクリックします。リンクされているプロジェクトのリストが表示されます。
- 3. [追加]ボタンをクリックします。 右の表示枠にプロジェクトのリストが表示されます。

サイトのプロジェクト サイトのユーザ サイ	~トの接続 ライセンス サーバ DB サーバ サイト設定 サイト分析
34 ドメインの作成 最ポドメインの削除 多・	🍟 ブロジェクトの作成 🖄 テンブレートの作成 🗙 削除 🗈 名前の変更 🥒 編集 💙
□- み DEFAULT □	NewTemplate
B-∰ ブロジェクト B-∰ NEW_DOMAIN	テンブレート 詳細 テンブレート ユーザ リンクされているブロジェクト
	ドメイン ドメイン ドメイン ドメークト 日 ジェクト 田 ジェクト 田 ジュ DEFAULT 田 こ フロジェクト 田 こ フロジェクト

- 4. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択し、 [選択されているプロジェクトの追加]ボタンをク リックします。選択したプロジェクトがリンクされているプロジェクトのリストに表示されます。
- 5. リンクされているプロジェクトのリスト内のプロジェクトは、 [検索]ボックスにプロジェクト名を入力 し、 [検索]ボタンをクリックして、検索できます。カラムの見出しをクリックして、リンクされているプ ロジェクトのリストのプロジェクトのソート順を変更することもできます。
- テンプレートからプロジェクトを削除するには、リンクされているプロジェクトのリストでプロジェクトを 選択します。複数のプロジェクトを削除するには、CTRL キーを押してプロジェクトを選択します。
 [削除]をクリックします。[OK]をクリックして確定します。これで、プロジェクトがリンクされているプロジェクトのリストから削除され、テンプレートにもリンクされなくなります。
- 7. リンクされているプロジェクトのリストまたはプロジェクトのリストを更新するには、それぞれのリストの 上にある[**更新**]ボタンをクリックします。

プロジェクトの詳細の更新

データベースの種類, プロジェクトのディレクトリなどのプロジェクトの詳細は, [プロジェクト詳細]タブで 表示できます。このタブでは, プロジェクトの各種設定を編集することもできます。たとえば, 接続文字 列の編集, プロジェクトに同時接続できるユーザ数の変更, 不具合電子メールの自動送信の有効 化などが可能です。更新されたプロジェクト詳細は, プロジェクトの復元時にプロジェクトの更新デー タを使用できるように, dbid.xml ファイルに出力されます。詳細については, 「プロジェクトへのアクセス の復元」(106ページ)を参照してください。 **ヒント:** プロジェクトは、ドラッグアンドドロップ操作を使用して、[プロジェクト] リスト内の別のドメインに移動できます。これにより、プロジェクトの物理的な場所が変更されることはありません。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ:テンプレート・プロジェクトの作業では, [テンプレートの詳細]タブから テンプレートの詳細を更新します。

ALM のエディション: テンプレート・プロジェクトは, Quality Center Enterprise Edition では利用 できません。ALM エディションとその機能の詳細については、 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

プロジェクトの詳細を更新するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。 右の表示枠の[プロジェクト詳細]タブを選択します。 プロジェクトの詳細が表示されます。

サイトのブロジェクト ラボ管理 サイトのコ	2ーザ サイトの接続 ライセンス サーバ 00 サーバ サイト設定 サイト分析 ブロジェクトの計画と過数
※ドメインの作成 品ドメインの削除 多・	🔰 プロジェクトの作成 🗐 テンプレートの作成 🗙 削除 🗈 名前の変更 🦯 編集 💷 Ping コマンド 🖌 🐴 📁 🗵 🍣・ 🥥 🥂 🥇
다	プロジェクト 1時時 プロジェクト ユーザ プロジェクト 装装線装 プロジェクト データペース
	メンテナンスの状態: アイドル Unicode サポート: N
	据载文字开注: dc:mercarysqlaever//?200911433 日
	プロジェクト ディレクトリ: D#ProgramDataWHPWALM#repository#qcWALMTEST_3#TEST
	を示言語: Japanese マ テキスト検索の有効化/再構築
	114231-100-510-517
	● リボントリックリー ファップを実行
	プロジェクトの計画と適時
	☑ 自動計算の状態 目 今すぐ実行
	その他 □ 愛すメールを名動活信 9才で電子メールを送信 次のデンプレートにリンク 大手探、特徴
	[2395: 1935-010-04-19 102706 ■

注: プロジェクトが非アクティブな場合は、プロジェクト・アイコンが赤で表示されます。アクティブにするには、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ化」(98ページ)を参照してください。

3. [プロジェクト データベース]で,次のプロジェクト詳細を確認します。

フィールド	説明
データベースの種 類	データベースの種類は MS-SQL または Oracle です。
データベース名	プロジェクト名(データベースで定義されている名前)。
データベース・サー バ	データベースがあるデータベース・サーバの名前。

フィールド	説明
次の Project か ら作成	プロジェクトは, このプロジェクトからコピーされました。値が[空のデータベー ス]の場合は, プロジェクトがコピーされていないことを示します。詳細につ いては, 「プロジェクトのコピー」(42ページ)を参照してください。
次 のテンプレート から作 成	プロジェクトは、 このテンプレート からコピーされました。
次のプロジェクト から復元	プロジェクトは、このプロジェクトから復元されました。詳細については、「プロジェクトへのアクセスの復元」(106ページ)を参照してください。
次のドメインから 作成	プロジェクトは、 このドメインからコピーされました。
次のドメインから 復元	プロジェクトは, このドメインから復元されました。詳細については,「プロ ジェクトへのアクセスの復元」(106ページ)を参照してください。
メン テナ ンスの状 態	このプロジェクトで保守作業が実行中かどうかを示します。この作業に は、プロジェクトの検証、修復、アップグレード、再調整などがあります。 有効な値は次のとおりです。 アイドル :このプロジェクトで実行中の保守作業はありません。 破損 :プロジェクトが壊れているため、保守作業を完了できません。再 開するには、このプロジェクトのバックアップ・コピーを復元する必要があ ります。 メンテナンス作業中 :このプロジェクトで保守作業を実行中です。 プロジェクトの保守の詳細については、「プロジェクトの新規バージョンへの アップグレード」(113ページ)を参照してください。
Unicode サポー ト	このプロジェクトが Unicode をサポート するかどうかを示します。
接続文字列	接続文字列。接続文字列を変更するには、「接続文字列の編集」 (105ページ)を参照してください。
DB ユーザ・パス ワード	データベースがある Oracle サーバのユーザ・パスワード。パスワードを変更 するには、「データベース・サーバのプロパティの変更」(182ページ)を参照 してください。
プロジェクト・ディ レクトリ	ファイル・システム内 でのプロジェクト・リポジトリの場 所 。

フィールド	説明
検索言語	テキスト検索を実行するための検索言語を示します。詳細については, 「プロジェクトのテキスト検索言語の選択」(186ページ)を参照してください。
例外ファイル	アップグレード・プロセスの実行時に使用する例外ファイルの場所を示しま す。詳細については、「ドメインとプロジェクトのアップグレード」(126ページ) を参照してください。

 [リポジトリのクリーンアップ]では、プロジェクト・リポジトリのクリーンアップ・スケジュールを早めたり 遅らせたりします。プロジェクト・リポジトリのクリーンアップの詳細については、「プロジェクト・リポジ トリのクリーンアップ」(88ページ)を参照してください。

利用可能なボタンをクリックします。

- リポジトリ・クリーンアップを促進:現在のプロジェクトのリポジトリをできるだけ早くクリーンアップ するようにALMに指示します。
- リポジトリ・クリーンアップを延期:現在のプロジェクトのリポジトリのクリーンアップを延期するよう にALMに指示します。または、実行中のクリーンアップを停止するように指示します。
- 5. [プロジェクトの計画と追跡]では、次のプロジェクト詳細を確認します。

フィールド	説明
自動計算の状 態	このプロジェクトが、サイトの毎日のプロジェクト計画および追跡の自動計算の対象となっているかどうかを示します。詳細については、「プロジェクトの自動計算の有効化と無効化」(236ページ)を参照してください。
今すぐ実行	プロジェクトの計画と追跡の計算を手動で開始して、スケジュールが設定された次回の計算を待たずに、計算結果を更新できます。詳細については、「プロジェクトの計算の手動での開始」(237ページ)を参照してください。

ALM のエディション: プロジェクトの計画と追跡に関連する機能は、ALM Edition でのみ利用できます。

6. [その他]で、[電子メールを自動送信]を選択し、プロジェクトに対するメール設定を有効にします。これにより、設定された不具合フィールドが更新されるたびに、電子メールが指定ユーザに送信されます。このチェック・ボックスが選択されていない場合は、プロジェクトに対するメール設定に効果はなく、電子メールは送信されません。メールの設定の詳細については、「自動メールの設定」(325ページ)を参照してください。

不具合メッセージは,指定された時間間隔で自動的に送信されます。時間間隔は,[**サイト** 設定]タブで「MAIL_INTERVAL」(193ページ)パラメータを使用して編集できます。また,電子 メールに添付ファイルや履歴を含めるかどうかも指定できます。詳細については,「ALM 設定パ ラメータの指定」(189ページ)を参照してください。

現行の時間間隔の間にたまった不具合メッセージを手動で送信するには、「今すぐ電子メール を送信]ボタンをクリックします。「電子メールを自動送信]チェック・ボックスが選択されていない場合は、不具合メッセージが蓄積されないため、このボタンは何も行いません。

- 7. たとえば、プロジェクトの作成、アップグレード、移行などを行い、[サイトのプロジェクト]タブのプロジェクトのリストにプロジェクトを追加した後で[DB サーバ]タブの[テキスト検索]リンクを有効にする場合は、[テキスト検索の有効化/再構築]ボタンもクリックする必要があります。詳細については、「ALM でのテキスト検索の有効化」(185ページ)を参照してください。
- 8. [次のテンプレートにリンク]フィールドには、プロジェクトがリンクされているテンプレートの名前が表示されます。リンクされたテンプレートの詳細については、「リンクされたテンプレートの詳細の更新」(354ページ)を参照してください。
- 9. プロジェクトに同時にアクセス可能なユーザ数を変更するには、 [ユーザ制限]リンクをクリックします。 [プロジェクト ユーザの制限]ダイアログ・ボックスが開きます。

[最大]を選択し,許容する同時接続数の最大値を入力します。[OK]をクリックします。

注: プロジェクトに同時接続可能なユーザの最大数は、プロジェクトのドメインに同時接続可能なユーザ数を超えないようにしてください。詳細については、「ドメインの作成」(33ページ)を参照してください。

- 10. プロジェクトの説明を追加するには、 [説明]リンクをクリックします。 [プロジェクトの詳細の編集] ダイアログ・ボックスに説明を入力し、 [OK]をクリックします。 標準設定では、 プロジェクトの作成 日が表示されます。
- 11. [プロジェクト リストの更新]ボタン をクリックすると、選択したドメイン内のプロジェクトが更新 されます。すべてのドメインのプロジェクトを更新するには、[プロジェクトリストの更新]矢印をク リックし、[すべてのドメインを更新]を選択します。
- 12. ユーザをプロジェクトに割り当てるには、「プロジェクトへのユーザの割り当て」(80ページ)を参照してください。

プロジェクトへのユーザの割り当て

サイト管理者は、プロジェクトやテンプレート・プロジェクトにログオンできるユーザを定義して、それらの プロジェクトへのアクセスを制御できます。プロジェクトにユーザを割り当てる処理は、ユーザのリストから 行うか、既存のプロジェクトからユーザをコピーして行います。ユーザをプロジェクト管理者として割り当 てることもできます。プロジェクト管理者の割り当ての詳細については、「プロジェクト管理者の割り当 て」(82ページ)を参照してください。

ユーザがあるプロジェクトを使用しなくなった場合は、そのユーザをプロジェクトから削除して、プロジェクトのセキュリティを確保します。プロジェクトからユーザを削除しても、ユーザのリストからそのユーザが削

除されることはありません。ユーザをユーザのリストから削除するには、「ユーザの削除」(164ページ)の 手順に従って[サイトのユーザ]タブで削除する必要があります。

注:

- プロジェクト管理者はプロジェクトからユーザを割り当てまたは削除し、[プロジェクトカスタマイズ]ウィンドウからユーザ権限を変更します。詳細については、「プロジェクトのユーザ管理」(283ページ)を参照してください。
- プロジェクトをユーザに割り当てる処理は、[サイトのユーザ]タブで実行できます。詳細については、「ユーザへのプロジェクトの割り当て」(162ページ)を参照してください。
- 「サイト管理」のプロジェクトに対してユーザが割り当てられるか削除されると、自動電子メール通知がプロジェクト管理者に送信されます。[サイト設定]タブで「AUTO_MAIL_USER_NOTIFICATION」(197ページ)パラメータを追加すると、自動通知を利用不可にすることができます。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ:テンプレート・プロジェクトを処理している場合は、ユーザを[テンプレートユーザ]タブから割り当てます。

ALM のエディション: テンプレート・プロジェクトは, Quality Center Enterprise Edition では利用 できません。ALM エディションとその機能の詳細については、 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

ユーザをプロジェクトに割り当てるには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。 右の表示枠の[プロジェクトユーザ]タブを選択します。

選択したプロジェクトのユーザが表示されます。

サイトのプロジェクト サイトのユーザ サイ	トの接続 ライセンス サーバ DB サーバ サイト設定 サイト分析 🔹 🚺
3. ドメインの作成 最ドメインの削除 多・	🍯 ゴロジェクトの作成 🖄 テンプレートの作成 🗙 削除 🗈 名前の変更 🦯 編集 👋
□	ALM_Demo
ALM_Demo to test2	ブロジェクト 詳細 ジロジェクト ユーザ
E - S NEW_DOMAIN	「 道加・ 長 削除 多 検索
	□ ーザ名 △ 名前 ブロジェクト管理者 alm_admin David Banks Ø alm_admin2 Roy Fields □ alm_admin3 Pamela Knight □ test Ø
	고- げ合計 4

[ユーザ名]または[名前]カラムの見出しをクリックすると、プロジェクト・ユーザのリストのユーザ名 または名前のソート順を昇順から降順に変更できます。また、[プロジェクト管理者]カラムの見 出しをクリックして、プロジェクト管理者を基準としてユーザをまとめることもできます。

- 3. [追加]ボタンをクリックし,次のいずれかのオプションを選択します。
 - ユーザリストから追加: [プロジェクト ユーザ]タブの右側にユーザのリストが表示されます。プロジェクトに割り当てるユーザを選択します。ユーザのリストの上にある[検索]ボックスに検索文字列を入力し、[検索]ボタンをクリックすると、ユーザを検索できます。
 - 別のプロジェクトからコピー: [プロジェクト ユーザ]タブの右側にプロジェクトのリストが表示されます。ユーザをコピーするには、プロジェクトをクリックしてプロジェクト・ディレクトリを展開し、ユーザ名のチェック・ボックスを選択します。プロジェクトのすべてのユーザをコピーするには、プロジェクトのチェック・ボックスを選択します。選択したユーザをすべてクリアするには、「すべてクリア]をクリックします。
- 4. ユーザのリストまたはプロジェクトのリストからユーザを選択し、 [**選択されているユーザの追加**]ボ タン をクリックします。あるいは、ユーザをダブルクリックします。 選択したユーザがプロジェクト・ ユーザのリストに表示されます。
- 5. ユーザをプロジェクトから削除するには、プロジェクト・ユーザのリストでユーザを選択し、 [削除]ボ タンをクリックします。 [はい]ボタンをクリックして、確定します。 ユーザがプロジェクト・ユーザのリスト から削除されます。
- プロジェクト・ユーザのリストまたはユーザのリストを更新するには、それぞれのリストの上にある[更新]ボタンシテクリックします。

プロジェクト管理者の割り当て

ユーザをプロジェクトに追加したら、ユーザをプロジェクト管理者(**TD 管理者**ユーザ・グループに所属 するユーザ)に割り当てることができます。 プロジェクト管理者は、 [プロジェクト カスタマイズ]ウィンドウ でプロジェクトに対する完全な権限を持っています。 詳細については、「ユーザ・グループとアクセス許 可の管理」(289ページ)を参照してください。

他のプロジェクトのユーザをコピーする場合,このプロジェクトに同じユーザ・グループがあれば、コピー元 のプロジェクトで持っていたユーザ・グループ権限を持つ状態でユーザがコピーされます。このプロジェク トにそのユーザ・グループが存在しない場合は、ビューア・グループ権限を持つ状態でユーザが追加さ れます。別のプロジェクトでプロジェクト管理者のユーザをコピーする場合,そのユーザは、このプロ ジェクトでも自動的にプロジェクト管理者に割り当てられます。

ユーザのリストからユーザをプロジェクトに追加する場合は、ビューア・グループ権限(読み取り専用権限)が付与されて追加されます。

注:新しいプロジェクトの作成時に、プロジェクト管理者を割り当てることもできます。詳細については、「プロジェクトの作成」(35ページ)を参照してください。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ:テンプレート・プロジェクトを処理している場合は、[テンプレート ユーザ]タブからユーザをテンプレート管理者として割り当てます。

ALM のエディション: テンプレート・プロジェクトは, Quality Center Enterprise Edition では利用 できません。ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

プロジェクト管理者の権限をユーザに割り当てるには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。 右の表示枠の[プロジェクト ユーザ]タブを選択します。
- 3. プロジェクト・ユーザのリストで、プロジェクト管理者に割り当てる各ユーザの[プロジェクト管理者] チェック・ボックスを選択します。
- 4. プロジェクト管理者 グループからユーザを削除するには、 [**プロジェクト管理者**] チェック・ボックス をクリアし、そのユーザをグループから削除してよいことを確認します。

プロジェクトに対する拡張機能の有効化

拡張機能は、ALMに追加機能を提供します。ALMの拡張機能のライセンスを持っている場合は、 プロジェクト単位で拡張機能を有効にすることによって追加機能が利用可能になります。

ALM 12.00 で利用可能な拡張機能の一覧表示や, ALM の拡張機能に関するドキュメントのダウン ロードは, [アドイン]ページ([**ヘルプ**]>[**アドイン**]を選択)を参照してください。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ:テンプレート・プロジェクトに対して拡張機能が有効になっている場合は、テンプレートのリンク済みプロジェクトでも拡張機能が有効になっている必要があります。リンク されたプロジェクトで、別の拡張機能を有効にすることもできます。

ALM のエディション: テンプレート・プロジェクトは, Quality Center Enterprise Edition では利用 できません。ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

プロジェクトに対する拡張機能は、プロジェクトの作成時に有効にすることもできます。詳細については、「プロジェクトの作成」(35ページ)を参照してください。

プロジェクトに対して拡張機能を有効にするには、次の手順で行います。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。 右の表示枠の[プロジェクト拡張機能]タブをクリックします。

サイトのブロジェクト サイトのユーザ サイ	トの接続 ライセンス サーバ 08 サーバ サイト設定 サイト分析 ブロジェクトの計画と識許
🛃 ドメインの作成 🔩 ドメインの削除 🛛 😏・	🍯 ブロジェクトの作成 🄄 テンブレートの作成 🗙 削除 📖 名前の変更 🥒 編集 💷 Ping コマンド 😽 💙
□ み DEFAULT □ 由 テンプレート プロジェクト	QC_Demo
□	
+ N QC_Demo ⊞-∰ test2	■ 選択した拡張機能を有効化
ia.∰ test3 ⊡.∰ NEW_DOMAIN	超発展総名 サイトにインストールされているパージョン ゴロジェクトで有効なパージョン 有効にする OC Core Sample Extension 10 CC Internal Sample Extension 10
	<u>د</u>

拡張機能リストに、選択したプロジェクトで有効になっている拡張機能が表示されます。

3. プロジェクトの1つ以上の拡張機能を有効にするには、 [拡張機能を有効にする]ボタンをク リックします。 [拡張機能を有効にする]ダイアログ・ボックスに、 ALM サーバ上の ALM エディション で利用可能な拡張機能のリストが表示されます。

ヒント: サーバ上にライセンスがない拡張機能は、灰色で表示されます。拡張機能は、ライ センスがない状態でも有効化できますが、その追加機能については、ライセンスの取得後 に利用可能になります。

拡張機能を有効にする	×
プロジェクトで有効にする追加の拡張機能を選択:	
有効化した拡張機能を無効化することはできません。	
拡張機能名	有効にする
ALM Lab Extension for functional and performance testing	
Application Lifecycle Intelligence 2.6	
Service Test Management Extension	
ALM かフライベートまたコンパブリック クラウトにテスト環境をフロビンヨニノクおよ びデプロイできるようにし、またユーザの操作によって、または操作なしでテストを スケジュールして実行できるようにします。	
有効にするキャンセルヘルブ	

4. 有効にする拡張機能の[有効にする]チェック・ボックスを選択します。

注: プロジェクトに対して有効にした拡張機能を,後で無効にすることはできません。した がって,必要な拡張機能のみを有効にすることをお勧めします。不要な拡張機能を有効 にすると,パフォーマンスが低下する原因になり,ディスク容量の無駄になります。

拡張機能間を移動すると、 [**ライセンス ステータス**] にそれぞれのライセンス・ステータス情報が表示されます。

5. [**有効にする**]をクリックします。プロジェクトで選択した拡張機能が有効になり、拡張機能の名前が拡張機能リストに表示されます。

サイトのブロジェクト ラボ管理 サイトのコ	2ーザ サイトの接続 ライセンス サーバ DB サーバ サイト設定 ▲
🕌 ドメインの作成 灥 ドメインの削除 🛛 🖧 🔻	🎁 ブロジェクトの作成 🖄 テンプレートの作成 🗙 削除 🖾 名前の変更 🥒 編集 🛛 🎇
□	TEST
È CEST I	プロジェクト 詳細 プロジェクト ユーザ プロジェクト 拡張機能
	 ALM Lab Extension for functional and performance testing Application Lifecycle Intelligence 26 Service Test Management Extension

6. 拡張機能のリストを更新するには、 [更新]ボタン をクリックします。

第3章:最適化されたプロジェクト・リポジトリの管理

ALM では、すべてのプロジェクト・ファイルは **ProjRep** ディレクトリ内のプロジェクト・リポジトリに格納されます。このディレクトリのファイルは最適化されたフォルダ構造内に保存されるため、ストレージ領域を最大限に活用できます。さらに、2つのファイルの内容がまったく同じ場合は、**ProjRep** ディレクトリに1つのみ保存されます。たとえば、同じファイルを複数のALM レコードに添付する場合、このファイルはプロジェクト・リポジトリに1回だけ保存されます。その結果、ディスク領域が大幅に減り、コピー操作にかかる時間が短くなります。

本項の内容

プロジェクト・リポジトリのクリーンアップ	88
プロジェクト・リポジトリの参照	. 88
リポジトリの再調整	. 90

プロジェクト・リポジトリのクリーンアップ

ファイルをエンティティに追加すると、プロジェクト・リポジトリに同じファイルが存在していないかどうかが チェックされます。同じファイルが見つかった場合、ファイルが物理的にリポジトリに追加されることはあ りません。

ファイルをエンティティから削除する場合は、他のエンティティがファイルをまだ使用している可能性があるため、プロジェクト・ディレクトリから直ちに削除されることはありません。

プロジェクト・リポジトリは定期的にスキャンされ、どのエンティティからも参照されなくなった古いファイル がないかどうかチェックされます。ファイルが指定期間参照されていない状態にある場合、そのファイル はプロジェクト・リポジトリから削除されます。その間隔は、標準設定ではそれぞれ7日に設定されて います。間隔は、下記のサイト設定パラメータで設定できます。

プロジェクトのリポジトリ・クリーンアップは、早めることも延期することもできます。詳細については、「プ ロジェクトの詳細の更新」(76ページ)を参照してください。

プロジェクト・リポジトリのクリーンアップ・プロセスは,次のサイト設定パラメータを定義して制御できます。

- REPOSITORY_GC_PROJECT_CLEANUP_INTERVAL:各プロジェクト・リポジトリのクリーン アップ・プロセスを実行する時間間隔を定義します。詳細については、「REPOSITORY_GC_ PROJECT_CLEANUP_INTERVAL」(219ページ)を参照してください。
- REPOSITORY_GC_DELAY_CANDIDATE_TIME: 古いファイルがスキャンで検出されてから、そのファイルが削除されるまでの経過時間を定義します。詳細については、「REPOSITORY_GC_ DELAY_CANDIDATE_TIME」(218ページ)を参照してください。
- REPOSITORY_GC_JOB_PRIORITY: クリーンアップ・プロセスの実行速度を定義します。詳細 については、「REPOSITORY_GC_JOB_PRIORITY」(218ページ)を参照してください。
- SUSPEND_REPOSITORY_GC: プロジェクト・リポジトリのクリーンアップ・プロセスを停止できま す。詳細については、「SUSPEND_REPOSITORY_GC」(223ページ)を参照してください。

プロジェクト・リポジトリの参照

プロジェクト・リポジトリ内にあるファイルの参照および編集には、FTP クライアントを使用します。UTF-8 文字 エンコーディングをサポートする標準的な FTP クライアントのほとんどに互換性があり、次のクラ イアントの互換性が確認されています。

- Filezilla
- Total Commander 内蔵 FTP クライアント
- FlashFXP

セキュリティで保護された接続を使用する FTP サービスを設定できます。詳細については、「セキュリティ保護された FTP 接続の有効化」(89ページ)を参照してください。

注意: ProjRep ディレクトリにあるフォルダ, ファイル, ファイルの内容を, FTP クライアントを使用 せずに直接変更すると, プロジェクト・リポジトリが破損して修復できなくなることがあります。

リポジトリ・ファイルの変更にFTP クライアントを使用する場合は、次の点に注意してください。

- FTP クライアントを使用することにより、リポジトリ・ファイルを安全な方法で編集できます。つまり、 リポジトリを最適化でき、一貫性が損なわれることはありません。
- ファイルを削除すると、ALM エンティティ内のコンテンツが欠落してしまいます。
- フォルダやファイルの名前を変更すると、ALM エンティティ内のコンテンツが欠落してしまいます。

プロジェクト・リポジトリを参照するには、次の手順を実行します。

- 1. FTP サービスを開始します。[サイト設定]タブで FTP_PORT パラメータを追加し,設定します。 詳細については,「FTP_PORT」(209ページ)を参照してください。
- 2. FTP サーバに接続します。FTP クライアントでは、次の接続値を使用します。

フィールド	值
ホスト	接続先となるALMサーバの名前またはIP。
ポート	FTP ポート。FTP_PORT サイト・パラメータと同じ値を指定してください。
ユーザ	ALM サイト管理者のユーザ名。
パスワード	ALMサイト管理者のパスワード。

3. リポジトリ・ファイルを参照および編集します。FTP サービスに接続すると、サイト・ドメインが一覧 表示されます。ドメインを選択してから、プロジェクトを選択します。FTP クライアントは、プロ ジェクト・リポジトリ・ディレクトリを表示します。

セキュリティ保護された FTP 接続の有効化

FTP サーバへの接続には、セキュリティで保護された接続を使用することができます。

セキュリティ保護された FTP 接続を有効にするには、次の手順を実行します。

 ALM サーバ・マシン上に keystore ファイルを作成します。コマンド・ラインで、C:\Program Files\HP\HP Application LifeCycle Management 11.50\java\bin に移動します。keytoolgenkey-keystore keystore.jks と入力して keystore ユーティリティを起動し、画面の指示に 従います。 2. 次の形式の XML ファイルを作成します。

<ssl>

```
<keystore file="<keystore file path>" password="<keystore password>"/>
```

</ssl>

< keystore ファイル・パス> には keystore ファイルのディレクトリとファイル名, < keystore パ スワード> には keystore 用に定義したパスワードを指定します。

XML ファイルを ssikeystore.xml という名前で保存します。

- 3. sslkeystore.xml ファイルを次のディレクトリに格納します。 C:\ProgramData\HP\ALM\webapps\qcbin
- 4. ALM サービスを再開するか FTP_PORT サイト・パラメータを再設定します。これにより, FTP サー バは再起動します。
- FTP クライアントで、FTPS オプションまたは SSL オプションを選択します。FileZilla を使用している場合は、[ファイル]> [サイトマネージャ]を選択し、[新しいサイト]をクリックします。[プロトコル]で[FTP-File Transfer Protocol]を選択し、[暗号化]で[暗黙のFTP over TLS が必要]を選択してから[接続]をクリックします。

リポジトリの再調整

ALM プロジェクト・リポジトリには、ファイル・システム内の物理ファイルと、このファイルをインデックス処理するデータベース・テーブルが含まれています。プロジェクトがアクティブな状態でバックアップを作成すると、データベース・バックアップとファイル・システム・バックアップの間に時間のずれがあるために、データベース・ファイル・インデックスと物理ファイルが整合していない状態になることがあります。

バックアップの詳細については、「プロジェクトのバックアップ」(132ページ)を参照してください。

したがって, アクティブ状態のプロジェクトから作成したバックアップを復元してオンライン処理に使用する場合には, ファイル・システムとデータベース・テーブルを再調整する必要があります。

再調整では、次の処理が行われます。

- ファイルのインデックスがデータベースに存在するが、ファイルがファイル・システム上に存在しない場合、インデックスがデータベースから削除されます。
- ファイルはファイル・システムに格納されているが、データベースにインデックスが存在しない場合、 ファイルはファイル・システムから削除されます。

さらに再調整では、論理的および物理的データベース・テーブルの関係の整合性が検証されます。

修復不能な問題が検出された場合は、プロジェクトの[メンテナンス状態]が[壊れています]に変わります。詳細についてはログをチェックし、データベース・テーブルを調べてください。

標準設定では, 再調整プロセスは非サイレント・モードで実行されます。 プロセスを非サイレント・モードで実行しているときにエラーが発生すると, 処理が一時停止され, ユーザの入力が求められる場合

があります。 このモード の代 わりに, サイレント・モード でプロセスを実 行 することもできます。 エラーが発生すると, ALM はユーザに入力を求めずに, プロセスを中断します。

注: プロジェクトは,再調整の実行中は非アクティブになり,再調整が終了すると再びアクティブ化されます。

プロジェクトの再調整

本項では、1つのプロジェクトを再調整する方法を説明します。

プロジェクトを再調整するには、次の手順を実行します。

- 1.「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。
- 3. [プロジェクトのメンテナンス] ジェケーボタンをクリックし, [リポジトリの再調整]を選択します。[プロジェクトの再調整]ダイアログ・ボックスが開きます。

II プロジェクトの 再調整	
再調整 読定 実行する前に、プロジェクトの再調整に関するすべての側面と影響について完全に理解するようにして ください。。	*
□ サイレント モードで実行	
2013-05-08 14:04:10:353 ScanFiles thread 1 finished	
2013-05-08 1404:10.37 - DB テーブル移入スレッドは、1 秒間に 100 レコードのバッチを挿入しました。 バッチの SQL 時間 (SU秒): 13	
2013-05-08 1404:11:35 一時テーブルに一意の定数を追加しています	
2013-05-08 1404:11:367 最適化リボジトリ テーブル内の、存在しないファイルをポイントするデータベース レコードをクエリしています	
2013-05-08 1404:11:397 最適化リボジトリ内の孤立ファイルをクエリしています	
2013-05-08 1404:11.41 削除されたすべてのファイルとレコードのリストは、調整ログ ファイルにあります (サーバ上):	
2013-05-08 1404:11.413 D*ProgramData#HP#ALM#repository#sa#DomsInfo#MaintenanceData#out#ALMTEST#TEST#align_repository.txt	
2013-05-08 14:04:11.417 リボジトリの調整が正常に完了しました。	
2013-05-08 14:04:11:437 最適化リボジトリの再調整用の一時テーブルを削除しています	
	ルブ
100%	1/1

- 4. 再調整プロセスをユーザの介在なしで実行するには、 [サイレントモードで実行]を選択します。
- 5. 再調整プロセスを開始するには、[プロジェクトの再調整]ボタンをクリックします。プロジェクトが アクティブな場合は、非アクティブにするように求めるメッセージが表示されます。詳細について は、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ化」(98ページ)を参照してください。
- 6. [再調整の結果]表示枠に表示されているメッセージをテキスト・ファイルに保存するには、[**ログ** をエクスポート]ボタンをクリックします。[ログをファイルにエクスポート]ダイアログ・ボックスで、場所 を選択し、ファイルの名前を入力します。[保存]をクリックします。
- 7. [再調整結果]表示枠に表示されているメッセージをクリアするには, [**ログのクリア**]ボタンをク リックします。
- 8. [閉じる]をクリックして, [プロジェクトの再調整]ダイアログ・ボックスを閉じます。

ドメインの再調整

本項では、ドメイン内のすべてのプロジェクトを再調整する方法を説明します。

ドメインを再調整するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからドメインを選択します。
- 3. [ドメインのメンテナンス] ジーボタンをクリックし, [リポジトリの再調整]を選択します。[再調整 ドメイン]ダイアログ・ボックスが開きます。

■ 再調整 ドメイン		
再調整 設定 実行する前に、プロジェクトの再調整に関するすべての側面。 ください。。	- 影響について完全に理解するようにして	*
再調整 モード	この再調整の後:	
□ サイレント モードで実行 ☑ 再調整 が失敗した場合、次のブロジェクトを続行	○ すべてのブロジェクトを非アクティブ化のままにしておきます ○ すべてのブロジェクトを起動します	
再調整 を行うプロジェクトを選択		*
1 プロジェクト名 1 ■ 1531 2 ■ test22	バージョン	
すべて増択 すべてクリア バーション番号の表示		
		Þ
リボジトリの再調整 一時停止 中止	ログのクリア ログをエクスポート 閉じる	ヘルプ

- 4. [再調整設定]領域の[再調整モード]で、次のオプションを選択できます。
 - サイレント・モードで実行:ユーザの介在なしでプロセスを実行します。
 - 再調整が失敗した場合,次のプロジェクトを続行:再調整が失敗した場合に、その次のプロジェクトに進みます。これは、標準設定のオプションです。
- 5. [再調整設定]領域の[この再調整の後]で、次のいずれかのオプションを選択できます。
 - **すべてのプロジェクトを非アクティブ化のままにしておきます**: 再調整プロセスの終了後に, すべてのプロジェクトを非アクティブのままにしておきます。
 - すべてのプロジェクトを起動します: 再調整 プロセスの終了後に、すべてのプロジェクトをアクティブにします。
- 特定のプロジェクトの現在のバージョン番号を表示するには、そのプロジェクト名を選択します。 すべてのプロジェクトのバージョン番号を表示するには、[すべて選択]をクリックします。[バージョン 番号の表示]ボタンをクリックします。

[バージョン] カラムに、プロジェクトのバージョン番号が表示されます。

- 7. 特定のプロジェクトを再調整するには、そのプロジェクト名を選択します。すべてのプロジェクトを 再調整するには、[すべて選択]をクリックします。[リポジトリの再調整]ボタンをクリックします。
- 8. [再調整結果]表示枠に表示されているメッセージをテキスト・ファイルに保存するには、 [ログを エクスポート]ボタンをクリックします。 [ログをファイルにエクスポート]ダイアログ・ボックスで、場所を 選択し、ファイルの名前を入力します。 [保存]をクリックします。
- 9. [再調整結果]表示枠に表示されているメッセージをクリアするには, [ログのクリア]ボタンをク リックします。
- 10. [閉じる]をクリックして, [再調整ドメイン]ダイアログ・ボックスを閉じます。

管理者ガイド 第3章:最適化されたプロジェクト・リポジトリの管理

第4章:プロジェクトの管理

「サイト管理」を使用すると、HP Application Lifecycle Management(ALM)のドメインとプロジェクトを 管理し保守することができます。

本章の内容

プロジェクトの管理について	96
プロジェクトのテーブルへの問い合わせ	96
プロジェクトのエクスポート	97
プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ化	
プロジェクトのバージョン管理の有効化と無効化	
プロジェクトに対する Ping	100
プロジェクト名 の変 更	100
Unicode へのプロジェクトの変換	101
プロジェクトの除去	104
プロジェクトの削除	104
ドメインの削除	105
接続文字列の編集	105
プロジェクト へのアクセスの復 元	
プロジェクトの不具合モジュールの名前の変更	109
グリッド で表 示 するレコード 数 の制 限	110

プロジェクトの管理について

ALM のプロジェクトとテンプレート・プロジェクトは、「サイト管理」を使用して管理します。プロジェクトを 作成した後は、プロジェクトのエクスポート、SQL ステートメントの定義と実行によるプロジェクトの内 容の問い合わせ、プロジェクトへのアクセスの非アクティブ化/アクティブ化、プロジェクトのバージョン管 理の有効化/無効化などを実行できます。また、プロジェクトの削除、既存プロジェクトへのアクセスの 復元なども可能です。

注: [**ラボ管理**]にすでにログインしているユーザが[サイト管理]で行った変更を確認するには, 再度アプリケーションを開始する必要があります。

プロジェクトの作成の詳細については、「プロジェクトの作成」(31ページ)を参照してください。

ALM のエディション: ALM テンプレート・プロジェクトは, Quality Center Enterprise Edition では 利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

プロジェクトのテーブルへの問い合わせ

プロジェクト やテンプレート・プロジェクト に格 納されている特 定 のデータを問 い合 わせることができます。 プロジェクトは, SQL クエリを定 義し実 行して問 い合 わせます。 次の例 で, SQL クエリとそれが戻 す結 果を示します。

クエリ	結果
<pre>select * from BUG where BG_STATUS = 'Open'</pre>	未解決のすべての不具合
<pre>select * from BUG where BG_RESPONSIBLE = 'james_alm' or BG_ RESPONSIBLE = 'mary_alm'</pre>	James または Mary のいずれかに割り当てら れているすべての不具合
<pre>select count (*) from BUG where BG_RESPONSIBLE = 'mary_alm'</pre>	Mary に割り当てられている不具合の数
<pre>select * from BUG where BG_RESPONSIBLE='james_alm' and BG_ STATUS='open'</pre>	James に割り当てられている未解決のすべ ての不具合

最初のクエリ例を使用すると、SQL クエリによって次の結果が返されます。

34 Fメインの作成 晶、ドメインの削除 🥱・	• 🎁 ಶೆಷಲ್=೭	小の作成 🛃 🕫	シブレートの作成 🗙	削除 🖿 名前の	変更 🥖 編集	» •
- I BPM_ELEMENT_TYPES - I BPM_ELEMENTS - I BPM_GRAPH_RESULTS	SELECT * FR WHERE BG_S	OM BUG TATUS = '開く'			▲ ≜ SQ ▼ Ψ	しの実行@
- BPM_LINKS	BG_BUG_ID	BG_STATUS	BG_RESPONSIBLE	BG_PROJECT	BG_SUBJECT	BG_SUMM/
BPM_MODEL_FOLDERS	1	開 人	james_alm	78	2	BUG_REPO
BPM_MODELS	2	開く	james_alm	78	2	BUG_REPO
- BPM_PATHS	3	開く	mary_alm	76	2	BUG_REPO
BPTA_CHANGE_STATUS	4	開く	peter_alm	72	2	BUG_REPO
- BPTEST, TO, COMPONENTS BUG - BUG, MULTIVALUE - BUG, TOKENS - CACHE - COMPARSON, NOESS - COMPARSONS - COMPARSONS - COMPONENT						

プロジェクトに対してクエリを実行するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストで、プロジェクトをダブルクリックします。
- 3. テーブルを選択します。そのテーブルに対して「SELECT*」クエリが自動的に実行され, テーブルのすべてのデータが SQL クエリ結果のグリッドに表示されます。
- 4. SQL 表示枠に SQL ステートメントを入力して, クエリを定義します。

SQL 表示枠で前の SQL ステートメントに戻るには、上矢印ボタンをクリックします。

SQL表示枠で先のSQLステートメントに進むには、下矢印ボタンをクリックします。

5. [SQL の実行]ボタンをクリックします。 クエリから返されたデータが SQL クエリ結果 のグリッド に表示されます。

ヒント: クエリ結果をエクスポートするには、データベース管理者に依頼して、同じクエリをプロ ジェクト・データベースに対して実行し、エクスポートしてもらいます。詳細については、「プロジェクトのエクスポート」(97ページ)を参照してください。

プロジェクト のエクスポート

ALM のプロジェクト やテンプレート・プロジェクトをエクスポート すると, ALM サーバのプロジェクト・データを 取得して, 別の場所や別のメディア・デバイスにバックアップできます。 たとえば, 自己完結型のプロ ジェクト・イメージ・ファイルを作成して, USB ストレージ・デバイスや DVD にバックアップできます。 このメ ディアは, 別の場所の ALM サーバに送って, プロジェクト・ファイルをインポート できます。 プロジェクト・ ファイルをエクスポート する場合, そのファイルは ZIP 形式で保存されてエクスポートされます。

プロジェクトをエクスポートする場合は、次のガイドラインを考慮してください。

- 拡張機能がインストールされたALM プロジェクトをエクスポートすると、プロジェクトのすべてのデータ (拡張機能用のデータも含む)がエクスポートされます。このようにエクスポートされたプロジェクト は、その拡張機能がインストールされているサーバにのみインポートできます。
- ALM プロジェクト・ファイルをインポートできるのは、それが同じ ALM バージョンで作成されている場

合のみです。 プロジェクトのインポートの詳細については、「プロジェクトのインポート」(49ページ)を参照してください。

- プロジェクト・データベース・スキーマとプロジェクト・ファイル・システム・リポジトリは、合計で4ギガバイトを超えることができません。
- ALM クライアント・マシンのホーム・ディレクトリには、エクスポートされたファイルを一時的に格納で きるだけの十分なディスク容量が必要です。これは、ファイルの保存用として別の場所を選択する 場合にも当てはまります。
- 同じ PUID を持つプロジェクトが元のサーバに存在している場合、プロジェクトをそのサーバにイン ポートできません。
- プロジェクトがラボ管理の一部でなかった場合に、プロジェクトへのアクセスを復元すると、次のようなことが発生します。
 - テスト実行の詳細情報は、使用状況レポートには表示されません。
 - タイムスロット情報とプロジェクトの設定は失われます。

プロジェクトをエクスポートするには、次の手順で行います。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストでプロジェクトを選択し, [プロジェクトファイルにプロジェクトをエクスポート]ま

たは[プロジェクト ファイルへのテンプレートのエクスポート]ボタン をクリックします。あるいは、プロジェクトを右クリックし、[プロジェクトのエクスポート]または[テンプレートのエクスポート]を選択します。プロジェクトがアクティブな場合は、非アクティブにするように求めるメッセージが表示されます。詳細については、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ化」(98ページ)を参照してください。

- 3. [名前を付けて保存]ダイアログ・ボックスが開きます。プロジェクト・データを保存するディレクトリを 選択します。[ファイル名]ボックスにプロジェクトの名前を入力します。標準設定では、ALM プロ ジェクト・エクスポート・ファイル(.qcp)としてデータが保存されます。
- 4. [保存]をクリックして、 プロジェクト・データを ALM プロジェクト・エクスポート・ファイルとして保存します。

プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ化

プロジェクト やテンプレート・プロジェクトは、非アクティブまたはアクティブにすることができます。プロジェク トを非アクティブにすると、プロジェクト名が ALM ログイン・ウィンド ウの[**プロジェクト**]ボックスから削除さ れます。プロジェクトがサーバから削除されるのではありません。非アクティブにすると、プロジェクトに現 在接続されているすべてのユーザが、強制的にログアウトされます。

注: データを変更したために, 接続されているユーザにとって整合性が取れない状態が発生する 可能性がある場合は, プロジェクトを非アクティブにしてからデータを変更することをお勧めしま す。

プロジェクトを非アクティブにするには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。
- 3. [プロジェクトの非アクティブ化]または[テンプレートの非アクティブ化]ボタン メッセージ・ボックスに、ユーザ接続がすべて切断されることが示されます。
- 4. [**OK**]をクリックして確定します。 プロジェクトが非アクティブになり、 プロジェクトのリストのプロジェクト・アイコンが変化します。

プロジェクトをアクティブにするには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。
- 3. [**プロジェクトの起動**]または[**テンプレートの起動**]ボタン をクリックします。 プロジェクトがアク ティブになり、 プロジェクトのリストのプロジェクト・アイコンが変化します。

プロジェクトのバージョン管理の有効化と無効化

プロジェクト やテンプレート・プロジェクトのバージョン管理を有効にすることができます。バージョン管理の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

プロジェクトのバージョン管理を無効にすることもできます。プロジェクトのバージョン管理を無効にすると、過去のバージョンは保存されなくなり、プロジェクトのバージョン履歴もすべて削除されます。プロジェクトのバージョン管理を再度有効にしても、過去の履歴は利用できません。

注: プロジェクトのバージョン管理を有効にしたら、そのすべてのワークフロー・スクリプトを確認し、 チェックインされているエンティティごとに調整してください。これには、エンティティ Req、Test, Resource, Component が含まれます。スクリプト内に Post 関数を含む各チェックイン済みエン ティティについて、スクリプトを変更する必要があります。変更するには、各 Post 関数の前に Checkout 関数を追加します。この変更を行うことで、Post 関数を呼び出すたびに[チェックアウ ト]ダイアログ・ボックスが開かないようにします。詳細については、「ワークフロー・イベント・リファレ ンス」(445ページ)を参照してください。

プロジェクトのバージョン管理を有効にするには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。
- 3. [バージョン管理を有効にする]ボタン 🕹 をクリックします。
- 4. プロジェクトがアクティブな場合は、 [はい]をクリックして非アクティブにします。 [OK]をクリックして

確定します。

5. プロセスが終了したら、 [OK]をクリックします。 バージョン管理が有効になり、 プロジェクトのリストのプロジェクト名の隣にロック・アイコンプが表示されます。

プロジェクトのバージョン管理を無効にするには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。
- 3. [パージョン管理を無効にする]ボタン きをクリックします。
- 4. プロジェクトがアクティブな場合は、 [はい]をクリックして非アクティブにします。 [OK]をクリックして 確定します。
- 5. バージョン管理を無効にすると、すべてのバージョン履歴が削除されることを通知するメッセージが 表示されます。[OK]をクリックして確定します。
- 6. [OK]をクリックして, バージョン管理を無効にします。バージョン管理が無効になり, プロジェクトのリストのプロジェクト名の隣のロック・アイコンが表示されなくなります。

プロジェクトに対する Ping

プロジェクト・データベースやテンプレート・プロジェクト・データベースが、「サイト管理」からアクセスできる かどうかをチェックできます。

プロジェクトを ping するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。
- 4. ping が完了しましたというメッセージが表示されたら、[OK]をクリックします。

プロジェクト名の変更

プロジェクトのリストで, プロジェクトやテンプレート・プロジェクトの名前を変更できます。 プロジェクトの名前を変更するには, 次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。

- 3. [プロジェクトの名前変更]または[テンプレートの名前変更]ボタンをクリックします。 プロジェクトが アクティブな場合は、非アクティブにするように求めるメッセージが表示されます。 詳細について は、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ化」(98ページ)を参照してください。
- 4. [プロジェクトの名前変更]ダイアログ・ボックスにプロジェクトの新しい名前を入力し, [OK]をクリックします。

プロジェクト名は最大 30 文字で指定し, 文字, 数字, 下線のみを指定できます。

注:英語以外の文字のサポートは、サーバに適用されているデータベース設定によって異なります。プロジェクト名には英語以外の文字を使用しないことをお勧めします。

プロジェクトのリストのプロジェクト名が変更されます。

Unicode へのプロジェクトの変換

この項では、プロジェクトを Unicode に変換する方法を説明します。特定のプロジェクトを選択して Unicode に変換するか、ドメインを選択しそのプロジェクトを Unicode に変換することができます。

Unicode は、多言語サポートに対応する MS-SQL の機能です。Oracle では、サーバのインストール時に多言語サポートが定義されます。

Unicode に変換できるのは、次のタイプのプロジェクトです。

- バージョン 11.5 以降のプロジェクト
- MS SQL Server で作成されたプロジェクト
- ASCII で作成されたプロジェクト

注意: Unicode にすると、データベース・サーバに必要なメモリが増えます。

ドメイン内のプロジェクトを Unicode に変換するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックし, プロジェクトを変換するドメインを選択します。
- 2. [ドメインのメンテナンス]ボタン をクリックし, [ドメイン内で Unicode に変換]を選択します。[Unicode ドメインに変換]ダイアログ・ボックスが開きます。

注: [ドメイン内で Unicode に変換]は、選択したドメイン内に Unicode に変換可能なプロジェクトが存在する場合にのみ使用できます。

III Unicode に支換 ドメイン	_ 🗆 🗵
Unicode IC変換 設定	*
実行する前に、プロジェクトの Unicode への実換に関するすべての側面と影響について完全に理解す えいショープでもコレン	
SADLU (NECH.	
unicode に変換 を行うプロジェクトを選択	*
ブロジェクト名 バージョン	
ITEST	
2 test22	
	•
Unicode に変換 一時停止 中止 ログのクリア ログをエクスポート 閉じる	ヘルプ
	I

変換するプロジェクト(複数可)を選択して、[Unicode に変換]をクリックします。[Unicode に変換の結果]にログが表示されます。

ヒント: [バージョン番号の表示]をクリックすると、選択したプロジェクトのバージョンが表示されます。

注: プロジェクトは,列の長さが4000を超えるとUnicodeに変換できません。検証プロセスが失敗し,エラー・メッセージが表示されます。

この問題を解決するには、列の長さを4000以下にする方法と、列をalm_i18n_ exceptions.xml 例外ファイルに追加してから変換する方法があります。ただし、システム定義の列とシステム定義のユーザ・フィールドは例外ファイルに追加できないので、列の長さを 4000以下にしてください。

- 4. 変換プロセスを一時停止するには、 [一時停止]ボタンをクリックします。 続行するには、 [再開] ボタンをクリックします。
- 5. 変換プロセスを中断するには、 [中止]ボタンをクリックします。 [はい]ボタンをクリックして、確定します。
- 6. プロセスが正常に終了するか、エラーで停止した場合、次のいずれかを選択できます。
 - ログのクリア: [Unicode に変換の結果]に表示されたテキストがクリアされます。これにより、
 [ログをエクスポート]ボタンが無効になります。
 - ログをエクスポート: ログを.txt ファイルとして保存できます。[ログをファイルにエクスポート]ダイ アログ・ボックスで,場所を選択し,ファイルの名前を入力します。[保存]をクリックします。
- 7. [**閉じる**]をクリックして, [Unicode ドメインに変換]ダイアログ・ボックスを閉じます。

1 つのプロジェクトを Unicode に変換するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[サイトのプロジェクト]タブをクリックし,変換するプロジェクトを選択します。
- 2. [プロジェクトのメンテナンス]ボタン をクリックし, [プロジェクトを Unicode に変換]を選択します。[Unicode に変換]ダイアログ・ボックスが開きます。



3. [Unicode に変換]をクリックします。[Unicode に変換の結果]にログが表示されます。

注: プロジェクトは,列の長さが4000を超えるとUnicode に変換できません。検証プロセスが失敗し,エラー・メッセージが表示されます。

この問題を解決するには、列の長さを4000以下にする方法と、列をalm_i18n_ exceptions.xml例外ファイルに追加してから変換する方法があります。ただし、システム定義の列とシステム定義のユーザ・フィールドは例外ファイルに追加できないので、列の長さを 4000以下にしてください。

- 4. 変換プロセスを一時停止するには、 [一時停止]ボタンをクリックします。 続行するには、 [再開] ボタンをクリックします。
- 5. 変換プロセスを中断するには、 [中止]ボタンをクリックします。 [はい]ボタンをクリックして、確定します。
- 6. プロセスが正常に終了するか、エラーで停止した場合、次のいずれかを選択できます。
 - ログのクリア: [Unicode に変換の結果]に表示されたテキストがクリアされます。これにより、
 [ログをエクスポート]ボタンが無効になります。
 - ログをエクスポート: ログを.txt ファイルとして保存できます。[ログをファイルにエクスポート]ダイ アログ・ボックスで,場所を選択し,ファイルの名前を入力します。[保存]をクリックします。
- 7. [**閉じる**]をクリックして, [Unicode に変換]ダイアログ・ボックスを閉じます。

プロジェクトの除去

プロジェクト やテンプレート・プロジェクトを「サイト管理」のプロジェクトのリストから除去できます。この操作でプロジェクトがサーバから削除されることはありません。 プロジェクトは、必要に応じて元に戻せます。 プロジェクトへのアクセスの復元」(106ページ)を参照してください。

注: 現在使用されているプロジェクトは削除できません。プロジェクトを手作業で削除する方法 については、HP ソフトウェアのセルフ・ソルブ技術情報の記事 KM1457081 (http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM1457081)を参照してください。

プロジェクトのリストからプロジェクトを除去するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。
- 3. [プロジェクトの除去]または[テンプレートの除去]ボタン とをクリックします。
- [OK]をクリックして確定します。プロジェクトがまだアクティブな場合は、非アクティブにするように 求めるメッセージが表示されます。詳細については、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ化」 (98ページ)を参照してください。
- 5. [OK]をクリックします。

プロジェクトの削除

「サイト管理」のプロジェクトのリストのプロジェクトやテンプレート・プロジェクトを削除できます。この操作では、 プロジェクトの内容がサーバから削除されます。 プロジェクトを元に戻すことはできません。

注: 現在使用されているプロジェクトは削除できません。プロジェクトを手作業で削除する方法 については、HP ソフトウェアのセルフ・ソルブ技術情報の記事 KM1457081 (http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM1457081)を参照してください。

プロジェクトを削除するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。
- 3. [プロジェクトを削除]または[テンプレートを削除]ボタンをクリックします。
- 4. [OK]をクリックして確定します。アクティブなユーザがプロジェクトに接続されている場合は、その ユーザ接続を切断するように求められます。

[データベース管理パスワード]ダイアログ・ボックスが開きます。データベース管理者のユーザ名またはパスワードを指定していなかった場合は、データベース管理者のユーザ名とパスワードを入力して、[OK]をクリックします。それまでにデータベース管理者のユーザ名またはパスワードを指定していた場合は、その資格情報がすでにダイアログ・ボックスに入力されています。

5. [OK]をクリックします。

ドメインの削除

ドメインを削除 できます。ドメインはプロジェクト のリストから削除され, ドメインの内容 がサーバから削除されます。

注: プロジェクトまたはテンプレート・プロジェクトがあるドメインは削除できません。このようなドメインを削除するには、まずプロジェクトを削除する必要があります。詳細については、「プロジェクトの削除」(104ページ)を参照してください。

ドメインを削除するには、次の手順で行います。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからドメインを選択します。
- 3. [ドメインの削除]ボタンをクリックします。
- 4. [はい]ボタンをクリックして,確定します。

接続文字列の編集

プロジェクトまたはテンプレート・プロジェクトの接続文字列を編集できます。

接続文字列を編集するには、次の手順で行います。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。
- 3. [接続文字列の編集]ボタン ^(編集) または[接続文字列]リンクをクリックします。 プロジェクトが まだアクティブな場合は、非アクティブにするように求めるメッセージが表示されます。 詳細につい ては、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ化」(98ページ)を参照してください。

[接続文字列エディタ]ダイアログ・ボックスが開きます。

接続文字列エディタ	(MS-SQL)					×
接続文字列:				接続テ	スト	
jdbc:mercury:sqlser	rver://DEPR(DXP13:1433				
•						F
	01		u			
	UK					

- 4. [接続文字列]ボックスで, 接続文字列の属性(データベース・サーバ名, ポート番号など)を変更します。
- 5. 接続文字列をテストするには、 [接続テスト]をクリックします。 [データベース サーバへの Ping]ダ イアログ・ボックスでは、データベース管理者のユーザ名とパスワードを入力し、 [OK]をクリックしま す。正しく接続できた場合は、確認メッセージが表示されます。 そうでない場合は、エラー・メッ セージが表示されます。
- 6. [OK]をクリックして, 接続文字列の変更内容を保存し, [接続文字列エディタ]を閉じます。

プロジェクトへのアクセスの復元

「サイト管理」のプロジェクトのリストに現在表示されていない ALM プロジェクト やテンプレート・プロ ジェクトに,再びアクセスできるようにすることができます。たとえば,別のサーバからプロジェクトにアクセ スすることが必要な場合があります。プロジェクトへのアクセスを復元すると、そのプロジェクトが「サイト 管理」のプロジェクトのリストに追加されます。

注:

- プロジェクトを復元する前に、プロジェクトがあるデータベースが、使用している ALM サーバ上の「サイト管理」の[DB サーバ]タブに存在することを確認してください。ALM サーバは、プロジェクトのデータベースから復元されたプロジェクトの内容にアクセスできることが必要です。詳細については、「プロジェクトの新規バージョンへのアップグレード」(113ページ)を参照してください。
- プロジェクトを復元する場合、プロジェクト・リポジトリにある dbid.xml ファイルを選択してください。これにより、プロジェクトは元の ID を保持します。プロジェクトが元の ID を持っていない場合、次のクロス・プロジェクト機能が正しく動作しない可能性があります。クロス・プロジェクト・カスタマイズ、ライブラリのインポートと同期化、クロス・プロジェクト・グラフ。
- プロジェクトを別のディレクトリから復元する場合や、スキーマの名前を変更していたりスキーマを別のデータベースに復元していた場合は、dbid.xml ファイルをそれに合わせて更新する必要があります。詳細については、「dbid.xml ファイルの更新」(108ページ)を参照してください。
- これまで Performance Center 11.00 以降を使用していた場合は, ほかの Performance

Center プロジェクトの復元とアップグレードを行う前に、まず、LAB_PROJECTの復元とアップ グレードを実行し、Performance Center テンプレート・プロジェクトの復元とアップグレードを実 行する必要があります。詳細については、「LAB_PROJECTの復元」(135ページ)を参照し てください。

ALMプロジェクトを復元するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. [プロジェクトの復元]または[テンプレートの復元]ボタン きたクリックします。[プロジェクトの復元]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 3. 復元するプロジェクトが含まれるファイルを指定するため、 [dbid.xml ファイルの場所] ボックスの 右にある参照ボタンをクリックします。 [ファイルを開く] ダイアログ・ボックスが開きます。
- 4. ファイルを探します。dbid.xml ファイルの場所については、「プロジェクトの構成について」(32ページ)を参照してください。
- 5. dbid.xml ファイルを選択し、[開く]をクリックします。[プロジェクトの復元]ダイアログ・ボックスが開いて、データベースの種類、名前、サーバと、プロジェクトのディレクトリ・パスが表示されます。

プロジェクトの復元	<u>x</u>
dbid.xml ファイルの場所:	C:¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥HP¥ALM¥rep
次のドメインに復元:	DEFAULT
test	
データベース の種類 : MS-Si	QL
データベース名 : defaul	lt_test_db
データベース サーバ: 192.16	38.0.23
バージョン コントロール: N	
プロジェクト ディレクトリ:C¥Do	cuments and Settings¥AII Users¥Application Data¥HP¥ALM¥repository¥qc¥[
	復元 閉じる ヘルブ

- 6. [次のドメインに復元]ボックスで,復元したプロジェクトを配置するドメインを選択します。
- 7. [復元]をクリックします。
- 8. データベース・サーバでテキスト検索機能が有効になっていない場合は、メッセージ・ボックスが開きます。テキスト検索機能は、このプロセスの完了前でも完了後でも有効にすることができます。
 - [lはい]をクリックすると、プロセスが続行されます。プロセスが終了した後で、テキスト検索機能 を有効にできます。

■ [いいえ]をクリックすると、このプロセスが停止します。テキスト検索機能を有効にしてから、プロセスを再び開始してください。

テキスト検索を有効にする方法の詳細については、「テキスト検索の設定」(184ページ)を参照 してください。

- 9. 復元プロセスが終了したら、[OK]をクリックします。
- 10. [**閉じる**]をクリックして, [プロジェクトの復元]ダイアログ・ボックスを閉じ, 復元されたプロジェクト をプロジェクトのリストで確認します。

dbid.xml ファイルの更新

プロジェクトを別のディレクトリから復元する場合や、スキーマの名前を変更していたりスキーマを別の データベースに復元していた場合は、たとえばアップグレード処理の一環として、次の値を更新する 必要があります。

- DB_NAME: データベース・サーバに表示されるデータベース・スキーマ名に更新します。
- DB_CONNSTR_FORMAT:プロジェクトが新しいデータベース・サーバに復元される場合に更新 します。
- DBSERVER_NAME:これは、「サイト管理」の[DB サーバ]タブで定義されているデータベース・ サーバ名です。
- DB_USER_PASS: 暗号 化されたパスフレーズが ALM 11.00 と ALM 12.00 で異なる場合に更新 します。QC 10.00 からのアップグレードの場合, この値は適用されません。
- PHYSICAL_DIRECTORY: プロジェクト・リポジトリの新しい場所に更新します。パスの末尾には バックスラッシュ(\)が必要です。

プロジェクトを別のディレクトリから復元する場合や、スキーマの名前を変更していたりスキーマを別の データベースに復元していた場合は、たとえばアップグレード処理の一環として、次の値を更新する 必要があります。

- DB_NAME: データベース・サーバに表示されるデータベース・スキーマ名に更新します。
- DB_CONNSTR_FORMAT: ALM 12.00 で作成された空のプロジェクトの値を更新します。上記の注意を参照してください。
- DBSERVER_NAME:これは、「サイト管理」の[DB サーバ]タブで定義されているデータベース・ サーバ名です。
- DB_USER_PASS: 暗号化されたパスフレーズがALM 11.00以降とALM 12.00で異なる場合に 更新します。Quality Center 10.00からのアップグレードの場合, この値は適用されません。
- PHYSICAL_DIRECTORY:プロジェクト・リポジトリの新しい場所に更新します。パスの末尾には バックスラッシュ(\)が必要です。

注:
- DB_CONNSTR_FORMATとDB_USER_PASSの値を特定するには、ALM 12.00の「サイト管理」で空のプロジェクトを新規に作成し、そのプロジェクトのdbid.xml ファイルを開き、これらの値をコピーすることをお勧めします。空のプロジェクトは、後で削除できます。
- PR_SMART_REPOSITORY_ENABLED の値は、コピー/貼り付け、変更をしないでください。
- LAB_PROJECT または Performance Center プロジェクトをアップグレード処理の一環として 復元する場合は、PROJECT_UIDの値を編集しないでください。これらのプロジェクト は、LAB_PROJECT とそれに関連する Performance Center プロジェクトとのリンクを維持す るために、元のPROJECT_UID 値で復元する必要があります。これは、タイムスロット、実行 などの共有データで重要です。
- DB_CONNSTR_FORMATとDB_USER_PASSの値を特定するには、ALM 12.00の「サイト管理」で空のプロジェクトを新規に作成し、そのプロジェクトのdbid.xml ファイルを開き、これらの値をコピーすることをお勧めします。空のプロジェクトは、後で削除できます。
- PR_SMART_REPOSITORY_ENABLED の値は, 変更をしないでください。
- LAB_PROJECT または Performance Center プロジェクトをアップグレード処理の一環として復元 する場合は、PROJECT_UIDの値を編集しないでください。LAB_PROJECT とその関連する Performance Center プロジェクトの間のリンクを保持するには、これらのプロジェクトをPROJECT_ UIDの元の値で復元する必要があります。これはタイムスロット、実行などの共有データでは非常 に重要です。

プロジェクトの不具合モジュールの名前の変更

特定のプロジェクト やテンプレート・プロジェクトの不具合モジュールについて,その名前を変更できます。 す。たとえば,不具合モジュールの名前を Defects から Bugs に変更できます。不具合モジュールの 名前の変更は,プロジェクトの DATACONST テーブルにパラメータを追加して行います。プロジェク ト・テーブルの変更の詳細については,「プロジェクトのテーブルへの問い合わせ」(96ページ)を参照し てください。

注:[サイト設定]タブで「REPLACE_TITLE」(217ページ) パラメータを追加すると, すべてのプロ ジェクトのすべての ALM モジュールの名前を変更できます。

プロジェクトの不具合モジュールの名前を変更するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストで,不具合モジュールの名前を変更するプロジェクトをダブルクリックします。
- 3. DATACONST テーブルを選択します。

- 4. SQL 表示枠に,次の値を持つ行をテーブルに挿入する SQL INSERT INTO ステートメントを入力します。
 - DC_CONST_NAME カラムに、パラメータ名 REPLACE_TITLE を挿入します。
 - DC_VALUE カラムに、不具合モジュールの新しい名前を定義する文字列を次の書式で挿入します。

元のタイトル [単数];新しいタイトル [単数];元のタイトル [複数];新しいタイトル [複数]

たとえば、モジュールの名前を Defects から Bugs に変更するには、次の SQL ステートメントを SQL 表示枠に入力します。

insert into dataconst values ('REPLACE_TITLE', 'Defect;Bug;Defects;Bugs')

5. [**SQL の実行**]ボタンをクリックします。新しい行が **DATACONST** テーブルに追加されます。ALM プロジェクトに、新しい不具合モジュール名が表示されます。

グリッドで表示するレコード数の制限

パフォーマンスを最大限に高めるために、ALM グリッドで取得および表示するレコード数には次の制限があります。

- グリッドで表示するレコード数の最大値。
- グループ分けフィルタをグリッドに適用した場合の、グループあたりのレコード数の最大値。

この制限を無効にして関連レコードをすべて表示するには、ウィンドウまたはダイアログ・ボックスにある [**<x>の結果を取得します**]リンクをクリックします。

制限値の標準設定は、 すべてのサイト・プロジェクトまたは個々のプロジェクトごとに変更できます。 プロジェクトの制限を変更すると、「FETCH_LIMIT」(207ページ) パラメータまたは「GROUP_FETCH_LIMIT」(210ページ) パラメータで定義されている標準設定値が上書されます。

すべてのサイト・プロジェクトを対象に、グリッドで表示するレコード数の標準設定を 変更するには、次の手順を実行します。

[サイト設定]タブで、「FETCH_LIMIT」(207ページ) パラメータまたは「GROUP_FETCH_LIMIT」 (210ページ) パラメータを追加または設定します。

プロジェクトを対象に、グリッドで表示するレコード数の標準設定を変更するには、 次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[サイトのプロジェクト]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストで, グリッドでの表示レコード数の標準設定を変更するプロジェクトをダブルク リックします。
- 3. DATACONST テーブルを選択します。

- 4. SQL 表示枠に、次の値を持つ行をテーブルに挿入する SQL INSERT ステートメントを入力します。
 - DC_CONST_NAME カラムに FETCH_LIMIT または GROUP_FETCH_LIMIT という名前で パラメータを挿入します。
 - DC_VALUE カラムに、パラメータの値を挿入します。

たとえば、FETCH_LIMIT パラメータの値を 50 に変更 するには、SQL 表示 枠 に次の SQL ステートメントを入力します。

insert into dataconst values ('FETCH_LIMIT', '50')

5. [SQL の実行]ボタンをクリックします。新しい行がDATACONST テーブルに追加されます。

管理者ガイド 第4章: プロジェクトの管理

第5章: プロジェクトの新規バージョンへのアップグレード

以前のバージョンの Quality Center およびALM で作成されたプロジェクトの作業を HP Application Lifecycle Management(ALM) 12.00 で行うには、現行バージョンの ALM に必要な設定に合わせるた めに、プロジェクトをアップグレードする必要があります。

Performance Center: 9.52 以前のバージョンの Performance Center で作成されたプロジェクト を処理するには、プロジェクトを移行して、ALM で必要な設定に合わせることが必要です。詳細 については、『HP ALM Performance Center インストール・ガイド』を参照してください。

本章の内容

プロジェクトのアップグレードについて	114
バージョンとパッチのナンバリング・スキーマ	114
メジャー・バージョンとマイナー・バージョンでのプロジェクトのアップグレード	115
マイナー・マイナー・バージョンでのプロジェクトのアップグレード	141

プロジェクトのアップグレードについて

この項では、次の操作に必要な手順について説明します。

- フル・アップグレード:
 - 古いメジャー・バージョンとマイナー・バージョンの ALM プロジェクト
 - ALM/Performance Center 11.00 の Performance Center プロジェクト
- 古い ALM 11.5x マイナー・マイナー・バージョンの ALM プロジェクトのアップグレード

バージョンが,メジャー,マイナー,マイナー・マイナーのどれに該当するかを確認する方法については, 「バージョンとパッチのナンバリング・スキーマ」(114ページ)でバージョン番号に関する説明を参照してく ださい。

本章の内容

- 「バージョンとパッチのナンバリング・スキーマ」(114ページ)
- 「メジャー・バージョンとマイナー・バージョンでのプロジェクトのアップグレード」(115ページ)
- 「マイナー・マイナー・バージョンでのプロジェクトのアップグレード」(141ページ)

バージョンとパッチのナンバリング・スキーマ

バージョン番号は次のようなフォーマットで表記します。

(メジャー)(メジャー).(マイナー)(マイナー - マイナー).(ビルド)(ビルド)(ビルド)

例

メジャー・バージョン 11: 11.00.0000 マイナー・バージョン 11.5: 11.50.0000

マイナー - マイナー・バージョン 11.52: 11.52.0000

メジャー・バージョン 11 のパッチ 3: 11.00.0003

このフォーマットについての詳細は、HP サポート・サイトの「Obsolescence Policy」を参照してください。ALM からこのサイトにアクセスするには、 [ヘルプ]> [HP ソフトウェア サポート オンライン]を選択します。または http://support.openview.hp.com からもアクセスできます。

メジャー・バージョンとマイナー・バージョンでのプロジェクトの アップグレード

この項では、次を使用するために必要な処理について説明します。

- 旧バージョンの Quality Center または ALM プロジェクト
- 旧バージョンの Performance Center プロジェクト

アップグレードする場合は、その前に、プロジェクトの検証と修復を行って、データベースのユーザ・スキーマとデータのエラーを検出し修復してください。

注:

- アップグレードの方法:システムの運用をできる限り中断せずに、以前のバージョンのQuality Center からアップグレードするには、アップグレード・プロセスにかかわる検討事項と推奨事項 をよく知っておくことが必要です。アップグレードの方法については、『HP Application Lifecycle Management アップグレードのベストプラクティス・ガイド』を参照してください。
- 製品の機能紹介ムービー:旧バージョンからHP ALM にアップグレードする方法を紹介する ムービーを視聴するには、ALM メイン・ウィンドウで[ヘルプ]>[ムービー]を選択します。
- このプロセスでは、メジャーおよびマイナー・バージョン・アップグレードでのプロジェクトのアップグレードについて説明します。バージョンがメジャーまたはマイナーのどちらに該当するかを確認する方法については、「バージョンとパッチのナンバリング・スキーマ」(114ページ)でバージョン番号に関する説明を参照してください。
- マイナー・マイナー・バージョンのアップグレードの詳細については、「マイナー・マイナー・バージョンでのプロジェクトのアップグレード」(141ページ)を参照してください。

本項の内容

- 「アップグレード・バージョン」(116ページ)
- •「プロジェクト・アップグレードの注意事項」(116ページ)
- •「リポジトリ移行の注意事項」(117ページ)
- 「アップグレードの手順」(118ページ)

アップグレード・バージョン

次の表に、プロジェクトを以前のバージョンの Quality Center および ALM からアップグレード する方法を示します。 すべてのプロジェクトを直接 ALM12.00 にアップグレード できないことに注意してください。

対象バージョン	ALM 12.00 へのアップグレード
ALM 11.00 - 11.52	プロジェクトを ALM12.00 に直接 アップグレード。
Quality Center 10.00	プロジェクトをまず ALM 11.52 に移 行 する必 要 があります。 詳 細 については, 『HP ALM 11.52 インストールおよびアップグレード・ガイド』を参 照してください。
Performance Center 11 00 -	プロジェクトを ALM12.00 に直接 アップグレード。
11.52	注: Performance Center プロジェクトをアップグレード する前に,まず LAB_PROJECT をアップグレードし, Performance Center テンプレート・ プロジェクトをアップグレード する必要 があります。
Performance Center バージョン 9.51	プロジェクトをまず Performance Center 11.52 に移行する必要があります。詳細については、『HP ALM Performance Center 11.52 インストール・ガイド』を参照してください。
Performance Center バージョン 9.5 以前	プロジェクトを Performance Center 9.51 に移行してから、Performance Center 11.52 に移行する必要があります。詳細については、『HP ALM Performance Center 11.52 インストール・ガイド』を参照してください。
Quality Center 9.2	プロジェクトをまず ALM 11.00 にアップグレード する必 要 があります。
Quality Center 9.0	プロジェクトをまず Quality Center 10.00 にアップグレード する必 要 があります。

注意: アップグレードを実行する前に,現在のリポジトリを新しいバージョンに対して正しい位置に移動しておく必要があります。

注: Quality Center 10.00, 9.2, 9.0 からアップグレードする場合は、Microsoft Word のリッチテキスト機能をHTML に変換する必要があります。詳細については、HP ソフトウェアのセルフ・ソルブ技術情報の記事 KM1116588 (http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM1116588)を参照してください。(HP

Passport のサインイン資格情報が必要です)

プロジェクト・アップグレードの注意事項

プロジェクトを ALM 12.00 にアップグレード する前に, 次の点について検討してください。

- バージョン管理:
 - Quality Center 10.00 および ALM 11.00 以降のバージョン管理が有効なプロジェクトのアップ グレード: Quality Center 10.00 または ALM 11.00 以降のバージョン管理対応プロジェクトは、 チェック・アウト・エンティティが存在する間は ALM 12.00 にアップグレードできません。すべてのエン

ティティは、対応するバージョンの Quality Center または ALM でチェックインされていることが必要です。チェックアウト済みエンティティの有無を確認する方法は、HP ソフトウェアのセルフ・ソルブ技術情報の記事 KM00470884

(http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents/KM00470884)を参照してください。 (HP Passport のサインイン資格情報が必要です。)

- 従来のバージョン管理プロジェクトからのアップグレード: Quality Center 9.0 または Quality Center 9.2 のプロジェクトがバージョン管理を使用している場合, そのプロジェクトを処理するには, まず ALM 11.00 にアップグレードし, 従来のバージョン管理データを移行してから, ALM 12.00 にアップグレードする必要があります。
- サーバのロケール: プロジェクトをアップグレード する前に, ALM サーバ, データベース, ファイル・サーバのシステム・ロケールがすべて一致していることを確認してください。
- Performance Center: Performance Center 11.00 以降を使用していた場合は、ほかの Performance Center プロジェクトをアップグレードする前に、まず、LAB_PROJECT をアップグレード し、次に Performance Center テンプレート・プロジェクトをアップグレードする必要があります。詳細 については、「LAB PROJECT の復元」(135ページ)を参照してください。

リポジトリ移行の注意事項

Quality Center 10.00 のプロジェクトをアップグレードすると、プロジェクトのファイル・リポジトリが、最適 化された新しいフォルダ構造に移行されます。次の点について検討し、ファイル・リポジトリが新しい 構造に正しく移行されるようにしてください。

- データベース上に約20%大きい領域を用意します。
- アップグレード・ツールを実行する前に、 プロジェクト・ファイルがすべて標準設定のプロジェクト・ディレクトリに保存されていることを確認します。

テスト、テスト・リソースなどのプロジェクト・ファイルが標準設定のプロジェクト・ディレクトリの外にないかどうかを確認するには、「サイト管理」にログインします。[サイトのプロジェクト]タブで、各プロジェクトを展開し、DATACONST テーブルをクリックします。DC_CONST_NAME カラムの各 *_ directory エントリについて、対応する DC_VALUE が標準設定のプロジェクト・ディレクトリ内の フォルダ名であり、ほかのディレクトリへのパスではないことを確認します。たとえば、tests_ directory の DC_VALUE が tests に設定され、resources_directory の DC_VALUE が resources に設定されていることを確認します。

- プロジェクト・リポジトリのフォルダまたはファイルで ALM に接続されていないもの(バックアップ・フォル ダ、ワークフローに含まれないスクリプトなど)は、リポジトリ外のディレクトリに移動します。関係の ないファイルがリポジトリに残っている場合は、移行の完了後にのみ FTP 経由でアクセスできるようになります。詳細については、「プロジェクト・リポジトリの参照」(88ページ)を参照してください。
- ALM サーバに、ファイル・サーバに対する完全な権限があることを確認します。
- インデックス作成用に割り当てられるリソースの設定については、 http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM862600を参照してください。
- ファイル・システム上に ProjRep という名前のフォルダがないことを確認します。

- リポジトリの移行中および移行後に、ファイル・システムに直接アクセスすることはできません。移行 が完了すると、FTP クライアントを使用して、最適化されたファイル・システムの参照と編集が可能 です。詳細については、「プロジェクト・リポジトリの参照」(88ページ)を参照してください。
- リポジトリの移行中と移行後にプロジェクトをバックアップするには、 http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents/KM1373517のガイドラインに従ってください。
- プロジェクトを新しいバージョンの ALM に復元する場合は、dbid.xml ファイルの < PR_SMART_ REPOSITORY_ENABLED> プロパティを変更しないでください。
- 最適化されたリポジトリによって領域が節約され、パフォーマンスのメリットが得られるのは、リポジトリの移行が完全な場合のみです。そのため、移行中にエラーや警告が発生した場合はそれを解決し、移行が完全であることを確認してください。
- ALM, データベース, またはファイル・サーバが WAN 経由の場合の移行プロセスは, LAN 経由の 場合の何倍もの時間がかかります。

アップグレードの手順

アップグレードのワークフローは、次の手順で構成されます。

1. プロジェクトの検証:環境,スキーマ構造,データ整合性に関する問題で,プロジェクトのアップグレードが失敗する原因となる可能性があるものを検出します。

検証プロセスを実行すると、ALM によって修復可能な問題と、ユーザが手動で修復する必要がある問題を示すレポートが生成されます。詳細については、「ドメインとプロジェクトの検証」(119 ページ)を参照してください。

2. プロジェクトの修復:検証プロセスで見つかったデータとスキーマの問題を修正します。データの損失を招く可能性がある問題が検証プロセスで見つかった場合,その問題が修復プロセスで自動的に修正されることはありません。これらの問題は手動で修復する必要があります。詳細については、「ドメインとプロジェクトの修復」(122ページ)を参照してください。

修復プロセスを開始する前に、プロジェクトをバックアップしてください。詳細については、「プロ ジェクトのバックアップ」(132ページ)を参照してください。

修復に失敗した場合は、バックアップしてあるプロジェクトを復元してから、修復プロセスを再試行する必要があります。詳細については、「プロジェクトの復元」(133ページ)を参照してください。

3. プロジェクトのアップグレード: プロジェクトを現行 バージョンの ALM にアップグレードします。詳細に ついては、「ドメインとプロジェクトのアップグレード」(126ページ)を参照してください。

プロジェクトは、アップグレードする前にバックアップしてください。詳細については、「プロジェクトの バックアップ」(132ページ)を参照してください。

アップグレードに失敗した場合は、バックアップしてあるプロジェクトを復元してから、アップグレード・プロセスを再試行する必要があります。詳細については、「プロジェクトの復元」(133ページ) を参照してください。 プロジェクト・リポジトリの移行の管理: プロジェクトが Quality Center 10.00 から ALM 12.00 にアッ プグレードされると、ALM は、プロジェクト・リポジトリのディレクトリを、プロジェクト・リポジトリの標 準設定の場所にある新しいファイル構造に移行されます。この移行プロセスが失敗した場合 は、プロジェクト・リポジトリの問題を手動で修正する必要があります。また、移行の実行スピード を設定することもできます。詳細については、「リポジトリの移行」(136ページ)を参照してください。

検証プロセスと修復プロセスで検出され修正される問題の詳細と、ALM では修正できない問題 を修正する方法については、『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグ レード・ガイド』の付録「アップグレードの準備のトラブルシューティング」を参照してください。

ドメインとプロジェクトの検証

プロジェクトをアップグレードする前に, 検証プロセスを実行して, データベースのユーザ・スキーマとデー タが正しいかどうかを確認します。以前のバージョンの Quality Center または ALMではデータベースの ユーザ・スキーマとデータが正しい場合でも, 現行バージョンの ALM 仕様には合っていないことがありま す。

検証プロセスでは、環境、設定、スキーマ構造、データ整合性に関する問題で、アップグレードを失敗する原因となる可能性があるものが検出されます。このプロセスでは、ALMによって修復可能な問題と、ユーザが手動で修復する必要がある問題を伝える検証レポートが生成されます。

検証レポートは、標準設定ではALMサーバ・マシン上に保存されます。この標準設定の場所を変更するには、「VERIFY_REPORT_FOLDER」(224ページ)を参照してください。

検証が完了したプロジェクトでも、以前のバージョンの Quality Center または ALM で今までどおりに 使用することは可能です。

検証プロセスで検出される問題の詳細については、『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグレード・ガイド』を参照してください。

例外ファイルを定義すると、検証、修復、アップグレードの各プロセスの実行中に検出されるエラーを 無視するよう ALM に指示できます。詳細については、「例外ファイルの定義」(130ページ)を参照し てください。

本項の内容

プロジェクトの検証	 120
ドメインの検証	

プロジェクトの検証

この項では、1つのプロジェクトを検証する方法を説明します。

プロジェクトを検証するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。
- 3. [プロジェクトのメンテナンス]ボタンジャクリックし, [プロジェクトの検証]を選択します。[プロジェクトの検証]ダイアログ・ボックスが開きます。

📧 ታበジェクトの 検証	_ 🗆 🗙
株証 設定 実行する前に、ブロジェクトの検証に関するすべての側面と影響について完全に理解するようにしてく ださい。	*
後証 結果 	
2015-00-00 14と100/m1 2020 2013-05-08 142100/727 検証のレポート ファイルは GCvenfy/Report_ALM/TEST_test22_1367380480448/htmlに書き込まれました	
2013-05-08 14210073 次のフォルグ内 (サー) (明) のHProgramDataHP/HALMPropository How Homesinfo-HMaintonanceDataHoutHALMTESTHeast224	
2013-05-06 1421-00.78 189897-95-277-53-277-05-277-05-277-05-277-05-277-05-277-05-277-05-277-05-277-05-277-05-27	
完 了	
フロジェクトの 検証 一时90上 中止 ログのクリア ログをエクスポート 開じる 100% 100% 10% 10% 10%	1/1

4. [プロジェクトの検証]ボタンをクリックして,検証プロセスを開始します。[検証結果]表示枠にロ グ・メッセージが表示されます。

プロセスの実行中にエラーが発生すると、メッセージ・ボックスが開きます。状況に応じて、[中止] または[再試行]ボタンをクリックしてください。

- 5. 検証プロセスを一時停止するには、 [一時停止]ボタンをクリックします。 続行するには、 [再開] ボタンをクリックします。
- 6. 検証プロセスを中断するには、 [中止]ボタンをクリックします。 [はい]ボタンをクリックして、確定します。
- 7. [検証結果]表示枠に表示されているメッセージをテキスト・ファイルに保存するには、[**ログをエク** スポート]ボタンをクリックします。[ログをファイルにエクスポート]ダイアログ・ボックスで、場所を選 択し、ファイルの名前を入力します。[**保存**]をクリックします。
- 8. [検証結果]表示枠に表示されているメッセージをクリアするには, [ログのクリア]ボタンをクリック

します。

- 9. 検証プロセスが終了すると、[検証結果]表示枠に検証レポートの場所が表示されます。この ファイルは、標準設定では次のディレクトリにあります。<ALM リポジトリ・パ ス>\sa\DomsInfo\MaintenanceData\out\<ドメイン名>\<プロジェクト名>。
- 10. 検証レポートを分析します。このレポートには、ALMによる自動修正が可能な問題と、ユーザが 手動で修正する必要がある問題の両方が示されます。
- 11. [閉じる]をクリックして, [プロジェクトの検証]ダイアログ・ボックスを閉じます。

ドメインの検証

この項では、ドメイン内のすべてのプロジェクトを検証する方法を説明します。

ドメインを検証するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからドメインを選択します。
- 3. [ドメインのメンテナンス] ボタンをクリックし, [ドメインの検証]を選択します。[検証ドメイン] ダイアログ・ボックスが開きます。

■ 検証 ドメイン	_ 🗆 🗙
検証 設定 実行する前に、検証するプロジェクトのすべての側面と影響について完全に理解するようにしてくださ い。	*
検証 を行うプロジェクトを選択	*
オロジェクト名 バージョン 1 ALM_Demo 2 NewTemplate 3 test2	
代註 初未	

4. 特定のプロジェクトの現在のバージョン番号を表示するには、そのプロジェクト名を選択します。 すべてのプロジェクトのバージョン番号を表示するには、[**すべて選択**]をクリックします。[**バージョン** 番号の表示]ボタンをクリックします。

[バージョン] カラムに, プロジェクトのバージョン番号が表示されます。

5. 特定のプロジェクトを検証するには、そのプロジェクト名を選択します。すべてのプロジェクトを検証するには、[**すべて選択**]をクリックします。[**プロジェクトの検証**]ボタンをクリックします。

プロセスの実行中にエラーが発生すると、メッセージ・ボックスが開きます。状況に応じて、 [中止] または[再試行]ボタンをクリックしてください。

- 6. 検証プロセスを一時停止するには、 [一時停止]ボタンをクリックします。 続行するには、 [再開] ボタンをクリックします。
- 7. 検証プロセスを中断するには、 [中止]ボタンをクリックします。 [はい]ボタンをクリックして、確定します。
- E検証結果]表示枠に表示されているメッセージをテキスト・ファイルに保存するには、 [ログをエク スポート]ボタンをクリックします。 [ログをファイルにエクスポート]ダイアログ・ボックスで、場所を選 択し、ファイルの名前を入力します。 [保存]をクリックします。
- 9. [検証結果]表示枠に表示されているメッセージをクリアするには, [ログのクリア]ボタンをクリックします。
- 10. 検証プロセスが終了すると、「検証結果」表示枠にそれぞれの検証レポートの場所が表示されます。これらのファイルは、標準設定では次のディレクトリにあります。 くALM リポジトリ・パス> \repository\sa\DomsInfo\MaintenanceData\out\ <ドメイン名> \< プロジェクト名>。
- 11. 検証レポートを分析します。このレポートには、ALM によって修正できる問題と、ユーザが手動で 修正する必要がある問題が示されます。
- 12. [閉じる]をクリックして, [検証ドメイン]ダイアログ・ボックスを閉じます。

ドメインとプロジェクト の修復

修復プロセスでは、検証プロセスで見つかった、データとスキーマのほとんどの問題が修正されます。 データの損失を招く可能性がある問題が検証プロセスで見つかった場合、その問題が修復プロセス で自動的に修正されることはありません。これらの問題は手動で修復する必要があります。特定の 問題が自動的に処理されるかどうかを調べるには、検証レポートを参照してください。

標準設定では,修復プロセスは非サイレント・モードで実行されます。プロセスを非サイレント・モードで実行しているときにエラーが発生すると、処理が一時停止され、ユーザの入力が求められる場合があります。このモードの代わりに、サイレント・モードでプロセスを実行することもできます。エラーが発生すると、ALM はユーザに入力を求めずに、プロセスを中断します。

修復が完了したプロジェクトでも、以前のQuality Center またはALM バージョンで今までどおりに使用することは可能です。

修復プロセスで修正される問題の詳細と、ALM では修正できない問題を修正する方法について は、『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグレード・ガイド』の付録「アップ グレードの準備のトラブルシューティング」を参照してください。

本項の内容

プロジェクトの修復	 123
ドメインの修復	

プロジェクトの修復

この項では、1つのプロジェクトを修復する方法を説明します。

プロジェクトを修復するには、次の手順を実行します。

- 1. プロジェクトをバックアップします。詳細については、「プロジェクトのバックアップ」(132ページ)を参照してください。
- 2. 検証レポートに示されている, ALM では修正できない問題を修正します(「プロジェクトの検証」 (120ページ)の手順 9を参照)。
- 3. 「サイト管理」の[サイトのプロジェクト]タブをクリックします。
- 4. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。
- 5. [プロジェクトのメンテナンス]ボタンジャクリックし, [プロジェクトの修復]を選択します。[プロジェクトの修復]ダイアログ・ボックスが開きます。



6. 修復プロセスをユーザの介在なしで実行するには、 [サイレント モードで実行]を選択します。

7. 修復プロセスを開始するには、「プロジェクトの修復]ボタンをクリックします。プロジェクトがアクティブな場合は、非アクティブにするように求めるメッセージが表示されます。詳細については、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ化」(98ページ)を参照してください。

非サイレント・モードでプロセスを実行しているときにエラーが発生すると、メッセージ・ボックスが開きます。状況に応じて、[**中止**]または[**再試行**]ボタンをクリックしてください。

- 8. 修復プロセスを一時停止するには、 [一時停止]ボタンをクリックします。 続行するには、 [再開] ボタンをクリックします。
- 9. 修復プロセスを中断するには、 [中止]ボタンをクリックします。 [はい]ボタンをクリックして、確定します。
- 10. [修復結果]表示枠に表示されているメッセージをテキスト・ファイルに保存するには、 [ログをエク スポート]ボタンをクリックします。 [ログをファイルにエクスポート]ダイアログ・ボックスで、場所を選 択し、ファイルの名前を入力します。 [保存]をクリックします。
- 11. [修復結果]表示枠に表示されているメッセージをクリアするには, [ログのクリア]ボタンをクリックします。
- 12. [閉じる]をクリックして, [プロジェクトの修復]ダイアログ・ボックスを閉じます。

ドメインの修復

この項では、ドメイン内のすべてのプロジェクトを修復する方法を説明します。

ドメインを修復するには、次の手順を実行します。

- 1. プロジェクトをバックアップします。詳細については、「プロジェクトのバックアップ」(132ページ)を参照してください。
- 検証レポートに示されている、ALM では修正できない問題を修正します(「ドメインの検証」 (121ページ)の手順10を参照)。
- 3. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 4. プロジェクトのリストからドメインを選択します。
- 5. [ドメインのメンテナンス] ジャボタンをクリックし, [ドメインを修復]を選択します。[修復ドメイン] ダイアログ・ボックスが開きます。

国修復 ドメイン		<u>_ 0 ×</u>
修復 設定		*
実行する前に、プロンェンドの隊隊に関するすへての問題 ださい。 新二 間於する前二 間清するゴロジェクトをすべて破害!	こが容について元王に汪降するようにして、 こじゃクマッゴーズくだえい	
修復 モード	この修復の後:	
□ サイレント モードで実行	○ すべてのブロジェクトを非アクティブ化のままにしておきます	
☑ 修復 が失敗した場合、次のブロジェクトを続行	 ● 現在使用中のブロジェクトのみを起動します ○ すべてのブロジェクトを起動します 	
参復 を行うプロジェクトを選択		*
1 プロジェクト名	パージョン	
1 Project1		
すべて選択 すべてクリア バージョン番号の表	T.	
廖復 結果		
プロジェクトを修復 一時停止	中止 ログのクリア ログをエクスポート	閉じる ヘルブ

- 6. [修復設定]領域の[修復モード]で,次のオプションを選択できます。
 - サイレント・モードで実行:ユーザの介在なしでプロセスを実行します。
 - 修復が失敗した場合,次のプロジェクトを続行:修復が失敗した場合に,その次のプロジェクトに進みます。これは,標準設定のオプションです。
- 7. [修復設定]領域の[この修復の後]で、次のいずれかのオプションを選択できます。
 - すべてのプロジェクトを非アクティブ化のままにしておきます:修復プロセスの終了後に、すべてのプロジェクトを非アクティブのままにしておきます。
 - 現在使用中のプロジェクトのみを起動します:アクティブだったプロジェクトは、修復プロセスの 終了後に再びアクティブにします。これは、標準設定のオプションです。
 - **すべてのプロジェクトを起動します:**修復プロセスの終了後に, すべてのプロジェクトをアクティブ にします。
- 特定のプロジェクトの現在のバージョン番号を表示するには、そのプロジェクト名を選択します。 すべてのプロジェクトのバージョン番号を表示するには、[すべて選択]をクリックします。[バージョン 番号の表示]ボタンをクリックします。

[バージョン]カラムに, プロジェクトのバージョン番号が表示されます。

9. 特定のプロジェクトを修復するには、そのプロジェクト名を選択します。すべてのプロジェクトを修 復するには、[すべて選択]をクリックします。[プロジェクトを修復]ボタンをクリックします。

非サイレント・モードでプロセスを実行しているときにエラーが発生すると、メッセージ・ボックスが開きます。状況に応じて、[**中止**]または[**再試行**]ボタンをクリックしてください。

10. 修復プロセスを一時停止するには、 [一時停止]ボタンをクリックします。 続行するには、 [再開] ボタンをクリックします。

- 11. 修復プロセスを中断するには、 [中止]ボタンをクリックします。 [はい]ボタンをクリックして、確定します。
- 12. [修復結果]表示枠に表示されているメッセージをテキスト・ファイルに保存するには、 [**ログをエク** スポート]ボタンをクリックします。 [ログをファイルにエクスポート]ダイアログ・ボックスで、場所を選 択し、ファイルの名前を入力します。 [保存]をクリックします。
- 13. [修復結果]表示枠に表示されているメッセージをクリアするには, [ログのクリア]ボタンをクリックします。
- 14. [閉じる]をクリックして, [修復ドメイン]ダイアログ・ボックスを閉じます。

ドメインとプロジェクトのアップグレード

プロジェクトの検証と修復が終了したら, プロジェクトを現在のバージョンの ALM にアップグレード するプロセスに進むことができます。

前提条件を含む, アップグレード・プロセス全体の詳細については, 「プロジェクトのアップグレードについて」(114ページ)を参照してください。

標準設定では,アップグレード・プロセスは非サイレント・モードで実行されます。プロセスを非サイレント・モードで実行しているときにエラーが発生すると,処理が一時停止され,ユーザの入力が求められる場合があります。このモードの代わりに,サイレント・モードでプロセスを実行することもできます。プロ セスがサイレント・モードで実行されている場合,ALMはユーザの入力を求めずにプロセスを中断します。

プロジェクトのアップグレードが終了すると、そのプロジェクトは以前のバージョンの Quality Center で使用できなくなります。

注:

- アップグレード・プロセスの実行中は、プロジェクト・ディレクトリにアクセスできる必要があります。たとえば、プロジェクト・ディレクトリがファイル・サーバ上にある場合は、そのサーバが稼動していることを確認してください。
- バージョン管理: Quality Center 10.00 または ALM 11.00 のバージョン管理対応プロジェクトは、チェック・アウト・エンティティが存在する間は ALM 12.00 にアップグレードできません。対応するバージョンの Quality Center または ALM で、すべてのエンティティをチェックインする必要があります。
- Performance Center: Performance Center 11.00を使用していた場合は、ほかの Performance Center プロジェクトをアップグレードする前に、まず、LAB_PROJECTをアップグ レードし、次に Performance Center テンプレート・プロジェクトをアップグレードする必要があり ます。LAB_PROJECTの詳細については、『HP ALM ラボ管理ガイド』を参照してください。

本項の内容

プロジェクトのアップグレード	
ドメインのアップグレード	

プロジェクト のアップグレード

この項では、1つのプロジェクトをアップグレードする方法を説明します。

プロジェクトをアップグレードするには、次の手順を実行します。

- 1. 修復プロセス(「ドメインとプロジェクトの修復」(122ページ)を参照)でプロジェクトをバックアップ済 みの場合は、手順3に進みます。
- 2. プロジェクトをバックアップします。詳細については、「プロジェクトのバックアップ」(132ページ)を参照してください。
- 3. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 4. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。
- 5. [プロジェクトのメンテナンス]ボタンジャクリックし, [プロジェクトのアップグレード]を選択します。[プロジェクトのアップグレード]ダイアログ・ボックスが開きます。

■ プロジェクトの アップグレード	
アップグレード 設定 実行する前に、アップグレードしています を行うプロジェクトのすべての側面と影響について完全に 理解するようにしてください。 特に、開始する前に、関連するプロジェクトをすべて確実にバックアップしてください。	*
□ サイレント モードで実行	
アップグレード 結果	
	・ ヘルプ

- 6. アップグレード・プロセスをユーザの介在なしで実行するには、 [サイレント モードで実行]を選択します。
- 7. アップグレード・プロセスを開始するには、[プロジェクトのアップグレード]ボタンをクリックします。プロジェクトがアクティブな場合は、非アクティブにするように求めるメッセージが表示されます。詳細については、「プロジェクトの非アクティブ化とアクティブ化」(98ページ)「プロジェクトの非アクティブ化

とアクティブ化」(98ページ)を参照してください。

非サイレント・モードでプロセスを実行しているときにエラーが発生すると、メッセージ・ボックスが開きます。状況に応じて、[**中止**]または[**再試行**]ボタンをクリックしてください。

アップグレードが失敗すると、エラー・メッセージが失敗の理由とともに表示され、ログ・ファイルを参照するように促されます。バックアップしたプロジェクトを復元してから、アップグレードを再試行して ください。詳細については、「プロジェクトの復元」(133ページ)を参照してください。

- 8. アップグレード・プロセスを一時停止するには、 [一時停止]ボタンをクリックします。 続行するには、 [再開]ボタンをクリックします。
- 9. アップグレード・プロセスを中断するには、 [中止]ボタンをクリックします。 [はい]ボタンをクリックして、確定します。
- 10. [アップグレード結果]表示枠に表示されているメッセージをテキスト・ファイルに保存するには, [**ログをエクスポート**]ボタンをクリックします。[ログをファイルにエクスポート]ダイアログ・ボックスで, 場所を選択し, ファイルの名前を入力します。[保存]をクリックします。
- 11. [アップグレード結果]表示枠に表示されているメッセージをクリアするには, [ログのクリア]ボタン をクリックします。
- 12. [閉じる]をクリックして, [プロジェクトのアップグレード]ダイアログ・ボックスを閉じます。

ドメインのアップグレード

この項では、ドメイン内のすべてのプロジェクトをアップグレードする方法を説明します。

ドメインをアップグレードするには、次の手順を実行します。

- 1. 修復プロセス(「ドメインとプロジェクトの修復」(122ページ)を参照)でプロジェクトをバックアップ済 みの場合は、手順3に進みます。
- プロジェクトをバックアップします。詳細については、「プロジェクトのバックアップ」(132ページ)を参照してください。
- 3. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 4. プロジェクトのリストからドメインを選択します。
- 5. [**ドメインのメンテナンス**]ボタン ジャクリックし, [**ドメインのアップグレード**]を選択します。[アップグレード ドメイン]ダイアログ・ボックスが開きます。

国 アゥブグレード ドメイン		_ 🗆 🗵
アップグレード 設定 実行する前に、プロジェクトのアップグレードに関するすべての作 にしてくておい。 特に、開始する前に、関連するプロジェクトをすべて確実にパック	M面と影響について完全に理解するよう ウアップしてください。	*
アップグレード モード こ	このアップグレードの後:	
 □ サイレント モードで実行 ☑ アッブグレード が失敗した場合、次のブロジェクトを続行 	 ○ すべてのブロジェクトを非アクティブ化のままにしておきます ◎ 現在便用中のブロジェクトのみを起動します ○ すべてのブロジェクトを起動します 	
アップグレード を行うプロジェクトを選択		*
ブロジェクト名 Project1	<u> ハージョン</u>	
すべて選択 すべてクリア バージョン番号の表示		
アップグレード 結果		

- 6. [アップグレード設定]領域の[アップグレードモード]で,次のオプションを選択できます。
 - サイレント・モードで実行:ユーザの介在なしでプロセスを実行します。
 - アップグレードが失敗した場合,次のプロジェクトを続行:アップグレードが失敗した場合に,その次のプロジェクトに進みます。これは,標準設定のオプションです。
- 7. [アップグレード設定]領域の[次のアップグレードの後]で、次のいずれかのオプションを選択できます。
 - すべてのプロジェクトを非アクティブ化のままにしておきます:アップグレード・プロセスの終了後に、すべてのプロジェクトを非アクティブのままにしておきます。
 - 現在使用中のプロジェクトのみを起動します:アクティブだったプロジェクトは、アップグレード・プロセスの終了後に再びアクティブにします。これは、標準設定のオプションです。
 - すべてのプロジェクトを起動します:アップグレード・プロセスの終了後に、すべてのプロジェクトを アクティブにします。
- 特定のプロジェクトの現在のバージョン番号を表示するには、そのプロジェクト名を選択します。 すべてのプロジェクトのバージョン番号を表示するには、[すべて選択]をクリックします。[バージョン 番号の表示]ボタンをクリックします。

[バージョン]カラムに、プロジェクトのバージョン番号が表示されます。

特定のプロジェクトをアップグレードするには、そのプロジェクト名を選択します。すべてのプロジェクトをアップグレードするには、[すべて選択]をクリックします。[プロジェクトのアップグレード]ボタンをクリックします。

非サイレント・モードでプロセスを実行しているときにエラーが発生すると、メッセージ・ボックスが開きます。状況に応じて、[中止]または[再試行]ボタンをクリックしてください。

アップグレードが失敗すると、エラー・メッセージが失敗の理由とともに表示され、ログ・ファイルを参照するように促されます。バックアップしたプロジェクトを復元してから、アップグレードを再試行して ください。詳細については、「プロジェクトの復元」(133ページ)を参照してください。

- 10. アップグレード・プロセスを一時停止するには、 [一時停止]ボタンをクリックします。 続行するには、 [再開]ボタンをクリックします。
- 11. アップグレード・プロセスを中断するには、 [中止]ボタンをクリックします。 [はい]ボタンをクリックして、確定します。
- 12. [アップグレード結果]表示枠に表示されているメッセージをテキスト・ファイルに保存するには, [**ログをエクスポート**]ボタンをクリックします。[ログをファイルにエクスポート]ダイアログ・ボックスで, 場所を選択し, ファイルの名前を入力します。[保存]をクリックします。
- 13. [アップグレード結果]表示枠に表示されているメッセージをクリアするには、 [ログのクリア]ボタン をクリックします。
- 14. [閉じる]をクリックして, [アップグレードドメイン]ダイアログ・ボックスを閉じます。

例外ファイルの定義

テーブル, カラムの追加などでスキーマが変更済みの場合は, アップグレード・プロセスが失敗すること があります。 データベースのユーザ・スキーマに手動で追加されたオブジェクトで, スキーマ設定ファイル に定義されていないものについては, 例外ファイルを定義できます。 そうすることで, このような変更を アップグレード・プロセス中に無視するよう ALM に指示します。

例外ファイルを使用すると、特別なテーブル、ビュー、カラム、シーケンスに対する警告を無視できます。手動での修復が必要なほかの問題については、データベース管理者に相談してください。

検証,修復,アップグレードのプロセスを実行するときは、同じ例外ファイルを使用する必要があります。

例外ファイルは, 1つのプロジェクトに対して設定することも,「サイト管理」内のすべてのプロジェクトに 対して設定することもできます。

注意: スキーマに手動で追加されたオブジェクトに対する警告を,例外ファイルを使って無視すると、プロジェクトのアップグレードが不安定になったり,データベース・ユーザ・スキーマの有効性が失われたりする場合があります。

例外ファイルを定義するには、次の手順を実行します。

 ALM インストール・ディレクトリにある SchemaExceptions.xml ファイルをコピーします。このファイ ルは、標準設定ではくALM のインストール・パス> \data\sa\DomsInfo\MaintenanceData に あります。 2. 例外ファイル(my_exceptions.xml など)を作成し、次のように例外を定義します。

```
例

    特別なテーブルについて:

  <TableMissing>
          <object pattern="MY_Table" type="extra"/>
  </TableMissing>
■ 特別なビューについて:
  <ViewMissing>
          <object pattern="MY_VIEW" type="extra"/>
  </ViewMissing>
■ 特別なカラムについて:
  <ColumnMissing>
          <object pattern="MY_COLUMN" type="extra"/>
  </ColumnMissing>
■ 特別なシーケンスついて:
  <SequenceMissing>
          <object pattern="MY_SEQUENCE" type="extra"/>
  </SequenceMissing>
```

- 3. 例外ファイルを1つのプロジェクトに対して設定するには、次の手順で行います。
 - a. 「サイト管理」の[サイトのプロジェクト]タブをクリックします。
 - b. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。右の表示枠の[プロジェクト詳細]タブを選択します。プロジェクトの詳細が表示されます。
 - c. [**プロジェクト データベース**]で[**例外ファイル**]をクリックします。[例外ファイルの編集]ダイアロ グ・ボックスが開きます。
 - d. ファイルの場所を入力します。ファイルは、
 くALM デプロイメント・パス> \sa\DomsInfo\MaintenanceData に配置されます。
- 4. 例外ファイルをすべてのプロジェクトに対して設定するには、次の手順を実行します。
 - a. 「サイト管理」の[サイト設定]タブをクリックします。
 - b. UPGRADE_EXCEPTION_FILE パラメータをパラメータ・リストに追加し、例外ファイルの場所を定義します。ファイルは、
 <ALM デプロイメント・パス> \sa\DomsInfo\MaintenanceData に配置されます。

パラメータの設定の詳細については、「ALM 設定パラメータの指定」(189ページ)を参照して ください。

このパラメータの詳細については、「UPGRADE_EXCEPTION_FILE」(224ページ)を参照してください。

プロジェクト のバックアップ

修復プロセスまたはアップグレード・プロセスを実行すると、ALM では、現行バージョンの ALM の仕様 に合わせるために、プロジェクトの変更内容を実行します。また、修復やバックアップ以外でも、ALM はバックアップを毎日実行します。プロジェクトの修復またはアップグレードを開始する前に、プロジェク トをバックアップする必要があります。

プロジェクトをバックアップする前に非アクティブにするように強くお勧めします。 プロジェクトがまだアクティ ブなときにバックアップする必要がある場合は、 ファイル・システムの前にデータベースをバックアップする 必要があります。 データベースのバックアップ後できるだけ早く、 ファイル・システムもバックアップすることを お勧めします。

ファイル・システムがバックアップを保留中に、ガーベジ・コレクタが古いファイルを削除しないように、削除の前に1週間の猶予期間があります。詳細については、「REPOSITORY_GC_DELAY_ CANDIDATE_TIME」(218ページ)を参照してください。

注:

- 修復プロセスは、プロジェクト・データベース・スキーマに対してのみ変更を行います。修復プロセスの前には、データベース・サーバ上のプロジェクト・データベース・スキーマのバックアップは必要ですが、ファイル・システム内のプロジェクト・データのバックアップは不要です。
- アップグレード・プロセスの前には、プロジェクト・データベース・スキーマとプロジェクト・データを含むプロジェクトのフルバックアップを行ってください。

データベース・サーバ上のプロジェクト・データベース・スキーマをバックアップするには, 次の手順を実行します。

- Microsoft SQL データベース: Microsoft SQL データベース・スキーマのバックアップに関する詳細は、HP ソフトウェアのセルフ・ソルブ技術情報の記事 KM169526 (http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM169526)を参照してください。
- Oracle データベース: Oracle データベース・スキーマのバックアップに関する詳細は、HP ソフトウェアのセルフ・ソルブ技術情報の記事 KM205839 (http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM205839)を参照してください。

ファイル・システムのプロジェクト・データをバックアップするには、次の手順を実行します。

ファイル・システムで、すべてのデータ(自動テスト・スクリプトと結果、添付)がALMのインストール時に定義したリポジトリにあるプロジェクト・ディレクトリに保存されていることを確認します。このプロ

ジェクト・ディレクトリを、サブディレクトリとファイルをすべて含めてコピーします。

• Quality Center 10.00 からのアップグレード:自動化テストをプロジェクト・ディレクトリ以外の場所 に保存している場合は、コピーを作成します。

ヒント: テストがプロジェクト・ディレクトリ以外の場所に保存されているかどうかを確認するに は、サイト管理にログインします。[サイトのプロジェクト]タブでバックアップしたいプロジェクトを 展開し、DATACONST テーブルをクリックします。値が tests_directory である DC_CONST_ NAME パラメータを選択し、それに対応する DC_VALUE を確認します。 tests 以外の場所 に設定されている場合、テストはプロジェクト・フォルダには保存されていないことを示します。

プロジェクトの復元

修復プロセスまたはアップグレード・プロセスが失敗した場合は、バックアップしてあるプロジェクトを復元してから、プロセスを再試行する必要があります。Oracle または Microsoft SQL データベース・サーバ上、またはファイル・システム内にバックアップしてあるプロジェクトを復元できます。復元したプロジェクトは、それがバックアップされた ALM/Quality Center バージョンのみで使用できます。

プロジェクトの復元をアップグレード処理全体の一環として行う場合(たとえば,新しいサーバやデータ ベースに移動する場合)は, dbid.xml ファイルをそれに合わせて更新する必要があります。詳細につ いては,「プロジェクトへのアクセスの復元」(106ページ)を参照してください。

これまで Performance Center 11.00 を使用していた場合は、「LAB_PROJECT の復元」(135ページ)を参照してください。

本項の内容

Microsoft SQL データベース・サーバからのプロジェクトの復元	133
Oracle データベース・サーバからのプロジェクトの復元	134
ファイル・システムからのリポジトリの復元	
LAB_PROJECT の復元	

Microsoft SQL データベース・サーバからのプロジェクト の復元

この項では、Microsoft SQL データベース・サーバにバックアップされているプロジェクトの復元方法について説明します。

詳細については、HP ソフトウェアのセルフ・ソルブ技術情報の記事 KM169526 (http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM169526)を参照してください。

Microsoft SQL データベース・サーバからプロジェクトを復元するには、次の手順を実行します。

 SQL Server Enterprise Manager でデータベースに移動し、 [ツール]> [データベースの復元]を 選択します。

- 2. バックアップ・ファイルに移動し、復元手順に従って、データの復元プロセスを完了します。
- 3. 「サイト管理」で、プロジェクトを復元します。プロジェクトを別のディレクトリから復元する場合や、 スキーマの名前が変更されている場合は、dbid.xml ファイルをそれに合わせて更新する必要が あります。詳細については、「プロジェクトへのアクセスの復元」(106ページ)を参照してください。
- 4. プロジェクトがアクティブな状態でバックアップを実行する場合は、プロジェクト・リポジトリの再調整 を行ってください。詳細については、「リポジトリの再調整」(90ページ)を参照してください。

Oracle データベース・サーバからのプロジェクトの復元

この項では、Oracle データベース・サーバにバックアップされているプロジェクトの復元方法について説明します。

詳細については、HP ソフトウェアのセルフ・ソルブ技術情報の記事 KM205839 (http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM205839)を参照してください。

Oracle データベース・サーバからプロジェクトを復元するには、次の手順を実行します。

- 1. バックアップ・ファイルを Oracle サーバ・マシンにコピーします。
- 2. SQL*Plus ユーティリティを使って, system アカウントで Oracle サーバにログインします。
- 3. ALM プロジェクトのユーザを作成します。作成するユーザは、必ず、プロジェクトがエクスポートされ たときのプロジェクト名(または Oracle ユーザ名)と同じ名前にしてください。

次の SQL ステートメントを使用します。

CREATE USER [<プロジェクト名>] IDENTIFIED BY tdtdtd DEFAULT TABLESPACE TD_ data TEMPORARY TABLESPACE TD_TEMP;

GRANT CONNECT, RESOURCE TO [<プロジェクト名>];

- 4. ALM インストール DVD で、 **\Utilities\Databases\Scripts** ディレクトリを探します。qc_project_ db___oracle.sql ファイルを開いて、指示に従います。
- 5. コマンド・ラインで, imp と入力してインポート・ユーティリティを実行します。
- 6. プロンプトに従い, system アカウントで Oracle サーバにログインします。必ず、ダンプ・ファイルをす べてインポートしてください。

すべてのテーブルを正しくインポートできたら、確認メッセージが表示されます。

- 「サイト管理」で、プロジェクトを復元します。プロジェクトを別のディレクトリから復元する場合や、 スキーマの名前が変更されている場合は、dbid.xml ファイルをそれに合わせて更新する必要が あります。プロジェクトへのアクセスの復元の詳細については、「プロジェクトへのアクセスの復元」 (106ページ)を参照してください。
- 8. プロジェクトがアクティブな状態でバックアップを実行する場合は、プロジェクト・リポジトリの再調整 を行ってください。詳細については、「リポジトリの再調整」(90ページ)を参照してください。

ファイル・システムからのリポジトリの復元

この項では、ファイル・システムにバックアップされているプロジェクトの復元方法について説明します。

ファイル・システムからリポジトリを復元するには、次の手順を実行します。

- 1. バックアップされたリポジトリを ALM リポジトリにコピーします。
- 「サイト管理」で、プロジェクトを復元します。プロジェクトを別のディレクトリから復元する場合や、 スキーマの名前が変更されている場合は、dbid.xml ファイルをそれに合わせて更新する必要が あります。プロジェクトへのアクセスの復元の詳細については、「プロジェクトへのアクセスの復元」 (106ページ)を参照してください。
- 3. プロジェクトがアクティブの状態でバックアップが実行された場合は、データベースを復元し、データベースのバックアップが作成された後に作成されたバックアップからファイル・システムを復元し、プロジェクトの再調整を行った後にプロジェクトをアクティブにする必要があります。災害復旧時には、必ずこの手順を実行する必要があります。詳細については、「リポジトリの再調整」(90ページ)を参照してください。このプロセスを実行して特定のファイルやディレクトリを復元する場合は、再調整を省略することができます。

LAB_PROJECT の復元

これまで Performance Center 11.00 を使用していて, ALM12.00 が新しいサーバにインストールされる 場合は, バックアップしたプロジェクトを新しいサーバ上に復元する必要があります。ほかの Performance Center プロジェクトの復元とアップグレードを実行する前に, まず, LAB_PROJECT の 復元とアップグレードを実行し, 次に Performance Center テンプレート・プロジェクトの復元とアップグ レードを実行する必要があります。

LAB_PROJECT は、「サイト管理」の[ラボ管理]タブから復元します。詳細については、『HP ALM ラ ボ管理ガイド』を参照してください。

Performance Center 11.00 プロジェクトの復元は,次の手順で行います。

- 1. インストール時に新しいサイト管理スキーマが作成された場合は、新しいLAB_PROJECTが作成されています。Performance Center 11.00のLAB_PROJECTを復元するには、まず、新しい LAB_PROJECTをALM 11.50 サーバから削除する必要があります。
- 2. ALM 12.00 の「サイト管理」で, Performance Center 11.00 の LAB_PROJECT を復元します。
- 3. LAB_PROJECT の検証, 修復, アップグレードに進みます。詳細については, 「プロジェクトの アップグレードについて」(114ページ)を参照してください。

検証プロセスが失敗し,機密データ・パスフレーズを使用してプロジェクト・フィールドを暗号化することができないというエラー・メッセージが表示される場合は、『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグレード・ガイド』の付録「アップグレードの準備のトラブルシューティング」の「暗号化された値」の項を参照してください。

4. すべての Performance Center 11.00 テンプレート・プロジェクトを復元,検証,修復,アップグレー

ドします。

注: Performance Center 11.00 テンプレート・プロジェクトは DEFAULT ドメインに復元する 必要があります。

5. Performance Center 11.00 プロジェクトを復元, 検証, 修復, アップグレードします。

リポジトリの移行

ALM バージョン 11.00 以降では, 最適化された新しいプロジェクト・リポジトリ構造を使用しており, ストレージ領域を最大限に活用できます。新しいリポジトリの詳細については, 「最適化されたプロジェクト・リポジトリの管理」(87ページ)を参照してください。

プロジェクトを Quality Center 10.00 から ALM 11.50 にアップグレード する場合は、プロジェクト・リポジト リが、最適化されたリポジトリ形式に自動的にアップグレードされます。これは、次の2つの段階で行われます。

- 1. 最初の段階は、プロジェクトのアップグレード中に実行されます。この段階では、リポジトリ内のす べてのファイルがスキャンされ、その名前がプロジェクト・テーブルに格納されます。
- アップグレードが完了すると、プロジェクトが再度アクティブ化されます。リポジトリ・ファイルは、新しいシステムに段階的に移行されます。この段階では、ファイルが古い場所から最適化リポジトリ内の新しい場所に移動されます。ファイルの移行は、リポジトリのサイズ、ネットワークの速度などのさまざまな要因に応じて、数日かかることがあります。

リポジトリ移行のこの2番目の段階は、バックグラウンドで実行されます。この処理が実行中であっても、ユーザはプロジェクト内で作業できます。アップグレードの後でプロジェクトに追加する新しいファイルは、新しいプロジェクト・リポジトリに保存されます。

注:

- プロジェクトの移行プロセスが完了するまでは、プロジェクトのエクスポートやコピーは実行できません。
- プロジェクトのバックアップを移行が完了する前に実行するには、移行プロセスを一時停止する必要があります。詳細については、「移行の優先度の設定」(140ページ)を参照してください。

移行プロセスは、 [リポジトリの移行の状態] ウィンド ウで監視し、発生する可能性がある問題があれば、 トラブルシューティングを実行してください。

「サイト管理」では、ファイルの移行状態をプロジェクトごとに追跡し、移行の実行に割り当てるリソース数を設定できます。

本項の内容

[リポジトリの移行の状態]ウィンドウ	. 137
移行の優先度の設定	. 140

[リポジトリの移行の状態] ウィンドウ

このウィンドウには、すべてのサイト・プロジェクトがリストされます。また、そのプロジェクトを、最適化されたプロジェクト・リポジトリに移行している状況も表示されます。

メイン名	プロジェクト名	ブロジェクトの状態	移行の状態	移行の進行状況	
.MTEST	ForBPT	Active	Done	100%	
MTEST	TEST	Active	Done	100%	
MTEST	test22	Active	Done	100%	
FAULT	LAB_PROJECT	Active	Done	100%	
FAULT	template001	Active	Done	100%	
FAULT	test	Active	Done	100%	
FAULT	test1	Active	Done	100%	
加格報 【 ・ イト管理の自言	カメールのオブション -				
加倍報 イト管理の自動	ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー		エラー時に電子メール		
 細修委 イト管理の自動 成功時に電 受警告時に電 	カメールのオブション − 行子メールを送信 子メールを送信	 	エラー時に電子メール ログを添付ファイルと	/を送信	
加倍級 イト管理の自動 の成功時に電 マリーー リポジトリの移	かメールのオブション ー 予子メールを送信 行がサイトで実行中:Yes	2	エラー時に電子メール ログを添付ファイルと	ッを送信 : して含める	
加倍報 イト管理の自想 の成功時に電 マリーー リポジトリの参 修行中のブロジ			エラー時に電子メール ログを添付ファイルと 撃告付きのブロジェ!	/を送信 :して含める フト数:0	•
組倍報 イト管理の自 ・ 成功時に電 マリ リポジトリの移 移行中のプロジ 移行が失敗した	87 × − ルのオブション − 177 × − ルを送信 177 × − ルを送信 176 サイトで実行中:Yes エクト数:0 フロジェクト数:0	2	エラー時に電子メール ログを添付ファイルと 警告付きのブロジェ 完全に歩行されたブ	/を送信 :して含める フト数:0 コジェクト数:8	

アクセス方法	[サイト管理]で, [ツール]>[リポジトリの移行の状態]を選択します。
参照情報	• 「リポジトリの移行」(136ページ)
	•「移行の優先度の設定」(140ページ)
	• 「最適化されたプロジェクト・リポジトリの管理」(87ページ)

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI要素	説明
	選択されたプロジェクトの移行を再開するよう ALM に指示します。
■ 再開	選択されたプロジェクトの移行中に, エラーまたは警告が検出された場合は, [追加情報]フィールドに記述された問題を修正し, [再開]をクリックします。
	注:移行プロセスが停止した原因がファイルの欠落だった場合は、 [再開]をクリックした後で、足りないファイルを復元することができな くなります。
	選択されたプロジェクトに関連する移行イベントのログをダウンロードしま
😼 ログのダウンロード	す。

UI要素	説明
(Pr.	更新:表示内容を最新情報で更新します。
2	注: グリッドは, 1000 ファイル移行されるごとに, 自動的に更新され ます。
ドメイン名	選択されたプロジェクトが所属するドメイン。
プロジェクト名	選択されたプロジェクトの名前。
プロジェクトの状態	選択されたプロジェクトの,「サイト管理」での状態を示します。たとえ ば, [アクティブ]や[非アクティブ]などがあります。
	注: プロジェクトを非アクティブにしても,そのリポジトリの移行には影響しません。

UI要素	説明
移行の状態	プロジェクトの移行の状態は、次のいずれかになります。
	 None: プロジェクトは ALM 12.00 にアップグレードされていません。また,移行は行われません。
	• Pending: ファイルの移行は保留中です。
	• Migrating: ファイルの移行が進行中です。
	• Done: ファイルの移行が完了しました。
	• Error: ファイルの移行中にエラーが発生し,移行を完了できませんでした。エラーの原因については, [追加情報]パネルを参照してください。エラーを修正してから, [再開]をクリックしてください。
	 Warning: ファイルの移行中に警告が発生しました。
	警告の詳細や, 問題の解決に必要なアクションの情報を得るには, [追加情報]パネルに表示されているログ・ファイルをダウンロードして ください。必要であれば問題を解決し, [再開]をクリックして, 移行 を完了してください。
	警告の原因としてはいくつか考えられます。
	 プロジェクト・リポジトリ内で、1つまたは複数のプロジェクト・ファイルが見つからなかった。これは、ファイルがない場合や、ファイル名が変更されている場合に起こります。
	 リポジトリ内に冗長なファイルがある。従来のリポジトリにファイルが残っている間は、移行を完了できません。冗長なファイルは、次のいずれかです。
	 削除できなかった重複プロジェクト・ファイル。これは、アクセス許可 が不十分なことが原因で発生する場合があります。
	■ プロジェクト・リポジトリ内に手動で保存された, ALM に無関係な ファイル。
	■ 識別できないプロジェクト・ファイル。
移行の進行状況	新しいリポジトリに移行されたプロジェクト・ファイルの数。 プロジェクト・ファ イルの総数に対する百分率で示されます。
追加情報	問題が検出されると、その原因とログ・ファイルへのリンクを表示します。 ログ・ファイルには、問題の解決に必要なアクションが記述されます。

UI要素	説明
サイト管理者の自動 メールのオプション	リポジトリの移行に関するイベントが発生すると, ALM はサイト管理者に 自動メールを送信します。次のオプションを選択できます。
	• 成功時にメールを送信:プロジェクト・リポジトリの移行が問題なく完 了した場合にメールを送信します。
	• 警告時にメールを送信:プロジェクト・リポジトリの移行中に警告が発生した場合にメールを送信します。
	• エラー時にメールを送信:プロジェクト・リポジトリの移行中にエラーが 発生した場合にメールを送信します。
	• ログを添付ファイルとして含める:自動メール・メッセージに詳細なロ グ・ファイルを添付します。
サマリ	すべてのサイト・プロジェクトの移行の状態の要約情報。

移行の優先度の設定

移行プロセスは, ユーザが行うプロジェクトの作業に干渉することはありませんが, システム全体のパ フォーマンスに影響することがあります。 次の設定 パラメータを使用すると, 移行プロセスが使用するシ ステム・リソースの量を制御できます。

- REPOSITORY_MIGRATION_JOB_PRIORITY: 旧から新のプロジェクト・リポジトリにファイルをコ ピーするときの速度を規定します。詳細については、「REPOSITORY_MIGRATION_JOB_ PRIORITY」(219ページ)を参照してください。
- SUSPEND_REPOSITORY_MIGRATION:リポジトリの移行をサイト全体で停止します。このパラメータは、特殊な状況で一時的にのみ使用してください。たとえば、移行プロセスがシステムの動作を妨げていることが考えられる場合などです。詳細については、「SUSPEND_ REPOSITORY_MIGRATION」(223ページ)を参照してください。

移行プロセスに割り当てるリソースを設定するためには、ほかのパラメータも利用できます。詳細については、HP ソフトウェアのセルフ・ソルブ情報技術の記事 KM862600 (http://support.overview.hp.com/selfsolve/document/KM862600)を参照してください。

移行の優先度を設定する場合は、次のことを考慮してください。

- 移行プロセスに割り当てるリソースを増やすと、ほかのプロセスの処理速度が遅くなることがあります。
- 割り当てるリソースを減らすと、プロセスが完了するまでの時間が長くなります。
- 移行が保留中または進行中のプロジェクトは、エクスポートすることもコピーすることもできません。

LAB_PROJECT のアップグレード後の手順

Performance Center 11.00 プロジェクトをアップグレードした場合,ステージング環境と運用環境で次の手順を実行します。

これらの手順の詳細については、『HP ALM ラボ管理ガイド』を参照してください。

- 1. **ラボ管理**にログインします。
- 2. 外部 URL を設定します。
 - a. ラボ管理サイドバーの[サーバ]で, [PC サーバ]を選択します。
 - b. ツールバーで、 [ALM 接続]ボタンをクリックします。 [ALM 接続]ダイアログ・ボックスが開きます。
 - c. 外部 URL の情報を入力します。
- 3. Performance Center サーバを追加します。
 - a. [PC サーバ]ツールバーで, [新規 PC サーバ]ボタンをクリックします。[新規 PC サーバ]ダイ アログ・ボックスが開きます。
 - b. 新しいサーバの情報を定義します。
 - c. [OK]をクリックします。
- 4. 次のようにライセンスの詳細を更新します。
 - a. ラボ管理サイドバーの[Performance Center]で, [PC ライセンス]を選択します。
 - b. 新しいライセンスの情報を定義します。
- 5. 次のようにホストを追加,削除,再設定します。
 - a. ラボ管理サイドバーの[ラボリソース]で, [ホスト]を選択します。
 - b. 必要に応じてホストを追加,削除,再設定します。

マイナー・マイナー・バージョンでのプロジェクトのアップグレード

本項では, マイナー・マイナー・バージョンでプロジェクトをアップグレードする手順について, プロジェクト の優先度設定も含めて説明します。マイナー・マイナー・バージョンには, データベース・スキーマの変 更も含まれます。

注: バージョンが, メジャー, マイナー, マイナー・マイナーのどれに該当するかを確認する方法については, 「バージョンとパッチのナンバリング・スキーマ」(114ページ)を参照してください。

マイナー・マイナー・バージョンの自動アップグレードは、マイナー・マイナー・バージョンのインストール後に ALM Server を再起動すると開始します。

プロジェクトのアップグレード中,ユーザはプロジェクトにアクセスできません。

本項の内容

- •「自動アップグレードの対象」(142ページ)
- 「プロジェクトの優先度」(142ページ)
- 「マイナー・マイナー・バージョンのアップグレード」(142ページ)

自動アップグレードの対象

自動アップグレードでは、次の条件をすべて満たすプロジェクトが対象になります。

- ラボ管理プロジェクト
- プロジェクトのメジャーおよびマイナー・バージョンは、サーバにインストール済みのメジャーおよびマイ ナー・バージョンと同一であるが、マイナー・マイナー・バージョンは、サーバにインストール済みのもの よりも小さい場合。

例

サーバには ALM バージョン 15.25 がインストールされている場合:

- 15.21, 15.22, 15.23, 15.24の各バージョンのプロジェクトが自動的にアップグレードされます。
- バージョン 15.25 と 15.26 のプロジェクトは,自動 アップグレードされません。
- バージョン 14.00 プロジェクトはアップグレードされません。

プロジェクトの優先度

プロジェクトは、次の順序でアップグレードされます。

- テンプレート・プロジェクトとラボ管理プロジェクト
- 優先度(ユーザ設定)が最も高いプロジェクト
- 使用頻度の高いプロジェクト
- 変更日付が新しいプロジェクト
- ユーザ数が多いプロジェクト

マイナー・マイナー・バージョンのアップグレード

1. ALM Server でマイナー・マイナー・バージョンのアップグレードを行う場合,サイト管理の[プロ

ジェクト アップグレードの優先度]ダイアログ・ボックスで、プロジェクトのアップグレード順序を示す 優先度をオプションで指定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「マイナー・マイ ナー・バージョンのアップグレードに適用するプロジェクトの優先度の設定」(143ページ)を参照し てください。

- 2. データベースをバックアップします。
- 3. 次の手順に従って,新しいマイナー・マイナー・バージョンを ALM サーバにインストールします。
 - HP ソフトウェアサポート Web サイトを開きます。[ヘルプ]> [ソフトウェア サポート オンライン] を選択します。Web サイトの URL は http://support.openview.hp.com/ です。
 - 『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグレード・ガイド』

ALM Server を再起動すると、指定した優先度に基づいてプロジェクトが自動的にアップグレードされます。

本項の内容

マイナー・マイナー・バージョンのアップグレードに適用するプロジェクトの優先度の設定143

マイナー・マイナー・バージョンのアップグレードに適用するプロジェクトの優先度の設定

[プロジェクト更新優先度の設定]ダイアログ・ボックスを使用すると、マイナー・マイナー・バージョンを アップグレードするためのプロジェクトの優先度を設定できます。

Ω 標準設定値の	復元 ブロジェクト名	٩
ペメイン名	プロジェクト名	Priority: 1(Highest) to 100 △
DEFAULT	LAB_PROJECT	1
DEFAULT	template001	1
ALMTEST	TEST	100
ALMTEST	test22	100
DEFAULT	test	100
DEFAULT	test1	100
OMAIN	Project1	100

アクセス方法	「サイト管理」で, [ツール]>[プロジェクト アップグレードの優先度]を選択し ます。
重要な情報	 プロジェクトは優先度の順にリストされます。最も優先度が高いプロジェクトが、リストの一番上に表示されます。
	 ラボ・プロジェクトとテンプレート・プロジェクトが、常に最も高いの優先度になります。これらのプロジェクトの優先度は変更できません。
	 優先度はいつでも設定できます。変更は、次のマイナー・マイナー・バージョンのアップグレードに影響を与えます。該当するアップグレードが進行中の場合、変更が影響するのは、ステータスが[アップグレード保留中]のプロジェクトのみです。
参照情報	• 「プロジェクトの新規バージョンへのアップグレード」(113ページ)
	 『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグレード・ ガイド』

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI要素	説明
💭 標準設定値の復元	標準設定に戻す: プロジェクトの優先度を標準設定値の 100 にリセット します。
	注:[標準設定に戻す]は, ラボ・プロジェクトまたはテンプレート・プロ ジェクトの優先度には影響しません。
9	検索 : [プロジェクト名]テキスト・ボックスを使用して, グリッド内のプロ ジェクトに移動できます。
ドメイン名	ドメインをリストします。
プロジェクト名	プロジェクトをリストします。
優先度	次回アップグレードのプロジェクトの優先度を表示します。1 は優先度が 最も高くなります。100 は優先度が最も低くなります。
第6章: ALM ユーザの管理

HP Application Lifecycle Management(ALM)のユーザは、「サイト管理」で管理します。新規ユーザの追加,ユーザの詳細の定義,ユーザのパスワードの変更,サイト管理者の定義などを実行できます。LDAP からユーザをインポートしたり、ユーザの LDAP 認証または外部認証を有効にすることもできます。追加したユーザには、プロジェクトを割り当てることができます。

本章の内容

ユーザの管理について	146
新しいユーザの追加	146
LDAP からのユーザのインポート	148
ユーザの詳細の更新	157
ユーザの非アクティブ化とアクティブ化	
パスワードの作成と変更	158
ユーザの認証の有効化	159
ユーザへのプロジェクトの割り当て	162
ユーザ・データのエクスポート	164
ユーザの削除	164

ユーザの管理について

ALM プロジェクトに接続されるユーザは「サイト管理」で管理します。最初に行うのは、「サイト管理」 のユーザのリストに新規ユーザを追加またはインポートする作業です。次に、ユーザの詳細を定義し、 ユーザのパスワードを変更または上書きすることができます。また、ユーザが自分のLDAP パスワードを 使用して、ALM にログインできるようにすることも可能です。

ALM ユーザごとに, ユーザがアクセス可能なプロジェクトを選択できます。また, ALM ユーザをサイト管理者として定義することもできます。詳細については,「サイト管理者の定義」(29ページ)を参照して ください。

注: ALM サーバに現在接続されているユーザを監視できます。詳細については、「ユーザ接続と ライセンスの管理」(165ページ)を参照してください。

新しいユーザの追加

「サイト管理」のユーザのリストに新しいユーザを追加できます。 ユーザを追加したら, ユーザを表示して, ユーザの詳細を定義できます。 ユーザ詳細の更新方法の詳細については, 「ユーザの詳細の更新」(157ページ)を参照してください。

新しいユーザを LDAP ディレクトリからインポート することもできます。 詳細については,「LDAP からの ユーザのインポート」(148ページ) を参照してください。

注: ALM プロジェクトに対して新規ユーザを作成する処理は, 2段階で行われます。

- 「サイト管理」のユーザのリストにユーザを追加(この項で説明)。
- [プロジェクト カスタマイズ]を使用してユーザをユーザ・グループに追加。各ユーザ・グループ は、ALM の作業に対する一定のアクセス権を持っています。詳細については、「プロジェクトの ユーザ管理」(283ページ)および「ユーザ・グループとアクセス許可の管理」(289ページ)を参照 してください。

新しいユーザを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブをクリックします。

サイトのプロジェクト	サイトのユーザ サイトの接続 ライセ	'センス サーバ DB サーバ サイト設定 サイト分析 プロジェクトの計画と追跡
🎽 🎄 🔲 🎄 検	ж й 🗛 🔆 🖓 - 📕 🕓	G 🌲 パスワード
▲ ユーザ名 Allalm_admin alm_admin2	名前 David Banks Roy Fields	alm_admin
alm_admin3 james_alm mary_alm	Pamela Knight james_alm marv_alm	ユーザ詳細 ユーザ ブロジェクト
a peter_alm test	peter_alm	ユーザ名 alm_admin
		名前: David Banks
		a booka a booka a booka a booka b b b b c b c b c b c b c b c b c b c b
		電子メール
		電話番号:
		說明
ユーザ合計: 7		

- 2. [ユーザの新規作成]ボタン をクリックします。[ユーザの新規作成]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 3. [ユーザ名](最長 60 文字)を入力します。ユーザ名には、次の文字は使用できません。()@\ /:*?"`<>|+=;,%
- 4. 次の内容を入力します。[名前], [電子メール], [電話番号], [説明]。電子メール情報は 重要です(この情報があると、プロジェクトの情報をユーザが自分のメールボックスで直接受け取 ることができます)。

注:スマート・カード認証の場合,スマート・カードの電子メールを[**電子メール**]に,スマート・ カードの共通名(CN)を[説明]に入力します。シングル・サインオン(SSO)認証の場合,電 子メールとユーザ名を[説明]に入力します。

ユーザの情報は[ユーザ詳細]タブで更新できます。詳細については、「ユーザの詳細の更新」(157ページ)を参照してください。

- 5. [OK]をクリックします。新しいユーザがユーザのリストに追加されます。
- 6. 新しいユーザにパスワードを設定します。タスクの詳細については、「パスワードの作成と変更」 (158ページ)を参照してください。

注:新規作成されたユーザのパスワードは空白に設定されています。

LDAP からのユーザのインポート

LDAP ディレクトリのユーザを「サイト管理」のユーザのリストにインポートできます。

注:

- LDAP インポート設定が定義されていることを確認してください。詳細については、「ユーザを インポートするための LDAP 設定の定義」(152ページ)を参照してください。
- LDAPをSSL経由で使用するには、別の手順も実行する必要があります。詳細については、「LDAP over SSLの有効化」(150ページ)を参照してください。
- LDAP_TIMEOUT パラメータを使用すると、ALM とLDAP サーバとの間の接続タイムアウトを 定義できます。標準設定では、この値は10分に設定されています。詳細については、 「LDAP TIMEOUT」(211ページ)を参照してください。

ユーザの選択は, LDAP ディレクトリ・ベースに対するフィルタ処理と参照で行うか, ユーザをキーワード で検索して行います。

LDAP ディレクトリ・ベースを参照するには、次の手順で行います。

- 1.「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブをクリックします。
- 2. [LDAP ユーザをインポート]ボタン をクリックし, [LDAP ユーザをインポート(フィルタを使用)] を選択します。[LDAP ユーザをインポート(フィルタを使用)]ダイアログ・ボックスが開きます。

🞎 LDAP ユーザをインボート	(フィルタを使用)			[×
 ▼ ・ □ □ 全項目をマーク ディレクトリのベース: フィルタ: 	7 •			0	
ユーザ名	名前	説明	電子メール	電話	
🕂 🗌 🔒 TelnetClie	.TelnetClients	このグループのメ			
🕂 🗌 👬 test	test		test@ADTEST.com		
🛨 🗌 📩 testman	test man				
🗄- 🗌 👬 tester2	tester2				
🛨- 🗌 👬 tester3	tester3				
🛨- 🗌 👬 tester4_A	tester4				
🗄- 🗌 👬 testtest	testtest				
🗄- 🗔 🔒 UCMDB	UCMDB				
🗄- 🗌 🔒 UCMDB2	UCMDB2				
📄 🗇 📩 テスト	テスト		testkanji@ADTES		
	インボー	-ト 閉じる			

 LDAP ディレクトリ・ベースをフィルタ処理するには、 [すべてフィルタ]ボタン をクリックします。 ユーザが事前選択済みの場合は、警告メッセージ・ボックスが表示されます。 [OK]をクリックし、 選択内容をすべてクリアして続行します。 [フィルタ]ダイアログ・ボックスが開きます。 LDAP ディ レクトリ・ベースから特定のレコードを表示するフィルタ条件を入力し、 [OK]をクリックします。

- 4. ユーザの LDAP の詳細を表示するには、項目を選択し、 [LDAP の詳細を表示]ボタン リックします。 [LDAP ユーザの詳細]ダイアログ・ボックスが開いて、ユーザの属性が表示されま す。
- 5. 次のオプションを使用して,ユーザをインポートできます。
 - 1人のユーザをインポートするには、ディレクトリを展開し、チェック・ボックスを選択してユーザ名 をマークします。
 - ユーザをまとめてインポートするには、CTRL または SHIFT を使用して、対象とするユーザを強調表示します。[全項目をマーク]矢印をクリックし、[選択した項目をマーク]を選択して、強調表示されているユーザのチェック・ボックスを選択します。
 - すべてのユーザをインポートするには、 [全項目をマーク]をクリックします。
- 6. 強調表示されているユーザのチェック・ボックスをクリアするには、「全項目をマーク]矢印をクリックし、[選択した項目をクリア]を選択します。すべてのチェック・ボックスをクリアするには、[全項目をマーク]矢印をクリックし、[すべてクリア]を選択します。
- 7. [インポート]をクリックします。確認メッセージ・ボックスが開きます。[はい]ボタンをクリックして、処理を続けます。
 - ユーザを正しくインポートできた場合は、メッセージ・ボックスが開きます。[OK]をクリックし、 [閉じる]をクリックして、[LDAP ユーザをインポート]ダイアログ・ボックスを閉じます。
 - 同じユーザ名 がユーザのリスト内に存在する場合は、[競合を処理]ダイアログ・ボックスが開きます。詳細については、「競合するユーザ名の処理」(155ページ)を参照してください。
- 8. [**閉じる**]をクリックして, [LDAP ユーザをインポート]ダイアログ・ボックスを閉じます。

ユーザをキーワードで検索するには、次の手順で行います。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのユーザ**]タブをクリックします。
- 2. [LDAP ユーザをインポート]矢印 ゆうたり (LDAP ユーザをインポート(キーワードを使用)]を選択します。[Import LDAP Users by Keyword]ダイアログ・ボックスが開きます。

🕵 Import LD/	AP Users by ke	yword				×
Find	éh					0
User Name	Full Name	Group	Description	Email	Phone	
		Impor	t Close			

3. [Find]ボックスにキーワードを入力し, [Find]ボタン ()をクリックします。

キーワードが, [User Name], [Full Name], [Group], [Description], [Email], [Phone] の各フィールドで検索されます。

ヒント: 検索範囲を広げるには, 値の一部を入力します。たとえば, MichaelとMikhaelを 検索するには, Miと入力します。

- 4. [Import]をクリックします。確認メッセージ・ボックスが開きます。[Yes]ボタンをクリックして,処理 を続けます。
 - ユーザを正しくインポートできた場合は、メッセージ・ボックスが開きます。[OK]をクリックし、 [閉じる]をクリックして、[Import LDAP Users]ダイアログ・ボックスを閉じます。
 - 同じユーザ名がユーザのリスト内に存在する場合は、[競合を処理]ダイアログ・ボックスが開きます。詳細については、「競合するユーザ名の処理」(155ページ)を参照してください。
- 5. [Close]をクリックして, LDAP ユーザを検索するダイアログ・ボックスを閉じます。

LDAP over SSL の有効化

ALM では, セキュア・ソケット(SSL)による LDAP 通信転送をサポートしています。これにより, ユーザの資格情報(パスワード)が, ネットワーク上をセキュリティ保護されていない方法で送信されることがなくなります。

本項では、SSLによるLDAP通信を有効にするときの設定手順について説明します。

LDAP サーバの設定:

SSLを使用して通信のセキュリティを確保するには、あらかじめLDAP サーバに次の設定が必要です。

- SSLを有効にする必要があります。
- セキュリティ保護されたポートの設定が必要です(ポートの標準設定値は 636 です)。
- サーバ証明書がインストールされている必要があります。

また, LDAP サーバ証明書を発行した証明機関(CA)のルート証明書を取得する必要もあります (中間証明書がある場合はそれも必要です)。

ALM サーバの設定:

ALM サーバで, あらかじめ次の設定が必要です。

1. 証明書のトラスト・ストア。

多くの場合は、標準設定のトラスト・ストアが使用されます。標準設定のトラスト・ストアは **くJAVA_HOME>**/jre/lib/security/cacerts(標準設定のパスワードは changeit) で、くJAVA_HOME> は ALM に付属する JDK のインストール場所 (C:\Program Files\HP\ALM\java\jre など)です。

2. LDAP サーバ証明書を発行した CA への信頼を確立するため, keytool ユーティリティを使用して, ルート CA 証明書を Java トラスト・ストアにインポートします。

注: keytool ユーティリティは、JAVA_HOME の bin フォルダ(C:\Program Files\HP\ALM\java\jre\bin など) にあります。

例 : keytool -import -alias < LDAP CA> -trustcacerts -file < LDAP CA 証明書> - keystore < JAVA HOME> /jre/lib/security/cacerts

中間証明機関がある場合は、その証明書もインポートします。

SSL 用の LDAP 設定を定義するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブをクリックします。
- 2. [ユーザ設定]ボタン をクリックし, [LDAP インポート設定]を選択します。[LDAP インポート設定]ダイアログ・ボックスが開きます。

LDAP インボート設定	×	
ディレクトリ プロバイダの URL: Idap://serverr	ディレクトリ プロバイダの URL LDAP サーバの URL。	
LDAP 認証タイブ:	ディレクトロ認証の種類	
 ● 匿名 ○ 結局 	唐名: 唐名アガウントを使用するユーザをイ ンポートします。	
	簡易: 承認されたユーザ アカウントとバスワ ードを使用するユーザをインボートします。	
認証アカウント情報:		
接続テスト		
〈 戻る 〉 次へ 〉 「キャンセル 完了 」 ヘルプ		

3. [**ディレクトリプロバイダの URL**]ボックスに LDAP サーバの URL(1dap://くサーバ名>:<ポート番号>)を入力します。

注: ポートは, LDAP サーバでの設定どおりに, SSL に対応している必要があります。標準設定の SSL ポートは **636** です。

ユーザをインポート するための LDAP 設定の定義

LDAP ディレクトリからユーザを「サイト管理」のユーザのリストにインポートできるようにするには、LDAP のインポート設定を定義する必要があります。

LDAP ディレクトリからユーザをインポートすると, LDAP ディレクトリから ALM に属 性 値 がコピーされます。 インポートするユーザごとに, 次の属 性 値 がコピーされます。

• 識別名(DN): カンマで区切られた一連の相対識別名(RDN)で構成される一意の名前。

例:

CN=John Smith, OU=QA, O=HP

CN は共通名, OU は組織単位, O は組織です。

- ユーザ ID(UID): ユーザを正規ユーザとして識別する名前。UID 属性の値は, ALM のユーザ名 フィールドにマップされます。
- 正式名,説明,電子メール,電話:LDAP ディレクトリからインポートされる各ユーザの正式名, 説明,電子メール,電話番号のフィールドにデータを設定するために使用されるオプションの属 性。

注: オプションの LDAP_IMPORT_ATTRIBUTE_MASK パラメータを使用すると, LDAP 属性の さまざまな値を識別する正規表現を定義できます。詳細については,「LDAP_IMPORT_ ATTRIBUTE_MASK」(211ページ)を参照してください。

ユーザをインポートするための LDAP 設定を定義するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブをクリックします。
- 2. [ユーザ設定]ボタンをクリックし, [LDAP インポート設定]を選択します。[LDAP インポート設定]ダイアログ・ボックスが開きます。

LDAP インボート設定	×
 ディレクトリ プロバイダの URL: Idap://server/ LDAP 認証タイブ: ・ 簡易 認証主体: 認証アカウント情報: 	ディレクトリ ブロバイダの URL LDAP サーバの URL。 ディレクトリ認証の種類 置名: 匿名アカウントを使用するユーザをイ ンボートします。 簡易: 承認されたユーザ アカウントとパスワ ードを使用するユーザをインポートします。
接続テスト	
〈 戻る 〉 次へ 〉 キャンセル 一 完	7 ヘルプ

- 3. [**ディレクトリプロバイダの URL**]ボックスに LDAP サーバの URL(1dap://くサーバ名>:<ポー ト番号>)を入力します。
- 4. [LDAP 認証タイプ]で,次の手順を実行します。
 - 匿名アカウントを使って LDAP サーバからユーザをインポートできるようにするには、 [匿名]を 選択します。
 - 承認されたユーザ・アカウントとパスワードを使って、LDAP サーバからユーザをインポートできる ようにするには、[簡易]を選択します。
- 5. [簡易]を選択した場合は、次のオプションを使用できます。
 - [認証主体]ボックスに,承認されたユーザ名を入力します。
 - [認証アカウント情報]ボックスに,パスワードを入力します。
- 6. [接続テスト]ボタンをクリックして, LDAP サーバの URL をテストします。
- 7. 次のいずれかのオプションを選択します。
 - LDAP 設定をさらに定義するには,次の手順に進みます。
 - [LDAP インポート設定]ダイアログ・ボックスを閉じるには、[完了]をクリックします。

8. LDAP 設定をさらに定義するために、 [次へ]をクリックします。 次のダイアログ・ボックスが開きます。

LDAP インボート設定	×	
ディレクトリのベース: 基本フィルタ: (objectClass=*)	ディレクトリのベース 区別された LDAP 階層ノードの名前で す。 これは、すべてのデータ取得操作 でルートとして使用されます。	
Active Directory の標準に設定 LDAP の標準に設定	基本フィルタ これは、LDAP サーバから取得され たレコードに共通する条件を指定す る文字列です。	
言羊約個	標準に設定 Active Directory/LDAP の標準設定値。	
〈 戻る 〉 次へ 〉 「キャンセル) 完了 ヘルブ		

9. [ディレクトリのベース]ボックスに, LDAP ディレクトリの名前を入力します。

注: [ディレクトリのベース]は、LDAP 階層内のノードの識別名であり、データの取得操作の ルートとして使用されます。このフィールドが空のままの場合、LDAP ツリー内のユーザを検 索するときに大幅に時間がかかるようになります。

- 10. [基本フィルタ]ボックスで、フィルタ条件を定義します。
- 11. Active Directory の標準設定値に設定するには、 [Active Directory の標準に設定] ボタンをク リックします。
- 12. LDAP の標準設定値に設定するには、 [LDAP の標準に設定]ボタンをクリックします。
- 13. [結果レコードの上限]ボックスに, [LDAP ユーザをインポート (キーワードを使用)]ダイアログ・ ボックスに表示するレコードの最大数を入力します。標準設定値は1000です。

注: 推奨される最小値の100より小さい値を設定すると、LDAPのインポートや検索の速度が低下することがあります。推奨される最大値の10000より大きい値を設定すると、サーバのメモリが不足する可能性があります。

- 14. 次のいずれかのオプションを選択します。
 - LDAP ディレクトリからインポートするユーザごとに ALM のオプション属性の値を設定するには、 次の手順に進みます。
 - [LDAP インポート設定]ダイアログ・ボックスを閉じるには、[完了]をクリックします。

15. LDAP ディレクトリからインポートするユーザごとに ALM のオプション属性の値を設定するために, [詳細]をクリックします。次のダイアログ・ボックスが開きます。

LDAP インボート	設定	×		
フィールドの *ユーザ名: 名前: 説明: 電子メール: 電話:	マッピング: uid cn description mail telephoneNumber	フィールドのマッピング LDAP フィールドを Application Lifecycle Manasement のフィールド にマップします。		
〈 戻る 〉 次へ 〉 「キャンセル 」 完了 」 へルブ				

- 16. 対応する LDAP フィールド名を定義します。なお、 [ユーザ名] は必須フィールドです。
- 17. [完了]をクリックして, [LDAP インポート設定]ダイアログ・ボックスを閉じます。

競合するユーザ名の処理

LDAP ディレクトリのユーザを「サイト管理」のユーザのリストにインポートするときに、次のような競合が 発生することがあります。

- ユーザが同じ:LDAP 識別名が同じユーザがすでに存在している。
- ユーザ名が同じ:同じユーザ名を持つユーザがすでに存在している。
- ユーザのインポート・プロセスを再開するには、そのユーザをスキップするか、ユーザ名を変更するか、 ユーザ情報を更新します。
- ユーザ名の競合に対処するには、次の手順を実行します。
- 1. ユーザをインポートします(「LDAP からのユーザのインポート」(148ページ)を参照)。 競合が発生 すると、 [競合を処理]ダイアログ・ボックスが開きます。

競合を処理	X		
	競合: ユーザが同じです。 区別されたユーザ名が既に存在 します。		
	競合: ユー ザ名が同じです。 同じユーザ名のユーザが既に存 在します。		
競合:ユーザ名が同じです。 ユーザ名 ソリューション 新規ユーザ名 マローザ名 マション (新規ユーザ名)	解決方法: 無視 - 選択されたユーザを無視 する。 更新 - 既存するユーザ情報を更 新すみ、		
UL_tester ##f#	名前の変更 - 選択されたユーザ に新しい名前を割り当てる。 自動名前変更 - 選択された ユーザに切っの友追加して新しい 名前を割り当てる。		
(続行) キャンセル ヘルブ			

2. 競合が[競合:ユーザが同じです。]に表示されている場合は、次のいずれかのオプションを選択してプロセスを再開できます。

オプション	説明
更新	既存のユーザ情報を更新します。対応する[ソリューション]ボックスをク リックします。参照ボタンをクリックし, [更新]を選択します。
無視	選択されているユーザはインポートしません(標準設定)。

3. 競合が[**競合:ユーザ名が同じです。**]に表示されている場合は,次のいずれかのオプションを選択してプロセスを再開できます。

オプション	説明
名前の変更	選択されているユーザに対して新しい名前を割り当てます。対応する[ソ リューション]ボックスをクリックします。参照ボタンをクリックし, [名前の変 更]を選択します。[新規ユーザ名]ボックスに, 新しい名前を入力します。
自動名前変更	選択されているユーザに対して、サフィックスを追加して新しい名前を割り 当てます。対応する[ソリューション]ボックスをクリックします。参照ボタンをク リックし、[自動名前変更]を選択します。新しい名前が[新規ユーザ名] ボックスに表示されます。
更新	既存のユーザ情報を更新します。対応する[ソリューション]ボックスをク リックします。参照ボタンをクリックし, [更新]を選択します。
無視	選択されているユーザはインポートしません(標準設定)。

4. [続行]をクリックします。

ユーザの詳細の更新

ユーザを追加したら、ユーザの詳細を更新できます。たとえば、ユーザの名前や接続先の詳細を変 更できます。また、ALM ユーザをサイト管理者として定義することもできます。詳細については、「サイ ト管理者の定義」(29ページ)を参照してください。

ユーザの詳細を更新するには、次の手順を実行します。

1. 「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブをクリックします。 右の表示枠の[ユーザ詳細]タブをクリックします。

サイトのプロジェクト サイ	(トのユーザ サイトの接続 ライセ	z).	ス サーバ DB サーバ サイト設定 サイト分析 ブロジェクトの計画と過時
🧌 🐁 🔳 🎄 株衆 🗌	A 🐉 🛠 🖬 😚	5	🍰 バスワード
A ユーザ名 A alm_admin	名前 David Banks		alm_admin
alm_admin2	Pamela Knight		
ames_alm mary_alm	james_alm mary_alm		
a peter_aim a test	peter_aim		ユーザ名: alm_admin
			名前: David Banks
			■9004720142LC01A38 ▼ 物法マール
			電話#号:
			188R
			۲. P
ユーザ合計: 7			通用

2. ユーザのリストからユーザを選択します。

ヒント: ユーザのリスト内のユーザは、 [検索]ボックスにユーザの名前を入力し、 [検索]ボタン シレン をクリックして検索できます。検索するテキストに一致した最初のユーザが強調表示されます。ボタンを再度クリックすると、指定した検索テキストを含む他のユーザが検索されます。

3. ユーザの詳細フィールドを編集します。

注: ユーザが LDAP ディレクトリから「サイト管理」にインポートされていた場合は、ユーザの LDAP 認証プロパティが[**ドメイン認証**]ボックスに表示されます。インポートされたユーザでな い場合、[**ドメイン認証**]ボックスは表示されません。詳細については、「LDAP からのユーザ のインポート」(148ページ)を参照してください。

スマート・カード認証の場合,スマート・カードの電子メールを[**電子メール**]に,スマート・カードの共通名(CN)を[説明]に入力します。シングル・サインオン(SSO)認証の場合,電子メールとユーザ名を[説明]に入力します。

4. ユーザの状態を設定するには、 [**非アクティブ**]または [**アクティブ**]ボタンをクリックします。 ユーザの 状態の詳細については、 「ユーザの非アクティブ化とアクティブ化」(158ページ)を参照してください。

- 5. ユーザにプロジェクトを割り当てるには、 [ユーザ プロジェクト] タブをクリックします。 詳細について は、「ユーザへのプロジェクトの割り当て」(162ページ)を参照してください。
- 6. [適用]をクリックして,変更を保存します。

ユーザの非アクティブ化とアクティブ化

ALM ユーザは、「非アクティブ」または「アクティブ」にすることができます。非アクティブなユーザは、プロ ジェクトにログインできませんが、ユーザのリストからは削除されません。また、ユーザアクセス許可およ び設定もすべて保存されています。一定期間勤務する契約社員などに対して適用すると便利で す。

注意:非アクティブにされた管理者ユーザは、「サイト管理」にログインできません。

ユーザを非アクティブにするには、次の手順で行います。

- 1.「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブをクリックします。
- 2. 次のいずれかを選択します。
 - ユーザを次回のログイン時から非アクティブにするには、1人または複数のアクティブなユーザを

ユーザのリストから選択し、ツールバーの[ユーザの非アクティブ化]ボタン [ステータス]が[非アクティブ]になり、ユーザのリスト内のユーザ・アイコンが変わります。また、 [失効日]ボックスが非表示になります。

現在, ユーザが ALM プロジェクトにログインしている場合は, この操作を実行してもユーザ・ セッションは終了しません。次回, そのユーザがプロジェクトにログインしようとしたときに, メッ セージ・ボックスが開いて, 非アクティブになっているのでログインできないことが示されます。

ユーザを将来の指定日に非アクティブにするには、ユーザのリストからアクティブなユーザを選択します。[ユーザ詳細]タブをクリックし、[自動非アクティブ化日]ボックスでドロップダウン矢印をクリックし、日付を選択します。

ユーザをアクティブにするには、次の手順を実行します。

- 1.「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブをクリックします。
- 2. ユーザのリストから, 1人または複数の非アクティブなユーザを選択します。
- 3. ツールバーの[**アクティブ化**]ボタン をクリックします。 [ステータス]が[アクティブ]になり、ユーザの リスト内のユーザ・アイコンが変わります。

パスワードの作成と変更

サイト管理者は、ユーザのパスワードを作成、変更、またはオーバーライドできます。

注:

- ユーザのパスワードを変更できるのは、そのユーザがALM パスワードを使用してALM にログインするように設定されている場合のみです。LDAP パスワードが使用されているか、ユーザが外部認証を使用してALM にログインしている場合、このオプションは利用できません。LDAP 認証の詳細については、「ユーザをインポートするためのLDAP 設定の定義」(152ページ)を参照してください。
- 管理者以外のユーザは、「プロジェクトカスタマイズ」ウィンドウの[ユーザのプロパティ]リンクを使用して、自分のパスワードを変更できます。詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
- 後方互換性を維持する目的で使用する、サイト管理への古い接続方法については、「オプションの ALM パラメータ」(195ページ)を参照してください。

パスワードを作成または変更するには、次の手順で行います。

- 1. 「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブをクリックします。
- 2. ユーザのリストからユーザを選択します。
- 3. [パスワード]ボタンをクリックします。[ユーザパスワードの設定]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 4. [新規パスワード]ボックスに、新しいパスワードを入力します(最長 20文字)。
- 5. [パスワードの再入力]ボックスに, ユーザの新しいパスワードを再度入力します。
- 6. [OK]をクリックします。

ユーザの認証の有効化

ユーザが ALM パスワード ではなく自分の LDAP パスワード または外部 認証を使用して ALM にログインできるようにすることが可能です。

LDAP を SSL 経由で使用するには、別の手順も実行する必要があります。詳細については、HP ソ フトウェアのセルフ・ソルブ技術情報の記事 KM188096

(http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM188096)を参照してください。

本項の内容

- 「LDAP 認証の拡張」(159ページ)
- •「注意事項」(160ページ)
- 「ユーザの LDAP 認証の有効化」(160ページ)
- 「ユーザの外部認証の有効化」(161ページ)

LDAP 認証の拡張

ユーザが ALM にログインしようとすると, ALM データベースのドメイン認証 プロパティに保存された識別

名 (DN)を使用して, LDAP に対してユーザの認証が行われます。ユーザがログインしようとしたときに ALM の DN 情報が無効だった場合, そのユーザは ALM にログインできません。

この検索処理を拡張し, DN 情報が無効な場合は、「サイト管理」で定義された LDAP インポート 設定を使用して, LDAP サーバでも検索を実行することができます。 ユーザが見つかると、 ALM 内の DN が更新され, 自動ログインが試行されます。

この拡張検索を設定するには、「LDAP_SEARCH_USER_条件」(192ページ) サイト設定パラメー タに対してカンマ区切りリストを定義します。有効な値は、username, email, fullname, phone, description です。結果が複数見つかった場合は、プロパティの順番で優先度が決まりま す。

例

パラメータが username と email に設定 されているときに、ユーザ名 が同じ 2 人 のユーザが LDAP サーバで見 つかったとすると、ユーザの電子 メール・アドレスがチェックされます。条件に一致する ユーザが複数いた場合は、エラー・メッセージが返されます。ユーザの検索が成功すると、その ユーザで ALM へのログインが行われます。

注意事項

- LDAP 認証が有効になると、その後は LDAP サーバに対して認証が行われます。LDAP 認証に切り替える前に、サイト管理者が LDAP ユーザとしてセットアップされていることを確認してください。セットアップされていない場合、認証の種類の切り替え後に、サイト管理者がログインできなくなります。
- LDAP 認証を有効にしたら、「PASSWORD_RESET_DISABLE」(215ページ) サイト設定パラ メータを定義して、パスワードのリセット・オプションを無効にする必要があります。

ユーザの LDAP 認証の有効化

- 1. 「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブをクリックします。
- 2. [ユーザ設定]ボタン をクリックし, [認証設定]を選択します。[認証設定]ダイアログ・ボックスが開きます。

認証設定	×
記録の種類: ● Application Lifecycle Managemea ○ LDAP ディレクトリ ブロバイダの URL: [dap://serven 接続テスト	Application Lifecycle Manageme ユーザとパスワー ドを Application Lifecycle Management で検 起みます。 ユーザとパスワ ードを LDAP で 検証します。 プロバイダの URL LDAP サーバの URL。
OKキャンセル / _ ^	ヘルプ

3. [認証の種類]で[LDAP]を選択し, LDAP をすべてのユーザの認証タイプとして設定します。

- 4. [**ディレクトリプロバイダの URL**]ボックスに LDAP サーバの URL(1dap://くサーバ名>:<ポート番号>)を入力します。
- 5. [接続テスト]ボタンをクリックして, LDAP サーバの URL をテストします。
- 6. [**OK**]をクリックします。

ユーザの外部認証の有効化

- 1. 「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブをクリックします。
- 2. [ユーザ設定]ボタン をクリックし, [認証設定]を選択します。[認証設定]ダイアログ・ボックスが開きます。

認証設定	×
記録の種類: ● Application Lifecycle Managemea ● LDAP ディレクトリ ブロバイダの URL: [dap://servet] 接続テスト	Application Lifecycle Manageme ユーザとパスワー ドを Application Lifecycle Management で検 動品ます。 ユーザとパスワ ードを LDAP で 検証します。 プロバイダの URL LDAP サーバの URL。
OK キャンセル /	ヘルプ

- 3. [認証の種類]で[外部認証]を選択し、すべてのユーザに対して外部認証を設定します。
- 4. [**詳細設定**]をクリックして,外部認証パラメータを設定します。[外部認証の詳細設定]ダイア ログ・ボックスが開きます。

外部認証 [詳細設定]	×
アプリケーション タイブ: EMAIL+NAME	
パターン:	
OK キャンセル	

- 5. ドロップダウン・リストから[認証の種類]を選択します。
 - a. **電子メール:** ALM はユーザの電子メールをヘッダ値から抽出して,同じ電子メール・アドレスがALM に定義されている ALM ユーザを探します。
 - b. **名前**: ALM はユーザの名前をヘッダ値から抽出して, [説明]フィールドに同じ名前がある ALM ユーザを探します。

- c. **電子メール+名前**: ALM デスクトップ・クライアントは, ユーザの電子メールと名前をヘッダ値 から抽出します。ALM はまず電子メールが一致する ALM ユーザを探し, 見つからない場合 は名前が一致する ALM ユーザを探します。
- 6. [パターン]を入力します。これはヘッダから情報を抽出するための形式です。

[パターン]が定義されていない場合, ALM は標準設定のパターンを使用します。

たとえば, **.*[eE][^=]*=([^,]*@[^,]*).*** は E=ben@domain.com のような電子メールを抽出します。

- 7. [OK]をクリックします。
- 8. [認証設定]ダイアログボックスで[OK]をクリックします。

ユーザへのプロジェクトの割り当て

ALM サイト管理者は, ユーザがログオン可能な ALM プロジェクトを定義して, プロジェクトへのユーザ・アクセスを制御できます。ユーザがあるプロジェクトを使用しなくなった場合は, そのプロジェクトを ユーザ・プロジェクト のリストから削除してください。

ユーザをプロジェクトに追加すると、そのユーザは、ビューア権限を持った状態で自動的にプロジェクト に割り当てられます。ユーザ・グループとグループ権限の詳細については、「プロジェクトのユーザ管理」 (283ページ)および「ユーザ・グループとアクセス許可の管理」(289ページ)を参照してください。

注:

- ユーザをプロジェクトに割り当てる処理は、[サイトのプロジェクト]タブで実行できます。詳細については、「プロジェクトへのユーザの割り当て」(80ページ)を参照してください。
- 「サイト管理」のプロジェクトに対してユーザが割り当てられるか削除されると、自動電子メール通知がプロジェクト管理者に送信されます。[サイト設定]タブで「AUTO_MAIL_USER_NOTIFICATION」(197ページ)パラメータを追加すると、自動通知を利用不可にすることができます。

プロジェクトをユーザに割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブをクリックします。 右の表示枠の[ユーザ プロジェクト]タブを 選択します。 選択したユーザのプロジェクトのリストが表示されます。

🗼 パスワード	
alm_admin	
ユーザ詳細 ユーザ プロシ	9±21
🍯 ブロジェクトの選択 📑 削	除 ら 検索
ドメイン	△ プロジェクト
DEFAULT	ALM_Demo
合計プロジェクト: 1	

ヒント: [ドメイン]カラムをクリックすると、ドメイン名のソート順を昇順から降順に変更できます。 [プロジェクト]カラムをクリックして、ドメイン名ではなくプロジェクトを基準にソートすることもできます。

2. 左の表示枠のユーザのリストで、ユーザを選択します。

ヒント: ユーザの検索は、 [検索]ボックスにユーザの名前を入力し、 [検索]ボタン しょ リックして実行できます。

選択したユーザのプロジェクトがユーザ・プロジェクトのリストに表示されます。

ユーザのプロジェクトをドメインごとにまとめるには、 [ドメインでグループ化]を選択します。チェック・ ボックスをクリアすると、グループ分けの設定が解除されます。

3. [ユーザプロジェクト]タブで, [プロジェクトの選択]ボタンをクリックします。[ユーザプロジェクト]タ ブの右側の新しい表示枠に, ALM プロジェクトのリストが表示されます。

🍰 パスワード	
alm_admin	
ユーザ プロジェクト	
1 プロジェクトの選択 🛃 削除 😏 検索 🙄	
ドメイン △ プロジェクト	🗉 - 🚰 DEFAULT
DEFAULT ALM_Demo	🗄 🚰 NEW_DOMAIN
۲. (۲. (۲. (۲. (۲. (۲. (۲. (۲. (۲. (۲. (
승計プロジェクト : 1	

4. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択するので、ディレクトリを展開し、ユーザを割り当てるプロジェクトを選択します。

選択したプロジェクトをすべてクリアするには、[すべてクリア]をクリックします。

- 5. [選択されているプロジェクトに現在のユーザを追加]ボタン をクリックします。選択したプロジェクトがユーザ・プロジェクトのリストに追加されます。
- ユーザ・プロジェクトのリストからプロジェクトを削除するには、[プロジェクトユーザ]タブでプロジェクトを選択し、[削除]ボタンをクリックします。[OK]をクリックして確定します。プロジェクトがユーザ・ プロジェクトのリストから削除されます。

注:この操作で、サーバからプロジェクトが削除されることはありません。

7. ユーザ・プロジェクトのリストを更新するには、 [更新]ボタン をクリックします。

ユーザ・データのエクスポート

すべてのサイト・ユーザのユーザ名と氏名をユーザのリストからテキスト・ファイルにエクスポートできます。

- ユーザ・データをエクスポートするには、次の手順を実行します。
- 1. 「サイト管理」の[**サイトのユーザ**]タブをクリックします。
- [ユーザデータをファイルにエクスポート]ボタン をクリックします。確認メッセージ・ボックスが開きます。[はい]ボタンをクリックして、処理を続けます。[ファイルへのデータのエクスポート]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 3. パラメータを保存するディレクトリを選択し、ファイルの名前を[ファイル名]ボックスに入力します。
- 4. [保存]をクリックして、データをテキスト・ファイルにエクスポートします。

ユーザの削除

ユーザのリストからユーザを削除できます。

ユーザを削除するには、次の手順を実行します。

- 1.「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブをクリックします。
- 2. ユーザのリストからユーザを選択します。
- 3. [ユーザの削除]ボタン をクリックします。
- 4. [はい]ボタンをクリックして,確定します。

第7章:ユーザ接続とライセンスの管理

「サイト管理」でユーザ接続を監視し、ライセンス情報を変更できます。

本章の内容

ユーザ接続とライセンスの管理について	166
ユーザ接続の監視	
ライセンスの管理	

ユーザ接続とライセンスの管理について

「サイト管理」の[サイトの接続]タブを使用すると、HP Application Lifecycle Management(ALM)プロ ジェクトに接続されるユーザを監視し管理できます。詳細については、「ユーザ接続の監視」(166 ページ)を参照してください。

「サイト管理」の[**ライセンス**]タブを使用すると、ALM のライセンス情報を表示し、ライセンス・キーを変更できます。詳細については、「ライセンスの管理」(168ページ)を参照してください。

ユーザ接続の監視

[サイトの接続]タブを使用して、次の処理を実行できます。

- ALM サーバに現在接続されているユーザを監視します。使用中のドメインとプロジェクト、ユーザのマシン名、ユーザがプロジェクトに最初にログインした日時、最後にアクションが実行された日時をユーザごとに表示できます。また、ALM サーバへのクライアント・タイプの接続も表示できます。
- 各ユーザが使用しているライセンスの表示。
- ALM プロジェクトに接続しているユーザへのメッセージの送信。プロジェクトへのユーザ接続を切断 することもできます。
- [モジュール アクセス]リンクを使用して、ALM プロジェクトへのアクセス権を修正。詳細について は、「ユーザ・グループのモジュール・アクセス権のカスタマイズ」(302ページ)を参照してください。

注:

- 各 ALM モジュールで使用中のライセンスの総数を表示するには、 [**ライセンス**]タブをクリック します。詳細については、「ライセンスの管理」(168ページ)を参照してください。
- 一定期間にわたる特定の時点でプロジェクトに接続されている、ライセンス供与されたALM ユーザの数を表示し分析するには、[サイト分析]タブをクリックします。詳細については、「サイト使用状況の監視」(230ページ)を参照してください。
- ALM クライアントは、非アクティブの状態で一定の時間が経過すると、ALM から切断されます。クライアントの接続が解除されると、そのライセンスを別のALMユーザが使用できるようになります。詳細については、サイト管理設定パラメータ「WAIT_BEFORE_DISCONNECT」(195ページ)を参照してください。

ユーザ接続を監視するには、次の手順を実行します。

1. 「サイト管理」の[サイトの接続]タブをクリックします。

サイトのブロジェクト サイトのユーザ サイトの接続 ライセンス サーバ DB サーバ サイト設定 サイト分析												
急 。切断	 ・ ・ ・											
	使用中のライセンス											
ドメイ ン △	プロジェク ト名	ユーザ名	ホスト	ロダイン時間	最終アクシ ョン	クライアントの	種類	完全	ビジネス コンポー ネント	追加不具 合	追加 TestLab	追加要件
DEFAUL	FALM_Demo	alm_admin3	DEPROXP	2010/09/06 1	7:3 2010/09/06	Quality Cente	Client UI			2		
DEFAUL	FALM_Demo	james_alm	DEPROXP	2010/09/06 1	7:3 2010/09/06	Quality Cente	Client UI			~		
DEFAUL	FALM_Demo	alm_admin	DEPROXP	2010/09/06 1	7.3 2010/09/06	Quality Cente	Client UI					
DEFAUL	FALM_Demo	alm_admin2	DEPROXP	2010/09/06 1	7:3 2010/09/06	Quality Cente	Client UI	✓	✓			
合計接続	識:	4										

ヒント: カラムの見出しをクリックすると、そのカラムのソート順を昇順から降順に変更できます。

2. 接続のリストを更新するには、 [接続リストの更新]ボタン をクリックします。

接続のリストを自動更新するように設定するには、[接続リストの更新]矢印をクリックし、[自動 更新]を選択します。標準設定では60秒ごとに接続のリストが自動的に更新されます。自動 更新間隔を変更するには、[接続リストの更新]矢印をクリックし、[更新間隔の設定]を選択 します。[更新間隔の設定]ダイアログ・ボックスで、新しい更新間隔を秒単位で指定します。

- [グループ分け]矢印をクリックし、[グループ分け]オプションを選択すると、接続されているユーザ をグループごとにまとめることができます。接続されているユーザをプロジェクト別にまとめるには、 [プロジェクごとにブループ分け]を選択します。接続されているユーザをユーザ別にまとめるには、 [ユーザごとにグループ分け]を選択します。[グループ分け]の設定をクリアするには、[グループ分 け]の矢印をクリックし、[グループ化をクリア]を選択します。
- 【メッセージの送信】ボタンをクリックすると、接続しているユーザまたはユーザ・グループにメッセージ を送信できます。メッセージの送信の詳細については、「接続されているユーザへのメッセージの 送信」(167ページ)を参照してください。
- プロジェクトに接続しているユーザまたはユーザ・グループの接続を切断するには、ユーザまたはグループの行を選択し、ユーザ接続の[切断]ボタン ^{● 切断}をクリックします。[はい]ボタンをクリックして、確定します。

接続されているユーザへのメッセージの送信

ALM プロジェクトに接続されているユーザにメッセージを送信できます。これにより, 接続ユーザに対す る重要なメンテナンス作業に関する連絡を定常処理として実行できます。たとえば, プロジェクトの接 続解除, ALM サーバの再起動などの連絡を送信できます。

メッセージを送信すると、ユーザのコンピュータでポップアップ・ウィンドウが自動的に開き、メッセージ・テキストが表示されます。このメッセージ・ボックスは、ユーザが閉じるか、ユーザが ALM への接続を切断するまで表示されます。詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

接続されているユーザにメッセージを送信するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[サイトの接続]タブをクリックします。
- 2. メッセージを送信する先のユーザを選択します。
 - メッセージをユーザまたはユーザ・グループに送信するには、ユーザまたはグループの行を選択します。
 - メッセージを複数のユーザに送信するには、Ctrl または Shift を使用して、対象とするユーザを 強調表示します。
- 3. [メッセージの送信]ボタンをクリックします。[メッセージの送信]ダイアログ・ボックスが開きます。

[To]ボックスに、対象となっているメッセージ受信者が[ドメイン:プロジェクト名:ユーザ名]のフォーマットで表示されます。

例

[DEFAULT:ApplicationLifecycleManagement_Demo:peter_alm] のように表示されます。

- 4. [メッセージ文]ボックスに、メッセージを入力します。
- 5. [送信]をクリックします。メッセージが5分以内にユーザのコンピュータに送信されます。

ライセンスの管理

[ライセンス]タブでは、使用中のライセンスの総数, ALMの各プロジェクトまたはドメインに対して保有しているライセンスの最大数, ライセンスの有効期限を表示できます。他のHP ツール(UFT など)がALM プロジェクトに接続されている場合は、そのツールで使用しているライセンスの総数を表示できます。ライセンスを追加することもできます。さらに、サーバにインストールされている ALM のエディションも表示できます。

[ライセンス]タブには、ライセンスを表示し更新するためのタブがあります。

- ステータス: ライセンスを変更し, ライセンス・ポータルに接続してライセンスを取得できます。
- 使用許諾契約書:さまざまなドメインとプロジェクトにライセンスを割り当てできます。
- **固定ライセンス**: 固定ライセンスを特定のユーザに割り当てできます。
- PPU ライセンス履歴:現在利用可能な PPU ライセンスの数と、その使用履歴を確認できます。

注:

• 各ユーザが現在使用している ALM ライセンスを表示するには、 [サイトの接続] タブをクリック します。詳細については、「ユーザ接続の監視」(166ページ)を参照してください。

- 一定期間にわたる特定の時点でプロジェクトに接続されている、ライセンス供与されたALM ユーザの数を表示し分析するには、[サイト分析]タブをクリックします。詳細については、「サイト使用状況の監視」(230ページ)を参照してください。
- Performance Center: Performance Center のライセンスに関する追加情報は、「ラボ管理」 で確認できます。詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイ ド』を参照してください。

本項の内容

ライセンスの変更	169
ドメインおよびプロジェクトへのライセンスの割り当て	
ユーザへのライセンスの割り当て	
PPU ライセンス履 歴	

ライセンスの変更

[ステータス]タブで, ライセンスを変更できます。同じタブで, HP Licensing Portal を起動してライセンスを取得することもできます。

ライセンスを変更するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[ライセンス]タブをクリックします。
- 2. [ステータス]タブをクリックします。

ステータス ライセンスの創り当て 固定ライセンス PPU ライセンス調査						
😂 🧷 ライセンスの変更 🔹 📃 期限切れのライセンス	Rを非表示 🛛 🕎 ライセンス ボータル	しの起動				0
ライセンス名 🔺		固定	有効期限	使用中	最大	
Full License		いいえ	13/07/16 8:59	0	12	
Performance Center		いいえ	無制限	0	無利限	
エディション:	Application Lifecycle Manag	gement				
モデル:	CONCURRENT					

[ステータス]タブには、次のUI要素があります。

UI要素	説明
S	更新 :画面を更新します。

UI 要素	説明
🥖 ライセンスの変更 💌	次のいずれかを選択して、ライセンスを変更できます。
	ライセンスのアップロード :[ライセンスのアップロード]ダイアログ・ ボックスが開き, ライセンス・キーを参照して選択できます。
	ライセンスの貼り付け:[ライセンスの貼り付け]ダイアログ・ボックス が開き, テキスト・ボックスにライセンス・キーを貼り付けることがで きます。
🗌 期限切れのライセンスを非表示	表内の期限切れのライセンスを非表示にします。
🁤 ライセンス ボータルの起動	HP Licensing Portal を表示するブラウザが起動し、 ライセンスを 購入できます。
ライセンス名	ALM モジュールの名 前。
固定	ライセンスが, ユーザに割り当てられている固定ライセンスかどうか を示します。
有効期限	ライセンスの有効期限。
使用中	使用中のライセンスの総数。
最大	利用可能なライセンスの最大数。
エディション	インストールされている ALM のエディションを示します。詳細につ いては, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガ イド』を参照してください。
モデル	ライセンス・タイプを示します。有効な値は次のとおりです。
	CONCURRENT:購入したライセンスの有効期限まで使用を許可するライセンス。
	PPU:購入したライセンスを実際に使用した月での使用を許可 するライセンス。使用期限は、使用した月の月末です。

- 3. [ライセンスの変更]の隣にある矢印をクリックします。
- 4. [ライセンスのアップロード]または[ライセンスの貼り付け]を選択します。
 - [**ライセンスのアップロード**]を選択すると、[ライセンスのアップロード]ダイアログ・ボックスが開き、ライセンス・キーを参照して選択できます。
 - [**ライセンスの貼り付け**]を選択すると、[ライセンスの貼り付け]ダイアログ・ボックスが開き、テキスト・ボックスにライセンス・キーを貼り付けることができます。

5. ライセンスを追加するには、 [ライセンスポータルの起動]をクリックします。

HP Licensing Portal を表示するブラウザが起動し、 ライセンスを購入できます。

ドメインおよびプロジェクト へのライセンスの割り当て

[使用許諾契約書]タブで,特定のドメインまたはプロジェクトにライセンスを割り当てると,各プロジェクトに割り当てられたユーザが,割り当てられたライセンスを使用できます。残っている利用可能ライセンスの数は,タブの下の方に表示されます。プロジェクトに割り当てられている数より必要なライセンスが多い場合は,利用可能なライセンスのすべてが使用されていない限り,ドメインまたは利用可能なライセンスから追加ライセンスを取得できます。

ライセンスを割り当てるには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[ライセンス]タブをクリックします。
- 2. [使用許諾契約書]タブをクリックします。

ステータス ライセンスの割り当て 固定ライセンス PPU ライセンス原産							
😋 💾 俳称 ① すべて展開 □ すべて折りたたみ □ 割り当て済みプロジェクトのみを表示							
ドメイン/プロジェクト名	Full License	Performance Center					
ALMTEST							
EFAULT							
E 🛃 DOMAIN							
Sil ED TTER	12						
サイトプール	12	無判限					

[使用許諾契約書]タブには、次のUI要素があります。

UI要素	説明
S	更新 : 画 面 を更 新します。
一 保存	変更を保存します。
「日 すべて展開	ドメインを展開し, すべてのプロジェクト名を表示します。
📄 すべて折りたたみ	ドメインを折りたたみ、プロジェクト名を非表示にします。
□割り当て済みプロジェクトのみを表示	ライセンスが割り当てられていないドメインとプロジェクトを 非表示にします。
利用可能	ライセンス・タイプごとの利用可能なサイト・レベル・ライセ ンスの合計数。
サイト・プール	ライセンス・タイプごとの利用可能なサイト・レベル・ライセ ンスの合計数。

- 3. ライセンスを割り当てるドメインまたはプロジェクトを選択し、割り当てるライセンスの数をプロ ジェクトまたはドメインの行に入力します。
- 4. 選択した行のエントリに,割り当てるライセンスのタイプに応じて,割り当てるライセンスの数を入力します。

利用可能なライセンスの総数が、それに合わせて減少します。

プロジェクトとドメインに割り当てられたライセンスの合計数が、サイト・プールのライセンス数を超 えないことが検証されます。

5. [保存]をクリックして変更内容を保存します。

ユーザへのライセンスの割り当て

固定ライセンスを特定のユーザに割り当てできます。そのユーザは、そのライセンスに対する独占的な アクセス権を持ちますが、サイト・プールのライセンスは使用できません。ユーザは、そのライセンスを30 日間使用する必要があります。30日が経過すると、ライセンスの割り当てをユーザから削除できま す。また、固定ライセンスがユーザに割り当てられてから1時間以内であれば、割り当ては削除でき ます。

ライセンスをユーザを割り当てるには、次の手順で行います。

- 1. 「サイト管理」の[**ライセンス**]タブをクリックします。
- 2. [**固定ライセンス**]タブをクリックします。
- 3. [ユーザの選択]をクリックして,画面の右側に[サイトのユーザ]領域を表示します。

2F-92 54t02080801 8254t022 PPU54t0288								
ライセンス ステータス		創切当て読みユーザ						
◎ 普座市 ■顧問わのライセンスを申表示		翌ユーザの選択 ■				0		
ライセンス名 🔺	有効期限	使用中	最大	ユーザタ	正式名	割り出て時刻	再創り出て時刻	
このサイトには国定ライセンスがありませ	A.			このサイトには固定	ライセンスがありません。			

[固定ライセンス]タブには、次のUI要素があります。

UI要素	説明
S	更新 :画面を更新します。
12 保存	変更を保存し, [割り当て時刻]列を更新します。
□ 期限切れのライセンスを非表示	表内の期限切れのライセンスをすべて非表示にします。

UI 要素	説明
👬 ユーザの選択	画面の右側に[サイトのユーザ]領域を表示します。
×	選択したユーザの削除:[割り当て済みユーザ]領域から選択したユーザを削除します。
4	選択したユーザの追加:[割り当て済みユーザ]領域に選択した ユーザを追加します。
F	フィルタの適用:[フィルタ]フィールドに入力したフィルタを適用します。完全なリストに戻るには、[フィルタ]フィールドを空欄にした 状態で[フィルタの適用]を再度クリックします。
	サイト・ユーザのリストの前または後ろのページ。
æ	サイト・ユーザのリストを更新します。
ライセンス名	ALM モジュールの名前。
有効期限	ライセンスの有効期限。
使用中	使用中のライセンスの総数。
最大	各 ALM モジュールに対して保有しているライセンスの最大数。
ユーザ名	ユーザの名前。
正式名	ユーザの氏名。
割り当て時刻	ユーザがライセンスに割り当てられた日時。
再割り当て時刻	ライセンスの割り当てをユーザから削除できる日時。ライセンスが ユーザに割り当てられてから1時間以内であれば、割り当ては 削除できます。その時間が経過すると、30日間はユーザからその 割り当てを削除できません。最初の1時間と30日後は、[再割 り当て可能]という値がこのフィールドに設定されます。
ページ	サイト・ユーザのリストの現在のページを表示します。

- 4. [ライセンスステータス]で, ライセンス名を選択します。
- 5. [サイトのユーザ]で, ユーザを選択します。
- 6. [選択したユーザの追加] をクリックして、ユーザを割り当てます。ユーザ名が[割り当て済み ユーザ]領域に表示されます。

7. [保存]をクリックして変更内容を保存します。

ライセンス割り当てをユーザから削除するには、次の手順を実行します。

注: ライセンスの割り当てをユーザから削除できるのは、[再割り当て時刻]の値が[再割り当て可能]の場合のみです。

- 1. [ライセンスステータス]で、ライセンスを選択します。
- 2. [割り当て済みユーザ]で,ユーザを選択します。
- 3. [選択したユーザの削除] × をクリックして、ユーザを削除します。そのユーザ名が[割り当て済 みユーザ]領域に表示されなくなります。
- 4. [保存]をクリックして変更内容を保存します。

PPU ライセンス履歴

Pay-Per-Use(PPU) ライセンスの使用量は、その月の間に記録されるライセンスの最大同時使用数によって決まります。 [サイト管理] タブでその月のピーク使用数を確認できます。詳細については、 「サイト使用状況の監視」(230ページ)を参照してください。

月々の初めに、PPU ライセンスの使用数が、利用可能なライセンスの総数から差し引かれます。利用可能なライセンスの残り数が、必要なライセンス数より少なくなる場合は、追加ライセンスをロードして需要を満たすことができます。

[PPU ライセンス履歴]タブで,利用可能な PPU ライセンスの数と, PPU ライセンスの使用履歴を確認できます。

このタブには、次の処理に関する情報があります。

- PPU ライセンスの新規購入(利用可能なライセンス数が増えます)。
- 毎月初のライセンスの自動再計算(利用可能なライセンス数が減ります)。

ステータス ライセンスの割り当て 固定ライ	センス PPU ライセンス局歴			
				0
日付	Full License		Performance Center	
	蓋分	利用可能	蓋分	利用可能
利用可能		12		無利限
利用可能は、利用可能なライセンスの	gです (現在のクォータ)。			
差分は、追加済みまたは消費済みライ	zンスの数です。			

[PPU ライセンス履歴]タブには、次のUI要素があります。

UI要素	説明
日付	利用可能なライセンス数が変更された日付。ライセンスの数は、次のいずれ かの場合に変更されます。
	• 利用可能なライセンスの数が月初に計算された時。
	• 新しいライセンスが追加された時。
差分	前回のライセンス数から, 増減したライセンス数。[差分]の値は, モジュール ごとに表示されます。
	• 利用可能なライセンス数の計算で、ここに負の値が表示される場合、前 月に同時ユーザとして使用されたライセンスの最大数を示します。
	 新規ライセンスを追加した場合は、ここに正の値が表示され、追加したライセンスの数を示します。
利用可能	レポートされたカレンダー月で、同時ユーザとして利用可能なライセンスの数。 [利用可能]の値は、モジュールごとに表示されます。
	利用可能なライセンス数は,前月の利用可能なライセンス数に,現在の月の[差分]の値を加算した値です。
	[利用可能]の値が[無制限]になることもあります。これは、利用可能なリ ソースの数に制限がないという意味です。
購入を推奨	前月と同じ使用状況を想定した場合に,購入をお勧めする追加ライセンスの数。[購入を推奨]の値は,モジュールごとに表示されます。
	この値は、前月に使用したライセンス数([差分])から、現在利用可能なラ イセンス数を引いた値です。この値がゼロより小さい場合は、何も表示されま せん。
	ライセンス数が無制限の場合, [購入を推奨]は表示されません。

管理者ガイド 第7章: ユーザ接続とライセンスの管理

第8章:サーバとパラメータの設定

「サイト管理」を使用して、HP Application Lifecycle Management(ALM) サーバの設定, データベース・サーバの定義と変更, テキスト検索の設定, 設定パラメータのセット, ALM メール・プロトコルの定義を実行します。

本章の内容

サーバとパラメータの設定について	. 178
サーバ情報の設定	. 178
新しいデータベース・サーバの定義	180
データベース・サーバのプロパティの変更	. 182
テキスト検索の設定	.184
ALM 設定パラメータの指定	.189
ALM メール・プロトコルの設定	226
ALM メール制 限 の設 定	.226

サーバとパラメータの設定について

[サーバ]タブを使用して, ALM サーバの情報を設定します。 サーバ・ログ・ファイルを設定し, データ ベース・ハンドルの最大数を設定できます。 詳細については, 「サーバ情報の設定」(178ページ)を参 照してください。

[DB サーバ]タブを使用して、インストール時に定義されなかったデータベース・サーバを定義します。 データベース・サーバごとに、データベースの種類、データベースの名前、標準設定の接続文字列、 管理者ユーザとパスワードを入力します。

また, [**DB サーバ**]タブは, 既存のデータベース・サーバ定義を変更するためにも使用します。詳細に ついては, 「データベース・サーバのプロパティの変更」(182ページ)を参照してください。さらに, テキスト 検索機能のインストールと設定が完了しているデータベース・サーバを指定して, テキスト検索オプ ションを設定できます。詳細については, 「テキスト検索の設定」(184ページ)を参照してください。

[サイト設定]タブを使用して、ALM 設定パラメータの追加し変更します。詳細については、「ALM 設定パラメータの指定」(189ページ)を参照してください。また、ALM サイトのすべてのサーバ・ノードで 使用するメール・プロトコルも設定できます。詳細については、「ALM メール・プロトコルの設定」(226 ページ)を参照してください。

サーバ情報の設定

ALM サーバの情報を設定できます。これには、次の処理が含まれます。

- ALM サーバのログ・ファイルの設定: ALM では, ALM と「サイト管理」のすべてのイベントをログ・ ファイルに出力できます。ログ・ファイルには,機能が実行された日時が表示されます。これ は, ALM サポートに連絡する際に役立ちます。
- データベース接続の最大数の設定: ALM では, データベース・サーバ上のプロジェクトごとに複数の接続を開くことができます。1 つのプロジェクトで ALM が開くことができる接続数を, アクティブ要求 あたりの最大数で設定できます。

ALM のエディション:プロジェクトの計画と追跡(PPT)に関連する機能は, ALM Edition でのみ利用できます。ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

ALM サーバの情報を設定するには、次の手順を実行します。

1. 「サイト管理」の[サーバ]タブをクリックします。

サイトのプロジェクト サイトのユーザ	' サイトの接続 ライセンス サーバ DB サーバ サイト設定 ●
一 課題 ふ	
💻 dpws2k301	dpws2k301
	ログ ファイルのIRDE:
	ロケ最大行数: 10000
	ロク家は目立。mmmux ログファイル保管場所: C*Documents and Settings¥All Users¥Applici
	管理者ログ ファイルの設定 ――
	<u>ログレベル:</u> 警告 ログ是大行数: 10000
	口<u>/最高日歌</u>: 無制限
	ログ ファイル保管場所: Ci¥Documents and Settings¥All Users¥Applica
	ゴロジェクトの計画と追踪のログ ファイル語空
	ログレベル警告
	ロ <u>グ最大行数</u> :10000 ▼

2. サーバのリストからサーバを選択します。

[一般設定]領域にサーバ名が表示されます。

3. ALM および「サイト管理」のログ・ファイルの設定を、[クライアント ログ ファイルの設定]、[サイト 管理ログファイルの設定]、[プロジェクトの計画と追跡のログファイルの設定]の各セクションで 行います。

[**ログレベル**]リンクをクリックして、サーバで作成するログ・ファイルの種類を設定します。[ログレベル]ダイアログ・ボックスで、次のいずれかのオプションを選択します。

- なし:ログ・ファイルを作成しません。
- **エラー**: エラー・イベントを記録します。
- 警告:有害なおそれがある状況を記録します。
- **フロー**: アプリケーション・フローに着目した情報メッセージを記録します。
- デバッグ:デバッグ時に非常に役立つイベントを記録します。
- 4. [ログ最大行数]リンクをクリックすると, [ログ最大行数]ダイアログ・ボックスが開き, ALM がログ・ ファイルに出力可能な最大行数を設定できます。ログ・ファイルが最大行数に達すると, 新しい ログ・ファイルが作成されます。標準設定値は10,000です。
- 5. [**ログ最高日数**]リンクをクリックすると、[ログの最高日数]ダイアログ・ボックスを開いて、ログ・ファ イルを ALM サーバに保持する最長日数を設定できます。最長日数に達すると、ログ・ファイルは 自動的に削除されます。標準設定値は[**無制限**]です。
- 6. [ログファイル保管場所]リンクをクリックすると、ログ・ファイルのディレクトリ・パスを変更できます。

[ログファイル保管場所]ダイアログ・ボックスで、ログ・ファイルの新しい場所を入力します。

リモート・サーバにログを保存すると、パフォーマンスが低下することがあります。したがって、ロ グはローカル・ファイル・システムに保存することをお勧めします。ローカル・ファイル・システムの 容量に制限がある場合は、スクリプトを実行して定期的にログをネットワーク・ストレージに 移動してください。

7. 1つのプロジェクトで ALM サーバがデータベース・サーバ上で開くことができる接続数を,アクティブ 要求あたりの最大数で設定できます。[データベース最大接続数]リンクをクリックすると,[データ ベース最大接続数]ダイアログ・ボックスを開いて,同時接続の最大数を設定できます。データ ベース接続の最大数については,

(http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM630397)を参照してください。

注: データベース・サーバ上で開くことができるプロジェクトあたりの最大接続数の他に、次の 値も変更できます。

- ドメインに同時接続できるユーザ数。詳細については、「ドメインの作成」(33ページ)を 参照してください。
- プロジェクトに同時接続できるユーザ数。詳細については、「プロジェクトの詳細の更新」 (76ページ)を参照してください。
- 9. [サーバリストの更新]ボタン をクリックすると、サーバ・リストが更新されます。

新しいデータベース・サーバの定義

インストール・プロセスで定義されなかったデータベースサーバを追加で定義できます。

注:

- ALM に必要な Oracle または Microsoft SQL のアクセス許可については、『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグレード・ガイド』を参照してください。
- 新しいデータベース・サーバでテキスト検索を利用不可にするには、ALMで新しいデータベース・サーバを定義する前に、データベース・サーバのテキスト検索を無効にしておく必要があります。

新しいデータベース・サーバを定義するには、次の手順を実行します。
- 1. 「サイト管理」の[DB サーバ]タブをクリックします。
- 2. [新規データベース サーバ]ボタン^{1 新規}をクリックします。[データベース サーバの作 成]ダイアロ グ・ボックスが開きます。

データベース サーバの作成
データベースの種類 ――――
MS-SQL (SQL #2#E) ▼
データベースの値
データベース名:
DB 管理者 ユーザ: DB 管理者バスワード:
標準設定接続文字列
◎ 接続文字列リ ラメータ
サーバ ホスト: ポート: 1433
SID:
○ 接続文字列
jdbc:mercury:sqlserver://%HOST_NAME%1433
۲
OK キャンセル たの Ping コマンド ヘルプ

- 3. [データベースの種類]で,定義するデータベース・サーバの種類を選択します。
 - MS-SQL (SQL 認証): SQL 認証を使用します。
 - MS-SQL (Win 認証): Microsoft Windows 認証を使用します。
 - Oracle:
- 4. [データベースの値]の[データベース名]ボックスに,データベース名を入力します。
- 5. [DB 管理者ユーザ]ボックスに, データベース管理者のログイン名を入力します。
 - データベースの種類が[Oracle]の場合, ALM プロジェクトを作成できるようにする標準設定の 管理者ユーザ・アカウントは, systemです。
 - データベースの種類が[MS-SQL(SQL認証)]の場合, ALM プロジェクトを作成できるように する標準設定の管理者ユーザ・アカウントは, sa です。
 - データベースの種類が[MS-SQL(Win認証)]の場合、[DB 管理者ユーザ]ボックスは利用できません。データベース管理者のログイン名は、ALMをサービスとして実行するように設定されているWindowsユーザです。
- 6. [DB 管理者パスワード]ボックスに, データベース管理者のパスワードを入力します。このフィール

ドは, データベースの種類として[MS-SQL(Win 認証)]を選択した場合は利用できません。

- 7. [標準設定接続文字列]で,標準設定の接続文字列パラメータまたは接続文字列を次のように編集できます。
 - 標準設定の接続文字列パラメータを編集するには、[接続文字列パラメータ]を選択し、次のパラメータを定義します。

パラメータ	説明
サーバ・ホスト	サーバの名前。
ポート	データベース・サーバのポート。
Oracle サービス名	Oracle データベース・サーバのサービス名。

- 接続文字列を編集するには、[接続文字列]を選択し、接続文字列を編集します。
- Oracle RAC サポートの場合は、次の例のように接続文字列を入力します。

jdbc:company:oracle:TNSNamesFile=<ALM サーバ>\tnsnames.ora; TNSServerName=OrgRAC

- tnsnames.ora は、Oracle データベース・アドレスが記述されたファイルです。詳細については、『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグレード・ガイド』を参照してください。
- OrgRAC は, ALM が参照する TNS サーバのアドレスです。

注: Oracle RAC サポートを有効にするには、サイト管理パラメータ ORACLE_RAC_ SUPPORT を "Y" に設定する必要があります。詳細については、「ALM 設定パラメータの 指定」(189ページ)を参照してください。

- データベース・サーバに接続できるかどうかを確認するには、[Ping]ボタンをクリックします。入力した DB 管理者ユーザとパスワードが[Ping データベース サーバ]ダイアログ・ボックスに表示されます。[OK]をクリックします。
- 8. [OK]をクリックして, [データベースサーバの作成]ダイアログ・ボックスを閉じます。
- 9. 必要に応じて、[**データベース サーバリストの更新**]ボタン をクリックして、データベース・サーバ・リストを更新します。

データベース・サーバのプロパティの変更

データベース・サーバのプロパティを変更できます。

注:

- ALM に必要な Oracle または Microsoft SQL のアクセス許可については、『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグレード・ガイド』を参照してください。
- Oracle RAC サポートのサイト管理データベース・スキーマを設定できます。詳細については、 『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグレード・ガイド』を参照して ください。
- 閉包に関連した問題のデバッグについては、「DEBUG_CLOSURE_LOG_DOM_PROJ」 (200ページ)を参照してください。

データベース・サーバのプロパティを変更するには、次の手順を実行します。

1. 「サイト管理」の[DB サーバ]タブをクリックします。

サイトのプロジェクト サイトのユー	・ザ サイトの接続 ライセンス サーバ DB サーバ サイト設定 サイト分析 💽 🚺
1 新規 惧 削除 🕑	✓ 編集 3見 パスワード 6 Ping コマンド
DEPROXP13	DEPROXP13
	データベース の種類:MS-SQL (SQL Auth)
	接続文字列: jdbc:mercury:sqlserver://DEPROX
	<u>データペース管理者ユーザ名</u> : sa
	データペース管理者バスワード:
	Application Lifecycle Management ユーザ パスワード
	テキスト検索 : 有効化
	標準検索言語: English ▼

- 2. データベース・サーバのリストからデータベース・サーバを選択します。
- 3. 接続文字列を変更するには、 [接続文字列の編集]ボタン ^{4編集}をクリックするか、 [接続文 字列]リンクをクリックします。 [接続文字列エディタ]で接続文字列を編集し、 [OK]をクリックし ます。 接続文字列の詳細については、「新しいデータベース・サーバの定義」(180ページ)を参照 してください。
- 4. データベース管理者のログイン名を変更するには、[データベース管理者ユーザ名]リンクをクリックします。[データベース管理者ユーザ名]ダイアログ・ボックスに新しいログイン名を入力し、 [OK]をクリックします。

データベース管理者に新しいログイン名を定義する方法については、「新しいデータベース・サー バの定義」(180ページ)の手順5参照してください。

 データベース管理者のパスワードを変更するには、[データベース管理者パスワード]ボタン
 パスワード または[データベース管理者パスワード]リンクをクリックします。[データベース管理 者パスワード]ダイアログ・ボックスに新しいパスワードを入力し、同じパスワードをもう一度再入 カします。[OK]をクリックします。

 データベース・スキーマにアクセスするための標準設定のALMユーザ・パスワードを変更するには、 [Application Lifecycle Management ユーザパスワード]リンクをクリックします。[ユーザパスワード]ダイアログ・ボックスに新しいパスワードを入力し、同じパスワードをもう一度入力します。 [OK]をクリックします。

注: ALM のユーザ・パスワードを変更する場合は, データベース・サーバのユーザ・パスワード も変更する必要があります。

7. ALM のテキスト検索機能を有効にするには、[テキスト検索]リンクをクリックします。

テキスト検索が有効な場合は、データベース・サーバの標準設定のテキスト検索言語を[標準 検索言語]リストで設定できます。

テキスト検索の詳細については、「テキスト検索の設定」(184ページ)を参照してください。

- データベース・サーバに接続できるかどうかを確認するには、 [Ping データベース サーバ]ボタン をクリックします。入力した DB 管理者ユーザとパスワードが [Ping データベース サーバ]ダイアロ グ・ボックスに表示されます。 [OK]をクリックします。
- 10. [**データベース サーバリストの更新**]ボタン をクリックして、データベース・サーバ・リストを更新します。

テキスト検索の設定

テキスト検索を使用すると、キーワードを入力して、要件、テスト計画、不具合の各モジュールの特定のプロジェクト・フィールドの内容を検索できます。テキスト検索機能の使用方法については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

テキスト検索を設定するには、次の手順を実行します。

- テキスト検索を有効にする各データベース・ユーザ・スキーマでセットアップを実行します。詳細については、「データベース・ユーザ・スキーマのテキスト検索の有効化」(185ページ)を参照してください。
- 「サイト管理」で, テキスト検索を有効にし, [DB サーバ]タブの指定データベース・サーバに対する 標準設定の検索言語を定義します。詳細については,「ALM でのテキスト検索の有効化」(185 ページ)を参照してください。
- 特定のプロジェクトに対して別の検索言語を指定するには、[サイトのプロジェクト]タブで検索言語を変更します。詳細については、「プロジェクトのテキスト検索言語の選択」(186ページ)を参照してください。

 特定のプロジェクトについて、検索対象とするプロジェクト・フィールドを[プロジェクト カスタマイズ] ウィンドウから定義します。詳細については、「検索可能フィールドの定義」(187ページ)を参照してください。

データベース・ユーザ・スキーマのテキスト検索の有効化

ALM でテキスト検索を有効にする前に、 テキスト検索を有効にするデータベース・ユーザ・スキーマごと にセットアップ手順を実行する必要があります。

Oracle データベース・ユーザ・スキーマのテキスト検索を有効にするには、次の手順を実行します。

管理者ユーザとして、次のコマンドを実行します。

GRANT CTXAPP to $< \vec{r} - q \vec{v} - d \vec{v} \cdot d \vec$

SQL データベース・ユーザ・スキーマのテキスト検索を有効にするには、次の手順を実行します。

フル・テキスト・インデックスを有効にします。

EXEC sp_fulltext_database 'enable'

ALM でのテキスト 検索の有効化

「サイト管理」で、テキスト検索機能のインストールと設定が完了しているデータベース・サーバを指定 して、テキスト検索を有効にすることができます。データベース・サーバのテキスト検索を有効にする処 理は、プロジェクトをプロジェクトのリストに追加する前と後のどちらでも実行できます。

プロジェクトを追加する前にデータベース・サーバのテキスト検索を有効にした場合,後で追加するプロジェクトではテキスト検索が有効になります。プロジェクトの追加後にデータベース・サーバのテキスト検索を有効にする必要があります。

データベース・サーバを指定してテキスト検索を有効にしたら、そのデータベース・サーバの標準設定の 検索言語を設定します。標準設定の検索言語は、 [サイトのプロジェクト]タブから、特定のプロ ジェクトに対して変更できます。詳細については、「プロジェクトのテキスト検索言語の選択」(186ペー ジ)を参照してください。

データベース・サーバのテキスト検索をプロジェクトの追加前に有効にするには、次の 手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[DB サーバ]タブをクリックします。
- 2. データベース・サーバのリストからデータベース・サーバを選択します。
- 3. [テキスト検索]リンクをクリックします。

注意:いったん有効にしたテキスト検索機能は、無効にできません。

[はい]ボタンをクリックして,確定します。[テキスト検索]の値が[無効]から[有効]に変わります。

4. [標準検索言語]リストで,データベース・サーバの標準設定の検索言語を設定します。

データベース・サーバのテキスト検索をプロジェクトの追加後に有効にするには、次の 手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[DB サーバ]タブをクリックします。
- 2. データベース・サーバのリストからデータベース・サーバを選択します。
- 3. [テキスト検索]リンクをクリックします。

注意:いったん有効にしたテキスト検索機能は、無効にできません。

[はい]ボタンをクリックして,確定します。[テキスト検索]の値が[無効]から[有効]に変わります。

- 4. [標準検索言語]リストで、データベース・サーバの標準設定の検索言語を設定します。
- 5. [サイトのプロジェクト]タブをクリックし、テキスト検索を有効にするプロジェクトを選択します。
- 6. [プロジェクト詳細]タブで, [テキスト検索の有効化/再構築]ボタンをクリックして, テキスト検索 インデックスを有効にし再構築します。[はい]ボタンをクリックして, 確定します。

テキスト検索インデックスを有効にして再構築する処理が終了する前にタイムアウトになった場合は、「TEXT_SEARCH_TIMEOUT」(223ページ)パラメータを定義して、タイムアウトの標準設定値を変更できます。

7. 他のプロジェクトに対してテキスト検索を有効にするには,前の2つの手順を繰り返します。

プロジェクトのテキスト検索言語の選択

データベース・サーバに対して設定した標準設定検索言語以外の検索言語をプロジェクトごとに指定できます。テキスト検索を有効にし、標準設定の検索言語を指定する方法の詳細については、 「ALM でのテキスト検索の有効化」(185ページ)を参照してください。

注: プロジェクトが作成されているデータベース・サーバでテキスト検索機能が有効になっていない 場合, プロジェクトでは検索言語を利用できません。

プロジェクトの検索言語を選択するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。右の表示枠の[プロジェクト詳細]タブをクリック

します。

3. [検索言語]フィールドで, プロジェクトの言語を選択します。[プロジェクト詳細]タブに表示され るプロジェクトの詳細の更新については, 「プロジェクトの詳細の更新」(76ページ)を参照してくだ さい。

検索可能フィールドの定義

プロジェクトごとに,検索対象とするフィールドをプロジェクト・カスタマイズで定義する必要があります。 検索可能オプションは,要件,テスト,テスト・ステップ(デザイン・ステップのみ),不具合の各エンティ ティのみで利用できます。

次のフィールドが検索可能です。

- フィールド・タイプが[メモ]」または[文字列]のユーザ定義フィールド
- 次のシステム・フィールド。

検索可能なシステム・フィールド

エンティティ	検索可能なシステム・フィールド
ビジネス・コンポーネント	 コメント
	 コメント・フォルダ
	• コンポーネント名
	• 説明
	• 元の保管場所
	• サブタイプ ID
ビジネス・プロセス・モデル・アクティビティ	 コメント
	• 説明
	• 7 + 7+
ビジネス・プロセス・モデル	 コメント
	● 説明
不具合	 コメント
	• 説明
	 サマリ

エンティティ	検索可能なシステム・フィールド
要件	• コメント
	• 説明
	• 名前
	 リッチ・テキスト
実行	 コメント
テスト	• コメント
	• 説明
	• パス
	 プロトコル・タイプ
	 テンプレート
	 テスト名

検索可能フィールドを定義するには、次の手順を実行します。

- 1. ALM メイン・ウィンド ウのマスト ヘッド で、 ジェクト カスタマイズ] ウィンド ウが表 示 されます。
- [プロジェクトのエンティティ]リンクをクリックします。[プロジェクトのエンティティ]ページが開きます。プロジェクトのエンティティのカスタマイズについては、「プロジェクトのエンティティのカスタマイズ」(306ページ)を参照してください。
- 3. エンティティを展開し, 検索可能にすることができるシステム・フィールドまたはユーザ定義フィール ドを選択します。

🖹 保存 🖓 ヤー変更 💽 🔶	新規フィールド 🔻	🔀 フィールドの削除	
	設定 名前: TE ラベル: 訪 タイプ: メ 長さ: 1	B_DESCRIPTION 8-DESCRIPTION 8-DE 7-DE 7-DE 7-DE 7-DE 7-DE 7-DE 7-DE 7	 □ 必須 ☑ 検索可能

4. [検索可能]チェック・ボックスを選択します。

5. [保存]をクリックして, [プロジェクトのエンティティ]ページの変更を保存します。

ALM 設定パラメータの指定

標準設定のALM設定パラメータを設定できます。また、オプションのパラメータを追加することもできます。

本項の内容

標準設定値のALM パラメータ	189
オプションの ALM パラメータ	195
ALM パラメータの設定	225

注:外部認証に関連するALM設定パラメータは、『HP Application Lifecycle Management External Authentication Configuration Guide』に記述されています。

標準設定値のALM パラメータ

設定可能な標準設定のサイト設定パラメータは、次のとおりです。

パラメータ	説明
ADD_NEW_ USERS_FROM_	このパラメータが N に設定されている場合は,「サイト管理」([サイトの ユーザ]タブ)からのみ新しい ALM ユーザを追加できます。
PROJECT (前のバージョンでは CUSTOM_ ENABLE_USER_	このパラメータが Y(標準設定)に設定されている場合,[プロジェクトカス タマイズ]からも新しい ALM ユーザを追加できます。[プロジェクトユーザ] ページで, [ユーザの追加]をクリックします。[プロジェクトへのユーザの追 加]ダイアログ・ボックスが開きます。
ADMIN)	このパラメータが Y に設定されている場合は,新しい ALM ユーザを追加 する[新規]ボタンを利用できます。詳細については,「プロジェクトへの ユーザの追加」(284ページ)を参照してください。
ATTACH_MAX_ SIZE	ALM から電子メールとともに送信可能な添付ファイルの最大サイズ (KB)。添付ファイルのサイズが指定値を超える場合は、添付ファイルな しで電子メールが送信されます。標準設定では、電子メールの添付ファ イルの最大サイズは3,000 KB です。詳細については、「自動メールの設 定について」(326ページ)を参照してください。
ATTACH_TOTAL_ MAX_SIZE	「ATTACH_MAX_SIZE」(190ページ)の値を考慮した、ALM から電子 メールとともに送信可能なすべての添付ファイルの最大サイズ(KB)。すべ ての添付ファイルのサイズが指定値を超える場合は、添付ファイルなしで 電子メールが送信されます。標準設定では、電子メールの添付ファイル の最大サイズは 10,000 KB です。詳細については、「自動メールの設定 について」(326ページ)を参照してください。
AUTO_MAIL_ WITH_ ATTACHMENT (前のパージョンでは SAQ_MAIL_ WITH_ ATTACHMENT)	このパラメータがY(標準設定)に設定されている場合,不具合電子メールは添付ファイル付きで送信されます。これは、[サイトのプロジェクト]タブで[電子メールを自動送信]を選択した場合にのみ適用されます。詳細については、「自動メールの設定」(325ページ)を参照してください。
	注: 従来のパラメータ名は、後方互換性のためにサポートされています。
AUTO_MAIL_ WITH_ HISTORY (前のパージョンでは SAQ_MAIL_ WITH_HISTORY)	このパラメータがY(標準設定)に設定されている場合,不具合電子メールは履歴付きで送信されます。これは、[サイトのプロジェクト]タブで[電子メールを自動送信]を選択した場合にのみ適用されます。詳細については、「自動メールの設定」(325ページ)を参照してください。 注:従来のパラメータ名は、後方互換性のためにサポートされています。

パラメータ	説明
BASE_ REPOSITORY_ PATH	ベース・リポジトリのパス。ALM リポジトリおよびサイト管理リポジトリは、こ のリポジトリのサブフォルダです。このパラメータ値を変更すると、作成する 新しいプロジェクトはその場所に保存されます。このパラメータの値を変更 した場合は、クラスタ内のすべてのサーバを再起動する必要があります。リ ポジトリ・パスの初期値は、ALM サーバの設定中にセットされます。詳細 については、『HP Application Lifecycle Management インストールおよび アップグレード・ガイド』を参照してください。
COMMUNICATION_ SECURITY_ PASSPHRASE	HP ALM とその他の HP BTO アプリケーション間の通信は、REST API を 使用したシングル・サインオン(SSO)トークンによる認証後に有効になりま す。このパラメータには、ALM がSSOトークンの暗号化に使用するパスフ レーズが含まれます。このパラメータの初期値は、ALM サーバの設定時に 入力された SSO 通信セキュリティ・パスフレーズです。詳細については、 『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグレード・ ガイド』を参照してください。
	ALM 上 C COMMUNICATION_SECURITY_PASSPHRASE ハラメータ を変更する場合は、他のサーバ(Performance Center サーバ・マシン、ホ スト・マシンなど)上の同等な値も更新する必要があります。
CREATE_HTTP_ SESSION	このパラメータは、アプリケーション・サーバのクラスタに対するロード・バラン シングを処理する場合に使用できます。このパラメータがYに設定されて いると、HTTP セッションが作成されます。それにより、ロード・バランサは固 定モードで動作することになります。つまり、クライアントによって送信され た要求がクラスタ内の特定のノードに送られると、その後は、そのクライア ントによる要求がすべて同じノードに送られます。
	標準設定では, このパラメータは N に設定されています。 詳細について は, 『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグ レード・ガイド』を参照してください。
DISABLE_ VERBOSE_ ERROR_ MESSAGES	このパラメータは, 表示するエラー・メッセージの詳細度を制御するセキュリ ティ機能です。このパラメータが N に設定されている場合は, エラーに接 続されているシステム詳細を表示できます。 標準設定では, このパラメータは Y に設定されています。
EVENT_LOG_ PURGE_ PERIOD_DAYS	Performance Center :削除可能なイベントをEVENT_LOG データベー ス・テーブルに残しておく期間(日数)。
	標準設定では、この値は 60 に設定されています。値を一1 に設定すると、イベントの期間が無期限になります。
	詳細については、 『HP ALM Performance Center ガイド』を参照してください。

パラメータ	説明
LDAP_SEARCH_ USER_ 条件	LDAP の検索条件として使用するALM ユーザ・プロパティのカンマ区切り リスト(ドメイン認証プロパティにユーザの識別名(DN)が含まれていない 場合に使用します)。結果が複数見つかった場合は、プロパティの順番 で優先度が決まります。有効な値は、username, email, fullname, phone, descriptionです。LDAP の詳細については、「ユーザの認証の 有効化」(159ページ)を参照してください。
LIBRARY_FUSE	このパラメータ値は、パフォーマンスの最適化を目的に、ライブラリ内の各 エンティティの最大数を計算する際の基準数となります。標準設定値は 2500 です。
	 ライフラリ内のテストの最大数 = LIBRARY_FUSE × 1(標準設定値は2500)
	 ライブラリ内のリソースの最大数 = LIBRARY_FUSE × 0.25(標準設定値は 625)
	 ライブラリ内のビジネス・コンポーネントの最大数 = LIBRARY_FUSE × 0.25(標準設定値は 625)
	この値の検証は、ベースラインの作成時、 ライブラリのインポート時、 ライブ ラリの同期時に行われます。
	Business Process Testing:このパラメータは, 300000 などの大きい値 に設定することをお勧めします。
	関連パラメータの詳細については、「REQUIREMENTS_LIBRARY_ FUSE」(219ページ)を参照してください。
LICENSE_ ARCHIVE_ PERIOD	ライセンスの使用状況がアーカイブされる期間(日数)。この期間より前の ライセンス使用状況の情報は、アーカイブから削除されます。ライセンスの 詳細については、「ライセンスの管理」(168ページ)を参照してください。
	標準設定では, この値は 365 日間に設定されています。値を一1 に設 定すると, ライセンスのアーカイブ期間は無制限になります。
LOCK_TIMEOUT	ALM オブジェクトをロックしておくことが可能な最大時間数。この時間が経過するとロックが解除されます。標準設定では、この値は 10時間に設定されています。
MAIL_FORMAT	電子メールの送信に使用する形式。標準設定の形式はHTMLに設定 されています。電子メールをプレーン・テキストとして送信するようにALMに 指示するには、値をTextに変更します。

パラメータ	説明
MAIL_INTERVAL	メール設定に従って不具合電子メールを送信する時間間隔(分)。標準設定では、この値は10分に設定されています。これは、[サイトのプロジェクト]タブで[電子メールを自動送信]を選択した場合にのみ適用されます。詳細については、「プロジェクトの詳細の更新」(76ページ)および「自動メールの設定」(325ページ)を参照してください。
MAIL_MESSAGE_ CHARSET	ユーザに電子メールを送信する際にALMで使用される文字セット。標準 設定では, この値は UTF-8 に設定されています。
MAIL_PROTOCOL	ユーザに電子メール・メッセージを送信する際に使用されるメール・サービ スを表示します。メールのプロトコルを設定するには、 [設定]ボタンを使用 します。詳細については、「ALM メール・プロトコルの設定」(226ページ)を 参照してください。
MAIL_SERVER_ HOST	SMTP メール・サービスで使用するサーバ名を表示します。サーバ名を設定するには、[設定]ボタンを使用します。詳細については、「ALM メール・プロトコルの設定」(226ページ)を参照してください。 関連パラメータの詳細については、「オプションの ALM パラメータ」(195ページ)を参照してください。
MAIL_SHOW_ SITE_NAME	電子メールの件名にサイト名を表示するかどうかを示します。このパラメー タは、プロジェクト・パラメータとサイト・パラメータのいずれかです。パラメータ がサイト・テーブルとプロジェクト・テーブルの両方で定義されている場合 は、プロジェクトの値が参照されます。標準設定値はNです。 詳細については、「不具合メールの件名のカスタマイズ」(328ページ)を参 照してください。
REPORT_QUERY_ RECORDS_LIMIT	Excel レポート用にデータベースから取得できる最大レコード数。値を一1 に設定すると、この数は無制限になります。 詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガ イド』を参照してください。
REPORT_QUERY_ TIMEOUT	Excel レポート用の SQL クエリが実行されるのを ALM が待つ時間の最大値(秒)。実行時間がこの時間を超えると、クエリは取り消されます。 詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガ イド』を参照してください。

パラメータ	説明
RESTRICT_ SERVER_ FOLDERS	このパラメータを使用すると、OTA ExtendedStorage.ServerPath プロパ ティを使用して、アクセスが制限されたサーバ・ディレクトリにアクセスできま す。
	このパラメータが存在しないか、Yに設定されている場合、 ExtendedStorage.ServerPath プロパティを使用してアクセスできるのは 次のディレクトリのみです。
	• サイト管理(SA)ディレクトリ
	 プロジェクトのルート・ディレクトリ
	• プロジェクトの attach サブディレクトリ
	• プロジェクトの baseline サブディレクトリ
	• プロジェクトの checkouts サブディレクトリ
	• プロジェクトの components サブディレクトリ
	• プロジェクトの hist サブディレクトリ
	• プロジェクトの resources サブディレクトリ
	• プロジェクトの StyleSheets サブディレクトリ
	• プロジェクトの tests サブディレクトリ
	このパラメータがNに設定されている場合 は,ExtendedStorage.ServerPath プロパティを使用して, すべてのサー バ・ディレクトリにアクセスできます。
	このプロパティの詳細については、『HP ALM Open Test Architecture API Reference』を参照してください。 ALM プロジェクトの構造の詳細について は、「プロジェクトの構成について」(32ページ)を参照してください。
SITE_ANALYSIS	このパラメータがY(標準設定)に設定されていると、[サイト分析]タブで ALM ライセンスの使用状況の時間経過を確認できます。このパラメータ がNに設定されている場合は、[サイト分析]タブを利用できません。詳 細については、「サイト使用状況の分析」(229ページ)を参照してください。
SUPPORT_ TESTSET_END	このパラメータが Y(標準設定)に設定されていると、テスト・セットの実行 が完了したときに UFT が自動的に閉じます。

パラメータ	説明
UPLOAD_ RESULTS_ AFTER_TEST_RUN	テスト結果は,標準設定ではALMに保存されます。ALMから自動テストを実行する場合,大きいテスト結果を保存しないように設定できます。
	大きいテスト結果が生成される可能性があるのは,UFT GUI テス ト,UFT API テスト,または自動ビジネス・プロセス・テストの実行時です。
	ALWAYS:標準設定:テスト結果を常に保存します。
	NEVER:テスト結果を常に保存しません。
	ON_FAILURE:実行が失敗した場合にテスト結果を保存します。
WAIT_BEFORE_ DISCONNECT	ALM クライアントが ALM サーバ・マシンからの接続を解除されるまでに非 アクティブでいられる時間(分)。クライアントの接続が解除されると、そのラ イセンスを別の ALM ユーザが使用できるようになります。標準設定では、 この値は 600 分に設定されています。パフォーマンス上の理由から、この 値は 600 分以上に設定することをお勧めします。値を -1 に設定すると、ク ライアントが非アクティブである時間の長さに関係なく、ALMの接続は解 除されません。詳細については、「ユーザ接続の監視」(166ページ)および 「AUTO_LOGOUT_ON_SERVER_DISCONNECT」(197ページ)を参照 してください。

オプションの ALM パラメータ

次のサイト設定パラメータをオプションで追加できます。

パラメータ	説明
ALLOW_ MULTIPLE_ VALUES	このパラメータは,[プロジェクト カスタマイズ]の[プロジェクトのエンティティ] ページに[複数の値を許可]チェック・ボックスを表示するかどうかを指定しま す。
	このパラメータがNに設定されている場合は、 [複数の値を許可]チェック・ ボックスを利用できません。このパラメータが存在しないか、 "Y"に設定され ている場合は、 [複数の値を許可]チェック・ボックスを利用できます。
	[複数の値を許可]チェック・ボックスの詳細については、「プロジェクトのエン ティティのカスタマイズ」(306ページ)を参照してください。

説明
ユーザの詳細は,「サイト管理」で設定されます。 プロジェクト管理者は, プ ロジェクト・ユーザの詳細を[プロジェクト カスタマイズ]で変更することができ ません。
このパラメータが Y に設定されていると、プロジェクト管理者が、プロジェク ト・ユーザの詳細を[プロジェクト カスタマイズ]から変更できます。このオプ ションはセキュリティ・リスクを発生させる可能性があります。それは、このオプ ションを使用することで、ユーザの電子メール・アドレスをプロジェクト管理者 が自分の電子メールアドレスに変更できるためです。その場合、[パスワー ドを忘れた場合]リンクを使用して、プロジェクト管理者がユーザのパスワー ドをリセットし変更できます。
このパラメータが存在しないか, N に設定されている場合は, ユーザの詳細情報はそのユーザのみが[プロジェクト カスタマイズ]で変更できます。詳細については, 「[プロジェクト カスタマイズ]ウィンドウについて」(278ページ)を参照してください。
このパラメータは、Web UI クライアントへのアクセスを許可するかどうかを決定します。アクセスが許可されるのは、[Web UI プロジェクト アクセスを許可]アクセス許可を持つ少なくとも1つのグループに属するユーザだけです。 このパラメータがY に設定されているか、定義されていない場合は、Web ベースのクライアント・ユーザ・インタフェースを通じて ALM にアクセスできます。 このパラメータがN に設定されている場合は、ALM にはデスクトップベースのクライアント・ユーザ・インタフェースを通じてのみアクセスできます。
このパラメータが Y(標準設定)に設定されている場合,電子メールは非同期的に送信されます。つまり,送信する電子メールはキューに追加され,ユーザは処理を続行します。電子メールを送信できない場合: ・メール・サーバが稼働している場合は,電子メール通知が送信されま
す。 サイト管理ログに警告が追加されます。 このパラメータがNに設定されている場合,電子メールは同期的に送信されます。つまり,電子メールは即時送信され,送信が成功した場合にの

パラメータ	説明
AUTO_LOGOUT_ ON_ SERVER	ALM サーバは, ALM クライアント・セッションの接続を切断できます。これ は, 次の場合に発生します。
DISCONNECT	 サイト管理者がセッションを切断した。
	 非アクティブ時間の設定に基づいて、セッションが自動的に切断された。タイムアウトの設定の詳細については、「WAIT_BEFORE_ DISCONNECT」(195ページ)を参照してください。
	ALM クライアント・マシンには, セッションが切 断 されたことをユーザに伝 える メッセージが表 示 されます。
	このパラメータが Y に設定されている場合は、クライアント・マシンでもログア ウト・アクションが自動的に実行され、ALM のログイン・ウィンドウがユーザに 表示されます。そうすることで、サーバに接続されなくなったセッションでユー ザが作業し続けることを防止できます。このパラメータが N に設定されてい る場合は、接続が切断してもログアウト・アクションは実行されません。
	注: 外部認証モードの場合にこのパラメータがYに設定されていると、 クライアント・マシンのユーザには ALM の[プロジェクトに接続] ウィンドウが表示されます。
AUTO_MAIL_ SUBJECT_ FORMAT (前のバージョンでは SAQFORMAT)	このパラメータを使用すると、ユーザに自動送信される不具合電子メールの件名行をカスタマイズできます。
	たとえば、値「Defect no. ?BG_BUG_ID has changed」を指定すること で、「Defect no. 4321 has changed」という件名行を定義できます。ここ で、「 Defect no .」と「 has changed 」は文字列で、「 BG_BUG_ID 」はALM フィールド名です。
	特定のプロジェクトの件名行をカスタマイズするには、「不具合メールの件 名のカスタマイズ」(328ページ)を参照してください。
	注: 従来のパラメータ名は、後方互換性のためにサポートされています。
AUTO_MAIL_ USER_ NOTIFICATION	このパラメータを使用すると、「サイト管理」のプロジェクトに対してユーザが 割り当てられた(削除された)ときに、自動電子メール通知をプロジェクト 管理者に送信しないようにすることができます。
	このパラメータがNに設定されていると、プロジェクト管理者に自動通知は 送信されません。このパラメータが存在しないか、空になっているか、Yに設 定されている場合は、自動通知が送信されます。
	プロジェクトへのユーザの割り当ての詳細については、「プロジェクトへのユー ザの割り当て」(80ページ)を参照してください。

パラメータ	説明
BACKWARD_ SUPPORT_ ALL_DOMAINS_ PROJECTS	このパラメータを使用すると、後方互換性の目的で DomainsList および ProjectsList プロパティを使用できます。このパラメータがY に設定されてい る場合は、DomainsList および ProjectsList プロパティがサポートされます。 このパラメータが存在しないか、空になっている場合は、標準設定値は N で、これらのプロパティはサポートされません。
BV_EXCEL_ REPORT_MAX_ ROWS	ビジネス・ビュー Excel レポートに含めることができる行数の最大値を定義 します。 標準設定値は 100000 です。
CLEAN_ ORPHAN_ ANALYSIS_ DATA_JOB_ SLEEP_INTERVAL	このパラメータでは, ファイル・リポジトリから孤立アナリシス・データをクリーン アップする頻度を定義します。このデータは, 孤立アナリシス・データのファイ ル・クリーンアップ・ジョブによってクリーンアップされます。 分単位の値を定義します。最小値は 10080(1週間)です。 標準設定値は 43200(1か月)です。
COPY_ CHANGES_ USER_FIELDS (前のバージョンでは COPY_PASTE_ CHANGES_ OWNER)	このパラメータを使用すると、レコードをコピーするユーザを、そのコピーの指定[ユーザリスト]フィールドに表示するように指定できます。[ユーザリスト] を[フィールドタイプ]として持つフィールドの詳細については、「プロジェクト のエンティティのカスタマイズ」(306ページ)を参照してください。 このパラメータの値は、[ユーザリスト]フィールドのカンマ区切りリストです。 たとえば、このパラメータの値を BG_DETECTED_BY に設定します。不具合 10 がユーザ Cecil_qc によって検出され、ユーザ Shelly_qc が不具合 10 をコピーする場合、不具合を検出したユーザは Cecil_qc ではな く、Shelly_qc としてコピーが作成されます。
CUSTOM_HELP_ MENU_LINK	このパラメータを使用すると、URLアドレスにリンクするカスタム・エントリを[ヘ ルプ]メニューに追加できます。たとえば、ALM製品ムービーにユーザがロー カルからアクセスできるようにする場合は、そのムービーをサーバ上に保存 し、ムービーのインデックス・ページへのリンクを作成できます。 パラメータ値の入力には、<リンク・エイリアス>; <url>の構文を使用 します。ここで、<リンク・エイリアス> とくURL> は、それぞれ引用符で囲 み、セミコロンで区切ります。 たとえば、パラメータの値は次のように設定します。"MyBusiness - Online Help Page"; "http://mybusiness/ALMHelp". 上記の例では、MyBusiness - Online Help Page エントリが[ヘル プ]メニューに追加されます。このエントリをクリックすると、次の場所にあるカ スタム Web ページが開きます。http://mybusiness/ALMHelp.</url>

パラメータ	説明
CUSTOM_ PREREQUISITES_	このパラメータを使用すると, ALM クライアントを開始するデプロイメント段 階での足りない前提条件を処理できます。
PAGE_URL	このパラメータの値は、次のいずれかです。
	 代替の前提条件をダウンロードするためのリンクを含むページの有効な URL。
	• NO_URL または空白。デプロイメント段階で,標準設定のURL が開きます。
	標準設定値は空白です。
	注: 前提条件ごとに別々のURLを設定することはできません。この ページには, すべての前提条件に対する情報が記載されている必要 があります。
DASHBOARD_ PAGE_ ITEM_LIMIT	ダッシュボード・ページには,標準設定で4つまでのグラフを含めることができます。
	このパラメータを使用すると,ダッシュボード・ページに含むことができるグラフ の最大数を別の値に設定できます。 グラフの数を増やすと,システムのパ フォーマンスが低下する場合があります。
	ダッシュボード・ページの詳細については,『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

パラメータ	説明
DEBUG_ CLOSURE_LOG_ DOM_PROJ	閉包に関連した問題のデバッグで使用するサーバ・ログを作成します。この ログ・ファイルは、閉包クエリの結果が欠落または重複している場合や、パ フォーマンス関連の問題が発生している疑いがある場合の調査に使用す ると便利です。詳細については、「データベース・サーバのプロパティの変更」 (182ページ)を参照してください。
	注意:このパラメータを有効にするのは、具体的な原因の検証にデバッグが必要になる場合に限定し、デバッグ以外の目的には使用しないでください。
	閉包ログは, プロジェクトごと, ドメインごと, サイトごとに有効にできます。パ ラメータ値は, 次のいずれかの形式で指定します。
	 プロジェクトごと: <ドメイン名 >;<プロジェクト名 > 例: DEFAULT; project1 ドメインにプロジェクトが複数存在する場合は、セミコロンでプロジェクト を区切ります。
	project1とproject2という2つのプロジェクトがDEFAULTドメイン内にあ る場合は、次のように指定します。DEFAULT;project1; DEFAULT;project2
	 ドメインごと: <ドメイン名 > ;DEBUG_ALWAYS指定したドメイン内にあるすべてのプロジェクトが対象 DEFAULTドメインの場合,次のように指定します。DEFAULT; DEBUG_ALWAYS ドメインが複数存在する場合は、セミコロンでドメインを区切ります。
	• サイトごと:DEBUG_ALWAYS;DEBUG_ALWAYS すべてのドメインと、各ドメインに含まれるすべてのプロジェクトが対象
	注: DEBUG_ALWAYS には、プレフィックスおよびサフィックスとして下線を3 つ指定します。
	ログ・ファイルは, サーバ・ログ・ファイルと同じ場所に保存されます。これは, サイト管理の[サーバ]タブ > [クライアント ログ ファイルの設定]で指定され ています。ログ・ファイルは, 自動的には削除されないので, 閉包ログが不 要になった時点で手作業で削除してください。

パラメータ	説明
DISABLE_ ASYNC_ CUSTOMIZATION_ LOAD	このパラメータは,OTA によるカスタマイズのロードに影響します。
	このパラメータが N に設 定されている場 合,カスタマイズは非 同 期 にロード されます。
	このパラメータが Y に設 定されている場 合,カスタマイズは同 期 的 にロード されます。
	標準設定値はNです。
DISABLE_ COMMAND_ INTERFACE	このパラメータが Y(標準設定)に設定されている場合は, TD 管理者グ ループに所属しているユーザのみが OTA Command オブジェクトを使用で きます。
	N に設定されている場合は、あらゆるユーザが使用できます。
	ALL に設定されている場合は、どのユーザも使用できません。
	詳細については, 『HP ALM Open Test Architecture API Reference』を参照してください。
DISABLE_ CONSOLE_ DEBUG_INFO	このパラメータを使用すると、ALM デバッグ情報コンソール・ページにアクセス できます(標準設定では、アクセスできません)。コンソールが有効にされて いる場合、コンソールにアクセスするには http:// <qcserver>/qcbin/tdservlet?method=debuginfoまたは</qcserver>
	http:// <qcserver>/qcbin/debug を使用します。</qcserver>
	このパラメータが存在し, N に設定されている場合は, デバッグ情報コン ソール・ページにアクセスできます。
DISABLE_ DEFAULT_ VALUES	このパラメータが Y に設定されている場合, 一部のエンティティ(不具合, テスト, テスト構成など)の標準設定値を各プロジェクトのユーザごとに設定できなくなります。
	詳細については,『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガ イド』を参照してください。

パラメータ	説明
DISABLE_ EXTENDED_ STORAGE	このパラメータは、OTA ExtendedStorage オブジェクトへのユーザのアクセス を制御します。これは、プロジェクトのファイル・システムへのアクセスを制限 することが可能なセキュリティ機能です。
	このパラメータがY(標準設定)に設定されている場合, ExtendedStorage オブジェクトは TDConnection からアクセスできません。ユーザは、特定のエ ンティティからこのオブジェクトに読み取り専用でアクセスすることはできます が、変更を加えることはできません。
	N に設定されている場合は、特定のエンティティまたは TDConnection から すべてのユーザが ExtendedStorage オブジェクトにアクセスできます。
	このプロパティの詳細については、『HP ALM Open Test Architecture API Reference』を参照してください。
	注: このパラメータは、HP Screen Recorder などの特定のアドイン実行に影響する場合があります。詳細については、各アドインのドキュメントを参照してください。ドキュメントには、HP Application Lifecycle Management の[アドイン]ページ([ヘルプ]>[アドイン])またはHP Application Lifecycle Management Tools ページ([ヘルプ]>[ALM ツール])からアクセスできます。
DISABLE_GET_ CHILDREN_ LISTS_WITH_ VERSIONING	このパラメータが Y に設定されていると、さまざまなモジュールでデータ(エン ティティ・ツリーなど)の表示速度を改善する特定のパフォーマンス強化機能が無効になります。 このパラメータは、バージョン管理されたプロジェクトに関係します。 標準設定値は N です。
DISABLE_HTTP_ COMPRESSION	ALM サーバからクライアントに転送されるデータは、パフォーマンスを改善するために、標準設定では圧縮されます。 このパラメータがYに設定されていると、データ圧縮が行われません。
DISABLE_ PASSWORD_ OTA_ ENCRYPTION	OTA TDConnection.Password プロパティは、標準設定では暗号化されています。このパラメータがYに設定されていると、このプロパティの暗号化が行われません。
	注: このパラメータを設定しても、サーバ・マシンに転送する際のパス ワードの暗号化には影響しません。

パラメータ	説明
DISPLAY_LAST_ USER_ INFO	このパラメータを使用すると、 クライアント ALM のログイン・ウィンド ウでのセ キュリティを向上させることができます。 標準設定では、 前回のログイン情 報 (ユーザ名, ドメイン, プロジェクト) が表示されます。
	このパラメータが N に設定されている場合は,前回のユーザ・ログイン情報 がクライアント・マシンに保存されないため,ALM のログイン・ウィンドウに表 示されません。このパラメータを有効にするには,ALM にログインし,ログア ウトしてから,もう一度ログインする必要があります。このパラメータが Y に設 定されているか,存在しない場合は,前回のユーザ情報が表示されま す。
	詳細については、「カスタマイズの変更内容の保存」(281ページ)を参照 してください。
DOWNLOAD_ REST_	このパラメータは, 添付ファイルを REST で自動的にダウンロード するかどう かを決定します。
ATTACHMENTS	値が¥の場合は,添付ファイルを開くか保存するかのプロンプトがブラウザ でユーザに対して表示された後でのみ,添付ファイルがダウンロードされま す。
	値がNの場合,添付ファイルはブラウザによって自動的にダウンロードされます。
	標準設定値はYです。
EI_DELETE_ INTERVAL	実行項目をデータベースから削除するジョブの実行間隔(時間単位)を定 義します。[削除済み]の状態で10時間以上経過している実行項目 は、このジョブによって削除されます。
	標準設定は10です。
ENABLE_ COLUMN_ VISIBILITY_ TRACKING	このパラメータは, GUI でフィールドを非表示にできるかどうかを定義します。
	次のオプションが利用可能です。
	 Y:フィールドは GUI で非表示にできます。
	 N:フィールドは GUI で非表示にできません。
	標準設定では、パラメータはNに設定されています。

パラメータ	説明
ENABLE_ CREATE_ DOCGEN	このパラメータは, マストヘッドの 🍑 メニューの[ドキュメント ジェネレータ]メ ニュー項目を有効または無効にします。 次のオプションが利用可能です。
	 Y:ドキュメント・ジェネレータは有効になります。
	 N:ドキュメント・ジェネレータは無効になります。
	標準設定では、パラメータはNに設定されています。
ENABLE_ CREATE_	このパラメータでは, お気に入りリストに新しいプロジェクト・ドキュメントを追 加できるかどうかを定義します。
DOCGEN_ FAVORITE	次のオプションが利用可能です。
	 Y:お気に入りリストに新しいプロジェクト・ドキュメントを追加できます。
	 N:お気に入りリストに新しいプロジェクト・ドキュメントを追加できません。
	標準設定では、パラメータはNに設定されています。
ENABLE_ CREATE_	このパラメータでは, アナリシス・ビュー・モジュールで Microsoft Excel レポートを作成 できるかどうかを定義します。
LEGACY_EXCEL_ REPORT	次のオプションが利用可能です。
	• Y:レポートを作成できます。
	 N:レポートを作成できません。
	標準設定はNです。
ENABLE_ CREATE_	このパラメータでは, アナリシス・ビュー・モジュールで標準レポートを作成で きるかどうかを定義します。
STANDARD_ REPORT	次のオプションが利用可能です。
	 Y:レポートを作成できます。
	 N:レポートを作成できません。既存のレポートのみ利用できます。
	標準設定はNです。

パラメータ	説明
ENABLE_ENTITY_ SELECTION_ TREE_REQ_ MOVE_TO	標準設定では, ツリー内を上下に移動しても MoveTo イベントはトリガさ れません。ただし Quality Center バージョン 10.00 では, [要件]ツリー内を 上下に移動するとMoveTo イベントがトリガされていました。
	このパラメータでは,後方互換性を確保する目的で,[要件]ツリー内を上 下に移動したときに MoveTo イベントをトリガするかどうかを定義できます。
	次のオプションが利用可能です。
	• Y: MoveTo イベントをトリガします。
	• N: MoveTo イベントをトリガしません。
	標準設定はNです。
ENABLE_JMX_ CONSOLE	標準設定では, JMX コンソールは無効になっています。このパラメータを使 用すると, デバッグ用に JMX コンソールを有効にできます。
	次のオプションが利用可能です。
	 Y:JMX コンソールは有効になります。
	 N: JMX コンソールは無効になります。
	標準設定はNです。
ENABLE_ OUTPUT_	このパラメータは, REST 出力サニタイズ処理が利用できるかどうかを決定 します。
SANITIZATION	次のオプションが利用可能です。
	 Y:REST 出力サニタイズ処理は有効になります。
	 N:REST 出力サニタイズ処理は無効になります。
	標準設定はYです。
ENABLE_ PERFORMANCE_	標準設定では, QC Sense レポートは無効になっています。このパラメータ を使用すると, デバッグ用に QC Sense レポートを生成できます。
MONITOR_BIRT_ REPORTS	次のオプションが利用可能です。
	 Y:QC Sense レポートは有効になります。
	 N:QC Sense レポートは無効になります。
	標準設定はNです。

パラメータ	説明
ENABLE_XSRF_ VALIDATION	このパラメータは, クライアントから要求時に送信される XSRF トークンの検 証を有効または無効にします。
	次のオプションが利用可能です。
	 Y:XSRFトークンの検証は有効になります。
	 N:XSRFトークンの検証は無効になります。
	標準設定はYです。
ENTITY_LINK_ HOST	このパラメータを使用すると、ALM がエンティティをメールする際にエンティティ へのリンクで使用するメール・サーバのホスト名を設定できます。標準設定 では、インストール時に指定された標準設定のホスト名が使用されます。 詳細については、MAIL_SERVER_PORTを参照してください。
ENTITY_LINK_ PORT	このパラメータを使用すると、ALM がエンティティをメールする際にエンティティ へのリンクで使用するメール・サーバのポート番号を設定できます。標準設 定では、インストール時に指定された標準設定のポート番号が使用され ます。
ENTITY_LINK_ SCHEMA	このパラメータを使用すると, ALM がエンティティをメールする際にエンティティ へのリンクで使用するスキーマを設定できます。
ENTITY_TABLE_ NAMES_FOR_ FIXING_UPDATE_ PERMISSIONS_ INCONSISTENCY	このパラメータは,検証を実行してアクセス許可の不整合を検出するデー タベース・テーブルを決定します。不整合は後で修復によって修正されま す。
	アクセス許可の不整合が起きるのは,ユーザ・グループがエンティティの特定 のフィールドを変更するアクセス許可を持っているが,エンティティ自体を変 更するアクセス許可を持っていない場合です。
EXTENDED_ MEMO_ FIELDS	このパラメータは, エンティティ当たりのメモ・タイプのユーザ定義フィールドの 最大数を5から15に増やします。標準設定値はNです。メモ・タイプ・ フィールドの数を増やすには, このパラメータをYに設定します。
	詳細については、「プロジェクトのエンティティのカスタマイズ」(306ページ)の [設定]タブ、および「ユーザ定義フィールドの追加」(311ページ)を参照し てください。

パラメータ	説明
FAST_ RECONNECT_ MODE	このパラメータは、ユーザ・セッションが時間切れになったときの再接続オプ ションを定義します。このパラメータは外部認証に対しては無効です。再 接続の際には常にユーザの確認が必要になります。値は次のとおりです。
	0:再接続オプション(大きな変更が加えられていないときにカスタマイズ内 容の再ロードを省略)を無効にします。セッションが時間切れになった場 合, ユーザは手動でログアウトし, 再度ログインする必要があります。
	100(標準設定):パスワード認証が要求されます。ALM に再接続して作 業を続けるユーザは、パスワードを入力する必要があります。
	200: ユーザは, パスワード情報を入力せずに ALM に再接続できます。 ユーザ認証は, 現在のパスワードを使って実行されます。 ユーザのパスワー ドが前回のログイン以降に変更されていた場合は, 再接続できません。 そ の場合は, ログアウトしてから, 新しいパスワードを使って再度ログインする 必要があります。
	注: ユーザが ALM のユーザのリスト から削除されていた場合, そのユー ザは再接続できません。
	詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガ イド』を参照してください。
FAVORITES_ DEPTH	[お気に入り]メニューに表示する, 最近使用されたお気に入りビューの数 を定義します。標準設定では, 最近使用された4つのビューがメニューに 表示されます。最近使用されたビューのリストをまったく表示しないようにす るには, パラメータを0に設定します。
	警告の詳細については、 『HP Application Lifecycle Management ユー ザーズ・ガイド 』を参照してください。
FETCH_LIMIT	パフォーマンスの最適化を目的に, ALM グリッドで取得および表示するレ コード数には制限が設けられています。このパラメータでは, 標準設定の 制限値を変更できます。
	このパラメータを指定しない場合,最大表示レコード数は500です。
	このパラメータの値を「0」に設定すると、すべての結果が表示されます。
	関連パラメータの詳細については、「GROUP_FETCH_LIMIT」(210ペー ジ)を参照してください。
	プロジェクトごとにこの値を設定する方法については、「グリッドで表示するレ コード数の制限」(110ページ)を参照してください。

パラメータ	説明
FILE_ EXTENSION_ BLACK_LIST_ DOWNLOAD	この値は、開いた添付ファイル、REST API、または FTP Explorer 経由で ダウンロードできない、ファイル拡張子付きのセミコロン区切り文字列で す。
	注:
	 インポートまたは復元されるプロジェクトは、そのリポジトリにファイル・タイプがブロック対象のファイルを含んでいても、ブロックされません。
	 以前のバージョンからアップグレードされたプロジェクトには、リポジト リにすでに存在しているファイル・タイプがブロック対象のファイルが 依然含まれています。
	 最適化されたリポジトリの移行中、ファイル・タイプがブロック対象の ファイルはブロックされません。
FILE_ EXTENSION_ BLACK_LIST_ UPLOAD	この値は、開いた添付ファイル、拡張ストレージ、REST API、または FTP Explorer 経由でアップロードできない、ファイル拡張子付きのセミコロン区 切り文字列です。
	注:
	 インポートまたは復元されるプロジェクトは、そのリポジトリにファイル・タイプがブロック対象のファイルを含んでいても、ブロックされません。
	 以前のバージョンからアップグレードされたプロジェクトには、リポジト リにすでに存在しているファイル・タイプがブロック対象のファイルが 依然含まれています。
	 最適化されたリポジトリの移行中、ファイル・タイプがブロック対象の ファイルはブロックされません。
FORCE_LOGIN_ SSL_ MODE	このパラメータがYに設定されている場合, ログイン・プロセスのみが SSL (HTTPS)で送信され, それ以外の通信はすべて SSL なし(HTTP)で送 信されます。
	注 : SSL を使用する設定をALM で行う必要があります。詳細については,『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグレード・ガイド』を参照してください。
	関連パラメータの詳細については、「LOGIN_SSL_PORT」(212ページ)を 参照してください。

パラメータ	説明
FROM_EMAIL_ ADDRESS	ユーザが ALM ログイン・ウィンド ウの[パスワードを忘れた場合]リンクをク リックすると,新しいパスワードを指定するためのリンクが記載された電子 メール通知がユーザに送信されます。
	このパラメータを使用すると、電子メールの[送信元]フィールドの電子メー ル・アドレスを変更できます。
	パスワードのリセットの詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
FTP_PORT	ALM プロジェクト・リポジトリの参照に使用する, FTP サービスのポート番号。詳細については,「プロジェクト・リポジトリの参照」(88ページ)を参照 してください。
	推奨値は 21 または 2121 です。
	注:
	 パラメータを設定すると、指定したポートでFTPサービスが開始されます。
	• パラメータを再設定すると, FTP サービスは再開します。
	• パラメータの設定を解除すると, FTP サービスは停止します。
GET_COVERAGE_ FROM_BL_FOR_ PINNED_TESTSET	このパラメータを使用すると、固定されたテスト・セットに追加する要件のテ ストを選択するときに、(現在のビューからではなく)ベースラインからカバレッ ジを取得できます。
	惊 华 設 疋 10 は № ℃ 9 。
GRAPH_RESULT_ LIFESPAN	アナリシス・ビュー・モジュールで[アナリシス項目の共有]コマンドを使ってグ ラフを共有する場合,このグラフはキャッシュからデータを取得します。標準 設定では,キャッシュ情報は60分ごとに更新されます。
	このパラメータでは、キャッシュの更新頻度(分単位)を設定できます。
	最小値は5分です。最大値は60分です。
	グラフ・データの共有の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

パラメータ	説明
GROUP_FETCH_ LIMIT	パフォーマンスが最適化されるように, [グループ分け]フィルタを ALM グリッドに適用した場合に各グループで取得および表示するレコード数の最大値を指定します。このパラメータでは, 標準設定の制限値を変更できます。
	このパラメータを指定しない場合, グループあたりの最大表示レコード数は 100 です。
	このパラメータの値を0に設定すると、すべての結果がグループごとに表示されます。
	関連パラメータの詳細については、「FETCH_LIMIT」(207ページ)を参照 してください。
	プロジェクトごとにこの値を設定する方法については、「グリッドで表示するレ コード数の制限」(110ページ)を参照してください。
INHERIT_ MODULE_ ACCESS_TO_ VIEWS	モジュールの中には, ほかのモジュールのビューに論理的に接続されている ものがあります。 たとえば, ビジネス・モデル・モジュールは, 要件モジュールと テスト計画モジュールのビジネス・リンクに関連します。
	プロジェクト・マネージャは,一定のユーザ / グループに対して,モジュールへのアクセスを非表示することができます。
	このパラメータは, このような関連ビューをその「親」モジュールが非表示のと きに非表示にするかどうかを示します。
	注: このパラメータは,ビジネス・モデル・モジュールに関連するビューに のみ影響します。
	標準設定値:N(関連ビューは非表示になりません)
INPUT_ VALIDATION_ LOGPATH	このパラメータには,入力検証フレームワークのログ・フォルダの場所が格納 されます。
	このパラメータが定義されていない場合,入力検証エラー・ログは repository/log/InputValidation に作成されます。
INPUT_	このパラメータは,入力検証フレームワークのモードを制御します。
VALIDATION_ MODE	次のオプションが利用可能です。
	• オフ:入力検証は実行されません。
	• ログ : 非表示で検証を実行します。 例外は発生しませんが、 すべてのエ ラーがログに記録されます。
	• オン:完全な入力検証が実行されます。
	標準設定は オン です。

パラメータ	説明
LAB_MAX_DB_ HANDLERS	このパラメータを使用すると、LAB_PROJECTに対して許可されるデータ ベースへの最大接続数を定義できます。
	標準設定値は100です。
LDAP_IMPORT_ ATTRIBUTE_ MASK	このパラメータを使用すると、正規表現を定義して、LDAP ディレクトリから ユーザをインポートする際にLDAP 属性のさまざまな値を識別できます。 ユーザのインポート時には、正規表現に一致する属性値が選択されま す。
	パラメータの書式は くLDAP 属性名> = く正規表現>にする必要があります 。ここで、 くLDAP 属性名> は値を選択する LDAP 属性の名前で、 く正規表 現> は正規表現です。この正規表現は、標準的な Java 構文の正規 表現に準拠している必要があります。
	たとえば、パラメータ値がuid=^\D\w+\$であれば、数字以外の文字とそれに続く任意の数の単語文字(英文字,数字,下線文字)で構成されるLDAP属性uidの値が選択されます。
	詳細については、「ユーザをインポートするための LDAP 設定の定義」(152 ページ)を参照してください。
	LDAP ディレクトリからのユーザのインポートの詳細については、「LDAP からのユーザのインポート」(148ページ)を参照してください。
LDAP_RESULT_ SIZE_LIMIT	フィルタされたクエリに対して LDAP が返す結果の最大数。
	標準設定値は1000です。
	推奨される最小値の100より小さい値を設定すると、LDAPのインポート や検索の速度が低下することがあります。推奨される最大値の10000より 大きい値を設定すると、サーバのメモリが不足する可能性があります。
	LDAP の使用の詳細については、「LDAP からのユーザのインポート」(148 ページ)を参照してください。
LDAP_TIMEOUT	ALM が, LDAP 操作を取り消すまでに待機する時間(ミリ秒)。
(前のバージョンでは DIRECTORY_ TIME_LIMIT_ CONSTRAINT)	LDAP 操作に時間制限を設けることで, LDAP で問題が発生したときに ALM が無期限に待機する状況を防ぐことができます。標準設定のタイム アウト値は 10 分です。
	LDAP の使用の詳細については、「LDAP からのユーザのインポート」(148 ページ)を参照してください。

パラメータ	説明
LOGIN_SSL_PORT	FORCE_LOGIN_SSL_MODE パラメータが存在し、Y に設定されている 場合, SSL ログオンに使用するポートを設定できます。標準設定値は 443 です。
	関連パラメータの詳細については,「FORCE_LOGIN_SSL_MODE」(208 ページ)を参照してください。
MAIL_SERVER_ PORT	ALM がメール送信に使用する SMTP サーバ・ポート。標準設定では、この 値は 25 に設定されています。
	関連パラメータの詳細については、「MAIL_SERVER_HOST」(193ペー ジ)を参照してください。
MAX_ CONCURRENT_	このパラメータでは,同時に生成可能なプロジェクト・レポートの最大数を 定義します。
REPORTS	任意の値を定義します。最小値は1です。
	最大数に到達した状態で追加のレポートを生成しようとした場合, 最初 のレポートのいずれかの生成が終了してから追加レポートの生成が開始さ れます。
	たとえば, 最大数が5の場合にレポートを追加で生成しようとしても, 最 初の5つレポートのいずれかの生成が終了してからでないと6番目のレ ポートの生成は開始されません。
	標準設定の最大値は3です。
MAX_GRAPH_ RESULT_DATA_ TABLE_VOLUME	このパラメータを使用すると、 グラフ結果の最大サイズを変更できます(グラ フのグリッド・ビュー内のセル数で計算します) 。 セルのサイズは 8 バイトで す。
	標準設定の最大値は 100 メガバイトです。
MAX_KPIS_PER_ MILESTONE	1 つのマイルストーンで定義可能な KPI の最大数を指定します。標準設定値は 30 です。
	KPI をマイルストーンに追加する方法については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
MAX_ MILESTONES_ PER_RELEASE	1 つのリリースで定義可能なマイルストーンの最大数を指定します。標準 設定値は 20 です。
	マイルストーンを定義する方法については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
MAX_PROJECTS_ IN_EXCEL_ REPORT	このパラメータは, ビジネス・ビュー Excel レポート で選択 できるプロジェクトの 最大数を決定します。

パラメータ	説明
MAX_QUERY_ LENGTH	このパラメータでは、クエリの長さの最大値(最大文字数)を変更できます。この長さにはパラメータも含まれ、OracleとSQLに適用されます。標準設定値は 1000000 です。
	ー 部 のレポートは、クエリ・サイズの上限の標準設定値を超えるため、処理できません。このような場合は、このパラメータを 100000000 に設定します。詳細については、「クロス・プロジェクトのカスタマイズ・レポート」(352ページ)を参照してください。
MAX_SCOPE_ ITEMS_PER_ RELEASE	1 つのリリースで定義可能なスコープ・アイテムの最大数を指定します。標 準設定値は 20 です。
	スコープ・アイテムを定義する方法については、 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド 』を参照してください。
MAX_STEPS_IN_ PROJECT	このパラメータは,各要求で取得できるステップの最大数を制限します。これは,サーバのメモリ不足エラーを防ぐためです。
MAX_TEST_ INSTANCES	このパラメータでは,サーバが1回の呼び出しで処理するテスト・インスタン スの数の上限を設定します。標準設定値は1000000です。
	テスト・インスタンスの数がこの値を超えると、エラー・メッセージが表示されて 呼び出しは却下され、操作は失敗します。
MAX_TESTS_IN_ TEST_SET	テスト・セット内で、コピー/貼り付けまたは削除するテストの数の上限を指 定します。標準設定値は20000です。
	テスト・セット内のテストの数がこの値を超えると, エラー・メッセージが表示されて関数は実行されません。
MAX_ THRESHOLD_ VALUES_PER_ KPI	1 つの KPI で定義可能なしきい値の最大数を指定します。標準設定値は 12 です。
	しきい値を定義する方法については、 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド 』を参照してください。

パラメータ	説明
NLS_SEARCH_ LOCALE	不具合のサマリをトークン化するために[類似した不具合の検索]コマンド で使用する言語。このパラメータが必要なのは、スペース文字で単語を区 切るかどうかという点について、サーバの標準設定のロケールと不具合サマ リが書かれた言語が異なる場合のみです。
	この値には, ISO 639(http://www.w3.org/WAI/ER/IG/ert/iso639.htm) (英語サイト)に記載されている言語コードと一致する文字列値を指定し ます。
	たとえば,標準設定のロケールが英語で,テキストが(単語の区切りにス ペース文字を使用しない)日本語の場合は,NLS_SEARCH_LOCALE=jaと 設定します。
	このパラメータが定義されていないか, 無効な場合は, サーバの標準設定のロケールが使用されます。
ORACLE_RAC_ SUPPORT	Oracle データベース・サーバで RAC サポートを有効にするは、このパラメー タをYに設定する必要があります。詳細については、『HP Application Lifecycle Management インストールおよびアップグレード・ガイド』を参照し てください。
ORPHAN_ ANALYSIS_ DATA_FILE_ INACTIVE_ PERIOD	このパラメータでは、孤立ファイルとみなすのに必要なアナリシス・データ・ファ イルの経過時間を定義します。ファイルのプロパティの直前の変更がこのパ ラメータで定義した期間よりも前に行われている場合、このファイルは孤立 ファイルと見なされます。
	ミリ秒単位の値を定義します。最小値は 3600000(1時間)です。 標準設定値は 86400000(1日)です。
OUTPUT_ SANITIZATION_ BY_CLIENT_TYPE	このパラメータは,出力サニタイズ処理が呼び出されるかどうかをクライアン ト・タイプごとに決定します。
	形式は, <クライアント・タイプ名>=true/false;<クライアント・タイプ 名>=true/false; です。
	このサイト・パラメータで定 義されていないクライアント・タイプの標 準 設 定 値 は true です。

パラメータ	説明
PASSWORD_ RESET_ DISABLE	このパラメータは, ALM ログイン・ウィンドウの[パスワードを忘れた場合]リ ンクを使用して, ALM ユーザが自分のパスワードを設定し直すことができる かどうかを規定します。
	このパラメータが定義されていないか, 'N' に設定されている場合は, [パス ワードを忘れた場合]リンクを使用して, ユーザが自分のパスワードを設定 し直すことができます。
	LDAP 認証が有効な場合は、このパラメータを'Y'に設定する必要があります。詳細については、「ユーザの認証の有効化」(159ページ)を参照してください。
	パスワードのリセットの詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
PASSWORD_ RESET_ ELAPSED_TIME	ユーザが ALM ログイン・ウィンド ウの[パスワードを忘れた場合]リンクをク リックする場合,標準設定では前回から24時間が経過していなければ, 同じユーザがパスワードの再設定を要求をすることはできません。
	このパラメータを使用すると、ユーザがパスワードの再設定を要求できるまで に必要な経過時間を分単位で変更できます。
	パスワードのリセットの詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
PASSWORD_ RESET_ SERVER	ユーザが ALM ログイン・ウィンド ウの[パスワードを忘れた場合]リンクをク リックすると,新しいパスワードを指定するためのリンクが記載された電子 メール通知がユーザに送信されます。
	このパラメータを使用すると,再設定リンクに埋め込まれた標準設定の URL(または URL の一部)をオーバーライドできます。
	次のいずれかの構文を使用します。
	• くサーバ>:<ポート>:標準設定のサーバとポートの両方をオーバー ライドします。
	• くサーバ>:標準設定のサーバをオーバーライドします。
	• <ポート>:標準設定のポートをオーバーライドします。
	パスワードのリセットの詳細については,『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

パラメータ	説明
PASSWORD_ RESET_ VALID_PERIOD	ユーザが ALM ログイン・ウィンド ウの[パスワードを忘れた場合]リンクをク リックすると、新しいパスワードを指定するためのリンクが記載された電子 メール通知 がユーザに送信されます。このリンクは、標準設定では 24 時 間有効です。
	このパラメータを使用すると、リンクが有効な時間を分単位で変更できま す。
	パスワードのリセットの詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
PPT_KPI_ FAILURES_ PERCENTAGE_	標準設定では, リリースで実行する KPI 計算の 10% 以上が失敗する と, ALM はそのリリースの PPT 計算を中断し, プロジェクト内にある次のリ リースへと進みます。
FUSE	標準設定値は60です。
	プロジェクトの計画と追跡(PPT)計算のスケジュール設定については、「プロジェクトの計画と追跡(PPT)計算のスケジュール設定」(235ページ)を参照してください。
PPT_RECENTLY_ USED_ PROJECTS_ THRESHOLD_	このパラメータは、 どのプロジェクトを PPT 計算の対象とするかを制御する ためのしきい値を設定します。 あるプロジェクトに指定期間(分単位)の 間, 誰もログインしていない場合, そのプロジェクトに対する PPT 計算は 実行されません。
MINUTES	標準設定は10080分(7日)です。
	プロジェクトの計画と追跡(PPT)計算のスケジュール設定については、「プロジェクトの計画と追跡(PPT)計算のスケジュール設定」(235ページ)を参照してください。
PROJECT_ SELECTION_ MAX_PROJECTS	標準設定では, クロス・プロジェクト・グラフに6つまでのプロジェクトを入れることができます。
	このパラメータを使用すると、クロス・プロジェクト・グラフに入れることが可能 なプロジェクトの最大数を別の値に設定できます。 プロジェクトの数を増や すと、システムのパフォーマンスが低下する場合があります。
	プロジェクトのアップグレードの詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
QC_SENSE_ AUTHORIZATION_ DISABLED	このパラメータを使用すると、QC Senseレポートにアクセスするユーザの承認チェックを無効にできます。
	標準設定値はNです(承認チェックは有効です)。
パラメータ	説明
--------------------------------	--
QC_SENSE_ REPORTS_ USERS	標準設定では, QC Sense レポートへのアクセス許可はサイト管理者にし か割り当てられていません。このパラメータは, このアクセス許可をサイト管 理者以外のユーザに割り当てます。
	ユーザ 名を次の構文で指定します: <ユーザ 1>; <ユーザ 2>; <ユー ザ 3>
REPLACE_TITLE	このパラメータでは, すべてのプロジェクトを対象に ALM モジュールの名前を 変更します。
	次のパラメータ値を入力して、1つまたは複数のモジュールの名前を変更
	します。 <オリジナルのタイトル 1 [singular]>;<新しいタイトル 1 [singular]>;
	<オリジナルのタイトル 1 [plural]>;<新しいタイトル 1 [plural] >・
	>, <オリジナルのタイトル 2 [singular]>;<新しいタイトル 2 [singular]>;
	たとえば、Defects モジュールの名前を Bugs に変更し、Requirements モ ジュールの名前を Goals に変更するには、次のように入力しま す。Defect;Bug;Defects;Bugs;Requirement;Goal; Requirements;Goals
	Releases モジュールの名前を変更しても、次の場所にあるモジュール名は変更されません。
	 リリース・モジュール・メニュー・バーの[リリース]コマンド
	• [新規リリース フォルダ]メニュー・コマンドおよびダイアログ・ボックス
	• [新規リリース]メニュー・コマンドおよびダイアログ・ボックス
	注: 特定のプロジェクトのみで不具合モジュール名を変更するには、 「プロジェクトの不具合モジュールの名前の変更」(109ページ)を参照 してください。

パラメータ	説明
REPORT_MAX_ ALLOWED_SIZE	このパラメータでは、 プロジェクト・レポートに含めることができるページの予想 最大数を定義します。 標準設定値は 1000 です。
	注 : ALM はレポートの生成中にページ数を予想するだけです。そのため, 最終的に生成されるレポートがこのページ数を超えないことを保証することはできません。
	ページの最大数を無制限のままにするには, このパラメータを -1 に設定します。ただし, これはサーバのパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性があるため, お勧めしていません。
REPORT_ RESULTS_ LIFESPAN	アナリシス・ビュー・モジュールで[アナリシス項目の共有]コマンドを使ってプ ロジェクト・レポートを共有する場合,このレポートはキャッシュからデータを 取得します。標準設定では,キャッシュ情報は60分ごとに更新されます。
	このパラメータでは、キャッシュの更新頻度(分単位)を設定できます。
	最小値は5分です。最大値は60分です。
	グラフ・データの共有の詳細については,『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
REPOSITORY_ GC_DELAY_ CANDIDATE_	このパラメータでは、各プロジェクト・リポジトリのクリーニング・プロセスの時間 と参照のないファイルが実際に削除される時間との間に遅延を作成するこ とができます。
TIME	0から28の値(日数)を設定します。
	このパラメータが存在しない場合,ファイル・システム内の旧式のファイルを 削除すると7日間の遅延が行われ,ファイルが実際に削除されるのは7 日後になります。
	プロジェクト・リポジトリのクリーンアップの詳細については、「プロジェクト・リポ ジトリのクリーンアップ」(88ページ)を参照してください。
REPOSITORY_ GC_JOB _PRIORITY	このパラメータは,リポジトリのクリーンアップ・プロセスの実行速度を指定し ます。
	0(最も速い)から10(最も遅い)の範囲で値を設定します。
	このパラメータが存在しない場合、速度は3に設定されます。
	プロジェクト・リポジトリのクリーンアップの詳細については、「プロジェクト・リポ ジトリのクリーンアップ」(88ページ)を参照してください。

パラメータ	説明
REPOSITORY_ GC_ PROJECT_ CLEANUP	このパラメータは,各プロジェクト・リポジトリのクリーンアップ・プロセスを実行 する時間間隔(日数)を定義します。
	1から28の値(日数)を設定します。
INTERVAL	パラメータが存在しない場合は、7日に一度プロジェクト・リポジトリがスキャンされます。
	プロジェクト・リポジトリのクリーンアップの詳細については、「プロジェクト・リポ ジトリのクリーンアップ」(88ページ)を参照してください。
REPOSITORY_ MIGRATION	このパラメータは,古いプロジェクト・リポジトリから新しいプロジェクト・リポジ トリにファイルをコピーする速度を指定します。
_JOB_PRIORITY	0(最も速い)から10(最も遅い)の範囲で値を設定します。
	このパラメータが存在しない場合,速度は3に設定されます。
	プロジェクト・リポジトリの移行プロセスの詳細については、「リポジトリの移 行」(136ページ)を参照してください。
REQUIREMENT_ REVIEWED_ FIELD_ AUTOMATIC_ UPDATE	このパラメータが Y(標準設定)に設定されている場合に要件フィールドが 変更されると, レビュー済み(RQ_REQ_REVIEWED)のフィールドが自動 的にレビュー未完了に設定されます。
	このパラメータがNに設定されている場合は、要件フィールドを変更しても レビュー済み(RQ_REQ_REVIEWED)フィールドに影響しません。
REQUIREMENTS_ LIBRARY_FUSE	パフォーマンスを最大レベルに維持するための方法として、 ライブラリに含まれる要件の最大数を指定します。
	このパラメータの標準設定値は3500です。 この値の検証は、 ベースライン の作成時、 ライブラリのインポート時、 ライブラリの同期時に行われます。
	関連パラメータの詳細については、「LIBRARY_FUSE」(192ページ)を参 照してください。
REST_API_ DEFAULT_PAGE_ SIZE	REST API を使用してコレクションで GET 操作を行うとき,1回の操作で 返されるページあたりのエンティティ数の標準設定値(ただし,API コン シューマによってページ・サイズが別途指定されている場合を除く)を指定し ます。
	標準設定は100エンティティです。

パラメータ	説明
REST_API_HTTP_ CACHE_ ENABLED	このパラメータを使用すると、サーバ側のHTTP キャッシュに対する REST API サポートが有効になります。有効な場合、サーバは ETag を使用して、次のリソースに対してキャッシュをサポートします。
	 カスタマイズ / エンティティ
	• カスタマイズ / 関係
	• カスタマイズ / 使用リスト
	 カスタマイズ / ユーザ
	標準設定値はYです。
REST_API_MAX_ BULK_SIZE	1回の一括操作で許容されるエンティティの最大数。REST での一括操 作では,同じタイプのエンティティのコレクションに対する POST,PUT,また は DELETE を行うことができます。
	標準設定は2000エンティティです。
REST_API_MAX_ ENTITY_TREE_ SIZE	REST API には, 階層的エンティティ用のツリー・サブリソースが用意されています。これは, エンティティの集合を展開されたツリーの形で取得します。 このパラメータは, 1 つの要求で取得できるコレクションの最大サイズを制限します。
	注: ツリー・サブリソースはページングをサポートしないため,REST_ API_MAX_PAGE_SIZE パラメータは無意味です。
	標準設定は100エンティティです。
	注:値を大きくすると、パフォーマンスに影響します。
REST_API_MAX_ PAGE	REST APIを使用してコレクションでGET操作を行うとき、1回の操作で返されるページあたりのエンティティ数の最大値。
_SIZE	標準設定は 5000 エンティティです。
REST_SESSION_ MAX_ IDLE_TIME	このパラメータは、REST API セッションの最大アイドル時間(分)を設定します。アイドル時間とは、セッションで動作が行われていない場合でも、REST API セッションのトークンが有効なまま保たれる時間のことです。この時間が経過すると、セッションは、ライセンスおよびセッションが持つロックも含めて、期限切れになります。次回の呼び出しでは、REST API は新しいセッションを再作成します。

パラメータ	説明
SA_MAX_DB_ HANDLERS	このパラメータを使用すると、サイト管理スキーマに対して許可されるデータ ベースへの最大接続数を定義できます。
	標準設定値は 50 です。値は 50 以上である必要があります。
SD_RUN_ AMOUNT	テスト・セットまたはビルド検証スイートで推奨される実行時間を計算する 際に,計算対象になる実行の数。
	標準設定値は10です。
	推奨されるしきい値は 100 です。値を高くすると、 パフォーマンスに影響を 与える可能性があります。
SECURED_QC_ URL	ALM で電子メールを生成する場合,その電子メールには ALM へのリンク が含まれます。
	このパラメータがYに設定されていると, ALM URL は SSL 接続を使用します(https: で始まります)。
	N(標準設定)に設定されている場合,SSLは使用されません。
SEND_ EXCEPTION_ DEFAULT_TO	ALM でエラー・レポートを送信する場合の電子メール・アドレスの標準設定値を定義します。
	関連パラメータの詳細については、「SEND_EXCEPTION_ENABLED」 (221ページ)を参照してください。
	エラーの詳細情報を送信する方法は、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
SEND_ EXCEPTION_ ENABLED	このパラメータを「Y」に設定すると、ALMの[ヘルプ]メニューで[エラーの詳 細の送信]オプションを設定できるようになります。このオプションを設定する と、エラーの詳細を添付ファイルとして電子メールで送信することができま す。
	関連パラメータの詳細については、「SEND_EXCEPTION_DEFAULT_ TO」(221ページ)を参照してください。
	エラーの詳細情報を送信する方法は、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
SKIP_CLIENT_ PREREQUISITES_ CHECK	このパラメータを使用すると、ALM クライアントを開始するデプロイメント段 階で実行される前提条件のチェックを省略できます。
	標準設定値はNです。
	ヒント: MSI Generator で同様の機能を実行するには、 [前提条件の チェックをスキップ]チェックボックスを選択します。

パラメータ	説明
SMTP_SSL_ SUPPORT	SMTP サーバに対する SSLトネリングを有効にします。 標準設定値は N です。
SQL_QUERY_ VALIDATION_ BLACK_LIST	標準設定では、ALM は Excel レポートに対する SQL クエリに次のコマンド が含まれていないことをチェックします。INSERT, DELETE, UPDATE, DROP, CREATE, COMMIT, ROLLBACK, ALTER, EXEC, EXECUTE, MERGE, GRANT, REVOKE, SET, INTO, TRUNCATE。こうして、プロジェクト・データベースのレコードが誤って変更/ 削除されないようになっています。
	このパラメータを追加すると、このリストに入れるコマンドを変更できます。パ ラメータの値は、 SQL コマンドをカンマ区切りリストで指定します。 ALM は、 その SQL コマンドが、 Excel レポートに対する SQL クエリに含まれていない ことを確認します。
	この確認処理は, SQL_QUERY_VALIDATION_ENABLED パラメータが存在し, それがNに設定されている場合は実行されません。詳細については,「SQL_QUERY_VALIDATION_ENABLED」(222ページ)を参照してください。
SQL_QUERY_ VALIDATION_ ENABLED	標準設定では、Excel レポートの SQL クエリが有効なこと、およびそのクエ リによってプロジェクト・データベースが変更されないことを ALM は確認しま す。この検証の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
	このパラメータが N に設定されている場合, この検証は実行されません。このパラメータが存在しないか, 空になっているか, Y に設定されている場合は, この検証が実行されます。
	関連パラメータの詳細については、「SQL_QUERY_VALIDATION_ BLACK_LIST」(222ページ)を参照してください。
SSO_ EXPIRATION_ TIME	LWSSOトークン(REST API の認証トークン)の有効時間(分)。何の動 作もないままこの時間が経過すると、REST API コンシューマは再認証を 要求されます。
	標準設定値は60分です。
STATIC_content_ MAX_CACHED_ FILE_SIZE	Jetty 静的コンテンツ・キャッシュに格納可能な最大ファイル・サイズ(MB単位)を指定します。キャッシュ・ファイル・サイズの値を小さくすることも可能であり、0に設定するとキャッシュをキャンセルできます。
SUPPORT_ TESTSET_END	このパラメータを「Y」に設定すると、テスト・セットの実行開始時と終了時に [オートマティックランナー]ダイアログ・ボックスを開いてリモート・エージェント に通知できます。イベントは、リモート・エージェントのSet_Valueメソッドを使 用して渡されます。

パラメータ	説明
SUSPEND_ REPOSITORY_ GC	このパラメータは、プロジェクト・リポジトリのクリーニング・プロセスに関係しま す。詳細については、「プロジェクト・リポジトリのクリーンアップ」(88ページ)を 参照してください。
	このパラメータは, サイト全体でクリーンアップ・プロセスを停止します。 このパ ラメータは, 特別な状況でのみ使用してください。 たとえば, クリーンアップ・ プロセスがシステム・パフォーマンスに影響しているかどうかを確認する場合 などです。
	このパラメータを定義し, その値をYに設定すると, プロジェクト・リポジトリ のクリーニング・プロセスが一時的に停止されます。 クリーニング・プロセスを 再開するには, このパラメータをNに設定します。
SUSPEND_ REPOSITORY_ MIGRATION	このパラメータは、プロジェクト・リポジトリの移行プロセスに関係します。詳細については、「移行の優先度の設定」(140ページ)を参照してください。 このパラメータは、サイト全体で移行プロセスを停止します。このパラメータ は、特別な状況でのみ使用してください。たとえば、プロジェクトをバックアッ プする場合、移行がシステム・パフォーマンスに影響しているかどうかを確認 する場合などです。
	このパラメータを定義し, その値を Y に設定すると, プロジェクト・ファイルの 移行が一時的に停止されます。移行を再開するには, このパラメータを N に設定します。
TEXT_ ENCODING_BY_ CLIENT_TYPE	このパラメータは, 出力サニタイズ処理のテキスト・エンコーディングが呼び出 されるかどうかをクライアント・タイプごとに決定します。
	形式は, <クライアント・タイプ名>=true/false;<クライアント・タイプ 名>=true/false; です。
	このサイト・パラメータで定義されていないクライアント・タイプの標準設定値 は false です。
TEXT_SEARCH_ TIMEOUT	テキスト検索インデックスを有効にし再構築する操作をALMが取り消すまでに待機する時間(秒)。この操作は、「サイト管理」の[サイトのプロジェクト]タブの[テキスト検索の有効化/再構築]ボタンをクリックすると開始されます。標準設定のタイムアウト値は20分です。
	テキスト検索の設定の詳細については、「テキスト検索の設定」(184ページ)を参照してください。

パラメータ	説明
UNIX_SERVER	このパラメータが Y に設定されている場合は、Windows マシン上のテスト・ ツールから UNIX ベースのリポジトリへの直接ファイル・アクセスが可能になり ます。
	その場合は,次に示すように,外部からアクセスする UNIX サーバ・マシン 上のディレクトリごとに新しいパラメータを追加し,対応する Windows のパ スを指定する必要があります。
	• パラメータ名は, FOLDER_MAPPING_nで, nは識別番号です。 例 : FOLDER_MAPPING_1
	 パラメータ値は次の形式で指定します。 UNIXのパス->Windowsのパス 例:
	<pre>/opt/Mercury/repository/qc/->\\netapp\qc\repository\</pre>
	注:このパラメータは HP LoadRunner に適用されます。
UPGRADE_ EXCEPTION_ FILE	このパラメータは、プロジェクトのアップグレード時に使用するグローバルな例 外ファイルの場所を定義します。このファイルによって、ALM データベース・ ユーザ・スキーマの例外が定義されます。SchemaExceptions.xml ファイ ルは、標準設定では ディレクトリに保存されます。
	プロジェクトのアップグレードの詳細については、「ドメインとプロジェクトのアッ プグレード」(126ページ)を参照してください。
UPLOAD_ ATTACH_MAX_ SIZE	このパラメータは, このパラメータに指定された整数値を超えるサイズの添 付ファイルをアップロードできないようにします。 サイズはキロバイト単位で す。
	注: このパラメータは,統合ツールでの添付ファイルのアップロードには 影響しません。
	標準設定値は空白です(サイズと無関係に, すべての添付ファイルがアッ プロードされます)。
VERIFY_REPORT_ FOLDER	このパラメータは, プロジェクトの検証 プロセスの終了時に検証レポートを保存する場所を指定します。
	標準設定では, ALM サーバ・マシンの く ALM リポジトリ・パス> \sa\DomsInfo \MaintenanceData\out に出力が保存されます。
	プロジェクトの検証の詳細については、「ドメインとプロジェクトの検証」(119 ページ)を参照してください。

ALM パラメータの設定

[サイト設定]タブで, パラメータを追加, 変更, 削除できます。また, パラメータをテキスト・ファイルに エクスポートすることもできます。

注:

- 標準設定のパラメータの追加と削除は実行できません。実行できるのは変更のみです。
- 開いているプロジェクトを新しい設定で作業するには、プロジェクトに接続し直す必要があります。

ALM のパラメータを設定するには、次の手順を実行します。

1. 「サイト管理」の[サイト設定]タブをクリックします。

サイトのブロジェクト サイト	のユーザ サイトの接続 ライセンス サーバ DB サーバ サイト設定
【◆▶新規 ◆P2 削除 ◆P> 編集	- エクスポート 多 設定・
バラメータ	値
ADD_NEW_USERS_FROM_PROJEC	Y
ATTACH_MAX_SIZE	3000
AUTO_MAIL_WITH_ATTACHMENT	Y
AUTO_MAIL_WITH_HISTORY	Y
BASE_REPOSITORY_PATH	C#Documents and Settings#All Users#Application Data#HP#ALM#repository
COMMUNICATION_SECURITY_PA:	012345678901
CREATE_HTTP_SESSION	N
DISABLE_VERBOSE_ERROR_MES	N
EVENT_LOG_PURGE_PERIOD_DAY	60
LDAP_SEARCH_USER_CRITERIA	username,email,fullname,phone
LIBRARY_FUSE	2500
LICENSE ARCHIVE PERIOD	365
バラメータ詳細:	
このパラメータが [~] N [~] に設定されて	こいる場合、「サイト管理者」 (サイト ユーザ) タブ) からのみ ALM ユーザを追加できます。このパラメータ(

- 2. 新しいパラメータをリストに追加するには、[パラメータの新規作成]ボタンをクリックします。[パラ メータの新規作成]ダイアログ・ボックスが開きます。追加するパラメータの名前, 値, 説明を入 カし, [OK]をクリックします。
- 3. リストからパラメータを削除するには、パラメータを選択して[パラメータの削除]ボタンをクリックします。[はい]ボタンをクリックして、確定します。
- パラメータを編集するには、リストからパラメータを選択して[パラメータの編集]ボタンをクリックします。[パラメータの編集]ダイアログ・ボックスが開きます。新しい値および値の説明を入力し、 [OK]をクリックします。
- サイト設定グリッドのパラメータをテキスト・ファイルにエクスポートするには、[エクスポート]ボタン をクリックします。[ファイルへのデータのエクスポート]ダイアログ・ボックスが開きます。パラメータを保 存するディレクトリを選択し、ファイルの名前を[ファイル名]ボックスに入力します。[保存]をク リックします。
- 6. [パラメータリストの更新]ボタン をクリックすると、パラメータ・リストを更新できます。

ALM メール・プロトコルの設定

ALM では, 電子メールを使用してプロジェクト情報をユーザに送信します。 ALM サイトのすべての サーバ・ノードで使用するメール・プロトコルを選択できます。 ALM は, SMTP メール・プロトコルをサ ポートしています。

ALM メール・プロトコルの詳細については、『HP Application Lifecycle Management インストールおよ びアップグレード・ガイド』を参照してください。現在設定されているプロトコルを表示するには、サイト 管理の[サイト設定]タブにある「MAIL_PROTOCOL」(193ページ) パラメータを参照してください。

ALM メール・プロトコルを設定するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[サイト設定]タブをクリックします。
- 2. [設定]ボタンをクリックし, [電子メールプロトコルの設定]を選択します。[電子メールプロトコルの設定]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 3. 次のいずれかのオプションを選択します。
 - **なし**: ALM は電子メールを送信しません。
 - SMTP サーバ: ALM は、ネットワーク上のSMTP サーバから電子メールを送信します。ローカル・エリア・ネットワーク上のSMTP サーバのアドレスを入力してください。詳細については、 「MAIL_SERVER_HOST」(193ページ)パラメータを参照してください。
 - Microsoft IIS SMTP サービス: ALM は、ALM サーバ・マシンから電子メールを送信します。このオプションを利用できるのは、IIS のインストール中に Microsoft IIS SMTP サービスを ALM サーバ・マシンにインストールした場合のみです。
- 4. [**テスト**]をクリックし, テスト電子メールを自分のメールボックスに送信します。[テストメール]ダイア ログ・ボックスが開きます。電子メール・アドレスを入力し, [**送信**]をクリックします。ポップアップ・ メッセージで,メールが正常に送信されたかどうかが示されます。
- 5. [OK]をクリックし, [電子メールプロトコルの設定]ダイアログ・ボックスを閉じます。

ALMメール制限の設定

ALM では、電子メールを使用してプロジェクト情報をユーザに送信します。電子メールを受信する ユーザを制限できます。

ALM メール制限を設定するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[サイト設定]タブをクリックします。
- 2. [設定]ボタンをクリックし, [メールの制限]を選択します。[メールの制限の定義]ダイアログ・ボックスが開きます。

- 3. 制限レベルを選択します。
 - **すべて**: ALM はすべてのアドレスに電子メールを送信します。
 - サイト・レベルごと: ALM はサイト上のユーザにのみ電子メールを送信します。
 - プロジェクトごと: ALM はプロジェクトにアサインされたユーザにのみ電子メールを送信します。
- 4. [OK]をクリックして, [メールの制限の定義]ダイアログ・ボックスを閉じます。

管理者ガイド 第8章:サーバとパラメータの設定

第9章:サイト使用状況の分析

「サイト管理」では、一定期間内の特定の時点で HP Application Lifecycle Management(ALM) サイトに接続されていたライセンス対象ユーザの数を追跡できます。また、ライセンス対象ユーザ数をプロジェクト、ユーザ、またはライセンスの種類でフィルタ処理し、ALMの使用状況を分析することもできます。

サイト使用状況の分析について	
サイト使用状況の監視	
サイト使用状況のフィルタ処理	231
ファイルへのサイト分析 データのエクスポート	233
サイト分析の線グラフのカスタマイズ	

サイト使用状況の分析について

「サイト管理」の[サイト分析]タブを使用して、表示されている時間間隔でライセンスの使用状況を 監視します。X軸に沿って表示する時間間隔を指定できます。また、グラフ内容をプロジェクト、ユー ザ、またはライセンスの種類でフィルタ処理することで、グラフに表示する情報を指定することもできま す。

例:

たとえば、ライセンスの使用状況に基づいて、組織内の各部門に費用請求することが必要だとすると、特定部門のプロジェクトでフィルタ処理し、その部門でのライセンスの使用状況を確認できます。 また、選択したユーザに基づいて、特定のユーザ・グループについてライセンスの使用状況を表示する こともできます。

[サイト分析]タブが表示されていない場合は、「サイト管理」の[サイト設定]タブで SITE_ ANALYSIS パラメータを変更すると利用できるようになります。詳細については、「SITE_ANALYSIS」 (194ページ)を参照してください。

サイト使用状況の監視

ALM サイトに接続されているライセンス対象ユーザの数を,選択した一定期間にわたって追跡できます。各モジュールおよび拡張機能の使用レベルを分析し、今月のピークの使用レベルを追跡できます。データは線グラフまたはデータ・グリッドに表示できます。また、プロジェクト、ユーザ、またはライセンスの種類でレコードをフィルタ処理し、データをファイルに保存することもできます。

注: また, ALM サーバに現在接続されているユーザを監視できます。詳細については、「ユーザ 接続とライセンスの管理」(165ページ)を参照してください。

サイトの使用状況を監視するには、次の手順を実行します。

1. 「サイト管理」の[サイト分析]タブをクリックします。



2. [種類]ボックスで,表示タイプを選択します。

- 線グラフ: データを折れ線グラフとして表示します。
- **データ・グリッド**:レポートをグリッドとして表示します。
- 3. 右の表示枠の[期間]で,線グラフまたはデータ・グリッドを表示する設定済み期間またはカスタ ム期間を選択します。
- 4. [詳細レベル]で, 各測定の間の期間を選択します。
- 5. [フィルタ]ボタンをクリックして[フィルタの設定]ダイアログ・ボックスを開き, グラフの内容をフィルタ 処理します。詳細については,「サイト使用状況のフィルタ処理」(231ページ)を参照してください。
- 6. 線 グラフの外 観をカスタマイズするには、「サイト分析の線 グラフのカスタマイズ」(233ページ)を参照してください。
- 7. [データグリッド]を選択した場合は、データ・グリッドの内容をテキスト・ファイル、Microsoft Excel スプレッドシート、Microsoft Wordドキュメント、またはHTMLドキュメントとして保存できます。保 存するには、[名前を付けて保存]ボタンをクリックします。詳細については、「ファイルへのサイト 分析データのエクスポート」(233ページ)を参照してください。
- 8. グラフのデータを更新するには、 [更新]ボタンをクリックします。

サイト使用状況のフィルタ処理

特定の時点でALM サイトに接続されていたユーザの数を, プロジェクト, ユーザ, またはライセンスの 種類でフィルタ処理して分析できます。

サイトの使用状況をフィルタ処理するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[サイト分析]タブをクリックします。
- 2. 右下隅にある[フィルタ]ボタンをクリックします。[フィルタの設定]ダイアログ・ボックスが開きます。

フィルタの設定	X
🙀 次でフィルタ: プロジェクト	•
■ DEFAULT ■ NEW_DOMAIN	

- 3. [次でフィルタ]で, フィルタ処理するカテゴリを選択します。
 - **プロジェクト**: ALM のすべてのドメインとプロジェクトを表示します。
 - **ユーザ**: ALM サイトのすべてのユーザを表示します。
 - **ライセンス・タイプ**:利用可能なすべてのライセンス・タイプを表示します。
- 4. フィルタ処理の対象とするアイテムをクリックします。
 - プロジェクトの場合は、ドメイン・フォルダをダブルクリックしてドメインのプロジェクトを表示し、対象とするプロジェクトを選択します。ドメイン内のすべてのプロジェクトをフィルタ処理するには、 ドメイン・フォルダを選択します。
 - **ユーザ**の場合は、対象とするユーザを選択します。
 - ライセンス・タイプの場合は、対象とするライセンスを選択します。
- 5. 選択したフィルタ条件をクリアするには、 [クリア]ボタン 2000 をクリックします。
- 6. [OK]をクリックしてフィルタを適用し, [フィルタの設定]ダイアログ・ボックスを閉じます。新しい線 グラフまたはデータ・グリッドが表示されます。

ファイルへのサイト分析データのエクスポート

[データ グリッド]のサイト分析データをテキスト・ファイル, Microsoft Excel スプレッドシート, Microsoft Word ドキュメント, または HTML ドキュメントとしてエクスポートできます。

サイト分析データをファイルにエクスポートするには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[サイト分析]タブをクリックします。
- 2. [種類]フィールドで, [データグリッド]表示タイプを選択します。
- 3. 分析期間を選択し、フィルタを定義します。
- 4. [名前を付けて保存]をクリックし、次のいずれかの形式を選択します。
 - **テキスト形式**: データをテキスト・ファイルとして保存します。
 - Excel シート: データを Excel シートとして保存します。
 - Wordドキュメント:データをWordドキュメントとして保存します。
 - HTMLドキュメント:データをHTMLドキュメントとして保存します。
- 5. [保存する場所]ボックスで,ファイルを保存する場所を選択します。
- 6. [ファイル名]ボックスに,ファイルの名前を入力します。

[ファイルの種類]ボックスは,選択した形式に基づいて自動的に設定されます。

7. [保存]をクリックします。

サイト分析の線グラフのカスタマイズ

情報を線グラフにどのように表示するかは、線グラフ・ツールバーを使用して指定できます。このツール バーには、次のボタンがあります。

ツール要素	説明
	合計値の表示:グラフ内での合計値の表示/非表示を切り替えます。
	左 ヘスクロール: グラフを左 にスクロールします。(このボタンは, [拡大表示]ボ タンまたは[縮小表示]ボタンを使用している場合に有効になります。)
	右 ヘスクロール: グラフを右 にスクロールします。(このボタンは、[拡大表示]ボ タンまたは[縮小表示]ボタンを使用している場合に有効になります。)

ツール要素	説明
	すべて表示 :グラフを標準のサイズに戻します。(このボタンは, [拡大表示]ボ タンまたは[縮小表示]ボタンを使用している場合に有効になります。)
	ズーム・イン : グラフの選択部分の表示倍率を上げます。
.	ズーム・アウト : グラフの選択部分の表示倍率を下げます。
¢;	X 軸のラベルを回転:X軸上のテキストの垂直表示と水平表示を切り替えます。
	2D/3D グラフの設定 :2次元グラフから3次元グラフに切り替えます。
	グラフをクリップボード にコピー : グラフをクリップボード ヘコピーします。
•	グラフの印 刷 : グラフを縦方向または横方向に印刷できます。

第10章: プロジェクトの計画と追跡(PPT)計算のス ケジュール設定

「サイト管理」では、HP Application Lifecycle Management(ALM) プロジェクトに対して、プロジェクトの計画と追跡(PPT)の計算をスケジュールできます。

ALM のエディション: PPT に関連する機能は, ALM Edition でのみ利用できます。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

PPT 計算のスケジュール設定について	236
サイトに対する計算のスケジュール設定	236
プロジェクトの自動計算の有効化と無効化	236
プロジェクトの計算の手動での開始	237
[プロジェクトの計 画 と追 跡] タブ	238

PPT 計算のスケジュール設定について

PPT は, アプリケーションの準備状態を追跡し, リリースのステータスをスコアカードの形式で表示します。 スコアカードは, 各マイルストーンの日々の達成状況を監視および追跡します。

スコアカードで進行状況を表示するには、プロジェクトのPPT計算を行う必要があります。ALM サイトで計算スケジュールを設定し、設定したスケジュールを特定のプロジェクトで有効にすることにより、毎日の進行状況計算に組み込むことができます。また、特定のプロジェクトについて、次回の計算まで待たずに計算結果を更新したい場合は、計算を手動で開始することも可能です。

PPT の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

注: PPT ログ・ファイルの設定の詳細については、「サーバ情報の設定」(178ページ)を参照して ください。

サイトに対する計算のスケジュール設定

本項では、ALM サイトに対する PPT 計算のスケジュールを設定する方法について説明します。

サイトの計算のスケジュールを設定するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[プロジェクトの計画と追跡]タブをクリックします。
- 2. [プロジェクトの計画と追跡]タブで,計算のスケジュールを設定します。ユーザ・インタフェースの 詳細については,「[プロジェクトの計画と追跡]タブ」(238ページ)を参照してください。
- 3. プロジェクトの自動計算を有効にします。詳細については、「プロジェクトの自動計算の有効化 と無効化」(236ページ)を参照してください。

プロジェクトの自動計算の有効化と無効化

本項では, プロジェクトの PPT 計算を有効にして, そのプロジェクトをサイトの毎日の計算に組み入れる方法を説明します。ビジネス・ニーズに変更があった場合は, プロジェクトの計算を無効にすることができます。

注: プロジェクトを新規作成すると、PPT は標準設定で有効になります。

プロジェクトの自動計算を有効化にするには、次の手順を実行します。

1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。

サイトのブロジェクト ラボ管理 サイトの.	ユーザ サイトの接続 ライセンス サーバ 00 サーバ サイト設定 サイト分析 ブロジェクトの計画と過数		
装われの作成 品われの削除 一分・	🍯 プロジェクトの作成 (1) テンプレートの作成 🗙 削除 🗈 名前の変更 🦯 編集 💷 Prixe コマンド 🖌 🖕 🕤 🗵 😂・ 🥥 🦉		
□ ♣ ALMTEST	TEST		
EST	プロジェクト 詳細 プロジェクト ユーザ プロジェクト 旅展機能		
B. P. DOMAIN	プロジェクト データベース		
	データベース の権頂: MS-SQL		
	データペース名: almtest_thet_db		
	データベース サーバ: 1270001		
	次の Project から作成: 空のデータベース		
	次のドメインから作成:テンブレート		
	シンテナンスの状態 : アイドル		
	Unicode サポート: N		
	播發文字列L jobc mercury aqlsever //1270DD11433		
	プロジェクト ディレクトリ: DVProgramDataVHPVALMWepositoryVqcVALMTEST_SVTEST		
	を 書語: Japanese ▼ テキスト検索の有効化/再構築		
	MM-72-1A2		
	リボジトリのクリーンアップ		
	▶ リボジトリのクリーンアップを実行		
	プロジェクトの計画と遮静		
	✓ 自動計算の状態 目 今すぐ実行		
	その他		
	□電子メールを自動送信 今すぐ電子メールを送信		
	次のテンプレートにリンク		
	<u>ユーザ制限:</u> 無利限		
	12991: Yrigt⊟: 2013-04-19 10:2706		
	()		

- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。
- 3. [プロジェクト詳細]タブの[プロジェクトの計画と追跡]で, [自動計算の状態]をクリックします。 [OK]をクリックして確定します。

プロジェクトの計算の手動での開始

本項では、プロジェクトの PPT 計算を手動で開始する方法を説明します。これは、スケジュールが設定された次回の計算まで待たずに、計算結果を更新するために実行します。

プロジェクトの計算を手動で開始するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[**サイトのプロジェクト**]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストからプロジェクトを選択します。
- 3. [プロジェクト詳細]タブの[プロジェクトの計画と追跡]で, [今すぐ実行]ボタンをクリックします。

[プロジェクトの計画と追跡]タブ

このタブでは、サイト全体を対象にした PPT 計算を管理します。

サイトの接続	ライセンス	サーバ	DB サーバ	サイト設定	サイト分析	プロジェクトの計画と追跡	
∽ 状態の更新 -							
計算を無効	加にする		現在の状態:	有劾化,非	アクティブ		
スケジュール	い作成						
☑ 自動実	行計算の対象:						
日次	計算の開始時刻	J:	00:00	AM	-		
計算	の繰り返し:		24 hou	rs	-		
	欠の時間以降に	計算を中止	8 hours	S	-		
削除							
X 日よりさ	「いデータを削り	徐:		120			
				·			
	上書き ――						
エンジ	シ数:			2	-		
エンジ	シスロットル	:					
	3						
1	· · · ?	1			1		
15次 (DB へは低	≝ 負荷)			(DB	_{向速} へ(調負荷)		
設定の	適用						

アクセス方法	「サイト管理」の[プロジェクトの計画と追跡]タブをクリックします。
重要な情報	• [プロジェクトの計画と追跡]タブの右下に表示されるデータベース・サーバ時間は,計算スケジュールを設定する際に使用されます。
	 標準設定では、過去7日間に使用されたプロジェクトを対象に計算が行われます。したがって、過去7日間に使用されなかったプロジェクトについては計算は行われません。日数を変更するには、「サイト管理」の[サイト設定]タブでPPT_RECENTLY_USED_PROJECTS_THRESHOLD_ MINUTESパラメータを編集します。詳細については、「PPT_ RECENTLY_USED_PROJECTS_THRESHOLD_MINUTES」(216ページ)を参照してください。
	 標準設定では、リリースで実行する KPI 計算の 10% 以上が失敗すると、ALM はそのリリースの PPT 計算を中断し、プロジェクト内にある次のリリースへと進みます。この割合(%)を変更するには、サイト管理の[サイト設定]タブで PPT_KPI_FAILURES_PERCENTAGE_ PER_RELEASE_FUSE パラメータを編集します。詳細については、「PPT_KPI_FAILURES_PERCENTAGE_PER_RELEASE_FUSE」(216ページ)を参照してください。

その他の要素

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI要素	説明
	このボタンには, 次のオプションがあります。
参 状態の更新 ▼	状態の更新 :最新情報が表示されるように, [プロジェクトの計画と追跡]タブを更新します。
	自動更新:[プロジェクトの計画と追跡]タブを自動的に更新します。標準設定では60秒ごとにタブが自動的に更新されます。
	更新間隔の設定:[更新間隔の設定]ダイアログ・ボックスが開き,新しい更新間隔を秒単位で指定できます。
計算を無効にする	PPT 計算処理をすべて終了します。
計算を有効にする	サイトに対して PPT を有効にします。
現在の状態	次のオプションがあります。
	有効化/無効:サイトに対して PPT が有効かどうかを示します。
	アクティブ/非アクティブ :スケジュールされた計算が現在実行中かどうかを示します。
設定の適用	スケジュールの変更内容を適用します。

[スケジュール作成]領域

この領域では、サイト全体を対象にした PPT 計算のスケジュールを設定します。

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI要素	説明
自動実行計算の対象	スケジュール設定した計算をサイトで実行するかどうかを示します。
日次計算の開始時刻	スケジュール設定した PPT 計算の開始時刻。
計算の繰り返し	指定時間で計算を定期的に実行します。
次の時間以降に計算を中 止	スケジュール設定された計算を指定時間で終了します。

[削除]領域

この領域では、指定した時間の経過後に計算結果を削除することができます。

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI要素	説明
X 日より古いデータを 削除	指定日数より古いデータを削除します。標準設定値は120日に設定さ れています。
	注: スコアカードの保存のため,過去5日分のマイルストーンの結果 は消去されません。

[詳細]領域

この領域では、サイト全体で同時実行する計算の数を増やすことができます。また、スケジュールが設定された計算の速度を変更することもできます。

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI要素	説明
設定のオーバライ ド	詳細設定を有効にします。
エンジン数	サイト全体で同時に実行する計算の数を設定します。
エンジン・スロット ル	ALM が KPI データを計算する速度を変更します。1 は処理速度が遅く、デー タベースへの負担は最小になります。10 は処理速度が速く、データベースへの 負担が最大になります。

第11章: ALM 評価

本章では、ALM 評価プロセスについて説明します。このプロセスでは、環境の詳細情報を収集および分析することにより、現在のALM デプロイメントを評価して、使用率を効率化する方法を提案します。

ALM 評価について	242
ALM データの収集と評価	247

ALM 評価について

ALM サイト管理者は、環境情報を収集し、これに基づいて現在のALM デプロイメントを評価し、 使用率を向上する方法を提案できます。また、このサービスで収集されるデータは、サポートへの問 い合わせでも役立ちます。

ALM 評価プロセスは環境情報を収集し,

C:\repository\productData\assessment\results\AssessmentInfo_<現在の日付>.zipに保存します。

詳細データの収集が完了すると、ALM評価 Web サイトでデプロイメントの評価結果と使用率を向上する方法を参照できます。

注: 一部の SQL Server プロパティについては、データベースの詳細オプションにアクセスする権限 を設定しておく必要があります。このアクセス許可の設定には、次のコマンドを実行します。

sp_configure 'show advanced options', 1

GO

RECONFIGURE

GO

次の表では、収集される詳細情報を示します。

注: EHCache の詳細については、HP ソフトウェアのセルフ・ソルブ技術情報の記事 KM00213910(http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/document/KM00213910)を参照してくだ さい。

プロパティ名	説明		
DB の一般的なデータ			
名前	DB サーバ名		
バージョン	DB サーバのバージョン		
SQL Server のデータ			
productLevel	SQL Server インスタンスのバージョン・レベル		
edition	SQL Server インスタンスのインストール済み製品の エディション		
engineEdition	サーバにインストールされている SQL Server インスタ ンスのデータベース・エンジンのエディション		
editionId	SQL Server インスタンスのエディション ID		

プロパティ名	説明	
isFullTextInstalled	現在の SQL Server インスタンスにフルテキスト・イン デックスとセマンティクス・インデックスのコンポーネント がインストールされているかどうかを示します	
collation	サーバで標準設定されている照合の名前	
osMachineName	サーバ・インスタンスが稼働する Windows コンピュー タ名	
Oracle DB <i>ග</i> ්	<i>т</i> —я	
sga_max_size	sga_target の動的調整を許可する上限となるハー ドリミット	
processes	Oracle に同時接続可能なオペレーティング・システ ムのユーザ・プロセスの最大数	
sessions	システム内で生成可能なセッションの最大数	
cpu_count	Oracle データベースで利用可能な CPU の数	
db_cache_size	プライマリ・ブロック・サイズを持 つバッファの DEFAULT バッファ・プールのサイズ	
log_buffer	REDO ログ・ファイルに REDO エントリをバッファリング する際に Oracle が使用するメモリ容量(バイト単 位)	
shared_pool_size	共有プールのサイズ	
large_pool_size	ラージ・プールの割り当てヒープ・サイズ	
java_pool_size	Java プールのサイズ。Java メモリ・マネージャは、ラン ライム実行時にほとんどの Java ステートをここから 割り当てます	
pga_aggregate_target	インスタンスに接続されているすべてのサーバ・プロセ スが利用可能なターゲット集計 PGA メモリ	
optimizer_mode	インスタンスの最適化方法を選択する際に標準設 定となる動作を指定します	
optimizer_features_enable	Oracle リリース番号に基づいてオプティマイザ機能 群を有効にするアンブレラ・パラメータとしての役割を 果たします	
compatible	Oracleの新しいリリースを使用可能にし、旧バー ジョンとの後方互換性を確保します	

プロパティ名	説明	
cursor_sharing	同じカーソルを共有できる SQL ステートメントの種 類を指定します	
open_cursors	1 つのセッションで開くことができるカーソル(プライベー ト SQL 領域 へのハンドル)の最大数を指定します	
session_cached_cursors	キャッシュするセッション・カーソルの数を指定します	
memory_max_target	DBA がMEMORY_TARGET 初期化パラメータを 設定できる最大値を指定します	
sga_target	すべての SGA コンポーネントの合計 サイズを指定し ます	
NLS パラメータ(NLS_ CHARACTERSET, NLS_ LANGUAGE, NLS_TERRITORY, NLS_ LENGTH_SEMANTICS)	文字セットの関連情報	
サイト使用率のデータ		
usersCount	サイト・ユーザの数	
activeUsersCount	アクティブなサイト・ユーザの数	
operativeUsersCount	過去 30日間にセッションを開いたアクティブなサイ ト・ユーザの数	
projectsCount	プロジェクトの数	
activeProjectsCount	アクティブなプロジェクトの数	
operativeProjectsCount	過去 30日間にセッションを取得したアクティブ・プロ ジェクトの数	
アプリケーション・サーバのデータ		
maxDbConnectionsAllowed	許可される DB 同時接続の最大数	
connectorName	Jetty コネクタ名	
maxConnectionsRequest	接続要求の最大数	
maxConnectionsOpen	開いている接続の最大数	
maxConnectionsDuration	接続の最大継続時間	
アーキテクチャのデータ		
activeNodes	アクティブ・ノードの数(アプリケーション・サーバ)	

プロパティ名	説明
totalNodes	ノード数の合計
serverName	アプリケーション・サーバ名
isActive	アプリケーション・サーバのステータス
サイトの一般的な	ェデ ー タ
almEdition	ALM エディション
almEditionDisplayName	ALM エディションの表示名
informationCollectionTime	情報収集時間(ミリ秒)
extensionName	拡張機能の名前
extensionDisplayName	拡張機能の表示名
version	拡張機能のバージョン
キャッシュのデータ	
cacheManagerName	EHCache マネージャの名 前
cacheName	キャッシュの名前
objectCount	キャッシュ内にある項目数
maxElementsInMemory	メモリ内で生成するオブジェクトの最大数を設定し ます
maxElementsOnDisk	DiskStore に保持するオブジェクトの最大数を設定 します
memoryStoreEvictionPolicy	maxElementsInMemory の値に達した時点で適用 するポリシー
eternal	要素が永続的(タイムアウトを無視し、期限切れに ならない)かどうかを指定します
timeToldleSeconds	要素をアイドル状態にする時間を設定します。この 時間が経過すると、要素は期限切れになります
timeToLiveSeconds	要素をライブ状態にする時間を設定します。この時 間が経過すると、要素は期限切れになります
overflowToDisk	メモリ・ストアが maxElementsInMemory の値に達し た時点で,ディスクのオーバーフローを許可するかど うかを指定します
diskPersistent	仮想マシンの再起動後にディスク・ストアを保持する かどうかを指定します

プロパティ名	説明
diskSpoolBufferSizeMB	スプール・バッファ用 に DiskStore を割り当 てるサイズ
diskExpiryThreadIntervalSeconds	ディスク expiry スレッドの実行間隔(秒)
statisticsAccuracy	統計を計算する際のキャッシュ統計の精度
cacheHits	要求された項目がキャッシュ内で検出された回数
onDiskHits	要求された項目がディスク・ストア内で検出された 回数
inMemoryHits	要求された項目がメモリ・ストア内で検出された回 数
misses	要求された項目がキャッシュ内で検出されなかった 回数
averageGetTime	取得にかかった平均時間
evictionCount	キャッシュを生成または統計を消去した後, キャッシュを消去した回数
Jvm のデータ	
jvmVersion	使用中のJVMバージョン
usedHeapSize	Java 仮想マシンのメモリ容量の合計
maxHeapSize	Java 仮想マシンが使用できる最大メモリ容量
freeHeapSize	Java 仮想マシンの空きメモリ容量
nonHeapUsedSize	使用済みメモリ容量(バイト単位)
nonHeapInitSize	Java 仮想 マシンがメモリ管 理用にオペレーティング・ システムに要求する初期メモリ容量(バイト単位)
nonHeapCommittedSize	Java 仮想マシン用に確保されているメモリ容量(バ イト単位)
nonHeapMaxSize	メモリ管理に使用できるメモリの最大容量(バイト 単位)
name	このメモリ・マネージャを示す名前
collectionElapseTime	収集を開始してからのおよその経過時間(ミリ秒)
innerCollectionCount	収集の実行回数の合計
memoryPoolNames	このメモリ・マネージャが管 理 するメモリ・プールの名 前

プロパティ名	説明	
architecture	使用中の JVM のアーキテクチャ	
is64Bit	使用中のJVMが64ビット・アーキテクチャかどうか	
numberOfProcessorsAvailable	この JVM が使用できるプロセッサの数	
マシン固有のデータ		
totalMemoryMB	マシンにインストールされているメモリ容量の合計	
QCSense のデータ		
startGroupingTime	セグメント開始時間	
endGroupingTime	セグメント終了時間	
nodeName	データ収集を行ったノードの名前	
measurementName	セグメントで収集した測定の名前	
weightedMeanAverageValue	セグメントで記録した平均値の加重平均	
minimumValue	セグメントで記録した最小値	
weightedMeanMinimumValue	セグメントで記録した最小値の加重平均	
maximumValue	セグメントで記録した最大値	
weightedMeanMaximumValue	セグメントで記録した最大値の加重平均	
measurementsInspectedNumber	セグメントで記録したレコード(測定値)の数	

ALM データの収集と評価

収集した環境データに基づいて,現在のALMデプロイメントを評価し,使用率を向上する方法を 提案できます。

環境の詳細情報を収集するには、次の手順を実行します。

サイト管理で、 [ツール]> [ALM 評価]を選択します。 [ALM 評価]ダイアログ・ボックスが開きます。

ALM 評価	×
このツールは現在の ALM デブロイメントを評価し、 使用状況を改善するための推奨項目を提供します。	
プロセスを開始するには	
 現在の環境の詳細を収集するには、「収集」ボタンをクリックします。 	収集
☞ データ保護	
[データ保護] を選択すると、情報のセキュリティが保護されます。 🔢	
2 ファイルの保存先: C:¥ProgramData¥HP¥ALM¥repository¥productData¥assessment¥results¥A	
3 ブロセスが終了すると、電子メールによる通知が送信されます。 このブロセスには銀分かかる場合があります。	
④ [サイトに移動] ボタンをクリックします。評価 Web サイト機能を選択して Web サイトの URL を取得します。	サイトに移動
	閉じる

- 2. 機密性の高いデータを保護するには、 [データ保護]を選択します。 データ保護プロセスの詳細 については、 []をクリックしてください。
- 3. [**収集**]をクリックすると、データ収集プロセスが開始します。プロセスが完了すると、電子メールが送信されます。

注: データ収集プロセスが成功しなかった場合にも,電子メールが送信されます。この場合,すべてのノードがアクティブであることを確認してから,データ収集プロセスを再実行してください。

- 4. データ収集 プロセスが完了 したら, ALM 評価 Web サイトにログインします。Web サイトへのリンク は、電子メールに記載されています。または、[ALM 評価]ダイアログ・ボックスの[サイトに移動] をクリックしてもアクセスできます。
- 5. Web サイトの指示に従って収集データをアップロードし,評価プロセスを完了します。

第12章: QC Sense

本章では、HP Application Lifecycle Management(ALM)の使用状況とパフォーマンスのデータを収集し、分析する内部監視ツールのQC Sense について説明します。

QC Sense について	250
QC Sense の設 定	250
QC Sense レポートの生成と表示	258
QC Sense スキーマ	259

QC Sense について

ALM のサイト管理者は、QC Sense が収集した使用状況とパフォーマンスのデータを利用して、ユー ザの観点から ALM のパフォーマンスを分析できます。たとえば、ユーザがボタンをクリックしてから期待 する応答が得られるまでの時間を調べることができます。

QC Sense は、ALM のユーザ・インタフェースで実行されるユーザ操作のデータを収集し、その操作に よって発生するクライアントとサーバのすべてのアクティビティを監視します。ユーザは、1 つのユーザ・アク ティビティとそれに起因するサーバとデータベースのアクティビティを調査できる他に、ユーザのアクション、 サーバのトランザクションなど、多くのパラメータ別にシステムの平均レスポンスを分析し、比較すること もできます。

QC Sense は、さまざまなアクションと測定項目に基づいたデータを収集するように設定できます。これ により、プロジェクト、ユーザ、アクションのタイプ、ワークフローの影響など、ALM のさまざまな面に関係 するパフォーマンスを調査できます。システムの各コンポーネント(アプリケーション・サーバ、データベー ス・サーバ、ネットワーク、ファイル・システムなど)のパフォーマンスを調査し比較できます。

QC Sense は、1 人のユーザのアクティビティに関するデータに加えて、サイト内の ALM サーバに関する 情報も収集するように設定できます。QC Sense では、サーバとネットワークのアクティビティに関する データ(サーバ・スレッド数、メモリ使用量、アクティブなセッション数、データベースのアクセス時間、ファ イル・システムのアクセス時間など)を収集できます。

QC Sense には、クライアント・モニタとサーバ・モニタが含まれています。各モニタは、ALM の特定の領域について使用状況とパフォーマンスのデータを収集します。ALM サイト管理者は、それぞれのモニタを設定して、収集データの範囲をカスタマイズします。QC Sense によって収集されたすべてのデータは、サイト・データベースに一元化して保存されるため、クライアントのアクティビティとそれに起因するサーバのアクティビティを簡単に結び付けることができます。詳細については、「QC Sense の設定」(250ページ)を参照してください。

QC Sense レポートを使用すると、パフォーマンスの調査と比較を実行して、問題の源を特定できます。管理者は、さまざまなレベルのパフォーマンスを経験している複数のユーザのデータを比較したり、 ときとして、システム応答を突然遅らせる原因となるアクションや挙動を明確にすることができます。た とえば、特に時間がかかる操作を特定したり、サイトの動作が全般的に遅くなる直前に行われた長時間の操作を調査できます。詳細については、「QC Sense レポートの生成と表示」(258ページ)を 参照してください。

QC Sense モニタが収集したデータは、QC Sense スキーマに格納されます。詳細については、「QC Sense スキーマ」(259ページ)を参照してください。

注: ALM が外部認証を使用するように設定されている場合は, QC Sense にはアクセスできません。

QC Sense の設定

QC Sense を設定するには、「サイト管理」から[QC センスサーバ設定]ウィンドウへアクセスします。 この設定オプションを使用して、次の処理を実行できます。

- クライアント・モニタおよびサーバ・モニタごとにフィルタを設定し、QC Sense で収集するデータ範囲 を定義
- QC Sense モニタの有効化または無効化
- QC Sense データの格納場所の定義
- 格納する最大レコード数をモニタごとに定義
- 更新データをデータベースに転送する頻度の設定
- QC Sense のテーブルを消去する頻度の定義

本項の内容

QC Sense のモニタ	251
QC Sense の設 定	.253
[QC Sense Server Configuration] ウィンドウ	253
[Connection String Builder]ダイアログ・ボックス	257

QC Sense のモニタ

次の表に QC Sense のモニタをリストし, それぞれのモニタが標準設定で収集するデータを示します。 収集したデータを格納する QC Sense データベースの詳細については,「QC Sense スキーマ」(259 ページ)を参照してください。

モニタ名	データベース・テーブルの説明	標準設定の設定
Client Operation ユーザ操作(不具合の送 信,要件の更新,[ログイン] ボタンのクリックなど)の未処 理データが含まれます。 詳細については,「PERF_ CLIENT_OPERATIONS」 (260ページ)を参照してください。	部分的:次に関するデータを収集します。	
	 2分を超過したログイン操作 	
	• 2分を超過したエンティティの作成操作	
	 2分を超過した貼り付け操作 	
		• 5分を超過したすべての操作

モニタ名	データベース・テーブルの説明	標準設定の設定
Client Method Call	QC Sense が監視した ALM クライアント・メソッドの未処理 データが含まれます。 詳細については、「PERF_ CLIENT_METHODS_ CALLSJ(262ページ)を参照 してください。	 部分的:次に関するデータを収集します。 アナリシス項目を生成する呼び出しで、2 分を超過したもの。 ワークフロー・イベントの呼び出しで、2分を超過したもの。
Client Request	クライアント操作によって ALM サーバに送信された要求の 未処理データ。 詳細については、「PERF_ CLIENT_REQUESTS」(263 ページ)を参照してください。	部分的:フィルタされたクライアント操作または フィルタされたクライアント・メソッドのコンテキス トでサーバに送信されたすべての要求に関す るデータを収集します。
Server General	いくつかのサーバ測定項目に 基づいた集計データ。 詳細については、「PERF_ SERVER_GENERAL_ MEASURES」(267ページ)を 参照してください。	オン。
Server Thread Type	サーバ上で実行されているス レッドに関する集計データ。 詳細については、「PERF_ SERVER_THREAD_ TYPESJ(268ページ)を参照 してください。	オン。
Server Thread	 サーバ上で実行された各スレッドの未処理データ。 詳細については、「PERF_SERVER_THREADS」(265ページ)を参照してください。 	オフ。
Server Sql	ALM サーバによって実行され た SQL ステートメントの未処 理データ。 詳細については、「PERF_ SERVER_SQLS」(266ペー ジ)を参照してください。	オフ。
QC Sense の設定

QC Sense の全般的な設定(QC Sense スキーマの代替場所の指定など)をセットできます。また、モニタごとに設定を行って、収集するデータの範囲と、モニタに対して保存する最大レコード数を定義することもできます。

QC Senseを設定するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」で、 [**ツール**] > [**QC センス**] > [**設定**]を選択します。 [Login to < サーバ>]ダイ アログ・ボックスが開きます。
- サイト管理者ユーザのログイン資格情報を入力し、[OK]をクリックします。[QC Sense Server Configuration]ウィンドウが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[QC Sense Server Configuration]ウィンドウ」(253ページ)を参照してください。

[QC Sense Server Configuration] ウィンドウ

このウィンドウでは、ALM サーバ用にQC Sense を設定できます。

QC Sense Server Configuration: http://16.55.247.36:8080/qcbin/* _ 🗆 × obal Setting **Client Operation Data Filters** + M 🕴 🍸 Add Data Filter 🕶 Client Operation Filter Description Filter Type Login' Operations W... Custom Fiter Type Remarks A custom fitter can define any logic based on the data fields A custom fitter can define any logic based on the data fields A custom fitter can define any logic based on the data fields A custom fitter can define any logic based on the data fields ♀ Client Method Ca
♀ Client Request Create Entity' Opera... Custom 'Paste' Operations ... Custom All Operations Whic... Custom Server Monitors Server General Server Thread Type Server Thread Server Sql 4 * New Field Condition 🗙 Operator Matches (u Field Name Field Value Type Total Time Matches (u... Button Clicked GreaterOrE... 120000 ors users operations in the application UI. nonitor records user operations such as but , tab selections and so on. he data is persisted in the ERF_CLIENT_OPERATIONS table 2 Load Default Configuration Save Close

アクセス方法	「サイト管理」で, [ツール]>[QC センス]>[設定]を選択します。 [Login to <サーバ>]ボックスにサイト管理者のパスワードを入力します。
重要な情報	標準設定値の詳細については、「QC Sense のモニタ」(251ページ)を参照し てください。
参照情報	 「QC Sense について」(250ページ) 「QC Sense レポートの生成と表示」(258ページ)

Global Settings

QC Sense の 全般的な設定を定義できます。

QC Sense Server Configuration: 'h File	tp://vmdoc05.devlab.ad:8080/qebin'
Giobal Settings Giobal Settings Ginert Monitors Client Menhod Call Client Mechod Call Client Mechod Call Server Morella Statistics Server Morela Statistics Server Thread Types Statistics Server Thread Server Sql	Specify a storage location for QC Sense data Store data in Site Administration schema Database Type: MS SQL Oracle Connection String: DB Admin User: Password Database Name: User Name : Password Native authentication Validate Configuration Create New Database
2 Load Default Configuration	Server Persist Job QC Sense Server Module will persist updated information to the database every 3 minutes. Server Purge Job QC Sense purge job runs every 12 hours. Client Persist Job QC Sense Client Module will send information to the server every 3 minutes. Serve Client Module will send information to the server every 3 minutes.

アクセス方法

ウィンドウの左側のモニタ・リストで, [Global Settings]を選択します。

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI要素	説明	
Specify a storage location for QC Sense	次のオプションがあります。	
data	Store data in Site Administration schema:	
	 Store data in another schema(推奨): QC Sense スキーマ・テーブルを格納するための代替場所と接続情報を指定します。 	
	接続文字列を定義するには、 [参照] ボタン()をクリックしま す。詳細については、「[Connection String Builder]ダイアログ・ ボックス」(257ページ)を参照してください。 データは手動で入力す	
	 Native authentication: SQL サーバの場合に, SQL サーバ認証ではなく, Windows 認証を使用します。 	
	QC Sense スキーマの詳細については、「QC Sense スキーマ」(259 ページ)を参照してください。	
Server Persist Job	QC Sense サーバのモニタの更新情報をデータベースに書き込む時間 間隔を分単位で定義します。	
Server Purge Job	QC Sense テーブルをクリアする時間間隔を時間単位で定義します。	
Client Persist Job	QC Sense クライアントのモニタの更新情報をサーバに送信する時間 間隔を分単位で定義します。	

UI要素	説明
Load Default Configuration	標準設定のQC Sense設定に戻します。設定ウィンドウの左下にあります。

監視設定

QC Sense のモニタの設定を定義できます。モニタの詳細については、「QC Sense のモニタ」(251ページ)を参照してください。

アクセス方法	ウィンドウの左側のモニタ・リストで,設定するモニタを選択します。
アクセス方法	ウィンドウの左側のモニタ・リストで,設定するモニタを選択します。

次にユーザ・インタフェースの要素について説明します(ラベルのない要素は、山括弧で囲んで表記してあります)。

UI要素	説明
<モニタ・リスト>	ウィンドウの左側にあり、 QC Sense クライアントとサーバのモニタを表示します。 オプションとフィルタを設定するモニタを選択してください。
	♀は、アクティブなモニタを示します。
	♥は、非アクティブなモニタを示します。このモニタでは、データが収集されません。
	モニタをアクティブまたは非アクティブにするには,モニタを右クリックし, [Turn Monitor OFF]または [Turn Monitor ON]を選択します。
	フィルタ条件を設定して、収集データの範囲をフィルタで定義できます。
	追加し設定するフィルタをメニューから選択します。 QC Sense モニタごとに, さ まざまなフィルタを利用できます。
N	Delete Data Filter:選択したデータ・フィルタを削除します。フィルタが定義されていない場合は,選択されているモニタに対してすべてのデータが収集されます。
	注: SQL サーバには少なくとも1つのフィルタが必要です。

UI要素	説明
<i>A</i>	Monitor Settings:選択したモニタの設定を定義できます。次の設定があります。
	 Maximum number of records in monitor database table: サーバ削除ジョブによってデータベースのクリーニングが行われた後に、データベース内に保持することが可能なモニタ・レコードの最大数を定義します。
	 Time frame length:何かの測定項目が計算される時間枠を定義します。たとえば、スレッドの処理に使用される平均サーバCPU時間が15分間にわたって測定される場合などです。
	利用可能なモニタ: Server General, Server Thread Type
	 Excluded Fields:選択したフィールドについては、モニタ・データが保存されません。
	利用可能なモニタ: Server SQL, Server Thread
[Data Filters]表 示枠	選択したモニタのフィルタがリストされます。
Data Filter	選択したデータ・フィルタの詳細が表示され、その条件を設定できます。
Details:	各モニタで利用可能なフィールドの詳細については、「QC Sense スキーマ」 (259ページ)を参照してください。
Monitor Description	選択したモニタの説明です。 モニタのデータを格納する QC Sense スキーマ・ テーブルを示します。

[Connection String Builder]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、カスタム接続文字列を作成できます。また、サイト管理で定義済みの 接続文字列を使用することも可能です。

Conn	ection String Bui	lder >	<
۲	Connection string pa	arameters	
	Database Type :	MS SQL O Dracle	
	Server Host :		
	Port :	1433	
	SID :		
•	Connection string fro	m registered database server in Site Administration (mssql) vmdoc05.devlab.ad Use DB Admin credentials	
O Custom connection string			
jdbc:mercury:sqlserver://:1433			
		OK Cancel	

アクセス方法	[Global Settings]ウィンドウで, [Specify a storage location for QC		
	Sense data]の[Store data in another schema]をクリックしてからをクリックします。		
参照情報	「[QC Sense Server Configuration] ウィンドウ」(253ページ)		

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI要素	説明
Connection string parameters	データベースのタイプを選択し、パラメータを定義することによって、接続文字列を作成します。
	 Database Type: データベースの種類は MS SQLま たは Oracle です。
	• Server Host: サーバ名 。
	 Port:データベース・サーバのポート。標準設定の ポートは次のとおりです。 Oracle: 1521
	 MS SQL: 1433
	• SID: Oracle データベース・サーバのサービス ID。 [SID]フィールドを編集 できるのは、データベースのタ イプが Oracle の場合のみです。
Connection string from registered database server in Site	サイト管理で登録したデータベース・サーバから接続文 字列を選択します。
Aummisuauon	• DB Server Name:データベース・サーバ名。
	 Use DB Admin credentials: 選択したデータベース・サーバのデータベース管理者資格情報を使用します。
Custom connection string	複雑な接続文字列や標準以外の接続文字列を直 接入力できます。

QC Sense レポートの生成と表示

注: QC Sense レポートは、デバッグ専用のレポートであり、標準設定では無効になっていま す。QC Sense レポートを生成するには、サイト管理の[サイト設定]タブで ENABLE_ PERFORMANCE_MONITOR_BIRT_REPORTS パラメータを設定します。詳細については、 「ENABLE_PERFORMANCE_MONITOR_BIRT_REPORTS」(205ページ)を参照してくださ い。QC Sense レポートを作成する場合は、使用後すぐにレポートを無効に戻すことをお勧めし ます。 QC Sense で収集したデータに基づいてレポートを生成できます。たとえば、ユーザの操作状況を調査する場合は、次の項目に関するレポートを生成できます。

- 特定のユーザによって実行されたすべての操作
- すべてのユーザに対する特定の種類のトランザクション(要件の作成, [ログイン]ボタンのクリックなど)
- 設定時間より長いトランザクション
- 異なるパフォーマンス・レベルを経験しているユーザの比較

生成したレポートは、印刷できます。

次の種類のレポートを利用できます。

- Client reports: QC Sense クライアントのモニタによって収集されたデータに基づいています。このレポートは、ユーザ・エクスペリエンスの視点から見た情報を提示し、ALMユーザ・インタフェースでのユーザ操作を表します。
- Server reports: QC Sense サーバのモニタによって収集されたデータに基づいています。
 - ユーザ操作によって開始されたサーバ・アクティビティを表します。
 - 一般的なサーバ・アクティビティに関するサーバ・レポートです。
- Database table reports:標準のSQL構文を使用して,QC Sense スキーマ・テーブルの情報に アクセスできます。

レポートを作成し表示するには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」で、 [**ツール**] > [**QC センス**] > [**レポート**]を選択します。 [< サーバ> にログイン] ダイアログ・ボックスが開きます。
- 2. サイト管理者ユーザのログイン資格情報を入力し, [**OK**]をクリックします。 [QC Sense Report] ページが表示されます。
- 3. レポートのリンクをクリックします。開いたログイン・ウィンドウに, サイト管理者ユーザのログイン資格情報を入力します。

注: サイト管理者以外のユーザにアクセス許可を割り当てるには、「サイト管理」の[サイト 設定]タブでQC_SENSE_REPORTS_USERS パラメータを設定します。詳細について は、「QC_SENSE_REPORTS_USERS」(217ページ)を参照してください。

4. レポート・ビューアにパラメータを入力して, 生成するレポートの範囲を定義します。

QC Sense スキーマ

QC Sense には、ALM サイトごとに1つのデータベース・スキーマがあります。このスキーマは、ALM のインストール時に作成され、標準設定では、サイト管理スキーマ内に格納されます。ただし、QC

Sense スキーマは ALM サイト管理スキーマから独立しており,任意のデータベース・スキーマにテーブ ルを格納できます。エンタープライズ・サイトの場合は,スキーマを別のデータベース・サーバ上に格納 することをお勧めします。QC Sense スキーマの代替場所の定義の詳細については,「QC Sense の 設定」(250ページ)を参照してください。

QC Sense スキーマは、	次のテーブルで構成されます。
-----------------	----------------

テーブル名	データ・ソース	データ・タイプ
「PERF_CLIENT_OPERATIONS」(260ページ)	クライアント	未処理
「PERF_CLIENT_METHODS_CALLS」(262ページ)	クライアント	未処理
「PERF_CLIENT_REQUESTS」(263ページ)	クライアント	未処理
「PERF_SERVER_THREADS」(265ページ)	サーバ	未処理
「PERF_SERVER_SQLS」(266ページ)	サーバ	未処理
「PERF_SERVER_GENERAL_MEASURES」(267ペー ジ)	サーバ	集計済み
「PERF_SERVER_THREAD_TYPES」(268ページ)	サーバ	集計済み

PERF_CLIENT_OPERATIONS

このテーブルには、 Client Operation モニタによって収集されたデータが格納されます。

このテーブルには、クライアント操作ごとに1つのレコードが含まれます。クライアント操作とは、ALM ユーザがユーザ・インタフェースで実行するアクションのことです。次に例を示します。

- [ログイン]ウィンドウでの[認証]ボタンのクリック
- 不具合モジュールでの[添付]タブの選択
- テスト計画ツリーでのフォルダの展開

クライアント操作の種類は、タイプ、データ、コンテキストによって記述されます。このテーブルのカラムの プレフィックスは PCO です。たとえば、 PCO_OPERATION_ID のようになります。

カラム名	説明
OPERATION_ ID	操作に割り当てられた一意のGUID。
CLIENT_ MACHINE_ NAME	操作が実行されたクライアント・ホストの名前。

カラム名	説明
LOGIN_ SESSION_ID	ログイン・セッション ID。
PROJECT_ SESSION_ID	プロジェクト・セッション ID。
PROJECT	ドメインとプロジェクトの名前。フォーマットは<ドメイン名> / <プロジェクト 名>です。
USER_NAME	ユーザ名。
OPERATION_ TYPE	操作のタイプ。次に例を示します。 • Button Clicked • Tab Selected • Tree Node Expanded
OPERATION_ DATA	操作のデータ。次に例を示します。 クリックされたボタンのラベル(Loginなど) 選択されたタブのラベル(Attachmentsなど)
OPERATION_ CONTEXT	操作が実行されたウィンドウへのパス。次に例を示します。 • Module:Business Components .Net; View:EntityTypeViewControl; View:ComponentStepsViewControl; View:DesignStepsViewControl • Form : Component Step Details
CLIENT_ START_TIME	操作の開始時刻(日時データ型で表現)。
CLIENT_END_ TIME	操作の終了時刻(日時データ型で表現)。
CLIENT_ START_TIME_ MS	操作の開始時刻(1970/01/01 からのミリ秒数で表現)。
CLIENT_ TOTAL_TIME	操作の開始時から終了時までの合計ミリ秒数。

PERF_CLIENT_METHODS_CALLS

このテーブルには、 Client Method Call モニタによって収集されたデータが格納されます。

このテーブルには, QC Sense によって監視されるメソッド呼び出しごとに1つのレコードが含まれます。 監視されるメソッドは, QC Sense によってあらかじめ定義されています。メソッド呼び出しは, それぞ れ次の関連レコードにリンクされています。

- 所有者操作:このメソッド呼び出しが実行されたときにアクティブだった操作。
- 所有者メソッド呼び出し:このメソッド呼び出しの実行時にアクティブだった監視対象メソッド。NULLの場合もあります。
- **呼び出されたメソッド**:このメソッド呼び出しから,直接的または間接的に呼び出された別の監視 対象メソッド。
- 要求:このメソッド呼び出しから,直接的または間接的にサーバに送信された要求。

このテーブルのカラムのプレフィックスは PCMC です。たとえば、 PCMC_METHOD_CALL_ID のようになります。

カラム名	説明
METHOD_CALL_ID	メソッド呼び出しに割り当てられた一意のGUID。
LOGIN_SESSION_ID	ログイン・セッション ID。
PROJECT_SESSION_ID	プロジェクト・セッション ID。
PROJECT	ドメインとプロジェクトの名前。フォーマットは<ドメイン名> / <プ ロジェクト名>です。
USER_NAME	ユーザ名。
SEQUENCE	所有者操作のコンテキストでのメソッド呼び出しのシーケンス。
OWNER_OPERATION_ID	メソッド呼び出しの開始時にアクティブだったクライアント操作 ID。
OWNER_OPERATION_ TYPE	所有者操作のタイプ。
OWNER_OPERATION_ DATA	所有者操作のデータ。
OWNER_OPERATION_ CONTEXT	所有者操作のコンテキスト。
OWNER_METHOD_ CALL_ID	メソッドの開始時にアクティブだったメソッド呼び出し ID(NULLの場合もあります)。

カラム名	説明
METHOD_NAME	メソッド名 (例 : Login)。
CLASS_NAME	クラス名 (例: ConnectionManagementService)。
MODULE_NAME	モジュール/アセンブリ名 (例:QCClient.Library.dll)。
ADDITIONAL_DATA	メソッド呼び出しによって追加されたデータ。
CLIENT_START_TIME	メソッド呼び出しの開始時刻(日時データ型で表現)。
CLIENT_END_TIME	メソッド呼び出しの終了時刻(日時データ型で表現)。
CLIENT_START_TIME_ MS	操作の開始時刻(1970/01/01からのミリ秒数で表現)。
CLIENT_TOTAL_TIME	操作の開始時から終了時までの合計ミリ秒数。

PERF_CLIENT_REQUESTS

このテーブルには、 Client Request モニタによって収集されたデータが格納されます。

このテーブルには、クライアントからサーバに送信された要求ごとに1つのレコードが含まれます。要求は、それぞれ次の関連レコードにリンクされています。

- 所有者操作:要求がサーバに送信されたときにアクティブだった操作。
- 所有者メソッド呼び出し:要求がサーバに送信されたときにアクティブだった監視対象メソッド。NULLの場合もあります。

要求レコードには、次のデータが含まれます。

- クライアント・パフォーマンス・データ(クライアントが要求をサーバに送信した日時など)。
- サーバ・パフォーマンス・データ(要求がサーバに届いた日時など)。

このテーブルのカラムのプレフィックスは PCR です。たとえば、 PCR_REQUEST_ID のようになります。

カラム名	説明
REQUEST_ID	要求の一意のGUID。 注:これは,要求をサーバ内で処理したスレッドのGUIDでもあります。
SEQUENCE	所有者操作のコンテキストでの要求のシーケンス。
OWNER_ OPERATION_ID	要求がサーバに送信されたときにアクティブだったクライアント操作 ID。

カラム名	説明
OWNER_METHOD_ CALL_ID	要求がサーバに送信されたときにアクティブだった監視対象メソッド。
LOGIN_SESSION_ID	ログイン・セッション ID。
PROJECT_SESSION_ ID	プロジェクト・セッション ID。
PROJECT	ドメインとプロジェクトの名前。フォーマットは<ドメイン名> / <プロ ジェクト名>です。
USER_NAME	ユーザ名。
REQUEST_TYPE	要求のタイプ(例:PostBug)。
CLIENT_START_TIME	要求がサーバに送信された時刻(日時データ型で表現)。
CLIENT_END_TIME	サーバから応答が返された時刻(日時データ型で表現)。
CLIENT_START_ TIME_MS	要求がサーバに送信された時刻(1970/01/01 からのミリ秒数で表現)。
CLIENT_TOTAL_TIME	要求をサーバに送信してから応答を受信したときまでの合計ミリ秒 数。
SERVER_MACHINE_ NAME	要求が処理された ALM サーバ。
SERVER_START_ TIME	要求の処理をサーバが開始した時刻(日時データ型で表現)。
SERVER_START_ TIME_MS	要求の処理をサーバが開始した時刻(1970/01/01 からのミリ秒数で 表現)。
SERVER_TOTAL_ TIME	サーバが要求の処理にかかった合計時間(ミリ秒)。
SERVER_CPU_TIME	要求の処理に割り当てられた合計 CPU 時間(ミリ秒)。
DB_TIME_AVG	データベースで, このスレッドの1つのSQLステートメントの処理にか かった平均時間。
DB_TIME_MAX	データベースで, このスレッドの1つのSQLステートメントの処理にか かった最長時間。
DB_TIME_MIN	データベースで, このスレッドの1つのSQLステートメントの処理にか かった最短時間。

カラム名	説明
DB_TIME_COUNT	データベースがこのスレッドに対して処理した SQL ステートメントの数。
FS_TIME_AVG	この要求での、ファイル・システムへの平均アクセス時間。
FS_TIME_MIN	この要求での、ファイル・システムへの最小アクセス時間。
FS_TIME_MAX	この要求での、ファイル・システムへの最大アクセス時間。
FS_TIME_COUNT	この要求 でのファイル・システム・アクセス(ファイルの読み書きまたは削除)の回数。

PERF_SERVER_THREADS

このテーブルには、Server Thread モニタによって収集されたデータが格納されます。

このテーブルには、サーバ上で実行されるスレッドごとに1つのレコードが含まれます。スレッドの種類は、次の4種類です。

- REQUEST: Webgate 要求を処理するスレッド。
- JOB: ALM ジョブを実行するスレッド。
- ASYNC_TASK: ALM の非同期タスクを実行するスレッド。
- NONE:他のすべてのスレッド(リポジトリの移行プロセスを実行するスレッドなど)。

このテーブルのカラムのプレフィックスは PCT です。たとえば、PCT_THREAD_ID のようになります。

カラム名	説明
THREAD_ID	スレッドの一意のGUID。
SERVER_MACHINE_ NAME	スレッドが処理された ALM サーバ。
THREADY_ CATEGORY	スレッドのカテゴリ。有効なカテゴリ。REQUEST, JOB, ASYNC_ TASK, NONE。
THREAD_TYPE	スレッドのタイプ。たとえば、要求タイプ: PostBug, ジョブ 名 : CKeepAliveJob, など。
SERVER_START_ TIME	スレッドの実行開始時刻(日時データ型で表現)。
SERVER_START_ TIME_MS	スレッドの実行開始時刻(1970/01/01からのミリ秒数で表現)。

カラム名	説明
LOGIN_SESSION_ID	ログイン・セッション ID。
PROJECT_SESSION_ ID	プロジェクト・セッション ID。
PROJECT	ドメインとプロジェクトの名前。フォーマットは<ドメイン名> / <プロ ジェクト名>です。
USER_NAME	ユーザ名。
SERVER_TOTAL_ TIME	サーバがスレッドの処理にかかった合計時間(ミリ秒)。
SERVER_CPU_TIME	スレッドの処理に割り当てられた合計 CPU 時間(ミリ秒)。
DB_TIME_AVG	データベースで, このスレッドの1つの SQL ステートメントの処理にかかった平均時間。
DB_TIME_MAX	データベースで, このスレッドの1つの SQL ステートメントの処理にかかった最長時間。
DB_TIME_MIN	データベースで, このスレッドの1つの SQL ステートメントの処理にかかった最短時間。
DB_TIME_COUNT	データベースがこのスレッドに対して処理した SQL ステートメントの数。
FS_TIME_AVG	このスレッドでの、ファイル・システムへの平均アクセス時間。
FS_TIME_MIN	このスレッドでの、ファイル・システムへの最小アクセス時間。
FS_TIME_MAX	このスレッドでの、ファイル・システムへの最大アクセス時間。
FS_TIME_COUNT	このスレッド でのファイル・システム・アクセス(ファイルの読み書きまたは削除)の回数。

PERF_SERVER_SQLS

このテーブルには、Server SQL モニタによって収集されたデータが格納されます。

このテーブルのデータは、実行されるユーザ操作(PERF_CLIENT_OPERATIONS テーブルに格納) およびそのアクションによって生成される要求(PERF_CLIENT_REQUESTS テーブルに格納)に関 連付けて調査できます。

このテーブルには、サーバ上で実行される SQL ステートメントごとに 1 つのレコード が含まれます。この テーブルのカラムのプレフィックスは PSS です。たとえば、PSS_SQL_ID のようになります。

カラム名	説明
SQL_ID	SQLの一意のGUID。
SERVER_MACHINE_ NAME	この SQL ステートを実行した ALM サーバ。
THREAD_ID	実行された SQL ステートメントのコンテキストでのスレッドの ID。
THREAD_ CATEGORY	スレッドのカテゴリ。
THREAD_TYPE	スレッドのタイプ。
PROJECT	ドメインとプロジェクトの名前。フォーマットは <ドメイン名> / <プロ ジェクト名>です。
USER_NAME	ユーザ名。
SQL_TYPE	SQL ステートメントの種類(例:'executeQuery', 'executeUpdate')。
RECORD_COUNT	この SQL ステートメントによって追加,削除,またはフェッチされたレコー ドの数。
START_TIME	SQL ステートメントの開始時刻(日時データ型で表現)。
START_TIME_MS	SQL ステートメントの開始時刻(1970/01/01 からのミリ秒数で表現)。
TOTAL_TIME	サーバが SQL ステートメントの実行にかかった合計時間(ミリ秒)。
SQL_STRING	実際のSQL文字列。

PERF_SERVER_GENERAL_MEASURES

このテーブルには、Server General モニタによって収集されたデータが格納されます。

このテーブルには、ALM サーバの動作に関する集計データが格納されます。各レコードは、特定の時間枠内での1つのALM ノードでの1つの測定項目を表しています。このテーブルのカラムのプレフィックスは PSGM です。たとえば、PSGM_SERVER_MACHINE_NAME のようになります。

カラム名	説明
SERVER_MACHINE_NAME	データが収集された ALM サーバ。
START_TIME	レコードの時間フレームの開始時刻。
END_TIME	レコードの時間フレームの終了時刻。

カラム名	説明
MEASURE_NAME	測定項目の名前。
	有効な値:
	MEMORY_USAGE
	ACTIVE_THREADS
	ACTIVE_PROJECT_SESSION
	THREAD_TOTAL_TIME
	THREAD_CPU_TIME
	FREC_REQUEST_CALL_TOTAL_TIME
	DB_TIME
	• FS_TIME
AVG	時間枠内に測定された平均値。
MIN	時間枠内に測定された最小値。
MAX	時間枠内に測定された最大値。
COUNT	測定項目が時間枠内に計算された回数。

PERF_SERVER_THREAD_TYPES

このテーブルには、Server Thread Type モニタによって収集されたデータが格納されます。

このテーブルには、サーバ・スレッドに関する集計データが格納されます。各レコードは、特定の時間 枠内における特定のALMプロジェクトの1つのALMノードでの1つのスレッド・タイプの動作を表して います。このテーブルのカラムのプレフィックスはPSTTです。たとえば、PSTT_SERVER_MACHINE_NAMEの ようになります。

カラム名	説明
SERVER_MACHINE_ NAME	データが収集された ALM サーバ。
START_TIME	レコードの時間フレームの開始時刻。
END_TIME	レコードの時間フレームの終了時刻。
THREAD_CATEGORY	スレッドのカテゴリ。有効なカテゴリ:REQUEST, JOB, ASYNC_ TASK, NONE。

カラム名	説明
THREAD_TYPE	スレッドのタイプ。たとえば、要求タイプ:PostBug, ジョブ 名 : CKeepAliveJob, など。
PROJECT	ドメインとプロジェクトの名前。フォーマットは<ドメイン名> \ <プ ロジェクト名>です。
SERVER_TOTAL_TIME_ AVG	サーバがスレッドの処理にかかった平均時間(ミリ秒)。
SERVER_TOTAL_TIME_ MIN	サーバがスレッドの処理にかかった最小時間(ミリ秒)。
SERVER_TOTAL_TIME_ MAX	サーバがスレッドの処理にかかった最大時間(ミリ秒)。
SERVER_TOTAL_TIME_ COUNT	サーバで実行されたスレッドの数。
SERVER_CPU_TIME_ AVG	スレッドの処理に割り当てられた平均 CPU 時間(ミリ秒)。
SERVER_CPU_TIME_ MIN	スレッドの処理に割り当てられた最小 CPU 時間(ミリ秒)。
SERVER_CPU_TIME_ MAX	スレッドの処理に割り当てられた最大 CPU 時間(ミリ秒)。
SERVER_CPU_TIME_ COUNT	サーバで実行されたスレッドの数。
DB_TIME_AVG	1つのSQLステートメントの平均処理時間。
DB_TIME_MIN	1つのSQLステートメントの最小処理時間。
DB_TIME_MAX	1つのSQLステートメントの最大処理時間。
DB_TIME_COUNT	データベースが処理した SQL ステートメントの数。
FS_TIME_AVG	ファイル・システムへの平均アクセス時間。
FS_TIME_MIN	ファイル・システムへの最小アクセス時間。
FS_TIME_MAX	ファイル・システムへの最大アクセス時間。
FS_TIME_COUNT	ファイル・システム・アクセス(ファイルの読み書きまたは削除)の数。

管理者ガイド 第12章: QC Sense

第13章: HP ALM ツールとアドインのインストール

HP Application Lifecycle Management(ALM)は、HP 製ツールやサードパーティ製ツールとの統合や同期化を行うソリューションを提供しています。ALM と他のツールを統合するには、HP Application Lifecycle Management(ALM)のツール・ページまたはHP Application Lifecycle Managementの[アドイン]ページからアドインをインストールする作業が必要になる場合があります。

注: ALM をほかのツールと統合して使用する際には、そのツールのバージョンがサポート対象かどうかを確認することができます。[ヘルプ]> [新機能]をクリックして、適切な統合マトリックスを選択してください。

次の ALM ツールを利用できます。

- HP ALM Connectivity: ALM と他のツールを統合します。
- HP ALM Lab Service: HP ALM を使用して、テスティング・ホストの機能テストとメンテナンス・タ スクをトリガできるようになります。 ラボ管理に接続する必要がある機能テスト・ツール(VAPIや QuickTest Professional など)上で、HP ALM Lab Service エージェントをインストールして設定します。
- HP ALM Client Registration: ALM コンポーネントをクライアント・マシンに登録し, HP テスト・ ツール, サードパーティ・ツール, ユーザが開発したツールを使用できるようにします。
- Shared Deployment for Virtual Environments: ALM コンポーネントを, すべてのユーザがアクセスできる共有場所にデプロイします。これは, ユーザが Citrix, VMware などの仮想環境から ALM に接続する場合に役立ちます。
- Webgate Customization: WebGate クライアント・コンポーネントをカスタマイズできます。

ALM をインストールするには,次の手順を実行します。

ALM のメイン・ウィンドウで、[ヘルプ]> [ALM ツール]を選択します。[HP Application Lifecycle Management ツール]ページが開きます。

Population Lifecycle Management - Tools
 House
 Ho

その他の HP ALM アドイン

最終更新日: 2014 年 3 月

- 2. ツールのリンクをクリックします。クリックしたツールに関する追加情報のページが表示されます。 [その他の HP ALM アドイン]リンクをクリックすると、[HP Application Lifecycle Management リ ソース]の[アドイン]ページが表示され、追加するアドインを選択できます。
- 3. ツールの使用方法については、 [ALM ツール] リンクをクリックしてください。

ヒント: 拡張機能のリンクをクリックしても, 拡張機能のドキュメントを表示することができます。

4. 画面の指示に従って、ツールをダウンロードしてインストールします。

ALM Add-in をインストールするには、次の手順で行います。

ALM のメイン・ウィンドウで, [ヘルプ]> [ALM アドイン]を選択します。[HP Application Lifecycle Management リソース]の[アドイン]ページが表示され, 追加するアドインを選択できます。

第2部: プロジェクト のカスタマイズ

管理者ガイド 第2部: プロジェクトのカスタマイズ

第14章: プロジェクトのカスタマイズの概略

HP Application Lifecycle Management(ALM) プロジェクト管理者は、 [プロジェクトカスタマイズ]を使用して、プロジェクトにアクセスできるユーザを定義し、各ユーザが実行できるタスクの種類を指定することで、プロジェクトへのアクセスを制御します。また、組織固有のニーズに合わせてプロジェクトをカスタマイズすることもできます。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ: ALMテンプレート管理者は、テンプレート・プロジェクトをカスタマイズ し、クロス・プロジェクト・カスタマイズ機能を使用して、カスタマイズ内容を1つまたは複数のALM プロ ジェクトに適用できます。そうすることで、組織内のすべてのプロジェクトのポリシーと手続きを標準化 できます。詳細については、「クロス・プロジェクト・カスタマイズ」(345ページ)を参照してください。

ALM のエディション: クロス・プロジェクトのカスタマイズは、Quality Center Enterprise Edition では 利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

本章の内容

プロジェクトのカスタマイズ	276
[プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウについて	278
カスタマイズの変更内容の保存	

プロジェクト・カスタマイズ

ALM プロジェクトは, [プロジェクト カスタマイズ]ウィンドウを使用してカスタマイズできます。

注: ビューア・グループのユーザは, [ユーザのプロパティ]ページを除いて, [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの設 定を表示 および変更 することはできません。

プロジェクトのカスタマイズを開始するには、次の手順を実行します。

 Web ブラウザを開き、ALM の URL を入力します。 http://<ALM サーバ名 > [<:ポート番号 >]/qcbin。HP Application Lifecycle Management のオプション・ウィンド ウが開きます。



2. [ALM デスクトップ クライアント]リンクをクリックします。

ALM を初めて実行すると、ファイルがクライアント・マシンにダウンロードされます。2回目以降の 実行では、バージョン確認が行われます。サーバに新しいバージョンがあると、更新されたファイル がクライアント・マシンにダウンロードされます。

- Windows 7, 2008R2, 2012 の場合:管理者権限が割り当てられていないユーザの場合,セキュリティの警告メッセージが表示されたら[インストールしない]をクリックします。インストール画面にリダイレクトされます。
- ブラウザを使ってファイルをダウンロードすることが禁止されている場合は、HP Application Lifecycle Managementの[アドイン]ページ([ヘルプ]> [アドイン])からアクセスできる HP ALM Client MSI Generator Add-in でファイルをインストールできます。

■ Citrix やVMware などの仮想環境からALMを実行する場合,新しいバージョンをインストールできるのはシステム管理者だけです。

ALM のバージョンが確認され,必要に応じてファイルが更新されると, ALM のログイン・ウィンドウが表示されます。

Application Lifecycle Management
名前:
パスワード:
□ このマシンで最後に使用したドメインと ブロジェクトに自動的にログインする
パスワードを忘れた場合 認証
ドメイン:
プロジェクト:
ログイン

注: ALM が外部認証を使用するように設定されている場合,名前とパスワードのフィールドはこのウィンドウには表示されません。手順7に進みます。

3. [ログイン名]ボックスに, ユーザ名を入力します。

特定のプロジェクトに対して管理者権限がないユーザ名を入力した場合,利用できるカスタマイズ機能は,そのユーザ・グループが利用できる機能に限定されます。詳細については、「ユーザ・ グループとアクセス許可の管理について」(290ページ)を参照してください。

4. [パスワード]ボックスにパスワードを入力します。パスワードを思い出せない場合は、[パスワード を忘れた場合]リンクをクリックします。詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

ALM にログインしたら、 [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウで自 分 のパスワードを変 更 できます。 詳細 については、 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してくださ い。 さらに、サイト管理者は「サイト管理」からユーザのパスワードを変更できます。 詳細について は、「パスワードの作成と変更」(158ページ)を参照してください。

- 5. 前回作業していたプロジェクトに ALM が自動的にログインするようにするには、[このマシンで最後に使用したドメインとプロジェクトに自動的にログインする]チェック・ボックスを選択します。
- 6. [認証]をクリックします。ALM によりユーザ名 およびパスワードが確認され, ユーザがアクセス可能 なドメインおよびプロジェクトが決定されます。自動ログインを選択している場合は, ALM が開き ます。

- 7. [**ドメイン**]リストからドメインを選択します。標準設定では,前回作業していたドメインが表示されます。
- 8. [プロジェクト]リストからプロジェクトを選択します。標準設定では,前回作業していたプロジェクトが表示されます。
- 9. [**ログイン**]をクリックします。ALM が開き, 前回のセッションで最後に使用していたモジュールが表示されます。
- 11. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウを閉じて ALM プロジェクトに戻るには, ウィンド ウの右上隅に ある[**戻る**] ボタンをクリックします。

[プロジェクト カスタマイズ]の内容を変更した場合は、[カスタマイズの変更]ダイアログ・ボックス が開きます。詳細については、「カスタマイズの変更内容の保存」(281ページ)を参照してください。

[プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウについて

ALM プロジェクト管理者は、組織固有のニーズに合わせて、 [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウでプロジェクトをカスタマイズできます。

プロジェクトのカスタマイズ内容を変更する際の重要な検討事項については、「カスタマイズの変更内容の保存」(281ページ)を参照してください。

🛵 ユーザのプロパティ	ユーザのプロパティ				
⑦ プロジェクト ユーザ	🖺 保存 🖙 パ	ペスワードの変更			
🗃 グループとアクセス許可					
🄄 モジュール アクセス	ユーザ名:	alex_alm	正式名:	Alex	
💏 プロジェクトのエンティティ					
📰 要件タイプ	電子メール:		電話番号:		
🏝 リスク ベース品質管理	ステータス:	🔒 アクティブ	失効日:		
፻፹፬ ፻፬፻፶፻ የጠር					
🖙 自動メール					
鳥 警告ルール					
♣ 警告ルール 副 ワークフロー	(
参 警告ルール 副 ワークフロー 物 プロジェクト計画と追跡	4 1.10.9.1:				
 参 警告ルール 同一クフロー 切っジェクト計画と創新 ゴロジェクトレポート テンブレート 	4				*
 ● 警告ルール □ ワークフロー 10 ブロウェクト計画と)部時 □ ブロヴェクト計画と)部時 □ ブロヴェクト レポート テンブレート □ ビジネス プロセス テスト 	< - - - - 見 の月: - - - - - - - - - -				•
 ● 警告ルール ○ ク・クフロー ① ブロジェクト計画と認路 ② ブロジェクト レポート テンブレート ○ ビジネス ブロセス テスト ● ジネス ブロセス テスト 	-				•
 警告ルール アークフロー フロジェクト計画と)部時 プロジェクト計画と)部時 プロジェクトレポート テンプレート ビジネス クロン テスト ビジネス ジュー Sprinter 	₹ <u> </u>				
 普通ハール フークフロー ブロジェクト計画と30時 ブロジェクト レポート デンブレート ビジネス プロゼス テスト ビジネス グロゼス テスト ビジネス ジュー Sprinter 	е <u>ікан</u> :				A
 ● 苦告ハール ③ ワークフロー ④ フロシストト語ニン師師 ③ フロシストレポート キンプレート ○ ビジスス フロセス テスト ③ ビジスス ユー ③ Sprinter 	< <u>ت</u> روی:				*

[プロジェクト カスタマイズ]ウィンド ウには、次 のリンクがあります。

注: テンプレート・プロジェクトを処理している場合,リンク名の後ろに(共有)と表示されていることがあります。これは、そのページのカスタマイズ内容が、リンク済みのプロジェクトに適用されていることを意味します。詳細については、「クロス・プロジェクト・カスタマイズ」(345ページ)を参照してください。

リンク	説明		
ユーザのプロパ ティ	すべてのユーザは、このオプションを使用して、自分のユーザ・プロパティとパス ワードを変更できます。詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。		
	サイト管理者は、「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブで、ユーザのプロパティと パスワードの上書きと変更を実行できます。詳細については、「ユーザの詳細 の更新」(157ページ)および「パスワードの作成と変更」(158ページ)を参照し てください。「ALLOW_UPDATE_USER_PROPERTIES_FROM_ CUSTOMIZATION」(196ページ) パラメータがY に設定されている場合を除 き、プロジェクト管理者は、[プロジェクトカスタマイズ]ではユーザのプロパティを 変更できません。		
プロジェクト・ユー ザ	ALM プロジェクトに対してユーザの追加と削除を実行できます。ユーザのアクセス権を制限するために、ユーザをユーザ・グループに割り当てることもできます。 詳細については、「プロジェクトのユーザ管理」(283ページ)を参照してください。		
	注: ALM ユーザの作成とユーザ・プロパティの定義は、「サイト管理」で行います。詳細については、「ALM ユーザの管理」(145ページ)を参照してください。		
グループとアクセス 許 可	権限設定を指定することにより、ユーザ・グループに権限を割り当てることができます。これには、遷移ルールの指定とデータの非表示も含まれます。詳細については、「ユーザ・グループとアクセス許可の管理」(289ページ)を参照してください。		
モジュール・アクセ ス	各 ユーザ・グループがアクセスできるモジュールを制御できます。モジュールへの 不必要なアクセスを防ぐことで、ALM ライセンスを有効活用できます。詳細に ついては、「ユーザ・グループのモジュール・アクセス権のカスタマイズ」(302ペー ジ)を参照してください。		
プロジェクトのエン ティティ	ALM プロジェクトは,作業環境に合わせてカスタマイズできます。プロジェクトには,システム・フィールドとユーザ定義フィールドを含むことができます。システム・フィールドは変更できません。ユーザ定義フィールドは,追加,変更,削除できます。詳細については,「プロジェクトのエンティティのカスタマイズ」(306ページ)を参照してください。		
要件タイプ	ALM プロジェクトに要件タイプを追加して、利用可能なフィールドを定義し、 各要件タイプの必須フィールドを定義できます。詳細については、「プロジェクトの要件タイプのカスタマイズ」(315ページ)を参照してください。		

リンク	説明
リスクベース品 質 管理	リスク・ベース・テストの条件と条件の値をカスタマイズできます。また、標準設定のテスト効果とテスト・レベルもカスタマイズできます。詳細については、「リ スクベース品質管理のカスタマイズ」(331ページ)を参照してください。
	ALM のエディション: [プロジェクト カスタマイズ]の[リスクベース品質管理] リンクは、ALM Essentials Edition では利用できません。ALM エディション とその機能の詳細については、 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
プロジェクト・リスト	カスタマイズしたフィールド・リストをプロジェクトに追加できます。フィールド・リストには、システム・フィールドまたはユーザ定義フィールドに入力できる値が含まれています。詳細については、「プロジェクト・リストのカスタマイズ」(320ページ)を参照してください。
自動メール	不具合の修正アクティビティについて電子メールでユーザに通知するよう自動 メール通知ルールを設定できます。詳細については、「自動メールの設定」 (325ページ)を参照してください。
警告ルール	プロジェクトの警告ルールを有効にすることができます。これによって、 プロジェクトで変更が発生すると警告が作成され、電子メールが送信されます。詳細については、「警告ルールの有効化」(341ページ)を参照してください。
ワークフロー	不具合モジュールのダイアログ・ボックスのフィールドで必要とされるカスタマイズ を実行するためのスクリプトを生成できます。詳細については、「ワークフロー・ スクリプトの生成」(417ページ)を参照してください。
	また, 任意のモジュールのダイアログ・ボックスをカスタマイズするスクリプトを記述し, ユーザが実行できるアクションを制御できます。詳細については,「ワークフローのカスタマイズの概要」(429ページ)を参照してください。
プロジェクトの計 画 と追跡	プロジェクトの計画と追跡(PPT)のKPIを作成し、カスタマイズできます。詳細 については、「プロジェクト計画と追跡のKPIのカスタマイズ」(357ページ)を参 照してください。
	ALM のエディション: [プロジェクト カスタマイズ]の[プロジェクト計画と追跡]リンクは,ALM Edition で利用できます。
プロジェクト・レ ポート・テンプレー ト	レポートのテンプレートを作成しカスタマイズできます。 このテンプレートは、 プロ ジェクト・ユーザがテンプレート・ベースのレポートに割り当てることができます。 詳 細については、「プロジェクト・レポート・テンプレート」(365ページ)を参照してく ださい。
Business Process Testing	Business Process Testing を設定できます。詳細については、「Business Process Testingの設定」(409ページ)を参照してください。

リンク	説明		
ビジネス・ビュー	アナリシス・ビュー・モジュールでレポートを作成する際の基盤となるビジネス・ ビューを作成できます。詳細については,「ビジネス・ビュー」を参照してください。		
Sprinter	HP Sprinterを使用して、ALM で手動テストを行うための設定を構成できます。詳細については、「Sprinterの設定」(411ページ)を参照してください。		
	ALM のエディション: [プロジェクト カスタマイズ]の[Sprinter]リンクは, ALM Essentials Edition および Performance Center Edition では利用できません。 ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。		
IDE Connector Customizer	Application Lifecycle Intelligence で作業するために必要なカスタマイズを実行できます。		
	注 : このリンクが利用できるのは、ALM Dev 拡張機能を有効にしている 場合のみです。拡張機能の有効化の詳細については、「プロジェクトに 対する拡張機能の有効化」(83ページ)を参照してくださ い。IDE Connector Customizer のドキュメントをダウンロードするにはHP ALM の[アドイン]ページ([ヘルプ]>[アドイン])を表示します。		

カスタマイズの変更内容の保存

プロジェクト管理者は、カスタマイズの変更内容をメジャー変更またはマイナー変更として保存できます。この選択オプションによって、セッションの期限切れ後にユーザが再接続したときに、カスタマイズ内容が再ロードされるかどうかが決定されます。

• メジャー変更(標準設定):ユーザ・セッションの期限切れ後にユーザが再接続すると,カスタマイズ 内容が再ロードされされます。

このオプションは、変更内容が重要であって、その変更をユーザができるだけ早く利用できることが 必要な場合にのみ使用することをお勧めします。メジャー変更を限定的に使用すると、カスタマイ ズ内容を再ロードせずにユーザがすばやく再接続できます。このオプションは、たとえば、必須の ユーザ定義フィールドを追加したときに使用します。

• マイナー変更:ユーザ・セッションの期限切れ後にユーザが再接続しても、カスタマイズ内容は再 ロードされません。

最後のログイン時以降に行われたメジャーなカスタマイズ変更が1つ以上ある場合は、ユーザの 再接続時にカスタマイズ内容が再ロードされます。詳細については、「DISPLAY_LAST_USER_ INFO」(203ページ)を参照してください。再ロードされるのは、ユーザの最後のログイン時から現在 のログイン時間までの間に行われた、メジャーおよびマイナーのすべてのカスタマイズ変更です。

カスタマイズ変更の保存オプションを選択するには、次の手順を実行します。

1. [プロジェクト カスタマイズ]ウィンドウの内容を変更した後, [**戻る**]ボタンをクリックし, [プロジェクト カスタマイズ]ウィンドウを閉じます。[カスタマイズの変更]ダイアログ・ボックスが開きます。

カスタマイズの変更	—
プロジェクトのカスタマイズに変更を行いました。	
✓ *プロジェクトのエンティティ * カテゴリへの変更を保存する 変更が有効になるタイミングの定義:	
 メジャー変更 カスタマイズの変更は、 (次回のログイン時、またはセッション タイムアウト後の)次回 のブロジェクトへの再接続時に有効になります。セッション タイムアウト後の再接続 (こは時間がかかる場合があります。 マイナー変更 カスタマイズの変更は、 (次回のログイン時に初めて有効になります。 セッション タイ ムアウト(後にプロジェクトに再接続しても有効にはなりません。 セッション タイムアウ ト後の再接続時間は最小限です。 	
OK(O) キャンセル(C) ヘルプ(H	1)

2. 保存オプションを選択して[**OK**]をクリックすると、 [プロジェクト カスタマイズ]ダイアログ・ボックスが 閉じて ALM プロジェクトに戻ります。

第15章: プロジェクトのユーザ管理

HP Application Lifecycle Management(ALM) プロジェクト管理者は、プロジェクトにログインできる ユーザを定義したり、各ユーザが実行できるタスクの種類を指定したりすることにより、プロジェクトへの アクセスを制御できます。

本章の内容

プロジェクトのユーザ管理について	284
プロジェクトへのユーザの追加	284
ユーザ・グループへのユーザの割り当て	. 285
プロジェクトからのユーザの削除	286

プロジェクトのユーザ管理について

ALM プロジェクトごとに、有効なユーザを ALM 全体のユーザ・リストから選択する必要があります。

注: このユーザ・リストは「サイト管理」で作成します。詳細については、「ALM ユーザの管理」 (145ページ)を参照してください。

次に、各プロジェクト・ユーザをユーザ・グループに割り当てる必要があります。各グループは、一定の ALM 作業を実行するアクセス許可を持っています。

プロジェクトへのユーザの追加

ALM プロジェクトに,新しいユーザを追加できます。

ユーザをプロジェクトに追加するには、次の手順を実行します。

1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [プロジェクト ユーザ]をクリックします。 [プロジェクト ユーザ]ページが開きます。

プロ	ታበንェクト ユーザ						
R	🖺 保存 🗾 💌 🚽 🚽 ユーザの追加 🔹 💢 ユーザの削除						
2	名前	正式名	1	詳細 メンバーシップ			
	alm_admin alm_admin2 alm_admin3 james_alm mary_alm peter_alm test	David Banks Roy Fields Pamela Knight james_alm mary_alm peter_alm		ユーザ名: alm_admin 氏名: David Banks 電子メール: 電話番号: ステータス: 鼻 アクティブ 失効日:			
			00000	1289AJ:			

ヒント: [名前]カラムをクリックすると、ユーザ名のソート順を昇順から降順に変更できます。 また、 [正式名]カラムをクリックして、ユーザ名ではなく氏名を基準にソートすることもできます。

- 2. [ユーザの追加]ボタンの右側にある矢印をクリックします。次のいずれかの方法で、プロジェクトに ユーザを追加します。
 - ユーザ名を入力して既存のユーザを追加するには、[名前でユーザを追加]を選択します。
 [ユーザの追加]ダイアログ・ボックスが開きます。「サイト管理」で定義されているユーザのユー ザ名を、このプロジェクトに対して入力します。[OK]をクリックします。
 - サイト・ユーザのリスト内に新規ユーザを作成し、そのユーザをプロジェクトに追加するには、
 [サイトに新規ユーザを追加]を選択します。[サイトに新規ユーザを追加]ダイアログ・ボックスで、新しいユーザの詳細情報を入力し、[OK]をクリックします。

注: スマート・カード認証の場合,スマート・カードの電子メールを[**電子メール**]に,スマート・カードの共通名(CN)を[説明]に入力します。シングル・サインオン(SSO)認証の場合,電子メールとユーザ名を[説明]に入力します。

このオプションが利用できない場合は、サイト管理のADD_NEW_USERS_FROM_ PROJECT パラメータを設定すると使用できるようになります。詳細については、「ADD_ NEW USERS FROM PROJECT」(190ページ)を参照してください。

サイト・ユーザのリストの既存のユーザを追加するには、[サイトからユーザを追加]を選択します。[サイトからユーザを追加]ダイアログ・ボックスで、プロジェクトに追加するユーザを選択します。

ユーザのリストは[**更新**]ボタンで更新できます。また, [**検索**]ボタンを使用すると, 既存の ユーザを名前で検索できます。[**OK**]をクリックします。

ユーザがプロジェクト・ユーザのリストに追加され,ユーザの詳細情報が[詳細]タブに表示され ます。ユーザの詳細は、「サイト管理」で定義されています。詳細については、「ユーザの詳細の 更新」(157ページ)を参照してください。

3. [保存]をクリックして, [プロジェクト ユーザ]ページの変更を保存します。

ユーザ・グループへのユーザの割り当て

プロジェクトに追加したユーザは、1つまたは複数のユーザ・グループに割り当てることができます。新しいユーザは、標準設定では**ビューア・**ユーザ・グループのメンバとしてプロジェクトに割り当てられます。

ユーザは,標準設定のユーザ・グループに割り当てることも、カスタマイズしたユーザ・グループに割り当 てることもできます。ユーザ・グループのカスタマイズの詳細については、「ユーザ・グループとアクセス許 可の管理」(289ページ)を参照してください。既存ユーザのアクセス権は、そのユーザが割り当てられ ているグループを変更することで、いつでも変更できます。

ヒント: ユーザをユーザ・グループに割り当てる処理は、 [グループとアクセス許可]ページから実行 することもできます。詳細については、「グループへのユーザの割り当て」(292ページ)を参照してく ださい。

ユーザ・グループへユーザを割り当てるには、次の手順を実行します。

- [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左側の表示枠で、[プロジェクト ユーザ]をクリックします。
 [プロジェクト ユーザ]ページが開きます。
- プロジェクト・ユーザのリストで、ユーザ・グループに割り当てるユーザを選択します。ユーザのプロパティ(名前,電子メール,電話,説明)が[詳細]タブに表示されます。電子メールの情報は重要です(これにより,不具合,テスト,要件,テスト・セットなどの通知をユーザがメールボックスで直接受け取ることができます)。

ユーザの詳細は、「サイト管理」で定義されています。詳細については、「ユーザの詳細の更新」 (157ページ)を参照してください。

3. [**メンバーシップ**]タブを選択します。

詳細 メンバーシップ	
次のメンバーではない	次のメンバーである
 ▲ QA テスタ ▲ プロジェクト マネージャ ▲ 開発者 	♣ TD 管理者 ♣ ビューア
	>
	<
	~~

- 4. 選択したユーザをユーザ・グループに割り当てるには、 [次のメンバーではない]リストのユーザ・グ ループ名をクリックし、右矢印ボタン をクリックします。
- 5. 現在選択されているユーザ・グループからユーザを削除するには、 [次のメンバーである]リストで ユーザ・グループ名をクリックし、左矢印ボタン をクリックします。

注: [次のメンバーである]リストは,空にしておくことができません。ユーザは,1つ以上のユーザ・グループに必ず所属する必要があります。

- 6. 片方のリストのすべてのユーザ・グループをもう一方のリストに移動するには,二重矢印のボタン くく シンをクリックします。
- 7. [保存]をクリックして, [プロジェクト ユーザ]ページの変更を保存します。

プロジェクト からのユーザの削除

プロジェクトのセキュリティを確保するには、プロジェクトを使用しなくなったユーザを削除します。プロ ジェクトからユーザを削除しても、そのユーザが「サイト管理」の ALM ユーザ・リストから削除されること はありません。

ユーザをプロジェクトから削除するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [**プロジェクト ユーザ**]をクリックします。 [プロジェクト ユーザ]ページが開きます。
- 2. プロジェクト・ユーザのリストで削除するユーザを選択し、[ユーザの削除]ボタンをクリックします。
- 3. [OK]をクリックして確定します。ユーザがプロジェクト・ユーザのリストから削除されます。
- 4. [保存]をクリックして, [プロジェクト ユーザ]ページの変更を保存します。

管理者ガイド 第15章: プロジェクトのユーザ管理
第16章: ユーザ・グループとアクセス許可の管理

HP Application Lifecycle Management(ALM)のプロジェクトとモジュールへのアクセス権は、それを使用できるユーザ・グループを定義し、各ユーザ・グループが実行する作業の種類をアクセス許可レベルに基づいて指定することで制御します。

本章の内容

ユーザ・グループとアクセス許可の管理について	290
ユーザ・グループの追加	291
グループへのユーザの割り当て	292
ユーザ・グループのアクセス許可の設定	. 293
遷移ルールの設定	295
ユーザ・グループに対 するデータ非表示	298
ユーザ・グループ名の変更	300
ユーザ・グループの削除	300
アクセス許可の設定について	301
ユーザ・グループのモジュール・アクセス権のカスタマイズ	302

ユーザ・グループとアクセス許可の管理について

プロジェクトを不正なアクセスから保護するために、ALM では、各ユーザを1つまたは複数のグループ に割り当てることができます。ALM には、標準設定の権限を持つグループがあらかじめ定義されてい ます。各グループは、ALM の作業に対する一定のアクセス権を持っています。標準設定のユーザ・グ ループには、TDAdmin(TD 管理者)、QATester(QA テスト担当者)、Project Manager(プロジェクト・ マネージャ)、Developer(開発者)、Viewer(ビューア)があります。

Performance Center:

さらに、標準設定のユーザ・グループとして、Performance Advisor(パフォーマンス・アドバイザ)、Performance Tester(パフォーマンス・テスト担当者)、Performance Test Specialist(パフォーマンス・テスト・スペシャリスト)も利用できます。

あるプロジェクトについて, ユーザ・グループが標準設定で持っているアクセス許可では足りない場合 は, カスタマイズした独自のユーザ・グループを追加し, グループごとにそれぞれの権限セットを割り当て ることができます。

ユーザ・グループのアクセス許可を設定したら、ユーザ・グループにアクセス権を与える ALM モジュール を定義することもできます。ユーザ・グループのメンバがプロジェクト にログインしたときには、承認されて いるモジュールのみが表示されます。

クロス・プロジェクト・カスタマイズを使用するときのグループとアクセス許可

ALM テンプレート管理者は、クロス・プロジェクト・カスタマイズを使用して、テンプレート・プロジェクトから1つまたは複数のALM プロジェクトにカスタマイズを適用できます。詳細については、「クロス・プロジェクト・カスタマイズ」(345ページ)を参照してください。

ALM のエディション: クロス・プロジェクトのカスタマイズは、Quality Center Enterprise Edition では 利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

クロス・プロジェクト・カスタマイズを使用する場合は、グループに対するアクセス許可の設定時に、次の点に注意してください。

- テンプレート・プロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトを処理する場合は、[プロジェクトカスタマイズ]で[グループとアクセス許可]リンクを使用して、ユーザ・グループとアクセス許可を管理します。テンプレート・プロジェクトに作成されているユーザ・グループは、テンプレートのカスタマイズ内容を適用したときに、リンクされたプロジェクト内に作成されます。テンプレート・プロジェクト内のユーザ・グループに割り当てられているユーザは、リンクされたプロジェクトには適用されません。テンプレートのカスタマイズの適用の詳細については、「リンクされたプロジェクトへのテンプレートのカスタマイズの適用」(351ページ)を参照してください。
- リンクされたプロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトで定義されているユーザ・グループは、リンクされたプロジェクトではテンプレート・アイコン 付きで表示されます。テンプレート・プロジェクトで定義されているユーザ・グループには、ユーザを割り当てることができます。テンプレート・プロジェクトで定義されているユーザ・グループは、変更、名前の変更、削除はできません。ただし、その

ユーザ・グループが表示できるレコードを制限することはできます。詳細については、「ユーザ・グルー プに対するデータ非表示」(298ページ)を参照してください。

ユーザ・グループの追加

標準設定のユーザ・グループがプロジェクトのニーズに合わないと判断した場合は、プロジェクトに対し て追加ユーザ・グループを作成できます。ユーザ・グループの新規追加では、既存のユーザ・グループ に基づいてグループのアクセス許可を設定します。

ユーザ・グループを追加するには、次の手順を実行します。

1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [グループとアクセス許 可]をクリックしま す。[グループとアクセス許 可] ページが開きます。



- 2. [新規グループ]ボタンをクリックします。確認メッセージ・ボックスが開きます。[はい]ボタンをクリックして,処理を続けます。[新規グループ]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 3. [**グループ名**]ボックスに, グループの名前を入力します。グループ名には, 次の文字は使用できません。()@\/:*?"`<>|+=;,%
- 4. [次のグループとして設定]リストで、既存のユーザ・グループの権限を新しいグループに割り当て ます。

アクセス権限が、作成する新規ユーザ・グループに類似した既存ユーザ・グループを選択してください。そうすることで、必要なカスタマイズを最小限に抑えることができます。

5. [OK]をクリックします。新しいグループ名が[グループとアクセス許可]ページのグループ・リストに追

加されます。

6. [保存]をクリックして,[グループとアクセス許可]ページの変更を保存します。

グループへのユーザの割り当て

プロジェクトに追加したユーザは、1つまたは複数のユーザ・グループに割り当てることができます。新しいユーザは、標準設定では**ビューア・**ユーザ・グループのメンバとしてプロジェクトに割り当てられます。

ユーザは,標準設定のユーザ・グループに割り当てることも,カスタマイズしたユーザ・グループに割り当てることもできます。既存ユーザのアクセス権は,そのユーザが割り当てられているグループを変更することで,いつでも変更できます。

ヒント: ユーザ・グループへのユーザの割り当ては、 [プロジェクト ユーザ]カスタマイズ・モジュールから実行することもできます。詳細については、「プロジェクトのユーザ管理」(283ページ)を参照してください。

ユーザ・グループへユーザを割り当てるには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [グループとアクセス許 可]をクリックしま す。[グループとアクセス許 可] ページが開きます。
- 2. グループ・リストで,ユーザを割り当てる先のグループを選択します。
- 3. [メンバーシップ]タブを選択して、グループに所属しているユーザを確認します。

メンバーシップ	アクセス許可	データ非表示	
グループに属さな	20		グループに属す
alm_admin2 (I alm_admin3 (I mary_alm (ma peter_alm (pe test (test)	Roy Fields) Pamela Knight) ry_alm) ter_alm)	>	alm_admin (David Banks) james_alm (james_alm)
		<	

グループに割り当てられているユーザは、[メンバーシップ]タブの[グループに属す]表示枠に表示 されます。グループに割り当てられていないユーザは、[メンバーシップ]タブの[グループに属さない]表示枠に表示されます。

- 4. 現在選択されているユーザ・グループにユーザを割り当てるには、グループに属さないリストのユー ザをクリックし、右矢印ボタン→をクリックします。
- 5. 現在選択されているユーザ・グループからユーザを削除するには、グループに属すリストのユーザ をクリックし、左矢印ボタン をクリックします。
- 6. 片方のリストのすべてのユーザ・グループをもう一方のリストに移動するには,二重矢印のボタン </ >
 </ >

 →
 をクリックします。
- 7. [保存]をクリックして,[グループとアクセス許可]ページの変更を保存します。

ユーザ・グループのアクセス許可の設定

すべてのユーザ・グループは, ALM プロジェクト管理者によって定義される一連の権限(アクセス許可)を持っています。たとえば, DOC という名前のユーザ・グループに, Viewer アクセス権限が割り当てられているとします。プロジェクトの作業を効率的に進めるためには, 不具合を追加, 変更, 削除する操作が必要です。その場合の権限は, ALM プロジェクト管理者がアクセス許可の設定を指定して, DOC グループに割り当てることができます。

注:

- 標準設定のユーザ・グループの権限は変更できません。このグループのアクセス許可を表示するには、[グループとアクセス許可]ページのグループ・リストからユーザ・グループを選択し、[アクセス許可]タブをクリックします。詳細については、「アクセス許可の設定について」(301ページ)を参照してください。
- プロジェクトをアップグレードするときに、元のバージョンに存在していなかったアクセス許可が アップグレードしたバージョンに含まれている場合、ALM はそのアクセス許可をプロジェクト内の すべてのユーザに自動的に割り当てます。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ - リンクされたプロジェクトの処理:

テンプレート・プロジェクトで定義されているユーザ・グループは、リンクされたプロジェクトではテンプレー

ト・アイコン^[13] 付きで表示されます。テンプレート・プロジェクトにリンクされているプロジェクトを使用する 場合,テンプレート・プロジェクトで定義されたユーザ・グループのアクセス許可は変更できません。ただ し,そのユーザ・グループが表示できるレコードを制限することはできます。詳細については、「ユーザ・ グループに対するデータ非表示」(298ページ)を参照してください。

ALM のエディション: クロス・プロジェクト のカスタマイズは、Quality Center Enterprise Edition では 利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

ユーザ・グループのアクセス許可を設定するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [グループとアクセス許 可]をクリックしま す。[グループとアクセス許 可] ページが開きます。
- 2. グループ・リストで、アクセス許可を設定するユーザ・グループを選択し、 [**アクセス許可**]タブをクリックします。

ー連のタブ(ALM モジュールごとに1つずつあるタブと,管理用などの特定目的用のタブ)がアルファベット順に表示されます。各モジュールで利用可能なエンティティのアクセス許可レベル(作成,更新,削除など)は、[アクセス許可レベル]カラムに表示されます。

グループとアクセス許可	(供有)		
ジルージとアクセス許可 語 保存 メジャー変更 A DA テスタ D 2757 C 2757 C 2757 C 2757 C 277 C 277 C 277 C 277 C 277 C 277 C	 (共有) ● 新規グルーブ ■ グルーブの名前 メンバーシップ アクセス許可 データ非表示 Administration Business Process Testing アクセス許可レベル ■ 定転 ● ごをならしボート ■ 更新 ● 作成 ● 単除 ■ 生成 ● 単除 ● 単 たい間の管理 ● ご アナジス フォルダ 	ig更 X グルーブの削 ダッシュホード テスト ラボ 所有者のみ ①	除 「テスト計画」 ビジネス モデル 「ラ 《) オプション
	 ■ 更新 ● 「作成 ● 用除 ● □ グラフ ● クロス プロジェクト グラフを許可 インパクト 帯が 	Ũ	

- 3. モジュールのタブをクリックします。各エンティティのアクセス許可レベルを表示することが必要であれば、エンティティを展開します。
 - エンティティのアクセス許可が、他のエンティティのアクセス許可に依存する(または影響する)
 場合は、[所有者のみ]カラムの右側にアイコン・が表示され、ウィンドウ下部の[インパクト]
 表示枠にその影響に関する情報が表示されます。
 - アクセス許可レベルに対して他のオプションも利用できる場合は、ウィンドウの右側の[オプション]表示枠に表示されます。
 - エンティティのアクセス許可レベルを変更できるのが、そのエンティティの所有者のみの場合は、 [所有者のみ]カラムにチェック・ボックスが表示されます。詳細については、「ALM オブジェクト の所有者」(297ページ)を参照してください。
- 4. 選択したユーザ・グループがエンティティごとに持つべきアクセス許可レベルのチェック・ボックスを選択します。利用可能なアクセス許可の詳細については、「アクセス許可の設定について」(301 ページ)を参照してください。
- 5. アクセス許可レベルにサブレベルがある場合は、アクセス許可レベルを展開して、関連するフィー ルドのリストを表示します。次に、選択したユーザ・グループが利用可能なフィールドを選択しま す。

- 6. フィールドの変更が可能かどうかを設定するには、次の手順で行います。
 - エンティティのアクセス許可レベルを変更できるのをその所有者のみに制限するには、[所有者のみ]カラムのアクセス許可レベルのチェック・ボックスを選択します。たとえば、レコードの所有者のみが値を削除できるようにするには、[アクセス許可レベル]カラムの[削除]の横にある [所有者のみ]カラムのチェックボックスを選択します。詳細については、「ALM オブジェクトの所有者」(297ページ)を参照してください。
 - ルックアップ・リスト・タイプのフィールドからユーザ・グループが選択できる値を制限するには、[オプション]表示枠で、許容されるフィールド値の遷移ルールを設定します。詳細については、 「遷移ルールの設定」(295ページ)を参照してください。
- 7. 現在のユーザ・グループに対してモジュールごとにデータを非表示にするには、 [データ非表示]タ ブをクリックします。詳細については、「ユーザ・グループに対するデータ非表示」(298ページ)を参 照してください。
- 8. [保存]をクリックして,[グループとアクセス許可]ページの変更を保存します。

遷移ルールの設定

グループが持つ変更権限は、フィールドの値を変更する遷移ルールを設定して制限できます。この ルールは、指定フィールド内でグループが変更できる値を規定します。 遷移ルールは、ルックアップ・リ スト・フィールドとユーザ・リスト・フィールドにのみ設定できます。

例

不具合情報の変更であれば、不具合レコードの[ステータス]フィールドでユーザ・グループが選択できる項目を制限できます。ユーザ・グループが[ステータス]フィールドを修正済みから解決済みにのみ変更できる遷移ルールを設定できます。

注: 遷移 ルールが設定されているフィールドの値リストを変更するためにワークフローを使用している場合は、ワークフロー・スクリプトと遷移 ルールの両方を満足するようにしか、フィールドを変更できません。詳細については、「ワークフロー・イベント・リファレンス」(445ページ)を参照してください。

遷移ルールを設定するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [グループとアクセス許 可]をクリックしま す。[グループとアクセス許 可] ページが開きます。
- 2. グループ・リストで, アクセス許可を設定するユーザ・グループを選択します。
- 3. [アクセス許可]タブをクリックします。
- 4. たとえば、 [**不具合**]タブをクリックします。このタブには、 不具合モジュールで利用可能なエンティ ティと、それに対応するアクセス許可レベルが表示されています。

5. エンティティとそのアクセス許可レベルを展開して選択します。たとえば、 [**不具合**]を展開してから、 [**更新**]を展開します。 アクセス許可レベルが展開され、利用可能なフィールドがリストされます。

利用可能なエンティティとアクセス許可レベルの詳細については、「アクセス許可の設定について」(301ページ)を参照してください。

6. フィールドを選択します。たとえば、 [ステータス]を選択します。 [遷移ルール] グリッドが、ウィンドウの右側の[オプション] 表示枠に表示されます。

メンバーシップ アクセス許可 データ非表示							
ダッシュボード テストラボ テスト計画 ビジネスモデ	ル ライブラリ	עע	ース	リリース	不具合	要件	
アクセス許可レベル 所	有者のみ	-	オブ	ション	_		
🖂 🖂 📴 更新			遷移	ルール		フィール	F: ステータス
			4	ルールの	iêhn 🛛	▶ ルールの縋	iu w
עדעעד ש ש לען		=	移行	π	· ····································	移行先	•
☑ ステータス			\$AN	Y		\$ANY	
Ø ターケット サイクル 図 ターゲット リリース							
☑ プロジェクト							
		0000					
■ 検出リリース		-					
12/25							

- 7. [**ルールの追加**]をクリックして, 遷移 ルールを追加します。[遷移 ルールの追加]ダイアログ・ボック スが開きます。
- 8. [移行元]では,次の操作を実行できます。
 - [\$ANY]を選択すると、ユーザ・グループは、現在表示されている値にかかわらずフィールドを 変更できます。
 - リストから値を選択します。選択されているフィールドをユーザ・グループが変更できるのは、そのフィールドに今選択した値が表示されている場合のみです。たとえば、現在の値が「修正済み」の場合にのみ、ユーザ・グループが不具合の[ステータス]フィールドを変更できるようにするには、「修正済み]を選択します。
- 9. [移行先]では、次の操作を実行できます。
 - [\$ANY]を選択すると、ユーザ・グループがフィールドを任意の値に変更できます。
 - リストから値を選択します。選択されているフィールドの値をユーザ・グループが変更できるのは、値を今指定した値に変更する場合のみです。たとえば、ユーザ・グループが[ステータス]フィールドの値を「解決済み」にのみ変更できるようにするには、[解決済み]を選択します。
- 10. [OK]をクリックして保存し, [遷移ルールの追加]ダイアログ・ボックスを閉じます。新しいルールが [遷移ルール]グリッドに表示されます。

- 11. 遷移 ルールを変更するには、 [遷移 ルール] グリッド からルールを選択し、 [ルールの編集] ボタン をクリックします。 [遷移 ルールの編集] ダイアログ・ボックスで、 ルールを変更します。 [OK] をク リックします。
- 12. 遷移 ルールを削除するには、 [遷移 ルール] グリッド からルールを選択し、 [ルールの削除] ボタン をクリックします。 プロンプトが表示された場合は、 [OK]をクリックして確定します。
- 13. [保存]をクリックして,[グループとアクセス許可]ページの変更を保存します。

ALM オブジェクトの所有者

グループのアクセス許可を設定すると、フィールド値の変更や削除が可能かどうかを制限して、レコードの所有ユーザのみが値の変更や削除を行えるようにすることができます。次の表に、ALMのオブジェクトと、そのオブジェクトの所有者として定義されているユーザを示します。

ALM オブジェクト	所有者
アナリシス・フォル ダ	[所有者]フィールドには、アナリシス・フォルダを作成したユーザが表示されます。アナリシス・フォルダが現在のユーザの非公開フォルダに移動(切り取りと貼り付け)されると、所有者は現在のユーザに更新されます。
アナリシス項目	[所有者]フィールドには、アナリシス項目を作成したユーザが表示されます。 アナリシス項目が現在のユーザの非公開フォルダに移動(切り取りと貼り付け)されると、所有者は現在のユーザに更新されます。
ベースライン	[作成者]フィールドには、ベースラインをキャプチャしたユーザが表示されます。
ビジネス・コンポー ネント	[責任者]フィールドには, コンポーネントを担当するユーザまたはユーザ・グ ループが表示されます。
ビジネス・プロセ ス・モデル要素	[インポート実行元]フィールドには、ビジネス・プロセス・モデル要素をインポートしたユーザが表示されます。
ビジネス・プロセ ス・モデルのモデル	[作成者]フィールドには、ビジネス・プロセス・モデルのモデルを作成したユーザ が表示されます。
ビジネス・プロセ ス・モデルのパス	[作成者]フィールドには、ビジネス・プロセス・モデルのモデルを作成したユーザ が表示されます。
ダッシュボード・ フォルダ	[フォルダ所有者]フィールドには、ダッシュボード・フォルダを作成したユーザが 表示されます。ダッシュボード・フォルダが現在のユーザの非公開フォルダに移 動(切り取りと貼り付け)されると、所有者は現在のユーザに更新されます。
ダッシュボード・ ページ	[ページ所有者]フィールドには、ダッシュボード・ページを作成したユーザが表示されます。ダッシュボード・ページが現在のユーザの非公開フォルダに移動 (切り取りと貼り付け)されると、所有者は現在のユーザに更新されます。
不具合	[責任者]フィールドには、不具合を割り当てられたユーザが表示されます。

ALM オブジェクト	所有者
お気に入り	[所有者]フィールドには、お気に入りを作成したユーザが表示されます。
要件	[作成者]フィールドには、要件を作成したユーザが表示されます。
テスト計画モ ジュール内のテス ト	[設計者]フィールドには, テスト計画モジュールでテストを作成したユーザが表示されます。
テスト・リソース・モ ジュール内 のリ ソース	[作成者]フィールドには、テスト・リソース・モジュールでリソースを作成したユー ザが表示されます。
テスト設定	[作成者]フィールドには、テスト設定を作成したユーザが表示されます。
テスト・ラボ・モ ジュール内 のテス ト	[テスト担当者]フィールドには、テスト・ラボ・モジュールでテストをテストするユー ザが表示されます。
テスト・ラボ・モ ジュール内 のテス ト実行	[テスト担当者]フィールドには、テスト・ラボ・モジュールでテストをテストするユー ザが表示されます。

注: ALM オブジェクトの所有者は, [Tables]テーブルのTB_OWNER_FIELD_NAME 値を修 正して変更できます。[Tables]テーブルの詳細については, 『HP ALM Project Database Reference』を参照してください。

ユーザ・グループに対するデータ非表示

ユーザ・グループが表示可能な特定のレコードを非表示にするように指定できます。非表示にすることができるのは、不具合、ライブラリ、要件、ビジネス・コンポーネント、リソース、テスト、テスト・セットに 関連するレコードです。レコードの非表示には、次のオプションがあります。

データのフィルタ処理:特定のフィールドに対してフィルタを設定し、ユーザ・グループが表示できるレコードを制限できます。たとえば、フィールド[責任者]のフィルタを"[CurrentUser]"に設定できます。
 その場合は、現在のユーザに割り当てられているレコードのみが表示されるようになります。

注: [親要件]フィールドに基づいてユーザ・グループの要件をフィルタ処理する場合,選択した親の下にある要件がすべて要件グリッドに表示されます。要件ツリーに要件は表示されません。

フィルタ処理の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

• 表示フィールドの定義:モジュール内のフィールドで、ユーザ・グループに表示するフィールドと非表示にするフィールドを選択できます。ある決まったユーザ・グループに所属するユーザにとって表示す

る必要があるのは, 自分の作業に関連するデータのみです。たとえば, ファイル・システムからテスト・スクリプトへのアクセスを許可すべきではないユーザ・グループに対して, テストモジュールの[パス]フィールドを非表示にすることができます。必須フィールドは, 非表示にできません。

データを非表示にするには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [グループとアクセス許 可]をクリックしま す。[グループとアクセス許 可] ページが開きます。
- 2. グループ・リストで、データを非表示にするユーザ・グループを選択します。
- 3. [データ非表示]タブをクリックします。
- 4. データを非表示にするエンティティをクリックします。たとえば、 [**不具合**]をクリックします。右側の 表示枠に、現在設定されているフィルタと、選択されているグループのユーザが不具合モジュー ルで現在表示できるフィールドが表示されます。
- 5. [**フィルタ/ソートの設定**] 「ボタンをクリックします。[フィルタ < エンティティ>]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 6. 1 つまたは複数のフィルタを設定します。このフィルタによって、ユーザ・グループが ALM に表示で きるレコードが決まります。詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザー ズ・ガイド』を参照してください。
- 7. [OK]をクリックして, [フィルタ < エンティティ>]ダイアログ・ボックスを閉じます。設定したフィルタ が表示されます。
- 8. [表示フィールドの設定]ボタン をクリックします。[カラムの選択]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 9. 矢印をクリックして, 各フィールドを非表示または表示にします。
- 10. [OK]をクリックし, [カラムの選択]ダイアログ・ボックスを閉じます。表示に設定したフィールドが表示されます。
- 11. [保存]をクリックして,[グループとアクセス許可]ページの変更を保存します。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ

ALM のエディション: クロス・プロジェクトのカスタマイズは、Quality Center Enterprise Edition では 利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

テンプレート・プロジェクトにリンクされているプロジェクトを使用する場合,テンプレート・プロジェクトで 定義されたフィールドのデータを非表示にすることはできません。

テンプレート・プロジェクトで定義されたユーザ・グループに対して、 プロジェクトで定義されたユーザ定 義フィールドのデータは非表示にできます。 [グループとアクセス許可]ページで、 グループ・リストでユー ザ・グループを選択し、 [**データ非表示**]タブをクリックして、表示するデータを指定してください。

ユーザ・グループ名の変更

ユーザ・グループの名前を変更できます。 グループに対して行われたカスタマイズ内容はすべて維持されます。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ - リンクされたプロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトにリンクされ ているプロジェクトを使用する場合,テンプレート・プロジェクトで定義されたユーザ・グループの名前は 変更できません。

ALM のエディション: クロス・プロジェクト のカスタマイズは、Quality Center Enterprise Edition では 利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

ユーザ・グループの名前を変更するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [グループとアクセス許 可]をクリックしま す。[グループとアクセス許 可] ページが開きます。
- 2. グループ・リストからグループ名を選択します。
- 3. [グループの名前変更]ボタンをクリックします。[グループ名の変更]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 4. グループに付ける新しい名前を入力します。
- 5. [OK]をクリックすると、変更が保存されます。

ユーザ・グループの削除

ALM プロジェクトに追加されたユーザ・グループを削除できます。

ALM のエディション: クロス・プロジェクト のカスタマイズは、Quality Center Enterprise Edition では 利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ: クロス・プロジェクト・カスタマイズを使用する場合は、次の点に注意 してください。

- テンプレート・プロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトからユーザ・グループを削除しても、リンクされたプロジェクトのグループは削除されません。次回に、そのリンクされたプロジェクトにテンプレート・カスタマイズを適用すると、プロジェクトのユーザ・グループは読み取り専用でなくなり、プロジェクト管理者が、変更、名前変更、または削除できます。
- リンクされたプロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトにリンクされているプロジェクトを使用する 場合,テンプレート・プロジェクトで定義されたユーザ・グループは削除できません。

ユーザ・グループを削除するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [グループとアクセス許 可]をクリックしま す。[グループとアクセス許 可] ページが開きます。
- 2. グループ・リストからグループ名を選択します。
- 3. [**グループの削除**]ボタンをクリックします。
- 4. [はい]ボタンをクリックして,確定します。

アクセス許可の設定について

ユーザ・グループのアクセス許可は、 [アクセス許可]タブで表示できます。カスタム・ユーザ・グループの アクセス許可は、いつでも変更できます。標準設定のユーザ・グループ(TD管理者、QAテスト担当者、 プロダクト・マネージャ、開発者、ビューア)のアクセス許可は変更できません。

注:

- ALM のエディション:アクセス許可の設定の中には、各エディションの機能に応じて、適用できないものもあります。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
- クロス・プロジェクト・カスタマイズ リンクされたプロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトにリンクされているプロジェクトを使用する場合、テンプレートで定義されたユーザ・グループのアクセス許可は変更できません。ただし、そのユーザ・グループが表示できるレコードを制限することはできます。詳細については、「ユーザ・グループに対するデータ非表示」(298ページ)を参照してください。

ALM のエディション: クロス・プロジェクトのカスタマイズは、Quality Center Enterprise Edition では利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Performance Center:標準設定のユーザ・グループとして、Performance Advisor(パフォーマンス・アドバイザ)、Performance Tester(パフォーマンス・テスト担当者)、Performance Test Specialist(パフォーマンス・テスト・スペシャリスト)も利用できます。

ユーザ・グループのアクセス許可を表示するには、 [グループとアクセス許可]ページのグループ・リストからユーザ・グループを選択し、 [アクセス許可]タブをクリックします。

メンバーシップ アクセス許可 データ非表示				
Administration Business Process Testing	ダッシュボード	テスト ラボ	テスト計画	೮೨ 🔹 🕨
アクセス許可レベル	<u></u> 7	ブション		
✓ グループの設定				
🔽 クロス プロジェクト カスタマイズの設定				
🔽 チェックアウトの取り消し				
😡 プロジェクト エンティティのカスタマイズ				
▶ プロジェクト ユーザの設定				
🔽 プロジェクト リストのカスタマイズ				
☑ プロジェクトの計画と追跡の管理				
😡 メジャー変更の許可				
😡 モジュール アクセスのカスタマイズ	000			
😡 ユーザ ブロパティおよびパスワードの変更	0			
▶ リスク ベース品質管理のカスタマイズ				
1 + L = L . L . L . L L				
インパクト				
127.21				

ユーザ・グループのモジュール・アクセス権のカスタマイズ

ALM プロジェクトごとに, 各 ユーザ・グループがアクセスできるモジュールを制御できます。モジュールへの 不必要なアクセスを防ぐことで, ALM ライセンスを有効活用できます。たとえば, あるユーザ・グループ が, プロジェクトに不具合を追加する目的でのみで ALM を使用する場合は, そのグループのアクセス 権を不具合モジュールのみに限定できます。

モジュールのアクセス権を指定できるのは,不具合,テスト計画,テスト・ラボ,要件,ダッシュボード, ビジネス・コンポーネント,リリース,ビジネス・プロセス・モデル,ライブラリの各モジュールです。

あるユーザ・グループに対して、ビジネス・コンポーネント・モジュールへのアクセスが有効でない場合で も、そのグループのユーザが既存のビジネス・プロセス・テストを読み取り専用モードで表示することはで きます。

注: Performance Center: ラボ管理では、モジュール・アクセスのカスタマイズはサポートされません。

ユーザ・グループのモジュール・アクセス権をカスタマイズするには、次の手順を実行します。

1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [モジュール アクセス]をクリックします。 [モジュール アクセス]ページが開きます。

F	モジュール アクセス						
	🖹 保存 メジャー変更	•					
	ユーザグループ	•	☑ 不具合	🛃 テスト計画	귳 テスト ラボ	☑ 要件	∑ 5
	TD 管理者			✓		✓	
	QA テスタ	•	V	¥	¥	✓	
	プロジェクト マネージャ	•	V	¥	¥	✓	
	開発者	•	V	¥	¥	✓	•
	E⊐-P	•	V	¥	✓	✓	

チェックマークは、ユーザ・グループがアクセスできるモジュールを示します。

- 2. テーブル内のセルを選択またはクリアするには、セルのチェック・ボックスを選択します。
- 3. あるユーザ・グループについて、すべてのモジュールを選択またはクリアするには、ユーザ・グループ 名の右のカラムのチェック・ボックスを選択します。
- 4. あるモジュールについて, すべてのユーザ・グループを選択またはクリアするには, モジュール名の左の(同じセル内にある)チェック・ボックスを選択します。
- 5. すべてのモジュールについて、すべてのユーザ・グループを選択またはクリアするには、[ユーザグ ループ]見出しの右のカラムのチェック・ボックスを選択します。
- 6. [保存]をクリックして変更内容を保存します。

管理者ガイド 第16章:ユーザ・グループとアクセス許可の管理

第17章: ALM プロジェクト のカスタマイズ

HP Application Lifecycle Management(ALM) プロジェクト管理者は、組織固有のニーズに合わせて、プロジェクトをカスタマイズできます。たとえば、フィールドの追加やカスタマイズ、要件タイプのカスタマイズ、カテゴリとリストの作成などを行って、プロジェクトのニーズを反映することができます。

本章の内容

ALM プロジェクトのカスタマイズについて	306
プロジェクトのエンティティのカスタマイズ	306
プロジェクトの要件 タイプのカスタマイズ	315
プロジェクト・リストのカスタマイズ	320

ALM プロジェクトのカスタマイズについて

プロジェクトを開始する前に、固有のニーズを反映するようにプロジェクトをカスタマイズできます。プロジェクトを進めていく際も、変化するニーズに合わせてプロジェクトをさらに調整できます。

ALM には、ALM エンティティに関する情報を入力するシステム・フィールドがあります。このフィールドの動作は、関連リストの値のみをユーザに選択させる、特定フィールドの入力を必須にする、フィールドに入力された値の履歴を保存するなどの処理を行って変更できます。さらに、ユーザ定義フィールドを作成して、プロジェクトに特有なデータを組み込むこともできます。このフィールドには、ALM システム・リストまたはユーザ定義リストを関連付けることができます。

たとえば、アプリケーションの複数のビルドを対象にテストを実行する場合、[検出ビルド]フィールドを [不具合の追加]ダイアログ・ボックスに追加できます。そして、ビルド 1、ビルド 2、ビルド 3 という値を 含む選択リストを作成し、そのリストを[検出ビルド]フィールドに関連付けることができます。

要件モジュールでは,各要件を要件タイプに割り当てる処理も行います。要件タイプは,利用可能なフィールドと,そのタイプの要件の必須フィールドを定義します。そうすることで,割り当てられたタイプ に関連するフィールドのみを要件で利用可能にすることができます。

プロジェクト のエンティティのカスタマイズ

[プロジェクトのエンティティ]ページを使用して, ALM プロジェクトを作業環境に合わせてカスタマイズできます。

プロジェクトのエンティティ				
💾 保存 骨 新規フィールド 🔹	🗙 フィールドの削塚			
 ・ 〇 サイクル ・ ○ カイクル 	設定			
▶ 😨 スコープ アイテム ▼ 💹 テスト ▶ 🛅 システム フィールド	名前:	TS_USER_05		
▼ 🔚 ユーザ フィールド ☞ Level	ラベル: タイブ:	TS_USER_01 ルックアップ リスト		~
Priority Reviewed	長さ: サニタイズ処理タイプ:	255 なし		
G TS_USER_01 ト ル テストインスタンス		同履歴		
 テスト ステップ ・		 ■ マスジ済み □ バージョン化済み 	● 使系可能	
ー ▶ <₽> テスト パラメータ ▶ 《処 テスト設定	ルックアップリスト Activity Status		▼ 新規リスト	リストに移動
 ▶ ▲ トポロジ ▶ ■ ビジネス コンポーネント 	□値を検証			
ドス ビジネス プロセス モデル	視数の値を許可			

ALM プロジェクトは, プロジェクトのエンティティに分割されます。 **エンティティ**には, 特定のアプリケーショ ン管理プロセスに対してユーザが入力したデータが含まれます。 このデータはテーブルに格納されま す。

プロジェクト・エンティティのツリー

プロジェクト・エンティティのツリーには、利用可能なプロジェクト・エンティティが表示されます。

各エンティティには、システム・フィールドとユーザ定義フィールドがあります。

- システム・フィールド: ALM の標準設定のフィールドです。システム・フィールドを追加または削除することはできず、変更のみ可能です。
- ユーザ・フィールド:管理者が定義して、ALM プロジェクトに組み入れることができるフィールドです。
 このフィールドにより、プロジェクトを固有のニーズに合わせてカスタマイズできます。ユーザ定義
 フィールドは、追加、変更、削除が可能です。

詳細については、次の項目を参照してください。

- 「ユーザ定義フィールドの追加」(311ページ)
- •「システム・フィールドとユーザ定義フィールドの変更」(311ページ)
- 「ユーザ定義フィールドの削除」(312ページ)

ALM エンティティおよびフィールドの詳細については、『HP ALM Project Database Reference』を参照してください。

[設定]タブ

[設定]タブには、フィールドのプロパティが表示されます。次のプロパティを利用できます。

プロパティ	説明
名前	ALM データベース・テーブルで使用されるフィールド名を示します。 読み取り専用。
ラベル	ALM に表示されるフィールド名を示します。新しい名前を入力することも,標準設定の名前を使用することもできます。ラベルは空白にはできず,次の文字は使用できません。()@\/:*?"`<> +=;,%

プロパティ	説明
タイプ	ユーザがフィールドに入力できるデータのタイプを指定します。 タイプは次のとお りです。
	• 数値: 整数の入力のみが可能になります。
	• 浮動:浮動小数点数/実数の入力が可能になります。
	• 文字列:任意の文字列の入力が可能になります。
	• 日付:日付の選択が可能になります。
	 ルックアップ・リスト: ルックアップ・リスト領域が表示され、ドロップダウン・リストからの選択が可能になります。
	• ユーザ・リスト: ALM のユーザ・リストからユーザ名の選択が可能になります。
	• メモ: データ・ブロックの入力が可能になります。標準設定では、 ALM エン ティティごとにメモ・フィールドを5つまで追加できます。
	「サイト管理」の[サイト設定]タブで「EXTENDED_MEMO_FIELDS」(206 ページ) パラメータを編集すると, 追加できるメモ・フィールドの数を増やすこと ができます。
長さ	フィールド のサイズを示します。これは, [文字列]タイプを選択した場合にのみ 利用できます。
	注: フィールドの最大長は255文字です。
サニタイズ処理タ イプ	フィールドのサニタイズ処理タイプを指定します。(これは, [文字列]タイプを選択した場合にのみ利用できます。)タイプは次のとおりです。
	• なし: データベースに記録されている値をそのまま返します。
	 HTML:値は,許可されるHTMLコンテンツの定義済みのホワイト・リストに基づいて、サニタイズ処理されます。
	• テキスト:値は HTML エンコードされます。
履歴	フィールドに入力された値のログを保存します。
必須	ユーザがフィールドに値を入力する必要があることを示します。
	注: フィールドを必須に設定したプロジェクトにすでにデータが含まれている場合,既存のレコードを変更するときに,ユーザが値を入力する必要はありません(フィールドが空の場合も不要です)。

プロパティ	説明
マスク済み	フィールドの入力データのマスクを示します。(これは, [文字列]タイプを選択した場合にのみ利用できます。)詳細については,「入力マスクの定義」(313 ページ)を参照してください。
バージョン化済み	バージョン管理:バージョン管理の対象となるエンティティ/フィールドについて, バージョンごとにフィールド値を保存するかどうかを指定します。
	ほとんどのフィールドで, このチェックボックスは標準設定で選択されます。 ユー ザ定義 フィールドとー部のシステム・フィールドでは, バージョン管理を無効にで きます。
	注: また, フィールドの親エンティティがバージョン管理の対象でないなどの 理由で, チェックボックスが無効になる場合もあります。
	ヒント: フィールドのバージョン管理を無効にすると、ワークフロー・スクリプト とOTA スクリプトの実行で、エンティティのチェックインが不要になります。
検索可能	検索可能なフィールドを示します。(サイト管理にある[DB サーバ]タブの[テキ スト検索]オプションが有効な場合にのみ利用できます。詳細については、 「検索可能フィールドの定義」(187ページ)を参照してください。
ルックアップ・リスト	事前定義済みのリストが含まれます。これは, [ルックアップ リスト]タイプを選択した場合にのみ利用できます。フィールドと事前定義済みリストを関連付けるには, [ルックアップ リスト]ボックスからリストを選択します。 選択したリストを表示または変更するには, [リストに移動]ボタンをクリックします。
新規リスト	新しいリストを作成します。これは、 [ルックアップ リスト]タイプを選択した場合 にのみ利用できます。フィールドを新しいリストに関連付けるには、 [新規リス ト]ボタンをクリックします。 [プロジェクト リスト]ダイアログ・ボックスが開きます。 リ ストのカスタマイズの詳細については、 「プロジェクト・リストのカスタマイズ」(320 ページ)を参照してください。
リストに移動	事前定義済みリストを表示します。これは、[ルックアップリスト]タイプを選択した場合にのみ利用できます。事前定義済みリストを開くには、[ルックアップリスト]ボックスからリストを選択します。[リストに移動]ボタンをクリックします。 [プロジェクトリスト]ダイアログ・ボックスが開きます。リストのカスタマイズの詳細については、「プロジェクト・リストのカスタマイズ」(320ページ)を参照してください。
値を検証	ユーザが選択できる値を, リスト・ボックスに表示された項目のみに限定します。これは, [ルックアップ リスト]または[ユーザ リスト]を選択した場合にのみ 利用できます。

プロパティ	説明		
複数の値を許可	「ユーザ定義フィールドに対してこのオプションを使用すると,事前定義済み ルックアップ・リストに関連付けられている任意のフィールドで,ユーザが複数 値を選択できます。これは,[ルックアップリスト]タイプを選択した場合にの 利用できます。詳細については,「ALLOW_MULTIPLE_VALUES」(195~ ジ)を参照してください。		
	たとえば、不具合エンティティに[言語]ユーザ・フィールド作成し、[複数の値 を許可]オプションを有効にした場合、ユーザは、このフィールドの値を入力す るときに、言語の値として[English], [French], [German]を同時に選択で きます。		
	注:		
	 このオプションは、テスト・ステップ・エンティティでは利用できません。 		
	 複数の値を含むフィールドを基準にデータ・グリッドまたはサマリ・グラフ をグループ分けすると、フィールド内の値の情報がまとめられて、全体で 1つの値として扱われます。この値がグループ分けのカテゴリとなります。 たとえば、「English」と「French」を含む値は、「English」と「French」 という個別のカテゴリの一部としてではなく、「English; French」として ー度だけグループ分けされます。 		
	リストのカスタマイズの詳細については、「プロジェクト・リストのカスタマイズ」 (320ページ)を参照してください。		

クロス・プロジェクト・カスタマイズ

ALM のエディション: クロス・プロジェクトのカスタマイズは、Quality Center Enterprise Edition では 利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

クロス・プロジェクト・カスタマイズを使用する場合は、次の点に注意してください。

- テンプレート・プロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトを使用する場合は、[プロジェクトのエン ティティ(共有)]リンクを使用して、システム・フィールドをカスタマイズし、ユーザ定義フィールドを作成します。テンプレート・プロジェクトのシステム・フィールドとユーザ定義フィールドは、テンプレート・カスタマイズを適用したときに、リンクされたプロジェクトに適用されます。テンプレートのカスタマイズの 適用の詳細については、「リンクされたプロジェクトへのテンプレートのカスタマイズの適用」(351ページ)を参照してください。
- リンクされたプロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトにリンクされているプロジェクトを使用する 場合,テンプレート・プロジェクトで定義されたシステム・フィールドとユーザ定義フィールドは変更で きません。

本項の内容

システム・フィールドとユーザ定義フィールドの変更	311
ユーザ定義 フィールドの削除	312
入力マスクの定義	313

ユーザ定義フィールドの追加

ALM プロジェクトは, 各 ALM エンティティに最大 99 個 のユーザ定義 フィールドを追加してカスタマイズ できます。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ:テンプレート・プロジェクトとリンクされたプロジェクトは、それぞれ ALM エンティティごとに最大 99 個 のユーザ定義 フィールドを持 つことができます。

ALM のエディション: クロス・プロジェクト のカスタマイズは、Quality Center Enterprise Edition では 利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

ユーザ定義フィールドを追加するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [プロジェクトのエンティティ]をクリックしま す。[プロジェクトのエンティティ]ページが開きます。
- 2. [プロジェクトのエンティティ]で,エンティティを展開します。
- 3. [ユーザフィールド]フォルダをクリックします。
- 4. ユーザ定義フィールドを追加するには、次の手順を実行します。
 - [新規フィールド]ボタンをクリックして、数値、文字列、日付、またはリスト・タイプのフィールド を追加します。
 - [新規フィールド]矢印をクリックし, [新規メモフィールド]を選択して, メモ・フィールドを追加 します。メモ・フィールドは, ALM エンティティごとに5つまで追加できます。

注:「サイト管理」の[サイト設定]タブで「EXTENDED_MEMO_FIELDS」(206ページ) パラメータを編集すると、追加できるメモ・フィールドの数を増やすことができます。

- 5. [設定]タブで, フィールドのプロパティを設定します。詳細については, 「プロジェクトのエンティティ のカスタマイズ」(306ページ)を参照してください。
- 6. [保存]をクリックして, [プロジェクトのエンティティ]ページの変更を保存します。

システム・フィールドとユーザ定義フィールドの変更

ALM プロジェクトのシステム・フィールドとユーザ定義フィールドのプロパティを変更できます。

注:システム・フィールドの[タイプ]および[長さ]プロパティは変更できません。さらに、「ルックアッ

プ・リスト」タイプのシステム・フィールドでは、関連付けられているリストは変更できません。また、 複数の値を選択することもできません。詳細については、「プロジェクトのエンティティのカスタマイズ」(306ページ)を参照してください。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ:テンプレート・プロジェクトにリンクされているプロジェクトを使用する場合,テンプレート・プロジェクトで定義されたシステム・フィールドとユーザ定義フィールドは変更できません。テンプレート・プロジェクトによって定義されたフィールドは,テンプレート・アイコン^に付きで表示されます。

ALM のエディション: クロス・プロジェクトのカスタマイズは、Quality Center Enterprise Edition では 利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

システム・フィールドまたはユーザ定義フィールドを変更するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [プロジェクトのエンティティ]をクリックしま す。[プロジェクトのエンティティ] ページが開きます。
- 2. [**プロジェクトのエンティティ**]で,エンティティを展開します。
- 3. [**システム フィールド**]フォルダまたは[ユーザ フィールド]フォルダを展開します。
- 4. カスタマイズするフィールドをクリックします。そのフィールドの設定が[設定]タブに表示されます。
- 5. 選択したフィールドのプロパティを変更します。詳細については、「プロジェクトのエンティティのカス タマイズ」(306ページ)を参照してください。
- 6. [保存]をクリックして, [プロジェクトのエンティティ]ページの変更を保存します。

ユーザ定義フィールドの削除

ALM プロジェクトからユーザ定義 フィールドを削除できます。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ - リンクされたプロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトにリンクされ ているプロジェクトを使用する場合,テンプレート・プロジェクトで定義されたユーザ定義フィールドは削除できません。

ALM のエディション: クロス・プロジェクト のカスタマイズは、Quality Center Enterprise Edition では 利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

ユーザ定義フィールドを削除するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [プロジェクトのエンティティ]をクリックしま す。[プロジェクトのエンティティ] ページが開きます。
- 2. [**プロジェクトのエンティティ**]で,エンティティを展開します。

- 3. [ユーザフィールド]フォルダを展開します。
- 4. 削除するフィールドを選択し、 [フィールドの削除] ボタンをクリックします。
- 5. [OK]をクリックして確定します。[ユーザフィールド]フォルダからフィールドが削除されます。
- 6. [保存]をクリックして, [プロジェクトのエンティティ]ページの変更を保存します。

入力マスクの定義

入力マスク・オプションは、ユーザに対して、マスク・パターンを使ってデータを入力するよう求めるために 使用します。ユーザが入力しようとした文字が入力マスクと矛盾する場合は、エラーが発生します。た とえば、ユーザに電話番号の入力を求める場合は、次の入力マスクを定義できます。

!\(000\)000-0000

この入力マスクは, ユーザ入力を数字のみに制限します。これは, 編集ボックスに次のように表示されます。

(___) ___ - ____

注:入力マスクは、文字列タイプのフィールドに対してのみ定義できます。

入力マスクを定義するには、次の手順を実行します。

- 1. [設定]タブで, [マスク済み]を選択します。詳細については, 「プロジェクトのエンティティのカスタ マイズ」(306ページ)を参照してください。
- 2. [マスク済み編集属性]で, [定義]ボタンをクリックします。 [入力マスクエディタ]ダイアログ・ボックスが開きます。

)000-0000	
<u></u> サンブル	マスク
(415)555-1212	!\(999\)000-0000
15450	!99999
555-55-5555	000\-00\-0000
90504	00000
90504-0000	00000\-9999
06/27/04	!99/99/00
09:05:15PM	!90:00:00>LL
13:45	!90:00
)000-0000

3. [入力マスク]ボックスに入力マスクを入力するか,事前定義されたマスクを選択します。

入力マスクの定義には、次の文字を使用できます。

マスク文字	説明
!	先頭または末尾のブランクを表すスペース。
#	数字。
•	小数点。
:	時刻の区切り文字。
1	日付の区切り文字。
١	この次のマスク文字列内の文字をリテラルとして扱います。たとえば、「(」, 「)」,「#」,「&」,「A」,「?」などの文字をマスクの中に記述できます。
>	後ろに続く文字をすべて大文字に変換します。

マスク文字	説明
<	後ろに続く文字をすべて小文字に変換します。
Α	英数字(必須入力)。次に例を示します。a ~ z, A ~ Z, または 0 ~ 9。
a	英数字(任意入力)。次に例を示します。a ~ z, A ~ Z, または 0 ~ 9。
C	文字(必須入力)。有効な値は, 範囲が32~ 126 および 128~ 255 のANSI文字です。
С	文字(任意入力)。有効な値は, 範囲が32~ 126 および 128~ 255 のANSI文字です。
L	英文字またはスペース(必須入力)。次に例を示します。a ~ z または A ~ Z。
I	英文字またはスペース(任意入力)。次に例を示します。a ~ z または A ~ Z。
0	数字(必須入力)。次に例を示します。0-9.
9	数字(任意入力)。次に例を示します。0-9.
-	スペースを挿入します。ユーザがフィールド・ボックスに文字を入力するとき に, カーソルは_文字をスキップします。

- 4. [テストの入力]ボックスで,入力マスクをテストできます。
- 5. [OK]をクリックして, [入力マスクエディタ]ダイアログ・ボックスを閉じます。
- 6. [保存]をクリックして, [プロジェクトのエンティティ]ページの変更を保存します。

プロジェクトの要件タイプのカスタマイズ

[要件タイプ]ページを使用して、 プロジェクトの要件タイプを作成し、 そのプロパティをカスタマイズできます。

要件タイプ		
🖺 保存 メジャー変更	💽 🐮 新規タイプ 🔤 タイプの削除	📄 タイプの名前変更
 未定義 フォルダ 	Details System Fields User Defined F	Fields Rich Text Template
 づループ びは びジネス 	Type icon:	現在の画像を維持
Q パフォーマンス	Risk Based Quality Management:	なし 💌
🔍 ビジネス モテル	Test coverage:	\checkmark

要件モジュールの各要件を要件タイプに割り当てることができます。要件タイプは、オプションのフィールドと、利用可能なユーザ定義フィールドを定義します。これにより、特定のタイプの要件でのみ利用可能なユーザ定義フィールドを作成できます。

たとえば、セキュリティ関連の要件として、「セキュリティ要件」という要件タイプを作成するとします。次 にユーザ定義フィールドとして[セキュリティ危険因子]を作成し、この要件が対象とするセキュリティの 危険因子のリストを追加します。このフィールドは、セキュリティ要件タイプ以外の要件には関係しな いため、セキュリティ要件を除くタイプでは利用できるようにしません。

各要件タイプには, アイコンが関連付けられています。このアイコンは, 要件モジュール・ツリー・ビュー で要件の隣に表示されるため, 要件が属しているタイプを簡単に見分けることができます。要件タイ プごとに, テスト・カバレッジとリスク・ベース品質管理を利用できるようにするかどうかを指定できます。

さらに, 要件タイプごとにリッチ・テキスト・テンプレートを定義して, 要件モジュール内でリッチ・テキスト を追加または編集するときに使用することができます。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ

ALM のエディション: クロス・プロジェクト のカスタマイズは、Quality Center Enterprise Edition では 利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

クロス・プロジェクト・カスタマイズを使用する場合は、次の点に注意してください。

- テンプレート・プロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトを使用する場合は、[要件タイプ(共有)]リンクを使用して、要件タイプを作成しカスタマイズします。テンプレート・プロジェクトで定義された要件タイプは、テンプレート・カスタマイズを適用したときに、リンクされたプロジェクトに適用されます。
- リンクされたプロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトにリンクされているプロジェクトを使用する場合,標準設定の要件タイプや,テンプレート・プロジェクトで定義された要件タイプは変更できません。

本項の内容

要件タイプの作成	
要件タイプのカスタマイズ	
要件タイプ名の変更	
要件タイプの削除	

要件タイプの作成

要件タイプを作成できます。ALM の標準設定の要件タイプには、[未定義], [フォルダ], [グループ], [機能], [ビジネス], [テスト], [ビジネスモデル]があります。これらのタイプの詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

要件タイプを作成するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [要件タイプ]をクリックします。[要件タイプ] ページが表 示されます。
- 2. [新規タイプ]ボタンをクリックします。[新規タイプ]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 3. [名前]ボックスに,タイプの名前を入力します。
- 4. [次の名前で作成]リストで、既存の要件タイプのプロパティを割り当てます。

ヒント: プロパティが,作成する新規要件タイプに類似した既存要件タイプを選択してください。そうすることで,必要なカスタマイズを最小限に抑えることができます。

- 5. [OK]をクリックします。[新規タイプ]ダイアログ・ボックスが閉じ,新しいタイプが[タイプ]リストに追加されます。
- 6. [保存]をクリックして,[要件タイプ]ページの変更を保存します。

要件タイプのカスタマイズ

要件タイプのカスタマイズでは,要件タイプのアイコンの変更,テスト・カバレッジとリスク・アナリシスのオ プションの設定,利用可能なフィールドと各要件タイプの必須フィールドの定義などを実行できます。 また,要件タイプごとにリッチ・テキスト・テンプレートを定義することもできます。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ - リンクされたプロジェクトの処理: テンプレート・プロジェクトにリンクされ ているプロジェクトを使用する場合,標準設定の要件タイプや,テンプレート・プロジェクトで定義され た要件タイプは変更できません。テンプレート・プロジェクトで定義された要件タイプの場合は,そのプ ロジェクトで定義されたユーザ定義フィールドの中からどのフィールドをそのタイプの要件で利用できる ようにするかを選択できます。

ALM のエディション: クロス・プロジェクト のカスタマイズは、Quality Center Enterprise Edition では 利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

要件タイプをカスタマイズするには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [**要件タイプ**]をクリックします。[要件タ イプ]ページが表 示されます。
- 2. 要件タイプを選択します。
- 3. [詳細]タブで,次の項目を設定できます。
 - タイプ・アイコン:要件モジュール・ツリー・ビューで、選択したタイプの要件の隣に表示されるアイコンを変更するには、[タイプアイコン]リストからアイコンを選択します。アイコンが変更されます。

注:標準設定の要件タイプであるフォルダとグループのアイコンは変更できません。

- リスク・ベース品質管理:選択したタイプの要件に対してリスク・ベース品質管理を設定する には、[リスクベース品質管理]ボックスで次のいずれかのオプションを選択します。
 - 分析を実行
 - 評価を実行
 - なし:選択したタイプの要件に対してリスク・ベース品質管理を有効にしない場合は、この オプションを選択できます。

リスク・ベース品質管理の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

テスト・カバレッジ:選択したタイプの要件のテスト・カバレッジを有効または無効にするには、
 [テストカバレッジ]チェックボックスを選択またはクリアします。

注: あるタイプの要件にテスト・カバレッジがすでに存在する場合は、その要件タイプの[テ スト カバレッジ]チェック・ボックスをクリアすることはできません。 クリアするには、そのタイプの 要件でテスト・カバレッジがあるものを削除するか、そのような要件からテスト・カバレッジを 削除するか、要件のタイプを変更する必要があります。

4. [システム フィールド]タブでは、システム・フィールドをそのタイプの必須フィールドにすることができます。フィールドの[必須]カラムのチェック・ボックスを選択してください。すべてのシステム・フィールドは、自動的にすべてのタイプに含まれます。また、一部のシステム・フィールドは任意指定に設定することができません。

ヒント: すべてのシステム・フィールを一度に必須に設定するには、[必須]カラム見出しの隣のチェック・ボックスを選択します。

- 5. [ユーザ定義フィールド]タブでは、このタイプの要件で利用できるユーザ・フィールドを選択できます。
 - ユーザ定義フィールドをこのタイプで利用できるようにするには、フィールドの[選択済みタイプ に適用]カラムのチェック・ボックスを選択します。ユーザ定義フィールドの詳細については、「プロジェクトのエンティティのカスタマイズ」(306ページ)を参照してください。
 - このタイプで利用可能なユーザ定義フィールドを必須フィールドにするには、フィールドの[必須]カラムのチェック・ボックスを選択します。
- 6. [**リッチ テキスト テンプレート**]タブでは、HTML エディタを使用して、要件モジュールの[リッチ テキスト]タブに初期ビューとして表示するページ・レイアウトを定義します。[リッチ テキスト]タブの詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

注:

- テンプレートは,1つの要件タイプに対して1つのみ定義できます。
- テンプレートに画像を入れることはできません。画像は、要件モジュールの[リッチテキスト]タブからのみ追加できます。
- このタイプの要件を新規に作成すると、必ずテンプレートが自動的に適用されます。
- [リッチ テキスト]タブから、テンプレートを既存の要件に手動で追加することもできます。テンプレートを適用すると、既存の内容が上書きされます。
- 7. [保存]をクリックして,[要件タイプ]ページの変更を保存します。

要件タイプ名の変更

要件タイプの名前を変更できます。標準設定の要件タイプである**フォルダ**は名前を変更できません。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ - リンクされたプロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトにリンクされ ているプロジェクトを使用する場合,標準設定の要件タイプや,テンプレート・プロジェクトで定義され た要件タイプの名前は変更できません。

ALM のエディション: クロス・プロジェクトのカスタマイズは, Quality Center Enterprise Edition で は利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については,『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

要件名を変更するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [**要件タイプ**]をクリックします。[要件タ イプ]ページが表 示されます。
- 2. 要件タイプを選択します。
- 3. [タイプの名前変更]ボタンをクリックします。[タイプの名前変更]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 4. 要件タイプに付ける新しい名前を入力します。
- 5. [OK]をクリックして, [タイプの名前変更]ダイアログ・ボックスを閉じます。 要件タイプの名前が更新されます。
- 6. [保存]をクリックして,[要件タイプ]ページの変更を保存します。

要件タイプの削除

要件タイプを削除できます。 プロジェクト内に存在する要件のタイプは削除できません。タイプを削除 するには,まずそのタイプの要件をすべて削除するか,要件のタイプを変更する必要があります。 標準 設定の要件タイプであるフォルダ,グループ,未定義は削除できません。 クロス・プロジェクト・カスタマイズ - リンクされたプロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトにリンクされ ているプロジェクトを使用する場合,標準設定の要件タイプや,テンプレート・プロジェクトで定義され た要件タイプは削除できません。

ALM のエディション: クロス・プロジェクトのカスタマイズは, Quality Center Enterprise Edition で は利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

要件タイプを削除するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [要件タイプ]をクリックします。[要件タイプ] ページが表 示されます。
- 2. 要件タイプを選択します。
- 3. [タイプの削除]ボタンをクリックします。
- 4. [OK]をクリックして確定します。要件タイプが削除されます。
- 5. [保存]をクリックして,[要件タイプ]ページの変更を保存します。

プロジェクト・リスト のカスタマイズ

[プロジェクト リスト]ページを使用して、ユーザ定義リストを作成、名前変更、削除できます。詳細については、次の項目を参照してください。

- 「リストの作成」(321ページ)
- •「リスト名,項目名,またはサブ項目名の変更」(322ページ)
- 「リスト,項目,またはサブ項目の削除」(323ページ)



リストには,項目(フィールドに入力できる値)が表示されています。たとえば,[言語]ユーザ定義 フィールドの選択リストであれば,[英語],[ヨーロッパ言語]などの項目を入れることができます。 リストには, いくつかのレベルのサブ項目があってもかまいません。たとえば, [英語]項目には, [英語 (アメリカ)], [英語 (イギリス)], [英語 (オーストラリア)], [英語 (カナダ)]というサブ項目を持つサブ リストを含むことができます。

ユーザがリストから複数の値を選択できるようにするには、 [プロジェクトのエンティティ]ページで該当す るフィールドの[複数の値を許可]オプションを有効にします。詳細については、「プロジェクトのエンティ ティのカスタマイズ」(306ページ)の[フィールド設定]を参照してください。

注: リストをフィールドに関連付けるには、「プロジェクトのエンティティのカスタマイズ」(306ページ) を参照してください。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ

ALM のエディション: クロス・プロジェクトのカスタマイズは, Quality Center Enterprise Edition で は利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

クロス・プロジェクト・カスタマイズを使用する場合は、次の点に注意してください。

- テンプレート・プロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトを使用する場合は、[プロジェクトリスト(共有)]リンクを使用して、ユーザ定義リストを作成しカスタマイズします。テンプレート・プロジェクトで定義されたプロジェクト・リストは、テンプレート・カスタマイズを適用したときに、リンクされたプロジェクトに適用されます。
- リンクされたプロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトにリンクされているプロジェクトを使用する場合,テンプレート・プロジェクトで定義されたユーザ定義リストは修正,名前変更,削除できません。

リストの作成

リストを作成して、1つまたは複数のフィールドに割り当てることができます。

リストを作成するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [プロジェクト リスト]をクリックします。[プ ロジェクト リスト]ページが開きます。
- 2. [新規リスト]ボタンをクリックします。[新規リスト]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 3. 新しいリストの名前(最長 255 文字)を入力し、[OK]をクリックします。
- 4. 新規リストまたは既存のリストに項目を追加するには、リスト名を選択し、[新規項目]ボタン をクリックします。[新規項目]ダイアログ・ボックスが開きます。項目の名前を入力し、[OK]をク リックします。

注: リストを複数値フィールドで使用する場合は、リスト項目にセミコロン(;)が含まれないようにしてください。複数値フィールドの詳細については、「プロジェクトのエンティティのカスタマイ

ズ」(306ページ)の[フィールド設定]テーブルを参照してください。

- 5. サブ項目を作成するには、項目を選択し、[新規サブ項目]ボタンをクリックします。[新規サブ 項目]ダイアログ・ボックスが開きます。サブ項目の名前を入力し、[OK]をクリックします。
- 6. [保存]をクリックして, [プロジェクト リスト]ページの変更を保存します。

リスト名、項目名、またはサブ項目名の変更

ユーザ定義リストと、システムおよびユーザ定義の項目またはサブ項目の名前を変更できます。

注: システム・リスト項目の中には変更できないものもあります。たとえば、**YesNo**リストの[Y]と [N]などがそうです。変更できないシステム項目の詳細についてはHP ソフトウェアのセルフ・ソルブ 技術情報の記事 KM206085(http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/document/KM206085)を 参照してください。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ - リンクされたプロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトにリンクされ ているプロジェクトを使用する場合,テンプレート・プロジェクトで定義されたリスト,項目,サブ項目の 名前は変更できません。

ALM のエディション: クロス・プロジェクトのカスタマイズは, Quality Center Enterprise Edition で は利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

リストの名前を変更するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [プロジェクト リスト]をクリックします。[プ ロジェクト リスト]ページが開きます。
- 2. リストを選択します。
- 3. [リストの名前変更]ボタンをクリックします。[リスト名の変更]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 4. リストに付ける新しい名前を入力します。
- 5. [OK]をクリックして, [リスト名の変更]ダイアログ・ボックスを閉じます。
- 6. [保存]をクリックして, [プロジェクト リスト]ページの変更を保存します。

項目またはサブ項目の名前を変更するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ]ウィンドウの左側の表示枠で, [プロジェクト リスト]をクリックします。[プ ロジェクト リスト]ページが開きます。
- 2. リストを選択します。

- 3. 項目を選択します。
- 4. [項目の名前変更]ボタンをクリックします。[リスト項目名の変更]ダイアログ・ボックスが開きます。
- 5. 項目に付ける新しい名前を入力します。[OK]をクリックします。
- 6. [保存]をクリックして, [プロジェクト リスト]ページの変更を保存します。

リスト,項目,またはサブ項目の削除

ユーザ定義リストと、システムおよびユーザ定義の項目またはサブ項目を削除できます。

注:

- フィールドのルックアップ・リストとして使用中のユーザ定義リストは削除できません。
- システム・リスト項目の中には削除できないものもあります。たとえば、YesNoリストの[Y]と [N]などがそうです。削除できないシステム項目の詳細については、HP ソフトウェアのセルフ・ ソルブ技術情報の記事 KM206085 (http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/document/KM206085)を参照してください。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ - リンクされたプロジェクトの処理:テンプレート・プロジェクトにリンクされ ているプロジェクトを使用する場合、テンプレート・プロジェクトで定義されたリスト、項目、サブ項目は 削除できません。

ALM のエディション: クロス・プロジェクトのカスタマイズは, Quality Center Enterprise Edition で は利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については,『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

リストを削除するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ]ウィンドウの左側の表示枠で, [プロジェクト リスト]をクリックします。[プ ロジェクト リスト]ページが開きます。
- 2. ユーザ定義リストの名前を選択します。
- 3. [リストの削除]ボタンをクリックします。
- 4. [はい]ボタンをクリックして,確定します。
- 5. [保存]をクリックして, [プロジェクト リスト]ページの変更を保存します。

項目またはサブ項目を削除するには、次の手順を実行します。

1. [プロジェクト カスタマイズ]ウィンドウの左側の表示枠で, [プロジェクト リスト]をクリックします。[プ ロジェクト リスト]ページが開きます。

- 2. 左側の表示枠で、リスト名を選択します。
- 3. 右側の表示枠で、リスト項目を選択します。
- 4. [項目の削除]ボタンをクリックします。
- 5. [はい]ボタンをクリックして,確定します。
- 6. [保存]をクリックして, [プロジェクト リスト]ページの変更を保存します。
第18章:自動メールの設定

HP Application Lifecycle Management(ALM) プロジェクト管理者として, 担当者に不具合の修復 活動を通知できます。メール設定を定義することにより, 各受信者に不具合メッセージを送信する 条件を決定します。

本章の内容

自動メールの設定について	
自動メールのフィールドと条件の指定	
不具合メールの件名のカスタマイズ	

自動メールの設定について

ALM では,指定された不具合フィールドに変更が生じるたびに,電子メールを通じてユーザに自動的に通知できます。ALM のメールの設定の手順は次のとおりです。

- [プロジェクト カスタマイズ]ウィンドウの[自動メール]をクリックし,不具合フィールドを定義してユー ザと条件を指定します。「自動メールのフィールドと条件の指定」(326ページ)を参照してください。
- 「サイト管理」の[サイトのプロジェクト]タブで[電子メールを自動送信]チェック・ボックスを選択して、 プロジェクトのメール設定を有効にします。メール設定を使用するには、このチェック・ボックスを 選択する必要があります。詳細については、「プロジェクトの詳細の更新」(76ページ)を参照してく ださい。
- 「サイト管理」の「サイト設定」タブで、すべてのプロジェクトの不具合電子メールを送信する時間 間隔を定義する「MAIL_INTERVAL」(193ページ)パラメータを編集できます。メールの形式と文 字セット、メールに添付ファイルや履歴を含めるかどうかなどを定義するパラメータも設定できます。 詳細については、「ATTACH_MAX_SIZE」(190ページ)、「AUTO_MAIL_WITH_ ATTACHMENT」(190ページ)、「AUTO_MAIL_WITH_HISTORY」(190ページ)を参照してください。
- すべてのプロジェクト,または特定プロジェクトに関する不具合メールの件名行をカスタマイズできます。詳細については、「不具合メールの件名のカスタマイズ」(328ページ)を参照してください。
- 「サイト管理」の[サイトのユーザ]タブで,不具合メッセージを受信すべきユーザの電子メールが指定されていることを確認します。詳細については,「ユーザの詳細の更新」(157ページ)を参照して ください。

自動メールのフィールドと条件の指定

フィールドをメール・フィールドとして指定すると、そのフィールドに何らかの変更があれば、ALM は次の時間間隔後に電子メール・メッセージを送信します。たとえば、[ステータス]をメール・フィールドとして指定して、特定の不具合に関して[ステータス]フィールドを更新する場合を考えます。次の時間間隔後に、更新されたステータス情報を含む不具合の詳細が、指定されたユーザに送信されます。

メールの送信条件により, さまざまなユーザが不具合メッセージを受信するタイミングを決定します。 各ユーザについて, 異なるメールの送信条件を定義できます。たとえば, 緊急の優先度が割り当て られた不具合に関するメッセージのみをユーザが受信するように指定できます。

自動メール・フィールドと条件を指定するには、次の手順を実行します。

1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [自動メール]をクリックします。[自動 メール]ページが開きます。

自動メール		
📙 保存 划	ヤ−変更 🔹	
次の項目に関す	る変更についてメー	ルを送信
利用できる不具る	合フィールド	選択した不具合フィールド
実際の修正時間 不具合 ID 終了日 終了日 検出サイクル 検出サイクル 検出リース 検出日 検出されたバージ 宛先	り ジョン	▲
□ 選択した	ユーザのみ表示	
Selected	User	Condition
	🛔 alm_admin	〈フィルタ定義なし〉
	🛔 alm_admin2	〈フィルタ定義なし〉
	🛔 alm_admin3	〈フィルタ定義なし〉
	🛔 james_alm	〈フィルタ定義なし〉
	🛔 mary_alm	〈フィルタ定義なし〉
	🍰 peter_alm	〈フィルタ定義なし〉
	🛔 test	〈フィルタ定義なし〉
	■ 検出者	〈フィルタ定義なし〉
	■ 責任者	〈フィルタ定義なし〉

[利用できる不具合フィールド]には、不具合グリッドに表示されるフィールド名が一覧されます。 [選択した不具合フィールド]には、メール・フィールドとして現在割り当てられているフィールドの 名前が一覧されます。

- 1つまたは複数のフィールドを選択して矢印ボタン([>]と[<])をクリックすると、フィールドを一方のリストから他方へと移動できます。二重矢印ボタン([>>]または[<<])をクリックすると、リスト間ですべてのフィールドを一度に移動できます。
- 3. 電子メールを受信すべきユーザを選択するには、ウィンドウ下半分の[**宛先**]領域にある、各 ユーザ名の隣のチェックボックスを選択します。

宛先 ——				
□ 選択したユーザのみ表示				
選択済み	ユーザ	条件		
v	💼 almadmin	<フィルタ定義なし>	7 7	
✓	📩 depro	<フィルタ定義なし>	7 7	
	🔳 検出者	<フィルタ定義なし>		
	🔳 責任者	<フィルタ定義なし>		

ヒント:該当する選択したユーザのみを表示するには、[選択したユーザのみ表示]チェック ボックスを選択します。

4. [フィルタ]ボタンをクリックして,選択したユーザがメールを受信する条件のフィルタを定義します。

複数のフィルタを定義すると、選択したユーザは、すべての条件に一致する場合にのみメールを 受信します。フィルタ処理の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザー ズ・ガイド』を参照してください。

5. [保存]をクリックして変更内容を保存します。

不具合メールの件名のカスタマイズ

すべてのプロジェクト, または特定プロジェクトに関する, ユーザに自動的に送信される不具合メール の件名行をカスタマイズできます。たとえば, 次のような件名行を定義できます。

不具合 # 4321 が作成, または更新されました - 印刷ダイアログのボタンが揃っていません

行には ALM フィールドの値を含められます。送信する不具合のフィールド値を含めるには、フィールド 名の前に疑問符記号(?)を付記します。フィールド名は大文字である必要があります。次に例を示 します。

不具合 # ?BG_BUG_ID が作成, または更新されました - ?BG_SUMMARY

すべてのプロジェクトの件名行をカスタマイズするには、 [サイト設定]タブに「AUTO_MAIL_ SUBJECT_FORMAT」(197ページ)パラメータを追加します。

特定プロジェクトに関する不具合メールの件名をカスタマイズするには、次の手順を実行します。

- 1. 「サイト管理」の[サイトのプロジェクト]タブをクリックします。
- 2. プロジェクトのリストで, カスタマイズする電子メールの件名行のプロジェクトをダブルクリックします。
- 3. DATACONST テーブルを選択します。
- 4. SQL 表示枠に、次の値を持つ行をテーブルに挿入する SQL INSERT ステートメントを入力します。
 - DC_CONST_NAME カラムに、パラメータ名 AUTO_MAIL_SUBJECT_FORMAT を挿入します。
 - DC_VALUE カラムに,件名行に入れる文字列とフィールド名を挿入します。

SQLの表示枠に次のSQL文を入力します。

insert into dataconst values ('AUTO_MAIL_SUBJECT_FORMAT', 'DEFAULT.TESTPROJ - 不具合 # ?BG_BUG_ID が作成,または更新されました -?BG_SUMMARY')

定義する件名行はプロジェクト固有であるため、この行にプロジェクト名を含められます。

プロジェクト・テーブルの変更の詳細については、「プロジェクトのテーブルへの問い合わせ」(96 ページ)を参照してください。

5. [SQL の実行]ボタンをクリックします。行が[DATACONST]テーブルに追加され, 電子メールの 件名が設定されます。 管理者ガイド 第18章:自動メールの設定

第19章:リスクベース品質管理のカスタマイズ

この章では、リスクベース品質管理で使用する、条件と定数値のカスタマイズ方法について説明します。

本章の内容

リスクベース品質管理のカスタマイズについて	.332
リスクベース品 質 管 理 の条 件 のカスタマイズ	.332
リスク計 算 のカスタマイズ	. 337
リスクベース品 質 管 理 定 数 のカスタマイズ	. 337

リスクベース品質管理のカスタマイズについて

リスクベース品質管理を使用して、要件モジュールで各要件をテストするためのテスト・レベルを決定 します。ALM はその後、要件の子の評価要件のテスト・レベルを基に、アナリシス要件の合計予測 テスト時間を計算します。この結果とアナリシス要件のテストに利用できるリソースとを比較し、必要 であれば要件と要件の子にテスト・レベルを調整します。このようにすることで、要件のテスト・ストラテ ジを計画できます。リスク・ベース品質管理の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

テスト・レベルは、要件のリスクと機能の複雑性によって決定します。リスクは、ビジネス上の危険性と 失敗の確率から構成されます。各因子に関連する一連の条件に値を割り当てることで、これらの因 子の値を決定します。各条件には、多数の取り得る値があります。これらの条件とその値、さらに ALM がそれらを使用してビジネス上の危険性、失敗の確率、機能の複雑性を決定する方法をカス タマイズできます。詳細については、「リスクベース品質管理の条件のカスタマイズ」(332ページ)を参 照してください。

ビジネス上の危険性と失敗の確率からのリスクの計算方法をカスタマイズできます。詳細について は、「リスク計算のカスタマイズ」(337ページ)を参照してください。

各テスト・レベルと機能の複雑性に標準設定で関連付けられるテスト時間もカスタマイズできます。さらに、要件のリスクと機能の複雑性を基にして、要件をテストするときのテスト・レベルを ALM がどのように決定する方法をカスタマイズできます。詳細については、「リスクベース品質管理定数のカスタマイズ」(337ページ)を参照してください。

さらに, 各要件タイプについて, どの要件タイプでリスク評価, リスク・アナリシスを有効にするか, また はリスクベース品質管理を無効にするかをカスタマイズできます。詳細については, 「要件タイプのカス タマイズ」(317ページ)を参照してください。

リスクベース品質管理の条件のカスタマイズ

要件のリスクと機能の複雑性を決定するのに使用する条件,各条件の取り得る値,各値に割り当 てられる加重をカスタマイズできます。これらの加重の合計が、リスクと機能の複雑性カテゴリをどのように決定するのかを定義できます。

注: 要件のリスク,機能の複雑性をすでに計算している場合は,これらの条件を変更しても, 要件のリスクや機能の複雑性カテゴリは自動的には再計算されません。再計算するには,要 件を再評価して,少なくとも1つの条件値を変更する必要があります。

本項の内容

条件 と値のカスタマイズ	
加重境界のカスタマイズ	334

条件と値のカスタマイズ

ALM が各要件のリスクと機能の複雑性カテゴリを決定するのに使用する,条件,条件値,加重をカスタマイズできます。リスクは,ビジネス上の危険性と失敗の確率から構成されます。

ALM は, ユーザが新規プロジェクトを作成すると, 標準設定の条件のセットを用意します。これらの 条件を使用しない場合は, 削除できます。

条件と値をカスタマイズするには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左側の表示枠で, [リスクベース品質管理]をクリックします。[リスクベース品質管理]ページが開きます。
- 2. 次のいずれかのタブを選択します。
 - ビジネス上の危険性を決定する条件をカスタマイズするには、[ビジネス上の危険性]タブをク リックします。
 - 失敗の確率を決定する条件をカスタマイズするには、[失敗の確率]タブをクリックします。
 - 機能の複雑性を決定する条件をカスタマイズするには、 [機能の複雑性]タブをクリックします。

選択したタブに、関連する条件が表示されます。

リスク ベース品質管理

ビジネス上の危険性 失敗の確率 リスク	>計算 │機能の複	雑性 リスク定数	
- 新規 × 削除 - 下へ移動 ◆ 上へ利	多動		
条件 ブロセスのタイブ 失敗の影響 使用頻度 影響を受けるユーザの数/重要性	<u>値</u> 計算/検証 データ変更 表示	1000 ♥ 30 18 8	
条件の詳細: "プロセスのタイプ" 要件によって表されるプロセスのタイプです。		_	
この条件は次の値が使用可能です: 計算/検証 - 要件によって表される機能は、重 「	要な計算または検護		
合計加重に基づいてビジネス上の危険性の グレード: C - 推奨 範囲: 82 <= TW < 52)値を計算 <mark>B - 重要</mark> 52 <= TW < 76	A - 致命的 76 <= T₩ < 120	

- 3. 新しい条件を追加するには、[条件]リストを選択して、[新規]ボタンをクリックします。[条件]リ ストの最後に新しい行が追加されます。新しい行に条件の名前を入力します。
- 4. 条件の説明を追加するには、「条件]リストを選択して、「条件の詳細]ボックスに説明を入力します。この説明は、ユーザがビジネス上の危険性、失敗の確率、機能の複雑性を評価するときに、要件モジュールの[リスク]タブに表示されます。取り得る値の説明などの各条件の完全な説明を入力することで、ユーザは要件の各条件に割り当てる値を決定しやすくなります。

5. 条件の値を追加するには、 [条件]リストを選択して、 [値]リストを選択します。 [新規]ボタン をクリックします。 [値]リストの最後に新しい行が追加されます。 新しい行に値の名前を入力し ます。

注:条件の各値は一意である必要があります。

6. 条件の値に重みを割り当てるには、[条件]リストから条件を選択して、[値]リストから値を選択します。その値の[加重]列に、値に割り当てる重みを入力します。

ALM が要件のビジネス上の危険性,失敗の確率,機能の複雑性を計算するとき,各条件に割り当てられた値が確認され,各値に対応する加重の合計が計算されます。この合計により, ビジネス上の危険性,失敗の確率,機能の複雑性が決定します。詳細については,「加重境 界のカスタマイズ」(334ページ)を参照してください。

- 7. 条件, または条件の値を削除できます。
 - 条件を削除するには、 [条件]リストから条件を選択して、 [削除]ボタンをクリックします。条件が削除されます。
 - 条件の値を削除するには、[条件]リストから条件を選択して、[値]リストから値を選択します。[削除]ボタンをクリックします。値が削除されます。

注: ビジネス上の危険性, 失敗の確率, 機能の複雑性には, それぞれ少なくとも1つの定義された条件が関連付けられている必要があります。さらに, 各条件には少なくとも1つの取り得る値が必要です。

- 8. [条件]リストでの条件の表示順を変更するには、条件を選択して[上に移動]、[下に移動] ボタンをクリックします。条件の値は、加重によって自動的に順位付けられます。
- 9. [保存]をクリックして, [リスクベース品質管理]ページで行った変更を保存します。

加重境界のカスタマイズ

ALM がリスクベース品質管理条件に割り当てられた値を使用して,要件のビジネス上の危険性, 失敗の確率,機能の複雑性を決定する方法をカスタマイズできます。

ビジネス上の危険性の加重境界のカスタマイズ

各要件について、ALM は各ビジネス上の危険性の条件に割り当てられた値の合計の加重(TW)を 計算します。次に ALM はこの合計を使用して、要件の重要度を C- 推奨, B - 重要, A - 致命的 のいずれかに分類します。ALM は、自動的に取り得る合計加重の最大値と最小値を自動的に計 算し、これらの値から致命的カテゴリの上限、推奨カテゴリの下限を定義します。推奨と重要カテゴリ 間、重要と致命的カテゴリ間の境界を定義します。

例として、ビジネス上の危険性の2つの条件を考えます。それぞれの条件には、加重が20,60,100 である3つの取り得る値があるとします。これから、最小の合計加重は40(両方の条件が加重20の 値に割り当てられている場合)、最大の合計加重は200(両方の条件が加重100の値に割り当 てられている場合)です。ALMは自動的にこれらの合計値を計算し、これらの値を基にカテゴリの下 限と上限を決定します。[推奨]ボックスに「100」, [致命的]ボックスに「160」と入力して、カテゴリ間の境界を決定します。

合計加重に基づいてビジネス上の危険性の値を計算 ――――――――――――――――――――――――――――――――――――					
グレード:	C-推奨	B - 重要	A - 致命的		
範囲:	40 <= TW < 100	100 <= TW < 160	160 <= TW < 200		

この例では, ALM は次のようにして要件のビジネス上の危険性を決定します。

- 要件の各条件の加重の合計が100以下であれば,要件は推奨ビジネス上の危険性を取ります。これは,条件が加重20と60の値であり,合計の加重が80となるような場合に起こります。
- 合計が100より大きく、160未満であれば、要件は重要ビジネス上の危険性を取ります。これ は、条件が加重 60と60の値であり、合計の加重が120となるような場合に起こります。
- 合計が160以上であれば、要件は致命的を取ります。これは、条件が加重100と60の値であり、合計の加重が160となるような場合に起こります。

ビジネス上の危険性の加重境界をカスタマイズするには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左側の表示枠で, [リスク ベース品質管理]をクリックします。[リスク ベース品質管理] ページが開きます。
- 2. [ビジネス上の危険性]タブをクリックします。[ビジネス上の危険性]タブには,ビジネス上の危険 性を決定するのに使用する条件が表示されます。
- 3. [合計加重に基づいてビジネス上の危険性の値を計算]で、ビジネス上の危険性の値の間の 境界を定義します。これらの境界を定義するには、[推奨]と[致命的]ボックスに該当する値を 入力します。
- 4. [保存]をクリックして, [リスクベース品質管理]ページで行った変更を保存します。

失敗の確率の加重境界のカスタマイズ

各要件について、ALM は各失敗の確率条件に割り当てられた値の合計の加重(TW)を計算しま す。次に ALM はこの合計を使用して、要件の確率を3-低い、2-中、1-高いのいずれかに分類し ます。ALM は、自動的に取り得る合計加重の最大値と最小値を自動的に計算し、これらの値から 高いカテゴリの上限、低いカテゴリの下限を定義します。低いと中カテゴリ間、中と高いカテゴリ間の 境界を定義します。

例として、失敗の確率の2つの条件を考えます。それぞれの条件には、加重が20,60,100である 3つの取り得る値があるとします。これから、最小の合計加重は40(両方の条件が加重20の値に 割り当てられている場合)、最大の合計加重は200(両方の条件が加重100の値に割り当てられ ている場合)です。ALMは自動的にこれらの合計値を計算し、これらの値を基にカテゴリの下限と上 限を決定します。[低い]ボックスに「100」、[高い]ボックスに「160」と入力して、カテゴリ間の境界を決 定します。

合計加重に基	いて失敗の確率の値を	計算 ————	
グレード:	3 - 低い	2-中	1 - 高い
範囲:	40 <= TW < 100	100 <= TW < 160	160 <= TW < 200

この例では、ALM は次のようにして要件の失敗の確率を決定します。

- 要件の各条件の加重の合計が100以下であれば,要件は低い失敗の確率を取ります。これ は,条件が加重20と60の値であり,合計の加重が80となるような場合に起こります。
- 合計が100より大きく、160未満であれば、要件は中の失敗の確率を取ります。これは、条件が加重60と60の値であり、合計の加重が120となるような場合に起こります。
- 合計が160以上であれば,要件は高い失敗の確率を取ります。これは,条件が加重100と60 の値であり,合計の加重が160となるような場合に起こります。

失敗の確率の加重境界をカスタマイズするには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [リスク ベース品 質 管 理] をクリックしま す。[リスク ベース品 質 管 理] ページが開きます。
- 2. [失敗の確率]タブをクリックします。[失敗の確率]タブには、失敗の確率を決定するのに使用する条件が表示されます。
- 3. [合計加重に基づいて失敗の確率の値を計算]で、失敗の確率値の間の境界を定義します。これらの境界を定義するには、[低い]と[高い]ボックスに該当する値を入力します。
- 4. [保存]をクリックして, [リスクベース品質管理]ページで行った変更を保存します。

機能の複雑性の加重境界のカスタマイズ

各要件について、ALM は各機能の複雑性条件に割り当てられた値の合計の加重(TW)を計算し ます。次に ALM はこの合計を使用して、要件の機能の複雑性を 3- 低い、2 - 中、1 - 高いのいず れかに分類します。ALM は、自動的に取り得る合計加重の最大値と最小値を自動的に計算し、 これらの値から高いカテゴリの上限、低いカテゴリの下限を定義します。低いと中カテゴリ間、中と高い カテゴリ間の境界を定義します。

例として,機能の複雑性の2つの条件を考えます。それぞれの条件には,加重が20,60,100である3つの取り得る値があるとします。これから,最小の合計加重は40(両方の条件が加重20の値に割り当てられている場合),最大の合計加重は200(両方の条件が加重100の値に割り当てられている場合)です。ALMは自動的にこれらの合計値を計算し,これらの値を基にカテゴリの下限と上限を決定します。[低い]ボックスに「100」、[高い]ボックスに「160」と入力して、カテゴリ間の境界を決定します。

合計加重に	基づいた機能複雑性の計算	į ———	
グレード:	3 - 低い	2-中	1 - 高い
範囲:	40 <= TW < 100	100 <= TW < 160	160 <= TW < 200

この例では、ALM は次のようにして要件の機能の複雑性を決定します。

- 要件の各条件の加重の合計が100以下であれば、要件は低い機能の複雑性を取ります。これは、条件が加重20と60の値であり、合計の加重が80となるような場合に起こります。
- 合計が100より大きく、160未満であれば、要件は中の機能の複雑性を取ります。これは、条件が加重60と60の値であり、合計の加重が120となるような場合に起こります。

• 合計が160以上であれば,要件は高い機能の複雑性を取ります。これは,条件が加重100と 60の値であり,合計の加重が160となるような場合に起こります。

機能の複雑性の加重境界をカスタマイズするには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左側の表示枠で, [リスクベース品質管理]をクリックします。[リスクベース品質管理]ページが開きます。
- 2. [機能の複雑性]タブをクリックします。[機能の複雑性]タブには、機能の複雑性を決定するの に使用する条件のリストが表示されます。
- 3. [合計加重に基づいた機能複雑性の計算]で、機能の複雑性値の間の境界を定義します。 これらの境界を定義するには、[低い]と[高い]ボックスに該当する値を入力します。
- 4. [保存]をクリックして, [リスクベース品質管理]ページで行った変更を保存します。

リスク計算のカスタマイズ

ALM では,評価要件のリスク値を計算する方法を定義できます。

リスク計算をカスタマイズするには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [リスク ベース品 質 管 理]をクリックしま す。[リスク ベース品 質 管 理] ページが開きます。
- 2. [リスク計算]タブをクリックします。

リスク計算ポリシー ――――

-						
		失敗の確率				
ビジネス上の危険性	1 - 高い	2 - 中	3 - 低い			
A - 致命的	A - 高い 🛛 🔻	A - 高い 🔹	B - 普通 🛛 💌			
B - 重要	A - 高い 🛛 🔻	B - 普通 🛛 💌	C-低い 💌			
C - 推奨	B - 普通 🛛 💌	0 - 低い 🛛 💌	C-低い 💌			

3. [**リスク計算ポリシー**]グリッボで要件のテストに適用するリスク・ポリシーを定義できます。

ビジネスの重要性と失敗の確率を基にしたリスク計算を定義するには、特定のビジネスの重要性と失敗の確率の値に対応するグリッドのセルの隣にある矢印をクリックします。値を選択します。利用できる値は、A - 高い、B - 普通、C - 低いです。

リスクベース品質管理定数のカスタマイズ

各テスト・レベルで,機能の複雑性のそれぞれの値の要件をテストするのに必要となる,標準設定の 予測テスト時間を定義できます。各リスクと機能の複雑性カテゴリで使用する標準設定のテスト・レ ベルも定義できます。ユーザが要件モジュールで要件に別の値を入力しなければ,ALMはリスク・ア ナリシス中に要件の予測テスト時間を計算するときに,これらの標準設定値を使用します。

注:これらの条件を変更しても、既存のリスク・アナリシスの結果に自動的には反映されません。

リスク・アナリシスの結果を更新するには、アナリシスを再実行する必要があります。

リスクベース品質管理定数をカスタマイズするには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左側の表示枠で, [リスク ベース品質管理]をクリックします。[リスク ベース品質管理]ページが開きます。
- 2. [**リスク定 数**]タブをクリックします。[リスク]タブに,要件のテスト時間とテスト・レベルを計算するときに使用される標準設定の定数が表示されます。

ごジネス上の危険性 タ	失敗の確率 │ リスク	7計算 機能	もの複雑	1世 リス	ク定数		
「スト効果の計測に使用す	する単位: 時間	Ŧ					
業設定のテスト時間と	ニテスト レベル ー						
機能の複雑性ごとのテス 間(完全):	スト時						
1 - 高い 18	時間						
2 - 中 15			計算さ	れたテスト	時間(時間)	単位):	
· · ·						複雜性	
3 - 低い 12	時間		テス	トレベル	1 - 高い	2 - 中	3 - 低い
			完全	(100%)	18	15	12
テスト レベル (元全 =	100%, 72() = 0%):		部分	(67%)	12	10	8
部分 67	X		基本	(33%)	6	5	4
基本 3/	1 *		なし	(0%)	0	0	0
	* *						
準設定のテスト ポリ	シー(時間)						
		複雜性					
リスク	1 - 高い	2 - 中		3 - 低い			
A - 高い	完全(18) 💌	完全(15)	▼ 完	全 (12)	•		
B - 普通	部分(12) 💌	部分(10)	▼ 部	纷(8)	•		
C- 低い	基本(6) 🔻	基本 (5)	▼ 差	本(4)	•		

3. [テスト効果の計測に使用する単位]ボックスで,テスト時間を測定するときにALM が表示する 測定単位を選択します。利用できる単位は,時間,日,週,月です。

注: プロジェクトの測定の単位を変更しても,テスト時間の値は自動的には更新されません。たとえば,要件のテスト時間が48時間である場合,測定の単位を時間から日に変更しても,要件のテスト時間は48日であり,2日にはなりません。

- 4. [機能の複雑性ごとのテスト時間(完全)]の下で、機能の複雑性のそれぞれの値に対応する 要件を完全にテストするのに必要な予測テスト時間を、その機能の複雑性の値と一緒に入力 します。これらの変更が反映され、[計算されたテスト時間]グリッドが更新されます。
- 5. [**テスト レベル**]の下にある[**部分**]ボックスおよび[**基本**]ボックスに,要件の部分テストおよび基本テストに必要な標準設定のテスト時間を入力します。この値は,完全テストに必要になる時間のパーセントで表す必要があります。これらの変更が反映され,[計算されたテスト時間]グリッドが更新されます。
- 6. [標準設定のテスト ポリシー] グリッド で要件のテスト に適用する標準設定のテスト・ポリシーを定義できます。

標準設定のテスト・レベルを定義するには、特定のリスクと機能の複雑性値に対応するグリッド 内の、セルの隣にある矢印をクリックします。利用可能なテスト・レベルの中からテスト・レベルを 選択します。利用可能なテスト・レベルは、[完全]、[部分]、[基本]、[なし]です。各テスト・ レベルの横に、そのレベルで要件をテストするのに必要な予測時間(定義したテスト時間とテス ト・レベルに基づいたもの)が表示されます。

7. [保存]をクリックして, [リスクベース品質管理]ページで行った変更を保存します。

管理者ガイド 第19章:リスクベース品質管理のカスタマイズ

第20章:警告ルールの有効化

HP Application Lifecycle Management(ALM) プロジェクト管理者として、プロジェクトの警告ルールを 有効にできます。これにより、アプリケーション管理プロセスに影響を与える可能性のある変更がプロ ジェクトに対して加えられた場合に、そのことを知らせる警告を作成して関係者に電子メールで送信 するように、ALMに指示します。

本章の内容

警告 ルールの有効化について	
警告 ルールの設定	

警告ルールの有効化について

アプリケーション管理プロセスの実行と並行して,要件やテスト,不具合に関する変更を追跡できます。エンティティに変更が加えられるときに,関連するエンティティの担当者に通知するように ALM に指示できます。

有効にできる警告ルールは、ALM で作成できる次の関連を基にします。

- テスト計画ツリー内のテストと要件を関連付けることができます。この関連付けは、テスト計画モジュールで要件カバレッジを作成するか、または要件モジュールでテスト・カバレッジを作成することによって行います。
- テストと不具合を関連付けることができます。この関連付けは、手動テスト実行中に不具合を追加することによって行います。
- 要件モジュールで,要件間のトレーサビリティ・リンクを作成できます。

プロジェクト内に関連付けを作成すると、関連付けを使用して変更を追跡できます。 プロジェクト内 のエンティティに変更が加えられると、ALM はその変更の影響を受ける可能性のある、関連付けられ ているエンティティに関して警告を発します。

バージョン管理: ALM は,新しいバージョンがチェックインされたときにのみ関連エンティティに関する警告を発します。警告は,バージョン・ステータスがチェックインに変化したことを示します。次に,新しいバージョンを以前のバージョンと比較できます。バージョン管理の詳細については,『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

通知は2つのステップから構成されます。ALMは関連エンティティにフラグを設定します。これはすべてのユーザが確認できます。次に、エンティティを担当するユーザに電子メールを送信します。

<i>السال</i>	行われる変更	フラグの立 てられ たエンティティ	通知されるユーザ
1	要件に何らかの変更があります([直 接カバレッジステータス]フィールドの 変更,リスク・ベース品質管理の フィールドの変更を除く)。	要件をカバーする テスト。	テスト設計者。テ スト設計者のみ が警告を削除で きます。
2	不具合のステータスが「修正済み」に 変更されます。	不具合に関連す るテスト・インスタ ンス。	テスト・インスタン スのテスト担当 者。
3	テスト実行ステータスが「成功」に変 更されます。	テスト・インスタン スにリンクされてい る不具合。	不具合に割り当 てられているユー ザ。
4	要件が削除されたか,何らかの変更 があります([直接カバレッジステータ ス]フィールドの変更,リスク・ベース品 質管理のフィールドの変更を除く)。	要件の子要件お よびトレース終了 要件。	要件の作成者。

次の4つの警告ルールを有効にできます。

警告の詳細については、 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

警告ルールの設定

4 つの警告 ルールを有効にできます。各 ルールについて, 関連するエンティティについて警告できます。 警告は, すべてのユーザが見ることができます。エンティティを担当するユーザに電子メール通知を送 信することもできます。

警告ルールを設定するには、次の手順を実行します。

1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [**警告ルール**]をクリックします。[警告 ルール]ページが開きます。

更 🔽						
アクライブ化する警告ルールを選択します。各ルールには、関連付けられたエンティティへの警告を選択できます。警告はすべてのユーザに表示されます。エンティティ を担当するユーザへ電子メールで通知を送信することも選択できます。						
関連付けられたエ… 間	トメールを送信					
ま合、関連付けのあるテストに警告します。	テスト設計者					
"修正済み"に変更された場合、関連付けのあるテストインスタンスに警告します。	テスト責任者					
た場合(ステータスが ″ 成功 ″ に変更)、リンクのある不具合に警告します。	責任者					
総が行われた場合、追跡する要件および子の要件に警告します。	作成者					
- 小と選択(とする)を用いールによ、開連り(アライルに上)ティティスの習音を選択(とさする) 警告は タス(の) エール・3 - 小と選択(とする)を用いていた。 - 小に選知を逆信するとと認訳できます。 - 一 - 本場合(ステータスが"成功"に変更)、リンクのある不具合に警告します。 	TC41は9。Lン Fメールを送信 テスト設計者 テスト責任者 責任者 作成者					

- 2. ルールを有効にするには、 [関連付けられたエンティティの警告]を選択します。これで、 関連エン ティティが変更されたときに、 エンティティにフラグを設定するように ALM に指示します。
- 3. 関連エンティティが変更されたときに、指定したユーザに電子メール通知を送信するように ALM に指示するには、[電子メールを送信]を選択します。
- 4. [保存]をクリックして変更内容を保存します。

管理者ガイド 第20章:警告ルールの有効化

第21章: クロス・プロジェクト・カスタマイズ

HP Application Lifecycle Management(ALM) テンプレート管理者として,クロス・プロジェクト・カスタマ イズを使用して,テンプレート・プロジェクトから1つまたは複数のALM プロジェクトにカスタマイズを適 用できます。クロス・プロジェクトのカスタマイズにより,組織内のプロジェクト全体に渡ってポリシーおよ び手続きを標準化することができるようになります。

ALM のエディション: クロス・プロジェクト のカスタマイズは、Quality Center Enterprise Edition では 利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

本項の内容

クロス・プロジェクト・カスタマイズについて	345
クロス・プロジェクト・カスタマイズ概要	346
リンクされたプロジェクトの更新	347
リンクされたプロジェクトの詳細の更新	348
クロス・プロジェクト・カスタマイズの検証	350
リンクされたプロジェクトへのテンプレートのカスタマイズの適用	351
クロス・プロジェクトのカスタマイズ・レポート	352
リンクされたテンプレートの詳細の更新	354

クロス・プロジェクト・カスタマイズについて

クロス・プロジェクトのカスタマイズにより、テンプレート・プロジェクトを使用することで、複数プロジェクト 用プロジェクト・カスタマイズの共通セットを定義して管理できます。

注: クロス・プロジェクト・カスタマイズは、Unicode テンプレート・プロジェクトとASCII プロジェクトの間には実装できません。また、テンプレート・プロジェクトを Unicode に変換する場合、リンクされている ASCII プロジェクトは、テンプレートからカスタマイズの変更を取得できません。

テンプレート管理者とは, テンプレート・プロジェクトのプロジェクト管理者アクセス許可が割り当てられたユーザのことです。テンプレート管理者として, 組織のニーズに合うようにテンプレート・プロジェクトをカスタマイズできます。

1 つまたは複数のALM プロジェクトにテンプレート・プロジェクトをリンクします。これにより、テンプレートのカスタマイズをリンクされたプロジェクトに適用できます。組織のニーズが時間とともに変化するのに伴い、テンプレート・プロジェクトのカスタマイズを更新し、リンクされたプロジェクトにテンプレートのカスタマイズを再適用することができます。

テンプレート・プロジェクトを使用して,別のプロジェクトやテンプレートを作成できます。 サイト管理者が テンプレート・プロジェクトを基にしてプロジェクトやテンプレートを作成すると,新しく作成されたプロ ジェクトやテンプレートにテンプレートのカスタマイズがコピーされます。

製品の機能紹介ムービー: ALMメイン・ウィンドウで[ヘルプ]>[ムービー]を選択すると、クロス・ プロジェクト・カスタマイズの操作方法を紹介したムービーを視聴できます。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ概要

クロス・プロジェクト・カスタマイズの実装は、次のステップから構成されます。



- テンプレート・プロジェクトの作成:サイト管理者は、サイト管理でテンプレート・プロジェクトを作成して、テンプレート管理者を割り当てます。詳細については、「テンプレート・プロジェクトの作成」(55ページ)を参照してください。
- プロジェクト ヘテンプレートをリンク: サイト管理者は、サイト管理でテンプレートにリンクするプロジェクトを選択します。詳細については、「プロジェクトへのテンプレートのリンク」(75ページ)を参照

してください。

- テンプレート・プロジェクトのカスタマイズ:テンプレート管理者として、組織のポリシー・ニーズに合う ようにテンプレート・プロジェクトをカスタマイズします。リンクされたプロジェクトに適用されるテンプ レートのカスタマイズには、ユーザ・グループとアクセス許可、モジュール・アクセス、プロジェクト・エン ティティ・プロジェクト要件タイプ・プロジェクト・リスト、ワークフローがあります。
- クロス・プロジェクトのカスタマイズの検証: リンクされたプロジェクトにテンプレートのカスタマイズを適用する前に、ALM がテンプレートからプロジェクトにカスタマイズを正常に適用できることを検証する必要があります。詳細については、「クロス・プロジェクト・カスタマイズの検証」(350ページ)を参照してください。
- リンクされたプロジェクトへカスタマイズを適用:テンプレートでカスタマイズを定義,更新したら,リンクされたプロジェクトにカスタマイズを適用します。詳細については、「リンクされたプロジェクトへのテンプレートのカスタマイズの適用」(351ページ)を参照してください。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ例

次の例は、クロス・プロジェクト・カスタマイズの使用方法を示します。

• 不具合に関する作業に関する基準を設定する:

QA マネージャは、テスト担当者が不具合を変更する方法を制限します。たとえば、テスト担当者が不具合のステータスを修正済みに変更できるようにしても、クローズ済みには変更できないようにします。こうすることで、QA マネージャは終了前に不具合を確認できます。テンプレート内にテスト管理者のカスタマイズしたユーザ・グループを作成して、そのグループの遷移ルールを設定できます。リンクされたプロジェクトにテンプレートのカスタマイズを適用すると、このグループにすべてのテスト担当者を割り当てられるようになります。

• マネージャによる首尾一貫したレポートを可能にする:

組織内のあらゆる部門のマネージャは、要件の不具合ステータス、優先度、カバレッジ・ステータスなどの測定方法の標準的なセットを基にレポートすることが求められます。テンプレート管理者として、プロジェクト・リストとフィールドをカスタマイズして、テンプレート内の必須フィールドを設定できます。リンクされたプロジェクトにテンプレートのカスタマイズを適用することで、 ー貫したレポートのためのフィールドと値の共通セットをユーザに提供できます。

• 組織の独立したセクター向けに一意なポリシーを作成する:

組織が新しい会社を取得した場合を考えます。この新しい会社には、組織で現在運用しているのとは異なる不具合の作業方法に関する標準ポリシーがあるとします。両方のセクターで現在のポリシーを維持するとします。組織の各セクター向けにテンプレートをカスタマイズし、それぞれをそのセクターの関連プロジェクトにリンクできます。

リンクされたプロジェクトの更新

[プロジェクト カスタマイズ]で, リンクされたプロジェクトに対するテンプレートのカスタマイズの更新を管理します。

本項の内容

リンクされたプロジェクトの詳細の更新	. 348
クロス・プロジェクト・カスタマイズの検証	350
リンクされたプロジェクトへのテンプレートのカスタマイズの適用	. 351

リンクされたプロジェクトの詳細の更新

[プロジェクト カスタマイズ]で, リンクされたプロジェクトの詳細を更新します。

リンクされたプロジェクトの詳細を更新するには、次の手順を実行します。

- 1. テンプレート・プロジェクトを使用して ALM にログインします。
- 2. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [**クロス プロジェクト カスタマイズ**]をク リックします。[クロス プロジェクト カスタマイズ] ページが開きます。

ሳባス ታባジェクト カスタマイズ					
R	保存 メジャ	ー変更 🔹	्ॐ検証	🏂 カスタマイズ	の適用 🖂 電子メールを送信 🗸 😂 更新 検索 💦 😽
ь	トメイン	ブロジェクト	更新済み	検証済み	DEFAULT¥test2
	DEFAULT	test2	×	~	- ブロジェクト ステータス
	NEW_DO…	NewProject	76	×	◎ 更新されていません
	DEFAULT	ALM_Demo	1	~	コメント: コメントを追加
					- ブロジェクト詳細
					ブロジェクト管理者:
					test
					-最後に適用された カスタマイズ
					- 最終検証日
					日付: 2010/09/07 15:52:58 検証レポート

 リンクされたプロジェクトのグリッドには、テンプレート・プロジェクトにリンクされているプロジェクトが 表示されます。リンクされたプロジェクトのグリッドには、各プロジェクトに関する次の情報が含まれ ます。

カラム	説明
Ł	プロジェクト管理者による, プロジェクトにテンプレートのカスタマイズの変更 を適用しないようにする要求を示します。
ドメイン	リンクされたプロジェクトのドメイン。
プロジェクト	リンクされたプロジェクトの名前。

カラム	説明		
更新済み	リンクされたプロジェクトが現在のテンプレートのカスタマイズ出更新された かどうかを示します。現在のステータスは,次のいずれかです。		
	■ [∞] 未更新 (標準設定)		
	■ 型 更新済み		
検証済み	テンプレートのカスタマイズが検証され、リンクされたプロジェクトに正常に 適用できるかどうかを示します。標準設定で、ステータスは 未検証 です。		
	現在のステータスは、次のいずれかです。		
	■ ×未検証(標準設定)		
	■ 🜱 検証済み(エラーあり)		
	■ ✓ 検証済み		

列の見出しをクリックすると、グリッド内のプロジェクトの並び順を変更できます。

- 4. リンクされたプロジェクトのグリッド内のデータを更新するには、 [更新]ボタン をクリックします。
- 5. リンクされたプロジェクトのページの右側に,選択したプロジェクトに関するその他の詳細情報が 表示されます。[プロジェクトステータス]の下には、プロジェクトのステータスが表示されます。プロ ジェクト管理者がリンクされたプロジェクトの[[カスタマイズの適用]の保留を要求する]オプション を選択した場合、[[カスタマイズの適用]の保留を要求する]が表示されます。テンプレート管理 者は、テンプレートのカスタマイズの更新からプロジェクトを除外できます。
- 6. [**コメント**]ボックスに、プロジェクト管理者が追加したコメントが表示されます。[**コメントを追加**] をクリックすると、プロジェクトにコメントを追加できます。プロジェクト管理者は、プロジェクトの詳細 を表示するときにコメントを表示して追加できます。
- 「プロジェクト詳細]の下には、プロジェクト管理者の名前が表示されます。[電子メールの送信]
 ボタン
 ボタン
 をクリックすると、プロジェクトやテンプレート管理者にメールを送信できます。
- 8. [最後に適用されたカスタマイズ]の下には、リンクされたプロジェクトにテンプレートのカスタマイズ が最後に適用された日付が表示されます。[カスタマイズ適用レポート]リンクをクリックすると、詳 細が表示されます。詳細については、「クロス・プロジェクトのカスタマイズ・レポート」(352ページ) を参照してください。
- 9. [最終検証日]の下には、検証が最後に行われた日付が表示されます。[検証レポート]リンク をクリックすると、最後の検証の詳細が表示されます。詳細については、「クロス・プロジェクトのカ スタマイズ・レポート」(352ページ)を参照してください。

クロス・プロジェクト・カスタマイズの検証

リンクされたプロジェクトにテンプレートのカスタマイズを適用する前に、カスタマイズを検証する必要があります。検証処理では、ALM がリンクされたプロジェクトにテンプレートのカスタマイズを正常に適用できることを確認します。ALM がリンクされたプロジェクトにテンプレートのカスタマイズを適用するには、検証を正常に完了する必要があります。

注:検証を正常に完了するため、リンクされたプロジェクトで適切な拡張機能を有効にする必要があります。テンプレート・プロジェクトに対して拡張機能が有効になっている場合は、テンプレートのリンク済みプロジェクトでも拡張機能が有効になっている必要があります。リンクされたプロジェクトで、別の拡張機能を有効にすることもできます。拡張機能の有効化の詳細については、「プロジェクトに対する拡張機能の有効化」(83ページ)を参照してください。

クロス・プロジェクトのカスタマイズを検証するには、次の手順を実行します。

1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [クロス プロジェクト カスタマイズ]をク リックします。[クロス プロジェクト カスタマイズ] ページが開きます。

クロ	クロス プロジェクト カスタマイズ						
B	🖺 保存 🗴ジャー変更 💽 🔿 検証. 🦾 カスタマイズの適用. 🔤 電子メールを送信 🔹 🜍 更新 検索 💦 🎽						
ゐ	ドメイン	ブロジェクト	更新済み	検証済み	DEFAULT¥test2		
	DEFAULT	test2	76	~	- プロジェクト ステータス		
	NEW_DO···	NewProject	76	×	∞ 更新されていません		
	DEFAULT	ALM_Demo	76	~	コメント: コメントを追加		
					- ブロジェクト 詳細		
					プロジェクト管理者:		
					test		
					-最後に適用されたカスタマイズ		
					日付: N/A カスタマイズ 適用レポート		
					D/th. 0010/00/07 155050 thETL +2, L		
					日刊: 2010/09/07 1552:58 <u>使自己255平</u>		

- グリッドからプロジェクトを選択するか、CTRL キーを押しながら複数のプロジェクトを選択します。 アクティブ化されているプロジェクトのみを表示するには、[アクティブなプロジェクトだけを表示]を 選択します。
- 3. [検証]をクリックします。[検証]ダイアログ・ボックスが開き,進行状況が表示されます。
- 4. 完了する前に検証を停止するには、 [停止]をクリックします。 ALM は現在検証中のプロジェクト を完了してから停止します。 残りのプロジェクトは検証されません。
- 5. [詳細]をクリックすると、検証中、または検証後に補足情報が表示されます。検証が完了した後、[レポート]リンクをクリックすると、プロジェクトの詳細な結果が表示されます。
- 6. 検証が完了したら、[**閉じる**]をクリックすると、[テンプレートの検証]ダイアログ・ボックスが閉じます。 リンクされたプロジェクトのグリッド内のプロジェクトの検証ステータスが更新されます。

7. [最終検証日]の下で[検証レポート]リンクをクリックすると、検証の詳細が表示されます。詳細 については、「クロス・プロジェクトのカスタマイズ・レポート」(352ページ)を参照してください。

リンクされたプロジェクト へのテンプレート のカスタマイズの適用

テンプレートにリンクされているプロジェクトに,テンプレートのカスタマイズを適用できます。適用できるカ スタマイズには,グループとアクセス許可,モジュール・アクセス,プロジェクト・エンティティ・プロジェクト要 件タイプ・プロジェクト・リスト,ワークフローがあります。テンプレートのカスタマイズを適用すると,リンクさ れたプロジェクトで適用されたカスタマイズは読み取り専用に設定され,編集できません。

注:

- テンプレートをベースにプロジェクトを新規作成し、それをテンプレートにリンクする場合、リンク されたプロジェクト内でテンプレート・カスタマイズを読み取り専用にするには、テンプレートのカ スタマイズを適用する必要があります。テンプレートをベースにプロジェクトを作成する方法につ いては、「プロジェクトの作成」(35ページ)を参照してください。
- レポート・テンプレートを標準設定として設定するオプションは、リンクされたプロジェクトには適用されないため、リンクされたプロジェクトでプロジェクト管理者が設定できます。

テンプレートのカスタマイズを適用する前に、カスタマイズを検証する必要があります。詳細については、「クロス・プロジェクト・カスタマイズの検証」(350ページ)を参照してください。 ALM がリンクされたプロジェクトにテンプレートのカスタマイズを適用するには、検証を正常に完了する必要があります。

リンクされたプロジェクトにテンプレートのカスタマイズを適用するには、次の手順を実行します。

1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [クロス プロジェクト カスタマイズ]をクリックします。[クロス プロジェクト カスタマイズ] ページが開きます。

クロス ブロジェクト カスタマイズ						
12	保存メジャ	-変更 🔹	्≯検証	🏂 カスタマイズの	の適用 🖂 電子メールを送信 ▼ 😂 更新 検索 🛛 🕺	
ゐ	ドメイン	ブロジェクト	更新済み	検証済み	DEFAULT¥test2	
	DEFAULT	test2	ø	~	-ブロジェクト ステータス ―――	
	NEW_DO···	NewProject	76	×	∞ 更新されていません	
	DEFAULT	ALM_Demo	1	~	コメント: コメントを追加	
					- ラロジェクト言語細	
					プロジェクト管理者:	
					test	
					-最後に適用されたカスタマイズ	
					日付: N/A カスタマイズ適用レポート	
					-最終検証日	
					日付: 2010/09/07 15:52:58 検証レポート	

 グリッドからプロジェクトを選択するか、CTRL キーを押しながら複数のプロジェクトを選択します。 アクティブ化されているプロジェクトのみを表示するには、[アクティブなプロジェクトだけを表示]を 選択します。 3. [カスタマイズの適用]をクリックします。選択したプロジェクトのいずれかのプロジェクト管理者が、 テンプレートのカスタマイズの変更を適用しないように要求している場合、警告が表示されます。 [OK]を押して、選択したすべてのプロジェクトにテンプレートのカスタマイズを適用します。

カスタマイズの適用の初期化						
以下のプロジェクトに、	以下のプロジェクトに、テンプレート NewTemplate のカスタマイズを適用します:					
20	ドメイン	プロジェクト	更新済み	検証済み		
	NEW_DOMAIN	NewProject	M	~		
完了時:						
☑ プロジェクト管理者 ヘメール通知を送信						
OK(<u>O)</u> キャンセル(<u>C)</u> ヘルプ(<u>H</u>)						

[カスタマイズの適用の初期化]ダイアログ・ボックスが開きます。

- 4. [プロジェクト管理者 ヘメール通知を送信]を選択すると、ALM は処理が完了した後にプロジェクト管理者に通知します。
- 5. [**OK**]をクリックします。[カスタマイズの適用]ダイアログ・ボックスが開き,進行状況が表示されます。
- 6. ALM がまだ更新していないプロジェクトの処理を取り消すには、 [停止]をクリックします。 ALM は 現在 のプロジェクト への更新を完了して、残りのプロジェクト への更新を取り消します。
- 7. プロセスが完了したら、[**閉じる**]をクリックすると、[カスタマイズの適用]ダイアログ・ボックスが閉じます。
- 8. [最後に適用されたカスタマイズ]の下で[カスタマイズ適用レポート]リンクをクリックすると、適用 されたテンプレートのカスタマイズの詳細が表示されます。詳細については、「クロス・プロジェクト のカスタマイズ・レポート」(352ページ)を参照してください。

クロス・プロジェクトのカスタマイズ・レポート

クロス・プロジェクトのカスタマイズ・レポートには、検証処理、リンクされたプロジェクトに適用したテンプレートのカスタマイズの詳細な結果が表示されます。検証の詳細については、「クロス・プロジェクト・カスタマイズの検証」(350ページ)を参照してください。テンプレートのカスタマイズの適用の詳細については、「リンクされたプロジェクトへのテンプレートのカスタマイズの適用」(351ページ)を参照してください。

クロス・プロジェクトのカスタマイズ・レポートには、2つのタイプがあります。

- 検証レポート:リンクされたプロジェクトの検証の結果を表示します。
- カスタマイズ適用レポート:リンクされたプロジェクトに適用したテンプレートのカスタマイズの結果を

表示します。

カスタマイズ適用レポートには、次のセクションがあります。

- レポートの詳細:レポートのタイプ, テンプレート, リンクされたプロジェクト, 検証されたりリンクされた プロジェクトに適用された変更の件数, 結果などの詳細情報が含まれます。
- カスタマイズ・カテゴリごとのレポート。検証されたりリンクされたプロジェクトに適用された変更すべてのリスト。このセクションには、カスタマイズ・カテゴリ(ユーザ・グループ、プロジェクト・エンティティ、プロジェクト・リスト、要件タイプ、ワークフロー・スクリプト)ごとの変更が一覧されます。

レポートの結果は、次のようにいくつかのカテゴリに分類されます。

結果カテゴリ	検証レポート	カスタマイズ適用レポート
正常	リンクされたプロジェクトに変更を正常に適 用できます。	リンクされたプロジェクトに変更 が正常に適用されました。
警告	リンクされたプロジェクトに変更を適用できま すが、データが失われる可能性があります。 次に例を示します。 • 文字列タイプ・フィールドの長さを短縮す	リンクされたプロジェクトに変更 が適用されましたが, データが 失われた可能性があります。
	る • ユーザ定義フィールドを削除する • フィールドを検索可能として定義するー 方,リンクされたプロジェクトで テキスト検 索 オプションが利用できない場合	
	 要件タイプのテスト・カバレッジを無効に する一方,そのタイプのテスト・カバレッジ 要件が存在する場合 	

結果カテゴリ	検証レポート	カスタマイズ適用レポート
失敗	リンクされたプロジェクトに変更を適用できま せん。 次に例を示します。	カスタマイズの適用処理でエ ラーが発生しました。リンクされ たプロジェクトに変更が正常に は適用されませんでした。
	 フィールド・タイプをメモ・タイプから数字, 文字列,日付タイプに変更しようとした。またはその逆 	
	 リンクされたプロジェクト内にすでに存在 するフィールド名を使用して、新しい フィールドに名前を付けようとした。また は既存フィールドの名前を変更しようと した。 	
	 このレポートは、標準設定のクエリ・サイズの上限を超えている。詳細については、「MAX_QUERY_LENGTH」(213ページ)を参照してください。 	

ヒント:

- クロス・プロジェクト・カスタマイズ・レポートに含まれる警告やエラーを簡単に見つけるには、 [検索]ボタンを押してブラウザの検索ツールを開き、「警告」や「エラー」の単語を検索します。
- 別のユーザにレポートをメールで送信するときに形式を維持するには,.mht ファイル拡張子を 付けてファイルを HTML アーカイブ Web ページとして保存します。
- リンクされたプロジェクト、またはテンプレート・プロジェクトにユーザ・グループの遷移ルールが設定されている場合、各ルールは<変更前ステータス>、<変更後ステータス>の形式で 遷移ルール列に一覧されます。たとえば、新規、修正中新規、却下修正中、修正済み修正中、却下は、ユーザ・グループが新規から修正中、または却下、修正中から修正済み、または却下にフィールド値を変更できることを示します。

リンクされたテンプレートの詳細の更新

テンプレート・プロジェクトにリンクされているプロジェクトを操作している場合,[リンクされたテンプレート]ページから,そのプロジェクトとテンプレート・プロジェクトに関する詳細を表示できます。プロジェクト に適用されたテンプレートのカスタマイズに関する詳細の表示,テンプレート管理者への電子メールの 送信,プロジェクト内のカスタマイズとテンプレート・プロジェクト内のカスタマイズ間の競合の確認,テン プレートのカスタマイズの更新をブロックするための要求を行えます。 リンクされたテンプレートの詳細を更新するには、次の手順で行います。

- 1. テンプレートにリンクされたプロジェクトを使用して, ALM にログインします。
- 2. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [クロス プロジェクト カスタマイズ]をク リックします。[クロス プロジェクト カスタマイズ] ページが開きます。

クロス ブロジェクト カスタマイズ	
 常保存メジャー変更 プロジェクトステータス 更新されていません 	🏹 検証 🛛 電子メールを送信 🚽 🥭 更新
□ [カスタマイズの適用] の保留 コメント:	と要求する コンパトを追加 コンパトを追加
- テンプレートの詳細	
テンプレート名:	DEFAULT¥NewTemplate
テンプレート管理者:	test
- -最後に適用された力スタマイズ	
日付: N/A	カスタマイズ適用レポート
最終検証日	
日付: 2010/09/07 15:47:55	<u>検証レポート</u>

- 3. [プロジェクト ステータス]では、次のステータス情報が表示されます。
 - 更新済み:テンプレート・プロジェクト内のカスタマイズがプロジェクトに適用されています。
 - **更新されていません**:テンプレート・プロジェクト内のカスタマイズに対して行った変更が、プロジェクトに適用されていません。
- 4. [カスタマイズの適用]の保留を要求する]を選択すると、テンプレートのカスタマイズの更新をブ ロックするように要求できます。要求はテンプレート・プロジェクトに表示され、テンプレート管理者 は、テンプレートのカスタマイズの更新からプロジェクトを除外できます。
- 5. [コメントを追加]をクリックすると、プロジェクトにコメントを追加できます。コメントは[コメント]ボックスに表示されます。[コメント]ボックスには、テンプレート管理者によるコメントも表示されます。テンプレート管理者は、テンプレート・プロジェクト内のリンクされたプロジェクトの詳細を確認するときにコメントを追加して表示できます。
- 6. [テンプレートの詳細]の下には、プロジェクトにリンクされたテンプレート・プロジェクトの名前、テンプレート管理者の名前が表示されます。プロジェクトやテンプレート管理者にメールを送信するには、[電子メールの送信]ボタン
- 7. [最後に適用されたカスタマイズ]の下には、プロジェクトにテンプレートのカスタマイズが最後に適用された日付が表示されます。[カスタマイズ適用レポート]リンクをクリックすると、詳細が表示されます。詳細については、「クロス・プロジェクトのカスタマイズ・レポート」(352ページ)を参照してく

ださい。

- 8. [最終検証日]の下には、プロジェクトのカスタマイズが最後に検証された日付が表示されます。 [検証レポート]リンクをクリックすると、詳細が表示されます。詳細については、「クロス・プロジェクトのカスタマイズ・レポート」(352ページ)を参照してください。
- 9. [検証]ボタンをクリックすると、プロジェクトのクロス・プロジェクトのカスタマイズを検証できます。たと えば、プロジェクトのカスタマイズを変更する場合、テンプレートの検証を実行して、プロジェクト内 のカスタマイズとテンプレート・プロジェクト内のカスタマイズ間の競合を確認できます。
- 10. [詳細]をクリックすると、検証中、または検証後に補足情報が表示されます。検証が完了した後、[レポート]リンクをクリックして、プロジェクトの詳細な結果を表示できます。
- 11. 検証が完了したら、[閉じる]をクリックすると、[検証]ダイアログ・ボックスが閉じます。

第22章: プロジェクト計画と追跡の KPI のカスタマイズ

この章では、プロジェクト計画と追跡(PPT)の KPI のカスタマイズ方法を説明します。

ALM のエディション: [プロジェクト カスタマイズ]の[プロジェクト計画と追跡]リンクは, ALM Edition でのみ利用できます。ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

本章の内容

PPT KPI のカスタマイズについて	.358
[プロジェクト計画と追跡]ページ	358
[プロジェクト計画と追跡] - [一般]タブ	.360
[遷移の設定]ダイアログ・ボックス	.362
[プロジェクト計画と追跡] - [KPI アナリシス]タブ	.363

PPT KPI のカスタマイズについて

PPT は、重要業績評価指数(KPI)を使用して、リリースのマイルストーンからデータを収集しま す。KPIとは、時間の経過に合わせて重要業績変数を追跡するように設計された定量化可能な 測定値であり、品質管理活動における必要不可欠な結果を測定するためのものです。各 KPI は、ニーズに合わせてカスタマイズできます。システム定義された KPIをカスタマイズしたり、ユーザ定義 KPIを作成できます。

PPT スコアカードでリリースの全体的な正常性とデプロイメントの準備状況を分析するとき、スコアカードに表示される KPI グラフをカスタマイズすることで、出力をさらに分かりやすくすることができます。

PPT の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

[プロジェクト計画と追跡]ページ

このページでは、PPTのKPIをカスタマイズできます。

 【保存 ダジャー変更 ★ 新規 ● 名前を付けて作成 ★ 削除 次でフィルタ なし ▼ 一般 KPT アナリシス 名前: 作成されたラスト コンプ・ティティ タイジ: アスト 現時、 ステータスが準備完了の作成:済みテストの飲。 一次 い値設定 -したい値設定 水口 「 肉(ス) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本	ブロジェクト計画と追跡	
次でフィルタ なし → ・ K KPT アナリシス 1 日あた90 修正不具合 カッパーマれる要件 リビュー済み要件 生活された不具合 実行落みテスト のビテスト 要大行落かテスト 素力が入れたす。 成功テスト のガリ要件 名前: 「作成されたテスト エンティティタイブ: デスト ステータスが準備完了の作成済みテストの款。 1 日参加の修正不具合 成功テスト 成功 実件 したい値設定 ステータスが準備完了の作成済みテストの款。 1 日参加のデスト 成功 実件 したい値設定 1 日参加の保全 一次 1 日参加の保全 ● ● ● 1 日参加の保全 ● ● ●<	誾 保存 メジャー変更 💌 \star 新規	📸 名前を付けて作成 🔀 削除
	 【● [#4] シンヤータル ▲ 新規 次でフィルタ なし ● 設 (1 日志た)の6世工不見合 カバーマゴル選挙件 ビニー済み要件 ビニー済み要件 ビニー済み要件 ロジーズネクスト ロジーズ	

アクセス方法	[プロジェクト カスタマイズ]の左の表示枠で[プロジェクト計画と追跡]をクリック します。
重要な情報	ALM のエディション: [プロジェクト計画と追跡]タブは, ALM Edition でのみ 利用できます。ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
参照情報	「PPT KPI のカスタマイズについて」(358ページ)

次にユーザ・インタフェースの要素について説明します(ラベルのない要素は、山括弧で囲んで表記してあります)。

UI要素	説明
📋 保存	[プロジェクト計画と追跡]ページで行った変更内容を保存します。
* 新規	[新規 KPI タイプ]ダイアログ・ボックスを開くと, KPI 名, エンティティ・タイ プ, 測定タイプを指定して, 新しい KPI を定義できます。
🞲 名前を付けて作成	[名前を付けて作成]ダイアログ・ボックスを開くと, 選択した KPIを基に KPIを作成できます。
💥 削除	選択した KPI を KPI タイプ・リスト から削除します。
	注: 使用中のKPIタイプは削除できません。
<kpi タイプ・リスト=""></kpi>	利用できる KPI タイプを一覧します。
次でフィルタ	選択したエンティティ・タイプに関連付けられている KPI タイプが KPI タイ プ・リストに表示されます。 すべての KPI タイプを表示するには, [なし]を 選択します。
[一般]タブ	選択した KPI タイプのプロパティを表示します。詳細については、「[プロ ジェクト計画と追跡] - [一般]タブ」(360ページ)を参照してください。
[KPI アナリシス]タブ	選択した KPI タイプのドリル・ダウン・プロパティを表示します。詳細につ いては、「[プロジェクト計画と追跡] - [KPI アナリシス]タブ」(363ページ) を参照してください。

[プロジェクト計画と追跡] - [一般]タブ

このタブでは, 選択した KPI タイプのプロパティをカスタマイズできます。

一般 KPI アナリシス	·
名前:	作成されたテスト
エンティティ タイプ:	77F
i兑8月:	ステータスが準備完了の作成済みテストの数。
-しきい値設定	
KPI が良好となる値の)条件: 高い 🔹
良なを表すデフォルト	- 1 まい値・ 80 警告範囲: 10 %
1001 240 9 7 24701	
- Mile	カウント
関数:	
測定するエンティティ	
	ア フィルタ: ステータス[Ready]
	8
□ 速移を考慮	
	La / Yohuan

アクセス方 法	[プロジェクト カスタマイズ]の左の表示枠で[プロジェクト計画と追跡]をクリック します。 KPI タイプを選択します。 [一般] タブに KPI プロパティが表示されま す。
重要な情報	ALM のエディション: [プロジェクト計画と追跡]タブは, ALM Edition でのみ 利用できます。ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

[一般]領域

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI要素	説明
名前	選択した KPI の名前。
エンティティタイプ	選択した KPI のエンティティ・タイプ。取り得る値は、 [要件], [テスト], [テス ト インスタンス], [不具合]です。
説明	選択した KPI の説明。
[しきい値設定]領域

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI 要素	説明
KPI が良好 <i>と</i> な る値 <i>の</i> 条件	選択した KPI の値の期待される時間変化の方向。値が[高い], [低い]ほど, KPI は良好になります。
	標準設定値:高い
良好を表す標準 設定しきい値	指定された値よりも大きな値が、良好な KPI 状態を示します。
警告範囲	「良好(OK)」なしきい値に対するパーセント値です。値が高く、良好(OK)し きい値が100に設定され、警告範囲が10%に設定されているときに KPI が 良好であれば、90 ~ 100の間にある値では、警告が生じます。90 未満の値 は、不良の KPI 状態を示します。

[測定]領域

この領域では、KPI 値の測定方法を定義します。

重要な情報	[パーセント]測定タイプのプロパティを定義するとき, [次の項目の測定パーセ
	ント]セクションは、パーセント計算に使用する分子を示します。 [次の範囲
	外]セクションは、パーセント計算に使用する分母を示します。

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI 要素	説明
測定タイプ	測定の方法。
関数	次のいずれかを示します。 • カウント:エンティティの個数をカウントします。 • 次のフィールド値の合計:すべてのエンティティの指定されたフィールドの値 を合計します。
測定するエンティ ティ	選択した KPI に指定したタイプのエンティティをフィルタできます。 ・ アイルタバソートの設定:[フィルタ]ダイアログ・ボックスが開き、フィルタを 定義できます。詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。 ・ アイルタのクリア:定義したフィルタをクリアします。

UI 要素	説明			
遷移を考慮	[設定]ボタンを利用できるようにします。			
	遷移を設定すると, KPI は変更数をカウントするのではなく, フィールド値の変 化を集計します。			
設定	[遷移の設定]ダイアログ・ボックスが開き, KPI 値を測定するときに, フィールドの変更のカウント方法を定義できます。詳細については,「[遷移の設定]ダ イアログ・ボックス」(362ページ)を参照してください。			

[遷移の設定]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは, KPI 値を測定するときに, フィールド 値の変化をカウントする方法を定義できます。

遷移の設定					×
次のフィールドで	の測定値の習	を更: ステータス		•	
値が変化した時	Ŧ				
	変更前	開人、要再修正		リストの更新…]
	変更後:	修正済み		リストの更新]
変更の蓄積:		⊙ 日次ベース			
		○ マイルストーンの其	間		
		○ リリースの期間			
		OK(<u>O)</u> ≭+	ッンセル(<u>C</u>)		

アクセス方法	[プロジェクト カスタマイズ]の左の表示枠で[プロジェクト計画と追跡]をクリック します。 KPI タイプを選択します。 [一般]タブで[遷移を考慮]を選択して, [設定]ボタンをクリックします。
重要な情報	ALM のエディション: [プロジェクト計画と追跡]タブは, ALM Edition. ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。 でのみ利用できま す。

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI要素	説明
次のフィールドでの測定 値の変更	フィールド値の変更の集計に使用するフィールドを示します。

UI要素	説明
値が変化した時 - 変更	指定したフィールド値から値が変化するときに集計します。
191 1	値を \$ANY にすると,現在表示されている値に関わらず集計されます。
値が変化した時 - 変更	指定したフィールド値に値が変化するときに集計します。
後	\$ANY にすると、現在表示されている値に関わらず集計されます。
リストの更新	[測定値]ダイアログ・ボックスが開き,変更を測定するときに使用する 値を選択できます。
変更の蓄積	日次で変更を集計できます。 マイルストーンの期間, リリースの期間 向け。

[プロジェクト計画と追跡] - [KPI アナリシス]タブ

このタブでは、KPIドリルダウン・グラフで表示する内訳グラフを2つ追加で定義します。詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

一般 KPI アナリシス	۲	
スコアカードは、KPIの ドを開くには、は、リリー	経過時間ごとのグラフを表します。スコアカードロは、さらに 2 つまでのグラフを含めることが - ス モジュールの (ステータス) タブにあるセルをダブルクリックします。	⁵ できます。スコアカー
☑ グラフ 1		
名前:	タイプ別テスト	
関数:		
	○ 次のフィールド値の合計: 🔹	
測定 9 るエノティティ:	7	
	7	○ 棒グラフ
42.0		 円グラフ
211-2217:	917	0 <i>0</i> 1991
☑ グラフ 2		
名前:	ステータス別自動化テスト	
関数:		
	○ 次のフィールド値の合計: 🔹	
測定するエノティティ	マフィルタ: タイプ(Not MANUAL)	
	7	⊙ 棒グラフ
		○ 円グラフ
クループ分け	×7 [−] 9λ	O ŐIJッド

アクセス方 法	[プロジェクト カスタマイズ]の左の表示枠で[プロジェクト計画と追跡]をクリック します。 KPI を選択して, [KPI アナリシス]タブをクリックします。
重要な情報	ALM のエディション: [プロジェクト計画と追跡]タブは, ALM Edition. ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。 でのみ利用できま す。

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI 要素	説明
グラフ 1/グラフ 2	グラフの有効、無効を切り替えます。
名前	グラフの名前。
関数	次のいずれかを選択します。 ・ カウント:エンティティの個数をカウントします。 ・ 次のフィールド値の合計:すべてのエンティティの指定されたフィールドの値 を合計します。
測定するエンティ ティ	選択した KPI に指定したタイプのエンティティをフィルタできます。
グループ分け	グラフで, ALM がデータを分類するときに使用するフィールドを決定します。
棒 グラフ/円 グラフ/ グリッド	グラフのタイプを示します。

第23章: プロジェクト・レポート・テンプレート

プロジェクト・レポート・テンプレートで、プロジェクト・レポートに表示されるデータのレイアウトとスタイルを決定します。

プロジェクト・レポートの詳細については、 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』 を参照してください。

本章の内容

プロジェクト・レポート・テンプレートについて	366
プロジェクト・レポート・テンプレートの管理	366
レポート・テンプレートのデザイン	369

プロジェクト・レポート・テンプレートについて

プロジェクト・レポート・テンプレートは、プロジェクト・レポートのデザインを決定する Microsoft Word ファ イルです。アナリシス・ビュー・モジュールでプロジェクト・レポートにテンプレートを割り当てます。

プロジェクト管理者であるユーザは、 [**レポート プロジェクト テンプレート**]ページで、 すべてのプロジェクト・ユーザが利用 できるレポート・テンプレートを管理します。

注:

- アクセス許可に応じて、ユーザはプロジェクト・レポート・テンプレートに加え、カスタムのレポート・テンプレートを作成して使用できます。カスタム・テンプレートの詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
- 生成されたドキュメントでテンプレート・フォント正しく表示されるようにするには、レポートを生成するユーザのクライアント・マシンにテンプレート・フォントをインストールする必要があります。

テンプレートにはさまざまなタイプが存在し, テンプレート・レポートのさまざまな面に影響をおよぼします。

テンプレートのタイ プ	説明
ドキュメント・テン プレート	レポート・レイアウトの概要を定義します。ドキュメント・テンプレートでは,タイト ル・ページのデザイン,レポート内の目次の有無,ページ方向,ページ番号な どを記述します。
スタイル・テンプ レート	Microsoft Word スタイルに適用する形式(テーブル, セクション見出し, 段落 など)を定義します。
履歴テンプレート	レポート・セクションに表示する履歴情報の形式を定義します。
セクション・テンプ レート	レポート・セクションに含まれるフィールド, およびその表示形式を定義します。 セクション・テンプレートは, 各 ALM エンティティとは別に定義されます。

上記のテンプレート・タイプには、事前定義されたテンプレートが用意されています。

プロジェクト・カスタマイズのプロジェクト・レポート・テンプレートの管理については、「プロジェクト・レポート・テンプレートの管理」(366ページ)を参照してください。

Microsoft Word でレポート・テンプレートを作成するには、 [テンプレート クリエータ]を使用します。詳細については、「レポート・テンプレートのデザイン」(369ページ)を参照してください。

プロジェクト・レポート・テンプレートの管理

ALM プロジェクト管理者として、 プロジェクト・ユーザが利用してプロジェクト・レポートを作成できるテン プレートを管理します。 本項の内容

新規レポート・テンプレートの作成	.367
レポート・テンプレートの編集	.368
レポート・テンプレートの複製	.369
レポート・テンプレートの削除	.369

新規レポート・テンプレートの作成

レポート・テンプレートを新規作成します。作成したテンプレートは、プロジェクト・レポートに割り当てる ことによってユーザが利用可能になります。

新規レポート・テンプレートを作成するには、次の手順を実行します。

[プロジェクト カスタマイズ]の左の表示枠で[プロジェクトレポートテンプレート]をクリックします。
 [プロジェクトレポートテンプレート]ページが開きます。



- 2. テンプレート・ツリーで, 作成 するテンプレート のタイプまたはカテゴリを選択します。
- 3. [テンプレート クリエータ]ボタンの下向き矢印をクリックし,次のいずれかを選択します。
 - 標準設定スタイル・テンプレートから作成:標準設定のスタイル・テンプレートを使用して,テンプレート・ファイルを作成します。これは、ボタンをクリックしたときの標準設定・オプションです。
 - スタイル・テンプレートから作成:選択したスタイル・テンプレートを使用して、テンプレート・ファイルを作成します。
- 4. Microsoft Word の[Template Creator]タブを使用して、新規テンプレート・ファイルをデザインしま

す。テンプレート・ファイルのデザインの詳細については、「レポート・テンプレートのデザイン」(369 ページ)を参照してください。

- 5. ファイルを保存して閉じます。
- 6. [プロジェクト カスタマイズ]の左側の表示枠で, [プロジェクト レポート テンプレート]をクリックし, テンプレート・カテゴリを選択します。
- 7. [**テンプレートの追加**]をクリックして,作成したテンプレート・ファイルを選択します。 プロジェクト・レポート・テンプレートでは次のフィールドが表示されます。

UI 要素	説明
名前	プロジェクト・レポート・テンプレートの名前。
最終変更者	プロジェクト・レポート・テンプレートを最後に変更した ALM ユーザの名前。
ファイル変更日	プロジェクト・レポート・テンプレートを最後に変更した日時。
タイプ	プロジェクト・レポート・テンプレートが、フルページのテンプレートまたはテーブ ルのテンプレートのどちらであるかを示します。
	フル・ページ : 1 ページでの ALM エンティティ・レポート のレイアウトを定義します。
	テーブル : 1 つのテーブルの中の ALM エンティティ・レポートのレイアウトを定 義します。

8. 新規テンプレートをカテゴリの標準設定テンプレートとして設定するには、 [標準設定のくカテゴ リ>レポート テンプレート]を選択します。ユーザがレポートにセクションを追加するとき、エンティ ティの標準設定・プロジェクト・テンプレートが最初に選択されます。

レポート・テンプレート の編集

既存のレポート・テンプレートを変更できます。

レポート・テンプレートを編集するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ]の左の表示枠で[プロジェクト レポート テンプレート]をクリックします。
- 2. 編集するテンプレートを選択して、 [テンプレートのダウンロード]をクリックします。テンプレート・ファ イルのコピーがコンピュータ・ファイル・システムに保存され、そのファイルが Microsoft Word で開き ます。
- 3. [Template Creator]タブを使用してテンプレートを編集します。テンプレート・ファイルのデザインの 詳細については、「レポート・テンプレートのデザイン」(369ページ)を参照してください。
- 4. テンプレート・ファイルを保存して閉じます。

- 5. [プロジェクト カスタマイズ]でテンプレートを選択し, [**テンプレートのアップロード**]をクリックします。
- 6. コンピュータ・ファイル・システムにあるテンプレート・ファイルを選択します。

レポート・テンプレートの複製

レポート・テンプレートの複製を作成して、複製テンプレートを変更できます。

テンプレートを複製するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ]の左の表示枠で[プロジェクトレポート テンプレート]をクリックします。
- 2. 複製するテンプレートを選択して、[テンプレートの複製]をクリックします。
- 3. 複製したテンプレートを編集するには、「レポート・テンプレートの編集」(368ページ)を参照してく ださい。
- 4. 新規テンプレートをカテゴリの標準設定テンプレートとして設定するには、 [標準設定の<カテゴ リ>レポート テンプレート]を選択します。

レポート・テンプレートの削除

レポート・テンプレートを削除できます。

注: カテゴリの標準設定・テンプレートとして設定されているテンプレート, 1 つまたは複数のプロ ジェクト・レポートで使用中のテンプレートは削除できません。

テンプレートを削除するには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ]の左の表示枠で[プロジェクトレポートテンプレート]をクリックします。
- 2. 削除するテンプレートを選択して、 [削除]をクリックします。

レポート・テンプレート のデザイン

レポート・テンプレートとは、レポート・セクションの概要を含む Microsoft Word ファイルのことです。

注: レポート・テンプレートのあらゆる例が[プロジェクト カスタマイズ]に用意されています。詳細に ついては、「プロジェクト・レポート・テンプレートの管理」(366ページ)を参照してください。

本項の内容

レポート・テンプレートのデザインについて	
ドキュメント・テンプレートのデザイン	
スタイル・テンプレートのデザイン	
履歴テンプレートのデザイン	

セクション・テンプレートのデザイン	
フルページ・テンプレートとテーブル・テンプレートの作成のためのガイドライン	
[テンプレート クリエータ]タブ	

レポート・テンプレート のデザインについて

Microsoft Word でレポート・テンプレート・ファイルをデザインします。ドキュメント,履歴,セクションの各テンプレートは,Microsoft Word の[**Template Creator**]タブで作成します。

テンプレート・クリエータを使用して、Microsoft Wordドキュメントのマージ・フィールドを選択し、配列します。マージ・フィールドは、ALM フィールドのラベルと値を表したり、レポートを作成するための手順を示します。レポートを生成するとき、レポート・テンプレート内のマージ・フィールドは実際のデータによって置き換わります。

テンプレート・クリエータで使用できるオプションの詳細については、「[テンプレート クリエータ]タブ」(377 ページ)を参照してください。

注: テンプレート・クリエータを有効にするには、次の条件を満たす必要があります。

- Microsoft Office 2010(32ビット版)または Microsoft Office 2013(32ビット版)をマシンにイン ストールする必要があります。
- Microsoft Word でマクロの使用を許可します。Word でOffice ボタンをクリックしてから[Word のオプション]をクリックします。[セキュリティセンター]>[セキュリティセンターの設定]>[マクロの設定]を選択します。[すべてのマクロを有効にする]を選択します。

ドキュメント・テンプレートのデザイン

ドキュメント・テンプレート・ファイルで、レポート・レイアウトの概要を定義します。ドキュメント・テンプ レートでは、タイトル・ページのデザイン、レポート内の目次の有無、ページ方向、ページ番号などを 記述します。Microsoft Wordの[Template Creator]タブを使用して、ドキュメント・テンプレートをデザ インします。

次の要素がドキュメント・テンプレート内で使用されます。

- ReportName:レポートの[Name]フィールドの値で置き換えられるレポート内のマージ・フィールド。
- カスタム・フィールド: ユーザがレポートに含める情報を表すマージ・フィールド。Author, Project などです。任意の文字列をカスタム・フィールドとして使用できます。ユーザは、プロジェクト・レポートを設定するときに、カスタム・フィールドの実際の値を入力します。
- DocumentData:レポート・セクションの開始地点を示すマージ・フィールド。
- ドキュメント・デザイン: ドキュメント・テンプレート内で定義するドキュメントの形式は、ドキュメント・ テンプレートを使用するプロジェクト・レポート内で使用されます。これには、ヘッダ、フッタ、ページ番

号,ページ・レイアウトが含まれます。

固定テキスト:ドキュメント・テンプレートに入力した固定テキストが、レポートに表示されます。たとえば、表示ページに組織名を入力したり、「作成者:」と入力し、にカスタム・フィールドAuthorを続けて配置します。

新規レポート・テンプレートをデザインするには、次の手順を実行します。

- テンプレート・クリエータを使用して、Microsoft Word でテンプレート・ファイルを新規作成します。 テンプレート・クリエータへのアクセスの詳細については、「[テンプレート クリエータ]タブ」(377ページ)を参照してください。
- 2. [Template Type] With Second Seco
- 3. レポート名を含めるには、[Insert Field Value] をクリックして、[ReportName]を選択します。ReportName タグにより、テンプレート・ベース・レポートの[Name]フィールドからレポート名が取得されます。
- 4. タイトル・ページ, ヘッダとフッタなどの領域にカスタマイズした情報を含めるには、 [Insert Custom

Field] 「「をクリックします。 [Custom Field] ダイアログ・ボックスに、カスタム・フィールド名 (「Author」など)を入力します。 レポートを作成するときには、レポートの表紙ページに表示される実際の値を入力します。

さらにカスタム・フィールドを含めるには、この手順を繰り返します。

- 5. ヘッダ, フッタ, およびページ番号などの要素を使用して, ドキュメントをデザインします。
- 6. レポート・データを開始する位置にカーソルを置き、 [Insert Field Value] をクリックして、 [DocumentData]を選択します。

スタイル・テンプレート のデザイン

スタイル・テンプレート・ファイルで、レポートの全 セクションの Microsoft Word スタイルに適用される形式を定義します。

たとえば,スタイル・テンプレートで Normal スタイルの形式を定義できます。こうすることで,Normalスタ イルに割り当てられているセクション・テンプレート内のテキストが,スタイル・テンプレートで定義した形 式で表示されるようになります。

スタイル・テンプレートで定義するスタイル形式は、プロジェクト・レポート内で使用されるその他のテンプレートで定義される形式に優先します。

スタイル・テンプレートをデザインするときには次の点を考慮します。

• 見出しのスタイル:スタイル・テンプレートで定義する見出し 1, 見出し 2, 見出し n などのスタイ ルは, レポートのセクションのレベルに対応するレポート・セクションに自動的に適用されます。セク ション・テンプレートでの見出しスタイルの適用の詳細については、「セクション・テンプレートのデザイン」(373ページ)を参照してください。

- テーブル・スタイル: レポートにすべてのデータ・テーブルが統一されたスタイルで表示されるようにするため、プロジェクト・レポート・テーブル・スタイルを定義します。標準設定で、テーブル・テンプレートで作成したテーブルはこのスタイルを使用します。
- テキスト:スタイル・テンプレートに入力するテキストはすべて、プロジェクト・レポートによって無視されます。

履歴テンプレート のデザイン

履歴テンプレート・ファイルで, すべてのレポート・セクションで履歴情報がどのように表示されるのかを 定義します。Microsoft Wordの[テンプレート クリエータ]タブを使用して, 履歴テンプレートをデザイン します。

注:

- プロジェクト・レポートに履歴情報を表示するには、セクション・テンプレートに History マージ・ フィールドを含める必要があります。
- 履歴テンプレートは、テーブル形式にのみ含められます。詳細については、「フルページ・テンプ レートとテーブル・テンプレートの作成のためのガイドライン」(376ページ)を参照してください。

次の要素が履歴テンプレート内で使用されます。

- 履歴フィールド: 履歴フィールドのラベルと値を示すマージ・フィールド。
- **固定テキスト**:履歴テンプレートに入力した固定テキストがレポートに表示されます。たとえば、履歴マージ・フィールドの上にある見出しに「履歴」と入力します。

履歴テンプレートをデザインするには、次の手順を実行します。

- テンプレート・クリエータを使用して、Microsoft Word でテンプレート・ファイルを新規作成します。 テンプレート・クリエータへのアクセスの詳細については、「[テンプレート クリエータ]タブ」(377ページ)を参照してください。
- 2. [Template Type] をクリックして, [History]を選択します。
- 3. [Formatting] をクリックしてから, [Tabular]を選択して, テーブル・テンプレートを作成します。

[Select Fields]ダイアログ・ボックスが開きます。

Select Fields				×
Available Fields:		Selected Fields:	Reorder	☆ 🕹
Changing User Field Name New Value Old Value Time of Change	>			
	<			
Insert		Cancel		

4. テンプレートにフィールドを含めるには、[Available Fields]表示枠でフィールドを選択してから、 右矢印 ≥をクリックします。

ヒント: 複数のフィールドを選択するには, CTRL キーまたは SHIFT キーを使用します。

- 5. テンプレートからフィールドを取り除くには、[Selected Fields]表示枠でフィールドを選択してから、左矢印 くをクリックします。
- 6. 一方の表示枠から他方の表示枠にすべてのフィールドを移動するには、2重矢印 <<p>✓ >> をク リックします。
- 7. テンプレート内のフィールドの順序を変更するには、 [Reorder] ボタンをクリックします。
- 8. [Insert]をクリックします。選択したフィールドがテーブル・レイアウトに挿入されます。

セクション・テンプレート のデザイン

セクション・テンプレートで, レポート・セクションで情報 がどのように表示されるのかを定義します。 レポート・セクションに含められる各 ALM エンティティについて, 別々のセクション・テンプレートを定義します。 Microsoft Word の[テンプレート クリエータ]タブを使用して, セクション・テンプレートをデザインします。

注: セクション・テンプレートの形式は、フルページまたはテーブルのいずれかです。詳細については、「フルページ・テンプレートとテーブル・テンプレートの作成のためのガイドライン」(376ページ)を

参照してください。

次の要素がセクション・テンプレート内で使用されます。

- セクション名:セクションの[名前]フィールドの値で置き換えられるレポート内のマージ・フィールド。
- セクション・フィルタ: レポート・セクションに適用されるデータ・フィルタを表示するマージ・フィールド。
- エンティティ・フィールド: エンティティ・フィールドのラベルと値を示すマージ・フィールド。

注:日付と時刻のフィールド書式は、ALM サーバで定義されているロケールの「短い日付形式」が適用されます。レポートの作成時にこの形式は変更できません。

- 履歴:エンティティ・レコードの履歴情報を挿入するマージ・フィールド。フルページ・テンプレート内の データ領域でマージ・フィールドを使用します。
- **グラフ**:レポートに追加済みのグラフを挿入するマージ・フィールド。標準設定では、グラフはレポートの末尾に追加されます。

注:1つのテンプレートには、グラフ・フィールドを複数挿入することはできません。

• **固定テキスト**: セクション・テンプレートに入力した固定テキストがレポートに表示されます。

新規セクション・テンプレートをデザインするには、次の手順を実行します。

- テンプレート・クリエータを使用して、Microsoft Word でテンプレート・ファイルを新規作成します。 テンプレート・クリエータへのアクセスの詳細については、「[テンプレート クリエータ]タブ」(377ページ)を参照してください。
- 2. [Template Type] をクリックして、セクションを選択します。
- 3. [Formatting] をクリックしてから, [Full Page], [Tabular]のいずれかを選択して, フルページ・テンプレート, テーブル・テンプレートのいずれかを作成します。

[Select Fields]ダイアログ・ボックスが開きます。

Select Fields				×
Available Fields:		Selected Fields:	Reorder	₩
サブジェクト サブジェクト ステータス タイプ テスト ID テスト モード テスト名 デンプレート	>			
バス プロトコル タイプ 作成日 作業モード 変更ステータス 更新日時	>>			
設計者 設明 開発予想時間	<			
	<<			
Insert		Cancel		

4. テンプレートにフィールドを含めるには、 [Available Fields] 表示枠でフィールドを選択してから、 右矢印 ♪をクリックします。

ヒント: 複数のフィールドを選択するには, CTRL キーまたは SHIFT キーを使用します。

- 5. テンプレートからフィールドを取り除くには、[Selected Fields]表示枠でフィールドを選択してから、左矢印 くをクリックします。
- 6. 一方の表示枠から他方の表示枠にすべてのフィールドを移動するには、2重矢印 く >>>をクリックします。
- 7. テンプレート内のフィールドの順序を変更するには、 [Reorder] ボタンをクリックします。
- 8. [Insert]をクリックします。選択したフィールドがフルページ・レイアウト, テーブル・レイアウトに挿入 されます。
- 9. フルページ・テンプレートにレコードの履歴情報を含めるには、Data End タグの前にカーソルを置き、[Insert Field Value] をクリックして、[History]を選択します。

注: レポートに割り当てられた履歴テンプレートに合わせて、履歴情報が表示されます。

10. セクション名, セクション・フィルタの詳細を含めるには, [Insert Field Value] - をクリックし

て, [Section Name]または[Section Filter]を選択します。これらのフィールドが、データ領域の外部に配置されていることを確認します。

- 11. セクション・テンプレートは、レポートのどのレベルにも使用できます。セクション・ヘッダがレポート内で、セクション・ヘッダのレベルに合ったスタイルで表示されるようにするには、Section Name マージ・フィールドにカーソルを合わせます。[Set Auto Heading Style]ボタン AaBb が押されていることを確認します。
- 12. テーブルが, スタイル・テンプレート で定義されている統一されたテーブル・スタイルを使用するよう にするには, テーブル領域にカーソルを合わせます。 [Set Table Style] ボタン が押されてい ることを確認します。

フルページ・テンプレート とテーブル・テンプレート の作 成 のためのガ イドライン

セクション・テンプレートは、フルページ、テーブルのいずれの形式 でもデザインできます。

注: テンプレートに含める Word セクションは 1 つのみです。 生成されるレポートには, 最初の Word セクション内にあるテキストとフィールドのみが含まれます。

フルページ・テンプレート

フルページ・テンプレートで、1ページの複数行にわたってエンティティのフィールドを配列します。通常、 フィールドのラベルと値のマージ・フィールドは、同じ行に、コロンやタブで区切られて表示されます。 例:Detected By Label:Detected By

フルページ・テンプレートで,各レコードで繰り返すテンプレートのセクションは,Data StartとData End マージ・フィールドで囲む必要があります。

例:

«Section Name»

«Data Start»
«Defect ID Label»: «Defect ID»
«Assigned To Label»: «Assigned To»
«Detected By Label»: «Detected By»
«Priority Label»: «Priority»
«Status Label»: «Status»
«Data End»

テーブル・テンプレート

テーブル・テンプレートで,2行テーブルにエンティティのフィールドを配列します。テーブルの上の行には,フィールド・ラベルのマージ・フィールドが含まれます。テーブルの下の行には,対応するフィールド値

のマージ・フィールドが含まれます。

テーブル・テンプレートでは、値の行の最初のセルは Table Start マージ・フィールドで開始し、値の行の最後のセルは Table End マージ・フィールドで終了する必要があります。

列:				
«Section Name»				
«Defect ID Label»	«Assigned To Label»	«Detected By Label»	«Priority Label»	«Status Label»
«Table Start»«Defect ID»	«Assigned To»	«Detected By»	«Priority»	«Status»«Table End»

[テンプレート クリエータ]タブ

テンプレート・クリエータにより、Microsoft Word でドキュメント、履歴、セクションの各テンプレートをデザインできます。

アクセス方法	テンプレート・クリエータには、 [プロジェクトのカスタマイズ]> [プロジェクト レ ポート テンプレート], またはプロジェクト・レポートの[設定]タブからアクセスでき ます。
	 新規テンプレート・ファイルを作成するには、プロジェクト・レポート・テンプレートまたはセクションを選択して、[テンプレート クリエータ]をクリックします。Microsoft Word が開き、適用可能なテンプレート・タイプが[テンプレート・クリエータ]タブ内で選択されます。
	 既存のテンプレート・ファイルを編集するには、プロジェクト・レポート・テンプレートを選択して、[テンプレートのダウンロード] をクリックします。テンプレートが Microsoft Word で開きます。
重要な情報	テンプレート・クリエータを有効にするには、Microsoft Word でマクロを利用可能にしておく必要があります。Word で Office ボタンをクリックしてから[Word のオプション]をクリックします。[セキュリティ センター]>[セキュリティ センターの設定]>[マクロの設定]を選択します。[すべてのマクロを有効にする]を選択します。
参照情報	「レポート・テンプレートのデザイン」(369ページ)

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI 要素	説明
	テンプレート・タイプの選択:テンプレート・クリエータで作成可能なテンプレート・ タイプを一覧します。テンプレート・タイプを選択すると、ボタン・ラベルにそのテン プレート・タイプが表示され、テンプレートに含められるフィールドが決定します。

UI要素	説明
	フォーマット:次のいずれかの形式で,選択したフィールドを挿入します。
	• フル・ページ:選択したフィールドが複数行にわたって垂直方向に一覧され ます。フィールドの値はラベルの横に配置され、コロンとタブで区切られま す。
	 テーブル:選択したフィールドがテーブル内に水平方向に一覧されます。 フィールド・ラベルはテーブルの上に、フィールド値はテーブルの下に一覧されます。
~ ?	フィールド・ラベルの挿入:カーソルの位置に,選択したフィールド・ラベルが挿入されます。
	フィールド値の挿入 :カーソルの位置に,選択したフィールド値が挿入されます。
	複数フィールドの挿入:[フィールドの選択]ダイアログ・ボックスが開き, カーソルの位置にフィールド・ラベルと値を挿入できます。
	注:選択したフィールドは、別々の行に挿入されます。
	カスタム・フィールドの挿入:ドキュメント・テンプレートで,ドキュメント・テンプ レートの任意の位置にカスタム・フィールドが挿入できます。たとえば,ドキュメ ント・タイトル・ページ,ドキュメントのヘッダとフッタにカスタム・フィールドを追加し ます。
	レポート作成時には, ユーザはレポート内のカスタム・フィールドを置き換える 値を入力します。
AaBb	自動見出しスタイルの設定:テンプレート・レポート自動見出しスタイルを選択した段落に切り替えます。テンプレートを基にしたレポート・セクションで,スタイルはセクション・レベルに適した見出しスタイルによって自動的に置き換えられます。
	フルページ・テンプレートでは、セクション見出し(データの開始マージ・フィールド前)とレコード見出しの両方にテンプレート・レポート自動見出しスタイルを適用できます。この結果、レポート内のセクション見出しは、セクション・レコードよりもより高い階層レベルで表示されます。
	テーブル・テンプレートでは, セクション見出しにのみ テンプレート・レポート自動 見出しスタイルを適用できます。
	テーブル・スタイルの設定:テンプレート・レポート・テーブル スタイルを選択した テーブルに切り替えます。

UI 要素	説明
3	ALM に接続:別のALM プロジェクトに接続できます。テンプレート・クリエータ により,選択したプロジェクトからエンティティ・フィールドが自動的に取得されま す。
abc カナ	文字列のローカライズ:[プロジェクト カスタマイズ]から更新されたフィールド・ラ ベルを取得します。

管理者ガイド 第23章: プロジェクト・レポート・テンプレート

第24章:ビジネス・ビュー

この項では, ビジネス・ビューを作成および管理する方法を説明し, ALM のレポート・ツールのデータ 基盤となります。

本章の内容

ビジネス・ビューの概要	382
ごジネス・ビューの作成と管理	382
DQLの使用	384
ビジネス・ビューのユーザ・インタフェース	400

ビジネス・ビューの概要

ビジネス・ビューとは関連データを集めたデータ層であり、HP Application Lifecycle Management (ALM)の各種レポート・ツールのデータ基盤となります。

このビューはプロジェクト・エンティティに基づいて作成され、ビジネス・コンシューマに関連する情報のみ をレポートに表示します。たとえば、ビジネスで役立つ情報をレポート・コンシューマに提供するために は、特定の不具合に関連するエンティティ・フィールドのみを選択してビューを作成します。このビュー は、レポートの元データとして再利用可能になります。

たとえば、[ベースライン]に基づくビジネス・ビューには、[名前],[説明]、[ベースライン ID]の各 フィールドが含まれています。これは、これらのフィールドが、ビジネスのみに特化した視点でベースライ ン情報を把握する必要があるグラフ・コンシューマにとって重要になる可能性がある情報を提供する ためです。したがって、[添付]と[自動入力タイプ]の各フィールドは、ビジネス上の重要性が低いの で、このビューには含まれていません。

ビジネス・ビューを元にレポートを作成すると,同じビジネス・ビューを元に作成したレポートはすべて共通の範囲を参照することになるので,レポートを標準化することができます。 このような方法で作成されたレポートは,ビジネスで大きな価値を発揮し,レポートの有用性も向上します。

注: レポートの作成では,作成するユーザのアクセス許可レベルが適用されます。したがって,レ ポートを作成するユーザに使用が許可されていない情報がビジネス・ビューに含まれている場 合,作成されたレポートにその情報は表示されません。

ビジネス・ビューには, 単一のプロジェクト・エンティティ(不具合など)を示すビューや, 複数のエンティ ティ(不具合, 要件, テストなど)間の関係を示すさらに複雑なビューがあります。 ALM では, いくつか のビジネス・ビューが事前定義されています。

ビジネス・ビューを作成するには、組織のビジネス要件をよく把握しておく必要があります。さらに、ビジ ネス・ビューの作成プロセスでは、ANSI SQL の一種である DQL(ドメイン・クエリ言語)が使用されま す。DQL クエリに関する知識が必要になります。DQL の操作に関する詳細については、「DQL の使 用」(384ページ)を参照してください。

ビジネス・ビューの作成と管理

このタスクでは、ビジネス・ビューを作成および管理する方法を説明します。

ビジネス・ビューの詳細については、「ビジネス・ビューの概要」(382ページ)を参照してください。

- 1. [ビジネスビュー]ページを開く
 - a. ALM マスト ヘッド で, 🍄 > [カスタマイズ]を選択します。 [プロジェクト カスタマイズ]ウィンド ウが表示されます。
 - b. [プロジェクト カスタマイズ]ウィンドウの[ビジネスビュー]リンクをクリックします。[ビジネス ビュー]ページが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[ビジネスビュー]ペー ジ」(401ページ)を参照してください。

2. 空のビジネス・ビューを作成する

[ビジネスビュー]ページのツールバーで[ビューの追加]をクリックします。[新規ビュー]ダイアログ・ ボックスが開きます。テクニカル名とラベルを入力し、[OK]をクリックします。

3. ビジネス・ビューへのプロジェクト・エンティティの追加

- a. [ビジネスビュー]ページで, まだ選択していない場合は, [**クエリデザイナ**]タブを選択します。
- b. [クエリデザイナ]タブのツールバーで、[エンティティの追加]をクリックします。右側の表示枠に モデル・ツリーが表示されます。モデル・ツリーが開き、現在のプロジェクトに含まれるプロジェクト・エンティティとフィールドがすべて表示されます。
- c. 新しいビジネス・ビューに追加するエンティティを選択し、 [クエリ デザイナ]タブの中程にある [メイン]表示枠にドラッグします。追加するプロジェクト・エンティティごとにくプロジェクト・エン ティティ>のダイアログ・ボックスが追加され、エンティティに含まれる利用可能なフィールドが 表示されます。フィールド名の横にあるチェックボックスを選択すると、そのフィールドがビューに 追加されます。

注:標準設定では、フィールドはすべて選択され、チェックボックスは選択されません。

4. 選択したエンティティ間の関係を定義

エンティティの関係は次のいずれかの方法で作成できます。

- <プロジェクト・エンティティ>のダイアログ・ボックスを選択し、[クエリデザイナ]タブのツールバーで[関連エンティティの追加]をクリックします。[関連エンティティの追加]ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[関連エンティティの追加]ダイアログ・ボックス」(408ページ)を参照してください。
- エンティティを複数選択した場合は、エンティティ間でフィールドをドラッグして関係を作成します。
- [DQL クエリビルダ]にクエリを直接入力します。
- 5. フィルタ条件の編集 任意

選択したフィールドのフィルタ条件は、 [メイン]表示枠の下にあるフィールド・グリッドで編集および定義できます。

ヒント: フィールドのラベルを変更するには,選択したフィールドのグリッドにある[エイリアス]カラムを使用します。

6. エンティティの関係の編集 - 任意

エンティティの関係を編集するには、関係を示すラインをダブルクリックします。[リンクプロパティ]ダ イアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[リンクのプロパティ]ダイ アログ・ボックス」(407ページ)を参照してください。

7. ビジネス・ビューの検証

[クエリ デザイナ]タブのツールバーで、 [検証]をクリックします。 [クエリ デザイナ]タブの下 にある[ク エリ結果]表示枠に、警告メッセージまたはエラー・メッセージが表示されます。

8. ビジネス・ビューのプレビュー

[クエリ デザイナ]タブのツールバーで, [プレビュー]をクリックします。[クエリ デザイナ]タブの下 に[ク エリ結果]表示枠が開きます。

9. ビジネス・ビューのステータス更新

[クエリデザイナ]タブのツールバーで, [ステータス]の矢印をクリックしてから[発行済み]を選択します。

10. ビジネス・ビューの保存

[ビジネスビュー]ページのツールバーの[保存]をクリックします。

DQLの使用

ビジネス・ビュー・クエリの作成では, DQL(ドメイン・クエリ言語)を使用します。

DQLはANSISQL9.2とほとんど同じものですが、いくつかの大きな相違点が存在します。

注: DQL でサポートされるのは SELECT ステートメントのみです。

本項の内容

- DQL の利 点
- SQL に対する追加事項
- サポートされる関数

DQL の利 点

DQLを使用したクエリの作成には、次のような利点があります。

DQL では、ユーザのアクセス許可レベルに応じたデータ非表示が適用されます。つまり、レポートの作成では、作成するユーザのアクセス許可レベルが適用されます。レポートを作成するユーザに使用が許可されていない情報がビジネス・ビューに含まれている場合、作成されたレポートにその情報は表示されません。

- DQL クエリではデータベースの抽象化が作成され、ビジネス・ビューのベースとして使用されます。ビジネス・ビューのベースはデータベースを抽象化したもので、データベースそのものではありません。そのため、実際の名前に基づいてエンティティのフィールドを識別する必要はありません。クエリによって簡素化されるため、識別が容易になります。たとえば、オブジェクトのIDに関連するフィールドはすべて、不具合 ID、サイクルID、リリースIDなどのサフィックス「ID」を使用して表示されます。
- DQL クエリは, Oracle および SQL データベース・サーバでも正しく実行されます。

SQLに対する追加事項

DQL では, ANSI SQL では使用できない次のオプションが用意されています。

- 変数:次の3つの変数が追加されています。
 - :me: レポートを作成しているユーザに関する情報を返します。同じビジネス・ビューに基づいて レポートを作成する場合, レポートを作成するユーザごとに異なる結果が返されます。
 - :current_project_name:レポートが作成されるプロジェクトに関する情報を返します。
 - :current_domain_name: レポートが作成されるドメインに関する情報を返します。

次にMe変数の例を示します。

```
Select *
From defect
Where defect.detected_by = :me
```

Select Top: このオプションを使用すると、クエリの結果を定義した項目数までに制限することができます。

サポートされる関数

次の表では、ALM でサポートされる DQL 関数をまとめます。DQL 関数は、データベースで使用する SQL 関数にそれぞれ変換されます。この表では、DQL 関数と、それに該当する MS SQL および Oracle の対応も示しています。詳細については、MS SQL と Oracle のドキュメントを参照してください。

関数	シグネチャ	戻り値タイ プ	説明
集計			
count	count (expression)	整数	クエリに含まれる行数を返します。

関数	シグネチャ	戻り値タイ プ	説明	
count_big	_big count_big 整数 (expression) (bigint)	整数 (bigint)	クエリに含まれる行数を返します。 count と count_big は、戻り値のみが異なります。 MS SQL では、 count_big は必ず bigint 型の値を 返しますが、 count は必ず int 型の値を返しま す。	
			注: Oracle では count に変換されます。	
variance	variance (decimal)	10 進数	式の分散を返します。	
	(000		注:1 す。((くd ます。	注: MS SQL では var に変換されま す。Oracle では round(variance (くdecimal>), 14) という構文を使用し ます。
var_pop	var_pop (expression)	10 進数	値セット内のNullを破棄した後, 母集団分 散を返します。 注: MS SQL では varp に変換されま す。Oracle では round(var_pop (< expression >), 14) という構文を使 用します。	
stddev	stddev(decimal)	10進数	値セットの標準偏差を返します。	
			注: MS SQL では stdev に変換されま す。Oracle では round(stddev (< decimal >), 14) という構文を使用し ます。	
stddev_pop	stddev_pop (expression)	10進数	母集団標準偏差を計算し, 母集団分散の 平方根を返します。	
		注 : MS SQL では stdevp に変換されま す。Oracle では round(stddev_pop (< expression>), 14) という構文を使 用します。		

関数	シグネチャ	戻り値 <i>タイ</i> プ	説明
avg	avg(expression) 10 ž	10 進数	式の平均値を返します。
			注 : Oracle では round(avg (くdecimal>), 14) という構文を使用し ます。
sum	sum(decimal)	10進数	式の合計値を返します。
min	min(expression)	式	式の最小値を返します。
max	max (expression)	式	式の最大値を返します。
文字列の操作		·	
upper	upper(string)	文字列	指定した文字列をすべて大文字に変換しま す。
lower	lower(string)	文字列	指定した文字列をすべて小文字に変換しま す。
rtrim	rtrim(string)	文字列	指定した文字列の右端から空白文字をすべ て削除した文字列を返します。
ltrim	Itrim(string)	文字列	指定した文字列の左端から空白文字をすべ て削除した文字列を返します。
replace	replace(string, string_to_ replace, replacement_ string)	文字列	指定した文字列で, すべての く string_to_ replace>を く replacement_string> に置き 換えます。
substring	substring(string, int_start_ position, int_ length)	文字列	指定した文字列から,部分文字列を返しま す。 • int_start_position:部分文字列の取得 を開始する位置。 • int_length:取得する文字数。 注: Oracle では substr に変換されます。

関数	シグネチャ	戻り値タイ プ	説明
length	length(string)	10進数	指定した文字列の長さを返します。
			注: MS SQL では len に変換されます。
chr	chr(integer)	文字列	int 型のASCIIコードを文字に変換します。
			注: MS SQL では char に変換されます。
soundex	soundex(string)	文字列	文字列の発音表現を返します。
ascii	ascii(string)	整数	文字列の左端の文字をASCⅡ ⊐──ド値に変 換します。
concat	concat(string1, string2)	文字列	2つの文字列を連結します。
	sungz)		注: MS SQL では + に変換さ れ, く string1> + < string2> という構 文を使用します。
leftstr	leftstr(string, integer)	文字列	文字数の左側から,指定した文字数を取り 出します。
lpad	Ipad(string1, 文音 integer, string2)	文字列	<string1>の左側に,長さが<integer> 文字になるまで文字列<string2>を挿入し ます。この関数は,クエリ出力の書式設定で 使用すると便利です。</string2></integer></string1>
			注: MS SQL では, left padding 式を使 用して上記のロジックを実装します。
reverse	reverse(string)	文字列	文字列を逆順に並びかえます。
		注 : Oracle では reverse(to_char (<string>)) という構文を使用します。</string>	

関数	シグネチャ	戻り値タイ プ	説明	
rightstr	rightstr rightstr(string, integer)	文字列	文字数の右側から,指定した文字数を取り 出します。	
			注: MS SQL では right に変換されま す。Oracle では, substr 関数とright part 式を使用して上記のロジックを実装 します。	
rpad	rpad(string1, integer, string2)	文字列	<string1>の右側に,長さが<integer> 文字になるまで文字列<string2>を挿入し ます。この関数は、クエリ出力の書式設定で 使用すると便利です。</string2></integer></string1>	
			注: MS SQL では left 関数とright padding 式を使用して上記のロジックを 実装します。	
stuff	tuff stuff(string, 文字列 integer, integer, string)	stuff(string, integer, integer, string)	文字列	文字列を,別の文字列に挿入します。最初 の文字列内で,開始位置から指定の文字 数を削除し,その位置に2番目の文字列を 挿入します。
			注: Oracle では、 上記 のロジックを実装 する式 に変換されます。	
in_string	n_string in_string 整数 (string1, string2, integer_start_ location)	整数	string1 の中に部分文字列 string2 が存在 する場合,文字列の位置を返します。存在 しない場合は0を返します。検索の開始位 置は integer_start_location であり,1から始 まります。	
			注 : MS SQL では charindex に変換され ます。Oracle では instr に変換さ れ, instr(< string2>, < string1>, < integer_start_location>) という構文 を使用します。	

関数	シグネチャ	戻り値タイ プ	説明
replicate	replicate(string, integer)	文字列	くstring> の値を、 くinteger> パラメータで 指定した回数だけ繰り返します。
			注: Oracle では rpad に変換され, rpad (< string>, length (< string> *< integer>), < string>) という構文を使用します。
算術演算			
sin	sin(decimal)	10 進数	decimal パラメータの正弦を返します。
			注 : Oracle では round(sin (くdecimal>), 14) という構文を使用し ます。
asin	asin(decimal)	10進数	decimal パラメー タの逆正弦を返します。引 数は,-1から1の範囲で指定します。
	浅 () 君	注 : Oracle では round(asin (くdecimal>), 14) という構文を使用し ます。	
COS	cos(decimal)	10 進数	decimal パラメータの余弦を返します。
			注: Oracle では round(cos (くdecimal>), 14) という構文を使用し ます。
acos	acos acos(decimal) 10 進数	10 進数	decimal パラメー タの逆余弦を返します。引 数は,-1から1の範囲で指定します。
	注 : Oracle では round(acos (くdecimal>), 14) という構文を使用し ます。		

関数	シグネチャ	戻り値タイ プ	説明
tan	tan(decimal)	10 進数	decimal パラメータの正接を返します。
			注 : Oracle では round(tan (くdecimal>), 14) という構文を使用し ます。
atan	atan(decimal)	10 進数	decimal パラメータの逆正接を返します。
			注 : Oracle では round(atan (くdecimal>), 14) という構文を使用し ます。
atan2	atan2 atan2(decimal1, 10 進数 decimal2)	10 進数	正方向のx軸と,原点から座標 (y,x)が作る 角度(ラジアン)を返します。 decimal1 で x 座 標,decimal2 で y 座標を指定します。
			注: MS SQL では atn2 に変換されま す。Oracle では round(atan2 (< decimal1>), 14) という構文を使用 します。
tanh	tanh(decimal)) 10進数 decimal パラメー す。	decimal パラメータの双曲線正接を返します。
			注: MS SQL では, tanh 式を使用して 上記のロジックを実装します。Oracle で は round(tanh(< decimal >), 14) という 構文を使用します。
sqrt	sqrt(decimal)	10 進数	decimal パラメータの平方根を返します。
		注 : Oracle では round(sqrt (< decimal >), 14) という構文を使用し ます。	

関数	シグネチャ	戻り値 タイ プ	説明
ехр	exp(decimal)	10 進数	eを底とする decimal パラメータのべき乗を返 します。e = 2.71828183 となります。
			注 : Oracle では round(exp (くdecimal>), 14) という構文を使用し ます。
sign	sign(decimal)	10 進数	数値の符号を示す値を返します。数値が負 の場合, sign は-1を返します。0の場 合, sign は0を返します。正の場合, sign は1を返します。
			注: MS SQL では sign 式で上記のロ ジックを実装し, CAST(sign (< decimal >) AS int) という構文を使 用します。
floor	floor(decimal)	整数	指定した decimal 引数の値以下で,最大の 整数を返します。
In	In(decimal)	10 進数	decimal 引数の自然対数を返します。
			注: MS SQL では log に変換されま す。Oracle では round(In (< decimal >), 14) という構文を使用し ます。
abs	abs(decimal)	10進数	絶対値を返します。
round round(decimal, integer)	round(decimal, integer)	10 進数	decimal を, integer で指定した小数点以下 の桁数まで四捨五入します。小数点よりも 左の桁で四捨五入する場合は, integer パラ メータに負の値を指定します。
			注: MS SQL では, integer の値に0が 含まれるかどうかによって, CAST(round (<decimal>, <integer>) AS int)ま たは CAST(round(<decimal>, <integer>) AS float)という構文を使 用します。</integer></decimal></integer></decimal>

関数	シグネチャ	戻り値タイ プ	説明	
mod	mod mod(decimal1, 1 decimal2)	10進数	decimal1を decimal2 で除算した余りを返します。	
			注: MS SQL では % に変換さ れ, くdecimal1> % くdecimal2> と いう構文を使用します。	
trunc_number	trunc_number (decimal, integer)	10進数	decimal を, integer で指定した小数点以下 の桁数まで切り捨てます。 integer を省略する と, 小数点以下を切り捨てます。	
			注: MS SQL では, truncation 式を使用 して上記のロジックを実装します。Oracle では trunc に変換されます。	
str	str(decimal, integer1.	文字列	数値データを文字データに変換します。	
	integer2)		注: Oracle では, string construction 式を使用して上記のロジックを実装しま す。	
ceil	ceil ceil(decimal) 10 à	10進数	decimal パラメータで指定した値以上で, 最 小の整数を返します。	
			注 : MS SQL では ceiling に変換されま す。	
型変換				
to_number	to_number 10 進数 (string)	10進数	文字列を数値に変換します。	
		注: MS SQL では, CAST(<string> AS float) という構文を使用します。</string>		

関数	シグネチャ	戻り値タイ プ	説明
number_to_char	umber_to_char number_to_char	文字列	数値を文字列に変換します。
			注: MS SQL では, CAST(<decimal> AS varchar(50))</decimal> という構文を使用しま す。Oracle では to_char に変換されま す。
char_to_char	char_to_char (string)	文字列	NCHAR, NVARCHAR2, CLOB, NCLOB のデータをデータベース文字セットに変換しま す。
			注: MS SQL では, CAST(<string></string> AS varchar(50)) という構文を使用しま す。Oracle では to_char に変換されま す。
datetime_to_ char	datetime_to_ char (expression)	文字列	date 型または datetime 型を文字列に変換し ます。
			注: MS SQL では, convert(varchar , < date> , 121) という構文を使用しま す。Oracle では to_char に変換さ れ, to_char(< date> , 'YYYY-MM-DD HH24:MI:SS:FF3') という構文を使用し ます。
その他	1	1	/
nullif	nullif (expression1, expression2)	式	expression1とexpression2を比較しま す。expression1とexpression2が等しい場 合,Nullを返します。それ以外の場合は expression1を返します。
coalesce	coalesce()	式	引数の中で最初に出現するNull以外の式 を返します。優先順位が最も高いパラメータ のデータ型で、戻り値を返します。

関数	シグネチャ	戻り値 タイ プ	説明
isnull isnull(check_ expression, replace_	isnull(check_ expression, replace_ expression)	式	Null 値が検出されたら, 値を代入しま す。 check_expression が Null の場 合, replace_expression が返されます。
			注: Oracle では nvl に変換されます。
日付			·
currentdate	currentdate()	日付	現在の日付を返します。
			注: MS SQL では, CAST(CAST (getdate() AS date) AS datetime) という 構文を使用します。Oracle では to_date (to_char(sysdate)) という構文を使用し ます。
dateadd	dateadd dateadd(integer, 日 date)	r, 日付	date パラメータに,指定した日数を加算しま す。 • integer:加算する日数。 • date:日付。
			注: MS SQL では, dateadd(DAY, <int days>, <date date="">) という構文を使 用します。Oracle では + に変換さ れ, <int days=""> + <date date=""> という 構文を使用します。</date></int></date></int
datediff	datediff datediff(start_ 整 date, end_date)	整数	start_dateとend_dateで指定した日付の範 囲にある日数(符号付き整数)を返します。
			注: MS SQL では, datediff(DAY, < date>, < date>) という構文を使用 します。Oracle では - に変換され, trunc (< date> -< date>, 0) という構文を使 用します。

関数	シグネチャ	戻り値タイ プ	説明
get_time	get_time()	日時	現在の日付と時刻を返します。
			注: MS SQL では getdate に変換され, convert(datetime, getdate(), 126)という構文を使用します。Oracle ではLOCALTIMESTAMP に変換されます。
trunc_date	trunc_date(date, string_format)	日付	指定した単位まで日付を切り捨てます。切り 捨てに適用する測定単位は string_format で指定します。サポートされる形 式:year, y, yy, yyyy, q, quarter, mm, mo nth, d, dd, day, hh, mi
			注 : MS SQL では dateadd に変換され, dateadd(< unquoted string_ format>, datediff(< unquoted string_format>, 0, < date>), 0) という 構文を使用します。Oracle では trunc に 変換され、trunc(< date>, < string_ format> という構文を使用します。
to_date	to_date(string)	日付	文字列を日付に変換します。
			注: MS SQL では, CAST(< string> AS datetime)という構文を使用しま す。Oracle では, to_date(< string>, 'YYYY-MM-DD')という構文を使用しま す。
timestamp_tz	timestamp_tz()	文字列	現在のサーバのタイムゾーンを返します。
			注: MS SQL では sysdatetimeoffset に 変換されます。Oracle では CURRENT_ TIMESTAMP に変換されます。この関数 は、MS SQL Server 2005 ではサポートさ れていません。
関数	シグネチャ	戻り値タイ プ	説明
----------------------------	--------------------------	--------------------------	---
from_tz from_tz string)	from_tz(date, string)	日付	タイムスタンプ値 (date) とタイムゾーン(string) を, タイムゾーン付きのタイムスタンプに変換し ます。
			注: MS SQL では time stamp 式と zone 式を使用して上記のロジックを実装しま す。この関数は、MS SQL Server 2005 で はサポートされていません。
sysdatetimeoffs et	sysdatetimeoffs et()	タイムゾー ン付き datetime	データベースが格納されているシステムのシス テム日時(小数秒を含む)とタイムゾーンを返 します。
			注 : Oracle では SYSTIMESTAMP に変 換されます。 この関数 は, MS SQL Server 2005 ではサポートさ れていません。
getyear	getyear(date)	整数	指定した date の年を示す整数値を返しま す。
			注: MS SQL では year に変換されま す。Oracle では to_char に変換さ れ, CAST(to_char(< date>, 'yyyy') AS number) という構文を使用します。
getmonth getmonth(da	getmonth(date)	e) 整数	指定した date の月を示す整数値を返しま す。
			注: MS SQL では month に変換されま す。Oracle では to_char に変換さ れ, CAST(to_char(< date>, 'mm') AS number) という構文を使用します。

関数	シグネチャ	戻り値 <i>タ</i> イ プ	説明
getday	getday(date)	整数	指定した date の日付を示す整数値を返しま す。
datepart	datepart(string_ datepart, date)	整数	指定した date について, 指定した string_ datepart を示す整数値を返します。 注: MS SQL では, datepart (< unquoted string_datepart>, < date>) という構文を使用しま す。Oracle では, datepart 式を使用して 上記のロジックを実装します。
datename	datename (string_datepart, date)	文字列	指定した date について,指定した string_ datepart を示す文字列を返します。サポート される書式 は, yyyy, yy, year, q, quarter, m, month, d, dd, day, hh, mi です。 注: MS SQL では, datename (< unquoted string_datepart>, < date>) という構文を使用しま す。Oracle では, datename 式を使用し て上記のロジックを実装します。
条件	1	1	
decode	decode (expression, search, result [, search, result] [, default])	式	IF-THEN-ELSE ステートメントの機能を果た します。expression と search 値を 1 つずつ比 較します。等しい search 値が見つかった場 合, Oracle データベースは該当する結果を返 します。一致しない場合, default を返しま す。default を省略すると, null を返します。 注: MS SQL では, case-when-else 式を 使用して上記のロジックを実装します。

関数	シグネチャ	戻り値タイ プ	説明
greatest greate	greatest()	式	パラメータのリストで最大の値を返します。
			注: MS SQL では, greatest 式を使用し て上記のロジックを実装します。
least least()	式	パラメータのリストで最小の値を返します。	
			注: MS SQL では, least 式を使用して 上記のロジックを実装します。

特殊な日付操作

注: 次の関数は、要求された日付をそれぞれ該当するデータ型で返します。MS SQL では、yyyy-MM-ddの形式で日付を要求すると、datetime に変換されます。Oracle では、to_date(< dd-MMM-yy 形式の日付 > , DD-MON-YY) という構文を使用します。

firstDayOfCurre ntMonth	firstDayOfCurre ntMonth()	日付	現在の月の最初の日付を返します。
firstDayOfCurre ntWeek	firstDayOfCurre ntWeek()	日付	現在の週の最初の日付を返します。
firstDayOfCurre ntYear	firstDayOfCurre ntYear()	日付	現在の年の最初の日付を返します。
firstDayOfNext Month	firstDayOfNext Month()	日付	次の月の最初の日付を返します。
firstDayOfNext Week	firstDayOfNext Week()	日付	次の週の最初の日付を返します。
firstDayOfNext Year	firstDayOfNext Year()	日付	次の年の最初の日付を返します。
firstDayOfPrevi ousMonth	firstDayOfPrevi ousMonth()	日付	前の月の最初の日付を返します。
firstDayOfPrevi ousWeek	firstDayOfPrevi ousWeek()	日付	前の週の最初の日付を返します。
firstDayOfPrevi ousYear	firstDayOfPrevi ousYear()	日付	前の年の最初の日付を返します。

関数	シグネチャ	戻り値タイ プ	説明
lastDayOfCurre ntMonth	lastDayOfCurre ntMonth()	日付	現在の月の最後の日付を返します。
lastDayOfCurre ntWeek	lastDayOfCurre ntWeek()	日付	現在の週の最後の日付を返します。
lastDayOfCurre ntYear	lastDayOfCurre ntYear()	日付	現在の年の最後の日付を返します。
lastDayOfNext Month	lastDayOfNext Month()	日付	次の月の最後の日付を返します。
lastDayOfNext Week	lastDayOfNext Week()	日付	次の週の最後の日付を返します。
lastDayOfNext Year	lastDayOfNext Year()	日付	次の年の最後の日付を返します。
lastDayOfPrevi ousMonth	lastDayOfPrevi ousMonth()	日付	前の月の最後の日付を返します。
lastDayOfPrevi ousWeek	lastDayOfPrevi ousWeek()	日付	前の週の最後の日付を返します。
lastDayOfPrevi ousYear	lastDayOfPrevi ousYear()	日付	前の年の最後の日付を返します。

ビジネス・ビューのユーザ・インタフェース

本項の内容

[ビジネスビュー]ページ	401
[リンクのプロパティ]ダイアログ・ボックス	. 407
[関連エンティティの追加]ダイアログ・ボックス	408

[ビジネスビュー]ページ

[ビジネスビュー]ページでは、ビジネス・ビューを作成および管理します。

旧 保存
日 12- - A Application Composent - A Application Composent - A Application Composent - A 27 + 72/- 72/- 72/- 72/- 72/- 72/- 72/- 72/-
a, β = 3/h (y) - λ2kho - a, 8/h (y) - λ2kho - a, 8/h (- λ/k)/λ - a, 8/h (- λ/k)/\lambda - a, 8
A 37 k A 27 k to 2 2 2 1 2 2 2 2 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2
▲ テスト インスタンス テスト インスタンス (図 テスト (test) 図 ローム サイクル (rol 図 ローム
→ TAF 129F 73FM9 V AF-92 (status) Performance Cent (1)
→ A bu-A 元要件を持つ要 □ フ-マイン2127 □ □ CO/P-23_20/Rin □ 7/2-A (b) parter(jo)
A トレース先要件を持つ要 テスト test_id) コー サブジェクト (garen Karte) A Funda teste
▲ ペースライン 🔽 テストインスタンス 🔪 🗆 ステータス (status) 🔲 説明 (description)
A リリース I F テストインスタンス C ステップ (steps) S 添付 (has_attachmer
→ A リース サイクル アンド ビット Cycle ステップ パラメータ アンド Cycle ステップ パラメータ アンド Cycle ステップ パラメータ アンド Cycle ステップ パラメータ
ふ リンクされた不具合を持つ レング メンク アイリング エロアイベー 来にす のんてる… のんてる…
A リングされた不具合を持つ test_instance.id アストインスタンス
- A リンクされた不具合を持つ V test_instance tes… ラストインスタンス…
→ A リングされた奥什を持たな IV test_instance.cy テスト セット ID
- A リンク24に要件を持たな ・ いうなかまではたっこ ・ test.name テスト名
A 自分が作成した要件 DGL クエリビルタ
A 自分が設計したテスト Select test_instance id.
The second secon

アクセス方法	 マストヘッドで、 > [カスタマイズ]を選択します。[プロジェクト カス タマイズ]ページが表示されます。 [プロジェクト カスタマイズ]ウィンドウの左側の表示枠で、[ビジネス ビュー]をクリックします。
参照情報	「ビジネス・ビューの作成と管理」(382ページ)

[ビジネスビュー]ページの共通要素

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI要素	説明
🖺 保存	[ビジネスビュー]ページで行った変更内容を保存します。

UI要素	説明
🧻 ビューの追加	[新規ビュー]ダイアログ・ボックスが開きます。 次の内容を入力します。
	 ラベル:識別用にビューに割り当てる名前。たとえば、ビュー・ツリー内や、アナリシス・ビュー・モジュールでビューを選択すると、ビューはラベル順に表示されます。ラベルは、選択したフィールド・グリッドで変更できます。詳細については、「<選択したフィールド・グリッド>」(405ページ)を参照してください。
	• テクニカル名 : DQL クエリの一部として使用されるビューの名前。空白 文字は指定できません。
	[OK]をクリックします。 ビューがビュー・ツリーに追加されます。
🗓 ビューの複製	選択したビューを複製します。複製されたビューがビュー・ツリーに追加さ れます。
🔀 ビューの削除	選択したビューを削除します。
	注: ビューを削除すると、そのビューに基づくレポート やグラフを表示で きなくなります。
🛷 すべて検証	すべてのビューを検証します。
< ビューのエクスポート	[名前を付けて保存]ダイアログ・ボックスが開きます。選択したビュー は,.xml ファイルとして保存できます。
	ヒント: ビューを複数選択するには,CTRL キーを押しながら選択します。
🚸 ビューのインポート	[開く]ダイアログ・ボックスが開き, ビューをインポートします。
	注:標準設定では、インポートしたビューは無効になります。

UI要素	説明
ビュー・ツリー	事前定義のビューとユーザが定義したビューが表示されます。 ビュー名の 横にあるアイコンは, ビューのステータスを示します。
	🔹 🚣 ビューは有効であり,発行されています。
	• 🔏 ビューは有効ですが,発行されていません。
	• 😢 ビューは無効です。
	注: ビューは, ラベル順に表 示されます。 ラベルにカーソルを置くとツー ルヒントが開き, ビューの テクニカル名 が表 示されます。

[クエリデザイナ]タブ

このタブでは、ビジネス・ビューをカスタマイズできます。

次に、ユーザ・インタフェースの詳細を説明します(ラベルなしの要素は、山カッコで囲みます)。

UI 要素	説明
Ľı− ▼	[クエリ デザイナ]タブのビューを選択します。 矢印をクリックすると, 次のビューを選択できます。
	• QBE のみ: DQL クエリ・ビルダを非表示にします。
	• DQL のみ: DQL クエリ・ビルダのみを表示します。
	• QBE および DQL: [クエリ デザイナ] タブ全体を表示しま す。これが標準設定のビューです。
😵 エンティティの追加	タブの右側に[モデル]表示枠が開き,選択したプロジェクト・エンティティをビューに追加できます。詳細については, [モ デル]表示枠を参照してください。
🤹 関連エンティティの追加	[関連エンティティの追加]ダイアログ・ボックスが開き,選択したエンティティ間の結合を定義できます。
	ユーザ・インタフェースの詳細については、「[関連エンティティ の追加]ダイアログ・ボックス」(408ページ)を参照してくださ い。
② プレビュー	タブの下に[クエリ結果]表示枠が開きます。詳細について は, [クエリ結果]表示枠を参照してください。

UI要素	説明
💉 ビューの検証	選択したビューを検証します。次のチェックが実行されます。
	• DQL構文が正しいかどうか
	 クエリに、選択したエンティティのフィールドのみが含まれているかどうか
ステータス 発行済み	選択したビューをレポート作成で利用可能にするかどうかを 定義します。
	• 発行済み:ビューは利用可能です。
	• 未発行:ビューは利用できません。
	注:
	 ビューを[未発行]から[発行済み]に変更すると、検証を行ってから、ステータスが変更されます。
	 ビューを[発行済み]から[未発行]に変更すると、そのビューに基づくレポートやグラフを表示できなくなります。
Co SQL クエリの表示	[SQL クエリ]ダイアログ・ボックスが開き, データベース・サーバ で実行される SQL クエリが表示されます。
	無効なビュー : [メッセージ]タブに, ビューの問題の詳細な内 容が表示されます。 メッセージにカーソルを置くとツールヒント が開き, メッセージ全文が表示されます。
[メイン]表示枠	くプロジェクト・エンティティ> のダイアログ・ボックスが開き, ビューに追加されているエンティティと, エンティティ間で定義さ れている関係が表示されます。
	 くプロジェクト・エンティティ>のダイアログ・ボックスの詳細 については、<プロジェクト・エンティティ>のダイアログ・ ボックスを参照してください。
	 エンティティ間の関係の定義の詳細については、「ビジネス・ビューの作成と管理」(382ページ)を参照してください

UI要素	説明
くプロジェクト・エンティティ> のダイ アログ・ボックス	プロジェクト・エンティティをビューに追加すると、[メイン]表示 枠でこのダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボック スでは、エンティティ内で利用可能なフィールドがすべて表示 されます。チェックボックスを選択すると、フィールドがビューに 追加されます。 標準設定値:すべてのフィールドがビューに追加されます。 チェックボックスは選択されません。
[モデル]表示枠	利用可能なプロジェクト・エンティティが表示されます。 エンティティをビューに追加するには、選択してから[追加]ボ タンをクリックします。または、[メイン]表示枠にエンティ ティをドラッグすることもできます。 注: エンティティはラベル順に表示され、テクニカル名が 括弧付きで表示されます。
<選択したフィールド・グリッド>	エンティティ・フィールドのフィルタ条件を定義します。 グリッドにフィールドを追加するには、[メイン]表示枠の<プ ロジェクト・エンティティ>のダイアログ・ボックスで、フィールドの チェックボックスを選択します。 とント:フィールドのラベルを変更するには、[エイリアス] カラムを使用します。 注:サブ・エンティティのフィールドのラベルは変更できません。
DQL クエリ・ビルダ	ビジネス・ビューのクエリを表示します。 エンティティの追加や関係の定義を行うと、クエリは自動的 に更新されます。 ビューを作成および編集するには、DQL クエリ・ビルダにクエリ を直接入力します。DQLの操作に関する詳細については、 「DQLの使用」(384ページ)を参照してください。

UI要素	説明
[クエリ結果]表示枠	[クエリ デザイナ]タブのツールバーで[プレビュー]をクリックする と開きます。 次の情報を表示します。
	• クエリ結果 :有効なビューのみ。ビューのプレビューが表示 されます。
	• クエリ・メッセージ:無効なビューのみ。ビューの問題の詳細な内容を示すメッセージが表示されます。メッセージに カーソルを置くとツールヒントが開き、メッセージ全文が表示されます。

[詳細]タブ

このタブでは、選択したビューの詳細を表示または編集できます。

次に、ユーザ・インタフェースの詳細を説明します。

UI 要素	説明
ラベル	識別用にビューに割り当てる名前。たとえば、ビュー・ツリー内や、アナリシス・ ビュー・モジュールでビューを選択すると、ビューはラベル順に表示されます。
	ヒント: ラベルは,選択したフィールド・グリッドで変更できます。詳細については,「<選択したフィールド・グリッド>」(405ページ)を参照してください。
テクニカル名	DQL クエリの一部として使用されるビューの名前。
	注: 空白文字は指定できません。
[説明]タブ	ビューの説明。テキスト・ボックス内 でクリックすると、テキストの書式設定とスペル・チェックのためのツールバーが表示されます。

[クエリメッセージ]タブ

ビューで発生している問題の詳細を示すメッセージが表示されます。

次に、ユーザ・インタフェースの詳細を説明します。

UI 要素	説明
メッセージの重 要 度	エラーの重要度。
	注: ビジネス・ビューは、警告メッセージが表示されていても発行できます。 ただし、エラーが表示されている場合は発行できません。またー部のビジネス・ビューでは、警告メッセージが表示されている場合、ビジネス・ビュー・ レポートが作成されないことがあります。たとえば、フィールドやエイリアスが 重複した状態でビジネス・ビューを作成すると警告メッセージが表示され、 レポートは作成されません。
メッセージ・テキス ト	エラー・メッセージ全体が表示されます。

[リンクのプロパティ]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、エンティティ間の関係を編集します。

リンクのプロパティ	×		
左のオブジェクト	右のオブジェクト		
test_instance	release_cycle		
▶ 左からすべて選択	右からすべて選択 🗖		
結合式			
test_instance.assign_royc = release_cycle.id			
	OK キャンセル		

アクセス方法	関連付けられた2つのエンティティをつなぐラインをダブルクリックしま す。
参照情報	「ビジネス・ビューの作成と管理」(382ページ)

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI要素	説明
左のオブジェクト/右のオブジェクト	結合されたエンティティのテクニカル名が表示されます。
左からすべて選択/右からすべて 選択	内部結合, 左結合, 右結合, 外部結合をチェックボック スで選択します。
結合式	結合式を編集できます。

[関連エンティティの追加]ダイアログ・ボックス

[関連エンティティの追加]ダイアログ・ボックスでは、プロジェクト・エンティティ間の結合を定義します。 このダイアログ・ボックスでは、ソース・エンティティに関連するすべてのエンティティから選択できます。

関連エンティティの追加		×
ソース エンティティ:	release_cycle	
ターゲット エンティティ:	要件 (requirement)	
関係名:	リリース サイクルから要件へ	
OK(<u>O</u>) キャンセル(<u>O</u>)		

アクセス方 法	 [クエリデザイナ]タブの[メイン]表示枠でくプロジェクト・エンティティ>のダイアログ・ボックスを選択し、ツールバーの[関連エンティティの追加]をクリックします。 エンティティの追加先となるビューで別のエンティティとの関係がすでに定義されている場合、自動的に開きます。
参照情報	「ビジネス・ビューの作成と管理」(382ページ)

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI 要素	説明
ソース・エンティ ティ	現在選択されているエンティティ。
ターゲット・エン ティティ	ドロップダウン・リストからターゲット・エンティティを選択します。利用可能なエン ティティが、ラベルとテクニカル名(括弧内)と一緒に表示されます。
関係名	ソース・エンティティとターゲット・エンティティの関係に付けられた名前が表示されます。関係名が複数存在する場合,ドロップダウン・リストから名前を選択できます。

第25章: Business Process Testing の設定

この章では、HP Application Lifecycle Management(ALM)でビジネス・コンポーネントを作成するための Business Process Testingの設定方法について説明します。

本章の内容

Business Process Testing の設定について	410
[ビジネス プロセス テスト]ページ	410

Business Process Testing の設定について

Business Process Testing の追加オプション(ビジネス・コンポーネント作成時の手動デザイン・ステップの自動作成など)を設定できます。

ALM での Business Process Testing の使用の詳細については, 『HP Business Process Testing ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

[ビジネス プロセス テスト]ページ

ビジネス・プロセス・テストのカスタマイズ・ページでは、 プロジェクト 管理者が Business Process Testing をカスタマイズできます。

アクセス方法	ALM マストヘッドで, 🍄 > [カスタマイズ]を選 択します。 サイドバーの[ビジ ネス プロセス テスト]を選 択します。
関連タスク	『HP Business Process Testing ユーザーズ・ガイド』

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI 要素	説明
手動実装で新規コ ンポーネントを自動 的に作成する	オンにすると、Business Process Testing は新しいコンポーネントを手動実装であるとみなし、ビジネス・コンポーネントの作成時に、手動デザイン・ステップの作成のために新規コンポーネントを自動的に用意します。

第26章: Sprinter の設定

この章では、HP Application Lifecycle Management(ALM)でテストを手動で実行するためのHP Sprinter の設定方法について説明します。

ALM のエディション: Sprinter の機能は **ALM Essentials Edition** または **Performance Center Edition** では利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

本章の内容

Sprinter の設定について	412
Sprinter ページ	412

Sprinter の設定について

プロジェクト管理者として, Sprinter, マニュアル・ランナーのいずれかまたは両方を使用することで, プロジェクト内でテストを手動で実行できます。標準設定で, Sprinter とマニュアル・ランナーの両方でテストを手動で実行できます。標準設定のスクリーン・キャプチャ機能など, Sprinter で作業するためのその他のオプションも設定できます。

ALM でテストを手動で実行する際の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユー ザーズ・ガイド』を参照してください。Sprinterの詳細については、HP Application Lifecycle Management の[アドイン]ページ([**ヘルプ**]>[**アドイン**])からアクセスできる『HP Sprinter ユーザー ズ・ガイド』を参照してください。

Sprinter ページ

このページでは、Sprinter 機能の有効, 無効を切り替えられます。 無効の機能は Sprinter ユーザ・インタフェースに表示されますが、利用できません。

0					
~		m	÷	-	~
-	L		IL.		

🖺 保存

手動テストの実行を有効にする対象

- マニュアル ランナー
- Sprinter
- ◎ マニュアル ランナーとSprinter の両方

画面キャプチャ _

- テスト中の全画像の保存を有効にする
- 失敗したテストの全画像の保存を有効にする
- 失敗したステップの全画像の保存を有効にする(ステップのあるテストのみ)
- 🔘 画像の保存を無効にする

🔽 マクロを許可する

- 🗹 データ挿入を許可する
- 🗹 Sprinter の実行モードのステップの編集を許可する
- 📃 ムービーの不具合への添付を許可する

```
ムービーの最大長 (分): 2
```

□ ステップのスナップショットをステップの添付として表示

アクセス方 法	[プロジェクト カスタマイズ]ウィンドウの左側の表示枠で, [Sprinter]をクリック
	します。

重要な情報	Sprinter ページにある設定により,Sprinter で有効な機能が制御されます。 ユーザは,さまざまな機能を実行するための,ALM内の適切なアクセス許可 が必要とします。
	[Sprinter でのステップの編集を許可する]を選択した場合を考えます。この 場合,ステップ編集が行える機能がSprinter内で有効になります。ただ し,ALM でテスト編集アクセス許可がないユーザは,テスト内のステップを編集 できません。
参照情報	「Sprinter の設定について」(412ページ)

次にユーザ・インタフェース要素について説明します。

UI要素	説明
📋 保存	Sprinter カスタマイズの変更を保存します。
手動テストの実行 を有効にする対象	オプションは次のとおりです。 • マニュアル・ランナー:マニュアル・ランナーでのみ手動テストを実行できま す。
	 Sprinter: Sprinter でのみ手動テストを実行できます。
	• マニュアル・ランナーと Sprinter の両方: (標準設定)マニュアル・ラン ナー, Sprinter で手動テストを実行できます。

UI要素	説明
画 面 キャプチャ	 Sprinterは、テスト内のすべての操作のスクリーン・キャプチャを一時的に 保存します。実行中にキャプチャする画像は、Sprinterの[設定]ダイア ログ・ボックスにある[実行]表示枠で指定します。
	 Sprinter の[設定]ダイアログ・ボックスの[実行]表示枠にある画像への アクセスは、次の設定で管理します。この設定により、テスト実行中に保 存する画像を制限できます。
	■ テスト中の全画像の保存を有効にする :実行中,すべての画像の格納を有効にします。
	注: テスト中に表示される画像をすべて保存すると、トラフィックが 増大して遅延が発生し、ALM リポジトリ上の領域も消費されま す。
	 失敗したテストの全画像の保存を有効にする:(標準設定)実行 中,失敗したテストのすべての画像の格納を有効にします。
	失敗したステップの全画像の保存を有効にする(ステップを持つテストのみ):実行中,失敗したステップのすべての画像の格納を有効にします。
	■ 画像の保存を無効にする : 実行中, すべての画像の格納を無効に します。
	 選択内容にかかわらず、テスト中、またはテストの最後にテスト結果から、不具合にスクリーン・キャプチャを添付することができます。
マクロの許可	Sprinter でのマクロの記録と実行を有効にします。 マクロは, Sprinter で Power Mode を使用したテスト実行にのみ利用できます。
データ挿入を許可 する	Sprinter のデータ挿入機能を有効にし、テスト・アプリケーション内のフィール ドにデータを自動的に入力できるようにします。 データ挿入は、 Sprinter で Power Mode を使用したテスト実行にのみ利用できます。
Sprinter でのス テ ッ プの編集を許可す る	テスト内のステップの名前,説明を追加,削除,変更できるようにします。 このオプションがクリアされている場合でも、ステップの実際の結果を変更したり、ステップにスクリーン・キャプチャを追加できます。

UI 要素	説明
不具合へのムー ビーの添付を許可 する	Sprinter のツール・サイドバー, ワークスペース・ツール・サイドバー, テスト結 果から不具合を開いているときに, 不具合に映像を添付できるようにしま す。
	• ムービーの最大長(分):不具合に添付できる映像の最長時間。各不 具合の映像の時間は、Sprinterの[スマート不具合設定]ダイアログ・ ボックスで設定します。この設定で定義された時間までの長さの映像を 不具合に添付できます。映像の最長許容時間は10分です。
	注:
	 不具合に添付できる映像の長さを大きくすると、ALMに不具合を 送信する時間が長くなり、ALMサーバでの必要ストレージが増大 します。
	 不具合に添付できる映像の長さは、ALMでの不具合に添付できる添付ファイルの最大サイズによって制限されることがあります。
ステップのスナップ ショットをステップの 添付ファイルとして 表示	Sprinter では, テスト・ステップにスナップショットを添付できます。 このパラメー タを使用すると, Sprinter で作成されたスナップショットを, ALM でテスト・ス テップの添付ファイルとして表示できます。

管理者ガイド 第26章: Sprinterの設定

第27章:ワークフロー・スクリプトの生成

ALM では, 不具合モジュールのダイアログ・ボックスで必要とされるカスタマイズを実行するためのスクリ プト・ジェネレータが提供されています。

ALM モジュールのユーザ・インタフェースのカスタマイズやユーザ操作の制御を行うワークフロー・スクリプトを記述する方法については、「ワークフローのカスタマイズの概要」(429ページ)を参照してください。

注: ワークフロー・スクリプトは、スクリプトを作成したユーザではなく、ログオン・ユーザの権限で実行されます。ログオン・ユーザに許可されていないアクションやデータの変更が含まれている場合や、使用する権限のないオブジェクトにアクセスする場合には、スクリプトは失敗します。したがって、高い権限を持つユーザがスクリプトを作成する場合には、スクリプトを実行する予定のグループに所属するユーザでテストを行ってください。

本章の内容

ワークフロー・スクリプトの生成について	418
不具合モジュールのフィールド・リストのカスタマイズ	419
不具合モジュールのダイアログ・ボックスのカスタマイズ	421

ワークフロー・スクリプトの生成について

[ワークフロー]ページには、スクリプト・ジェネレータとスクリプト・エディタへのリンクがあります。スクリプト・ ジェネレータでは、不具合モジュールのダイアログ・ボックス内にある入力フィールドをカスタマイズできま す。スクリプト・エディタでは、任意のALMモジュールのワークフローを制御するスクリプトを作成できま す。

Performance Center: ラボ管理では, [ワークフロー]ページはサポートされません。

[ワークフロー]ページを開くには、 [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの [ワークフロー] リンクをクリックします。

[ワークフロー]ページには、次のリンクがあります。

- スクリプト・ジェネレータ 不具合モジュール・リストのカスタム化: 不具合モジュールのダイアログ・ ボックスと不具合グリッド内のフィールドで表示されるフィールド・リストをカスタマイズします。詳細に ついては、「不具合モジュールのフィールド・リストのカスタマイズ」(419ページ)を参照してください。
- スクリプト・ジェネレータ [不具合の追加]フィールドのカスタム化: [新規不具合]ダイアログ・ ボックスの外観を変更します。詳細については、「不具合モジュールのダイアログ・ボックスのカスタマ イズ」(421ページ)を参照してください。
- スクリプト・ジェネレータ [不具合の詳細]フィールドのカスタム化: [不具合の詳細]ダイアログ・ ボックスの外観を変更します。詳細については、「不具合モジュールのダイアログ・ボックスのカスタマ イズ」(421ページ)を参照してください。
- スクリプト・エディタ: VBScript コードを記述して、任意のモジュールのALM ワークフローをカスタマイズします。適切なALM イベントにコードを配置することによって、対象となるユーザ・アクションが発生した時点でスクリプトをトリガできます。また、スクリプト・エディタでは、スクリプト・ジェネレータに

よって生成されたスクリプトを変更することも可能です。詳細については、「ワークフローのカスタマイズの概要」(429ページ)を参照してください。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ

テンプレート・プロジェクトを[プロジェクト カスタマイズ]で操作する場合, [**ワークフロー(共有)**]リンクを 使用してワークフローをカスタマイズします。テンプレート・プロジェクトで行ったワークフローのカスタマイ ズは、テンプレート・カスタマイズの適用時に、リンクされたプロジェクトに適用されます。 クロス・プロ ジェクトのカスタマイズの一部としてワークフロー・スクリプトをカスタマイズする方法の詳細については、 「スクリプト・エディタ」(432ページ)を参照してください。

ALM のエディション: クロス・プロジェクトのカスタマイズは, Quality Center Enterprise Edition で は利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

不具合モジュールのフィールド・リストのカスタマイズ

フィールド・リストとは、ユーザがフィールドで選択可能な値をドロップダウン・リストで表示するときの値のリストです。

不具合モジュールでは、別のフィールドの値に応じて、フィールドで異なるフィールド・リストを使用する 指定ができます。たとえば、[プロジェクト]フィールドの値に応じて、[検出されたバージョン]に表示す るリストを変更する設定が可能です。

注: このスクリプト・ジェネレータでフィールド・リストをカスタマイズできるのは, 不具合モジュールの みです。

フィールド・リストをカスタマイズするには、次のルールを定義する必要があります。

- 第 1次/第 2次規則:第 1次フィールドと第 2次フィールドを選択します。第 1次フィールドの値 を変更すると、第 2次フィールドの値リストが自動的に変更されます。たとえば、[プロジェクト]を 第 1次フィールド、[検出されたバージョン]を第 2次フィールドとして選択します。
- リスト比較規則:第1次フィールドの値ごとに,第2次フィールドで表示するリストを選択します。

注: 遷移 ルールが定義されているフィールドの値リストを変更するためにワークフローのカスタマイズを使用している場合は、ワークフロー・スクリプトと遷移 ルールの両方を満足するようにしか、フィールドを変更できません。詳細については、「遷移 ルールの設定」(295ページ)を参照してください。

フィールド・リストをカスタマイズするには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [**ワークフロー**]をクリックします。[ワーク フロー] ページが開きます。
- 2. [スクリプト ジェネレータ 不具合モジュールリストのカスタム化]リンクをクリックします。[スクリプト

ジェネレータ-不具合モジュールリストのカスタム化]ダイアログ・ボックスが開きます。

🗖 スクリプト ジェネレータ - リストのカスタム化	<u>- 0 ×</u>
1. 第 1 次/第 2 次規則: "第 1 次" および "第 2 次" フィールドを選択する:	×
第1次の<第 <u>1次フィールドの選択></u> 値が変更された場合、< <u>第2次フィールドの選択></u> の選択リストが変更される	ミす。
2.リスト比較規則・"第1次" フィールドが値を含む場合は、"第2次" フィールドに指定された選択リストを使用する。	× 🙀
	ヘルプ

- 3. [第1次/第2次規則]で,第1次フィールドと第2次フィールドを選択します。
 - ルールを設定するには、**く第1次フィールドの選択>**をクリックしてフィールド名を選択します。**く第2次フィールドの選択>**をクリックしてフィールド名を選択します。
 - 新しいルールを追加するには、[第1次/第2次規則]ボタン をクリックします。< <第1次 フィールドの選択>と<第2次フィールドの選択>のフィールド名を選択します。
 - 規則を削除するには、規則を選択して[第1次規則/第2次規則の削除]ボタンをクリックします。[はい]ボタンをクリックして、確定します。
- 4. [第1次/第2次規則]で、リスト比較規則の設定対象となる第1次/第2次規則を選択します。

🗖 スクリプト ジェネレータ - リストのカスタム化	
 第1:次/第2次規則: "第1:次" および "第2:次" フィールドを選択する: 	× 🛓
第1次の <u>プロジェクト</u> 値が変更された場合、 <u>後出されたパージョン</u> の選択リストが変更されます。	
第1 次の <u>不具合 ID</u> 値が変更された場合、 <u>ステータス</u> の選択リストが変更されます。	
2.リスト比較規則。"第1:次"フィールドが値を含む場合は、"第2:次"フィールドに指定された選択リストを使用する。	× 🛓
第1次フィールドの値は、 <u>Mercury Tours (HTML Edition)</u> 第2次フィールドのリストから <u>くリストの選択></u> 選択してく	どおい。
第1次フィールドの値は、 <u>Mercury Tours (Java Edition)</u> 第2次フィールドのリストから <u>くリストの選択</u> >選択してくだ	さい。
第1次フィールドの他は、Mercury Tours Administration第2次フィールドのリストから <u>(リストの変形)</u> 選択して(ス 第1)とコームリアの使用すべたのまま、第2)とコームリアのレストからないました。2017年の第4回、2017年	136%
第1次ノイールドの回ば、1回の人ノノン第2次ノイールドのリスドルウムノスドの通知ン選択していたでい。	
変更をスクリプトに適用 適用して表示 閉じる	ヘルプ

- 5. [リスト比較規則]で,第2次フィールドで使用するフィールド・リストを,第1次フィールドに入力 する値ごとに選択します。
 - 定義済みの第1次フィールド値に規則を設定するには、 **<リストの選択>**をクリックしてリスト名を選択します。
 - 未定義の第1次フィールド値にルールを設定するには、<値の入力>をクリックして第1次 フィールド値を入力します。Enter キーを押します。
 - 新しいリスト比較規則を追加するには、[リスト比較規則の追加]ボタンをクリックします。< (値の入力)をクリックし、第1次フィールド値を入力します。< リストの選択)をクリックしてリスト名を選択します。</p>
 - リスト比較規則を削除するには、ルールを選択して[リスト比較規則の削除]ボタン 8/2 をクリックします。[はい]ボタンをクリックして、確定します。
- 6. 変更を保存するには、次のいずれかを実行します。
 - [変更をスクリプトに適用]ボタンをクリックすると、変更内容を保存してスクリプト・ジェネレータ を閉じます。
 - [適用して表示]ボタンをクリックすると、変更内容を保存し、生成されたスクリプトをスクリプト・エディタで表示します。

スクリプト・ジェネレータで生成されたスクリプトをスクリプト・エディタで変更すると、次回スクリプト・ エディタを実行したときに変更内容は上書きされてしまいます。したがって、生成されたスクリプト を変更する場合は、変更の前に名前を付けることをお勧めします。スクリプト・エディタについての 詳細は、「ワークフロー・スクリプト・エディタの操作」(431ページ)を参照してください。

不具合モジュールのダイアログ・ボックスのカスタマイズ

[新規不具合]ダイアログ・ボックスと[不具合の詳細]ダイアログ・ボックスの外観を変更するには、 ユーザ・グループごとに表示するフィールドを設定します。また、ダイアログ・ボックスでのフィールドの表示順序をユーザ・グループごとに設定することもできます。

注: このワークフローのカスタマイズ例では、特定のユーザ・グループのみに表示するフィールドの設定が可能ですが、設定できるのはダイアログ・ボックスで表示するフィールドのみです。モジュール・ グリッドで表示するフィールドを設定するには、カスタマイズの[グループとアクセス許可]モジュール を使用してください。タスクの詳細については、「ユーザ・グループに対するデータ非表示」(298 ページ)を参照してください。

たとえば、開発者の権限を持つユーザのみに[責任者]フィールドと[優先度]フィールドを表示する 設定が可能です。また、このユーザ・グループについて、[責任者]フィールドを[優先度]フィールドの 前に表示する設定もできます。 **注:** フィールドを非表示にするには、[サイト設定]タブで「ENABLE_COLUMN_VISIBILITY_ TRACKING」(203ページ) パラメータを設定します。

すべてのユーザ・グループを対象にしたカスタマイズを行うには、スクリプト・エディタでスクリプトを記述します。詳細については、「例:不具合モジュールのダイアログ・ボックスのカスタマイズ」(498ページ)を参照してください。

注: このスクリプト・ジェネレータでフィールド・リストをカスタマイズできるのは,不具合モジュールのみです。

ユーザ・グループごとに不具合モジュールのダイアログ・ボックスをカスタマイズするには、次の手順を実行します。

- 1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [ワークフロー]をクリックします。[ワーク フロー]ページが開きます。
- 2. [新規不具合]ダイアログ・ボックスの外観を変更するには、 [スクリプト ジェネレータ [不具合の 追加]フィールドのカスタム化]リンクをクリックします。 [スクリプト ジェネレータ] - [不具合の追加] フィールドのカスタム化]ダイアログ・ボックスが開きます。

スクリプト ジェネレーター 不具合の逆	宣加 フィールドのカスタム化	×
ユーザ グループ ロA テス タ		-
利用可能なフィールド	表示(必要なフィールドをチェックする) マページ1 「大具合 ID 「ホ具合 ID 「糸了日 「糸了「ージョン 「検出者 検出サイクル 検出し 「検出されたバージョン 「スキの正時間 「大具合 ID	
変更をスクリプトに適用		ヘルプ

[不具合の詳細]ダイアログ・ボックスの外観を変更するには、 [スクリプト ジェネレータ - [不具合の詳細]フィールドのカスタム化]リンクをクリックします。 [スクリプト ジェネレータ] - [不具合の詳細]フィールドのカスタム化]ダイアログ・ボックスが開きます。

スクリプト ジェネレーター 不具合の言	洋細 フィールドのカスタム化
ユーザ グループ 🛛 🔍 🗛 テスタ	•
利用可能なフィールド	 表示 (必要なフィールドをチェックする) マページ1 実際の修正時間 不具合 ID 不具合 ID 除了日 終了「 総了バージョン 総理サイクル 検出サイクル 検出リリース 検出とれたバージョン コメント 予定修正時間
変更をスクリプトに適用] 適用して表示 閉じる ヘルブ

[利用可能なフィールド]には、表示可能なすべてのフィールドの名前が表示されます。[表示 フィールド]には、選択したユーザ・グループで現在表示されているフィールドの名前と、ソート優 先度が表示されます。

- 3. [**ユーザグループ**]のリストから, カスタマイズするユーザ・グループを選択します。
- 4. フィールド名を選択して矢印ボタン([>]と[<])をクリックすると、[利用可能なフィールド]と[表示 フィールド]間で項目を移動できます。二重矢印ボタン([>>]または[<<])をクリックすると、リスト 間ですべての名前を一度に移動できます。また、フィールド名をドラッグしてリスト間を移動させる こともできます。
- 5. [表示フィールド]では、必要なフィールドの横にあるチェックボックスを選択すると、そのフィールド が必要なフィールドとして設定されます。このフィールドへの値の入力は必須です。また、フィール ドのタイトルは、[不具合の追加]ダイアログ・ボックスと[不具合の詳細]ダイアログ・ボックスで赤 色で表示されます。
- 3. 選択したユーザ・グループにフィールドを表示する順序は、上矢印と下矢印で設定できます
 ▲ ● また、フィールド名をドラッグして上または下に移動することもできます。
- 7. [不具合の追加]ダイアログ・ボックスと[不具合の詳細]ダイアログ・ボックスでは、1ページ以上 の入力ページを設定できます。標準設定では、すべてのフィールドを1ページで表示します。上 矢印と下矢印で、表示するページにフィールドを移動します。
- 8. 変更を保存するには、次のいずれかを実行します。
 - [変更をスクリプトに適用]ボタンをクリックすると、変更内容を保存してスクリプト・ジェネレータ を閉じます。

■ [適用して表示]ボタンをクリックすると、変更内容を保存し、生成されたスクリプトをスクリプト・エディタで表示します。

スクリプト・ジェネレータで生成されたスクリプトをスクリプト・エディタで変更すると、次回スクリプト・ エディタを実行したときに変更内容は上書きされてしまいます。したがって、生成されたスクリプト を変更する場合は、変更の前に名前を付けることをお勧めします。スクリプト・エディタについての 詳細は、「ワークフロー・スクリプト・エディタの操作」(431ページ)を参照してください。

第28章:アナリシス・メニューの管理

アナリシス・ビュー・モジュールの[アナリシスメニュー]タブでは, 要件, テスト計画, テスト・ラボ, 不具合, ビジネス・コンポーネントの各モジュールから生成されたグラフおよびプロジェクト・レポートの動作を 管理できます。

このタブには, モジュールごとにグループ分けされたすべてのグラフおよびプロジェクト・レポートが表示されます。各モジュールごとに次のタスクを実行できます。

- グラフまたはプロジェクト・レポートの追加または削除
- グラフまたはプロジェクト・レポートの設定
- グラフまたはプロジェクト・レポートの詳細の表示
- グラフまたはプロジェクト・レポートの生成
- プロジェクト・レポートのプレビュー

管理者ガイド 第28章:アナリシス・メニューの管理

第3部:ワークフローのカスタマイズ

管理者ガイド 第3部:ワークフローのカスタマイズ

第29章:ワークフローのカスタマイズの概要

ワークフロー・スクリプトを記述することにより、HP Application Lifecycle Management(ALM) ユーザ・インタフェースをカスタマイズし、ユーザが実行できる操作を制御できます。

ワークフローをカスタマイズするには、次の手順を実行します。

1. [プロジェクト カスタマイズ] ウィンド ウの左 側 の表 示 枠 で, [ワークフロー]をクリックします。[ワーク フロー] ページが開きます。

ワークフロー
常保存 メジャー変更 ▼
ワークフローは、モジュールのフィールドおよび値の制限と動的な変更を可能にします。次のツールが利用 できます。
スクリプト ジェネレーター 不具合モジュール リストのカスタム化
"第1 次フィールド"の入力値に依存する "第2次フィールド"として利用可能なリストの値を調整できま す。例えば、プロジェクトごとに利用可能なプロジェクト バージョンのリストを指定します。 "プロジェクト"を 第1 次フィールドに、「バージョン"を第2 次フィールドに選択し、各プロジェクトで一意のバージョン リス トを設定します。
<u>スクリプト ジェネレータ - [不具合の追加] フィールドのカスタム化</u>
「不具合の追加」 ダイアログ ボックスに各ユーザ グループに対して表示されるフィールドをカスタマイズで きるようにします。フィールド順序、およびフィールドが必須かどうかも指定できます。
<u>スクリブト ジェネレータ - [不具合の詳細] フィールドのカスタム化</u>
[不具合の詳細] ダイアログ ボックスに各ユーザ グループに対して表示されるフィールドをカスタマイズで きるようにします。フィールド順序、およびフィールドが必須かどうかも指定できます。
すべてのモジュールで VBScript コードの記述が可能しなります。また、スクリプト エディタを使用し て、上記のツールが生成したスクリプトを編集することもできます。

- 不具合モジュールのダイアログ・ボックスをカスタマイズするには、[ワークフロー]ページにある対応 する[スクリプト ジェネレータ]リンクをクリックします。この機能を使用するのに VBScript, ALM イベ ントとオブジェクトを理解している必要はありません。詳細については、「ワークフロー・スクリプトの 生成」(417ページ)を参照してください。
- 対応するイベント・プロシージャにコードを入力する方法でスクリプトを記述または変更するには、 スクリプト・エディタを開きます。ワークフロー・スクリプトを操作するには、VBScriptを理解している 必要があります。スクリプト・ジェネレータから、または直接的にスクリプト・エディタを開けます。
 - スクリプト・ジェネレータによって作成されるスクリプトに似たスクリプトを記述するには、対応する[スクリプトジェネレータ]リンクをクリックして、実行するカスタマイズを設定します。[スクリプトジェネレータ]ダイアログ・ボックスにある[適用して表示]ボタンをクリックします。スクリプト・エディタが開いて、生成されたスクリプトが表示されます。
 - 自分でスクリプトを作成するには、[スクリプトエディタ]リンクをクリックします。スクリプト・エディタ が開き、スクリプト・ツリーに既存イベント・プロシージャが一覧されます。

スクリプト・エディタについての詳細は、「ワークフロー・スクリプト・エディタの操作」(431ページ)を参照してください。

- どの ALM イベントがスクリプトをトリガするべきかを決定します。 関連 するユーザ操作 でスクリプト が呼び出されるようにするには、 適切なモジュールとイベントのプロシージャにコードを記述 する必 要があります。 詳細については、「ワークフロー・イベント・リファレンス」(445ページ)を参照してくだ さい。
- 5. スクリプトがどの ALM オブジェクトにアクセスする必要 があるのかを決定します。スクリプトは、関連 オブジェクトから得られる情報を基にしてカスタマイズを実行します。オブジェクトのメソッド とプロパ ティを使用して、ワークフローをカスタマイズします。詳細については、「ワークフロー・オブジェクトと プロパティの参照」(477ページ)を参照してください。
- サンプル・スクリプトを調べて、用途に合ったスクリプトを見つけてください。このガイドとHP セルフ・ ソルブ技術情報にサンプル・スクリプトが用意されています。ワークフロー・スクリプト・ジェネレータ により生成されるスクリプトも、スクリプトのベースとして使用できます。
 - ワークフロー・スクリプトを使用して実行できる一般的なカスタマイズの例については、「ワークフ ローの例とベスト・プラクティス」(489ページ)を参照してください。
 - ワークフロー・スクリプトの例がある技術情報の記事の索引については、HP ソフトウェアのセルフ・ソルブ技術情報の記事 KM183671 (http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM183671)を参照してください。

ヒント: フィールドのバージョン管理を無効にすると、ワークフロー・スクリプトとOTA スクリプトの実行で、エンティティのチェックインが不要になります。

第30章:ワークフロー・スクリプト・エディタの操作

スクリプト・エディタを使用して, ワークフロー・スクリプトを作成し, ユーザ・インタフェースをカスタマイズして, ユーザ操作を制御できます。

本章の内容

ワークフロー・スクリプト・エディタの操作について	. 432
スクリプト・エディタ	.432
ワークフロー・スクリプトの作成	.436
ツールバーへのボタンの追加	. 438
スクリプト・エディタのプロパティの設定	.441

ワークフロー・スクリプト・エディタの操作について

スクリプト・エディタを使用して、ワークフロー・スクリプトを作成し、HP Application Lifecycle Management(ALM) モジュールのウィンドウにツールバー・ボタンを追加でます。

[スクリプト エディタ]ダイアログ・ボックスには、次の2つのタブがあります。

- [スクリプト エディタ]タブ: [スクリプト エディタ]タブを使用して、ワークフロー・スクリプトを作成して編集します。スクリプト・エディタを使用することで、適切な ALM イベント・プロシージャにコードを記述できます。スクリプト・エディタの使用についての詳細は、「ワークフロー・スクリプトの作成」(436ページ)を参照してください。
- [ツールボタン エディタ]タブ: [ツールボタン エディタ]タブを使用して、ALM モジュールのウィンドウに ツールバー・ボタンを追加します。詳細については、「ツールバーへのボタンの追加」(438ページ)を 参照してください。

スクリプト・エディタ

スクリプト・エディタを使用して、スクリプト・ジェネレータによって生成されたスクリプトを変更したり、ユー ザ定義ワークフロー・スクリプトを作成できます。スクリプト・エディタの使用についての詳細は、「ワーク フローのカスタマイズの概要」(429ページ)を参照してください。



[スクリプト エディタ]タブには、次の要素が含まれています。

- スクリプト・エディタ・ツールバー:スクリプトを作成するときに使用するボタンがあります。詳細については、「スクリプト・エディタのコマンドについて」(434ページ)を参照してください。
- スクリプト・ツリー:コードを追加できるイベント・プロシージャが一覧されます。イベント・プロシージャは、トリガ元となるモジュール別にグループ分けされます。詳細については、「ワークフロー・イベント・リファレンス」(445ページ)を参照してください。
- スクリプト表示枠:選択したイベント・プロシージャのコードが表示されます。スクリプトを作成したり変更するには、イベント・プロシージャに VBScript コードを追加します。詳細については、「ワークフロー・スクリプトの作成」(436ページ)を参照してください。
- メッセージ表示枠:スクリプトを保存したり検証したりするときに発生する、あらゆる構文エラーが表示されます。

クロス・プロジェクト・カスタマイズ

ALM のエディション: クロス・プロジェクトのカスタマイズは, Quality Center Enterprise Edition で は利用できません。ALM エディションとその機能の詳細については, 『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

テンプレートまたはリンクされたプロジェクトでの作業中,スクリプト・ツリーには,[ワークフロースクリプト]の下に2つのセクションが表示されます。

 テンプレート・スクリプト(共有):このセクションに一覧されるワークフロー・スクリプトは、テンプレート からリンクされたプロジェクトに適用されたスクリプトです。テンプレートのカスタマイズの適用の詳細 については、「リンクされたプロジェクトへのテンプレートのカスタマイズの適用」(351ページ)を参照し てください。

リンクされたプロジェクトを操作している場合, このセクションは, テンプレート内に定義されたテンプ レート・スクリプトがあるときのみ表示されます。テンプレート・スクリプトは, リンクされたプロジェクトで は編集できません。テンプレートからプロジェクトを削除しても, テンプレート・スクリプトはプロジェクト 内にそのまま残り, 編集することができます。

プロジェクトのスクリプト:このセクションに一覧されるワークフロー・スクリプトは、作業中のテンプレート、リンクされたプロジェクトにのみ適用されます。テンプレートのこのセクション内のスクリプトは、リンクされたプロジェクトには適用されません。

リンクされたプロジェクトのワークフロー・スクリプトを実行すると、ALM はテンプレート・スクリプトとプロジェクト・スクリプトを1つのスクリプトに統合します。テンプレート・スクリプトとプロジェクト・スクリプト内で重複する変数や関数は、競合の原因となることがあります。

テンプレート・プロジェクトで作業するときのその他の検討事項:

- スクリプト・ジェネレータの1つによって生成されるスクリプトは、[テンプレートスクリプト(共有)]の下に作成されます。
- ALM により、テンプレート・スクリプト内のイベントには Template_というプレフィックスが付記されます。標準設定で、ALM は、テンプレート・イベント・プロシージャをトリガします。テンプレート・イベント・プロシージャが存在しない場合、またはプロジェクト・イベント・プロシージャを呼び出すようにテンプレート・イベント・プロシージャに指示する場合にのみ、プロジェクト・イベント・プロシージャがトリガされます。

各テンプレート・イベントには、並行プロジェクト・イベントへのコメント化された呼び出しが含まれます。たとえば、テンプレート・スクリプト内のTemplate_Bug_New イベントは、次のように示されます。

Sub Template_Bug_New On Error Resume Next `call Bug_New On Error Go To 0

End Sub

このテンプレート・スクリプトにプロジェクト・イベントを呼び出すようにするには、次のようにコメント記号を削除して、プロジェクト・イベントの呼び出しを有効にします。

```
Sub Template_Bug_New
On Error Resume Next
call Bug_New
On Error Go To 0
End Sub
```

スクリプト・エディタのコマンドについて

スクリプト・エディタ・ツールバー, メニュー・バー, 右 クリック・メニューには, 次のボタンとメニュー・コマンド が含まれます。

UI 要素	説明
	上書き保存:選択したモジュールで,スクリプトに対して行った変更を保存します。
	印刷 :表示されているスクリプトを印刷します。
	元に戻す :最後のコマンドを取り消したり、最後に入力した内容を削除します。
	やり直し:最後のやり直しコマンドの操作を取り消します。
*	切り取り:選択したテキストを取り除き、クリップボードに貼り付けます。
B	コピー:選択したテキストを取り除き、クリップボードに貼り付けます。
	貼り付け:挿入ポイントに、クリップボードの内容を挿入します。
×	削除 :選択したテキストを削除します。

UI要素	説明
<i>~</i>	検索:選択したモジュールのスクリプトで,指定したテキストを検索します。
2	次を検索 :[テキスト検索]ダイアログ・ボックスで,指定したテキストの次のオカレンスを検索します。
2	置換:置換対象テキストを指定したテキストに置換します。
•	ツリーをスクリプトに合わせて更新 :追加,削除,名前変更したプロシージャを 反映するように,スクリプト・ツリーを更新します。
	フィールド名 : スクリプトに挿入できるプロジェクト内のフィールド名の一覧を表示します。
<u>Dr</u>	コード完了:スクリプトに挿入できるオブジェクト, プロパティ, メソッド, ファイル 名のリストを表示します。
	コードのテンプレート :スクリプトに挿入できる,一般的に使用されるVBScript ステートメントのテンプレートのリストを表示します。
	値の一覧 :[リストから値を選択]ダイアログ・ボックスが開き, プロジェクト・リスト から項目を選択できます。
- Report	構文チェック :スクリプトの構文を検証し、メッセージ枠にメッセージを表示します。
	スクリプトッリーを表示/隠す:スクリプト・ツリーの表示,非表示を切り替えます。スクリプト・ジェネレータからスクリプト・エディタを開いている場合,この機能 は利用できません。
	メッセージ枠を表示/隠す:メッセージ枠の表示,非表示を切り替えます。
**	プロパティ: [プロパティ]ダイアログ・ボックスが開きます。 ここで, スクリプト・エディ タのプロパティを変更できます。 詳細については,「 スクリプト・エディタのプロパ ティの設定」(441ページ)を参照してください。
すべて保存	すべてのモジュールのスクリプトの変更を保存するには, [ファイル]>[すべて保存]を選択します。
保存時の状態に 戻す	モジュールを保存されたバージョンにまで戻すには、変更したモジュールを選択 して[ファイル]>[保存時の状態に戻す]を選択します。
すべて選択	スクリプト表示枠内のすべてのテキストを選択するには、 [編集]> [すべて選択]を選択します。
すべて展開	スクリプト表示枠内のすべてのノードを展開するには, [表示]>[すべて展 開]を選択します。

UI 要素	説明
すべて閉じる	スクリプト表示枠内のすべてのノードを閉じるには、 [表示]> [すべて閉じる] を選択します。
次の行番号に移 動	スクリプト・エディタで特定行に移動するには、 [検索]> [次の行番号に移動]を選択します。
メッセージをクリア	メッセージ表示枠に表示されている構文メッセージをクリアするには、 [ツール] > [メッセージをクリア]を選択します。
フィールド名の ソート(フィールド ラベル順)	[フィールド名]オプションを選択すると、スクリプト・エディタは ALM データベース・ テーブル(BG_BUG_ID など)で使用されるフィールド名を基準にしてリストを ソートします。フィールド・ラベル(不具合 ID など)でフィールドをソートするに は、スクリプト表示枠を右クリックして、[フィールド名のソート(フィールドラベル 順)]を選択します。
VBScript ホー ム・ページ	VBScript 言語のヘルプを表示するには、 [ヘルプ] > [VBScript ホーム ペー ジ]を選択します。

ワークフロー・スクリプトの作成

スクリプト・エディタを使用して, ALM イベント・プロシージャに VBScript コードを追加したり, ALM イベント・プロシージャから呼び出し可能なユーザ定義プロシージャを作成できます。

ワークフロー・スクリプトを作成するには、次の手順を実行します。

1. [ワークフロー] ウィンド ウの[**スクリプト エディタ**] リンクをクリックします。 スクリプト・エディタが開きま す。



スクリプト・エディタ・ウィンド ウの使用についての詳細は、「スクリプト・エディタ」(432ページ)を参照 してください。

2. スクリプト・ツリーで, ワークフローのカスタマイズが必要なモジュールのノードを選択します。

スクリプト・ツリーには、特定モジュールのノードに加え、[**共通スクリプト**]ノードが含まれます。複数のモジュールからアクセス可能であることが必要なユーザ定義プロシージャを作成する場合、 [**共通スクリプト**]ノードの下に配置します。すべてのモジュールにわたって使用可能なグローバル 変数を宣言するには、[**共通スクリプト**]ノードの下で、関数の外部で変数を宣言します。

ノードを展開し、コードがトリガされるタイミングに応じてコードの追加先とするイベント・プロシージャを選択します。このイベント・プロシージャの既存スクリプトは、スクリプト表示枠に表示されます。

ALM イベント・プロシージャの詳細については、「ワークフロー・イベント・リファレンス」(445ページ) を参照してください。

4. スクリプトに VBScript コードを追加します。

注: スクリプト・ツリー内で, モジュール名の隣にある赤色のインジケータ●は, そのモジュールに未保存のスクリプトの変更があることを示します。

5. コード完了機能を使用して、ALM オブジェクト、プロパティ、メソッド、フィールドの名前の入力を 省くには、オブジェクト名を挿入する位置に挿入ポイントを置き、[コード完了]ボタンをク リックします。ALM オブジェクトの詳細については、「ワークフロー・オブジェクトとプロパティの参照」

(477ページ)を参照してください。 6. コードのテンプレート機能を使用して、一般的に使用される VBScript ステートメントの入力を省

くには、 [コードのテンプレート]ボタン をクリックします。 コード・テンプレート・リストから次のいず れかのアイテムを選択します。

テンプレート	スクリプトに追加されるコード
FVal:フィールド値へのアクセス	<pre>Fields.Field("").Value</pre>
List: QualityCenter リストへのアクセス	Lists.List()
IfAct:アクション"切り替え" If ブロック	<pre>If ActionName = "" Then</pre>
	End If
Act: アクションへのアクセス	Actions.Action("")

テンプレート	スクリプトに追加されるコード
Func: 関数テンプレート	Function On Error Resume Next On Error GoTo 0 End Function
Sub: サブルーチン・テンプレート	Sub On Error Resume Next On Error GoTo 0 End Sub
Err:エラー・ハンドラ	On Error Resume Next

7. プロジェクト内で定義されているフィールド・リストからアイテムを挿入するには、アイテムの追加位

置に挿入ポイントを置きます。[値の一覧]ボタン をクリックします。[リストから値を選択]ダイ アログ・ボックスの[リスト]ボックスで、リストの名前を選択します。[リスト項目]ボックスで、リスト値 を選択します。

- 8. ALM フィールド名を挿入するには、フィールド名の追加位置に挿入ポイントを置きます。[フィー ルド名]ボタン をクリックします。システムのリスト、ALM プロジェクトのユーザ定義フィールドから 名前を選択します。
- 9. スクリプトの構文を検証するには、 [構文チェック] をクリックします。メッセージがあれば、メッセージ表示枠に表示されます。メッセージがあれば、メッセージ表示枠に表示されます。
- 10. [上書き保存]ボタン をクリックして、 スクリプトを保存します。
- 11. スクリプト・エディタを閉じます。

ツールバーへのボタンの追加

ツールバー・ボタン・エディタを使用して、ALM モジュールのウィンドウ、または Manual Runner ダイアログ・ボックスに表示されるツールバー・ボタンを定義します。

ツールバーにボタンを追加するには、次の手順を実行します。

1. スクリプト・エディタで[ツールバーボタン エディタ]タブをクリックします。

🗖 スクリプト エディタ	
ファイル(E) 編集(E) 表示(V) 検索(S) ツール(T) オブション(Q) ヘルプ(D)	
$\square \bigcirc \square \bigcirc \square \land \square \square \land \square \land \land \square \land \land \land \land \land \land \land $	0
スクリプト エディタ ツールバー ボタン エディタ	
コマンド パー: Requirements マ	
コマンド 画像	
📃 📃 🛄 🚉 0 🚺 🔍 20	< 30
1 🦕 11 🖓 21	
22 👔 2	> 32
キャプション ×3 (13 - 122)	> 33
<u>24</u>	4 34
	□ 35
	■30 → 07
	<u> </u>
	20 Jac
	- 09
2:1 挿入 1	IUM mmc //

2. [コマンド バー]リストから、ボタンの追加先とするツールバーを選択します。

オプション	ツールバーの位置
Requirements	要件モジュール・ウィンドウ。
TestPlan	テスト計画モジュール・ウィンドウ。
TestLab	テスト・ラボ・モジュール・ウィンドウ。
ManualRun	[マニュアルランナー]ダイアログ・ボックス。
Defects	不具合モジュール・ウィンドウ。
Component	ビジネス・コンポーネント・モジュール・ウィンドウ。 このオプションは ALM ライ センスによって異 なります。
Releases	リリース・モジュール・ウィンドウ。
Resources	テスト・リソース・モジュール・ウィンドウ。
Analysis	Analysis モジュール・ウィンドウ。
Dashboard	ダッシュボード・モジュール・ウィンドウ。
BusinessModels	ビジネス・モデル・モジュール・ウィンドウ。
Libraries	ライブラリ・モジュール・ウィンドウ。
TestRuns	テスト実行モジュール・ウィンドウ。

- 3. [追加]をクリックします。ボタンの標準設定・コマンド名が[コマンド]のリストに追加されます。
- 4. [キャプション]ボックスに、ボタンのコマンド名を入力するか標準設定名を使用します。
- 5. [ヒント]ボックスに, ボタンのツールヒントを入力します。
- 6. [アクション名]ボックスに,ボタンの新しいアクション名を入力するか標準設定名を使用します。
- 7. [画像]の下で、ボタンのアイコンを選択します。
- 8. [適用]をクリックして変更を適用します。
- 9. 作成したボタンを削除するには、[コマンド]リストから削除するコマンドの名前を選択して、[**削** 除]をクリックします。
- 10. [上書き保存]ボタン をクリックして,新しいボタン定義を保存します。
- 11. [スクリプト エディタ]タブをクリックします。
- 12. スクリプト・エディタのスクリプト・ツリーで, [共通スクリプト]セクションにある[ActionCanExecute] イベント・プロシージャを選択します。
- 13. スクリプト・エディタのスクリプト表示枠に表示されるプロシージャに、ボタンに定義したアクション名 のアクションをユーザが開始するときに実行するステートメントを追加します。戻り値を True また は False に設定します。

例として次のコードを見てみます。ユーザが要件モジュールのツール・バーにある[Requirements_ Action1]ボタンをクリックすると、メッセージ・ボックスが開きます。

Function ActionCanExecute(ActionName)
On Error Resume Next
ActionCanExecute = True
If ActionName = "UserDefinedActions.Requirements_Action1" Then
MsgBox "You clicked the Action1 button."
End If
On Error GoTo 0
End Function

詳細については、「例:ボタン機能の追加」(507ページ)を参照してください。

14. [上書き保存]ボタン きのリックして、スクリプトを保存します。

スクリプト・エディタのプロパティの設定

スクリプト・エディタの動作をカスタマイズできます。

スクリプト・エディタのプロパティを設定するには、次の手順を実行します。

1. スクリプト・エディタで、[プロパティ]ボタン をクリックするか、[オプション]>[エディタのプロパティ]を選択します。[プロパティ]ダイアログ・ボックスが開きます。

💷 र्गवर्सन्द		X
エティタ 表示 色		
┌エディタのプロパティ:────		1
▼ 自動インデント モード(A)	□ 末尾のスペースを保存(<u>K</u>)	
▼ スマート タブ(M)	□ 固定ブロック(P)	
タブを使用(⊍)	☑ ブロックの上書き(₩)	
🔽 バック スペースとインデントなし(🔲 ラインをダブル クリック(型)	
□ 行番号の表示(L)	🔽 カーソル位置のテキストを検索(X)	
🔲 とじしろに行番号を表示(11)	▼切り取りとコピー(E)	
▼ まとめて元に戻す(6)	☑ シンタックスを強調表示する(Y)	
E0F 以降のカーソル(E)	カーソルをブロックとして上書き(0)	
IVE EOL 以降のカーソル(C_)	「ドラッグ操作を無効にする(<u> </u>)	
▼ EOL 以降の選択(§)		
ブロックのインデント幅(N):タブストッ	ブ(<u>T</u>): キーのマッピング(<u>K</u>):	
1 9, 17	標準設定 ▼	
	0K キャンセ	01
 ✓ EOL 以降のカーソル(C) ✓ EOL 以降の選択(S) ブロックのインデント幅(N): タブストッ 1 19,17 	■ ドラッグ操作を無効にする(L) ブ(I): キーのマッピング(K): 標準設定 ▼ 0K キャンセ	:16

2. [エディタ]タブで,次のオプションを設定できます。

オプション	説明
自動インデント・ モード	Enter キーを押すと、1つ前の非空白行の最初の非空白文字の直下にまで、カーソルが移動します。
スマート・タブ	1つ前の非空白行の最初の非空白文字にまでタブで移動します。[タブ を使用]が選択されている場合,このオプションはクリアされます。
タブを使 用	タブ文字を挿入します。クリアされている場合, 空白文字が挿入されま す。[スマート タブ]が選択されている場合, このオプションはクリアされま す。
バックスペースとイ ンデントなし	カーソルが行の最初の非空白文字上にある場合にBackspaceキーを 押すと、挿入ポイントが1つ前のインデント・レベルにまで戻ります。
行番号の表示	行番号を表示します。このオプションが選択されている場合, [とじしろに 行番号を表示]が有効になります。

オプション	説明
とじしろに行番号 を表示	左余白ではなく、とじしろに行番号を表示します。[行番号の表示]が選 択されている場合, このオプションが有効になります。
まとめて元に戻す	Alt+Backspace を押すか、 [編集]> [もとに戻す]をクリックすると、 最後に編集したコマンドと、 その後に行われた同じタイプの編集コマンドが取り 消されます。
EOF 以降のカー ソル	最後のコード行以降に挿入ポイントを配置できます。
EOL 以降のカー ソル	行の終端以降にカーソルを配置できます。
EOL 以降の選 択	行の終端以降で文字を選択できます。
末尾のスペースを 保存	行の終端以降にある空白文字を維持します。
固定ブロック	矢印キーを使用してカーソルを移動しても,新しいブロックが選択される まで,選択してマークされたブロックを維持します。
ブロックの上書き	マークされたテキストのブロックを新しいテキストで置換します。 [固定ブ ロック]も選択されている場合,入力するテキストは,現在選択されてい るブロックの後に追記されます。
ラインをダブル・ク リック	行にある任意の文字をダブルクリックすると, 行が強調表示されます。無 効にすると, 選択した単語のみが強調表示されます。
カーソル位置のテ キストを検索	[検索]>[検索]を選択すると、カーソル位置にあるテキストが、[テキス ト検索]ダイアログ・ボックスの[検索テキスト]リスト・ボックスに配置されま す。
切り取りとコピー	テキストが選択されていない場合でも、 切り取りとコピー・ コマンドを有効 にします。
シンタックスを強 調表示する	[表示]タブと[色]タブで定義されている色と属性に応じて, スクリプト要素を表示します。
カーソルをブロック として上書き	上書きモード使用時のカレットの外観を制御します。
ドラッグ操作を無 効にする	テキストのドラッグとドロップを無効にします。

オプション	説明
ブロックのインデン ト幅	マークされたブロックをインデントする空白文字数を指定します。
タブストップ	Tab キーを押したときの、カーソルの移動位置を指定します。
キーのマッピング	スクリプト・エディタ内のキーボード・マッピングを設定します。 サポートされる キーボード・マッピングは、標準設定、 クラッシック、 Brief、 Epsilon、 Visual Studio です。

3. [表示]タブで,次のオプションを設定できます。

オプション	説明
エディタのとじしろ	とじしろの可視性、幅、色、スタイルを設定できます。
エディタの余白	右余白の可視性、幅、色、スタイル、位置を設定できます。
等幅フォントを使用す る	[エディタのフォント]ボックスで,Courier などの等幅画面フォントのみ を表示します。
エディタのフォント	利用できるテキスト・フォントを一覧します。
エディタの色	利用できる背景色を一覧します。
サイズ	フォント・サイズを一覧します。
読み取り専用の色を 使用する	[読み取り専用の色]ボックスから読み取り専用テキストを表示する ための色が選択できます。
特殊記号を描く	ファイル終端, 行終端, 空白, およびタブ文字を表示する特殊文字 を設定します。

4. [色]タブで,次のオプションを設定できます。

オプション	説明
色のクイック設定	事前定義された色の組み合わせを使用して,スクリプト・エディタの表示 を設定できます。
要素	特定コード要素の構文の強調表示を指定します。
前景色	選択したコード要素の前景色を設定します。
背景色	選択したコード要素の背景色を設定します。

オプション	説明
次で標準設定を 使用	前景,背景,または両方に標準設定・システム色を使用して, ⊐−-ド要 素を表示します。
テキスト属性	コード要素の形式属性を指定します。
開く	コンピュータから、色スキームを読み込みます。
上書き保存	コンピュータに色スキームを保存します。

第31章:ワークフロー・イベント・リファレンス

ワークフロー・スクリプトを記述して、HP Application Lifecycle Management(ALM) ユーザが実行できる操作と、ダイアログ・ボックスでユーザが利用できるフィールドをカスタマイズできます。ワークフロー・ スクリプトを記述するには、ユーザの操作によってトリガされるイベント・プロシージャに VBScript コードを追加します。

本章の内容

ALM イベントについて	446
ALM イベント・プロシージャの命 名 規 則	446
ALM イベントのリファレンス	

ALM イベントについて

ALM ユーザ・セッション中, ユーザがさまざまな操作を行うとALM によってイベント・プロシージャがトリガ されます。これらのプロシージャにコードを記述することで, 関連するユーザ操作の実行をカスタマイズ できます。

スクリプト・エディタには, 各 ALM モジュールのイベント・プロシージャが一 覧され, 目 的 のプロシージャ にコードを追加 できます。詳細については,「ワークフロー・スクリプト・エディタの操作」(431ページ)を 参照してください。

イベント・プロシージャに追加するコードは、ALM オブジェクトにアクセスできます。詳細については、 「ワークフロー・オブジェクトとプロパティの参照」(477ページ)を参照してください。

イベント・プロシージャは、関数、サブルーチンのいずれかにすることができます。

 イベント関数: これらのプロシージャは ALM によってトリガされ、ユーザ操作を実行 すべきかどうかが 確認されます。これらの関数にコードを記述して、ALM がユーザの要求を実行 できるかどうかを決 定できます。コードが False の値を返すとき、ALM は操作を実行しません。

たとえば、ユーザが[不具合の追加]ダイアログ・ボックスで[送信]ボタンを押すと、ALM はサーバ 上のデータベースに不具合を送信する前に、関数 Bug_CanPost を呼び出します。Bug_CanPost 関数にコードを追加して、ALM が不具合を送信するかどうかを制御できます。また、コメントの追 加なしに不具合を却下できないようにすることができます。例については、「例:オブジェクトの検 証」(503ページ)を参照してください。

• イベントサブルーチン:これらのプロシージャは、イベント実行時に操作を実行するためにトリガされ ます。

たとえば、ユーザが[不具合の追加]ダイアログ・ボックスを開くと、ALM はサブルーチン Bug_New を 呼び出します。Bug_New サブルーチンにコードを追加することで、ユーザがダイアログ・ボックスを開く ときに実行が必要な操作を実行できます。たとえば、ユーザが QA テスト 担当者 ユーザ・グループ に属さない場合、[変更検出モード]フィールドの値を BTW に変更できます。例については、「例: ユーザ・グループを基にしたフィールドの変更」(503ページ)を参照してください。

バージョン管理: プロジェクトのバージョン管理を有効にした後には、プロジェクトのすべてのワーク フロー・スクリプトを確認し、各チェックイン済みエンティティを調整する必要があります。これには、 エンティティ Req, Test, Resource, Component が含まれます。スクリプト内に Post 関数を含 む各チェックイン済みエンティティについて、スクリプトを変更する必要があります。変更するには、 各 Post 関数の前に Checkout 関数を追加します。この変更を行うことで、Post 関数を呼び 出すたびに[チェックアウト]ダイアログ・ボックスが開かないようにします。このプロパティの詳細につ いては、『HP ALM Open Test Architecture Reference』を参照してください。

バージョン管理の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』 を参照してください。

ALM イベント・プロシージャの命名規則

イベント・プロシージャの命名規則は次のとおりです。

<エンティティ>_<イベント>

詳細については、「エンティティ」(447ページ)および「イベント」(448ページ)を参照してください。

注:

- 後方互換性のため、モジュール名を含む従来の命名規則がサポートされています。ただし、 その代わりに新しい命名規則を使用することを推奨します。
- 一部のプロシージャ名には、エンティティ名が含まれません。たとえば、GetDetailsPageName イベント名には、エンティティ名は含まれません。

エンティティ

エンティティとは,次のいずれかです。

エンティティ	説明
Release	リリース・データ
Release Folder	リリース・フォルダ・データ
Cycle	リリース・サイクル・データ
Library	ライブラリ・データ
Library Folder	ライブラリ・フォルダ・データ
Baseline	ベースライン・データ
Req	要件データ
Test	テスト・データ
DesignStep	設計ステップ・データ
Resource	テスト・リソース・データ
Resource Folder	テスト・リソース・フォルダ・データ
TestSet	テスト・セット・データ
TestSetTests	テスト・インスタンス・データ
Run	テスト実行データ
Bug	不具合データ
Step	テスト実行ステップ・データ
AnalysisItem	レポートとグラフ・データ

エンティティ	説明
AnalysisItemFolder	レポートとグラフ・フォルダ・データ
DashboardFolder	ダッシュボード・フォルダ・データ
DashboardPage	ダッシュボード・ページ・データ
Component	ビジネス・コンポーネント・データ
ComponentStep	ビジネス・コンポーネント・ステップ・データ
ComponentFolder	ビジネス・コンポーネント・フォルダ・データ
BusinessModel	ビジネス・モデル・データ
BusinessModelActivity	ビジネス・モデル・アクティビティ・データ
BusinessModelPath	ビジネス・モデル・パス・データ
BusinessModelFolder	ビジネス・モデル・フォルダ・データ

イベント

イベントは、関数名、サブルーチン名のいずれかにすることができます。イベント名は、「ALM イベントの リファレンス」(448ページ)に一覧されています。

ALM イベント のリファレンス

この項は、ALM イベント関数とサブルーチンのリファレンスです(アルファベット順)。リファレンスには、イベント名、説明、構文、タイプ(関数かサブルーチン)、関数によって戻される値、イベント・プロシージャが利用できるエンティティが一覧されています。

イベント・プロシージャの命名規則の詳細については、「ALM イベント・プロシージャの命名規則」 (446ページ)を参照してください。

次のイベント関数が利用できます。

関数名	関数がトリガされるタイミング
「ActionCanExecute」(451ページ)	ユーザ操作を実行する前
「Attachment_CanDelete」(454ペー ジ)	添付ファイルを削除する前
「Attachment_CanOpen」(454ページ)	添付ファイルを開く前
「Attachment_CanPost」(454ページ)	添付ファイルを更新する前

関数名	関数 がトリガされるタイミング
「CanAddTests」(455ページ)	テスト・セットにテストを追加する前
「CanCustomize」(456ページ)	カスタマイズ・ウィンドウを開く前
「CanDelete」(456ページ)	サーバからオブジェクトを削除する前
「CanLogin」(459ページ)	プロジェクトにユーザがログインする前
「CanLogout」(460ページ)	プロジェクトにユーザがログ・アウトする前
「CanPost」(460ページ)	サーバにオブジェクトを送信する前
「CanRemoveTests」(463ページ)	テスト・セットからテストを削除する前
「CanAddComponentsToTest」(455 ページ)	タイプがフロー, ビジネスプロセスのテストに, ビジネス・コン ポーネントを追加する前
「CanAddFlowsToTest」(455ページ)	タイプがビジネスプロセスのテストにフローを追加する前
「CanRemoveComponentsFromTest」 (462ページ)	タイプがフロー, ビジネスプロセスのテストから, ビジネス・コ ンポーネントを削除する前
「CanRemoveFlowsFromTest」(462 ページ)	タイプがビジネスプロセスのテストからフローを削除する前
「CanDeleteGroupsFromTest」(459 ページ)	タイプがフロー, ビジネスプロセスのテストから, グループを 削除する前
「CanReImportModels」(462ページ)	ビジネス・モデルをインポートする前
「DefaultRes」(463ページ)	プロジェクトの標準設定値にリセットする前
「FieldCanChange」(464ページ)	フィールド値を変更する前
「GetDetailsPageName」(468ページ)	[不具合の詳細]ダイアログ・ボックスを表示する前
「GetNewBugPageName」(468ペー ジ)	[不具合の追加]ダイアログ・ボックスを表示する前(後方 互換性)
「GetNewReqPageName」(469ペー ジ)	[要件の新規作成]ダイアログ・ボックスを表示する前(後 方互換性)
「GetReqDetailsPageName」(470ペー ジ)	[要件の詳細]ダイアログ・ボックスを表示する前(後方互 換性)

次のイベント・サブルーチンが利用できます。

サブルーチン名	サブルーチンがトリガされるタイミング
「AddComponentToTest」(451 ページ)	タイプがフロー, ビジネスプロセスのテストに, ビジネス・コンポーネ ントが追加されたとき
「AfterPost」(451ページ)	サーバにオブジェクトが送信されたとき
「Attachment_New」(455ページ)	添付ファイルが追加されるとき
「DialogBox」(463ページ)	ダイアログ・ボックスが開く、または閉じるとき
「EnterModule」(464ページ)	ユーザがモジュールを切り替えるとき
「ExitModule」(464ページ)	ユーザがモジュールを終了 するとき
「FieldChange」(466ページ)	フィールド値が変更するとき
「MoveTo」(470ページ)	ユーザがフォーカスを変更するとき
「MoveToComponentFolder」 (472ページ)	ユーザがビジネス・コンポーネント・ツリー内で指定したコンポー ネント・フォルダに移動するとき(後方互換性)
「MoveToFolder」(472ページ)	ユーザがテスト・セット・ツリー内でフォルダをクリックするとき(後 方互換性)
「MoveToSubject」(473ページ)	ユーザがテスト計画ツリー内で件名をクリックするとき(後方互換性)
「New」(473ページ)	オブジェクトが追加されるとき
「RemoveComponentFromTest」 (475ページ)	ユーザが, タイプがフロー, ビジネスプロセスのテストから, ビジネ ス・コンポーネントを削除するとき
「RunTests」(475ページ)	ユーザがテスト・ラボ・モジュールで[実行]をクリックするとき (Sprinter がインストールされておらず, 自動化されたテストが存 在しない場合)
「RunTests_Sprinter」(475ペー ジ)	ユーザがテスト・ラボ・モジュールで[実行]をクリックするとき (Sprinter がインストールされていて, 自動化されたテストが少 なくとも1つ存在する場合)
「RunTestSet」(476ページ)	ユーザがテスト・ラボ・モジュールで[テスト セットの実行]をク リックするとき
「RunTestsManually」(476ペー ジ)	ユーザがテスト・ラボ・モジュールで[実行]>[手作業で実行] をクリックするとき

ActionCanExecute

このイベントは, ユーザが開始した操作を ALM が実行する前に, 操作が実行可能かどうかを確認するためにトリガされます。

このイベント・プロシージャにコードを追加することで、ユーザが特定の操作を開始したときに操作を実行したり、または特定の場合で操作の実行を防ぐことができます。例については、「例:ユーザ・アクセス許可の制御」(506ページ)を参照してください。

構文	ActionCanExecute(ActionName)	
	ActionName は、ユーザが開始した操作です。	
	操作は context.action の形式で表されます。	
	注: このイベントの旧形式は、後方互換性のためにサポートされていま す。代わりに ActionCanExecute を使用することを推奨します。	
	ユーザ定義操作の名前には、先頭にプレフィックス「UserDefinedActions」が 付記されます。	
タイプ	関数	
戻り値	True または False	
利用方法	ActionCanExecute(すべてのモジュール)	

ヒント:操作の名前を取得する方法は、「Action オブジェクト」(479ページ)のサンプル・コードを参照してください。

AddComponentToTest

このイベントは, ユーザが[テスト スクリプト]タブで, タイプがフロー, ビジネスプロセスのテストにコンポーネントを追加するときにトリガされます。

バージョン管理: AddComponentToTest を使用した,別のユーザによってチェックイン,またはチェック・ アウトされたコンポーネントの変更はサポートされません。

構文	AddComponentToTest
タイプ	サブルーチン
利用方法	AddComponentToTest

AfterPost

このイベントは、サーバにオブジェクトが送信された後にトリガされます。

送信後, プロジェクト・フィールドは変更できません。 データベースに新しい値が格納されないためです。

構文	<エンティティ>_AfterPost
タイプ	サブルーチン

利用方法	 AnalysisItem_AfterPost
	 AnalysisItemFolder_AfterPost
	• Baseline_AfterPost
	• Bug_AfterPost
	• BusinessModel_AfterPost
	 BusinessModelFolder_AfterPost
	 BusinessModelPath_AfterPost
	• Component_AfterPost
	ComponentFolder_AfterPost
	• Cycle_AfterPost
	 DashboardFolder_AfterPost
	 DashboardPage_AfterPost
	• Library_AfterPost
	LibraryFolder_AfterPost
	• Release_AfterPost
	ReleaseFolder_AfterPost
	• Req_AfterPost
	Resource_AfterPost
	ResourceFolder_AfterPost
	• Run_AfterPost
	• Step_AfterPost
	• Test_AfterPost
	 TestConfiguration_AfterPost
	 TestFolder_AfterPost
	 TestSet_AfterPost
	 TestSetFolder_AfterPost

Attachment_CanDelete

このイベントは, ALM がサーバから添付ファイルを削除する前に, 添付ファイルが削除可能かどうかを 確認するためにトリガされます。

構文	Attachment_CanDelete(Attachment)
	Attachment は IAttachment インタフェースです。詳細については,『HP ALM Open Test Architecture API Reference』を参照してください。
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	Attachment_CanDelete(すべてのモジュール)

Attachment_CanOpen

このイベントは, ALM がサーバから添付ファイルを開く前に, 添付ファイルが開けるかどうかを確認する ためにトリガされます。

構文	Attachment_CanOpen(Attachment)	
	Attachment は IAttachment インタフェースです。詳細については,『HP ALM Open Test Architecture API Reference』を参照してください。	
タイプ	関数	
戻り値	True または False	
利用方法	Attachment_CanOpen(すべてのモジュール)	

Attachment_CanPost

このイベントは、ALM がサーバ上の既存の添付ファイルを更新する前に、添付ファイルが更新可能かどうかを確認するためにトリガされます。

構文	Attachment_CanPost(Attachment)
	Attachment は IAttachment インタフェースです。詳細については,『HP ALM Open Test Architecture API Reference』を参照してください。
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	Attachment_CanPost(すべてのモジュール)

Attachment_New

このイベントは、ALM に添付ファイルを追加するときにトリガされます。

構文	Attachment_New(Attachment)
	Attachment は IAttachment インタフェースです。詳細については,『HP ALM Open Test Architecture API Reference』を参照してください。
タイプ	サブルーチン
利用方法	Attachment_New(すべてのモジュール)

CanAddComponentsToTest

このイベントは, ALM がタイプがフロー, またはビジネスプロセスのテストにビジネス・コンポーネントを追加する前に,指定されたコンポーネントが追加可能であるかどうかを確認するためにトリガされます。

構文	CanAddComponentsToTest(Components)
	Components は, コンポーネント ID の配列です。
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	CanAddComponentsToTest

CanAddFlowsToTest

このイベントは, ALM がタイプがビジネスプロセスのテストにフローを追加する前に, 指定されたフローが 追加可能であるかどうかを確認するためにトリガされます。

構文	CanAddFlowsToTest(Flows)
	Flows は, フロー ID の配列です。
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	CanAddFlowstoTest

CanAddTests

このイベントは, ALM がテスト・セット にテストを追加 する前に, 指定されたテストが追加可能であるか どうかを確認 するためにトリガされます。

構文	<エンティティ>_CanAddTests(Tests)
	Tests は, テスト ID の配列です。
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	TestSet_CanAddTests

CanCustomize

このイベントは、ユーザがカスタマイズ・ウィンドウを開こうとすると、指定されたユーザが指定されたプロジェクトをカスタマイズ可能であるかどうかを確認するためにトリガされます。

構文	CanCustomize(DomainName, ProjectName, UserName)	
	DomainName はドメイン名,ProjectName はプロジェクト名,UserName は ユーザ名 です。	
タイプ	関数	
戻り値	True または False	
利用方法	CanCustomize(すべてのモジュール)	

CanDelete

このイベントは, ALM がサーバからオブジェクトを削除する前に, オブジェクトが削除可能かどうかを確認するためにトリガされます。

構文	<エンティティ>_CanDelete(Entity)
タイプ	関数
戻り値	True または False

利用方法	 AnalysisItem_CanDelete
	• AnalysisItemFolder_CanDelete
	• Baseline_CanDelete
	• Bug_CanDelete
	• BusinessModel_CanDelete
	BusinessModelFolder_CanDelete
	 BusinessModelPath_CanDelete
	• Component_CanDelete
	ComponentFolder_CanDelete
	• Cycle_CanDelete
	DashboardFolder_CanDelete
	• DashboardPage_CanDelete
	• Library_CanDelete
	• LibraryFolder_CanDelete
	• Release_CanDelete
	ReleaseFolder_CanDelete
	• Req_CanDelete
	• Resource_CanDelete
	ResourceFolder_CanDelete
	• Test_CanDelete
	 TestConfiguration_CanDelete
	• TestFolder_CanDelete
	• TestSet_CanDelete
	TestSetFolder_CanDelete

後方互換性のための追加構文

後方互換性のため、特定オブジェクトで次の構文が利用できます。ただし、代わりに CanDelete を 使用することを推奨します。

• テスト, またはテスト・サブジェクト・フォルダの構文:

構文	Test_CanDelete(Entity, IsTest)
	引数:
	■ Entity は, テスト, サブジェクト・フォルダです。
	 IsTest が True の場合, Entity は ITest オブジェクトを指します。 IsTest が False の場合, Entity は ISubjectNode オブジェクトを指します。 ITest と ISubjectNode の詳細については、『HP ALM Open Test Architecture API Reference』を参照してください。
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	Test_CanDelete

テスト,またはテスト・セット・フォルダの構文:

構文	TestSet_CanDelete(Entity, IsTestSet)
	引数:
	■ Entity は, テスト・セット, またはテスト・セット・フォルダです。
	■ IsTestSet が True の場合, Entity は ITestSet オブジェクトを指します。
	IsTestSet が False の場合, Entity は ITestSetFolder オブジェクトを指 します。ITestSetとITestSetFolder の詳細については,『HP ALM Open Test Architecture API Reference』を参照してください。
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	TestSet_CanDelete

• ビジネス・コンポーネント, またはビジネス・コンポーネント・フォルダの構文:

構文	 Component_CanDelete(Entity, IsComponent) 引数: Entity は、コンポーネント、コンポーネント・フォルダです。 IsComponent が True の場合, Entity は IsComponent オブジェクトを指します。 IsComponent が False の場合, Entity は IComponentFolder オブジェクトを指します。IsComponent が False の場合, Entity は IComponentFolder オブジェクトを指します。IComponent と IComponentFolder の詳細 については、『HP ALM Open Test Architecture API Reference』を参照してください。
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	Component_CanDelete

CanDeleteGroupsFromTest

このイベントは、ユーザがタイプがフロー、またはビジネスプロセスのテストからグループを削除する前に、 指定されたグループが削除可能であるかどうかを確認するためにトリガされます。

構文	CanDeleteGroupsFromTest (Groups) Groups は, グループ ID の配列です。
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	CanDeleteGroupsFromTest

CanLogin

このイベントは、指定されたユーザが指定されたプロジェクトにログインできるかどうかを確認するためにトリガされます。

構文	CanLogin(DomainName, ProjectName, UserName)	
	DomainName はドメイン名,ProjectName はプロジェクト名,UserName は ユーザ名 です。	
タイプ	関数	

戻り値	True または False
利用方法	CanLogin(すべてのモジュール)

CanLogout

このイベントは,現在のユーザが現在のプロジェクトからログ・アウトできるかどうかを確認するためにトリガされます。

構文	CanLogout
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	CanLogout(すべてのモジュール)

CanPost

このイベントは, ALM がサーバにオブジェクトを送信する前に, オブジェクトが送信可能かどうかを確認 するためにトリガされます。

このイベント・プロシージャにコードを追加して、特定の場合にオブジェクトの送信を防ぐことができます。例については、「例:オブジェクトの検証」(503ページ)を参照してください。

構文	<エンティティ>_CanPost
タイプ	関数
戻り値	True または False

利用方法	 AnalysisItem_CanPost
	• AnalysisItemFolder_CanPost
	• Baseline_CanPost
	• Bug_CanPost
	• BusinessModel_CanPost
	 BusinessModelFolder_CanPost
	 BusinessModelPath_CanPost
	• Component_CanPost
	• ComponentFolder_CanPost
	• Cycle_CanPost
	 DashboardFolder_CanPost
	 DashboardPage_CanPost
	• Library_CanPost
	• LibraryFolder_CanPost
	• Release_CanPost
	• ReleaseFolder_CanPost
	• Req_CanPost
	• Resource_CanPost
	ResourceFolder_CanPost
	• Run_CanPost
	• Step_CanPost
	• Test_CanPost
	 TestConfiguration_CanPost
	• TestFolder_CanPost
	• TestSet_CanPost
	TestSetFolder_CanPost

•	TestSetTests_CanPost(スクリプト・ツリーには表示されません)

CanReImportModels

このイベントは, ALM にすでに存在する指定されたビジネス・プロセス・モデルにインポートを試みるとき に, ビジネス・プロセス・モデルが再インポート可能かどうかを確認するためにトリガされます。

構文	<エンティティ>_CanReImportModels(Models)
	Models は、モデル ID の配列です。
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	CanReImportModels

CanRemoveComponentsFromTest

このイベントは, ユーザがタイプがフロー, またはビジネスプロセスのテストからコンポーネントを削除する前に, 指定されたコンポーネントが削除可能であるかどうかを確認するためにトリガされます。

構文	CanRemoveComponentsFromTest (Components)
	Components は, コンポーネント ID の配列です。
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	CanRemoveComponentsFromTest

CanRemoveFlowsFromTest

このイベントは、ユーザがタイプがビジネスプロセスのテストからフローを削除する前に、指定されたフローが削除可能であるかどうかを確認するためにトリガされます。

構文	CanRemoveFlowsFromTest (Flows)
	Flows は, フロー ID の配列です。
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	CanRemoveFlowsFromTest

CanRemoveTests

このイベントは、テスト・セットから指定されたテストが削除可能かどうかを確認するためにトリガされます。

構文	<エンティティ>_CanRemoveTests(Tests)
	Tests は, テスト・インスタンス ID の配列です。
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	TestSet_CanRemoveTests

DefaultRes

この関数は、FieldCanChange などの ALM 関数の標準設定の戻り値を決定するために使用されます。すべての ALM ワークフロー関数は、ユーザが明示的に省略しない限り、この関数を呼び出して標準設定の戻り値を決定します。DefaultResを使用すると、すべての ALM ワークフロー関数の標準設定の戻り値をすばやく差し替えることができます。

構文	DefaultRes
タイプ	関数
戻り値	True または False
利用方法	DefaultRes(すべてのモジュール)

DialogBox

このイベントは、ダイアログ・ボックスが開くとき、または閉じるときにトリガされます。

構文	DialogBox(DialogBoxName, IsOpen)	
	DialogBoxName はダイアログ・ボックスの名前, IsOpen はダイアログ・ボックス が開いているかどうかを示します。	
タイプ	サブルーチン	
利用方法	DialogBox(すべてのモジュール)	

注:後方互換性のため、このイベントは、不具合の詳細およびテスト・インスタンスの詳細の後 方互換性値(DialogBoxName="Details" および DialogBoxName="TestInstanceDetails") を使用してもトリガされます。これらの後方互換性値は推奨されません。

EnterModule

このイベントは, ユーザが ALM モジュールに入るか切り替えるときにトリガされます。また, ユーザが ALM にログインするときにもトリガされます。

このイベント・プロシージャにコードを追加することで、ユーザが指定されたモジュールに切り替えるときに常に操作を実行することができます。

構文	EnterModule
タイプ	サブルーチン
利用方法	EnterModule(すべてのモジュール)

ExitModule

このイベントは、ユーザが指定されたモジュールを終了するときにトリガされます。

構文	ExitModule
タイプ	サブルーチン
利用方法	ExitModule(すべてのモジュール)

FieldCanChange

このイベントは, ALM がフィールド 値を変更する前に, フィールド が変更可能 かどうかを判断 するため にトリガされます。

このイベント・プロシージャにコードを追加して,特定の場合にフィールドが変更されるのを防ぐことができます。例については,「例:フィールドの検証」(504ページ)を参照してください。

構文	<エンティティ>_FieldCanChange(FieldName, NewValue)
	FieldName はフィールドの名前, NewValue はフィールド値です。
タイプ	関数
戻り値	True または False

利用方法	 AnalysisItem_FieldCanChange
	AnalysisItemFolder_FieldCanChange
	• Baseline_FieldCanChange
	• Bug_FieldCanChange
	• BusinessModel_FieldCanChange
	BusinessModelActivity_FieldCanChange
	BusinessModelFolder_FieldCanChange
	 BusinessModelPath_FieldCanChange
	Component_FieldCanChange
	ComponentFolder_FieldCanChange
	ComponentStep_FieldCanChange
	Cycle_FieldCanChange
	DashboardFolder_FieldCanChange
	 DashboardPage_FieldCanChange
	DesignStep_FieldCanChange
	• Library_FieldCanChange
	LibraryFolder_FieldCanChange
	Release_FieldCanChange
	ReleaseFolder_FieldCanChange
	• Req_FieldCanChange
	• Resource_FieldCanChange
	ResourceFolder_FieldCanChange
	• Run_FieldCanChange
	• Step_FieldCanChange
	• Test_FieldCanChange
	 TestConfiguration_FieldCanChange

• TestFolder_FieldCanChange
• TestSet_FieldCanChange
• TestSetFolder_FieldCanChange
TestSetTests_FieldCanChange

別のフィールドに応じてフィールドを非表示にするコードは、FieldChange イベント・プロシージャ内に記述する必要があります(FieldCanChange イベント・プロシージャ内ではありません)。

FieldChange

このイベントは、指定されたフィールドの値が変更されるときにトリガされます。

フィールドからフォーカスが移動すると、値の変更によってフィールド変更イベントがトリガされます。

このイベント・プロシージャにコードを追加することで、特定フィールドの値が変更されるときにアクション を実行できます。たとえば、ユーザが別のフィールドに入力する値に応じて、あるフィールドの表示、非 表示を切り替えることができます。例については、「例:別のフィールドを基にしたフィールドの変更」 (502ページ)を参照してください。

構文	<エンティティ>_FieldChange(FieldName)
	FieldName はフィールドの名前です。
タイプ	サブルーチン

利用方法	 AnalysisItem_FieldChange
	AnalysisItemFolder_FieldChange
	• Baseline_FieldChange
	• Bug_FieldChange
	• BusinessModel_FieldChange
	 BusinessModelActivity_FieldChange
	BusinessModelFolder_FieldChange
	 BusinessModelPath_FieldChange
	• Component_FieldChange
	ComponentFolder_FieldChange
	ComponentStep_FieldChange
	• Cycle_FieldChange
	DashboardFolder_FieldChange
	 DashboardPage_FieldChange
	DesignStep_FieldChange
	• Library_FieldChange
	LibraryFolder_FieldChange
	Release_FieldChange
	ReleaseFolder_FieldChange
	• Req_FieldChange
	• Resource_FieldChange
	ResourceFolder_FieldChange
	• Run_FieldChange
	• Step_FieldChange
	• Test_FieldChange
	 TestConfiguration_FieldChange

• TestFolder_FieldChange
• TestSet_FieldChange
TestSetFolder_FieldChange
• TestSetTests_FieldChange

ユーザが検索/置換コマンドを使用してフィールド値を変更するときには、ワークフロー・イベントはトリ ガされません。ワークフロー・スクリプト内に制限を実装することが重要である場合、特定ユーザ・グ ループに置換コマンドを無効にすることで、制限を省略できないようにすることを検討してください。

GetDetailsPageName

このイベントは ALM によってトリガされ,次のダイアログ・ボックスの PageNum で指定されているイン デックス番号のページ(タブ)の名前を取得します。

- エンティティの[詳細]ダイアログ・ボックス
- エンティティの[新規<エンティティ>]ダイアログ・ボックス

このイベント・プロシージャにコードを追加することで、[詳細]ダイアログ・ボックスのタブ名をカスタマイズ できます。例については、「例:タブ名の変更」(501ページ)を参照してください。

構文	GetDetailsPageName(PageName, PageNum)
	PageName は標準設定・ページ(タブ)名(「ページ 1」など)で, PageNum は ページ(タブ)番号です。
	注: ダイアログ・ボックスに表示されているその他のページからのページの相対的な位置にかかわらず、ページ番号は絶対ページ番号のことを指します。
タイプ	関数
戻り値	ページ名を含む文字列
利用方法	GetDetailsPageName(すべてのモジュール)

GetNewBugPageName

このイベントは ALM によってトリガされ, PageNum で指定されているインデックス番号の[新規不具合]ダイアログ・ボックスのページ(タブ)の名前を取得します。

このイベント・プロシージャにコードを追加することで,[新規不具合]ダイアログ・ボックスのタブ名をカス タマイズできます。例については,「例:タブ名の変更」(501ページ)を参照してください。
構文	GetNewBugPageName(PageName, PageNum)	
	PageName は標準設定・ページ(タブ)名(「ページ 1」など)で, PageNum は ページ(タブ)番号です。	
	注: [新規不具合]ダイアログ・ボックスに表示されているその他のページ からのページの相対的な位置にかかわらず、ページ番号は絶対ページ番 号のことを指します。	
タイプ	関数	
戻り値	ページ(タブ)名を含む文字列	
利用方法	GetNewBugPageName	

注: GetNewBugPageName イベントは、スクリプト・エディタのスクリプト・ツリーには一覧されません。このイベントは、後方互換性のみのためにトリガされます。代わりに、GetDetailsPageName を使用してください。

GetNewReqPageName

このイベントは ALM によってトリガされ, PageNum で指定されているインデックス番号の[新規要件] ダイアログ・ボックスのページ(タブ)の名前を取得します。

このイベント・プロシージャにコードを追加することで, [新規要件]ダイアログ・ボックスのタブ名をカスタ マイズできます。例については, 「例:タブ名の変更」(501ページ)を参照してください。

構文	GetNewReqPageName(PageName, PageNum)	
	PageName は標準設定・ページ(タブ)名(「ページ 1」など)で, PageNum は ページ(タブ)番号です。	
	注: [新規不具合]ダイアログ・ボックスに表示されているその他のページ からのページの相対的な位置にかかわらず、ページ番号は絶対ページ番 号のことを指します。	
タイプ	関数	
戻り値	ページ名を含む文字列	
利用方法	GetNewReqPageName	

注: GetNewReqPageName イベントは、スクリプト・エディタのスクリプト・ツリーには一覧されません。このイベントは、後方互換性のみのためにトリガされます。代わりに、GetDetailsPageName を使用してください。

GetReqDetailsPageName

このイベントは ALM によってトリガされ, PageNum で指定されているインデックス番号の[要件の詳細]ダイアログ・ボックスのページ(タブ)の名前を取得します。

このイベント・プロシージャにコードを追加することで, [要件の詳細]ダイアログ・ボックスのタブ名をカス タマイズできます。例については, 「例:タブ名の変更」(501ページ)を参照してください。

構文	GetReqDetailsPageName(PageName, PageNum)	
	PageName は標準設定・ページ(タブ)名(「ページ 1」など)で, PageNum は ページ(タブ)番号です。	
	注: [新規不具合]ダイアログ・ボックスに表示されているその他のページ からのページの相対的な位置にかかわらず、ページ番号は絶対ページ番 号のことを指します。	
タイプ	関数	
戻り値	ページ名を含む文字列	
利用方法	GetReqDetailsPageName	

注: GetReqDetailsPageName イベントは、スクリプト・エディタのスクリプト・ツリーには一覧されません。このイベントは、後方互換性のみのためにトリガされます。代わりに、GetDetailsPageName を使用してください。

MoveTo

このイベントは、ユーザがあるオブジェクトから別のオブジェクトにフォーカスを移動するときにトリガされます。

このイベント・プロシージャにコードを追加して、ユーザがフォーカスを移動するときに操作を実行できます。例については、「例:動的フィールド・リストの表現」(505ページ)を参照してください。

ヒント: オブジェクトをツリー内で移動しても MoveTo イベントはトリガされませんが,要件ツリーの イベントをトリガすることは可能です。詳細については、「ENABLE_ENTITY_SELECTION_ TREE_REQ_MOVE_TOJ(205ページ)を参照してください。

構文	<エンティティ>_MoveTo
タイプ	サブルーチン

利用方法	• AnalysisItem_MoveTo
	 AnalysisItemFolder_MoveTo
	• Baseline_MoveTo
	• Bug_MoveTo
	• BusinessModel_MoveTo
	 BusinessModelActivity_MoveTo
	• BusinessModelFolder_MoveTo
	 BusinessModelPath_MoveTo
	• Component_MoveTo
	 ComponentFolder_MoveTo(旧 MoveToComponentFolder)
	ComponentStep_MoveTo
	• Cycle_MoveTo
	 DashboardFolder_MoveTo
	 DashboardPage_MoveTo
	• DesignStep_MoveTo
	• Library_MoveTo
	• LibraryFolder_MoveTo
	• Release_MoveTo
	• ReleaseFolder_MoveTo
	• Req_MoveTo
	• Resource_MoveTo
	• ResourceFolder_MoveTo
	• Run_MoveTo
	• Step_MoveTo
	• Test_MoveTo
	 TestConfiguration_MoveTo

• TestFolder_MoveTo
• TestSet_MoveTo
• TestSetFolder_MoveTo
• TestSetTests_MoveTo

MoveToComponentFolder

このイベントは、ユーザがビジネス・コンポーネント・ツリーの指定されたコンポーネント・フォルダに移動するときにトリガされます。

構文	MoveToComponentFolder(Folder)	
	Folder は IComponentFolder インタフェースです。 詳細については、 『HP ALM Open Test Architecture API Reference』を参照してください。	
タイプ	サブルーチン	
利用方法	MoveToComponentFolder	

注: MoveToComponentFolder イベントは、スクリプト・エディタのスクリプト・ツリーには一覧されません。このイベントは、後方互換性のためにサポートされています。代わりに ComponentFolder_ MoveTo イベントを使用 することを推奨します。

MoveToFolder

このイベントは、ユーザがテスト・セット・ツリーの指定されたテスト・セットに移動するときにトリガされます。

構文	MoveToFolder(Folder)	
	Folder は ISysTreeNode インタフェースです。詳細については、 『HP ALM Open Test Architecture API Reference』を参照してください。	
タイプ	サブルーチン	
利用方法	MoveToFolder	

注: MoveToFolder イベントは、スクリプト・エディタのスクリプト・ツリーには一覧されません。このイベントは、後方互換性のためにサポートされています。代わりに MoveToFolder を使用することを 推奨します。

MoveToSubject

このイベントは、ユーザがテスト計画ツリーの指定されたサブジェクトに移動するときにトリガされます。

構文 MoveToSubject(Subject)	
	Subject は ISysTreeNode インタフェースです。詳細については,『HP ALM Open Test Architecture API Reference』を参照してください。
タイプ	サブルーチン
利用方法	MoveToSubject

注: MoveToSubject イベントは、スクリプト・エディタのスクリプト・ツリーには一覧されません。この イベントは、後方互換性のためにサポートされています。代わりに MoveToSubject を使用するこ とを推奨します。

New

このイベントは、ALM にオブジェクトを追加するときにトリガされます。

このイベント・プロシージャにコードを追加して,新規オブジェクトを追加するときに操作を実行できます。例については、「例:不具合モジュールのダイアログ・ボックスのカスタマイズ」(498ページ)を参照してください。

構文	<エンティティ>_New
タイプ	サブルーチン

利用方法	• AnalysisItem_New
	• AnalysisItemFolder_New
	• Baseline_New
	• Bug_New
	• BusinessModelFolder_New
	• BusinessModelPath_New
	• Component_New
	• ComponentFolder_New
	• ComponentStep_New
	• Cycle_New
	• DashboardFolder_New
	• DashboardPage_New
	• DesignStep_New
	• Library_New
	• LibraryFolder_New
	• Release_New
	• ReleaseFolder_New
	• Req_New
	• Resource_New
	• ResourceFolder_New
	• Step_New
	• Test_New
	• TestConfiguration_New
	• TestFolder_New
	• TestSet_New
	• TestSetFolder_New

RemoveComponentFromTest

このイベントは, ユーザが[テスト スクリプト]タブで, タイプがフロー, ビジネスプロセスのテストからコンポーネントを削除するときにトリガされます。

バージョン管理: RemoveComponentFromTest を使用した,別のユーザによってチェックイン,または チェック・アウトされたコンポーネントの変更はサポートされません。

構文	RemoveComponentFromTest
タイプ	サブルーチン
利用方法	RemoveComponentFromTest

RunTests

このイベントは、ユーザがテスト・ラボ・モジュールで[実行]ボタンをクリックするとトリガされます(Sprinter がインストールされておらず、自動化されたテストが存在しない場合)。

構文	RunTests(Tests) Tests は, テスト・インスタンス ID の配 列 です。	
タイプ	サブルーチン	
利用方法	RunTests	

RunTests_Sprinter

このイベントは次のタイミングでトリガされます。

- ユーザが, テスト・ラボ・モジュールで[実行]矢印をクリックして[実行...(Sprinter)]を選択し, テストを実行するとき。
- ユーザが, テスト・ラボ・モジュールで[**実行**]ボタンをクリックするとき(Sprinter がインストールされ, すべてのテストが手動の場合)。

構文	RunTests_Sprinter(Tests)	
	Tests は, テスト・インスタンス ID の配列です。	
タイプ	サブルーチン	
利用方法	RunTests_Sprinter	

RunTestSet

このイベントは、ユーザがテスト・ラボ・モジュールで[テスト セットの実行]ボタンをクリックして、テスト・ セットを実行するときにトリガされます。

構文	RunTestSet(Tests)	
	Tests は, テスト・インスタンス ID の配列です。	
タイプ	サブルーチン	
利用方法	RunTestSet	

RunTestsManually

このイベントは、ユーザがテスト・ラボ・モジュールで実行矢印をクリックして、[手作業で実行]ボタンを 選択して、テストを実行するときにトリガされます。

構文	RunTestsManually(Tests)	
	Tests は, テスト・インスタンス ID の配列です。	
タイプ	サブルーチン	
利用方法	RunTestsManually	

第32章:ワークフロー・オブジェクトとプロパティの参照

ワークフロー・オブジェクトは、HP Application Lifecycle Management(ALM)オブジェクトを参照して、 情報を取得し、プロジェクトの値を変更できます。ワークフロー・スクリプトは、現在のモジュールとダイ アログ・ボックスに関する情報を戻すプロパティを使用することもできます。本章では、ワークフロー・スク リプトに利用できる ALM オブジェクトとプロパティを一覧します。

ALM オブジェクトとプロパティについて	. 478
Actions オブジェクト	479
Action オブジェクト	. 479
Fields オブジェクト	481
Field オブジェクト	482
Lists オブジェクト	484
TDConnection オブジェクト	484
User オブジェクト	485
ALM プロパティ	485

ALM オブジェクト とプロパティについて

ワークフロー・スクリプトは、情報を取得して、取得した情報に基づいて判断を行い、その判断を基にしてプロジェクト内の値を変更できます。

User オブジェクトや Field オブジェクトなどのオブジェクトにアクセスすることで,現在のユーザが属す ユーザ・グループ,フィールドの値などの情報を取得できます。

ワークフロー・プロパティを使用することで、アクティブなモジュールとアクティブなダイアログ・ボックスに関する情報も取得できます。これらのプロパティの詳細については、「ALM プロパティ」(485ページ)を参照してください。

スクリプトで,フィールドの値やフィールド・リストを変更できます。これには,スクリプトで該当する Field オブジェクトの Value プロパティ, List プロパティの値を変更します。

ワークフロー・スクリプトを作成 するための VBScript コードを記述 できるイベント・プロシージャの詳細に ついては、「ワークフロー・イベント・リファレンス」(445ページ)を参照してください。

オブジェクト	説明
Actions	利用できるアクションのリストです。 「Actions オブジェクト」(479ページ)を参照し てください。
Action	Action オブジェクトは Actions オブジェクトによって処理されます。「Action オブ ジェクト」(479ページ)を参照してください。
Fields	特定のフィールドへのアクセスを提供するオブジェクトが含まれます。「Fields オ ブジェクト」(481ページ)を参照してください。
Field	Field オブジェクトは Fields オブジェクトによって処理されます。「Field オブジェクト」(482ページ)を参照してください。
Lists	ALM プロジェクト内 で利用 できるリスト が含まれます。「Lists オブジェクト」(484 ページ)を参照してください。
TDConnection	オープン・テスト・アーキテクチャ(OTA)オブジェクトにアクセスできます。 「TDConnectionオブジェクト」(484ページ)を参照してください。
User	現在のユーザのプロパティが含まれます。 このオブジェクトはすべてのモジュール で利用できます。 詳細については,「User オブジェクト」 (485ページ)を参照し てください。

次の表には、スクリプトを記述するときに利用できる ALM オブジェクトを一覧します。

注:ある場合では、関数は、オブジェクトのID プロパティの代わりにオブジェクト自体を返します。 たとえば、次のステートメントが実行されると、testsetfはTestSetFolderオブジェクトへの参照 になります。

Set testsetf = TestSet_Fields("CY_FOLDER_ID").Value

ワークフロー・スクリプトの記述に使用するスクリプト・エディタの詳細については、「ワークフロー・スクリプト・エディタの操作」(431ページ)を参照してください。

本章では,各 ALM オブジェクトについて,オブジェクトのプロパティを一覧します。リストには,プロパティ 名,説明,プロパティのデータ・タイプが含まれます。また,リストには,プロパティが読み取り専用(R) であるか,スクリプトにより変更可能(R/W)であるかどうかが示されます。

バージョン管理: プロジェクトのバージョン管理を有効にした後には、プロジェクトのすべてのワーク フロー・スクリプトを確認し、各チェックイン済みエンティティを調整する必要があります。これには、 エンティティ Req, Test, Resource, Component が含まれます。スクリプト内に Post 関数を含 む各チェックイン済みエンティティについて、スクリプトを変更する必要があります。変更するには、 各 Post 関数の前に Checkout 関数を追加します。この変更を行うことで、Post 関数を呼び 出すたびに[チェックアウト]ダイアログ・ボックスが開かないようにします。このプロパティの詳細につ いては、『HP ALM Open Test Architecture Reference』を参照してください。

バージョン管理の詳細については、『HP Application Lifecycle Management ユーザーズ・ガイド』 を参照してください。

Actions オブジェクト

Actions オブジェクトを使用して, ツールバー・ボタン, メニュー・コマンド, ダイアログ・ボックスを操作できます。

Actions オブジェクトには次のプロパティがあります。

プロパティ	R/W	タイプ	説明
Action	R	オブジェクト	リスト内の各アクションにアクセスでき ます。 このプロパティのインデックスは アクション名です。

Action オブジェクト

Action オブジェクトを使用して、ボタン、コマンドが有効、チェック済み、可視であるかどうかを確認できます。このオブジェクトを使用して、アクションを実行することもできます。

たとえば、ユーザが不具合のグリッド内で不具合から別の不具合に移動すると、[不具合の詳細]ダ イアログ・ボックスが自動的に開くように設定するには、Bug_MoveTo イベント・プロシージャに次のコー ドを記述します。

Set NewDefectAction=Actions.Action("DDefects.DefectDetails")
NewDefectAction.Execute

アクションの名前を取得するには、ActionCanExecute イベント・プロシージャに次の行を追加し、アクションを実行して、メッセージに出力されたアクション名を記録します。

Sub ActionCanExecute(ActionName) On Error Resume Next MsgBox "実行したアクションの名前:" & ActionName On Error GoTo 0

End Sub

このオブジェクトには次のプロパティがあります。

プロパティ	R/W	タイプ	説明
Checked	R/W	Boolean	アクションが ALM でチェックされている かどうかを示します。
Enabled	R/W	Boolean	アクションが有効であるかどうかを示します。 無効のアクションはユーザが呼び出すことはできませんが、 ワークフロースクリプトからは呼び出すことができます。
Visible	R/W	Boolean	アクションが ALM で可 視 であるかどう かを示します。

Action オブジェクトには次のメソッド があります。

メソッド	説明
Execute	アクションを実行します。

ワークフロー・スクリプトが, Action オブジェクトの Execute メソッドを使用してアクションを呼び出すと, ユーザがダイアログ・ボックスからアクションを開始したときにトリガされるはずのワークフロー・イベントは, 標準設定でトリガされなくなります。このため, Action.Execute を使用するときには, ワークフロー・イ ベントに適用しているサイト・ポリシーをバイパスしないようにする必要があります。

ワークフロー・イベントをダイアログ・ボックスからトリガされるようにするには、AllowReentrancy フラグの 値を true に設定する必要があります。標準設定設定に戻して、これらのイベントがトリガされないようにするには、AllowReentrancy フラグの値を false に設定します。たとえば、ユーザが不具合モジュールに入るときに、自動的に[不具合の追加]ダイアログ・ボックスを開くように設定するに は、EnterModule イベント・プロシージャに次のコードを記述します。

AllowReentrancy=true
Set NewDefectAction=Actions.Action("Defects.DefectDetails")
NewDefectAction.Execute
AllowReentrancy=false

AllowReentrancy フラグの値が false に設定されている場合,ダイアログ・ボックスは通常どおり開きますが,不具合を送信するワークフロー・イベントがトリガされないため,不具合を送信できません。

注意: このフラグの値を true に設定する場合,影響を十二分に検討してください。このフラグの 値を true に設定すると,関数が,元の関数を呼び出せる別の関数を呼び出せるようになりま す。これにより,循環が生じる可能性があります。また,この現象は,関数が元の関数を呼び出 す内部関数を呼び出すときにも発生することがあります。

Fields オブジェクト

ワークフロー・スクリプトで次のオブジェクトを使用して, ALM モジュールのフィールドにアクセスできます。

オブジェクト	説明		
AnalysisItem_Fields	ダッシュボード・モジュールにある, レポートとグラフのフィールドにアクセスで きます。		
AnalysisItemFolder_ Fields	ダッシュボード・モジュールにある, レポート・フォルダとグラフ・フォルダの フィールド へのアクセスを提供します。		
Baseline_Fields	ライブラリ・モジュールにある、ベースラインのフィールドにアクセスできます。		
Bug_Fields	不具合モジュールと[マニュアルランナー]ダイアログ・ボックスにある,不具合のフィールドにアクセスできます。		
Component_Fields	ビジネス・コンポーネント・モジュールにある, コンポーネントのフィールドに アクセスできます。		
ComponentStep_ Fields	ビジネス・コンポーネント・モジュールにある, コンポーネント・ステップのフィー ルドにアクセスできます。		
Cycle_Field	リリース・モジュールにある、サイクルのフィールドにアクセスできます。		
DashboardFolder_ Fields	ダッシュボード・モジュールにある, ダッシュボード・ページ・フォルダのフィール ドにアクセスできます。		
DashboardPage_ Fields	ダッシュボード・モジュールにある, ダッシュボード・ページのフィールドにアク セスできます。		
DesignStep_Fields	テスト計画 モジュールにある, デザイン・ステップのフィールド にアクセスでき ます。		
Library_Fields	ライブラリ・モジュールにある、ライブラリのフィールドにアクセスできます。		
LibraryFolder_ Fields	ライブラリ・モジュールにある, ライブラリ・フォルダのフィールド にアクセスでき ます。		
Release_Fields	リリース・モジュールにある、リリースのフィールドにアクセスできます。		
ReleaseFolder_ Fields	リリース・モジュールにある, リリース・フォルダのフィールド にアクセスできま す。		
Req_Fields	要件モジュールのフィールドにアクセスできます。		
Resource_Fields	テスト計画モジュールにある、リソースのフィールドにアクセスできます。		

オブジェクト	説明
ResourceFolder_ Fields	テスト計画 モジュールにある, リソース・フォルダのフィールド にアクセスでき ます。
Run_Fields	[マニュアルランナー]ダイアログ・ボックスにある, テスト実行のフィールドに アクセスできます。
Step_Fields	[マニュアルランナー]ダイアログ・ボックスにある, ステップのフィールドにアク セスできます。
Test_Fields	テスト計画モジュールにある、テストのフィールドにアクセスできます。
TestSet_Fields	テスト・ラボ・モジュールにある, テスト・セットのフィールド にアクセスできます。
TestSetTest_Fields	テスト・ラボ・モジュールにある, テスト・インスタンスのフィールド にアクセスで きます。

たとえば、Req_Fields オブジェクト内のすべてのフィールドのあるプロパティを設定するには、各フィールドをその ID 番号で参照できます(Req_Fields.FieldByld)。ダイアログ・ボックスで、すべてのフィールドを可視(IsVisible)に設定するには、次のコードを使用できます。

For i = 1 to Req_Fields.Count

Req_Fields.FieldById(i).IsVisible = True

Next

これらのオブジェクトには、次のプロパティがあります。

プロパティ	R/W	タイプ	説明
Count	R	Long	現在のオブジェクト内のフィールド数を 戻します。
Field (FieldName)	R	オブジェクト	フィールド名またはフィールド・ラベルで フィールドにアクセスします。
FieldByld (FieldID)	R	オブジェクト	フィールド ID 番号でフィールドにアク セスします。

ヒント: スクリプトがアクティブではないフィールド,存在しないフィールドにアクセスしようとしたときの エラーを回避するため,スクリプトに On Error Resume Next を含めてください。

Field オブジェクト

Field オブジェクトを使用して,エンティティ・フィールドのプロパティにアクセスできます。

たとえば、ユーザが Status フィールドの値を変更する権限が無い場合にメッセージ・ボックスを表示するには、次のコードを使用できます。

msgbox "_Bug_Fields.Field("BG_STATUS").FieldLabel field." _ & "を変更するアクセス許可がありません。"

Field オブジェクトには次のプロパティがあります。

プロパティ	R/W	タイプ	説明
FieldLabel	R	String	表示されるフィールドのラベル。
FieldName	R	String	フィールドの論理名。
IsModified	R	Boolean	値が変更されたかどうかを示します。
lsMultiValue	R	Boolean	フィールド にルックアップ・リスト からの複 数 の値を含 められるかどうかを示しま す。
IsNull	R	Boolean	フィールド 値 が存 在しないことを示し ます。
IsReadOnly	R/W	Boolean	フィールドが読み取り専用であるかど うかを示します。
IsRequired	R/W	Boolean	フィールド値が必須であることを示しま す。これにより、フィールドのカスタマイ ズ情報を上書きできます。フィールド の IsRequired プロパティを変更する には、IsVisible プロパティが True で ある必要があります。フィールドが可 視ではない場合、IsRequired を変 更しても無視されます。 ユーザは常に、ワークフローが必要と すると設定されたフィールドに値を入 力する必要があります。これは、ユー ザが既存レコードを変更したり、新し いレコードを追加する場合、フィール ドがすでに空である場合にも適用さ
			れます。
lsVisible	R/W	Boolean	フィールド が表示されるかどうかを示します。
List	R/W	List	ルックアップ・リスト・タイプのフィールド に添付されているフィールド・リストを 設定,取得します。

プロパティ	R/W	タイプ	説明
PageNo	R/W	Integer	[新規不具合], [不具合の詳細]ダ イアログ・ボックスで, フィールドが表示 されるページ(タブ)を設定, 取得しま す。
Value	R/W	Variant	フィールドの値を設定、取得します。
ViewOrder	R/W	Integer	[新規不具合], [不具合の詳細]ダ イアログ・ボックスで, フィールドが表示 される順序を設定,取得します。ダイ アログ・ボックスの各フィールドについて 値を設定する必要があります。

Lists オブジェクト

Lists オブジェクトを使用して,フィールドの入力を,値の特定のリストに限定できます。

たとえば、[プロジェクト]フィールドの値に応じて、[予定終了バージョン]フィールドにリストを設定する場合,次のコードを使用できます。

```
If Bug_Fields.Field("BG_PROJECT").Value = "Project 1" Then
    Bug_Fields.Field("BG_PLANNED_CLOSING_VER").List _
    = Lists("All Projects")
    ' ...
```

End If

詳細については、「例:動的フィールド・リストの表現」(505ページ)を参照してください。

Lists オブジェクトは、プロジェクト・エンティティの[プロジェクト カスタマイズ]で、Lookup List タイプまたはString タイプとして定義されているフィールドでのみ使用できます。

Lists オブジェクトには次のプロパティがあります。

プロパティ	R/W	タイプ	説明
List	R	ISysTreeNode	ALM リストにアクセスします。

注: 遷移 ルールが定義されているフィールドの値リストを変更するためにワークフローのカスタマイ ズを使用している場合は、ワークフロー・スクリプトと遷移 ルールの両方を満足するようにしか、 フィールドを変更できません。詳細については、「遷移 ルールの設定」(295ページ)を参照してくだ さい。

TDConnection オブジェクト

ワークフロー・スクリプトで利用できるオブジェクトは、コードが記述されたモジュールのオブジェクトと、ごく限られた数のグローバル・オブジェクトのみです。 グローバル・オブジェクトの1つがTDConnection オブ

ジェクトです。TDConnection は、オープン・テスト・アーキテクチャ(OTA)オブジェクトにアクセスできます。

TDConnection オブジェクトを使用して,その他のモジュールからオブジェクトにアクセスし,一般セッション・パラメータにアクセスします。任意のプロシージャ,任意のモジュールから TDConnection プロパティにアクセスできます。

TDConnection オブジェクト, **TDConnection** プロパティのリストの詳細については, 『HP ALM Open Test Architecture API Reference』を参照してください。

ワークフロー・スクリプトでの TDConnection オブジェクトの使用例については、「ワークフローの例とベスト・プラクティス」(489ページ)を参照してください。

User オブジェクト

User オブジェクトにアクセスして, 現在のユーザのユーザ名を取得して, ユーザが特定のユーザ・グ ループに属するかどうかを確認できます。ユーザの名前の姓や名を取得したり変更できます。

たとえば、ユーザがプロジェクト管理者権限がある場合にメッセージ・ボックスを開くには、次のコードを使用します。

If User.IsInGroup("TDAdmin") Then

MsgBox "ユーザ" & User.FullName & _

"には、このプロジェクトの管理権限があります。"

End If

詳細については、「例:ユーザ・グループを基にしたフィールドの変更」(503ページ)および「例:ユーザ・ アクセス許可の制御」(506ページ)を参照してください。

User オブジェクトではアクセスできないユーザ・プロパティにアクセスするには、ALM オープン・テスト・ アーキテクチャ(OTA)のTDConnection オブジェクトを使用できます。

プロパティ	R/W	タイプ	説明
FullName	R/W	String	現在のユーザの姓と名を設定したり 取得します。
IsInGroup (GroupName)	R	Boolean	現在 のユーザが事前定義 / ユーザが 定義したグループのメンバであるかどう かを確認します。
UserName	R	String	ALM にログ・インしたときに使用され たユーザ名を戻します。

User オブジェクトには次のプロパティがあります。

ALM プロパティ

ActiveModule, ActiveDialogName プロパティを使用して, アクティブなモジュールとダイアログ・ボックスの情報を取得します。

本項の内容

ActiveModule プロパティ	
ActiveDialogName プロパティ	

ActiveModule プロパティ

ActiveModule プロパティは、アクティブな ALM モジュールの名 前を戻します。次の値を返すことができます。

- リリース
- ライブラリ
- アナリシス
- ダッシュボード
- 要件
- ビジネス・モデル
- テスト・リソース
- ビジネス・コンポーネント
- テスト計画
- テスト・ラボ
- テスト実行
- 不具合

例

ユーザが新しいモジュールに移動するときに、モジュール名を表示するメッセージボックスを開くに は、次のコードを使用します。

```
Sub EnterModule
On Error Resume Next
msgbox ActiveModule & _
"モジュールに入りました。"
On Error GoTo 0
End Sub
```

ActiveDialogName プロパティ

ActiveDialogName プロパティは,アクティブなダイアログ・ボックスの名前を戻します。

例:

ユーザが新しいダイアログ・ボックスを開くときに、ダイアログ・ボックス名を表示するメッセージ・ボック スを開くには、次のコードを使用します。

```
Sub DialogBox(DialogBoxName, IsOpen)
On Error Resume Next
msgbox ActiveDialogName & _
" ダイアログ・ボックスを開きました。"
On Error GoTo 0
End Sub
```

第33章:ワークフローの例とベスト・プラクティス

本章では、ワークフロー・スクリプトに関する検討事項と例を説明します。

ワークフローの例について	
ワークフロー・スクリプトの記述に関するベスト・プラクティス	
例:不具合モジュールのダイアログ・ボックスのカスタマイズ	
例 : タブ名 の変 更	
例:メモ・フィールド へのテンプレートの追加	502
例:別のフィールドを基にしたフィールドの変更	
例:ユーザ・グループを基にしたフィールドの変更	503
例 :オブジェクトの検証	503
例 : フィールドの検証	504
例 :動的フィールド・リストの表現	505
例:フィールド変更時のフィールドのプロパティの変更	506
例 : ユーザ・アクセス許可の制御	
例 : ボタン機能の追加	507
例 : エラ―処 理	
例:セッション・プロパティの取得	
例:メールの送信	
例:最後に入力された値の格納	510
例:別のオブジェクトへのフィールド値のコピー	512

ワークフローの例について

本章に挙げられているワークフローの例では、いくつかのタイプのタスクを実行します。次の表に、各タ イプのタスクを例示するための例を一覧します。

ワークフロー・タスク	参照先の例
ダイアログ・ボックスのカスタマイズ	「例 : 不具合モジュールのダイアログ・ボックスのカスタマイズ」 (498ページ)
	「例 : タブ名 の変 更」(501ページ)
フィールド値の自動化	「例:メモ・フィールドへのテンプレートの追加」(502ページ)
	「例:別のフィールドを基にしたフィールドの変更」(502ペー ジ)
	「例 : ユーザ・グループを基にしたフィールドの変更」(503ペー ジ)
データの検証	「例:オブジェクトの検証」(503ページ)
	「例:フィールドの検証」(504ページ)
動的フィールドのカスタマイズ	「例:動的フィールド・リストの表現」(505ページ)
	「例 : フィールド変更時のフィールドのプロパティの変更」 (506ページ)
ユーザ・アクセス許可の制御	「例 : ユーザ・アクセス許 可 の制 御」(506ページ)
機能	「例:ボタン機能の追加」(507ページ)
エラー処理	「例 : エラー処理」(508ページ)
OTA 使用によるセッション・パラメータ の取得	「例 : セッション・プロパティの取得」(508ページ)
メールの送信	「例:メールの送信」(509ページ)
Settings オブジェクトの使用	「例:最後に入力された値の格納」(510ページ)
モジュール間での値のコピー	「例:別のオブジェクトへのフィールド値のコピー」(512ページ)

ワークフロー・スクリプトの記述に関するベスト・プラクティス

本項では、ワークフロー・スクリプトが期待通りの動作をするように、スクリプトを記述するためのベスト・ プラクティスを紹介します。ここで紹介するベスト・プラクティスに加えて、『Microsoft Developer Network VBScript Language Reference』(http://msdn.microsoft.com/en-us/library/)も参照してくだ さい。

本項の内容

VBScript に関する一般的なヒントとベスト・プラクティス

- •「使用前の型チェック」(491ページ)
- 「論理式の全体評価の予測」(492ページ)
- 「Select Case ステートメントとIf-Then-Else ステートメントでの標準設定の動作の定義」(493ページ)
- •「関数の戻り値の設定」(494ページ)

ALM ワークフローのヒントとベスト・プラクティス

- 「エンティティにフォーカスが移る前にエンティティのプロパティを設定」(495ページ)
- 「ダイアログ・ボックスが開いているかどうかの確認」(496ページ)
- •「重複するサブルーチンを定義しない方法」(497ページ)

使用前の型チェック

VBScript は、型指定が厳格ではありません。つまり、データ型を最初に宣言しなくても、データの値の作成、使用、アクセスが可能です。ただし演算の中には、特定の型の値でないと実行できないものもあります。したがって、データに対して演算を実行する場合は、事前に型をチェックすることが重要です。

データ型が異なると、ステートメントによって動作も異なります。また、オブジェクトの場合は、実装に よって動作が異なるため、予期しない結果を招く可能性がさらに高くなります。たとえば、<entity>_ CanDelete のオブジェクトは、テキストまたはサブジェクト・ノードのいずれかになります。

ベスト・プラクティス

予期しない結果が発生しないようにするには、次の点に注意します。

値は、使用する前に型をチェックします。特にオブジェクト・タイプには注意が必要です。オブジェクト・タイプのチェックでは、アクセスするプロパティをそのオブジェクトに含まれているかどうかを確認してください。

注:この章では、オブジェクト・タイプをチェックする例だけを紹介します。

- 前提とする条件はできるだけ少なくします。たとえば、値が特定の型であるというような想定はしないでください。あらゆる可能性を考慮したスクリプトを記述するには、ElseステートメントとSelect Caseステートメントを使用します。
- VBScript 関数(IsArray, IsDate, IsNull, IsEmpty, IsNumeric, IsObject など)でパラメータを使用する場合は、必ず型をチェックしてください。
- オブジェクトの標準設定のプロパティが特定の型であるといった想定はしないでください。 データ型 はオブジェクトによって異なる可能性があります。
- データ型を確実に処理するには、VBScriptに組み込まれている変換関数を使用してください。
- オブジェクトの操作では、IsNull 関数とIsEmpty 関数を呼び出すことにより、戻り値がNull または Empty でないことを確認してください。

例

次の例では、フィールドの値は表のように宣言されているとします。

フィールド値	タイプ
<pre>Bug_Fields["BG_BUG_ID"].Value</pre>	Integer
<pre>Bug_Fields["BG_SUMMARY"].Value</pre>	String
<pre>Bug_Fields["BG_SUBJECT"].Value</pre>	ISysTreeNode インタフェースを実装するオブジェクト

次は、正しいステートメントの例です。整数値が文字列に変換されています。

If Bug_Fields["BG_BUG_ID"].Value = "10" Then...

次は、正しいステートメントの例です。文字列は比較可能です。

If Bug_Fields["BG_SUMMARY"].Value = "some text" Then...

次は, 誤ったステートメントの例です。このコードを問題なく実行できるのは, BG_SUBJECT フィー ルドが Empty とNull のいずれでもない場合のみです。VBScript では, オブジェクトの標準設定 値(つまり標準設定のプロパティ)は文字列型であるか, 文字列型と比較可能な型であることが 想定されますが, この条件は必ずしも満たされるわけではありません。

If Bug_Fields["BG_SUBJECT"].Value = "My Tests" Then...

論理式の全体評価の予測

VBScript プログラム言語では、ブール式のショートサーキット評価は行いません。VBScriptでは、すべての条件を評価せずにブール式の結果がTrueまたはFalseであることを特定できる場合でも、すべての条件を評価します。たとえば次の場合、<statement1>がFalseであっても、<<statement1>と<statement2>は評価されます。

<statement 1> AND <statement 2>

ベスト・プラクティス

エラーを避けるために、値とオブジェクトは使用前に必ずNullでないことを確認します。

例

次に例を示します。

- 論理式の正しい使用方法と誤った使用方法
- 論理式の評価方法を考慮

誤った方法

value.Name は, 値がNullの場合であっても評価されています。これにより, エラーが発生します。

正しい方法

value が Name プロパティを含むオブジェクトである場合, コードは正しいと評価されます。このコードを実行してもエラーは発生しません。

```
Sub namecheck(value)
If Not IsNull(value) And Not IsEmpty(value) Then
If value.Name = "aName" Then
' ...
End If
End If
End Sub
```

Select Case ステートメントと If-Then-Else ステートメントでの標準設定の動作の定義

Select Case ステートメントや If-Then-Else ステートメントでは,標準設定の処理を定義しておかないと,予期しない結果が返される可能性があります。

ベスト・プラクティス

予期しない結果が返されないようにするには、Select Case やIf-Then-Else ステートメントでは、標準設定の動作を必ず定義します。

例

次の例では, コード内ですでに定義した Select Case ステートメントとIf-Then-Else ステートメント では対応できない状況に適用するために, 標準設定の動作が正しく定義されているコードと 誤ったコードを紹介します。

誤った方法

このサブルーチンでは、不具合のステータスが Open, New, Reopen のいずれかの場合にのみ BG_USER_01 フィールドを表示しようとしています。ただし、ステータスが Closed または Fixed の不 具合の IsVisible プロパティが True に設定された状態でこのサブルーチンのインスタンスが呼び出 されると、ステータスが Closed または Fixed の不具合でもフィールドが表示されてしまいます。こ のような動作が発生するのは、Closed と Fixed のステータスを処理する Case ステートメントが定 義されていないためです。

```
Sub Bug_FieldChange(FieldName)
```

```
If FieldName="BG_STATUS" Then
    Select Case Bug_Fields(FieldName).Value
    Case "Open", "New", "Reopen" _
    Bug_Fields("BG_USER_01").IsVisible = True
    End Select
End If
```

End Sub

正しい方法

すべての可能性に対処したサブルーチンです。

```
Sub Bug_FieldChange(FieldName)
If FieldName="BG_STATUS" Then
Select Case Bug_Fields(FieldName).Value
Case "Open", "New", "Reopen"
Bug_Fields("BG_USER_01").IsVisible = True
Case Else
Bug_Fields("BG_USER_01").IsVisible = False
End Select
End If
End Sub
```

関数の戻り値の設定

終了時に戻り値を戻さない関数は、予期しない結果や一貫性のない結果を招く原因になります。 また、リターン・コードが設定されないと、デバッグも難しくなります。

ベスト・プラクティス

予期しない結果が返されないようにするには、関数の最初で標準設定の戻り値を設定します。

エンティティにフォーカスが移る前にエンティティのプロパティを設定

ー 般的なプログラミング手法では、エンティティの新規作成または変更(New または FieldChanged) 時に、エンティティのプロパティ(IsVisible, IsRequired, List)を設定します。また、ALM ワークフロー・ スクリプトの記述では、エンティティにフォーカスが移るときに(ALM グラフィカル・ユーザ・インタフェースで ユーザがエンティティに移動)、エンティティのプロパティを設定することも重要です。エンティティにフォーカ スが移ると、MoveTo イベントが呼び出されます。

MoveTo イベントでエンティティの値を設定しないと、ドロップダウン・リストに誤った値が表示されるなど、予期しない結果が返される可能性があります。

ベスト・プラクティス

ドロップダウン・リストに最新の設定値が表示されないなど、予期しない結果を回避するには次の点に注意してください。

- New イベントや FieldChanged イベントだけでなく, MoveTo イベントですべてのエンティティのプロパティを設定します。
- エンティティのプロパティをカスタマイズするコードを別のルーチンにまとめて、そのルーチンを関連イベントから呼び出すようにします。

例

```
不具合の変更や追加だけでなく、不具合にフォーカスが移ったときに、不具合のプロパティを適切に設定する方法を示しています。
```

```
Sub SetupBugFields(Context1, Context2)
   '不具合のプロパティをカスタマイズするコードをここに入力。
   ' たとえば, IsVisible, IsRequired, IsReadonly, Label, List の設定など
   If Context1="Focus" Then
         'フォーカス・イベントを処理するコードをここに入力
   ElseIf Context1="FieldChange" Then
          If Context2="RQ_USER_01" Then
               ' FieldChange イベントを処理するコードを
               'ここに入力
           ElseIf Context2="RQ REQ STATUS" Then
              '...コードを入力
          Else
              ' ... コードを入力
           End If
 End If
End Sub
Sub Req_FieldChange(FieldName)
   If FieldName = "RQ_REQ_STATUS" Then
       SetupBugFields("FieldChange", FieldName)
   Else
       ' ... コードを入力
   End If
End Sub
Sub Req_MoveTo
       SetupBugFields("Focus")
End Sub
```

ダイアログ・ボックスが開いているかどうかの確認

操作を実行する前に,ダイアログ・ボックスが開いているかどうかを確認することをお勧めします。この チェックは,たとえば次のような場合に有効です。

- ダイアログ・ボックスの更新は不要だが、グリッドを更新する必要がある場合。
- ダイアログ・ボックスが開いている状態ではワークフロー・イベントを実行してはならない場合。

ダイアログ・ボックスが開いているかどうかの確認には, DialogBox イベントを使用します。

ベスト・プラクティス

予期しない結果が返されないようにするには、イベントが発生する前に、ダイアログ・ボックスが開いて いるかどうかを確認します。

例

次の例では、新しい不具合を作成するダイアログ・ボックスが開いているかどうかを確認しま す。BG_USER_01フィールドを変更可能にするのは、新規不具合のみです。不具合の編集など 他のダイアログ・ボックスが開いている場合、BG_USER_01フィールドは編集できなくなります。

```
'各ダイアログ・ボックスのグローバル変数を宣言
Dim NewDefectDialogIsOpen
' グローバル変数を初期化
NewDefectDialogIsOpen = False
Sub DialogBox(DialogBoxName, IsOpen)
   If DialogBoxName="New Bug" Then
       NewDefectDialogIsOpen = True
   Else
       NewDefectDialogIsOpen = False
   End If
End Sub
Function Bug_FieldCanChange(FieldName, NewValue)
' 関数の戻り値を初期化し、
'予期しない動作を回避
Bug FieldCanChange = True
'BG_USER_01 フィールドが変更可能なのは新規不具合のみ
If FieldName="BG USER 01" Then
   If NewDefectDialogIsOpen Then
       Bug_FieldCanChange = True
   Else
       Bug_FieldCanChange = False
   End If
End If
End Function
```

重複するサブルーチンを定義しない方法

1 つのサブルーチンを同じ名前で別のセクションに追加すると競合が発生し, いずれかー方は無視されます。

例:テスト・ラボ・モジュールのスクリプト・セクションで **MySub** という名前のサブルーチンを定義し, これと同じサブルーチンをマニュアル・ランナーのスクリプト・セクションでも定義すると, いずれかー 方は無視されます。

ベスト・プラクティス

サブルーチンが競合しないように、プロジェクト内に同名のサブルーチンがすでに定義されていないかを常に確認してください。

例:不具合モジュールのダイアログ・ボックスのカスタマイズ

この例では、 [不具合の追加]ダイアログ・ボックスのフィールド・レイアウトとその他のフィールド・プロパ ティをカスタマイズする方法を示します。 同様のコードを作成することで、 [不具合の詳細]ダイアログ・ ボックスのレイアウトを整えることができます。

この例では、すべてのユーザ・グループのフィールド・プロパティをカスタマイズする解決策を例示します。 スクリプト・ジェネレータを使用して、不具合モジュールのダイアログ・ボックスのレイアウトをカスタマイズ することもできます。スクリプト・ジェネレータを使用する場合、各ユーザ・グループに対して別々にカスタ マイズを実行する必要があります。これらのスクリプト・ジェネレータの詳細については、「不具合モ ジュールのダイアログ・ボックスのカスタマイズ」(421ページ)を参照してください。

この例では、次のプロシージャを使用します。

- SetFieldApp は、フィールド名とそのプロパティをパラメータとして受け取り、フィールドにプロパティを 割り当てる汎用プロシージャです。「SetFieldApp」(498ページ)を参照してください。
- FieldCust_AddDefect は、[不具合の追加]ダイアログ・ボックス内の各フィールドについて SetFieldApp を呼び出し、フィールドのプロパティを設定します。一部のフィールドで は、FieldCust_AddDefect は、現在のユーザが属すユーザ・グループを確認して、それに合わせ てフィールドのプロパティをカスタマイズします。Bug_New イベント・プロシージャ内に FieldCust_ AddDefect の呼び出しが配置されます。「FieldCust_AddDefect」(499ページ)を参照してください。

注: この例を実装するのに、 [**不具合の追加]フィールドのカスタム化**スクリプト・ジェネレータを 実行して、 作成されたスクリプトを変更できます。

- 生成される関数 WizardFieldCust_Add を FieldCust_AddDefect に名前変更し、必要に応じて変更します(生成されたスクリプトを変更する前に、名前を変更して次にスクリプト・ジェネレータを実行しても上書きされないようにします)。
- スクリプト・ジェネレータは、イベント・プロシージャ Bug_New に WizardFieldCust_Add の呼び 出しを配置します。これを FieldCust_AddDefect に変更します。
- スクリプト・ジェネレータを実行すると、関数 SetFieldApp が生成されます。この関数を名前 変更したり変更する必要はありません。

SetFieldApp

サブルーチン SetFieldApp は、フィールド名とそのプロパティをパラメータとして受け取り、フィールドにプロパティを割り当てます。

このサブルーチンは,フィールドの可視性,フィールドが必須かどうか,フィールドが表示されるべきページ(タブ)の番号,表示の順序(左から右,上から下)などのフィールドのプロパティを割り当てます。

ユーザ定義関数 FieldCust_AddDefect にサブルーチン SetFieldApp の呼び出しを追加します。この 機能の詳細については、「FieldCust_AddDefect」(499ページ)を参照してください。

```
Sub SetFieldApp(FieldName, Vis, Req, PNo, VOrder)
On Error Resume Next
With Bug_Fields(FieldName)
.IsVisible = Vis
.IsRequired = Req
.PageNo = PNo
.ViewOrder = VOrder
End With
PrintError "SetFieldApp"
On Error GoTo 0
End Sub
```

FieldCust_AddDefect

ユーザ定義関数 FieldCust_AddDefect は関数 SetFieldApp を呼び出します。

関数はまず, すべてのフィールドを不可視, 不要, 場所 0 のページ 100 に表示されるように設定しま す。これにより, [プロジェクト カスタマイズ]ウィンドウの[プロジェクトのエンティティ]を使用して新しい フィールドを追加しても, レイアウトは変更されなくなります。

Bug_New イベント・プロシージャに FieldCust_AddDefect の呼び出しを追加して, ユーザが新規不 具合を追加するときに, この関数がトリガされるようにします。

Sub Bug_New FieldCust_AddDefect

End Sub

コードはまず, すべてのユーザ・グループに共通のフィールドを処理します。このコードは, 特定のユー ザ・グループについてのみダイアログ・ボックス内に表示されるフィールド, ユーザによってプロパティが変 化するフィールドには, 条件ステートメントを使用します。

```
Sub FieldCust_AddDefect
```

```
On Error Resume Next

' Initialize the fields of the defect

For i= 0 To Bug_Fields.Count -1

SetFieldApp Bug_Fields.FieldByID(i).FieldName, _

False, False, 100, 0

Next

ViewNum = 0

PageNum = 0

' すべてのユーザ・グループに共通であるフィールドを設定します

SetFieldApp "BG_BUG_ID", True, True, PageNum, ViewNum

ViewNum = ViewNum + 1

SetFieldApp "BG_DESCRIPTION", True, False, PageNum, ViewNum

ViewNum = ViewNum + 1

SetFieldApp "BG_SUMMARY", True, True, PageNum, ViewNum
```

```
ViewNum = ViewNum + 1
SetFieldApp "BG_DETECTED_BY", True, True, PageNum, ViewNum
ViewNum = ViewNum + 1
SetFieldApp "BG DETECTION DATE",
True, True, PageNum, ViewNum
ViewNum = ViewNum + 1
SetFieldApp "BG_DETECTION_VERSION", True, True, PageNum, _
ViewNum
ViewNum = ViewNum + 1
SetFieldApp "BG_SEVERITY", True, True, PageNum, ViewNum
ViewNum = ViewNum + 1
SetFieldApp "BG_PRIORITY", True, True, PageNum, ViewNum
ViewNum = ViewNum + 1
SetFieldApp "BG_PROJECT", True, False, PageNum, ViewNum
ViewNum = ViewNum + 1
SetFieldApp "BG REPRODUCIBLE", True, False, PageNum, ViewNum
ViewNum = ViewNum + 1
SetFieldApp "BG_STATUS", True, False, PageNum, ViewNum
ViewNum = ViewNum + 1
' グループごとに異なるフィールドを設定します。
1 人のユーザが複数のユーザ・グループに属したり、グループのいずれにも
'属さないようにすることができるため, Else ステートメント は必要ありません。
If User.IsInGroup("Developer") Then
    SetFieldApp "BG_PLANNED_CLOSING_VERSION", True, False, _
    PageNum, ViewNum
   ViewNum = ViewNum + 1
    SetFieldApp "BG_PLANNED_FIX_TIME", True, False, PageNum, _
   ViewNum
   ViewNum = ViewNum + 1
End If
If User.IsInGroup("QATester") Then
    PageNum = PageNum + 1
    SetFieldApp "BG_USER_01", True, False, PageNum, ViewNum
   ViewNum = ViewNum + 1
   SetFieldApp "BG_USER_02", True, False, PageNum, ViewNum
   ViewNum = ViewNum + 1
End If
SetFieldApp "BG_ACTUAL_FIX_TIME", True, False, PageNum, _
ViewNum
ViewNum = ViewNum + 1
' ...
PrintError "FieldCust_AddDefect"
On Error GoTo 0
```

```
End Sub
```

例:タブ名の変更

[不具合の追加]ダイアログ・ボックスでのタブの名前を変更できます。この例では、タブの名前を「一般」、「環境」、「ビジネス・ケース」に設定します。

GetNewBugPageName イベント・プロシージャに次のコードを追加します。これは ALM が[不具合の追加]ダイアログ・ボックスを開く前に、トリガされます。[不具合の詳細]ダイアログ・ボックスのタブ名を変更するには、Defects_GetDetailsPageName イベント・プロシージャに同様のコードを追加します。

```
Sub Bug_New
       On Error Resume Next
               Bug_Fields.Field("BG_ACTUAL_FIX_TIME").PageNo = 1
               Bug_Fields.Field("BG_ESTIMATED_FIX_TIME").PageNo = 2
       On Error GoTo 0
End Sub
Function GetDetailsPageName(PageName,PageNum)
On Error Resume Next
if ActiveDialogName = "New Bug" then
       Select case PageNum
               case "1"
                       GetDetailsPageName="一般"
               case "2"
                       GetDetailsPageName="環境"
               case else
                       GetDetailsPageName="ビジネス・ケース"
       End Select
end if
On Error GoTo 0
```

End Function

例:メモ・フィールドへのテンプレートの追加

ワークフロー・スクリプトを使用して、メモ・フィールドに標準設定・テンプレートを追加できます。この例では、「ビジネス・ケース」というメモ・フィールドにテキストを追加して、次のテンプレートを表示します。

	×
	=
不見合 ID: 3 * サマリ:	-
	-1
詳細 ビジネスケース	_
ステップ バイ ステップ シナリオ:	
ユーザへの影響:	
4	
	-1
	_
送信 閉じる ヘルプ(凹)	

不具合が追加されると、 [BG_USER_25]フィールドにテキストの HTML コードを配置することで、この カスタマイズを実行します。この例では、ユーザ定義フィールド [BG_USER_25] にビジネス・ケースの 文字列が格納されることが想定されています。

Bug_New イベント・プロシージャにコードを追加します。これは, ユーザが新規不具合を追加するとき にトリガされます。

Sub Bug_New

```
On Error Resume Next
Bug_Fields("BG_USER_25").value = _
"<html><body><b>ステップ・バイ・ステップ・シナリオ:</b>" & _
"<br><br><br><br><b>ユーザへの影響:</b></body></html>"
PrintError "Bug_New"
On Error GoTo 0
```

End Sub

例:別のフィールドを基にしたフィールドの変更

この例では、別のフィールドに入力された値を基にして、フィールド値を変更する方法を例示します。

たとえば、 [カテゴリ]フィールドに「UI 提案」が入力されたときに不具合をユーザ alex_qc に割り当て、「セキュリティの問題」が入力されたときにユーザ alice_qc に割り当てるようにできます。

例では、ユーザ定義フィールド [BG_USER_05] がカテゴリの格納に使用されていることを想定してい ます。不具合モジュールで [カテゴリ]フィールドが変更されると、 [BG_RESPONSIBLE] フィールドにそ れに合った値が割り当てられます。

Bug_FieldChange イベント・プロシージャにコードを追加して, ユーザが不具合のフィールド値を変更 するとトリガされるようにします。

```
Sub Bug_FieldChange(FieldName)
    On Error Resume Next
    If FieldName = "BG_USER_05" then
        Select case Bug_Fields("BG_USER_05").Value
        case "UI Suggestion"
            Bug_Fields("BG_RESPONSIBLE").value="alex_qc"
        case "Security Issue"
            Bug_Fields("BG_RESPONSIBLE").value="alice_qc"
        Case Else
            Bug_Fields("BG_RESPONSIBLE").value="non-assigned"
        End Select
    End If
    PrintError "Bug_FieldChange"
    On Error GoTo 0
End Sub
```

例:ユーザ・グループを基にしたフィールドの変更

この例では、不具合を入力するユーザのユーザ・グループに合わせて、フィールド値を変更する方法を 例示します。

この例では、ユーザ定義フィールド [BG_USER_01]は、不具合を検出したユーザが発見方法を入力できる検出モード・フィールドであるとします。取り得る値は、公式テスト、非公式テスト、BTWです。

例では、QATester グループに属さないユーザが不具合をオープンすると、検出モード・フィールドの値が BTW に設定されます。QATester グループに属すユーザが不具合をオープンすると、標準設定値の 「公式テスト」が設定されます。

イベント・プロシージャ Bug_New にコードを追加して, 不具合が追加されたときにトリガされるようにします。

```
Sub Bug_New
On Error Resume Next
If not User.IsInGroup("QATester") then
Bug_Fields("BG_USER_01").Value = "BTW"
Else
Bug_Fields("BG_USER_01").Value = "Formal testing"
End If
PrintError "Bug_New"
On Error GoTo 0
```

End Sub

例:オブジェクトの検証

この例では, CanPost イベント・プロシージャを使用して, すべてのフィールドの検証を実行する方法 を例示します。たとえば, このコード・セグメントにより, ユーザはコメントの追加なしに不具合を却下で きないようにすることができます。 この例では、ユーザは、[R&D コメント]フィールド(BG_DEV_COMMENTS)に説明文を入力しない限り、不具合ステータス(BG_STATUS)が却下になった不具合を送信できません。

Bug_CanPost イベント・プロシージャにコードを追加して、ユーザが不具合の送信を試みるときに、確認が実行されるようにします。

```
Function Bug_CanPost

        ・ 関数の戻り値を初期化して、

       '予期しない動作を防ぎます。
       Bug CanPost = False
       On Error Resume Next
       If Bug_Fields("BG_STATUS").IsModified and _
       Bug_Fields("BG_STATUS").Value = "Rejected" and _
       not Bug_Fields("BG_DEV_COMMENTS").IsModified then
           Bug CanPost = False
           msgbox "不具合を却下する際,コメントを入力する必要があります。"
       Else
           Bug_CanPost = True
       End If
       PrintError "Bug CanPost"
       On Error GoTo 0
End Function
```

例:フィールドの検証

この例では、単一フィールド値を検証する方法を例示します。たとえば、次のコード・セグメントは、特定グループに属すユーザが不具合の優先度を下げられないようする方法を示します。

この例では、ユーザが QATester グループに属していて、[BG_PRIORITY]フィールドを変更する場合、[BG_PRIORITY]フィールドの新しい値を現在の値よりも下げることはできません。

この例では、プロジェクトの[**優先度**]フィールド・リストが、値を昇順にソートしたときに小さい優先度が先頭になることを前提としています。たとえば、要素が1 - 低い、2 - 普通、3 - 高いであれば、 リストはこの要件を満たします。

Bug_FieldCanChange イベント・プロシージャにコードを追加して, ユーザが不具合のフィールド値を 変更しようとするとトリガされるようにします。

```
Function Bug_FieldCanChange(FieldName, NewValue)

' 関数の戻り値を初期化して、

' 予期しない動作を防ぎます。

Bug_FieldCanChange = True

On Error Resume Next

If User.IsInGroup("QATester") and FieldName ="BG_PRIORITY" _

Then

If NewValue < Bug_Fields("BG_PRIORITY").Value then

Bug_FieldCanChange = False

msgbox "不具合の優先度" _

& "を下げるアクセス許可がありません。"

Else

Bug_FieldCanChange = True

End If
```
```
Else
'コードをここに入力します
End If
PrintError "Bug_FieldCanChange"
On Error GoTo 0
End Function
```

例:動的フィールド・リストの表現

この例では、別のフィールドの値に応じて、あるフィールド内のフィールド・リストを変化させる方法を例示します。

ユーザ定義関数 SW_SetLists_Environment は[Environment Specification]フィールドの値を 確認し、それに合ったフィールド・リストを[Environment Type]フィールドに割り当てます。

この例では、フィールド・リストがプロジェクト内で定義されていることが想定されています。詳細については、「プロジェクト・リストのカスタマイズ」(320ページ)を参照してください。

注: ワークフロー・スクリプトを使用して、フィールドに割り当てられるリストを変更、作成するには、Open Test Architecture(OTA) インタフェースを使用する必要があります。

Bug_MoveTo イベント・プロシージャにコードを追加して、ユーザが不具合モジュール内でフォーカスを 移動するときに、ユーザ定義関数SW_SetLists_Environmentが呼び出されるようにします。

```
Sub Bug_MoveTo()
```

On Error Resume Next SW_SetLists_Environment PrintError "Bug_MoveTo" On Error GoTo 0

```
End Sub
```

Bug_FieldChange イベント・プロシージャにコードを追加して,不具合モジュール内でユーザが [Environment Type]フィールドの値を変更するときに,ユーザ定義関数SW_SetLists_ Environmentが呼び出されるようにします。

```
Sub Bug_FieldChange(FieldName)
On Error Resume Next
If FieldName = "BG_USER_01" then
SW_SetLists_Environment
Else
'コードをここに入力します
End If
PrintError "Bug_FieldChange"
On Error GoTo 0
```

End Sub

```
ユーザ定義関数 SW_SetLists_Environment は[Environment Specification]フィールド(BG_
USER_02)の値を確認し、それに合ったフィールド・リストを[Environment Type]フィールド(BG_
USER_01)に割り当てます。
```

管理者ガイド 第33章: ワークフローの例とベスト・プラクティス

```
Sub SW_SetLists_Environment()
        Dim listName
        On Error Resume Next
        Select Case Bug_Fields("BG_USER_01").Value
        Case "Browser"
            listName = "Browsers"
        Case "Database Type"
            listName = "Database Type"
        Case "Operating System"
            listName = "Platform"
        Case "Web Server"
            listName = "Web Server"
        Case Else
            listName = "Environment Specification"
        End Select
        Bug Fields("BG USER 02").List = Lists(listName)
        PrintError ("Set Environment List")
        On Error GoTo 0
```

End Sub

例:フィールド変更時のフィールドのプロパティの変更

この例では、別のフィールドが変更されたときにあるフィールドのプロパティを変更する方法を例示しま す。

この例では、不具合のステータス(BG_STATUS)をクローズ済みに変更するときに、ユーザはフィール ド[終了バージョン] (BG_CLOSING_VERSION) に値を入力する必要があります。

Bug FieldChange イベント・プロシージャにコードを追加して, ステータスがクローズ済みに変更され たときに、 [終了バージョン]フィールドを必須フィールドにします。

```
Sub Bug_FieldChange(FieldName)
       On Error Resume Next
       If FieldName= "BG STATUS" then
           If Bug_Fields("BG_STATUS").value="クローズ済み" then
               Bug_Fields("BG_CLOSING_VERSION").IsRequired=True
           Else
               Bug_Fields("BG_CLOSING_VERSION").IsRequired=False
           End If
       Else
            ' コードをここに入力します
       End If
       PrintError "Bug_FieldChange"
       On Error GoTo 0
```

```
End Sub
```

例:ユーザ・アクセス許可の制御

この例では、特定のユーザ・グループのメンバがアクションを実行できなくなるようにする方法を例示し ます。

管理者ガイド 第33章: ワークフローの例とベスト・プラクティス

コードでは, ユーザが Admin ユーザ・グループに属す場合のみ, 不具合フィールドの値を置き換えられます。

ActionCanExecute イベント・プロシージャにコードを追加して, ユーザがアクションの実行を試みるときに, 確認が実行されるようにします。

Function ActionCanExecute(ActionName) ' 関数の戻り値を初期化して、 ' 予期しない動作を防ぎます。 ActionCanExecute = False On Error Resume Next If ActionName = "UserDefinedActions.BugReplaceAction1" _ And Not User.IsInGroup("Admin") then ActionCanExecute = False msgbox "このアクションを実行するアクセス許可がありません。" Else ActionCanExecute = True End If PrintError "ActionCanExecute" On Error GoTo 0 End Function

例:ボタン機能の追加

この例では、アクション名「Calculator」で定義されたボタンをユーザがクリックすると、計算機が開きます。ユーザ定義のボタンを追加する詳細については、「ツールバーへのボタンの追加」(438ページ)を参照してください。

ActionCanExecute イベント・プロシージャにコードを追加して, ユーザがアクションを開始するとトリガ されるようにします。

Wscript.Shell オブジェクトの詳細については、Microsoft のドキュメントを参照してください。VBScript 言語のヘルプを表示するには、スクリプト・エディタで[ヘルプ]>[VBScript ホームページ]を選択しま す。

Function ActionCanExecute(ActionName)

```
' 関数の戻り値を初期化して、
' 予期しない動作を防ぎます。
ActionCanExecute = DefaultRes
On Error Resume Next
If ActionName = "UserDefinedActions.Calculator" Then
Set shell = CreateObject("Wscript.Shell")
shell.Run "Calc"
Set shell = Nothing
End If
ActionCanExecute = DefaultRes
PrintError "ActionCanExecute"
On Error GoTo 0
unction
```

End Function

例:エラー処理

この例では,標準エラー・メッセージを表示する方法を例示します。記述する各ワークフロー・スクリプトにエラー処理を追加する必要があります。ワークフロー・コードにより検出されないエラーによって, ユーザのブラウザがクラッシュするおそれがあるためです。

ユーザ定義関数 PrintError は、呼び出しプロシージャの名前をパラメータとして受け取ります。エラー が発生すると、PrintError は、エラー番号、説明と重大度、さらにエラーが発生したプロシージャの名 前を出力します。

Err オブジェクトは VBScript に備わっているため,作成する必要はありません。Err オブジェクトの詳細 については, Microsoft のマニュアルを参照してください。

```
Sub PrintError(strFunctionName)
```

If Err.Number <> 0 Then
 MsgBox "Error #" & Err.Number & ":" & Err.Description, _
 vbOKOnly+vbCritical, _
 "Workflow Error in Function " & strFunctionName
End If

End Sub

次のコード・セグメントは、自作サブルーチンにエラー処理を追加する方法を示します。

```
Sub <サブル―チン名>()
On Error Resume Next
```

```
...
[ここにコード]
...
PrintError "<サブルーチン名>"
```

```
End Sub
```

次のコード・セグメントは、自作関数にエラー処理を追加する方法を示します。

Function <関数名>() On Error Resume Next

```
...
[ここにコード]
...
PrintError "<関数名>"
```

End Function

例:セッション・プロパティの取得

この例では、TDConnectionオブジェクトを使用して、現在のセッションのプロパティを取得する方法を 例示します。これらのプロパティが必要となるプロシージャにコードを追加します。プロパティは互いに依存しません。このため、各プロパティは別々に取得できます。

セッション・プロパティの例を次に挙げます。

TDConnection.ServerName TDConnection.ServerTime TDConnection.DomainName TDConnection.ProjectName User.UserName

ユーザ名を取得するのに TDConnection を使用する必要はありません。ワークフローに前定義された User オブジェクトが存在するためです。詳細については、「TDConnection オブジェクト」(484ページ)を参照してください。

次の例では、サーバURLの最初の5文字をテストし、ユーザがHTTP または HTTPS のどちらを使用してサーバに接続しているのかを判断します。

If Left(UCase(TDConnection.ServerName), 5) = "HTTPS" Then MsgBox "現在, SSL を使用してサーバに接続しています。"

Else

MsgBox "SSL を使用していません。"

End If

例:メールの送信

これらの例では、TDConnection オブジェクトを使用して、不具合を送信するときとテスト計画モジュールでフィールド値が変更されたときに、メールを送信する方法を例示します。

不具合送信時のメール送信

この例では、不具合送信時にメールを送信します。

Bug_AfterPost イベント・プロシージャに SendDefect プロシージャの呼び出しを追加します。

注: 不具合送信前に SendDefect プロシージャが呼び出されると,現在の変更で変更された 値は含まれません。データベースは,不具合の送信後にのみ新しい値で更新されます。

```
Sub SendDefect (iObjectId, strTo, strCc, strSubject, strComment)
    On Error Resume Next
    Dim objBugFactory, objBug
    Set objBugFactory = TDConnection.BugFactory
    Set objBug = objBugFactory.Item(iObjectId)
    objBug.Mail strTo, strCc, 2, strSubject, strComment
    Set objBug = Nothing
    Set objBugFactory = Nothing
    PrintError "SendDefect"
    On Error GoTo 0
```

End Sub

objBug.Mail の呼び出しに含まれる定数 2 は、メールに含めるべき履歴を示します。電子メールの カスタマイズに使用できる定数のリストについては、『HP ALM Open TestArchitecture API Reference』のtagTDMAIL_FLAGS 列挙を参照してください。ワークフロー・スクリプトでは、列挙値では なく定数を使用してください。

テスト計画モジュール・フィールド値の変更時のメール送信

次の例では、テスト計画モジュールでステータス・フィールドの値が変更されたときのメール通知を例示 します。

Test_FieldChange イベント・プロシージャにコードを追加します。これにより、電子メールの件名とコメントが作成され、ユーザ定義関数 SendTest が呼び出されます。SendTest により、テスト計画モジュールからメールが送信されます。「不具合送信時のメール送信」(509ページ)にある SendDefect サブルーチンと同じように SendTest を記述できます。

Sub Test_FieldChange(FieldName)

```
On Error Resume Next
Dim strSubject, strComment
If FieldName = "TS_STATUS" Then
    strSubject = "Test Change Notification" & _
        " for project " & TDConnection.ProjectName & _
        " in domain " & TDConnection.DomainName
    strComment = "The user " & User.FullName & _
        " changed the status of the test " & _
        Test_Fields("TS_NAME").Value & _
        " to " & Test_Fields("TS_TEST_ID").Value
    SendTest Test_Fields("TS_TEST_ID").Value, _
        Test_Fields("TS_RESPONSIBLE").Value, "[QA Testers]", _
        strSubject, StrComment
End If
```

```
End Sub
```

例:最後に入力された値の格納

この例では、TDConnectionを使用して、アクション間の維持データを実装する方法を例示します。 ルーチン内の変数の寿命は、ルーチンが動作中である期間のみです。このため、維持データを後で 利用する必要がある場合、維持データを格納する必要があります。可能であるときは、外部オブ ジェクト、ファイル、またはレジストリを使用するのではなく、常にALMを使用して維持データを格納す ることを推奨します。

この例では、ユーザ定義関数 SW_KeepLastValue は、ユーザが不具合を送信するときに、Settings オブジェクトを使用して、[BG_DETECTION_VERSION], [BG_USER_01], [BG_USER_03] フィールドに入力された値を保存します。このユーザが新規不具合を追加するとき、これらの値が取 得され、標準設定値として割り当てられます。

ユーザによって新規不具合が送信される前に, Bug_CanPost から SET アクションを引数にしてユーザ 定義関数が呼び出されます。フィールド内の値が格納されます。

Function Bug_CanPost() ' 関数の戻り値を初期化して、 ' 予期しない動作を防ぎます。 Bug_CanPost = True If Bug_Fields("BG_BUG_ID").Value = "" Then SW KeepLastValue ("SET") End If

End Function

Bug_New イベント・プロシージャから GET アクションを引数にして関数が呼び出されます。 ユーザが新しい不具合を追加すると、 このユーザのフィールドで格納された値が、 これらのフィールドに入力されます。

Sub Bug_New()

SW_KeepLastValue ("GET")

End Sub

パラメータとして引き渡されたアクションに応じて、ユーザ定義関数 SW_KeepLastValue は現在の ユーザの共通設定テーブルのフィールドの値を格納したり、Settings オブジェクトから値を読み取り、 適切なフィールドに値を割り当てます。

```
Sub SW_KeepLastValue(action)
Dim tdc, vals, flds
Dim uset, pairs, pair
Dim bld
On Error Resume Next
        bld = ""
        Set tdc = TDConnection
        Set uset = tdc.UserSettings
        If action = "SET" Then
            flds = Array("BG_DETECTION_VERSION", _
            "BG_USER_01", "BG_USER_03")
            vals = ""
            For i = 0 To UBound(flds)
                If vals <> "" Then vals = vals & ";"
                vals = vals & flds(i) & "=" &
                Bug_Fields(flds(i)).Value
            Next
            'カテゴリ KeepLValueSetting を開きます
            uset.Open ("KeepLValueSetting")
            'カテゴリ KeepLValueSetting で KeepValueFields を設定します
            uset.Value("KeepValueFields") = vals
            uset.Close
        End If 'SET
        If action = "GET" Then
            uset.Open ("KeepLValueSetting")
            vals = uset.Value("KeepValueFields")
            If vals <> "" Then
                pairs = Split(vals, ";")
                For i = 0 To UBound(pairs)
                    pair = Split(pairs(i), "=")
                    If UBound(pair) = 1 Then
                        Select Case pair(0)
                            Case "BG USER 03"
                                bld = pair(1)
                            Case Else
                                If Bug_Fields(pair(0)).Value = "" Then
```

```
Bug_Fields(pair(0)).Value = pair(1)
                                End If
                        End Select
                        If Bug_Fields("BG_DETECTION_VERSION").Value _
                        <> ""
                        And bld <> "" Then
                            SW_SetLists_VersionsBuilds _
                            "BG_DETECTION_VERSION", _
                            "BG_USER_03"
                            Bug Fields("BG USER 03").Value = bld
                            If Err.Number <> 0 Then Err.Clear
                        End If 'Bug_Fields
                    End If 'UBound(pair)
                Next
            End If 'vals <> ""
        End If 'GET
        uset.Close
       PrintError ("Keep Last Value (" & action & ")")
       On Error GoTo 0
End Sub
```

例:別のオブジェクトへのフィールド値のコピー

この例では、TDConnection オブジェクトを使用して、Run(RN_USER_02)の[Build Number] フィールドから、Test Set(TC_USER_03)内のTestの[Last Ran On Build]フィールドに値をコピー する方法を示します。

```
Run AfterPost イベント・プロシージャにコードを追加します。
Sub Run AfterPost
       On Error Resume Next
       Dim tdc
       set tdc = TDConnection
       Dim TSFact 'As TestSetFactory
       Set TSFact = tdc.TestSetFactory
       Dim TstSet 'As TestSet
       Set TstSet = TSFact.Item(Run_Fields("RN_CYCLE_ID").Value)
       MsgBox TstSet.Name
       Dim TSTestFact 'As TSTestFactory
       Set TSTestFact = TstSet.TSTestFactory
       Dim TSTst 'As TSTest
       Set TSTst = _
       TSTestFact.Item(Run_Fields("RN_TESTCYCL_ID").Value)
       MsgBox TSTst.Name
       TSTst.Field("tc_user_03").value = _
       Run_Fields("RN_USER_02").Value
       TSTst.Post
```

PrintError ("Run_AfterPost") On Error GoTo 0

End Sub

管理者ガイド 第33章:ワークフローの例とベスト・プラクティス

お客様からのご意見、ご感想をお待ちしています。

本ドキュメントについてのご意見、ご感想については、電子メールでドキュメント制作チームまでご連絡ください。このシステムで電子メールクライアントが設定されていれば、このリンクをクリックすることで、 以下の情報が件名に記入された電子メールウィンドウが開きます。

Feedback on 管理者ガイド (ALM 12.00)

本文にご意見、ご感想を記入の上、[送信]をクリックしてください。

電子メールクライアントが利用できない場合は、上記の情報をコピーしてWebメールクライアントの新 規メッセージに貼り付け、SW-Doc@hp.com宛にお送りください。



